福島県文化財調査報告書第539集

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告８

上ノ台館跡（３次調査）
田向遺跡
中室内遺跡（３次調査）
荒屋敷遺跡

２０２０年

福島県教育委員会
公益財団法人 福島県文化振興財団
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告８

上ノ台館跡（３次調査）
田 向 遺 跡
中室内遺跡（３次調査）
荒屋敷遺跡

序　　文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護に努めております。

しかし、開発事業調整をしても埋蔵文化財包蔵地を避けられない場合には、地元市町村とも協議の上、やむを得ず記録保存をすることとしております。

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北自動車道を結ぶ約 45kmの高規格幹線道路(自動車専用道路)であり、東日本大震災からの被災地の早期復興を図るリーディングプロジェクトとして位置づけられています。震災前に国道115号バイパスとして整備されていた相馬山上ＩＣ～霊山ＩＣを含む福島市から相馬市までの全線が、緊急整備されることになりました。

一般国道115号相馬福島道路建設用地内には、新発見のものを含む埋蔵文化財包蔵地が数多くあり、先人の貴重な文化遺産が所在しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、相馬福島道路建設予定地内で確認された埋蔵文化財の保護・保存について開発機関と協議を重ね、遺跡の範囲や性格を確かめるための分布調査を行った結果をもとに、現状保存の困難な埋蔵文化財については記録として保存することとし、平成25年度から本発掘調査を実施してきました。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(霊山～福島)の建設に伴い、平成30年度に実施した伊達市霊山町下小国地区に所在する上ノ台館跡(３次調査)、伊達市保原町上保原地区に所在する田向遺跡・中室内遺跡(３次調査)、伊達市伏黒地区に所在する荒屋敷遺跡の本発掘調査の成果をまとめたものです。この報告書が県民の皆様の文化財に対する理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用されますれば幸いです。

結びに、本発掘調査から報告書の作成にあたり、御理解と御協力をいただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和２年２月

福島県教育委員会

教育長　　鈴　木　淳　一

あ い さ つ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(霊山～福島)の建設に伴い、平成30年度に本発掘調査を行った伊達市霊山町下小国地区に所在する上ノ台館跡(３次調査)、伊達市保原町上保原地区に所在する田向遺跡・中室内遺跡(３次調査)、伊達市伏黒地区に所在する荒屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

上ノ台館跡(３次調査)では、中世の建物跡及び柵列や塀の跡を確認しました。１～３次調査によって、尾根上に広がる施設の状況が明らかになり、城館跡の全容をほぼ明らかにすることができました。

田向遺跡では、縄文時代の落し穴や中・近世の建物跡、溝跡が見つかりました。溝跡や建物跡の配置は近世絵図に描かれていたものと一致することがわかり、地域史にとって重要な成果を得ることができました。

中室内遺跡(３次調査)では、井戸跡や溝跡が確認できました。また、１次調査で見つかった古墳時代の集落跡と同時期の土師器や中世前期の陶器が出土しました。

荒屋敷遺跡では、中世の建物跡や土坑が多く見つかり、中世陶磁器や鉄製品等が多く出土しました。阿武隈川に面した場所に立地していることや、倉庫と推定される建物跡があることなどから、中世の川湊の可能性がある遺跡と判明しました。中世伊達郡を考える上でも重要な遺跡です。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査に御協力いただきました国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市ならびに地域住民の皆様に深く感謝申し上げますと共に、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和２年２月

公益財団法人　福島県文化振興財団
理事長　　大　沼　博　文

緒　　言

1　本書は、平成30年度に実施した一般国道115号相馬福島道路（霊山～福島）遺跡発掘調査の報告書である。

2　本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

上ノ台館跡	福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台	埋蔵文化財番号　0721300654
田向遺跡	福島県伊達市保原町上保原字田向	埋蔵文化財番号　0721300661
中室内遺跡	福島県伊達市保原町上保原字中室内・大地内	埋蔵文化財番号　0721300329
荒屋敷遺跡	福島県伊達市伏黒字六角	埋蔵文化財番号　0721300032

3　本事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が負担した。

4　福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

5　公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査	丹治　篤嘉	文化財主査	初山　孝行
文化財副主査	鶴見　諒平	主　　事	枝松　雄一郎

6　本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

7　本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の縮尺1/25,000の地形図（保原）、縮尺1/200,000の地勢図（福島）を複製したもの、並びに同省東北地方整備局福島河川国道事務所が製作した工事用地図を基としたものである。

8　本書に掲載した自然科学分析、上ノ台館跡の地形測量は、次の機関に委託して実施し、その結果を掲載している。

出土炭化物の樹種同定・放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社

上ノ台館跡の地形測量：株式会社ふたば

9　本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関から協力・助言をいただいた。

伊達市教育委員会

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 方　　位　　遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。座標は、国土座標第Ⅸ系に基づき、数値はその座標値である。また、表記がない遺構図はすべて本書の天を北とした。

(2) 標　　高　　高度は、標高で示した。

(3) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(4) ケ　　バ　　遺構内の傾斜部は「 ⊓⊓ 」、相対的に緩傾斜の部分には「 ⊤ 」、後世の攪乱部や人為的な削土部は「 ⊤ 」の記号で表現した。

(5) 土　　層　　遺構外堆積土は大文字のＬとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。

(例) 遺構外堆積土…ＬⅠ・ＬⅡ　　遺構内堆積土…ℓ１・ℓ２

(6) 土　　色　　土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

(7) 網　　点　　各挿図中に用例を示した。

(8) 遺構番号　　当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。

2　本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(2) 土器断面　　須恵器の断面は黒塗りとした。鉄製品の断面はグレーとした。粘土積み上げ痕は一点鎖線で示した。

(3) 網　　点　　▭ は黒色処理を示す。それ以外は各挿図中に用例を示した。

(4) 遺物番号　　挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。

(例) 図１の２番の遺物…図１－２

遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。

(例) １－２…図１－２

(5) 遺物計測値　　(　)内の数値は推定値、[　]内の数値は遺存値を示す。

3　本書で使用した略号は、次のとおりである。

伊達市……ＤＴ

上ノ台館跡…ＫＮＴ	田向遺跡…ＴＭＫ	中室内遺跡…ＮＭＵ	荒屋敷遺跡…ＡＹＳ
グリッド……Ｇ	遺構外堆積土…Ｌ	遺構内堆積土… ℓ	
掘立柱建物跡…ＳＢ	柱列跡……ＳＡ	土坑……ＳＫ	溝跡……ＳＤ
井戸跡……ＳＥ	特殊遺構……ＳＸ	小穴……Ｐ	

4　引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、各編末に掲載した。

目　　次

序章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　地 理 的 環 境……7
第３節　歴 史 的 環 境……10
第４節　調 査 方 法……18

第１編　上ノ台館跡（３次調査）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況……21
第２節　調 査 経 過……21

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層……23
調査成果の概要(23)　基本土層(25)
第２節　尾根上の平場とその遺構……27
２号平場(27)　３号建物跡(28)　10号土坑(30)　13号土坑(30)
14号土坑(31)　15号土坑(32)　５号溝跡(32)　小　穴(33)
４号平場(33)　５号平場(33)　６号平場(33)　７号平場(34)
８号平場(35)　９号平場(35)　４号建物跡(36)　６号溝跡(38)
７号溝跡(39)　小　穴(39)　14号平場(40)　15号平場(40)
第３節　西側斜面の平場……41
３号平場(41)
第４節　東側斜面の平場とその遺構……43
10号平場(43)　８号溝跡(44)　８号柱列跡(44)　９号柱列跡(47)
10号柱列跡(47)　11・12号平場(48)　９号溝跡(50)　11号柱列跡(50)
小　穴(51)　13号平場(51)
第５節　その他の遺構……51
11号土坑(52)　12号土坑(53)　４号特殊遺構(53)
第６節　遺構外出土遺物……54

第３章　総　　括……55

第２編　田 向 遺 跡

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況……61
第２節　調 査 経 過……61

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層……63
調査成果の概要(63)　基本土層(63)

第２節　土　　坑……65
１号土坑(65)　２号土坑(65)　３号土坑(66)　４号土坑(66)
５号土坑(66)　６号土坑(68)　７号土坑(68)　８号土坑(68)
９号土坑(70)　10号土坑(70)　11号土坑(70)　12号土坑(71)
13号土坑(71)　14号土坑(71)　15号土坑(73)　16号土坑(74)
17号土坑(75)　18号土坑(75)　19号土坑(75)　20号土坑(76)
21号土坑(77)　22号土坑(77)　23号土坑(77)　24号土坑(78)
25号土坑(78)　26号土坑(78)　27号土坑(79)
第３節　溝　　跡……80
１号溝跡(80)　２号溝跡(81)　３号溝跡(85)　４号溝跡(85)
５号溝跡(86)　17号溝跡(87)　６号溝跡(89)　７・15号溝跡(91)
８号溝跡(100)　９号溝跡(100)　10号溝跡(101)　11号溝跡(103)
12号溝跡(103)　13号溝跡(104)　14号溝跡(104)　16号溝跡(104)
18号溝跡(106)　19号溝跡(106)　20号溝跡(106)　21号溝跡(107)
22号溝跡(108)　23号溝跡(108)　24号溝跡(108)　25号溝跡(109)
第４節　井　戸　跡……109
１号井戸跡(109)　２号井戸跡(111)
第５節　特　殊　遺　構……111
１号特殊遺構(112)　２号特殊遺構(112)
第６節　小　穴　群……114
第７節　遺構外出土遺物……120
第３章　総　　括……121

第３編　中室内遺跡(３次調査)

第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置と現況……127
第２節　調　査　経　過……127
第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層……129
調査成果の概要(129)　基本土層(129)
第２節　土　　坑……131
１号土坑(131)　２号土坑(131)　３号土坑(131)　４号土坑(132)
５号土坑(132)　６号土坑(132)　７号土坑(134)　８号土坑(134)
９号土坑(134)　10号土坑(135)　11号土坑(135)　12号土坑(137)
13号土坑(137)　14号土坑(137)　15号土坑(137)　16号土坑(139)
第３節　溝　　跡……139
１号溝跡(139)　２号溝跡(139)　３号溝跡(140)　４号溝跡(140)
５号溝跡(142)　６号溝跡(142)　７号溝跡(143)　８号溝跡(143)
９号溝跡(143)　10号溝跡(145)
第４節　井　戸　跡……145
１号井戸跡(145)
第５節　小　穴　群……147
第６節　遺構外出土遺物……151

第３章　総　　括 …… 152

第４編　荒屋敷遺跡

第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置と現況…… 155
第２節　調 査 経 過…… 155

第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層…… 158
調査成果の概要(158)　基本土層(158)
第２節　出土陶器の胎土の分類…… 161
第３節　掘立柱建物跡…… 161
１号建物跡(162)
第４節　土　　坑…… 163
７号土坑(164)　11号土坑(168)　14号土坑(170)　20号土坑(170)
21号土坑(174)　22号土坑(174)　26号土坑(175)　28号土坑(176)
29号土坑(176)　32号土坑(178)　33号土坑(178)　34号土坑(179)
35号土坑(181)　36号土坑(183)　42号土坑(183)　43号土坑(185)
44号土坑(186)　45号土坑(186)　46号土坑(188)　47号土坑(189)
49号土坑(191)　52号土坑(192)　54号土坑(192)　59号土坑(194)
60号土坑(196)　62号土坑(198)　63号土坑(198)　64号土坑(200)
66号土坑(201)　67号土坑(201)　70号土坑(202)　71号土坑(204)
76号土坑(206)　78号土坑(207)　79号土坑(209)　80号土坑(210)
81号土坑(210)　82号土坑(211)　83号土坑(214)　86号土坑(214)
88号土坑(218)　89号土坑(221)　90号土坑(221)
第５節　溝　　跡…… 221
１号溝跡(222)　２号溝跡(222)　３号溝跡(224)　４号溝跡(227)
５号溝跡(227)　６号溝跡(228)
第６節　特 殊 遺 構…… 230
１号特殊遺構(230)　２号特殊遺構(232)　３号特殊遺構(232)　４号特殊遺構(233)
５号特殊遺構(233)　６号特殊遺構(235)
第７節　小 穴 群…… 236
第８節　遺構外出土遺物…… 253

第３章　総　　括
第１節　中世の土器類について…… 257
第２節　中世の遺構について…… 260
第３節　ま と め…… 263

第５編　総　　括

第１章　事業の総括
第１節　相馬福島道路遺跡発掘調査事業の経過…… 267
第２節　各時代の遺構・遺物…… 270

付　章　上ノ台館跡出土炭化物分析…… 275

挿図・表目次

序　章　遺跡の環境と調査経過

［挿図］

図１　一般国道115号相馬福島道路位置図 …… 1
図２　道路工事計画図…… 2
図３　上ノ台館跡周辺地形分類図…… 8
図４　田向・中室内・荒屋敷遺跡周辺
地形分類図…… 9
図５　上ノ台館跡周辺の遺跡位置図……11
図６　田向・中室内・荒屋敷遺跡
周辺の遺跡位置図……14

［ 表 ］

表１－１　上ノ台館跡周辺の遺跡一覧……12
表１－２　上ノ台館跡周辺の遺跡一覧……13
表２　田向・中室内・荒屋敷遺跡
周辺の遺跡一覧……16

第１編　上ノ台館跡（３次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……22
図２　上ノ台館跡全体図（１～３次調査）……24
図３　測量調査実施範囲……25
図４　遺構配置図（３次調査）……26
図５　基本土層……27
図６　２号平場……28
図７　３号建物跡……29
図８　10・13～15号土坑……31
図９　５号溝跡……32
図10　２号平場小穴……34
図11　４・５号平場……35
図12　６～９号平場……36
図13　４号建物跡……37
図14　６号溝跡・出土遺物……38
図15　７号溝跡……39
図16　７号平場小穴……40
図17　８・９号平場小穴……41
図18　14・15号平場……42
図19　３号平場……43
図20　10号平場……44
図21　８号溝跡、８～10号柱列跡（１）、
８号柱列跡出土遺物……45
図22　８～10号柱列跡（２）……46
図23　11・12号平場……48
図24　11・12号平場、９号溝跡、11号柱列跡……49
図25　13号平場……51
図26　11・12号土坑、11号土坑出土遺物……52
図27　４号特殊遺構……53
図28　遺構外出土遺物……54
図29　上ノ台遺跡と周辺の遺跡……57

［ 表 ］

表１　２号平場小穴一覧……34
表２　７号平場小穴一覧……40
表３　８・９号平場小穴一覧……41
表４　12号平場小穴一覧……49

第２編　田向遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……62
図２　遺構配置図・基本土層……64
図３　１～６号土坑……67
図４　７～12号土坑……69

図５　13～18号土坑……72
図６　14・15号土坑出土遺物……73
図７　19～24号土坑……76
図８　25～27号土坑……79
図９　１～５・17・25号溝跡……80
図10　１号溝跡……81
図11　２号溝跡……82
図12　２号溝跡出土遺物（１）……83
図13　２号溝跡出土遺物（２）……84
図14　３号溝跡……86
図15　４号溝跡……87
図16　５・17号溝跡、17号溝跡出土遺物……88
図17　６～16・18～24号溝跡……89
図18　６・７号溝跡……90
図19　15号溝跡……92
図20　15号溝跡出土遺物（１）……94
図21　15号溝跡出土遺物（２）……95
図22　15号溝跡出土遺物（３）……97
図23　15号溝跡出土遺物（４）……98
図24　７・15号溝跡出土遺物……99
図25　８号溝跡……100
図26　９号溝跡……101
図27　10～12号溝跡……102
図28　10号溝跡出土遺物……103
図29　13・14・16・18～20号溝跡……105
図30　21～23号溝跡……107
図31　24・25号溝跡……109
図32　１・２号井戸跡、２号井戸跡出土遺物…110
図33　１・２号特殊遺構、２号特殊遺構出土遺物……113
図34　小穴群全体図……115
図35　小穴群①・②……116
図36　小穴群③、小穴群出土遺物……117
図37　遺構外出土遺物……120
図38　田向遺跡と上保原村絵図……124

［表］

表１－１　小穴一覧……118
表１－２　小穴一覧……119
表１－３　小穴一覧……120

第３編　中室内遺跡（３次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……128
図２　遺構配置図・基本土層……130
図３　１～６号土坑、５号土坑出土遺物……133
図４　７～11号土坑、７号土坑出土遺物……136
図５　12～16号土坑……138
図６　１～３・５・８号溝跡、２号溝跡出土遺物……141
図７　４・６・７・９・10号溝跡、６号溝跡出土遺物……144
図８　１号井戸跡・出土遺物……146
図９　小穴群①……148
図10　小穴群②、小穴群出土遺物……149
図11　遺構外出土遺物……151

［表］

表１　小穴一覧……150

第４編　荒屋敷遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……156
図２　遺構配置図……159
図３　基本土層……160
図４　１号建物跡……162
図５　１～４・19号土坑……168
図６　５～９・15号土坑、７号土坑出土遺物…169
図７　10～14・16号土坑、11・14号土坑出土遺物……171
図８　17・18・21～23・25号土坑、21・22号土坑出土遺物……172

図９　20・24・26・27号土坑、20・26号土坑出土遺物…… 173
図10　28～32号土坑、28・29・32号土坑出土遺物…… 177
図11　33・34号土坑・出土遺物…… 180
図12　34号土坑出土遺物…… 181
図13　35号土坑…… 182
図14　36～40号土坑、36号土坑出土遺物…… 184
図15　41～44号土坑…… 187
図16　42～44号土坑出土遺物…… 188
図17　45～47号土坑、47号土坑出土遺物…… 190
図18　48～51・53号土坑…… 191
図19　52・54～58・61号土坑、54号土坑出土遺物…… 193
図20　59号土坑・出土遺物…… 195
図21　60号土坑・出土遺物…… 197
図22　62・63号土坑・出土遺物…… 199
図23　64～67号土坑、64・66・67号土坑出土遺物…… 202
図24　68～70号土坑…… 203
図25　71号土坑（１）…… 205
図26　71号土坑（２）…… 206
図27　72～75号土坑…… 207
図28　76・77号土坑、76号土坑出土遺物…… 208
図29　78・80号土坑…… 211
図30　78・80号土坑出土遺物…… 212
図31　79・81・82号土坑…… 213
図32　83・89・90号土坑、83号土坑出土遺物… 215
図33　84～87号土坑、86号土坑出土遺物…… 216
図34　86号土坑出土遺物…… 217
図35　88号土坑（１）…… 219
図36　88号土坑（２）…… 220
図37　１・２号溝跡…… 223
図38　３号溝跡…… 225
図39　３号溝跡出土遺物…… 226
図40　４～６号溝跡…… 229
図41　１・２号特殊遺構、１号特殊遺構出土遺物…… 231
図42　３～５号特殊遺構、３号特殊遺構出土遺物…… 234
図43　６号特殊遺構・出土遺物…… 235
図44　小穴群全体図…… 236
図45　小穴群①…… 237
図46　小穴群②…… 238
図47　小穴群③…… 239
図48　小穴群④…… 240
図49　小穴群⑤…… 241
図50　小穴群⑥…… 242
図51　小穴群⑦…… 243
図52　小穴群⑧、小穴群出土遺物…… 244
図53　小穴群出土遺物…… 245
図54　遺構外出土遺物…… 255
図55　在地産陶器を中心とした中世土器類の編年…… 259
図56　荒屋敷遺跡遺構配置図…… 261

［表］

表１－１　土坑一覧表…… 165
表１－２　土坑一覧表…… 166
表１－３　土坑一覧表…… 167
表２－１　小穴一覧…… 246
表２－２　小穴一覧…… 247
表２－３　小穴一覧…… 248
表２－４　小穴一覧…… 249
表２－５　小穴一覧…… 250
表２－６　小穴一覧…… 251
表３　各グリッド土師器出土点数…… 254
表４　出土陶磁器類の点数と組成…… 258

第５編　総　　括

［表］

表１　本発掘調査…… 268
表２　分布調査、試掘・確認調査一覧…… 269

付　章　上ノ台館跡出土炭化物分析

［挿図］

図１　上ノ台館跡の暦年較正結果…… 278
図２　上ノ台館跡の炭化材（１）…… 280
図３　上ノ台館跡の炭化材（２）…… 281
図４　上ノ台館跡の炭化材（３）…… 282
図５　上ノ台館跡の炭化材（４）…… 283

［ 表 ］

表１　上ノ台館跡の樹種同定結果…… 276
表２　上ノ台館跡の放射性炭素年代測定結果… 277

写真目次

第１編　上ノ台館跡（３次調査）

1　１～３次調査区全景…… 287
2　３次調査区全景…… 288
3　３次調査区全景…… 288
4　２号平場全景…… 289
5　２号平場全景…… 289
6　３号建物跡全景…… 290
7　５号溝跡全景…… 290
8　４号平場全景…… 291
9　７～９号平場全景…… 291
10　８・９号平場、６号溝跡全景…… 292
11　10号平場、８号溝跡、８～10号柱列跡全景…… 292
12　11・12号平場、９号溝跡、11号柱列跡全景…… 293
13　10・12・13号土坑…… 293
14　遺跡周辺遠景…… 294
15　11号土坑、６号溝跡、８号柱列跡、遺構外出土遺物…… 294

第２編　田向遺跡

1　調査区東部全景…… 297
2　調査区東部全景…… 297
3　調査区西部全景…… 298
4　調査区西部全景…… 298
5　１～３・７・８・10・11号土坑…… 299
6　14・15・18・21・23・24・26号土坑…… 300
7　１・３号溝跡…… 301
8　２号溝跡、１号特殊遺構全景…… 301
9　４号溝跡、小穴全景…… 302
10　５号溝跡、小穴全景…… 302
11　６～９号溝跡全景…… 303
12　７・15号溝跡全景…… 303
13　10～13・18～20号溝跡全景…… 304
14　13・14・19号溝跡全景…… 304
15　１号井戸跡断面…… 305
16　２号井戸跡全景…… 305
17　２号特殊遺構全景…… 306
18　２号特殊遺構断面…… 306
19　出土縄文土器・石器…… 307
20　出土中世陶器…… 307
21　15号土坑出土遺物…… 308
22　２号溝跡出土遺物（１）…… 309
23　２号溝跡出土遺物（２）…… 310
24　15号溝跡出土遺物（１）…… 311
25　15号溝跡出土遺物（２）…… 312
26　15号溝跡出土遺物（３）…… 313
27　15号溝跡出土遺物（４）…… 314
28　15号溝跡出土遺物（５）…… 315
29　15号溝跡出土遺物（６）…… 316
30　岸窯製品　遺物集合写真…… 317
31　大堀相馬焼　遺物集合写真…… 317
32　その他の陶器・磁器　遺物集合写真…… 318
33　土師質土器・瓦質土器　遺物集合写真…… 318

第３編　中室内遺跡（３次調査）

1　調査区南西部全景…… 321
2　調査区全景…… 321
3　基本土層…… 321
4　１～３・５・８・９号土坑…… 322
5　10・11・13～16号土坑…… 323
6　２～７号溝跡…… 324
7　８～10号溝跡…… 325
8　１号井戸跡…… 325
9　小穴群…… 325
10　出土遺物…… 326

第４編　荒屋敷遺跡

1　調査区北東部全景…… 329
2　調査区北東部全景…… 329
3　調査区東部中央全景…… 330
4　調査区東部中央遺構集中部…… 330
5　調査区南東部全景…… 331
6　調査区全景…… 331
7　基本土層…… 331
8　１号建物跡全景…… 332
9　１号建物跡…… 332
10　土坑…… 332
11　４～７・９・11・15号土坑…… 333
12　13・14・17～19号土坑…… 334
13　20～22・24・26・27号土坑…… 335
14　28～30・32・33号土坑…… 336
15　34～36・71号土坑…… 337
16　37～40・42・43号土坑…… 338
17　44～47号土坑…… 339
18　47～50・52・54～57号土坑…… 340
19　59・60・62号土坑…… 341
20　63・64・66・67号土坑…… 342
21　68・70号土坑…… 343
22　71号土坑全景…… 343
23　71・79・81・82号土坑…… 344
24　75～78・80・83・89・90号土坑…… 345
25　85～87号土坑…… 346
26　88号土坑全景…… 346
27　88号土坑（１）…… 347
28　88号土坑（２）…… 348
29　88号土坑（３）…… 349
30　１・２号溝跡…… 350
31　３号溝跡全景…… 350
32　３・４号溝跡…… 351
33　５・６号溝跡…… 352
34　４・５号特殊遺構…… 352
35　調査区東部小穴群全景…… 353
36　Ｄ５・Ｄ６・Ｅ５・Ｅ６グリッド
　小穴群全景…… 353
37　Ｃ５グリッド小穴群全景…… 354
38　小穴群…… 354
39　20・21・26・32～34号土坑出土遺物…… 355
40　34・43・44・59・60・62・63・76・78号
　土坑出土遺物…… 356
41　63・76・80・83・86号土坑出土遺物…… 357
42　78・86号土坑、３号溝跡、
　小穴群出土遺物…… 358
43　小穴群、遺構外出土遺物…… 359
44　遺構外出土遺物…… 360

序章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45㎞の高規格道路であり、東日本大震災からの早期復興を図るリーディングプロジェクトとして、国土交通省東北地方整備局により、緊急整備されている。全５区間のうち、相馬西道路と阿武隈東道路の２区間は国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所が、阿武隈東～阿武隈、霊山道路、霊山～福島の３区間は同省同局福島河川国道事務所が事業を進めている。

その建設予定地に関わる本発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、震災前の平成16年度から公益財団法人（平成24年10月以前は財団法人）福島県文化振興財団遺跡調査部が実施している。平成30年度は、以下の（１）～（３）の調査を実施した。

（１）伊達市霊山町下小国地区　　上ノ台館跡（３次調査）

（２）伊達市保原町上保原地区　　田向遺跡・中室内遺跡（２・３次調査）

（３）伊達市伏黒地区　　荒屋敷遺跡

公益財団法人福島県文化振興財団では、平成30年４月１日付の福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部の職員４名を配置して本発掘調査を実施した。４月当初に確定していた調査遺跡及び面積は、上ノ台館跡5,400㎡、荒屋敷遺跡1,800㎡である。その後、平成30年度に実施した試掘・確認調査や工事立会等により、中室内遺跡100㎡（２次調査）、中室内遺跡1,000㎡（３次調査）、田向遺跡2,500㎡、荒屋敷遺跡150㎡が年度途中で調査面積に追加となった。従って、平成30年度に本発掘調査を実施した面積の合計は10,950㎡となった。

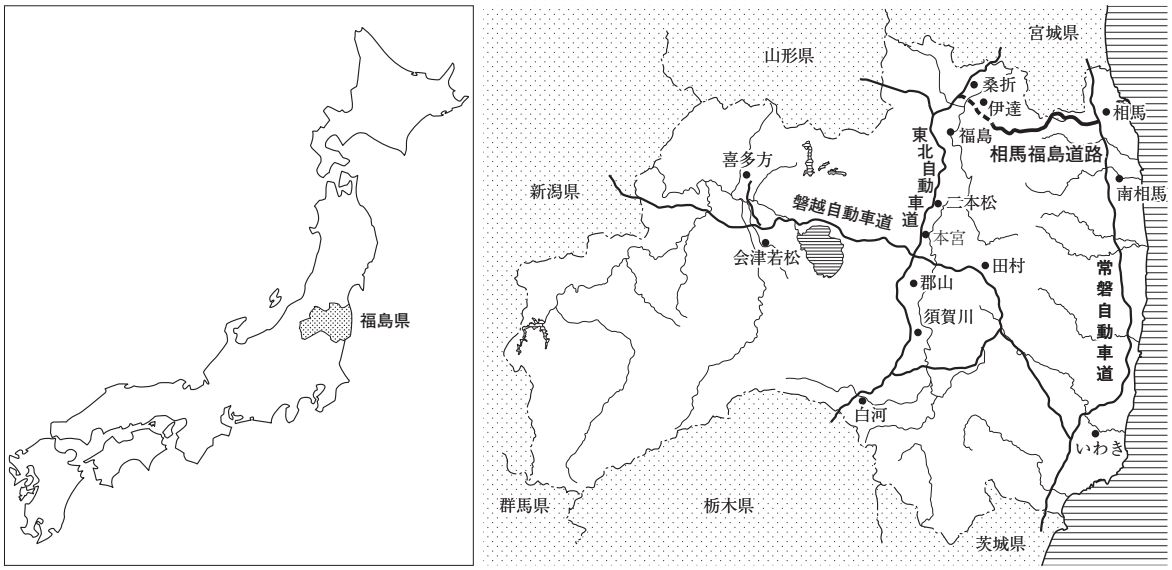


図１　一般国道115号相馬福島道路位置図

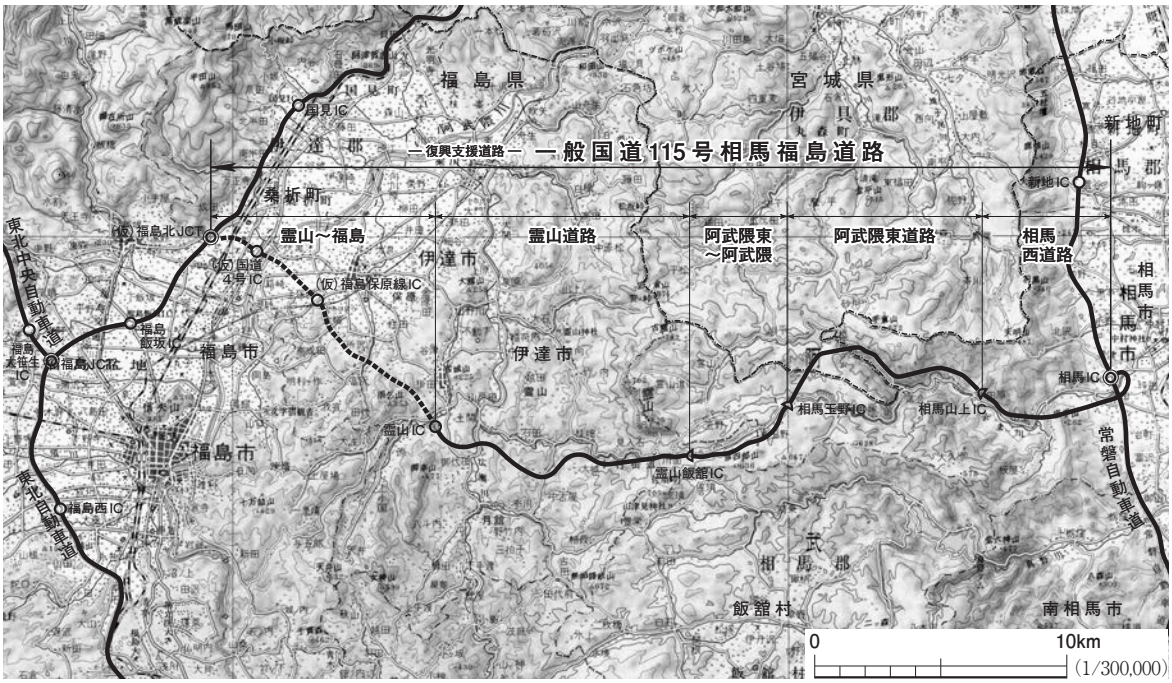


図２　道路工事計画図

以下では、伊達市霊山町下小国地区、伊達市保原町上保原地区、伊達市伏黒地区に分け、調査経過を記述する。なお、中室内遺跡100㎡（２次調査）の報告については、すでに『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告７』（平成31年３月刊行）に収録済だが、その経緯だけ再度報告することとする。

伊達市霊山町下小国地区

上ノ台館跡は、平成27年度の測量調査、平成27・28年度の試掘・確認調査の結果、15,600㎡の要保存範囲が確定していた。このうち、平成28年度に8,700㎡の１次調査、平成29年度に1,500㎡の２次調査を実施した。このため、平成30年度当初で、本発掘調査が必要な残りの範囲は5,400㎡であった。

４月５日付で福島県教育委員会から上ノ台館跡5,400㎡の本発掘調査の指示が出された。

５月28日に調査事務所・仮設トイレを設置した。また、同日に調査区内に重機を搬入し、29日から表土除去を開始した。一部平坦な箇所もあったが、調査区内の大半が斜面であったため、慎重に作業を実施した。表土除去は６月19日まで継続した。

６月11日から作業員の雇用を開始した。12日からは調査区内の通路の整備や発掘器材類の搬入等を実施した。前年度同様に、調査事務所と調査区との往復には急な仮設階段による昇り降りが必要なため、安全対策等には細心の注意を払った。

遺構検出作業は６月18日から開始した。検出作業は調査区南部の平場上から着手した。平場上では土坑や小穴、溝跡等が検出された。

遺構検出作業を継続すると同時に、調査区南部の平場で確認した土坑、溝跡の精査に着手した。

尾根上で検出された小穴の一部は、城館跡に伴う建物跡の柱穴であることがわかった。

７月３日には調査区南部の遺構の精査がおおよそ終了したため、尾根上の遺構検出に順次移行した。傾斜地での作業が中心となるため、排土の運搬や移動中の転倒等、事故に注意しながら作業を続けた。

７月10日からは尾根上で検出した遺構の精査を開始した。溝跡や小穴を検出したが、溝跡は尾根の傾斜が変わる場所につくられており、２次調査で検出されたものと同様、尾根上における平場の区画と排水を兼ねたものと推定された。

７月26日に、調査区の航空写真測量を実施した。尾根上の調査は30日で終了したため、31日からは東側斜面で確認した平場の調査に着手した。平場の下側が急傾斜のため、上方から重機で排土を片付けながらの作業となった。また、足場が狭いため、安全な通路を確保しながら作業を続けた。斜面部の平場では溝跡と柱列跡を検出した。

遺構の検出及び精査は８月６日で一旦終了した。遺構の記録作業と、写真撮影のための調査区内の清掃を実施した。清掃の際に調査区南部の平場で小穴が新たに検出されたため、お盆休み明けに調査を実施することにした。

残っていた遺構の精査・記録作業が８月21日に終了した。遺構の調査と並行して発掘器材類を撤収し、22日には、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。

伊達市保原町上保原地区

平成30年度に本発掘調査を実施した伊達市保原町上保原地区に所在する遺跡は、田向遺跡、中室内遺跡の２遺跡である。両遺跡とも、年度途中に行われた工事立会や試掘・確認調査の結果から調査が追加されたものである。以下では、時系列に沿って中室内遺跡（２次調査）、中室内遺跡（３次調査）、田向遺跡の順に調査経過を記述する。

中室内遺跡は、１次調査区を東西に分断する市道中室内大師堂線及び南側に隣接する市道保原箱崎線の範囲について、４月３日に県文化財課による工事立会がなされた。その結果、100㎡の本発掘調査が必要とされ、４月９日付で福島県教育委員会から本発掘調査の指示が出された。

中室内遺跡の２次調査は４月11日に開始し、溝跡を中心とした遺構の精査・作図・写真撮影、調査区の地形測量を適宜行い、13日には終了した。また、13日には県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。なお、中室内遺跡の２次調査については、平成29年度の１次調査と併せて報告することが４月19日の第１回連絡調整会議で決まったため、『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告７』（平成31年３月刊行）に収録した。

その後、中室内遺跡については、５月下旬に実施した試掘・確認調査により、1,000㎡の要保存範囲が確定し、７月11日の第３回連絡調整会議において３次調査として実施することが決まった。なお、調査中である伊達市伏黒地区の荒屋敷遺跡よりも中室内遺跡の方が調査の優先順位が高いことが示された。このため、急遽、荒屋敷遺跡から中室内遺跡の調査に移行することとなった。

この結果を受け、福島県教育委員会より７月13日付で1,000㎡の中室内遺跡の本発掘調査の指示が出された。

７月17日から調査区の縄張り・環境整備を開始するとともに、荒屋敷遺跡から発掘器材類の搬入を始め、調査準備に取りかかった。23日には仮設トイレ・安全掲示板を設置した。

７月25日から作業員を雇用し、本格的な調査を開始した。調査は、工事計画に沿って優先度の高い調査区南西部200㎡から着手した。遺構検出が進むと、調査区南西部200㎡の範囲に土坑や小穴等が集中することが確認された。検出写真の撮影後、遺構の精査を開始した。

検出した遺構の精査・記録作成を鋭意進めていくと、５号土坑から縄文土器片、７号土坑から中世陶器片が出土する等、遺物も確認され始めた。また、調査区南西部200㎡の調査について、８月第２週で終了できる見通しが立ったため、調査に時間がかかると予想された１号井戸跡を含めた残る800㎡の範囲の調査も開始した。

猛暑が続き、作業員の体調管理に気を配りながらの調査となったが、８月７日に調査区南西部200㎡の全体写真撮影を行い、当該箇所の調査を終了した。調査区南西部200㎡の現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、８月10日に行った。

お盆休み明けの８月20日からも連日の猛暑で厳しい調査環境が続いたが、22日には上ノ台館跡の調査を終えた調査員・作業員が合流し、調査は順調に推移した。また、先行引き渡しを実施した調査区南西部200㎡を含めた隣接地では工事が開始されたため、作業上の安全に最大限留意しながらの調査となった。23日には、１号井戸跡の精査・記録作成が終了した。そして、27日には、検出したほとんどの遺構の精査に着手したため、残る記録作成を急ぎ、基本土層図の作成・地形測量も並行して行った。

９月５日には調査区全体の写真撮影と荒屋敷遺跡への発掘器材類の搬出を行い、全ての調査が終了した。翌週の11日に、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、残る800㎡について現地引き渡しを行った。

田向遺跡は、５月下旬に実施した試掘・確認調査の結果、4,100㎡の要保存範囲が確定したが、要保存範囲の一部は、盛土工法による工事範囲内にあるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適用されることとなった。調査範囲に関しては、掘削ラインと盛土ラインの境界から盛土側に10ｍのマージンを取ることが了解された。この結果を受け、福島県教育委員会より８月29日付で2,500㎡の田向遺跡の本発掘調査の指示が出された。

９月中は調査事務所・仮設トイレの設置、現場への発掘器材類の搬入等の準備を行った。

10月９日に、調査区の縄張りや発掘器材類の整理等を行い、作業員による遺構検出作業を調査区東部1,000㎡から開始した。遺構検出作業を進めると、土坑・溝跡・小穴が確認された。

10月10日からは検出した遺構の精査を開始した。調査区東部でも北西部から着手することとし、１・２号溝跡の調査を開始した。２号溝跡の調査を進めていくと、中世～近世の遺物が多く出土し、江戸時代頃に溝跡が埋められたことが判明した。

10月15日からは土坑の精査に着手し、縄文時代の落し穴を発見した。また、検出作業を続けていくと、調査区東部の東半部に多くの小穴が集中することがわかった。土坑・溝跡の調査を優先し、小穴は他遺構と重複するものを除き、土坑等の調査が終了してから着手することにした。

10月末頃には遺跡周辺での工事が本格化し、調査区西部に近接する箇所でも工事が開始された。その工事に伴い、調査区西部1,500㎡の優先度が高いことが示された。そのため、調査区東部の調査を一旦中断し、10月29日から調査区西部の調査に着手した。

調査区西部の調査は、工事箇所に隣接した西端部から着手し、順次東側に移行していった。遺構検出を進めていくと、土坑や溝跡を主体とした遺構が分布していることが明らかとなった。その後、遺構の精査を進めていくと、２号井戸跡、1号特殊遺構、15号溝跡等の深く掘削された遺構があることがわかり、作業員の安全に気を配りながら調査を進めた。

11月29日には調査区西部の調査に目途が付き、清掃後、全景写真の撮影を行った。

12月３日からは調査区東部の調査に戻り、すでに検出していた遺構の精査を行った。12月10日には遺構精査が終了し、11日に全体写真の撮影を実施した。12月12日には現場の発掘器材類の片付けを行い、調査は終了した。

現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、12月14日に行った。

伊達市伏黒地区

荒屋敷遺跡は、平成28・29年度に実施した試掘・確認調査の結果、8,200㎡の要保存範囲が確定していたが、要保存範囲の約８割は盛土工法による工事範囲内にあるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適応されることとなった。調査範囲に関しては、掘削ラインと盛土ラインの境界から盛土側に10ｍのマージンを取ることが了解され、本発掘調査が必要な範囲は、1,800㎡と整理されていた。

これを受けて、平成30年度に入り、福島県教育委員会より４月５日付で1,800㎡の本発掘調査の指示が出された。

なお、調査区内を横断する工事用車両の通行帯を確保しておく必要があるため、表土除去は２回に分けて行うこと、すなわち、当初通行帯とする調査区北端部の表土除去は、調査区南端部の調査終了・引き渡し後に行うことが平成29年度末に実施した連絡調整会議で決まっていた。

４月中は調査に向けた事務手続き等の準備を行い、５月28日から現地での作業を開始した。同日、仮設トイレ・安全掲示板を設置し、重機による表土除去を開始した。表土除去は調査区西部から行い、週の後半には土坑の輪郭が確認され始めた。

表土除去作業は、６月７日に調査区西部が終了したため、調査区東部に移行した。翌週からの作業員雇用に備えて、８日に発掘器材類の搬入を行った。

６月11日に作業員の雇用を開始し、遺構検出作業に取りかかった。並行して、検出した土坑の精査に着手した。18日には、工事用車両の通行帯とする調査区北端部を除いた表土除去が終了し

た。21日に測量基準点を打設し、以後、随時記録作成を行った。遺構検出作業が進み、調査区南東部には多数の土坑・小穴等の遺構が密集することが明らかとなった。

遺構が密集するため、足場の安全確保に留意しながら、調査を進めた。20号土坑からは遺存状態の良好な古墳時代後期の土器が出土した。６月後半は、降雨量が少なく、乾燥した排土が周囲に飛散しないようブルーシートで養生する等の対策も講じた。一方で、好天に恵まれたため調査は順調に進み、７月第１週には調査区南端部600㎡の遺構精査は大半が終了した。７月第２週には、調査区南端部600㎡の全体写真撮影、地形測量、基本土層図の作成を行い、11日には当該箇所の調査を終了した。調査区南端部600㎡の現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、12日に行った。

先述の通り、７月11日の第３回連絡調整会議で、荒屋敷遺跡よりも中室内遺跡の方が調査の優先順位が高いことが示された。このため、荒屋敷遺跡の調査は一旦中断させることとなった。中室内遺跡の調査準備を進める一方で、荒屋敷遺跡は調査区北端部の表土除去及び調査中の遺構精査・記録作成を進めた。７月24日には表土除去が終了し、調査区全体をブルーシートで養生した。翌25日から中室内遺跡の調査へ移行した。

中室内遺跡の調査終了後、９月６日に荒屋敷遺跡の調査を再開した。調査区西部から取りかかり、３号溝跡や34号土坑からは、中世陶器片や古銭、33号土坑からは白磁片が出土する等、中世の遺物が確認され始めた。また、市道上大川布川線の箇所については工事立会で対応すると整理されていたが、荒屋敷遺跡の調査の進展に伴い、道路下にも遺構が遺存していることが判明したため、９月12日の第５回連絡調整会議では、当該箇所の本発掘調査を行うことが決まった。これを受けて、福島県教育委員会より９月26日付で150㎡の本発掘調査の指示が出された。よって、荒屋敷遺跡の本発掘調査面積は計1,950㎡となった。

９月下旬は天候が安定せず、降雨が続くこともあったが、28日には調査区西部の全体写真撮影を行った。10月２日には調査区西部の調査が終了し、調査区東部へ移行した。

10月第２週に入り、調査区東部の遺構検出作業を進めていくと、調査区東部でも中央部は、今回の調査区の中でも最も遺構が密集する箇所であることが明らかとなり、より一層効率的な調査を心掛けた。遺構が密集する箇所の精査を進めるのと並行して、調査区北東部の遺構検出作業を行ったところ、一辺３～４ｍの大型の土坑が３基確認された。

10月23日には、追加で指示のあった市道上大川布川線の箇所150㎡について、表土除去を開始し、25日に終了した。表土除去終了後は、当該箇所の遺構検出・精査・記録作成を優先的に進めることとした。

11月に入り、重複する多数の遺構の調査に苦慮する中、６日に80号土坑から鉄製の磬、７日に76号土坑から鉄製の香炉が出土し、注視すべき遺物が相次いで確認された。その後も鋭意調査を進め、11月第３週の前半には88号土坑と小穴群以外の遺構の調査は終了した。88号土坑の精査を進めると、柱穴の底面に石を敷いていることが判明した。

11月21日には88号土坑と、大半の小穴の精査が終了したため、調査区東部の全体写真撮影を行った。翌22日には88号土坑の記録作成も終了した。11月第５週は、小穴群の精査・記録作成と遺構の断ち割り調査を行い、27日には調査区北東部で基本土層図を作成し、29日に作業員の雇用を終了した。発掘器材類の撤収や調査区縄張りの確認等を行い、12月３日には一切の現地作業を終了した。翌週の14日に、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、残る1,350㎡の範囲について現地引き渡しを行った。（丹　治）

第２節　地理的環境

福島県は東北地方の南端に位置している。面積は13,783㎢で、北海道、岩手県に次ぐ全国３番目の広さを有するが、南北に併行する越後山脈、奥羽山脈、阿武隈高地等、８割は山地で占められている。県土は、奥羽山脈と阿武隈高地により３地域に区分されていて、西から順に会津地方、中通り地方、浜通り地方と呼称されている。

一般国道115号相馬福島道路は浜通りと中通りとを結ぶ道路として計画されていて、平成30年度に調査を実施した４遺跡は、中通り北部の伊達市に所在している。以下、伊達市霊山町下小国地区、伊達市保原町上保原地区、伊達市伏黒地区の地区ごとに記述する。

伊達市霊山町下小国地区

伊達市は、平成18年に伊達町、梁川町、保原町、霊山町、月舘町が合併して成立した市で、伊達市霊山町は現在の市域のおおよそ中央付近を占める。大半が阿武隈高地の山中にあり、四方を山に囲まれている。地形は、町域東部にある標高825ｍの霊山山塊を最高峰として、標高200ｍ～500ｍクラスの山々が連なり、その谷間には東北第２位の大河川である阿武隈川に合流する広瀬川と、その支流（大石川、祓川、石田川、小国川等）が開析した狭い平坦地が形成されている。気候は夏が暑く、冬は降雪量が少ないものの寒冷で、年間平均気温は12℃、年間降水量は約1,100㎜である。こうした土地柄を利用して、近世～近代には養蚕業・絹織物業、葉タバコ生産が盛んに行われ、1970～1980年代以降は、牧畜・段々畑・果樹栽培地への転換がなされてきた。

調査対象の上ノ台館跡が所在する下小国地区は、標高532ｍの天井山北西麓から流れ出る小国川流域で、福島市と相馬市を結ぶ国道115号（中村街道）に面し、隣接の掛田地区は国道115号と国道349号が南北に交差する交通の要衝地である。この地理的特性は、周囲の歴史的環境を考える上で、重要と思われる。

地質の面では、下小国地区を含む霊山山塊の南側～西側は、風化が著しい雲母系花崗岩類を基盤層として、新第三紀の火山砕屑堆積物（霊山層、月舘層等）が広く覆う。そして、高地・丘陵地間の谷部には、第四紀の未固結堆積物（岩石化していない礫・砂・泥等）が堆積し、斜面部等には、西方の吾妻・安達太良火山群からもたらされた更新世後半期の火山灰や風成二次堆積物（火山灰を母材

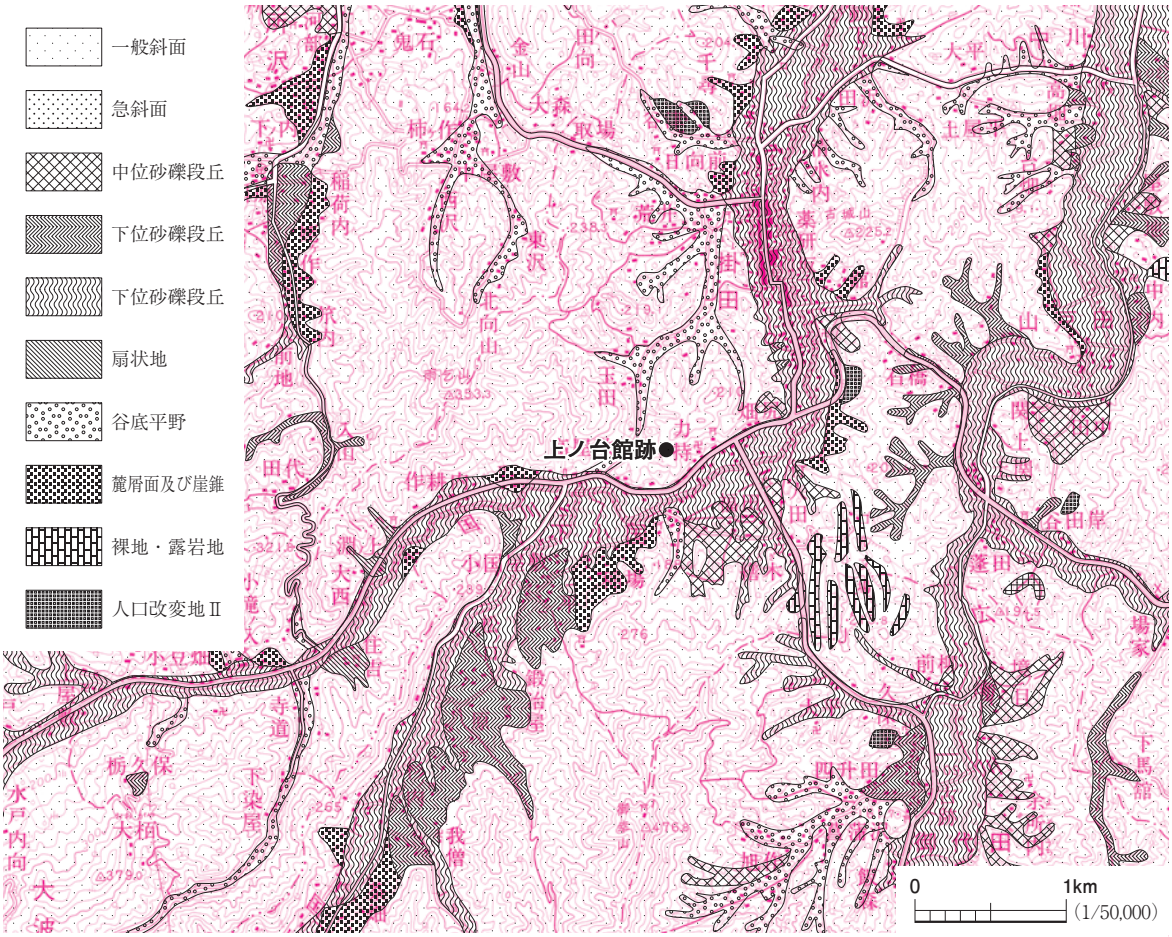


図３　上ノ台館跡周辺地形分類図

とする黄褐色土壌）層が散在するところもある。

伊達市保原町上保原地区

伊達市保原町は伊達市域のおおよそ西部にあたり、北半部と南半部で地形・地質の特徴が異なる。北半部は、福島盆地内部の低地で、盆地内部を北東に流れる阿武隈川東岸の沖積地となっている。標高は45～55ｍ前後で、平坦な土地が広がるが、阿武隈川の蛇行によって削り残された自然堤防、阿武隈川やその支流の旧河道や浸食崖、それらに伴う後背湿地といった微地形も発達している。自然堤防等の微高地上を中心に居住域が形成されていて、果樹園としても利用されている。それに対し、旧河道等の低地部は水田として利用されている。地質面では、礫・砂・泥等の氾濫堆積物や完新世の低位段丘堆積物等で広く覆われている。調査対象の田向遺跡・中室内遺跡は、この伊達市保原町北半部に位置し、阿武隈川の旧河道に挟まれた自然堤防上に立地している。

南半部は阿武隈高地から伸びる丘陵性山地と段丘面で構成されている。丘陵性山地は伊達市保原町域南縁の標高350ｍ前後の地点を最高として、北に向かい低くなっていく。丘陵性山地の山麓の標高80～120ｍには、南北約１㎞、東西約６㎞にわたる段丘面が帯状に連なっている。丘陵性山地の谷間には、伝桶川・東根川・古川等の小河川によって開析された狭い平坦部が形成されていて、

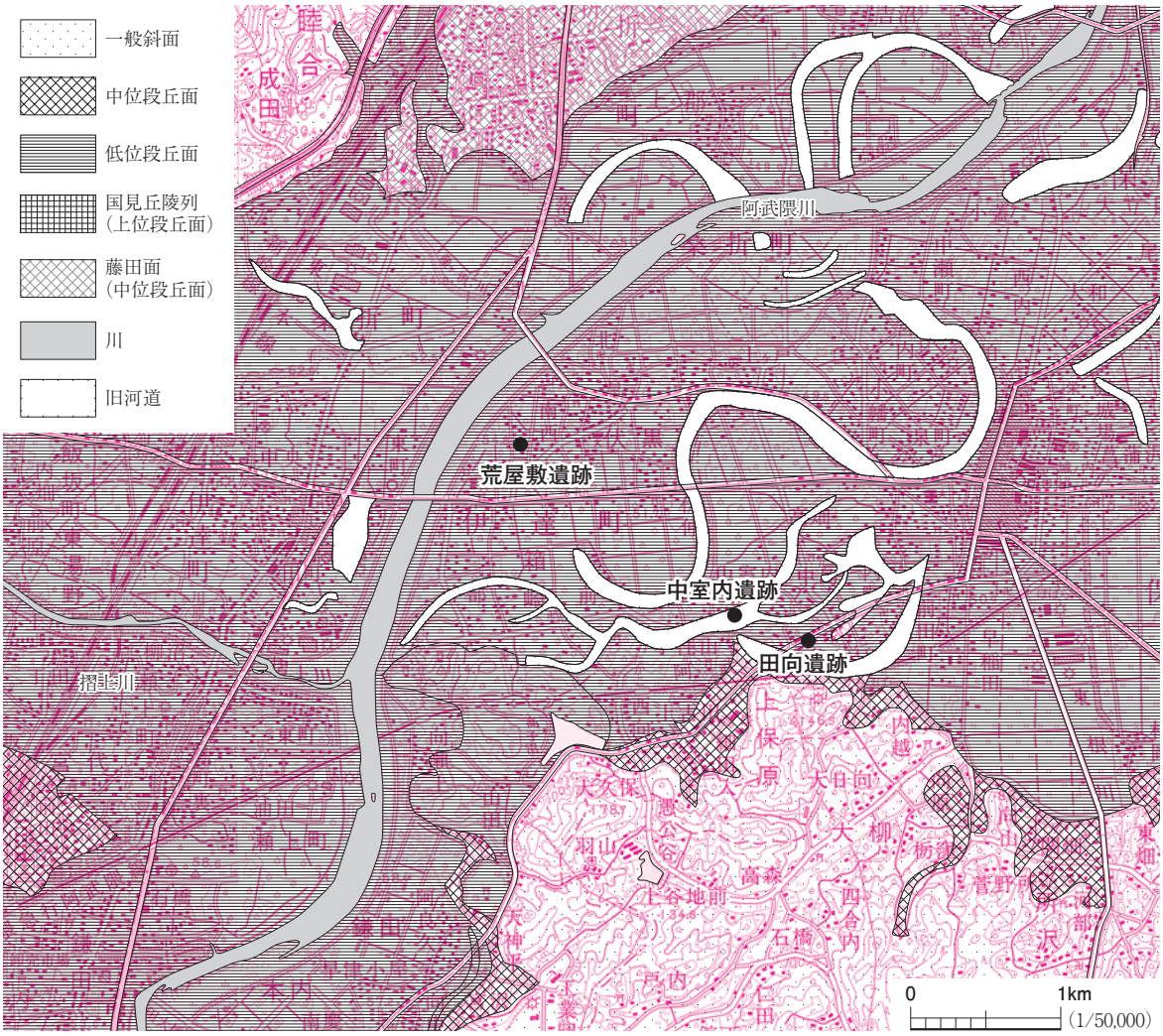


図４　田向・中室内・荒屋敷遺跡周辺地形分類図

谷間の平坦地は水田として、その周辺や段丘面は畑地として利用されている。南半部の地質を見ると、丘陵性山地や段丘面は新第三紀中新世の凝灰岩や凝灰角礫岩といった火山破屑性堆積物（霊山層上部層）が堆積している。

伊達市伏黒地区

伊達市伏黒地区は、伊達市域の西部にあたり、旧伊達町東部にあたる。同地区は阿武隈川に面していて、北流する阿武隈川と、阿武隈川に合流する摺上川の両河川によって形成された低位段丘上に立地する。同地区から同市保原地区や同市梁川地区、東側に接する桑折町では、阿武隈川やその支流の旧河道が多数確認されていて、荒屋敷遺跡はそれら河川の堆積物によって形成された自然堤防上に位置している。現在では、同地区は阿武隈川の東岸に位置しているが、天文九年（1540年）や、天文二十二年（1553年）の記録では、同地区は伊達郡西根の内とされていて、慶長十年代（1605～1615年）には東根とされていることから、中世末以前には阿武隈川の西岸にあたる地域だったと推定される。

（鶴　見）

第３節　歴 史 的 環 境

伊達市霊山地区

伊達市霊山町域では、旧石器時代から中世までの遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観してみたい。なお、霊山地区の遺跡については、図５に示した範囲外についても記載している。

旧石器時代　万田川遺跡(18)では、石刃と剝片が採取されている。いずれも細石刃の出現以前のものとみられている。

縄文時代　縄文時代は、早期～前期では、早期後半の土器が霊山寺跡(８)から、前期前葉の土器が川向遺跡、行人田遺跡(78)から少量出土しているのみである。中期～後期になると遺跡数が増加し、橋本遺跡(34)、倉波入遺跡、松ヶ倉遺跡(42)、古谷地遺跡、箋ノ内遺跡(117)、久保田遺跡、武ノ内遺跡等が知られている。このうち、武ノ内遺跡では中期末葉～後期の竪穴住居跡、配石遺構、屋外埋設土器、土坑が発見されており、松ヶ倉遺跡(42)でも縄文時代中期末葉～後期中葉の埋甕、土坑が検出されている。続く晩期はさらに遺跡数が増加する。川向遺跡、熊屋敷Ａ遺跡(15)、熊屋敷Ｂ遺跡(16)、千石平遺跡、岩平Ｂ遺跡(24)、家ノ入遺跡(28)、小坂遺跡、漆方遺跡(41)、大石台遺跡(43)、根古屋遺跡(87)、三斗蒔遺跡、武ノ内遺跡等が知られ、根古屋遺跡(87)では、晩期終末の完形土器が多数出土している。

弥生時代　根古屋遺跡(87)と武ノ内遺跡で再葬墓が見つかっている。特に、根古屋遺跡(87)の再葬墓は、弥生時代前期後半～中期前半における県内の代表的な資料の１つと評価されている。

古墳時代　集落遺跡・古墳ともに確認されていないが、行合道Ｂ遺跡(13)では、中期後葉～後期前葉の土師器が１点出土している。

古　　代　急峻な霊山山塊に営まれた霊山寺跡(８～10)は、貞観元年(859年)に慈覚大師円仁が開基したと伝えられる(「霊山寺縁起」)。山頂にはいくつかの伽藍群が確認されていて、古代には霊山寺玉野川上流伽藍群(９)が寺院の主要機能を担い、出土遺物から９世紀後半から10世紀中葉には成立していたと考えられている。集落遺跡は、行合道Ｂ遺跡(13)で、９世紀末～10世紀初頭の竪穴住居跡１軒が確認されているが、他に集落遺跡が調査された事例はなく、様相は不明である。

中　　世　霊山寺跡(８～10)は中世まで継続していて、山頂伽藍群から中国龍泉窯の青磁花盆・皿、中世瓦、鉄製錫杖等の遺物が発見されていることから、13世紀～14世紀中葉が最盛期と考えられている。また、南北朝期の建武四年(1337年)には、北畠顕家が、陸奥国府を多賀城から霊山寺に一時的に移し、山頂伽藍群に国司館を設置したことで、城郭としての機能が整備される。霊山城跡は、貞和三年(1347年)には落城したと推定されており、その後に霊山寺跡も廃絶したと考えられるが、落城時に廃絶したかは定かではない。国指定史跡の宮脇遺跡(39)は、伊達氏が再興

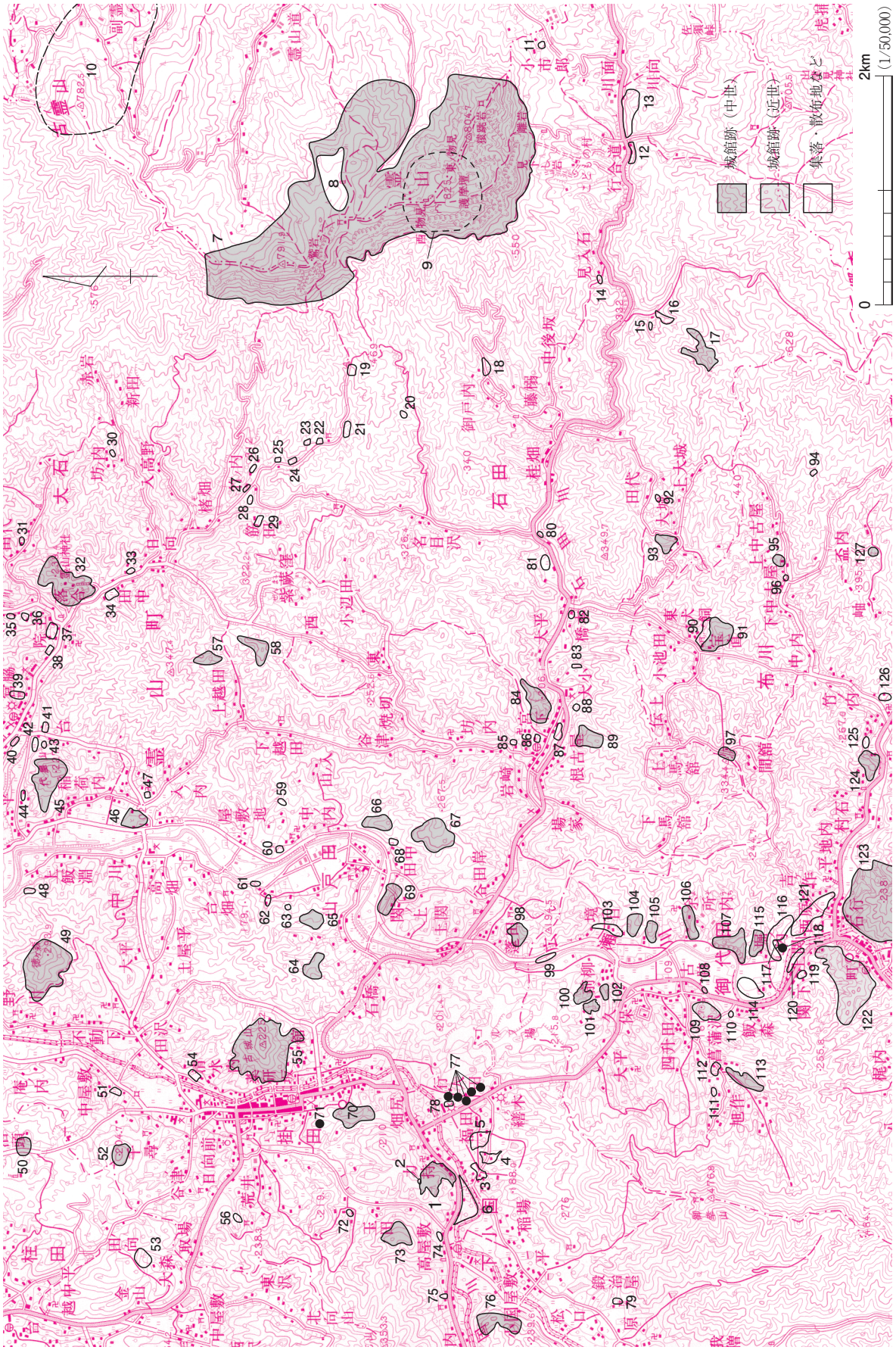


図5　上ノ台館跡周辺の遺跡位置図

表１－１　上ノ台館跡周辺の遺跡一覧

№.	遺跡名	所在地	種　別	時　期
1	**上ノ台館跡**	霊山町下小国	城館跡	中世
2	上ノ台遺跡	霊山町下小国	遺物包含層	縄文、中世以降
3	下小国荒屋敷遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文
4	沼ヶ入遺跡	霊山町下小国	集落跡・城館跡	中世
5	福田遺跡	霊山町下小国	集落跡・城館跡	中世
6	山岸遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文・平安
7	霊山城跡	霊山町石田	城館跡	中世
8	霊山寺跡（山頂伽藍群）	霊山町石田・相馬市玉野	社寺跡	縄文・古代～中世
9	霊山寺跡（玉野川上流伽藍群）	相馬市玉野	社寺跡	古代～中世
10	霊山寺跡（古霊山伽藍群）	相馬市玉野	社寺跡	古代～中世
11	小市郎遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
12	行合道Ａ遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
13	行合道Ｂ遺跡	霊山町石田	木炭窯	古墳・平安・中世
14	見入石遺跡	霊山町石田	散布地	縄文・古墳
15	熊屋敷Ａ遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
16	熊屋敷Ｂ遺跡	霊山町石田	集落跡	縄文・中世
17	熊屋敷館跡	霊山町石田	城館跡	中世
18	万田川遺跡	霊山町石田	散布地	旧石器
19	霊山閣遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
20	蛇冠遺跡	霊山町石田	製鉄跡	中世
21	千石平遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
22	弁天入遺跡	霊山町大石	散布地	奈良
23	岩平Ａ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
24	岩平Ｂ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
25	岩平Ｃ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
26	竹ノ内Ａ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文・奈良
27	竹ノ内Ｂ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
28	家ノ入遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
29	筋田遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
30	坊ノ内遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
31	田代遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
32	小屋館跡	霊山町大石	城館跡	中世
33	小坂遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
34	橋本遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
35	藤本Ａ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文・奈良
36	藤本Ｂ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
37	院主遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
38	近江屋敷遺跡	霊山町大石	散布地	弥生・奈良
39	宮脇遺跡	霊山町大石	寺院跡	中世～近世
40	西舘遺跡	霊山町大石	散布地	弥生
41	漆方遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
42	松ヶ倉遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
43	大石台遺跡	霊山町大石	散布地	縄文・奈良・平安
44	平遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
45	代皇山館跡	霊山町大石	城館跡	中世
46	瀬成田館跡	霊山町中川	城館跡	中世
47	中川台遺跡	霊山町中川	散布地	縄文
48	下飯渕遺跡	霊山町中川	散布地	古墳
49	篤ヶ森館跡	霊山町山野	城館跡	中世
50	小屋館跡	保原町金原田	城館跡	中世
51	千尋遺跡	霊山町掛田	散布地	平安
52	愛宕館跡	霊山町掛田	城館跡	中世
53	芳沼入遺跡	保原町柱田	散布地	平安
54	台山遺跡	霊山町掛田	散布地	奈良
55	懸田城跡	霊山町掛田	城館跡	中世
56	荒井遺跡	霊山町掛田	散布地	平安
57	よし館跡	霊山町石田	城館跡	中世
58	冠城館跡	霊山町石田	城館跡	中世
59	五郎内遺跡	霊山町山戸田	散布地	奈良
60	花水遺跡	霊山町山戸田	散布地	平安
61	道作Ａ遺跡	霊山町山戸田	散布地	奈良
62	道作Ｂ遺跡	霊山町山戸田	散布地	縄文
63	北田遺跡	霊山町山戸田	散布地	平安
64	愛宕館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
65	八島館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
66	酒井館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
67	大條館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
68	堀ノ内遺跡	霊山町山戸田	散布地	平安
69	本館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
70	明正寺館跡	霊山町掛田	城館跡	中世
71	明正寺板碑	霊山町掛田	石造物	中世
72	宮内遺跡	霊山町掛田	散布地	縄文
73	愛宕大館跡	霊山町下小国・掛田	城館跡	中世
74	高屋敷遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文・奈良
74	沢川遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文
76	小国城跡	霊山町下小国	城館跡	中世
77	行人田経塚	霊山町下小国	塚	中世
78	行人田遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文
79	宮遺跡	霊山町下小国	散布地	平安
80	水滴遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
81	孫老内遺跡	霊山町石田	散布地	縄文・弥生
82	橋本遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
83	大小遺跡	霊山町石田	散布地	奈良・平安
84	大館跡	霊山町石田	城館跡	中世
85	北畑遺跡	霊山町石田	散布地	縄文・古墳
86	中瀬遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
87	根古屋遺跡	霊山町石田	散布地	縄文・弥生
88	神明前遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
89	小館跡	霊山町石田	城館跡	中世
90	宝直遺跡	月舘町布川	散布地	

表１－２　上ノ台館跡周辺の遺跡一覧

№.	遺跡名	所在地	種　別	時　期
91	宝直館跡	月舘町布川	城館跡	中世
92	田代遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
93	大城館跡	霊山町石田	城館跡	中世
94	金子坂遺跡	月舘町布川	製鉄跡	中世・近世
95	五郎兵衛館跡	月舘町布川	城館跡	中世
96	上中古屋遺跡	月舘町布川	散布地	縄文
97	間館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
98	中城館跡	霊山町石田	城館跡	中世
99	蛇王下遺跡	月舘町御代田	散布地	縄文
100	渋谷館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
101	前柳館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
102	殿城館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
103	深田遺跡	月舘町御代田	散布地	古墳～平安
104	関ノ沢館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
105	深田入館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
106	女鹿山館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
107	白山館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
108	西遺跡	月舘町御代田	散布地	奈良・平安
109	春山館跡	月舘町御代田	城館跡	近世
110	飯森遺跡	月舘町御代田	散布地	古墳～平安
111	旭作遺跡	月舘町御代田	散布地・製鉄跡	不明
112	菖蒲沢遺跡	月舘町御代田	散布地	縄文
113	花館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
114	川原遺跡	月舘町御代田	散布地	縄文
115	堀ノ内入山館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
116	箋ノ内山遺跡	月舘町布川	散布地	不明
117	箋ノ内遺跡	月舘町布川	集落跡	縄文
118	箋塚古墳	月舘町布川	古墳	古墳
119	関ノ下Ａ遺跡	月舘町御代田	散布地	奈良・平安
120	関ノ下Ｂ遺跡	月舘町御代田	散布地	奈良・平安
121	西原遺跡	月舘町布川	散布地	縄文
122	殿上館跡	月舘町月舘	城館跡	近世
123	月見館跡	月舘町月舘	城館跡	中世
124	三郎内館跡	月舘町布川	城館跡	中世
125	竹ノ内遺跡	月舘町布川	散布地	縄文
126	小鉢内遺跡	月舘町布川	散布地	縄文
127	岫館跡	月舘町布川	城館跡	中世

した霊山寺跡の可能性が指摘されており、軒瓦文様は京都の鹿苑寺や相国寺の影響が確認できる。

広瀬川とその支流域には南北朝期～戦国期の城館跡が多い。調査を実施した上ノ台館跡（１）の他、大館跡(84)、小館跡(89)、懸田城跡(55)、愛宕大館跡(73)、小国城跡(76)等、多くの中世城館跡が確認されている。上ノ台館跡の南には、15世紀から16世紀頃の屋敷跡が確認された沼ヶ入遺跡（４）や福田遺跡（５）があり、密接な関係を有していた可能性が考えられる。

この他、行合堂Ｂ遺跡(13)、熊屋敷Ｂ遺跡(16)から中世以降の木炭窯跡が発見されている。また、行人田経塚(77)では、経筒や鋳仏、一字一石経等が出土している。

伊達市保原地区

伊達市保原町では、旧石器時代から近世までの遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観してみたい。なお、保原地区の遺跡については、図６の範囲外についても記載している。

旧石器時代　釈典Ｂ遺跡で、旧石器時代の可能性がある剝片が採取されている。

縄文時代　全時期を通じて遺構が確認された遺跡は少なく、保原町域内の縄文時代については不明な点が多い。縄文時代の遺跡は、早期から確認できる。大鳥城跡(76)では、早期の土器が出土している。舟橋遺跡(87)では、早期～前期の可能性が高い石器製作跡と考えられる石器集中地点が確認されている。中期は遺跡数が少なく、我宜遺跡で土器が採集されているだけである。後期以降では、北前遺跡・一本杉Ｂ遺跡で後期の埋設土器が見つかっている。今年度調査を実施した中室内遺跡（２）では、後期～晩期頃の粗製土器が見つかっている。また、田向遺跡（１）では落し穴が多数見

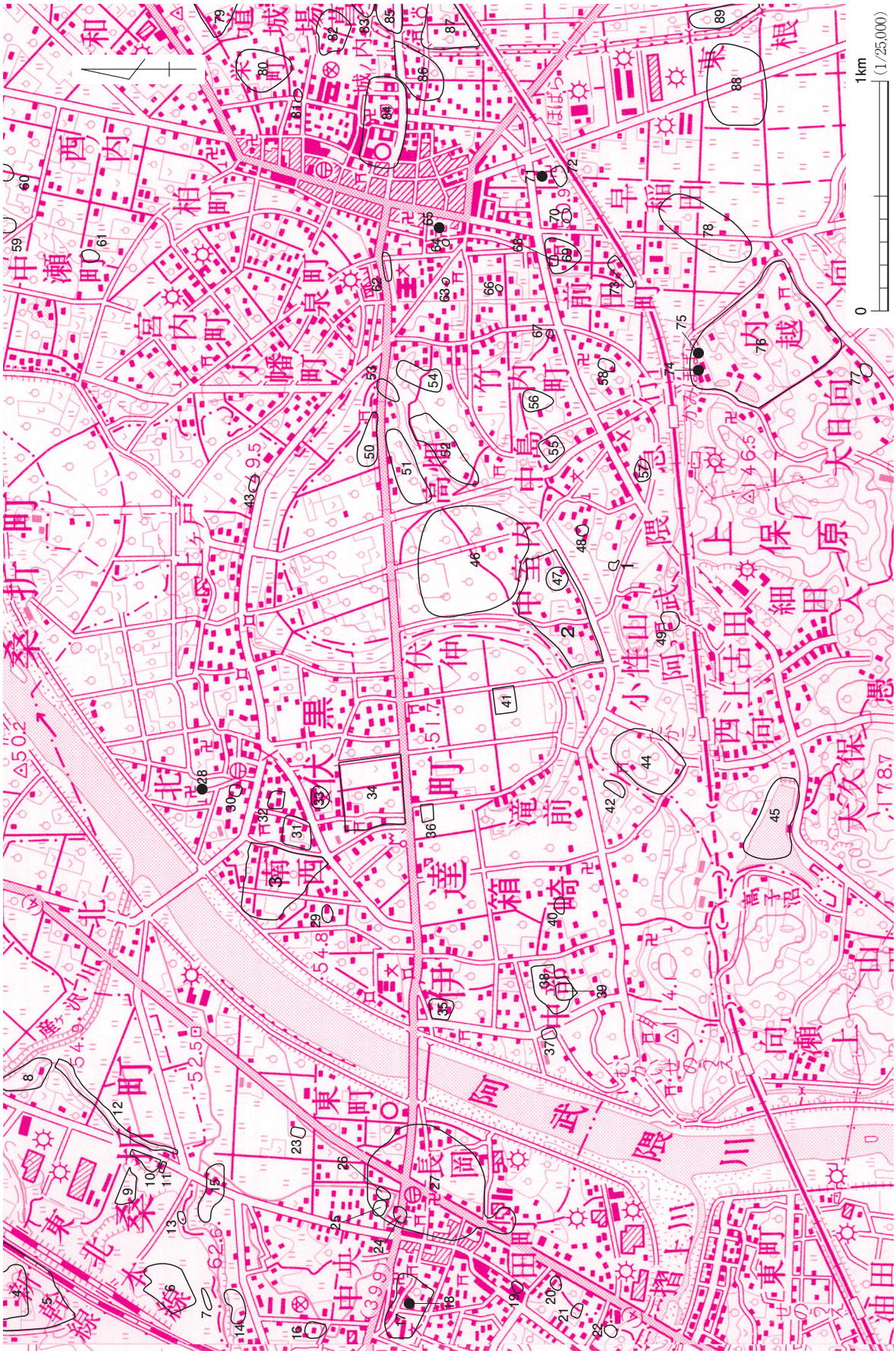


図6　田向・中室内・荒屋敷遺跡周辺の遺跡位置図

つかり、後期の土器も出土している。

弥生時代　弥生時代では、前期の遺跡は確認されていない。また、中・後期の遺跡でも土器が出土するだけで遺構が確認されない遺跡が大半である。中期は大鳥城跡(76)、榎内遺跡(46)、一本杉Ｂ遺跡、平遺跡、後期は大泉みずほ遺跡、中室内遺跡(２)、舟橋遺跡(87)等がある。このうち、大泉みずほ遺跡では、土坑等の遺構も確認されているため、付近に集落跡が存在する可能性がある。

古墳時代　伊達市保原町周辺は福島盆地北部の中でも古墳が集中する地域である。前期では、大泉みずほ遺跡で10基の方形周溝墓が確認された。菖蒲沢Ａ遺跡(83)では墳丘等があったのかは不明だが、埋葬施設だけが見つかっている。中期は、大泉みずほ遺跡で円墳が見つかっている。また、粘土槨を埋葬施設として持つ高野古墳も中期と推定されている。

後期から終末期にかけては、平野部では大泉みずほ遺跡で後期末頃と推定される前方後円墳が、大塚古墳群では横穴式石室を持つ円墳が確認されている。愛宕山古墳では単龍環頭大刀が、内山古墳(74)では蕨手刀と勾玉が出土している。時期が不明な古墳では、観音塚古墳(65)、野崎観音塚古墳(71)等の古墳も確認されている。

集落遺跡では、中室内遺跡(２)で古墳前期の竪穴住居跡８軒が見つかっている。その他、大鳥城跡(76)、大泉みずほ遺跡等で前期の竪穴住居跡が確認された。また、田向遺跡(１)でも前期の土師器がわずかに出土している。中期は、保原城跡(84)で竪穴住居跡を検出している。また、栄町Ｃ遺跡、宮下遺跡(86)では溝跡から多量の土器が出土していて、付近に集落がある可能性が高い。後期から終末期では、桐ノ木遺跡、牡丹原遺跡で竪穴住居跡が、宮下遺跡(86)では竪穴住居跡や溝跡が確認されている。

古　　代　古代の遺跡は多数確認されているが、奈良時代は、牡丹原遺跡と五斗蒔Ｂ遺跡で遺構・遺物が確認されている程度で、多くが平安時代の遺跡である。平安時代の遺跡は、保原城跡(84)、一本杉Ｂ遺跡、桐ノ木遺跡、五斗蒔Ｂ遺跡等が調査されている。五斗蒔Ｂ遺跡では、井戸跡から「漆原」と書かれた墨書土器が出土しているが、近隣には現在でも「漆内」、「前原」といった地名が見られ、平安時代における地名を示している可能性がある。また、五斗蒔Ａ遺跡・五斗蒔Ｂ遺跡から鍛冶に伴うと考えられる羽口や鉄滓が出土している。中室内遺跡(２)では、遺構の様相は不明だが古代の遺物が出土していて、田向遺跡(１)でも少量ではあるが古代の遺物が出土した。

中　　世　保原町域では、城館に関わる遺跡が多い。中室内遺跡(２)では、堀で区画された屋敷跡が確認されている。中世の遺物は少量だが、13～14世紀頃のものと15～16世紀頃のものが確認された。中室内遺跡(２)から南西に600m程の場所には、伊達家初代伊達朝宗が居城としたと伝わる高子館跡(44)がある。また、今回調査を実施した、中室内遺跡(２)から南に約200ｍに位置する田向遺跡(１)でも13～14世紀頃、16～17世紀頃の遺物が確認された。城館跡としては、保原城跡(84)、大鳥城跡(76)、富沢城跡等で調査が実施されている。保原城跡では、14～16世紀頃には在地領主の館または宗教関連施設として機能し、16世紀中葉頃に戦国期の城館として機能が変化すると推定されている。この他、舟橋遺跡(87)では城館跡または寺院跡と推定される区画施設が確認

表２　田向・中室内・荒屋敷遺跡周辺の遺跡一覧

№.	遺跡名	所在地	種　別	時　期
1	**田向遺跡**	保原町上保原	集落跡	縄文・古墳～中世・近世
2	**中室内遺跡**	保原町上保原	集落跡	縄文・弥生・古墳～中世
3	**荒屋敷遺跡**	伏黒	集落跡	古墳～中世
4	坊ノ内館跡	桑折町成田	城館跡	中世
5	坊ノ内遺跡	桑折町成田	散布地	平安・中世
6	土井ノ内遺跡	桑折町成田	集落跡	中世・戦国
7	成田窯跡	桑折町成田	窯跡	平安
8	光福寺跡	桑折町興福寺	社寺跡	中世
9	馬場遺跡	桑折町成田	集落跡	中世・近世
10	新宿遺跡	桑折町成田	集落跡	奈良・中世・近世
11	赤坂窯跡	桑折町赤坂	窯跡	近世
12	桑折台遺跡	桑折町台	散布地・窯跡	平安・近世
13	成田前窯跡	桑折町松原	窯跡	平安
14	伊達窯跡群	瀬戸場	窯跡	奈良・平安・近世
15	瀬戸場窯跡群	瀬戸場	窯跡	奈良・平安・近世
16	根田館跡	根田	城館跡	中世
17	長倉館跡	舘ノ内	城館跡	中世
18	舘ノ内古墳	舘ノ内	古墳	古墳
19	中志和田遺跡	中志和田	散布地	縄文
20	姥川遺跡	姥川	散布地	奈良・平安
21	新町Ｂ遺跡	川原町	散布地	奈良・平安
22	川原町遺跡	川原町	散布地	奈良・平安
23	一本木遺跡	一本木	散布地	平安
24	三島屋敷跡	北島	城館跡	中世
25	修験伊達家極楽院旧跡	中畑	社寺跡	中世・近世
26	中畑遺跡	中畑	散布地	縄文
27	金秀寺遺跡	広前	散布地	縄文・平安
28	光台寺供養塔	伏黒	碑	中世
29	川岸遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
30	北屋敷遺跡	伏黒	散布地	古墳・奈良
31	舘ノ内遺跡	伏黒	集落跡・散布地	奈良・平安・近世
32	南屋敷遺跡	伏黒	城館跡	奈良・平安
33	伏黒館跡	伏黒	城館跡	中世
34	宮本遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
35	原遺跡	箱崎	散布地	奈良・平安
36	宮本前遺跡	伏黒	散布地	平安
37	宝玄遺跡	箱崎	散布地	奈良・平安
38	箱崎大舘館跡	箱崎	城館跡	中世
39	大舘遺跡	箱崎	散布地	平安
40	漆宝遺跡	箱崎	散布地	奈良・平安
41	沖ノ原遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
42	岩ノ下遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
43	薬師堂遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
44	高子館跡	保原町上保原	城館跡	縄文・中世
45	高子金山跡	保原町上保原	その他	中世・近世
46	榎内遺跡	保原町上保原	散布地	弥生・古墳～平安
47	中室内館跡	保原町上保原	城館跡	中世
48	京口遺跡	保原町上保原	散布地	古墳・奈良
49	岩谷遺跡	保原町上保原	散布地	古墳・奈良
50	大割遺跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
51	下ノ台遺跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
52	星の宮遺跡	保原町上保原	散布地	縄文～古墳
53	名場ノ内遺跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
54	深呂内遺跡	保原町上保原	散布地	古墳
55	高畑遺跡	保原町上保原	散布地	奈良
56	中島館跡	保原町上保原	城館跡	中世
57	上ノ原館跡	保原町上保原	城館跡	中世
58	神明町遺跡	保原町上保原	散布地	奈良・平安
59	小蓋Ｂ遺跡	保原町小蓋	散布地	平安・中世
60	東小蓋遺跡	保原町東小蓋	散布地	中世
61	古川端遺跡	保原町古川端	散布地	中世
62	弥生町Ａ遺跡	保原町弥生町	散布地	古墳～平安
63	弥生町Ｂ遺跡	保原町弥生町	散布地	古墳～平安
64	五丁目遺跡	保原町五丁目	散布地	古墳
65	観音塚古墳	保原町五丁目	古墳	古墳
66	実町遺跡	保原町実町	散布地	古墳～平安
67	正地内遺跡	保原町上保原	散布地	縄文～中世
68	大河内館跡	保原町前田町	城館跡	中世
69	前田町遺跡	保原町前田町	散布地	縄文・古墳・奈良
70	市柳遺跡	保原町市柳	散布地	古墳～平安
71	野崎観音塚古墳	保原町下野崎	古墳	古墳
72	吾妻館跡	保原町東宮下	城館跡	中世
73	京門遺跡	保原町京門	散布地	縄文～平安
74	内山古墳	保原町上保原	古墳	古墳
75	首塚	保原町上保原	塚	中世
76	大鳥城跡	保原町大柳	城館跡	縄文・奈良～中世
77	大日向遺跡	保原町大柳	散布地	古墳～平安
78	早稲田遺跡	保原町早稲田	散布地	古墳～平安
79	大館遺跡	保原町大泉	集落跡	古墳・中世
80	久保遺跡	保原町久保	散布地	古墳
81	栄町Ｂ遺跡	保原町栄町	散布地	平安～中世
82	道城場遺跡	保原町大泉	散布地	古墳～平安
83	菖蒲沢Ａ遺跡	保原町大泉	集落跡	古墳・中世
84	保原城跡・保原陣屋跡	保原町宮下	城館跡・その他	古墳・中世・近世
85	大地内Ａ遺跡	保原町大泉	集落跡・散布地	縄文～中世
86	宮下遺跡	保原町宮下	散布地	古墳～中世
87	舟橋遺跡	保原町舟橋	集落跡・散布地	縄文～中世
88	郡山遺跡	保原町所沢	散布地	奈良
89	岡代遺跡	保原町岡代	散布地	古墳～平安

されている。大地内Ａ遺跡(85)でも屋敷や寺院地と考えられる区画が確認されていて、井戸跡内からは板碑や板碑の未成品が出土している。これ以外にも、大河内館跡(68)、中島館跡(56)、大立目館跡、高成田館跡、平館跡等が存在する。城主が明らかなものは少ないが、伊達市の家臣やその配下との関連が考えられている。

近　　世　近世初期には、信夫郡・伊達郡は蒲生領、上杉領、幕府領、本多領、幕府領と移り変わる。そして、寛保二年(1742年)に、松平定賢が白河藩主となった後に、保原地方の17村が白河藩の飛地領とされ、出張所である保原陣屋(84)が保原城跡(84)に置かれた。

伊達市伏黒地区

伊達市伏黒地区では発掘調査事例が少なく、詳細が明らかな遺跡は少ない。ここでは、伏黒地区を含む、旧伊達町域の遺跡について概観する。なお、遺跡については、図６に示した範囲外についても記載している。

縄文時代　旧石器時代の遺跡は確認されておらず、縄文時代から遺跡が確認されている。しかし、遺跡数は少なく、金秀寺遺跡(27)、雷田遺跡、中志和田遺跡(19)の３遺跡しか確認されていない。金秀寺遺跡では、発掘調査が実施されていて、中期～後期の遺構・遺物が確認されている。

弥生時代　荒屋敷遺跡(３)で、後期末頃の土器が出土しているが、それ以外の遺跡は知られていない。

古墳時代　旧伊達町の古墳は、阿武隈川西岸にある時期不明の舘ノ内古墳(18)しか確認されていない。西岸では散布地は確認されておらず、集落の状況は不明である。東岸では、北屋敷遺跡(30)、荒屋敷遺跡(３)で古墳時代の遺物が確認されている。このうち、本年度調査の荒屋敷遺跡(３)では、前期・終末期の土器が出土しているが、遺構はほとんど確認されていない。

古　　代　古代以降は、遺跡数は大きく増加する。荒屋敷遺跡(３)をはじめ、一本木遺跡(23)、東本場遺跡(28)、金秀寺遺跡(27)、原遺跡(35)、宝玄遺跡、前田遺跡、川原町遺跡(22)、新町Ｂ遺跡(21)、姥川遺跡(20)、中畑遺跡(26)、根田館跡(16)、大舘遺跡(39)、川岸遺跡(29)、北屋敷遺跡(30)、南屋敷遺跡(32)、舘ノ内遺跡(31)、宮本遺跡(34)、宮本前遺跡(36)、漆宝遺跡(40)、沖ノ原遺跡(41)、岩ノ下遺跡(42)、薬師堂遺跡(43)など多数確認されている。生産遺跡では、奈良・平安時代の窯跡である瀬戸場窯跡群(15)や、伊達窯跡群(14)などの窯跡があり、伊達窯跡群(14)では調査が行われている。また、これらの窯跡から新堀川を挟んだ北側には、成田窯跡(７)や成田前窯跡(13)などの奈良・平安時代の窯跡があり、周辺一帯で須恵器生産が行われていた。

中　　世　中世の遺跡の大半は城館跡である。今回の調査で中世の遺構・遺物が多く確認された荒屋敷遺跡(３)から南東約300ｍには、中世城館とされる伏黒館跡(33)があり両者の関連が想定される。阿武隈川の西岸には、関東公方に反抗した長倉氏と伊達家９代伊達政宗が、応永九年(1402年)に立てこもったとされる長倉館跡(17)がある。修験伊達家極楽院旧跡(25)は修験寺院であり、文亀三年(1503年)の熊野勝達坊の『旦那売券状』によれば、極楽院は信夫郡北郷の信者を率いて、

紀州熊野に参詣している。天文三年(1534年)に伊達家14代伊達稙宗の息子清三郎が極楽院に迎えられて以来、伊達家の庇護を受けた。三島屋敷跡(24)は、清三郎の屋敷跡とされる。江戸期には、極楽院は伊達郡西根郷の修験の触頭で、明治初期に廃寺となったが、極楽院歴代の墓碑は金秀寺に移されている。その他の城館としては箱崎大舘館跡(38)、根田館跡(16)などがある。

石造物としては、光台寺供養塔(28)、金秀寺七角石塔がある。光台寺供養塔(28)は６基あり、その内３基に正応二年(1289年)の年号が刻まれている。６基の板碑は、５基が伏黒字観音前の畑から、１基が伏黒字荒屋敷にある三田八幡神社の大欅の下から見つかったものが光台寺に移されたものである。

（鶴　見）

第４節　調 査 方 法

上ノ台館跡、田向遺跡、中室内遺跡、荒屋敷遺跡の発掘調査では、原則的に(公財)福島県文化振興財団で実施してきた調査方法を用いている。そこで、以下に一括して述べる。

遺跡や遺構の位置は、世界測地系に基づく国土座標Ⅸ系の座標を用いた。また、遺構や遺物の大まかな地点を示すために、10ｍ単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に１・２・３…と算用数字、西から東にＡ・Ｂ・Ｃ…とアルファベットを用い、これを組み合わせてＡ１・Ｂ２・Ｃ３…とした。

表土と盛土の除去は重機を用い、それ以外の遺構外堆積土及び遺構内堆積土の掘削は、基本的に人力で行っている。遺構の精査は、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察用畔を残し、土層の堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら進めた。具体的には、竪穴住居跡・特殊遺構の一部は４分割法、その他の遺構は２分割法を採用した。掘立柱建物跡の柱穴では柱痕跡と掘形の識別を行った。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影を行った。実測図作成は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準点をもとに光波測距儀を使用し、部分的には簡易遣方で測量し、現場で結線した。断面図については、遺跡内に移動した簡易水準点をもとに作図した。各遺構の図化に際しては、1/20の縮尺を原則とし、遺構の規模・性格に合わせて1/40の縮尺も適宜使用した。さらに、上ノ台館跡については、遺跡基底面の等高線の入った遺構配置図や丘陵地形の横断面図の作成等を航空写真測量で実施した。

遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。

写真は35㎜判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムカメラ、デジタルカメラを使用し、同一被写体の撮影を行った。

これらの調査記録及び出土遺物については、報告書刊行後に(公財)福島県文化振興財団の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

（丹　治）

第１編　上ノ台館跡（３次調査）

かみ　の　だいたてあと

遺跡記号	ＤＴ－ＫＮＴ３
所在地	伊達市霊山町下小国字上ノ台
時代・種類	中世の城館跡
調査期間	平成30年５月28日～８月21日
調査員	丹治篤嘉・初山孝行・ 枝松雄一郎・鶴見諒平

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

上ノ台館跡は、福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台に所在し、小国川北岸の丘陵部に位置する。遺跡周辺の地形は、小国川よりも南側は傾斜が緩やかで比較的広い土地が広がっている。それに対し、小国川より北側は平坦な場所が少なく、急傾斜の丘陵が迫っている。

周辺には中世城館やその関連遺跡が多く分布している。上ノ台館跡のすぐ北側には遺跡範囲が一部重複する上ノ台遺跡、小国川を挟んで南側には沼ヶ入遺跡、福田遺跡等が所在する。

上ノ台館跡は、平成24年度に実施した分布調査で新たに発見された城館跡で（福島県教育委員会2014）、平成27年度の測量調査、平成27・28年度の試掘・確認調査の結果、15,600㎡の要保存範囲が確定していた（福島県教育委員会2016・2017）。本発掘調査は、10,200㎡について平成28・29年度に実施し、報告書が刊行されている（福島県教育委員会2018・2019）。

今回の調査は、平成29年度に続く３次調査である。南北に延びる尾根上及び東側斜面の一部が調査区にあたり、２次調査区の南側に位置する（図１）。開始前の状況は山林である。　（鶴　見）

第２節　調 査 経 過

上ノ台館跡の３次調査は、４月５日付で福島県教育委員会から本発掘調査の指示を受け、5,400㎡を対象に平成30年５月28日～８月21日まで、延べ53日間実施した。この内、調査区東部にあたる斜面部3,100㎡については、重機の進入が困難な急傾斜地であった。また、斜面下方には民家や国道があり、重機や人力で土を動かした場合、土砂流出による事故が起こる可能性が極めて高かった。県文化財課と財団の協議の結果、その範囲について土砂の掘削を伴う調査は実施せず、航空写真測量によって記録保存を図ることとなった（図３）。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

５月第５週～６月第１週　：28日（月）に調査事務所・仮設トイレを設置する。また、同日に調査区内に重機を搬入し、29日（火）から重機による表土除去を開始する。

６月第２週　：重機による表土除去を継続する。傾斜がある丘陵上のため、安全に注意しながら慎重に作業を実施する。

６月第３週　：11日（月）から作業員の雇用を開始する。12日（火）からは調査区内の通路の整備や器材の搬入などを実施する。並行して表土除去作業を継続する。

６月第４週　：18日（月）から遺構の検出作業を開始し、調査区南部の平場上では土坑や小穴などが検出される。また、19日（火）には表土除去が終了した。

６月第５週　：遺構の検出作業を継続する。同時に、調査区南部の平場で確認した土坑、溝跡の

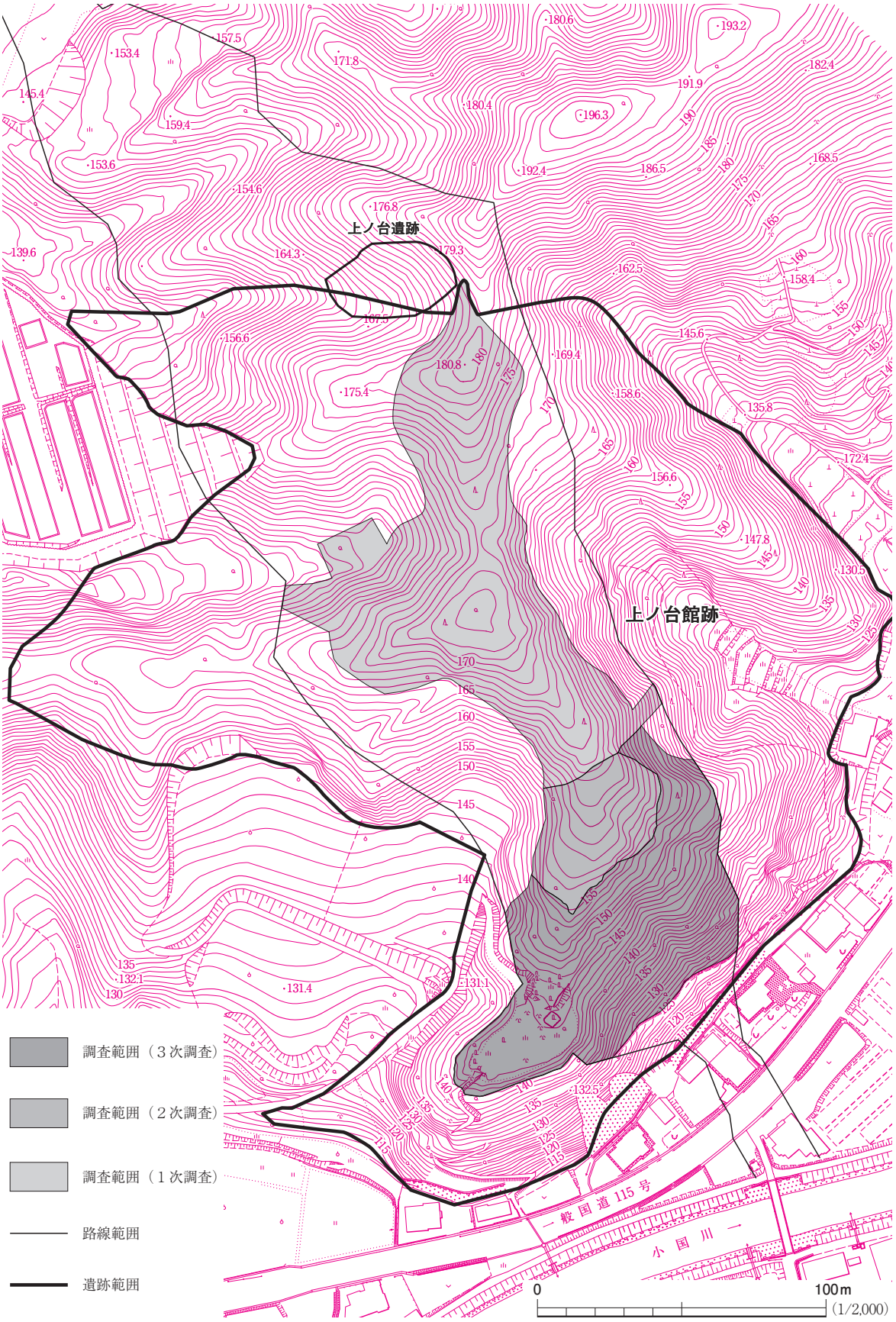

上ノ台遺跡
上ノ台館跡
一般国道115号
小国川
調査範囲（３次調査）
調査範囲（２次調査）
調査範囲（１次調査）
路線範囲
遺跡範囲
0
100m
(1/2,000)

図１　調査区位置図

調査に着手する。尾根上で検出された小穴は、城館跡に伴う建物跡の柱穴で、平場として利用されていたことが判明する。

７月第１週　：３日(火)には調査区南部の遺構の調査がおおよそ終了したため、尾根上の遺構検出に順次移行する。

７月第２週　：尾根上で溝跡や小穴を検出する。傾斜地での作業のため、排土の運搬や移動中の転倒など、事故に注意しながら作業を続ける。

７月第３週　：尾根上で検出した遺構の掘削を開始する。尾根上で確認した溝跡は尾根の傾斜が変わる場所に掘られていて、尾根上を区画するものと推定された。

７月第４週　：26日(木)に調査区の航空写真測量を委託して実施する。尾根上の調査が終了し、31日(火)から東側斜面で確認した平場の調査に着手する。斜面の下側が調査区外のため、斜面の上方から重機で排土を片付けながら作業を進める。

７月第５週～８月第１週　：斜面部の平場で溝跡と柱列跡を検出する。安定した足場の場所が狭いため、通路を確保しながら作業を続ける。

８月第２週　：遺構の検出及び掘削は６日(月)で一旦終了する。遺構の記録作業と、写真撮影のための調査区内の清掃を実施する。清掃の際に調査区南部の平場で小穴が新たに検出されたため、お盆休み明けに調査を実施することにした。

８月第４週　：残っていた遺構の掘削・図化が21日(火)に終了する。遺構の調査と並行して現場内の器材の片付けと撤去を実施する。22日(水)には、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。　（鶴　見）

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要（図２～４）

１～３次調査の結果、尾根上の遺構について、その内容を把握することができた。その成果については別途総括し、ここでは３次調査の概要を記載する。なお、３次調査の成果を反映して、２次調査までの判断・評価を変更した箇所があるが、それについても別途記載する。

３次調査区は、城館跡として登録されている範囲全体の中では南部にあたり、２次調査区の南側に隣接する。調査開始前の現況観察では、尾根上に複数の平場と思われる箇所が確認されていた。また、東側斜面にも平場と見られる平坦部がいくつか確認された。

調査区内は、尾根上の比較的平坦な箇所と、斜面部とに分けられる。３次調査区の最高点は９号平場で、標高156.5m前後、２号平場が最低点で、標高143.5m前後であり、最高点と最低点との比

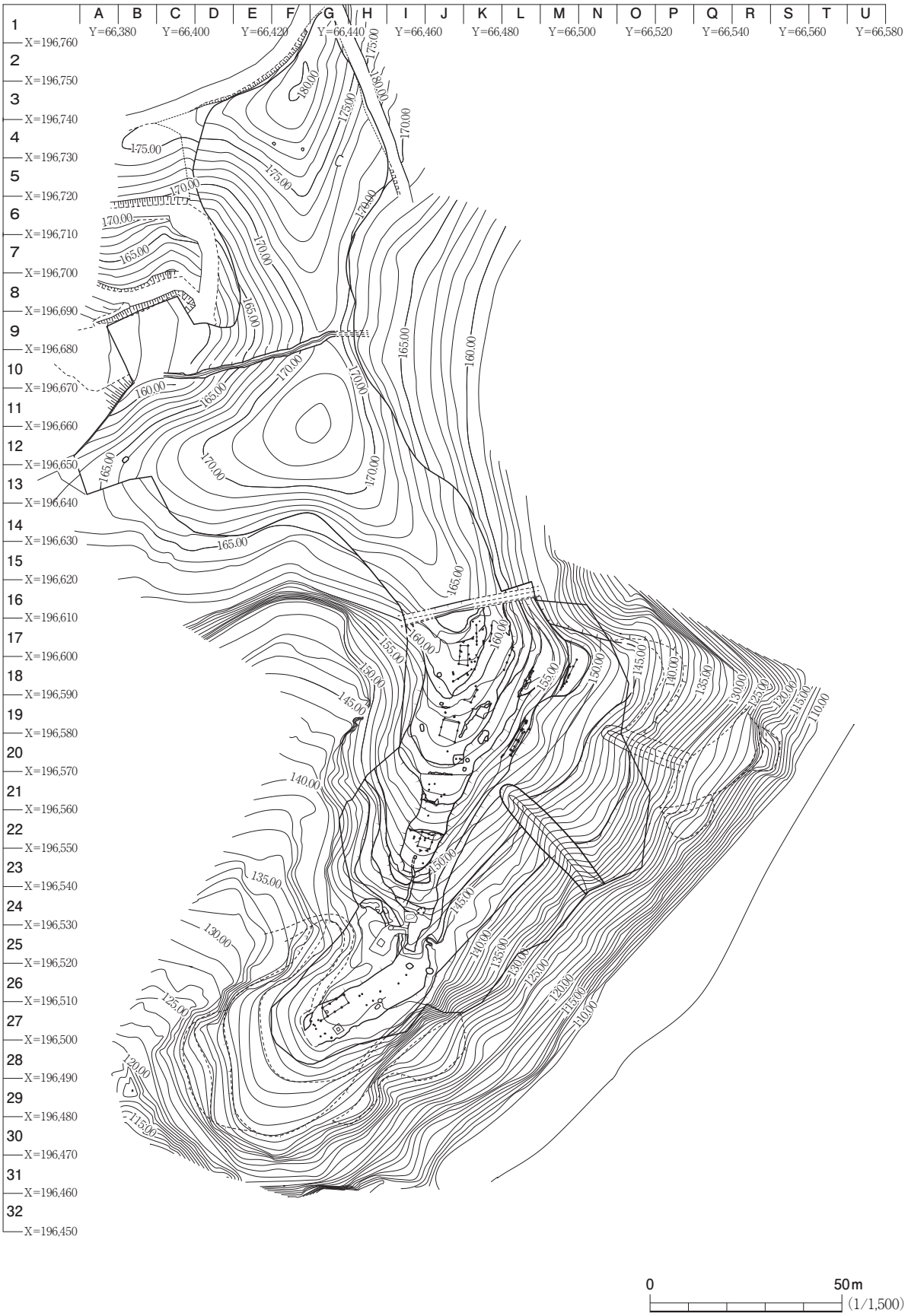


図２　上ノ台館跡全体図（１～３次調査）

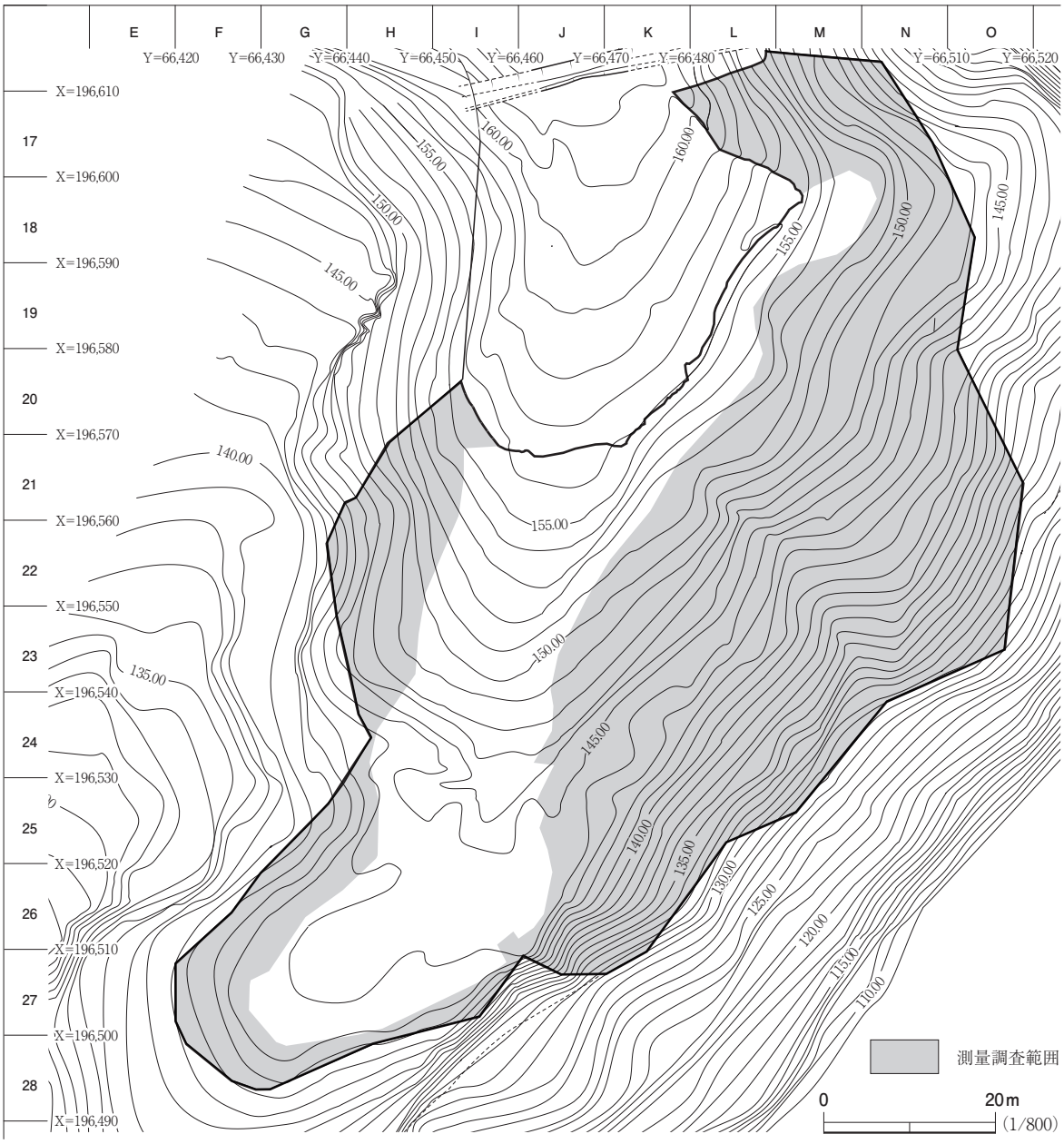


図３　測量調査実施範囲

高は23ｍ程で、かなりの高低差がある。尾根筋は、平坦に整地された２号平場から北は、緩やかな傾斜の平場が階段状に続く。傾斜が急な東側斜面は、傾斜に沿って南北方向に細長い平場が形成されており、測量調査した範囲には、堅堀かとみられる堀跡Ａ・Ｂも確認された。

今回の調査で確認した遺構の番号は、１・２次調査からの連番としている。グリッドも、１・２次調査時に設定したグリッドから連続する番号を付している。また、２次調査時に出土した炭化物の分析結果について、付章に掲載した。

基本土層（図５）

基本土層は調査区内の８地点(①～⑦、Ａ－Ａ′)で土層を確認し、色調・土質の諸特徴からＬＩ～

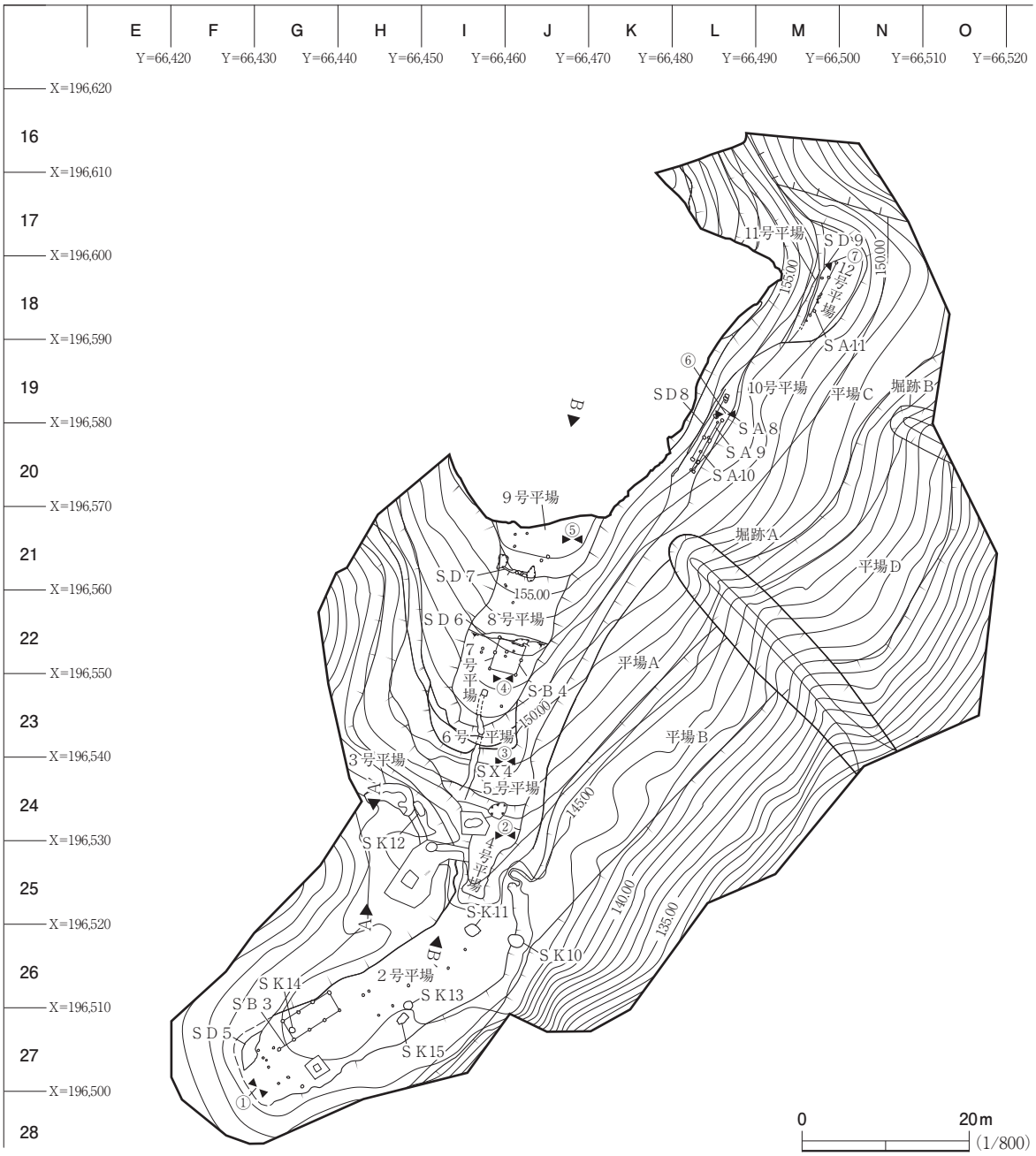


図４　遺構配置図（３次調査）

Ｖの５層に分層した。

ＬＩは、表土とその直下の腐植土及び盛土である。表土と腐植土はＬＩａ、盛土をＬＩｂとした。ＬＩｂは、Ａ－Ａ′地点で確認した土層で、褐色シルトと黄褐色シルトが混ざった人為堆積土である。ＬＩｂには近世以降の陶磁器等が含まれていたことから、近世以降の盛土と判断した。

ＬⅡは、褐色シルト層で、尾根上での層厚は10～15㎝である。ＬⅢへの漸移的な層で、一部の遺構内部にはこのＬⅡに起因する土が堆積している状況が確認できた。

ＬⅢは、色調によりＬⅢａ～ＬⅢｄと細分した。このうち、ＬⅢａ～ＬⅢｃはＡ－Ａ′地点でのみ確認された。調査区のほぼ全域で確認されるＬⅢｄの層厚は10㎝前後で推移する。風化したＬⅣま

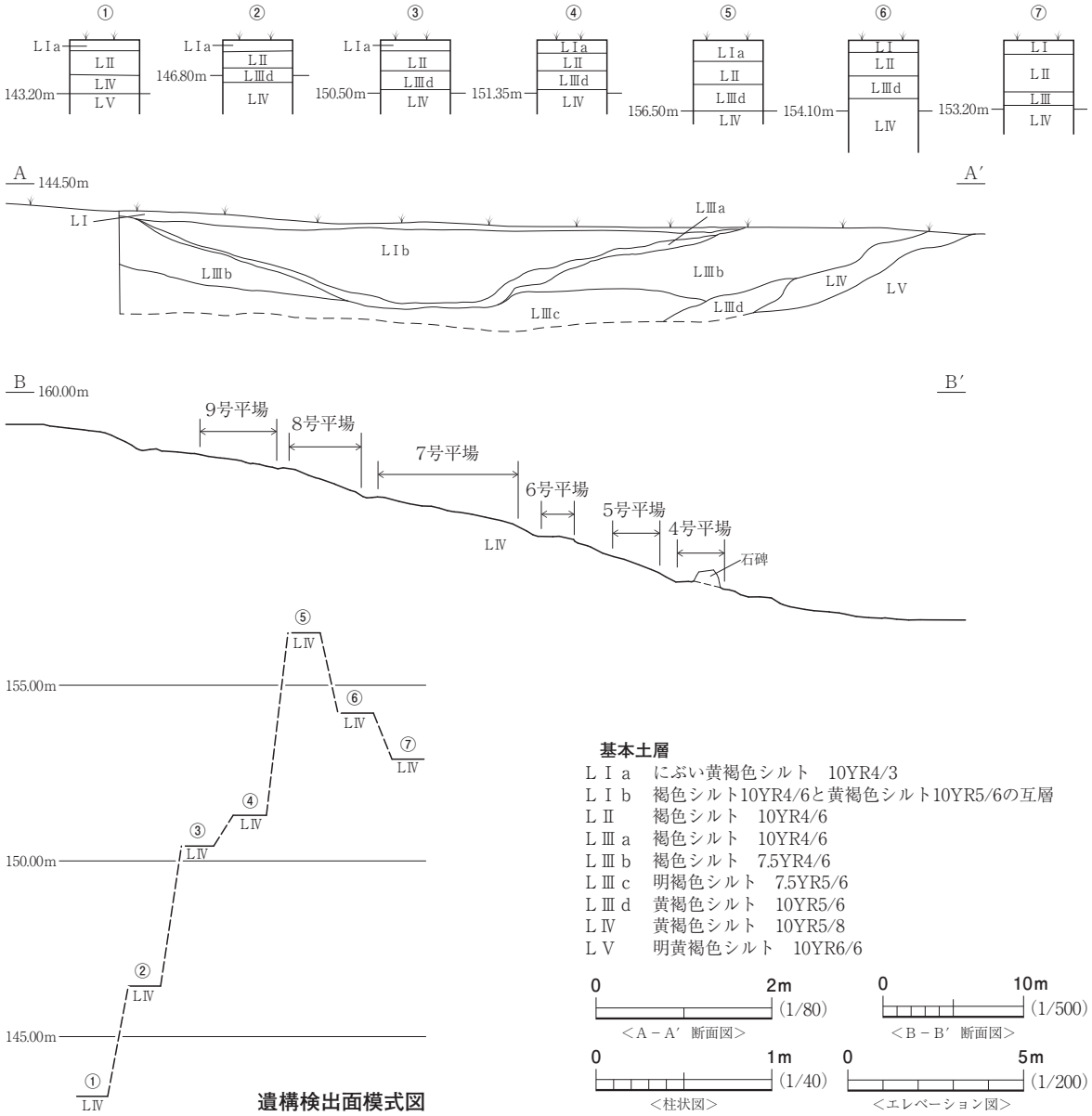


図５　基本土層

たはＬＶが再堆積した層と考える。２次調査では、この層の上面で確認できる遺構が存在したが、３次調査では確認されなかった。

ＬⅣは、遺構の検出面で、層厚はＡ－Ａ′地点で30㎝前後である。

ＬＶは、遺跡が立地する丘陵の基盤層である。　（鶴　見）

第２節　尾根上の平場とその遺構

２号平場（図６、写真４・５）

２号平場は調査区南部の、Ｆ27・28、Ｇ26～28、Ｈ26・27、Ｉ25～27グリッドに位置する。本遺跡の中では最も広く平坦な平場である。表土除去前の観察では、２号平場は南西部（先端部）よ

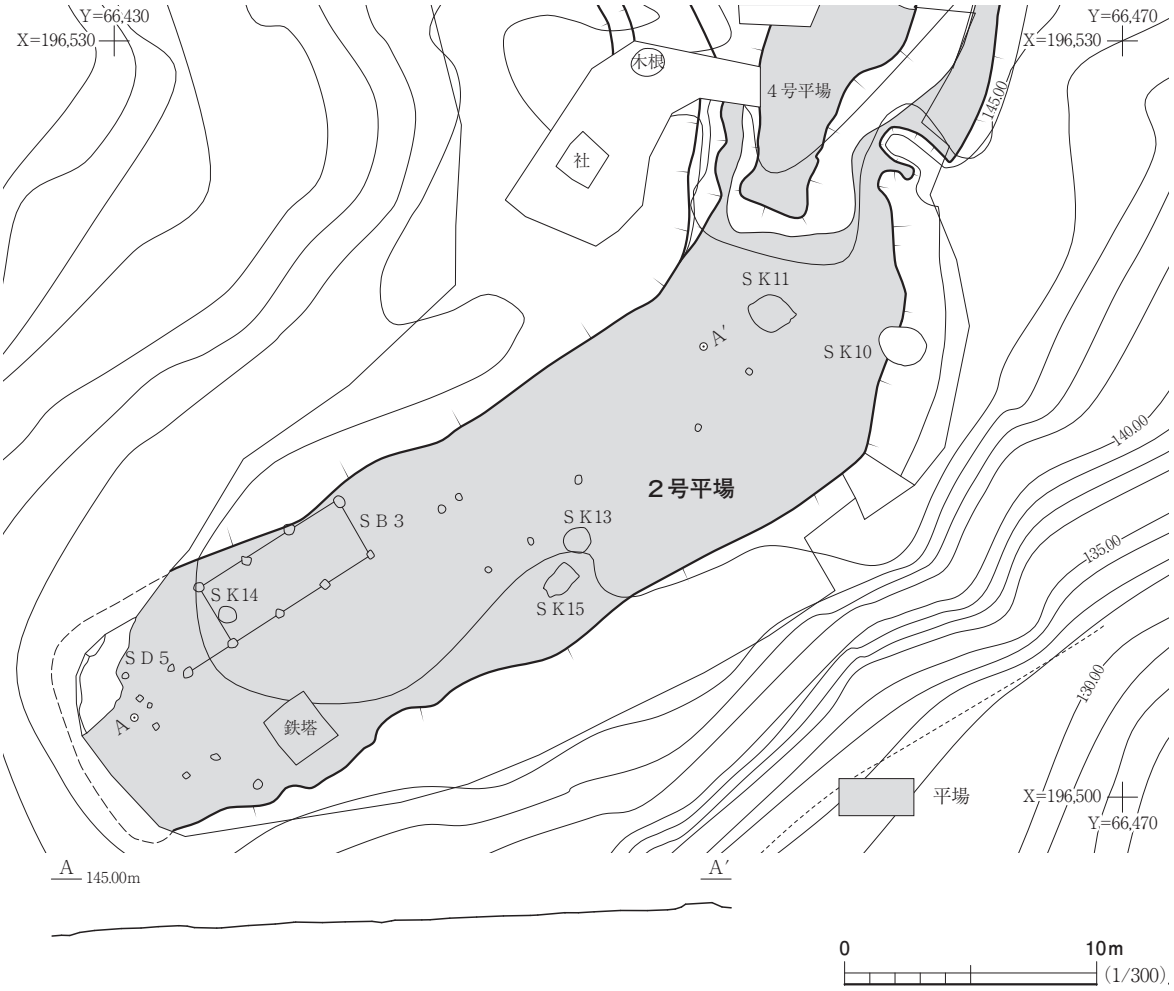


図６　２号平場

りも北東部(基部)の方が広い台形状を呈していた。ところが、前述したように、２号平場より北側のＡ－Ａ′地点では、近世以降の盛土が確認された。神社の建築や石碑の設営のために地形が大きく改変されたものと推測される。平場の平面形は、東西に長い長方形を呈し、４号平場との接続部付近でわずかに北側に屈曲する形状である。規模は、長軸39ｍ、短軸は先端部付近で10ｍ、中央で9.5ｍ、４号平場と接続する基部付近では７ｍである。平場は、北東部から南西部に向かって緩やかに傾斜している。２号平場に伴う遺構は掘立柱建物跡１棟、土坑４基、溝跡１条、小穴15基である。

３号建物跡　ＳＢ３

遺　　構（図７、写真６）

本遺構は、２号平場の西端付近で検出した掘立柱建物跡である。Ｇ26・27、Ｈ27グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はないが、西に２ｍには５号溝跡がある。

建物跡の主軸方向は、尾根の向きとほぼ同じである。桁行は、北側が４個、南側が５個の柱穴で構成されている。北側のＰ１～４までの芯心での長さは6.54ｍ(約21.6尺)、南側のＰ５～９までの

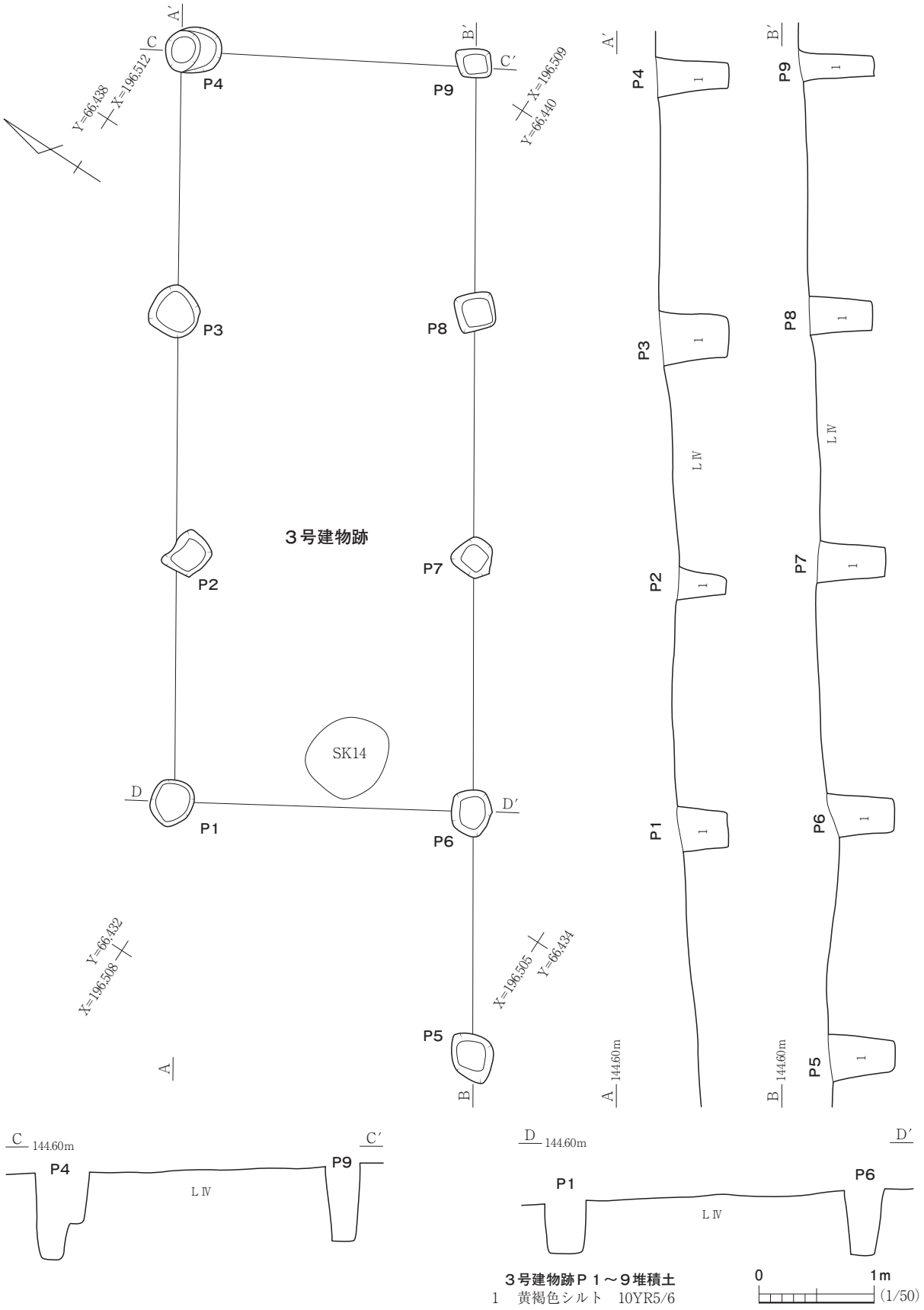

A′
C
P4
B′
C′
P9
Y=66.438
X=196.512
X=196.509
Y=66.440
P3
P8
３号建物跡
P2
P7
SK14
D
P1
D′
P6
Y=66.432
X=196.508
X=196.505
Y=66.434
P5
A
B
A′
P4
1
P3
1
LⅣ
P2
1
P1
1
A 144.60m
B′
P9
1
P8
1
LⅣ
P7
1
P6
1
P5
1
B 144.60m
C 144.60m
P4
LⅣ
P9
C′
D 144.60m
P1
LⅣ
P6
D′
３号建物跡Ｐ１～９堆積土
1　黄褐色シルト　10YR5/6
0
1m
(1/50)

図７　３号建物跡

芯心の長さは8.64ｍ(約28.5尺)となっている。

各柱穴の柱間の寸法は、北側では、Ｐ１・２間が2.12ｍ(約７尺)、Ｐ２・３間が2.14ｍ(約7.1尺)、Ｐ３・４間が2.28ｍ(約7.5尺)、南側では、Ｐ５・６間が2.12ｍ(約７尺)、Ｐ６・７間が2.22ｍ(約7.3尺)、Ｐ７・８間が2.15ｍ(約7.1尺)、Ｐ８・９間が2.15ｍ(約7.1尺)である。梁行は東西とも柱穴は２本だが、南側のＰ５のみ単独である。Ｐ１・６間が2.6ｍ(約8.6尺)、Ｐ２・７間が2.49ｍ(約8.2尺)、Ｐ３・８間が2.61ｍ(約8.6尺)、Ｐ４・９間が2.56ｍ(約8.4)尺で、Ｐ２・７間がわずかに狭い。

各柱穴の平面形は、方形または隅丸方形で、一辺20～30㎝前後、検出面からの深さは、Ｐ１・２が約40㎝と他に比べ浅く、Ｐ３～９は56～62㎝である。

各柱穴の堆積土はいずれも黄褐色シルトの単層で、柱が抜き取られた後に自然に埋没したものと推定される。また、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、尾根の方向に桁行の軸線を合わせた掘立柱建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密には特定できないが、城館跡を構成する建物跡と推測される。（鶴　見）

10号土坑　ＳＫ10（図８、写真13）

本遺構は、調査区南部のＪ26グリッドで検出した、２号平場の東端部に立地する土坑である。重複する遺構はなく、検出面はＬⅣである。

平面形は楕円形である。規模は、東西の長さが1.9ｍ、南北の長さが1.52ｍ、検出面からの深さが最大0.94ｍである。底面は、中央付近がやや窪んでいる。底面の高さは、２号平場の下段にある平場Ｂの高さとほぼ一致している。平場の端部に掘られているため、東壁の立ち上がりは殆ど確認されない。西壁は地山に含まれる花崗岩が露出している。また、北・南の周壁は中段付近で傾斜が変わっている。

堆積土は４層に分層した。いずれも自然堆積土と判断している。遺物は出土していない。

本遺構は、時期や具体的な性格については不明だが、平場の端部に掘られていることから、城館跡に伴う遺構の可能性もある。（鶴　見）

13号土坑　ＳＫ13（図８、写真13）

本遺構は、２号平場中央部のＨ26グリッドで検出した土坑である。重複する遺構はなく、検出面はＬⅣ上面である。

平面形は円形である。検出面での規模は、東西の長さが1.08ｍ、南北の長さが１ｍ、検出面からの深さが0.41ｍである。下部が袋状に抉れていて、底面では南北1.14ｍ、東西1.15ｍと、検出面よりも規模が大きい。

堆積土は黄褐色シルトを基調とする自然堆積土である。遺物は出土していない。

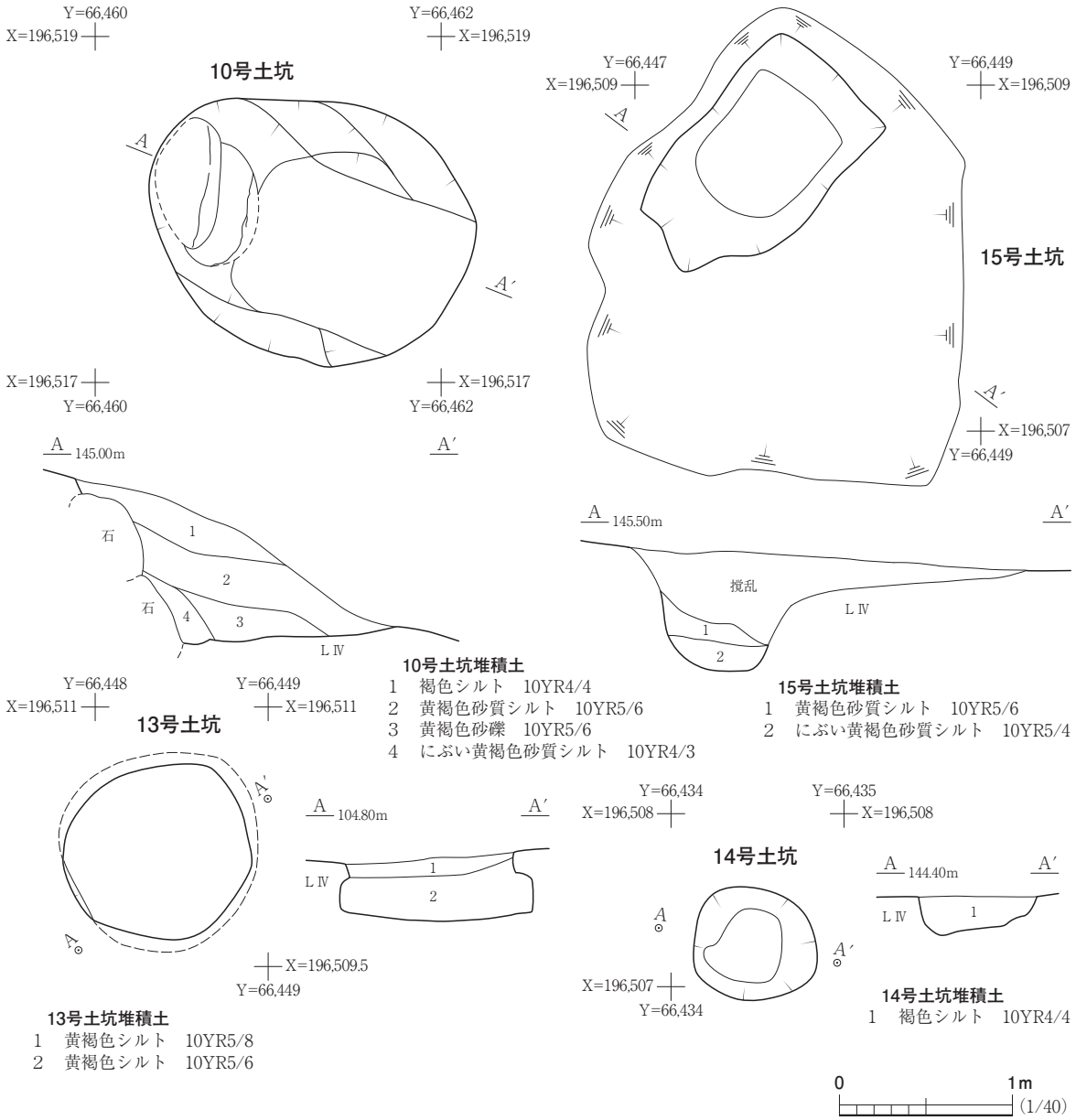


図８　10・13～15号土坑

本遺構の時期や具体的な性格については不明だが、堆積土が３号建物跡と近似することから、城館跡に関連する土坑の可能性もある。　（鶴　見）

14号土坑　ＳＫ14（図８）

本遺構は、２号平場西部のＧ27グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。

平面形は円形である。規模は、東西の長さが71㎝、南北の長さが66㎝、検出面からの深さが22㎝である。底面は掘り込みの浅い東から西に向かって傾斜している。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（鶴　見）

15号土坑　ＳＫ15（図８）

本遺構は、２号平場中央部のＨ26グリッドで検出した土坑である。重複する遺構はないが、遺構の上部は撹乱により壊されている。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は不整な長方形である。遺存する上端部では、長軸の長さが1.44ｍ、短軸の長さが0.86ｍ、検出面からの深さが0.68ｍである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。

堆積土は４層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。遺物は出土していない。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（鶴　見）

５号溝跡　ＳＤ５

遺　　構（図９、写真７）

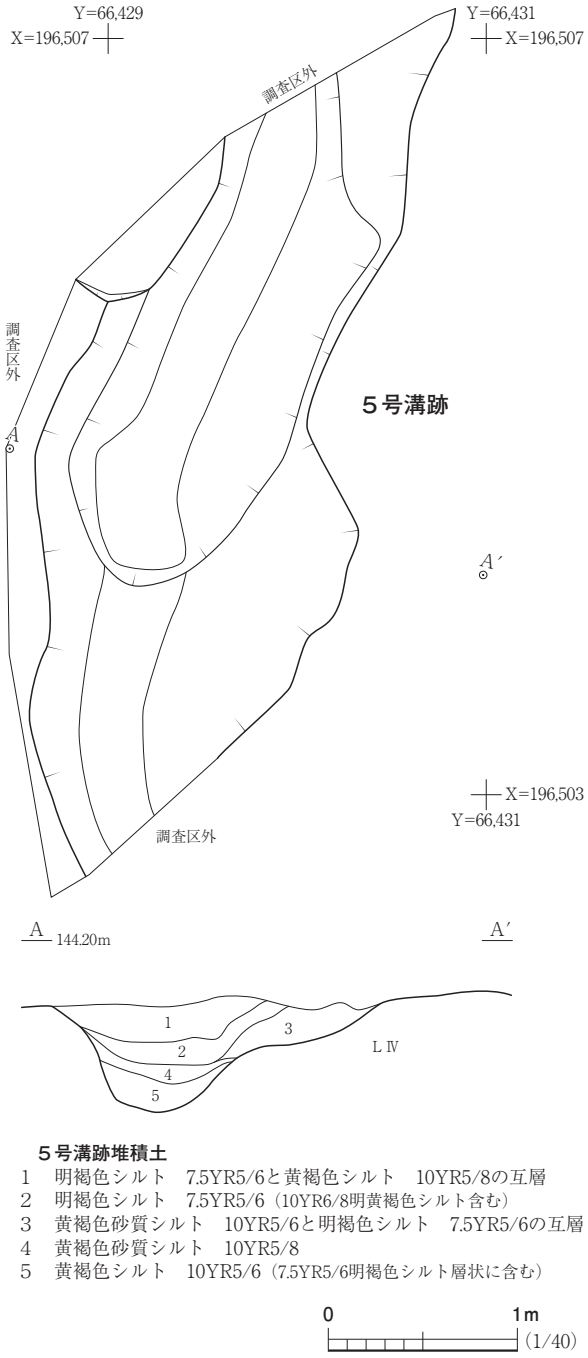
本遺構は、調査区南端のＦ27グリッド、２号平場の西端に立地する溝跡である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。

検出した範囲での規模は、長さ５ｍ、幅は最大で1.71ｍ、検出面からの深さは0.56ｍである。西壁は比較的急角度で立ち上がるが、東壁は検出面から中段付近にかけて、テラス状に傾斜が緩くなっている箇所がある。底面は平坦ではなく、細かな凹凸が多数認められる。また、底面は北側の谷部に向かって傾斜している。

堆積土は５層に分層した。ℓ１・３は黄褐色シルトまたは黄褐色砂質シルトと明褐色シルトが交互に堆積し、ℓ５は黄褐色シルト中に明褐色シルトが層状に含まれている。ℓ２は明褐色シルトと明黄褐色シルトの混土である。これらの層はいずれも固くしまっており、堆積土の状態から人為堆積土と判断した。ℓ４は均質な黄褐色砂質シルトで、自然堆積土とみられるが、土は固くしまるため、人為堆積土の可能性もある。いずれの層からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、平場が形成された尾根の突端付近



５号溝跡堆積土
1　明褐色シルト　7.5YR5/6と黄褐色シルト　10YR5/8の互層
2　明褐色シルト　7.5YR5/6（10YR6/8明黄褐色シルト含む）
3　黄褐色砂質シルト　10YR5/6と明褐色シルト　7.5YR5/6の互層
4　黄褐色砂質シルト　10YR5/8
5　黄褐色シルト　10YR5/6（7.5YR5/6明褐色シルト層状に含む）

図９　５号溝跡

で検出された溝跡とした。ただし、その立地や、尾根北側の谷部に向かって傾斜する形状、底面に認められる多数の凹凸、そして固くしまった人為堆積土が何層かに重なっていること等から、本遺構は道跡の可能性が高い。道跡とすれば、２号平場への進入口と想定される。

遺構の所属時期については、出土遺物がなく、厳密には特定できないが、城館跡に伴うものと判断している。（鶴　見）

小　　穴（図10）

２号平場で確認した小穴は15基である。一定間隔で並ばないため、建物跡として認識することはできなかった。小穴は平場上に散在しているが、尾根の突端部付近に比較的多いことから、門あるいは柵・塀といった施設の柱穴の可能性がある。堆積土はいずれも黄褐色シルトの単層で、明瞭な柱痕は確認できなかった。出土遺物がなく、遺構の所属時期を厳密には特定できないが、堆積土が３号建物跡と近似することから城館跡に伴うものと判断している。（鶴　見）

４号平場（図11、写真８）

４号平場は、調査区南部のＩ24・25、Ｈ24グリッドに位置する。北に５号平場、南に２号平場が隣接している。平場は尾根に沿った南北に長い形状で、南北の長さは10ｍ、東西の幅は、先端部で2.7ｍ、基部で7.5ｍである。東斜面側は中央付近で幅が狭くなっている。平場は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、２号平場の基部との比高は１～２ｍ、５号平場との比高は１ｍ程である。２・５号平場との境界は明瞭であり、意図的につくり出した形状と判断しているが、本平場西部は近世の神社建築に伴う造成等により削られている可能性がある。なお、本平場に伴う施設はない。（鶴　見）

５号平場（図11）

５号平場は、調査区南部のＩ24、Ｊ24グリッドに位置する。北に６号平場、南に４号平場が隣接している。東西に長い平場で、東西の長さは12.5ｍ、南北の長さは2.5ｍだが、東部では幅１ｍ前後で北に延びており、東側斜面の10号平場に続いている。また、本平場南西部は近世の神社建築に伴う造成等により削られている可能性がある。４号平場との比高は１ｍ前後、６号平場との比高は２ｍ前後である。なお、本平場に伴う施設はない。（鶴　見）

６号平場（図12）

６号平場は、調査区中央付近のＩ23、Ｊ23グリッドに位置する。北に７号平場、南に５号平場が隣接している。東西方向に長い平場で、東西の長さは10ｍ、南北の長さは2.5～５ｍで、５号平場との比高は２ｍ前後、７号平場との比高は１ｍ程である。東部は平坦で、斜面部との傾斜変換線を明瞭に認識できるが、西部はあまり明瞭ではない。（鶴　見）

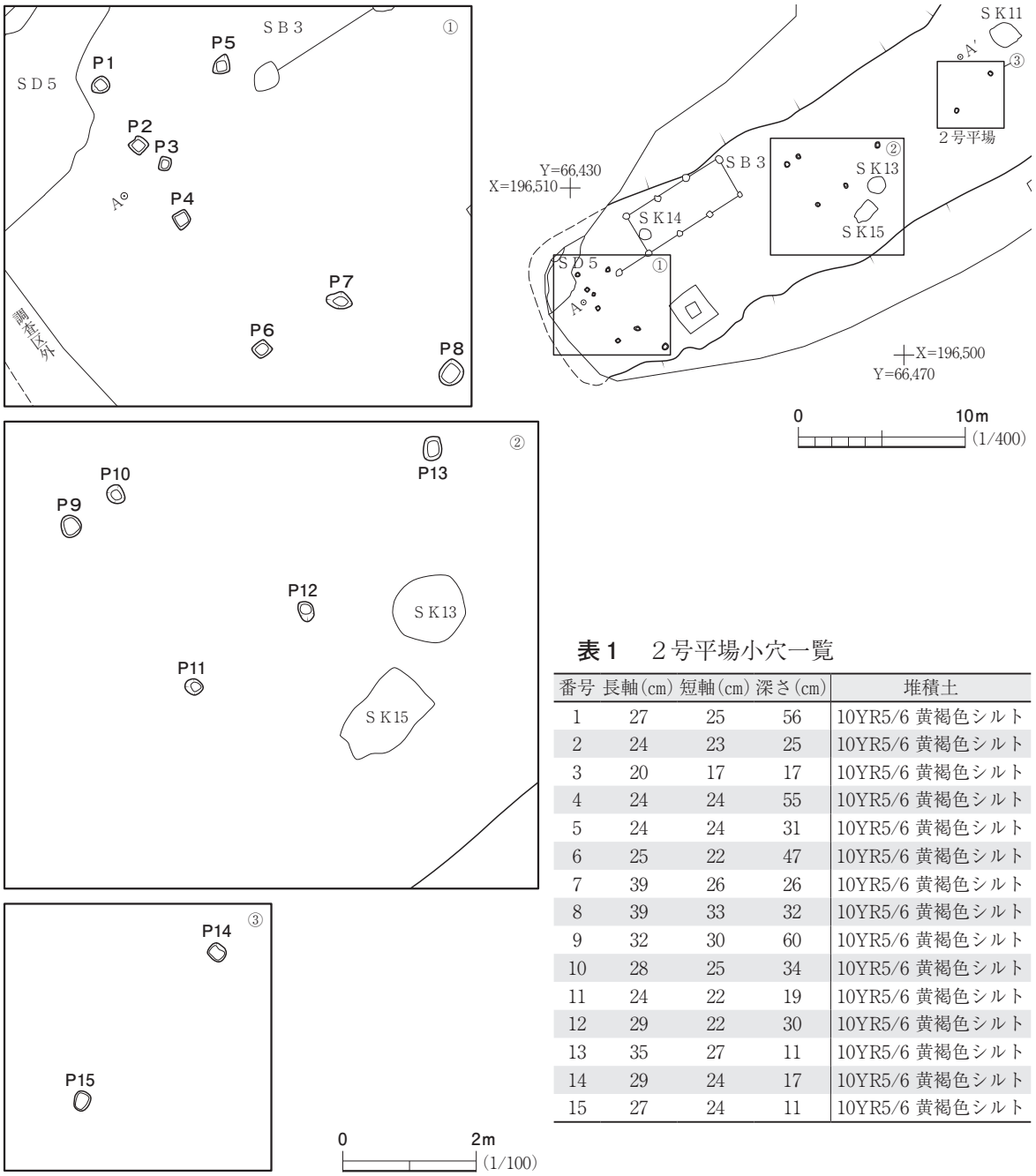


図10　２号平場小穴

表１　２号平場小穴一覧

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土
1	27	25	56	10YR5/6 黄褐色シルト
2	24	23	25	10YR5/6 黄褐色シルト
3	20	17	17	10YR5/6 黄褐色シルト
4	24	24	55	10YR5/6 黄褐色シルト
5	24	24	31	10YR5/6 黄褐色シルト
6	25	22	47	10YR5/6 黄褐色シルト
7	39	26	26	10YR5/6 黄褐色シルト
8	39	33	32	10YR5/6 黄褐色シルト
9	32	30	60	10YR5/6 黄褐色シルト
10	28	25	34	10YR5/6 黄褐色シルト
11	24	22	19	10YR5/6 黄褐色シルト
12	29	22	30	10YR5/6 黄褐色シルト
13	35	27	11	10YR5/6 黄褐色シルト
14	29	24	17	10YR5/6 黄褐色シルト
15	27	24	11	10YR5/6 黄褐色シルト

７号平場（図12、写真９）

７号平場は、平面形は台形である。その規模は、南北の長さが10.5ｍ、東西の幅が基部で9.2ｍ、先端部で３ｍである。北に８号平場、南に６号平場が隣接する。全体的には北から南に向けて緩やかに傾斜しているが、北半部は比較的平坦である。６号平場との比高は１ｍ、８号平場との比高は１～２ｍ程である。本平場の遺構は北半部に集中していて、４号建物跡と小穴が確認されている。また、７・８号平場の境界付近には６号溝跡がある。（鶴　見）

図11　４・５号平場

８号平場（図12、写真９・10）

８号平場は、ほぼ方形で、南北の長さが８ｍ、東西の長さが８～９ｍの規模である。底面の傾斜は北から南に向けて下っている。８号平場の下位にあたる７号平場の底面との比高は１～２ｍ、上段にあたる９号平場との比高は１ｍ程である。本平場では小穴が確認されている。また、本平場と７号平場との境界には６号溝跡、９号平場との境界付近には７号溝跡がある。　（鶴　見）

９号平場（図12、写真９・10）

９号平場は、長さは中軸線上で7.5ｍ、幅は基部で14ｍ、突端部で７ｍで、平面形は、台形に近い。北側上段には14号平場、南側下段には８号平場が隣接する。８号平場との比高は１ｍ、14号平場との比高は１ｍである。本平場では小穴が確認されている。また８・14号両平場との境に、

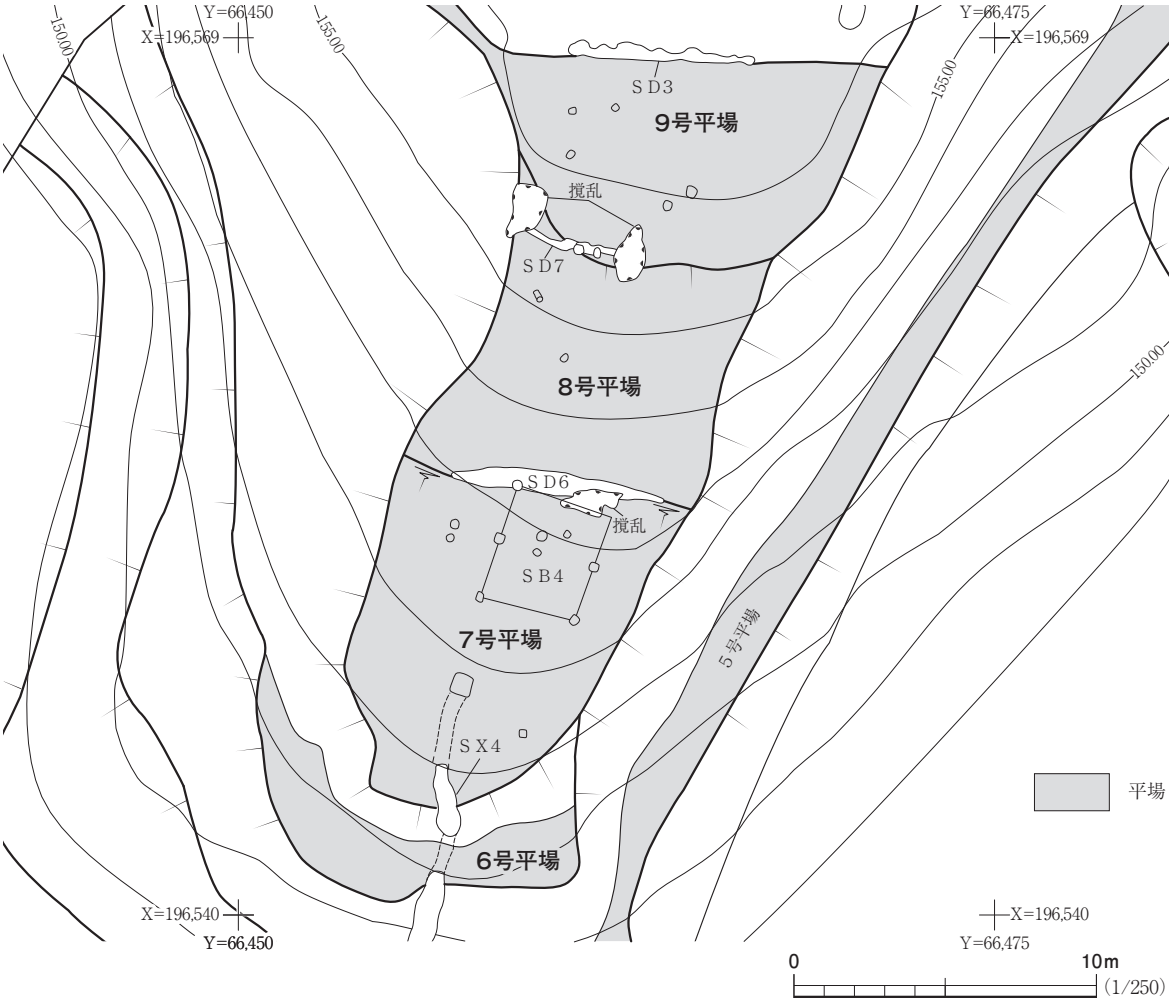


図12　６～９号平場

それぞれ７号溝跡、３号溝跡がある。　（鶴　見）

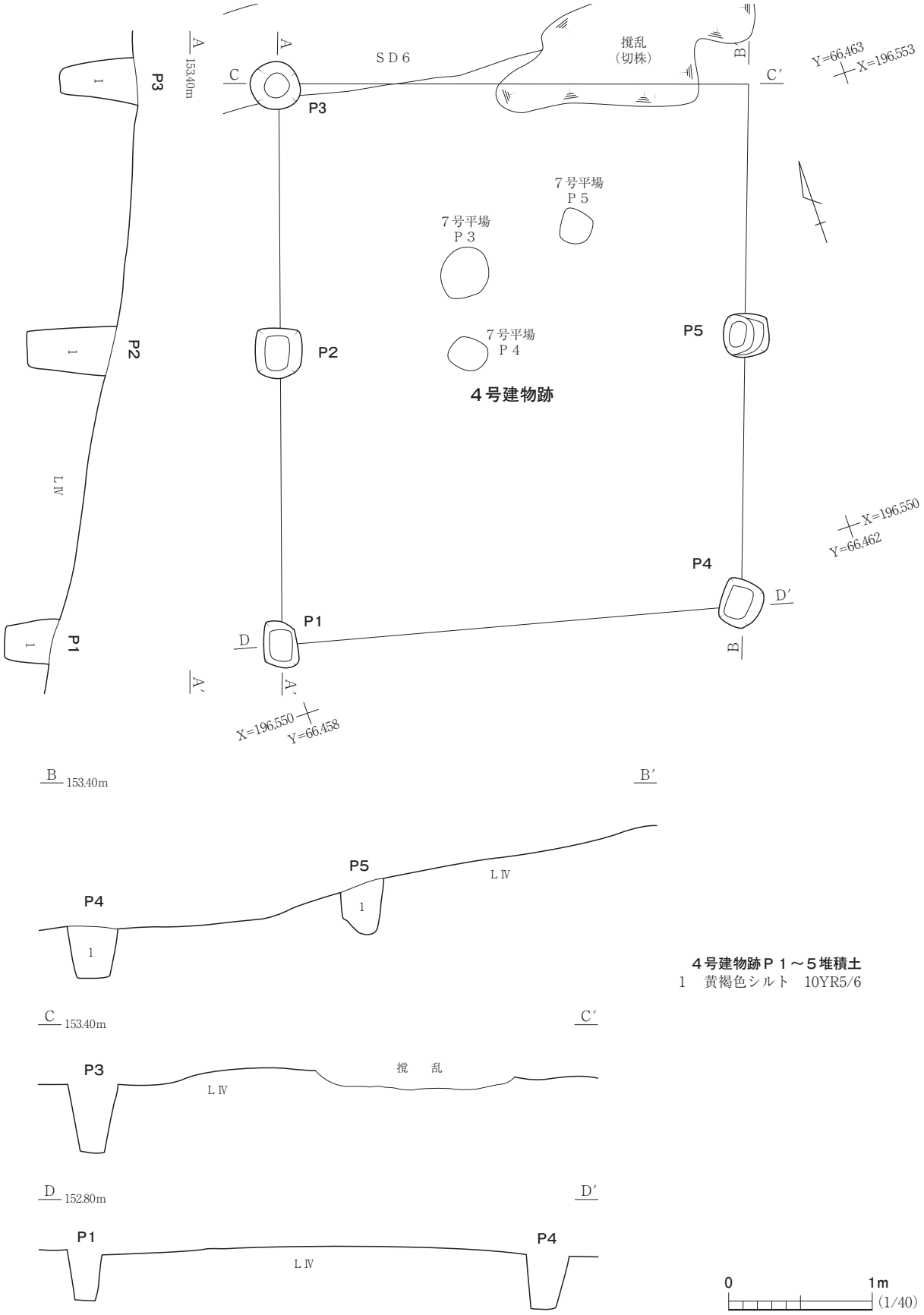
４号建物跡　ＳＢ４

遺　　構（図13）

本遺構は、７号平場の北半部で検出した掘立柱建物跡である。Ｉ22、Ｊ22グリッドに位置し、検出面はＬⅣ上面である。Ｐ３は６号溝跡の堆積土を除去した段階で検出されたため、６号溝跡より本遺構の方が古いと判断した。

建物跡の主軸方向は、尾根の向きとほぼ同じである。２間×１間の建物跡だが、北東隅の柱穴は検出されなかった。桁行は、西側が３個、東側が２個の柱穴で構成されている。西側の桁行は3.9ｍ（約12.9尺）、東側は1.85ｍ（約6.1尺）、梁行はＰ１・４間で3.2ｍ（約10.6尺）、Ｐ２・５間で3.17ｍ（約10.5尺）である。Ｐ１・２間の長さは2.04ｍ（約6.7尺）、Ｐ２・３間は1.86ｍ（約6.1尺）である。

各柱穴の平面形は、方形を基調とするが、Ｐ３のみ円形を呈する。方形のもので一辺20～30㎝前後、Ｐ３は直径35㎝である。検出面からの深さは、35～60㎝である。



A
153.40m
A
C
SD6
P3
P3
撹乱
（切株）
B′
C′
Y=66,463
X=196,553
7号平場
P5
7号平場
P3
7号平場
P4
P2
P2
P5
4号建物跡
LⅣ
X=196,550
Y=66,462
P4
D′
P1
P1
D
B
A′
A′
X=196,550
Y=66,458
B
153.40m
B′
P5
LⅣ
P4
1
4号建物跡Ｐ１～５堆積土
1　黄褐色シルト　10YR5/6
C
153.40m
C′
P3
撹　乱
LⅣ
D
152.80m
D′
P1
P4
LⅣ
0
1m
(1/40)

図13　４号建物跡

各柱穴の堆積土はいずれも黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。また、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、尾根の方向に桁行の軸線を合わせた掘立柱建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密には特定できないが、城館跡を構成する建物跡と推測される。（鶴　見）

６号溝跡

遺　　構（図14、写真10）

本遺構は、Ｉ22、Ｊ22グリッドで検出した溝構で、７号平場と８号平場の境界付近に立地する。検出面はLⅣ上面である。４号建物跡のＰ３と重複していて、本遺構の方が新しい。

東西に延びる溝跡で、東西7.06ｍ、幅は中央付近で最大0.8ｍであり、両端部では狭くなる。検出面からの深さは最大で20㎝で、中央部が深く、両端では浅い。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は斜面上位からの流入土、ℓ２は流入土と壁の崩落土が混在した層である。

遺　　物（図14、写真15）

本遺構からは須恵器が１点出土している。図14－１は甕の破片で、外面に平行タタキ目が観察できる。詳細な時期は不明だが、１・２次調査区でも古代の土師器が数点出土していることから、古代の所産と推測される。

ま と め

本遺構は、７号平場と８号平場の境界付近にあり、両平場を区画する意図を持った溝跡と考えられることから、城館跡が機能していた時期の遺構と判断した。また、８号平場に傾斜があることから、斜面上方から流れてくる水を排水する機能も想定される。（鶴　見）

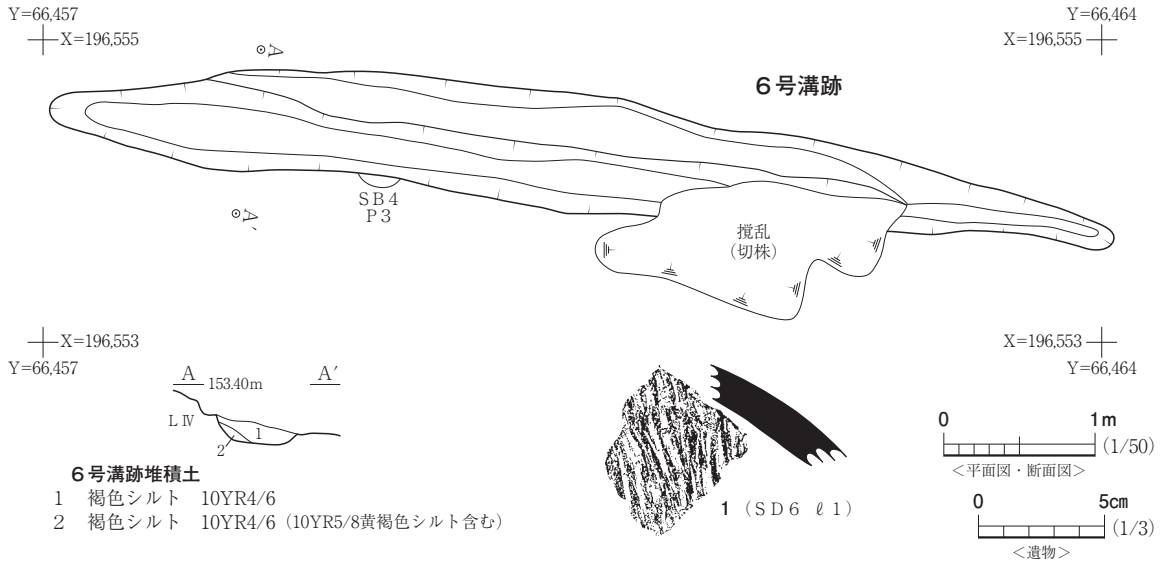


図14　６号溝跡・出土遺物

７号溝跡

遺　　構（図15）

本遺構は、Ｉ21、Ｊ21グリッドで検出した溝跡で、８号平場と９号平場との境界付近にある。検出面はＬⅣ上面である。８号平場のＰ１・２と重複し、本遺構の方が古い。

溝跡は東西方向に延びているが、両端は木の根による撹乱を受けているため、全体の規模や形状は不明である。確認した範囲では、長さが3.05ｍ、幅が20～40㎝で、中央付近がやや広い。検出面からの深さは５㎝前後と浅い。ただ、後世の土砂の流出、あるいは検出時に少し下げ過ぎてしまった可能性もあり、もともとはこれより深い溝跡であった可能性もある。また、遺構の西側は斜面になっているため、西側には延びていなかったとみられるが、東側には撹乱よりもさらに先まで延びていたと推測される。

堆積土は黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、８号平場と９号平場の境界付近にあり、両平場を区画する意図を持った溝跡と考えられることから、城館跡が機能した時期の遺構と判断している。また、斜面上方から流れてくる水の排水といった機能が想定される。（鶴　見）

小　穴（図16・17）

７～９号平場にかけては、７号平場で６基、８号平場で４基、９号平場で５基の、計15基の小穴を検出した。平面形は方形または隅丸方形で、小さなもので一辺15×25㎝、大きなもので30×30㎝ほどの規模である。

７号平場では、６基のうち５基が平場の北半に集中する。Ｐ１～４は一連の遺構の可能性も想定

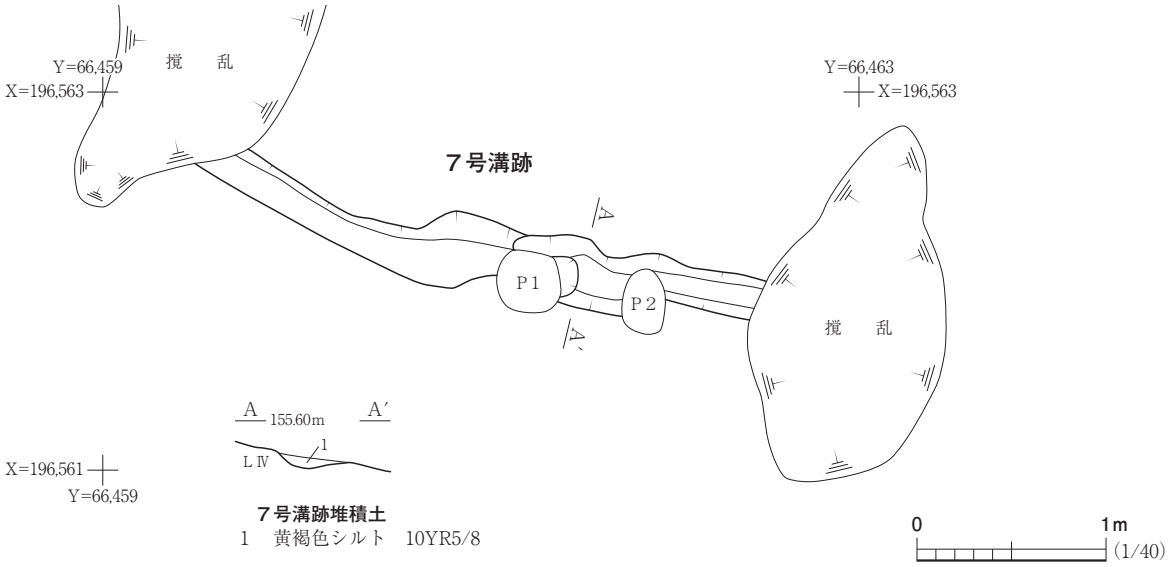
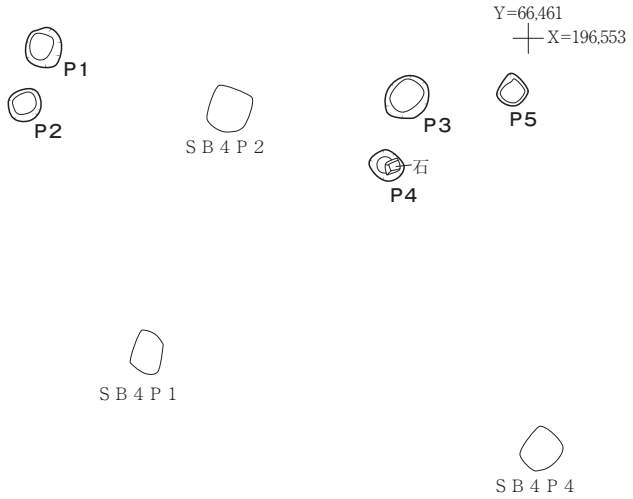


図15　７号溝跡



したが、南北の間隔が狭すぎると判断して、個別の遺構名称は付けなかった。

８号平場では、平場の北西部に小穴が点在する。Ｐ１・２は７号溝跡と重複していて、いずれも７号溝跡よりも古い。

９号平場では、平場の西寄りに小穴が点在する。直角に並ぶＰ１～３は、柱間が1.4ｍ前後と同程度の長さであり、一連の遺構の可能性もあるが、確認した他の建物跡や柱列跡に比べ、柱間が狭いため、個別の遺構名称は付けなかった。

７～９号平場の各小穴の堆積土は、いずれも黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。なお、各小穴から遺物は出土していない。　（鶴　見）

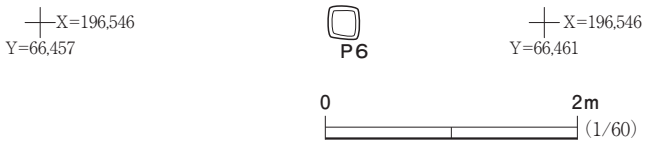


図16　７号平場小穴

表２　７号平場小穴一覧

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土
1	32	29	59	10YR5/8 黄褐色シルト
2	27	25	44	10YR5/6 黄褐色シルト
3	36	32	63	10YR5/6 黄褐色シルト
4	25	22	34	10YR5/6 黄褐色シルト
5	23	21	37	10YR5/6 黄褐色シルト
6	26	25	18	10YR5/6 黄褐色シルト

14号平場（図18）

２次調査で確認していたが、平場の番号を付していなかったため、３次調査の成果を踏まえて14号平場とした。本平場の北側上段に15号平場、南側下段に９号平場、東側下段に10号平場がある。15号平場との比高は１ｍ、９号平場との比高は１ｍ、10号平場との比高は３ｍ程である。南北に長い不整形を呈し、規模は、先端部での東西幅10ｍ、最大幅19.2ｍ、南北長は中軸線上で15ｍ、東部で最大35.8ｍである。２号建物跡、５・６号柱列跡、４号溝跡、小穴が本平場に伴うと考えている。　（鶴　見）

15号平場（図18）

２次調査で確認していたが、平場の番号を付していなかったため、３次調査の成果を踏まえて15号平場とした。平面形は台形に近いが、南端部がやや突出している。突端部の東西幅は2.5ｍ、基部付近では東西幅18.5ｍ、南北長は中軸線上で14.2ｍである。北側上段に１号平場、南側下段に14号平場、東側下段に13号平場がある。１号平場との比高は１～２ｍ、14号平場との比高は１ｍ、

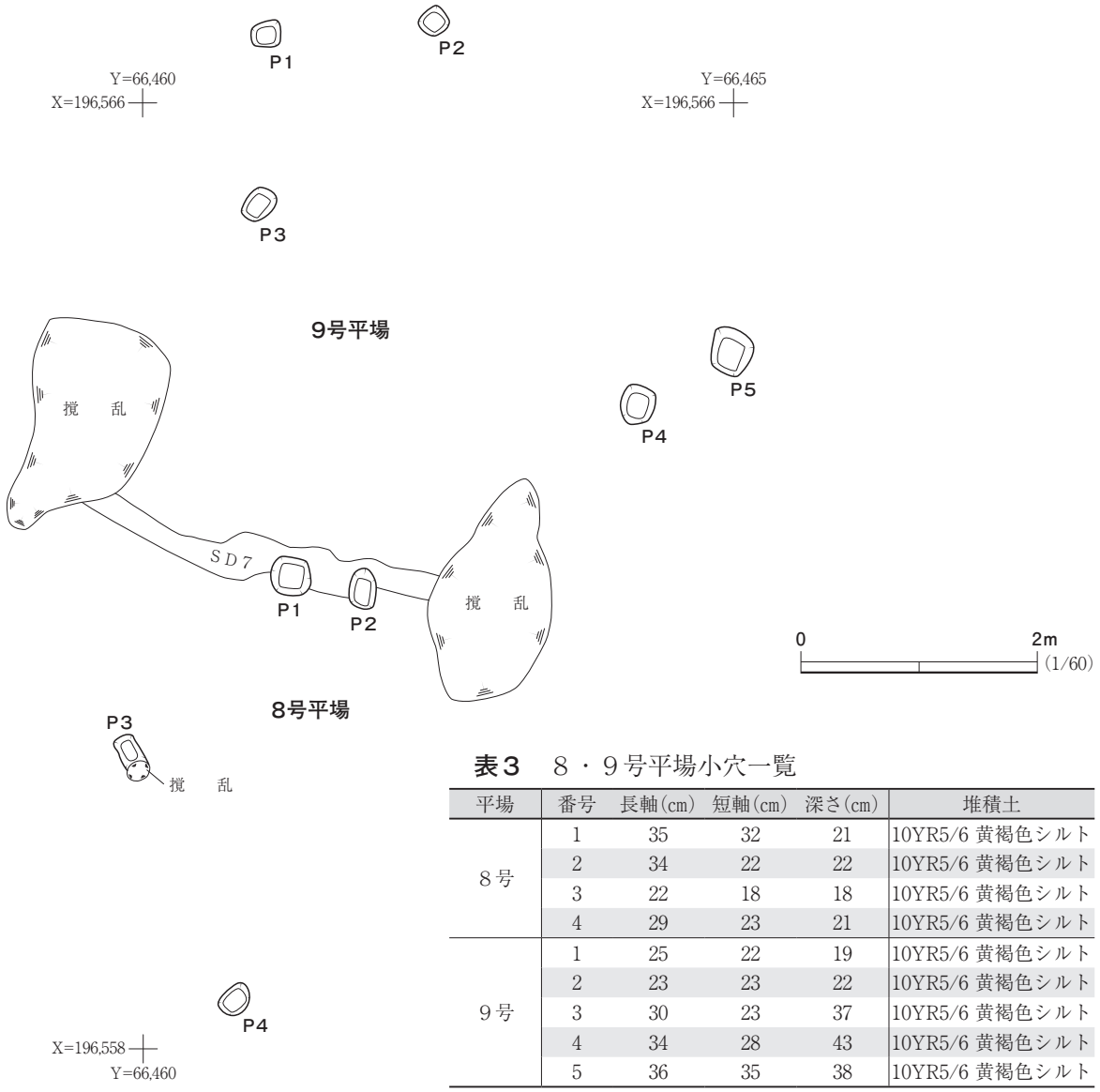


図17　８・９号平場小穴

表３　８・９号平場小穴一覧

平場	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土
８号	1	35	32	21	10YR5/6 黄褐色シルト
	2	34	22	22	10YR5/6 黄褐色シルト
	3	22	18	18	10YR5/6 黄褐色シルト
	4	29	23	21	10YR5/6 黄褐色シルト
９号	1	25	22	19	10YR5/6 黄褐色シルト
	2	23	23	22	10YR5/6 黄褐色シルト
	3	30	23	37	10YR5/6 黄褐色シルト
	4	34	28	43	10YR5/6 黄褐色シルト
	5	36	35	38	10YR5/6 黄褐色シルト

13号平場との比高は６ｍ前後である。本平場に伴う遺構は、１号建物跡と、４・７号柱列跡、小穴14基である。なお、本平場と13号平場との間の斜面に、３・５号柱列跡がある。　（鶴　見）

第３節　西側斜面の平場

３号平場（図19）

調査区西部のＨ24グリッドに位置する平場である。南向きに傾斜する斜面中腹につくられた幅の狭い平場で、規模は東西の長さが６ｍ、南北の幅が最大で2.7ｍである。調査区内で確認された平場では西側斜面で検出した唯一の平場である。また、３号平場に伴う遺構は確認されなかった。他の平場との関連についても判然としないが、斜面を削って平坦な面をつくり出していることは明瞭であり、城館跡に伴うものと判断している。　（鶴　見）

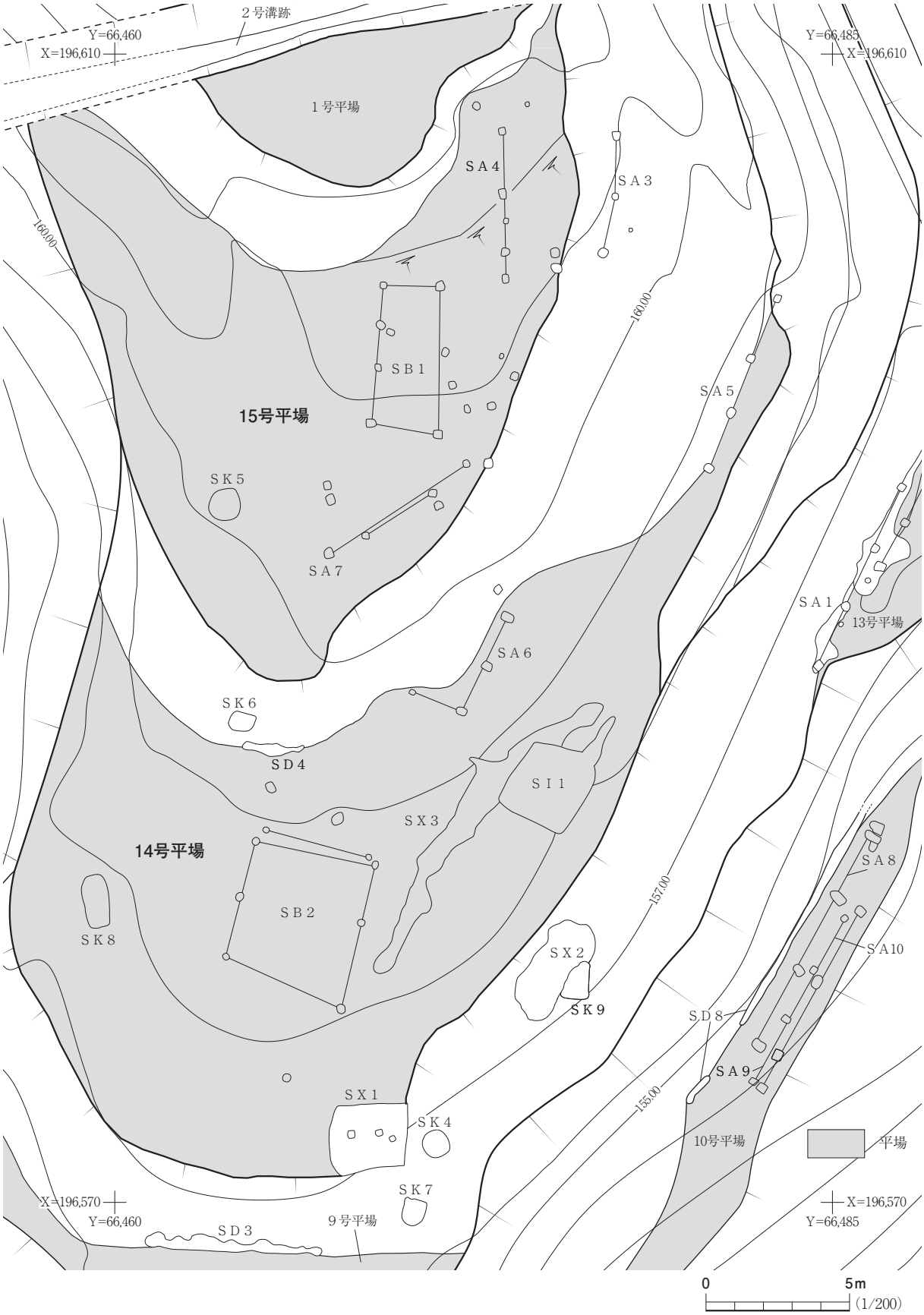

２号溝跡
Y=66,460
X=196,610
Y=66,485
X=196,610
１号平場
ＳＡ４
ＳＡ３
160.00
ＳＢ１
15号平場
ＳＡ５
ＳＫ５
ＳＡ７
ＳＡ１
13号平場
ＳＡ６
ＳＫ６
ＳＤ４
ＳＩ１
ＳＸ３
14号平場
ＳＡ８
157.00
ＳＢ２
ＳＫ８
ＳＡ10
ＳＸ２
ＳＫ９
ＳＤ８
ＳＡ９
ＳＸ１
155.00
ＳＫ４
10号平場
平場
ＳＫ７
X=196,570
Y=66,460
ＳＤ３
９号平場
X=196,570
Y=66,485
0
5m
(1/200)

図18　14・15号平場

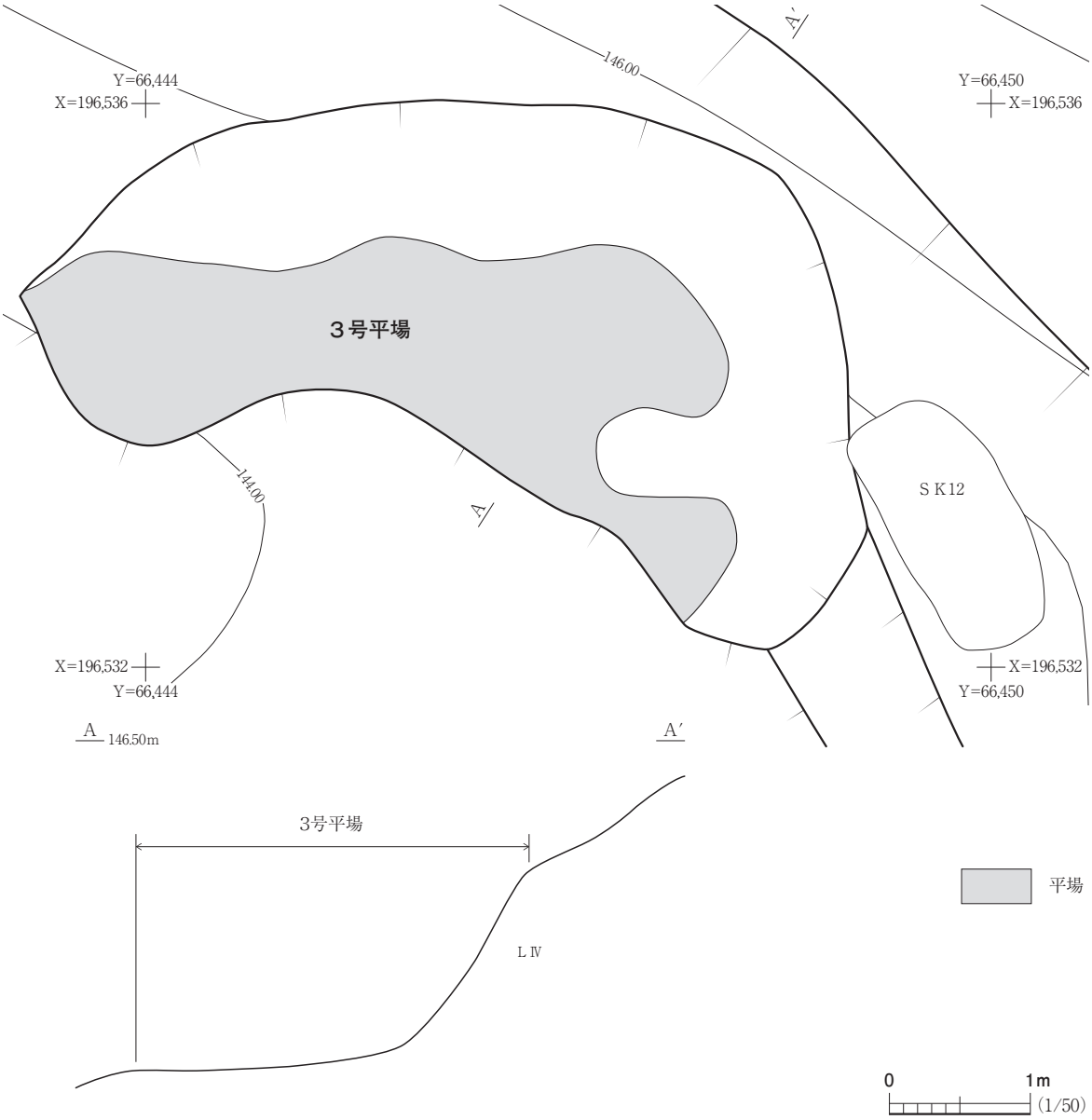


図19　３号平場

第４節　東側斜面の平場とその遺構

東側斜面では、２次調査で１箇所、３次調査で３箇所、計４箇所の平場を確認していて、柱列跡が確認できた平場が多い。

10号平場（図20、写真11）

本平場は、調査区中央部よりやや北東寄りのＬ19・20グリッドで検出した平場である。西側上段に14号平場があり、その比高は３ｍ程である。南北方向に長く、明確に確認できた範囲での南北の長さは20ｍ、東西の幅は2.2ｍ前後である。南側は５号平場に続いている。本平場では、８号

溝跡、８～10号柱列跡を確認している。　（鶴　見）

８号溝跡　ＳＤ８

遺　　構（図21、写真11）

本遺構は、調査区北東部のＬ19・20グリッドで検出した溝跡である。斜面部から平坦部（10号平場）に移行する傾斜変換線上に立地している。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。東側に８～10号柱列跡が隣接する。

本遺構は、南部で途切れる箇所があり２箇所に分かれているが、延びる方向や堆積土等が近似することから同一の溝跡と判断した。北部は確認できた範囲で8.56ｍ、幅は場所によって異なり、最小15㎝～最大41㎝の間で推移する。検出面からの深さは浅く、４～８㎝前後である。南部は長さ1.22ｍ、幅20㎝前後で、検出面からの深さは５㎝前後と北部同様に浅い。

堆積土は黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

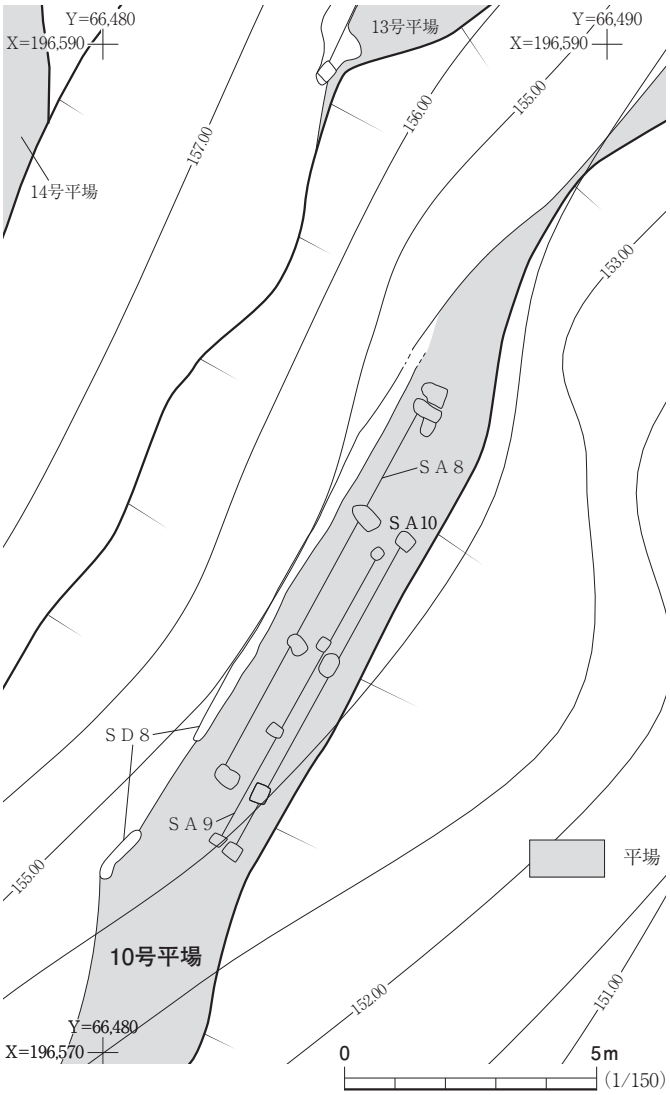


図20　10号平場

ま と め

本遺構は、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地していることから、斜面上方から流れてくる水を排水する機能を持った溝と推定される。12号平場でも同様の位置に溝跡があることから、東側斜面の平場に共通する構造と考えられる。

遺構の所属時期は、出土遺物がないため厳密には特定できないが、隣接する８～10号柱列跡と関連して機能したと想定されることから、15～16世紀前半と推測される。　（鶴　見）

８号柱列跡　ＳＡ８

遺　　構（図21・22、写真11）

本遺構は、調査区北東部のＬ19・20グリッドで検出した柱列跡である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。東側に９・10号柱列跡が、西側に８号溝跡が隣接している。

４個の柱穴から構成され、北から南の

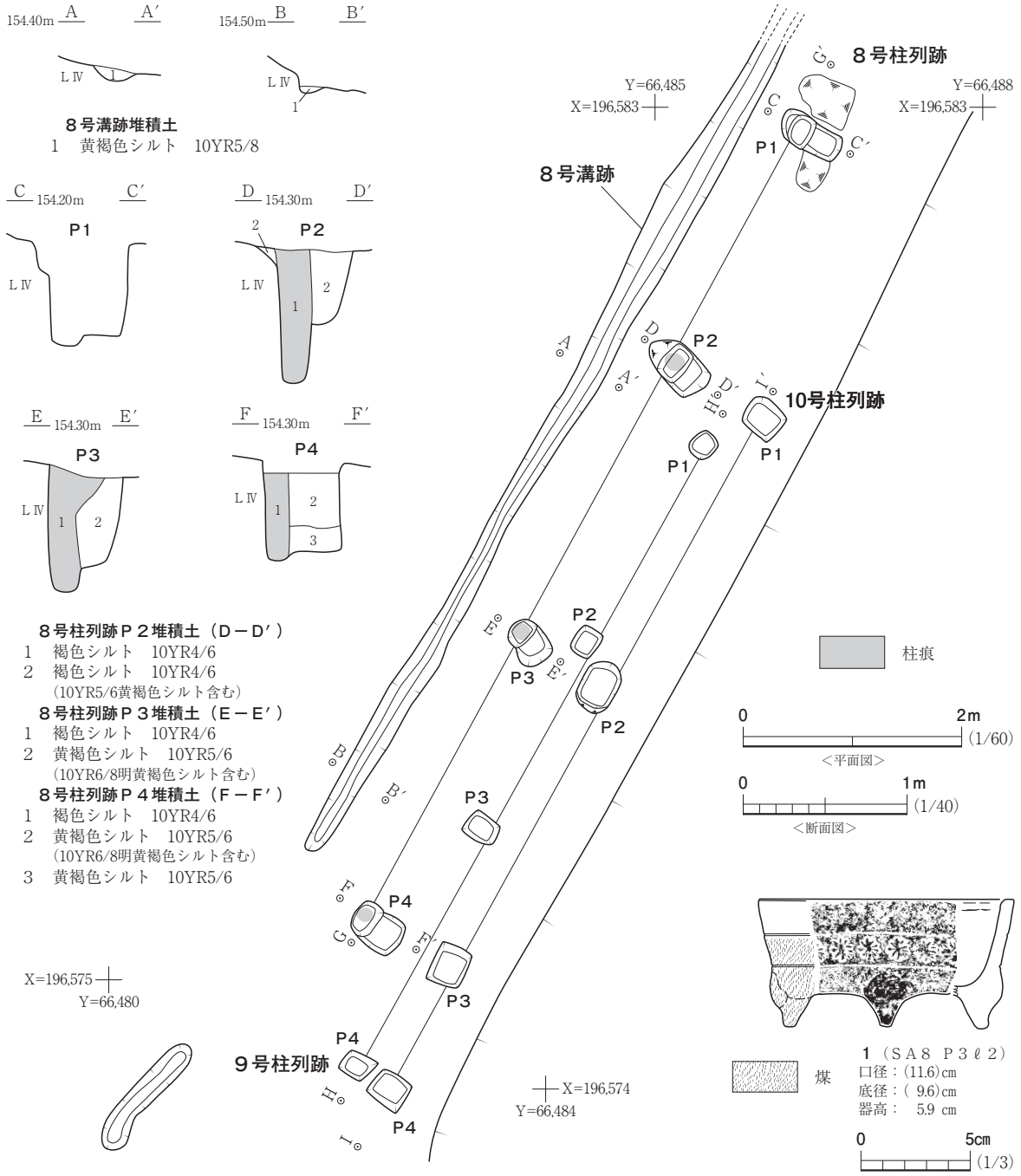


図21　８号溝跡、８～10号柱列跡（１）、８号柱列跡出土遺物

順にＰ１～４と呼称した。Ｐ１～４の総長は8.25ｍ(約27.2尺)である。各柱穴の柱間は、Ｐ１・２間が2.42ｍ(約８尺)、Ｐ２・３間が2.85ｍ(約9.4尺)、Ｐ３・４間が2.98ｍ(約9.8尺)で、Ｐ１・２間が若干狭い。

各柱穴の平面形は長方形に近く、規模は短辺が25～30㎝、長辺が40～60㎝である。検出面からの深さは62～81㎝で、断面形は二段掘り状になっている。

各柱穴の堆積土は、掘り下げている途中で土が崩落して記録できなかったＰ１を除いた３基では柱痕を確認した。柱痕の観察から直径20㎝前後の丸太材が用いられていたと推察できる。

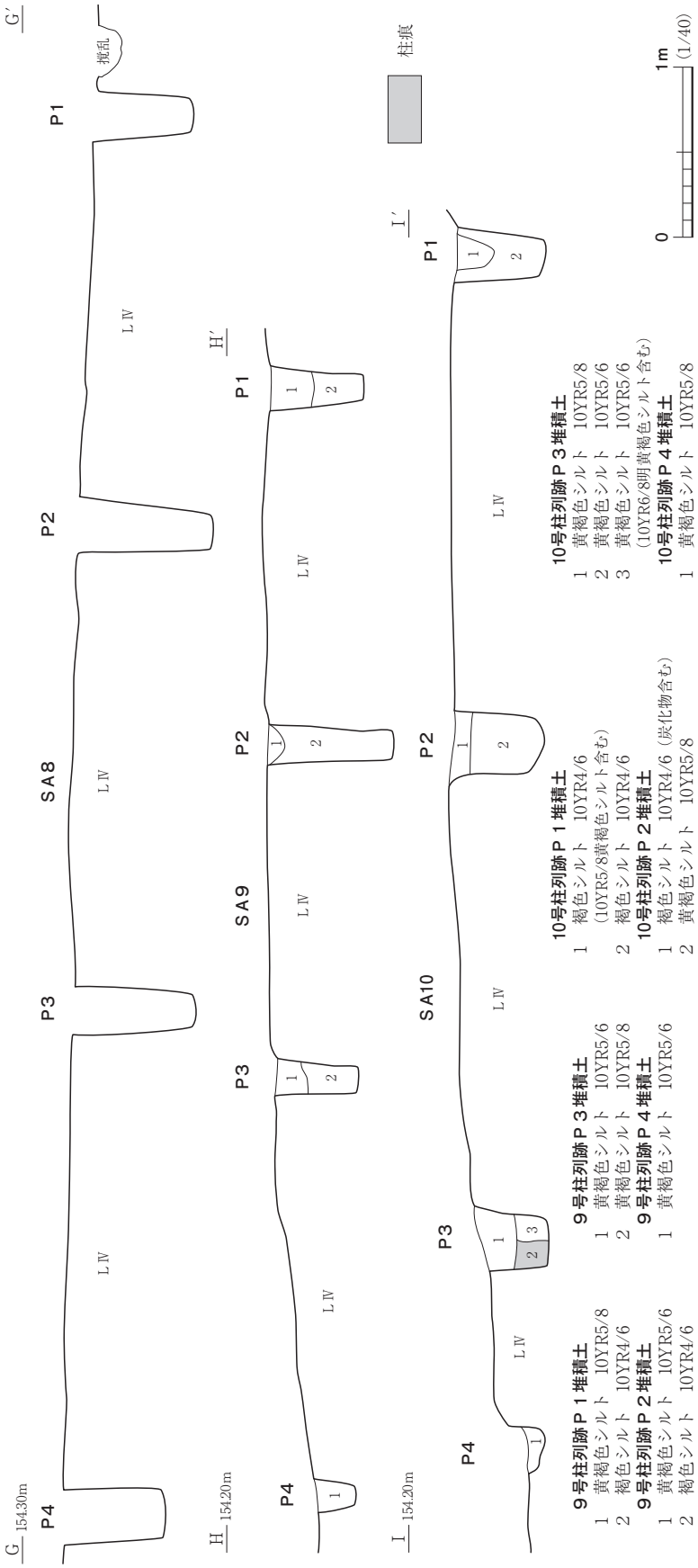


図22　８～10号柱列跡（２）

掘形の堆積土は、褐色シルトまたは黄褐色シルトを基調として、地山のＬⅣに起因する明黄褐色シルトを含んでいる。

遺　　物（図21、写真15）

Ｐ３からは、瓦質土器と鉄滓が出土した。その内、瓦質土器を図示した。図21－１は遺存状況から脚が三脚と判断される香炉である。胴部から口縁部にかけて屈曲はなく、真っ直ぐに立ち上がる。口唇部は広く、平坦に整えられ、内面の口縁部下にわずかに面取りが認められる。脚部は貼り付けである。胴部外面中央部には、沈線で区画された中にスタンプで菊花文が施されている。また、内外面ともに熱を受けたことにより赤色化や、器面の剥落が認められる。外面の胴部から脚部にかけては、煤の付着が観察される。15世紀～16世紀前半のものと考えられる。

ま と め

本遺構は、東向き斜面中腹の平場に構築された柱列跡で、柵または塀等の機能が想定される。本遺構のＰ２～４は、10号柱列跡のＰ１～３と対になるような位置にあることから、何らかの関連も想定された。しかし、10号柱列跡及び並列する８号柱列跡は本遺構との間隔が

狭いため、同時期ではなく、つくり換え等の可能性がある。本遺構の所属時期については、出土遺物から、15世紀～16世紀前半と考えられる。（鶴　見）

９号柱列跡　ＳＡ９

遺　　構（図21・22、写真11）

本遺構は、調査区北東部のＬ19・20グリッドで検出した柱列跡である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。東側に10号柱列跡が、西側に８号柱列跡及び８号溝跡が隣接している。

４個の柱穴から構成され、北から南の順にＰ１～４と呼称した。Ｐ１～４の総長は6.53ｍ（約21.5尺）である。各柱穴の柱間は、Ｐ１・２間が2.1ｍ（約6.9尺）、Ｐ２・３間が1.97ｍ（約6.5尺）、Ｐ３・４間が2.46ｍ（約8.1尺）で、Ｐ３・４間が広い。

各柱穴の平面形は方形で、一辺20～25㎝程の大きさである。検出面からの深さはＰ１は54㎝、Ｐ２は72㎝、Ｐ３は47㎝である。Ｐ４は22㎝と他に比して浅いが、検出時に上部を下げ過ぎてしまった可能性もある。なお、Ｐ１・３・４は底面の標高が153.4ｍ前後で揃っている。

各柱穴の堆積土は、Ｐ４は黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。Ｐ１～３は、２層に分層したが、これらについても黄褐色シルトや褐色シルトが自然に流入したものとみられ、柱痕は確認することができなかった。また、堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東向き斜面中腹の平場に構築された柱列跡で、柵または塀等の機能が想定される。並列する８・10号柱列跡は本遺構との間隔が狭いため、同時期ではなく、つくり換え等の可能性がある。また、８・10号柱列跡に比べ、柱穴が小さい特徴がある。出土遺物はないが、隣接する８号柱列跡と大きな時期差はないと考えられ、15世紀～16世紀前半のものと推測される。（鶴　見）

10号柱列跡　ＳＡ10

遺　　構（図21・22、写真11）

本遺構は、調査区北東部のＬ19・20グリッドで検出した柱列跡である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。西側に８号溝跡と８・９号柱列跡が隣接している。

４個の柱穴から構成され、北から南の順にＰ１～４と呼称した。Ｐ１～４の総長は7.05ｍ（約23.3尺）である。各柱穴の柱間は、Ｐ１・２間が2.87ｍ（約9.5尺）、Ｐ２・３間が2.91ｍ（約9.6尺）、Ｐ３・４間が1.27ｍ（約4.2尺）で、Ｐ３・４間が狭い。

各柱穴の平面形は方形で、一辺30㎝程の大きさだが、Ｐ２は30×50㎝と他に比べ大きい。検出面からの深さはＰ１は52㎝、Ｐ２は53㎝、Ｐ３は43㎝である。Ｐ４は南部では10㎝しか確認できなかったが、遺構検出時に上部を下げ過ぎてしまっている。なお、いずれも底面の標高が153.8ｍ前後で揃っている。

各柱穴の堆積土は、Ｐ４については黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。また、Ｐ１・

２は２層に、Ｐ３は３層に分層した。Ｐ１・２は黄褐色シルトや褐色シルトが自然堆積したものとみられ、柱痕は確認することができなかった。一方、Ｐ３はℓ１が自然堆積土、ℓ２が柱痕、ℓ３を掘形埋土と判断した。各小穴の堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東向き斜面中腹の平場に構築された柱列跡で、柵または塀等の機能が想定される。また、並列する８・９号柱列跡は本遺構との間隔が狭いため、同時期ではなく、つくり換え等の可能性がある。本遺構から遺物は出土していないが、隣接する８号柱列跡と大きな時期差はないと考えられ、15世紀～16世紀前半のものと推測される。（鶴　見）

図23　11・12号平場

11・12号平場
（図23・24、写真12）

11・12号平場は、調査区北東部のM17～19、N17・18グリッドで検出した。西側上段に13・15号平場があり、13号平場とは２～３ｍ、15号平場とは６～８の比高がある。11・12号平場は隣接した平場で、その比高は40～60㎝程である。11号平場は南北に長く、確認した範囲での長さは6.74ｍ、幅は40～70㎝と狭い。本平場に伴う遺構は確認できなかった。

12号平場も南北に長く、確認した範囲での長さは8.64ｍ、幅は3.95ｍである。平場の東部では整地層を確認した。整地層と判断したのはℓ３で、褐灰色を基調とした、しまりのあるシルト層である。層の厚さは20㎝前後で、確認できた範囲の規模は南北3.92ｍ、東西1.71ｍに及ぶ。ℓ３の上面では焼土化した箇所が径20㎝前後

表４　12 号平場小穴一覧

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土
1	26	25	11	10YR5/6 黄褐色シルト
2	35	25	40	10YR5/6 黄褐色シルト
3	23	20	15	10YR5/6 黄褐色シルト
4	23	21	10	10YR5/6 黄褐色シルト
5	45	36	40	10YR5/6 黄褐色シルト

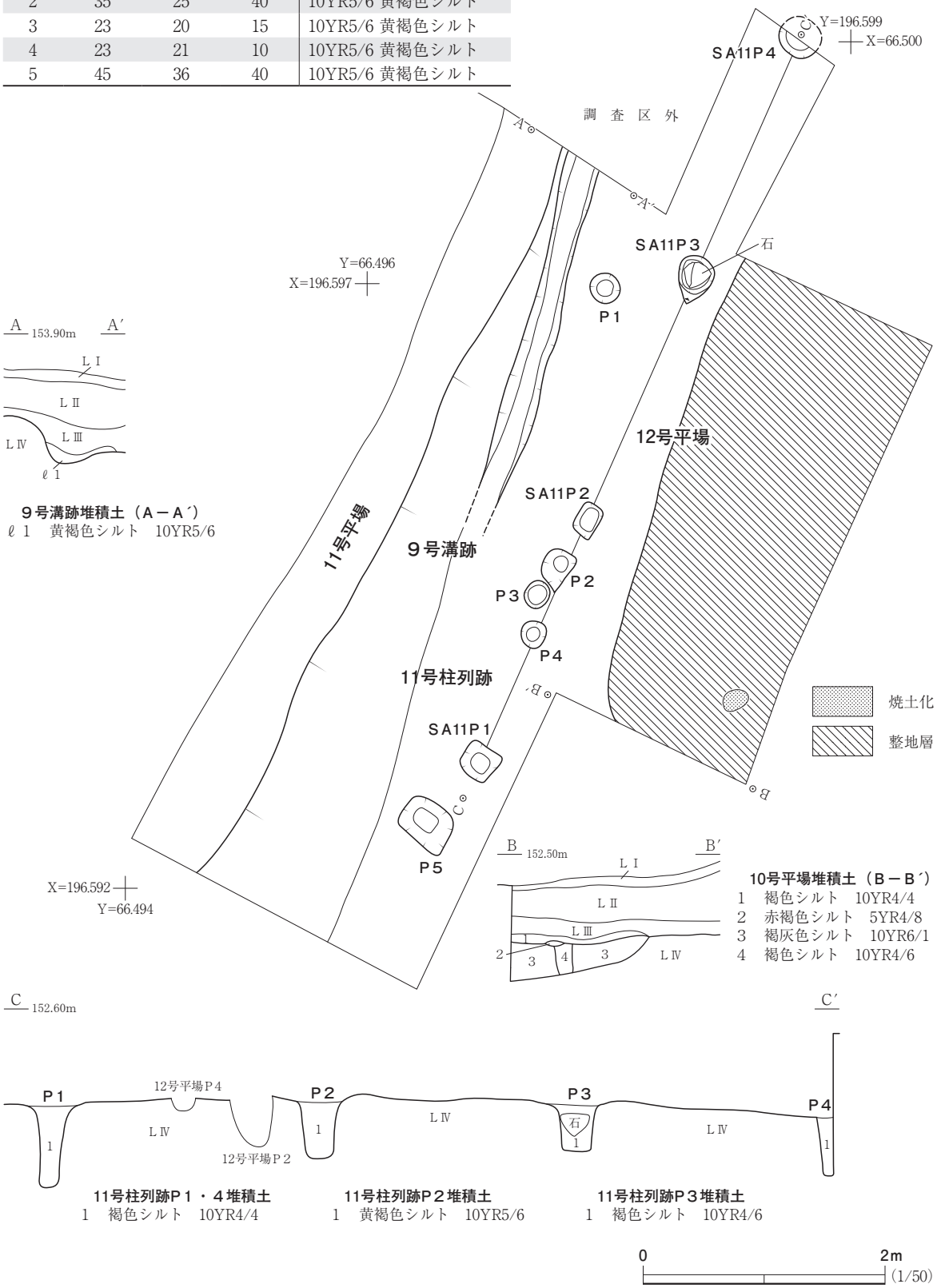


図24　11・12号平場、９号溝跡、11号柱列跡

の範囲で確認された。その0.5ｍ南方でも焼土化した箇所を土層断面で確認したが、平面の広がりは把握できなかった。また、柱穴の可能性がある堆積土（ℓ４）も確認している。なお、12号平場の遺構検出時に15世紀～16世紀前半の土師器鍋片が出土しているため、平場は当該期に使用されていたものと推測される。本平場には９号溝跡、11号柱列跡、小穴を伴う。　（鶴　見）

９号溝跡　ＳＤ９

遺　　構（図24、写真12）

本遺構は、12号平場の北半で検出した溝跡である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。東側に11号柱列跡が隣接して、それと平行している。また、11号平場と12号平場との境に掘られていて、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地する。

溝跡は南北方向に延びていて、確認できた長さは2.8ｍである。平場の南半では確認できなかったが、検出時に上部を下げ過ぎてしまった可能性もある。検出面からの深さは10㎝前後と浅い。

堆積土は黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地すること、そして、この傾斜変換線に沿うようにつくられていることから、斜面上方から流れてきた水を排水する機能が想定される。同様の溝跡は、10号平場でも確認されている。遺構の所属時期については、出土遺物がないため厳密には特定できないが、12号平場が機能した15世紀～16世紀前半と推測される。　（鶴　見）

11号柱列跡　ＳＡ11

遺　　構（図24、写真12）

本遺構は、調査区北東部のＭ18グリッド、12号平場で検出した柱列跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構の柱穴と重複する遺構はないが、Ｐ１とＰ２の軸線上には12号平場のＰ１～３がある。

本遺構は４個の柱穴から構成され、南から北の順にＰ１～４と呼称した。Ｐ１～４の総長は6.56ｍ（約21.7尺）である。各柱穴の柱間の寸法は、Ｐ１・２間が2.20ｍ（約7.26尺）、Ｐ２・３間が2.20ｍ（約7.26尺）、Ｐ３・４間が2.16ｍ（約7.13尺）である。

各柱穴の平面形は歪んだ方形ないし円形を呈する。平面の規模は、Ｐ１・２は一辺20～30㎝前後、Ｐ３・４は径31～40㎝前後となっている。検出面からの深さは、Ｐ１が67㎝、Ｐ２・４が48㎝、Ｐ３が38㎝である。柱穴の底面標高はＰ２・３が151.4ｍ前後なのに対し、Ｐ１・４は151.2ｍ前後と低くなっている。

各柱穴の堆積土は、褐色シルトや黄褐色シルトの単層で、いずれも自然堆積土とみられる。ただ、Ｐ３は堆積土中から長軸25㎝前後の石が見つかったことから、人為堆積土の可能性もある。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東向き斜面の中腹の平場に構築された柱列跡で、柵または塀等の機能が想定される。出土遺物がないため、厳密な所属時期は特定できないが、12号平場が機能した15世紀～16世紀前半と推測される。（鶴　見）

小　　穴（図24、写真12）

12号平場では、５基の小穴を検出した。いずれも11号柱列跡と近接した位置につくられている。これらの小穴は、一定間隔で並ばないものの、11号柱列跡と同様の柵や塀といった施設の柱穴の可能性がある。

平面形は長方形ないし円形を基調とし、最小のＰ３は径20～23㎝、最大のＰ５は一辺36×45㎝の規模である。

各小穴の堆積土は、いずれも黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。なお、各小穴から遺物は出土していない。（鶴　見）

13号平場（図25）

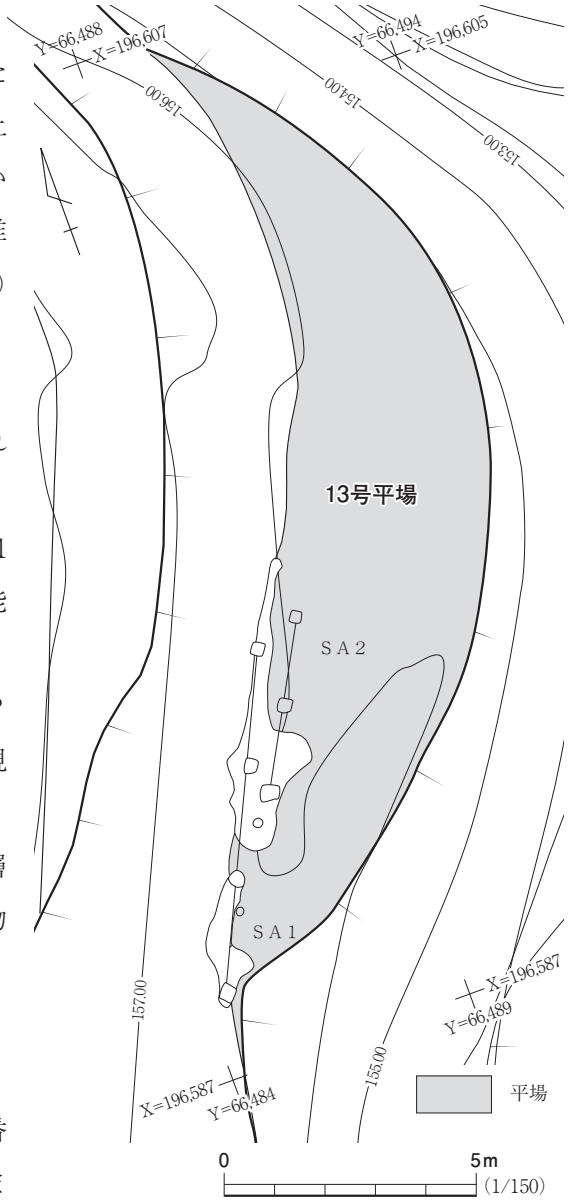


図25　13号平場

本平場は、２次調査で確認していたが、平場の番号を付していなかったため、３次調査の成果を踏まえて、13号平場とした。南北に広い平場で、南北の長さは20m、東西の幅は最大４mほどである。西側上段に15号平場があり、南側の下段には10号平場、東側下段には11・12号平場がある。15号平場との比高は４～５m、10号平場との比高は２m、11・12号平場との比高は２～３mである。本平場には１・２号柱列跡を伴う。（鶴　見）

第５節　その他の遺構

城館跡に伴わないと判断した遺構は、土坑２基、特殊遺構１基である。土坑は、12号土坑が縄文時代の落し穴、11号土坑が近世の土坑と判断した。また、尾根筋に溝状に延びる４号特殊遺構は、２次調査で確認した３号特殊遺構に類似していることから、近世以降の道跡または字限(あざぎり)などの性格のものと想定される。

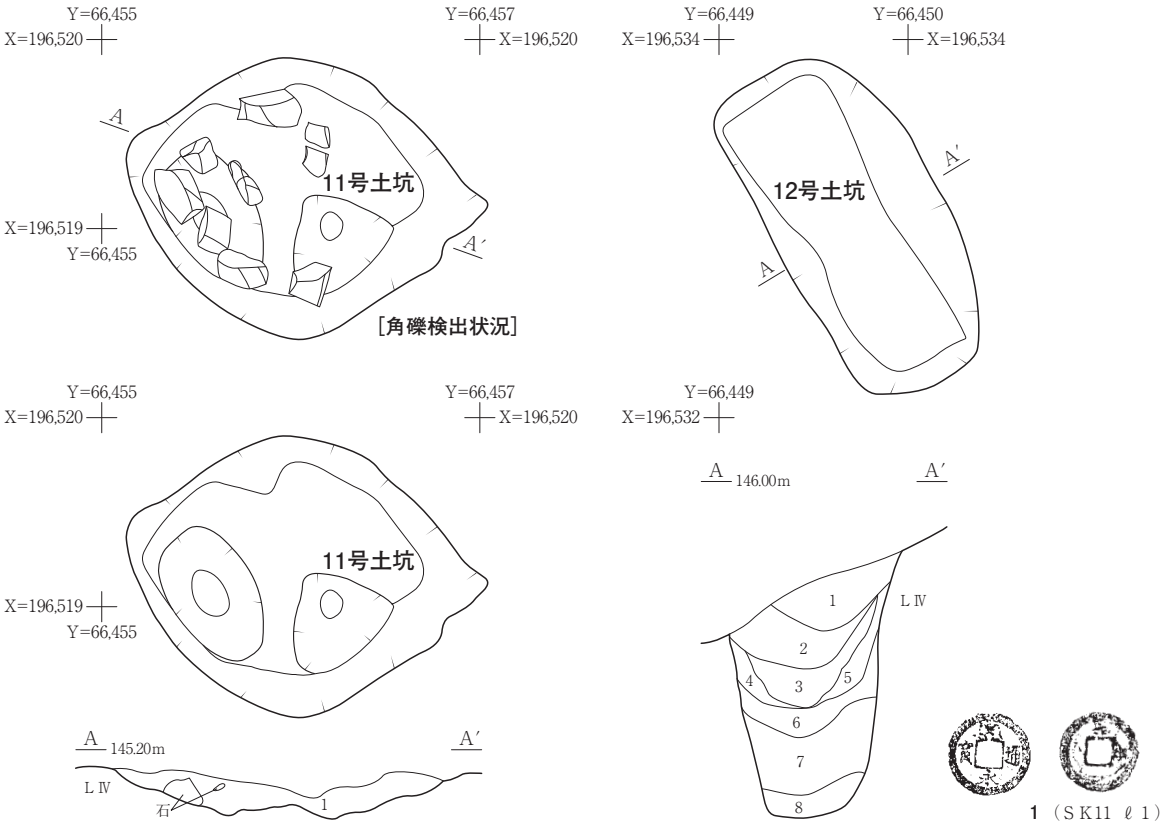
11号土坑　ＳＫ11（図26、写真15）

本遺構は、調査区南部の２号平場の上方、Ｉ26グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。

遺構の平面形は不整形である。規模は、南北の長さが1.42ｍ、東西の長さが1.43ｍ、検出面からの深さは深い場所で24㎝である。遺構の中央～西部では、10～30㎝前後の角礫を確認している。遺跡が立地する丘陵上には石材がほとんどなく、確認した角礫は丘陵上で採取できる種類のものでもないため、他所から持ち込んで意図的に置いたものと考えられる。角礫を取り除いた後の底面は凹凸があり、特に南部には２箇所の窪みが認められる。

堆積土は単層だが、褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトが混ざっているため、人為堆積土と判断している。なお、堆積土中から寛永通宝１点が出土した。

本遺構の具体的な性格は不明だが、所属時期は出土した寛永通宝から、近世以降のものと考えられる。なお、表土除去前には、本遺構が存在する箇所には盛土があり、その上部には小型の石碑が



11号土坑堆積土

1　褐色砂質シルト　10YR4/6と黄褐色砂質シルト　10YR5/6の混土

12号土坑堆積土

1　褐色シルト　10YR4/6（炭化物微量含む）
2　褐色シルト　10YR4/6
　（炭化物微量含む、明褐色シルト塊を含む）
3　褐色シルト　10YR4/4（炭化物含む）
4　黄褐色シルト　10YR5/6
5　黄褐色シルト　10YR5/8
6　褐色シルト　10YR4/4
7　褐色シルト　7.5YR4/4
8　黄褐色砂質シルト　10YR5/8

0　1ｍ　(1/40)
＜平面図・断面図＞
0　3㎝　(1/2)
＜遺　物＞

図26　11・12号土坑、11号土坑出土遺物

複数存在していた。２号平場は神社の建築や石碑の設営のために地形が大きく改変されたと推測される（本編第２章第２節参照）が、本遺構もその改変の際に掘られたものである可能性が高い。　（鶴　見）

12号土坑（図26、写真13）

本遺構は、調査区南部のＨ24・Ｉ24グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。西側には３号平場が隣接している。

遺構の平面形は長方形である。規模は、長軸の長さが1.86ｍ、短軸の長さが0.91ｍである。検出面からの深さは最大1.41ｍであるが、斜面下位にあたる西側ではやや浅い。周壁は急角度で立ち上がる。底面はわずかに凹凸があるが、ほぼ水平である。

堆積土は８層に分層した。いずれも自然堆積土で、周囲からの流入土を主体とするが、ℓ４・５には壁の崩落土が含まれていると考えられる。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、時期・性格とも特定する所見は得られなかった。ただ、平面形が長方形を呈し、１ｍ以上深く掘り込まれていることから落し穴の可能性がある。落し穴とすれば、上ノ台館跡１・３次調査と、同じ丘陵上に立地する上ノ台遺跡の調査で、縄文時代中期・後期・晩期の土器が出土していることから、そのいずれかの時期に該当するとみられる。　（鶴　見）

４号特殊遺構　ＳＸ４

遺　　構（図27）

本遺構は、調査区中央付近のＩ23・24グリッドで検出した遺構である。尾根筋を南北に

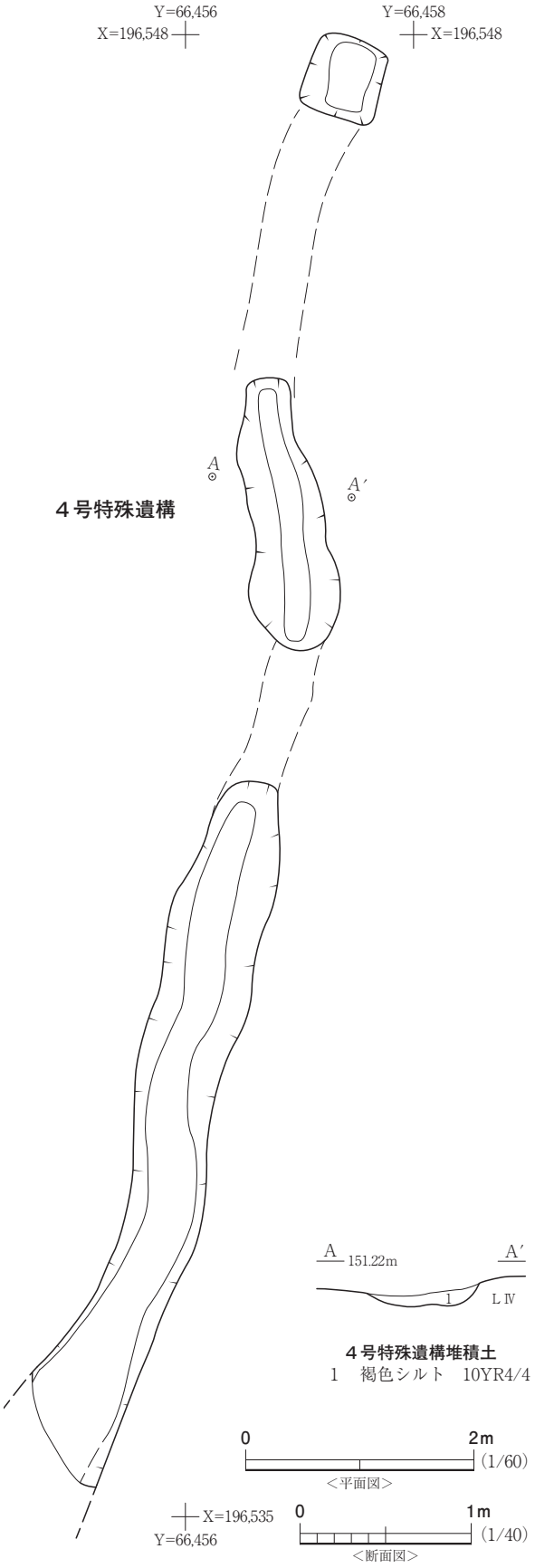


図27　４号特殊遺構

延びる溝状の遺構で、４号平場の石碑左脇付近から、７号平場にかけて確認された。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。

遺構は、途切れている箇所があるが、尾根筋にほぼ一直線上に並ぶことから、一連の遺構と判断した。確認できた範囲での長さは12.9ｍ、幅は0.5～0.9ｍである。検出面からの深さは平均10㎝と浅いが、表土除去の際に上部を下げ過ぎている可能性もある。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、尾根上で検出した溝状の遺構である。溝状の遺構ではあるが、８・９号溝跡とは立地が異なっており、排水溝のような機能は想定されない。一方、２次調査で確認した３号特殊遺構と堆積土・立地が類似していて、表土除去前に確認できた道跡と位置がほぼ一致している。このことから、本遺構は３号特殊遺構と同様、道跡や字限（あざぎり）に掘られた溝等の可能性がある。遺構の所属時期については、出土遺物がないため、厳密には特定できないが、３号特殊遺構の年代を参考に近世以降と推定している。（鶴　見）

第６節　遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文土器１点、中世の土師器２点が出土している。図28－１・２は中世の土師器で、どちらも鍋と判断した。遺存状態が悪く、耳は確認されなかったが、器形の特徴から内耳鍋と推定される。１・２は口縁部から体部の上半にかけての破片で、体部外面には煤とみられる黒色の付着物が観察される（写真15）。口唇部は平坦で、煤の付着は認められない。１は内外面ともロクロナデの痕跡が観察できる。一方、２は摩滅しており不明瞭だが、内面は横方向のナデ調整とみられる。１・２は破片資料ではあるが、15世紀～16世紀頃のものとみられ、城館跡が機能していた時期を示す可能性が高いと考えている。

図28－３は縄文土器である。幅の広い沈線による区画がみられ、沈線や胎土の特徴から縄文時代後期のものと判断した。（鶴　見）

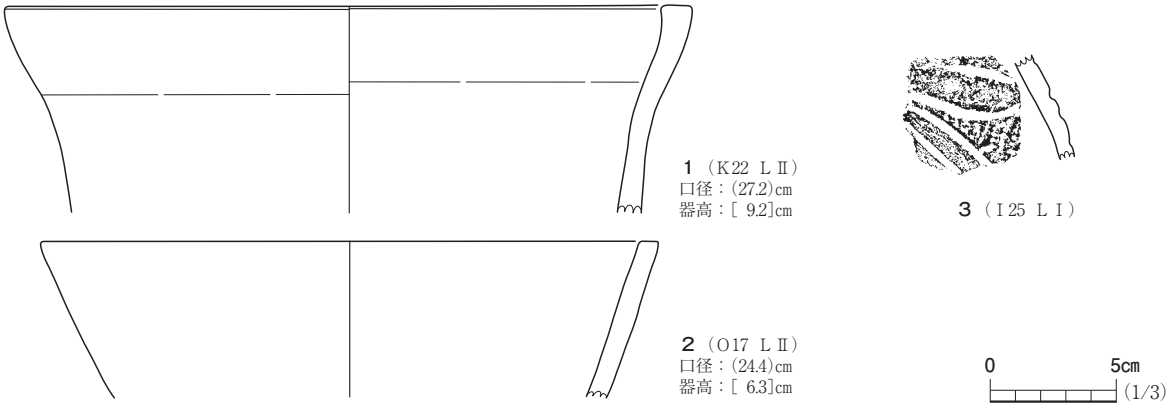


図28　遺構外出土遺物

第３章　　総　　括

上ノ台館跡の調査は、平成28年度から平成30年度の３次にわたって行われた。１～３次調査の結果、縄文時代、古代、中世、近世の遺構・遺物が確認されたが、ここでは、遺跡の中心となる中世の城館跡とその性格についてまとめてみたい。

城館跡の特徴について

３次にわたる調査で、城館跡の中心となる箇所については、ほぼその全容を把握することができた。上ノ台館跡が周辺で確認されている城館跡と大きく異なる点は、そのつくりが簡易的なことにある。多くの城館跡で見られる整地あるいは大規模な掘削をしてつくった平場はほとんどなく、最低限の造成で城館跡を築いている。これまでの調査で明らかになった他の中世の城館跡と比較すると、簡略化された印象が強い城館跡ともいえる。

以下、便宜上、上ノ台館跡の特徴について、①遺跡内の最高地点にあたる１・２号溝跡の間の箇所、②１号平場から４号平場間の南北に延びる尾根上の平場、③平坦で最も広い２号平場、④東向き斜面につくられた細長い平場、の４箇所に分けて説明する。

まず、①の箇所は、遺跡内の最高地点にあたるため、通常の城館跡では本丸が造成されるとみられる箇所である。ところが、堀と考えられる１・２号溝跡の間の空間には、後述する２号平場のような平坦面及び建物跡や建物跡等を構成する柱穴が確認されないため、この箇所が本丸として機能していたとは考えられない。しかし一方で、尾根を切断する１・２号溝跡が確認されていることから、この箇所が城館跡に伴うものとして認識されていたと判断される。遺跡全体を見ると、中心となる平場は最も広い２号平場と考えられるが、１・２号溝跡の間の空間が整備されていた場合は、より広い平場の造成が可能だったと思われる。

それにもかかわらず、１・２号溝跡の間の空間が整備されず、遺構が確認されないのはなぜであろうか。１・２号溝跡は北からの敵の進入を意識していると推測されるが、大規模な堀ではないため、防御的な観点からすれば、あまり重要視はしていなかったともみられる。そのため、もともと平場として整備することは念頭になかった可能性もある。

一方、防御目的の他にも、本丸として整備する地点を事前に明示するものであった可能性もある。城館を造成し始めた当初の計画で、この場所も利用する予定だったとすれば、何らかの事情で着手できなかったか、意図して止めてしまったか、そのいずれかと想定されるが、判然としない。

次に、②の尾根上の平場については、いずれの平場も小規模で、もともとの尾根の地形を利用して、最低限の造成に留められている。尾根上の平場では、３棟の掘立柱建物跡を確認したが、いずれの建物跡も規模は大きくない。また、平場と平場の境目には、小規模の溝跡があり、尾根の上部

から流れてきた水の排水や、平場の区画を意識して掘られたものとみられる。それぞれの平場は狭く、一つの平場に多くの人が留まれる空間はないため、建物跡は見張り小屋等、常時、人が生活するようなものではなかった可能性が高い。

③の２号平場は、城館跡として利用されていたと考えられる箇所の中では最も広い平場である。確認された掘立柱建物跡は１棟だが、本城館跡の中でも規模の大きなものである。２号平場では、尾根の先端部に道跡の可能性がある溝跡が検出されており、平場への進入口とみられる。

④の東側斜面につくられた平場は、等高線に沿った形で幅が狭く細長い平坦面で構成されている。平場上では柱列跡と溝跡が確認された。柱列跡は、柵あるいは塀等の機能が想定される。溝跡は、柱列跡と並列することから、柱列跡と関連して機能していたと考えられ、具体的には斜面上方から流れてきた水が柱列の方に流れて行かないようにすることを意図したものとみられる。本城館跡は、東側斜面につくられた平場と、尾根上の平場の東部で柱列跡が確認できることから、街道のある東側の方向を意識して柱列跡を構築していたといえる。なお、調査区外の東向き斜面の平場については、詳細は不明だが、調査区内で確認された柱列跡や溝跡と同様の遺構が存在する可能性がある。

周辺の遺跡と上ノ台館跡の性格

３次にわたる調査で確認された遺構群が上ノ台館跡の完成形だとすれば、城館跡の北部には平場や大規模な堀が存在せず、北から攻められる意識が低いといえる。遺跡の北側には、現在は霊山町の中心部である掛田の街中に抜ける道があるが、その道が当時存在していたとすれば、その道を利用して北から侵入されることを想定していないことになる。遺跡の北西には愛宕大館跡、北東には明正寺館跡があり、さらに北東に離れた掛田の街中には懸田城跡がある。これらの城館があることが影響して北の防御をあまり意識していないとすれば、当時掛田の周辺に住んでいた人たちと上ノ台館跡を築いた人たちは何らかの関係を有していた可能性が高い。

北への意識が低いのに対し、南に目を転じると、城館跡の眼下には福島と相馬を結ぶ中村街道（現国道115号）がある。上ノ台館跡は街道を見渡せる場所に立地していることから、平場や建物跡・柱列跡等の構築に当たっては、南側を意識していたと考えられる（図29）。２次調査の報告でも指摘したが、東側斜面の平場で確認された柱列跡は高低差をもってつくられているため、東側の街道筋から見上げた際は、何重にも柵や塀が巡って見え、城館跡として一定の視覚的な効果があったと推測される（福島県教育委員会2019）。

そして、街道沿いには、一般国道115号相馬福島道路関連で発掘調査が行われた沼ヶ入遺跡や福田遺跡がある。両遺跡では、中世の掘立柱建物跡や方形竪穴建物跡が見つかり、上ノ台館跡の関連遺跡と評価されている（福島県教育委員会2016・2018）。両遺跡の年代は、出土した遺物から15世紀頃の年代と考えられている。そして、上ノ台館跡でも15・16世紀頃の遺物が確認されたことから、これらの３遺跡が同時期に存在していた可能性が高く、密接な関係にあったと考えられる。具

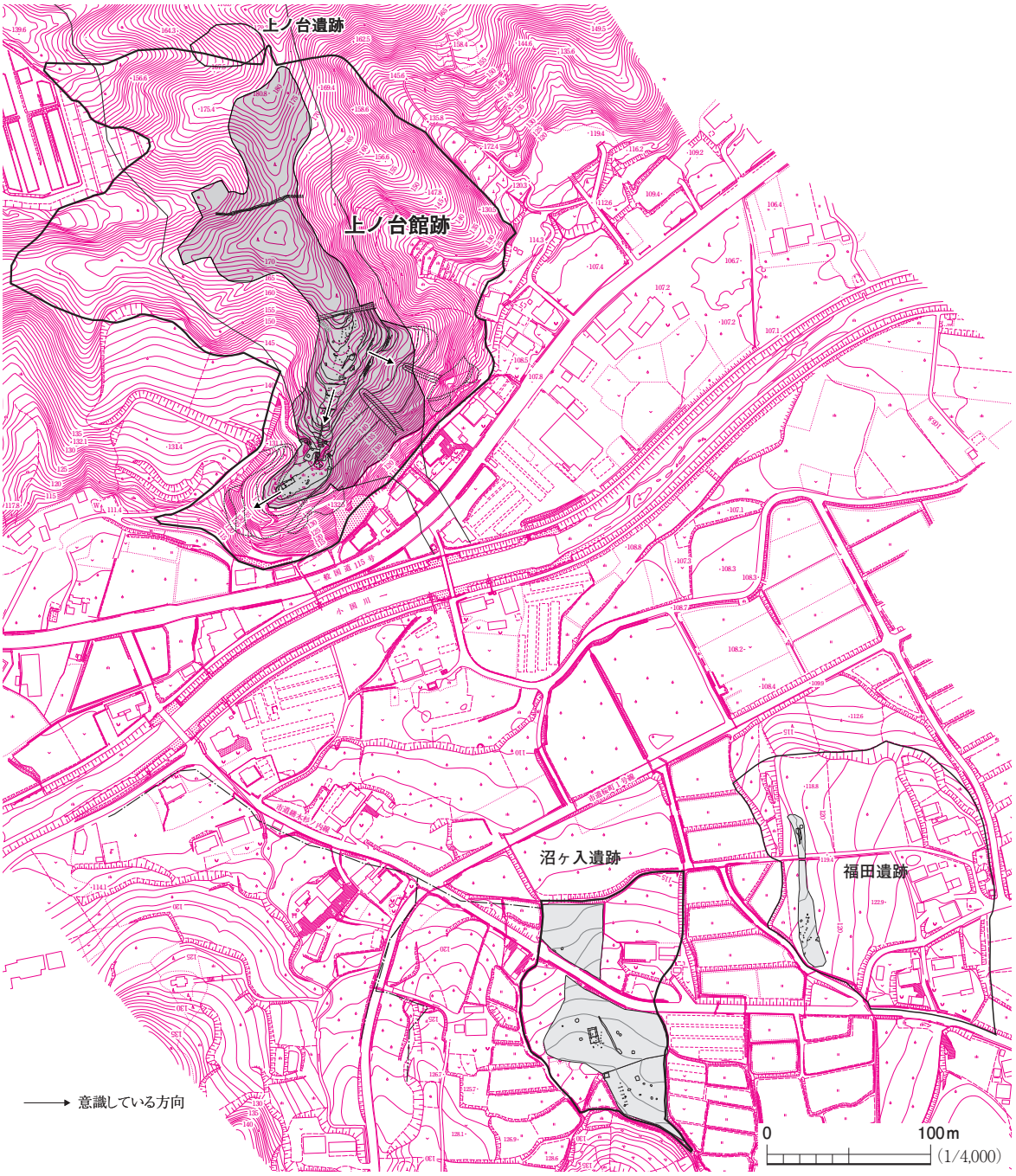


図29　上ノ台館跡と周辺の遺跡

体的に言及すれば、沼ヶ入遺跡や福田遺跡は、平時には屋敷等の居住地として利用された場所で、簡易的なつくりの城館跡である上ノ台館跡は、周囲の見張りや戦時の臨時使用場所として利用されていたと推測される。

発掘調査に先立ち、室野秀文氏に上ノ台館跡の縄張り図の作成を依頼したが、その際、室野氏から、「上ノ台館跡は沼ヶ入・福田遺跡を見下ろす小国川対岸にあり、15世紀から16世紀までのいずれかの時期に臨時的に構築された陣所や砦ではないか。」とのコメントをいただいていた（福島県教育委員会2016）。３次にわたる一連の発掘調査では、そのコメントを裏付ける成果が得られたと評

価することができよう。

なお、上ノ台館跡の南西約1.2kmにある小国城跡は、街道を見渡せる丘陵上に立地する点で上ノ台館跡と共通し、注目される。

ま と め

城館跡の特徴や、周辺の遺跡の状況を見てみると、上ノ台館跡は在地勢力の城館跡である可能性が高い。城館跡のつくり方も特徴的で、ほとんどの平場は大規模な掘削をして平坦面を造成することはせず、手を加えるのは最低限に抑え、尾根の自然地形を生かしている。このような城館跡は、拠点となるような城館跡とは異なり、見張りのための場所、あるいは緊急時に逃げ込むための場所として整備されたと推測される。

このような簡易的なつくりの城館跡は、当該地域に限ったことではなく、他地域にも存在する可能性があり、今後注意を払う必要があろう。また、上ノ台館跡の調査結果は、今後同様の城館跡が調査された際、比較検討する上で貴重な調査事例となるため、非常に重要な成果が得られたといっても過言ではない。

また、出土した土器は15・16世紀のもので、国人領主である懸田氏が懸田城跡を拠点としていた頃である。その当時は、懸田氏は伊達氏に臣従していたとされるが、伊達氏の天文の乱においては伊達稙宗方に付き、最終的に伊達晴宗によって滅ぼされている。上ノ台館跡は文献上に記載がない城館跡のため、誰が築いたのかの伝承はなく、厳密に特定することは難しい。ただ、霊山や掛田の中心部方面に向かう街道を抑えるような立地であること、遺跡の北側に位置する掛田の中心部側への備えが少ないことを考慮すれば、上ノ台館跡を築いたのは、懸田氏あるいはその支配下にあった掛田周辺に住んでいた人々であるとも考えられる。しかし、遺物が少なく、確実に時期を絞り込めないため、伊達氏と関連する城館跡の可能性も残る。

上ノ台館跡の周辺には、多くの城館跡があり、現在の字名を見ても、城館跡に関連するような地名も多いことから、城館以外にも沼ヶ入遺跡や福田遺跡のような中世の遺跡が存在する可能性が高い。今後、周辺遺跡の調査の進展や、史料の新発見等、より多くの有益な情報が得られることに期待したい。

（鶴　見）

引用・参考文献

福島県教育委員会　2014　『福島県内遺跡分布調査報告21』福島県文化財調査報告書第502集

福島県教育委員会　2016　『福島県内遺跡分布調査報告23』福島県文化財調査報告書第512集

福島県教育委員会　2016　「第１編　福田遺跡」「第２編　沼ヶ入遺跡（１次調査）」『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告５』福島県文化財調査報告書第514集

福島県教育委員会　2017　『福島県内遺跡分布調査報告24』福島県文化財調査報告書第521集

福島県教育委員会　2018　「第１編　沼ヶ入遺跡（２次調査）」「第２編　上ノ台館跡（１次調査）」『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告６』福島県文化財調査報告書第523集

福島県教育委員会　2019　「第１編　上ノ台館跡（２次調査）」『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告７』福島県文化財調査報告第530集

第２編　田向（たむかい）遺跡

遺跡記号	ＤＴ－ＴＭＫ
所在地	伊達市保原町上保原字田向
時代・種類	中・近世の居住域
調査期間	平成30年10月３日～12月12日
調査員	丹治篤嘉・初山孝行・ 枝松雄一郎・鶴見諒平

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

田向遺跡は、福島県伊達市保原町上保原字田向に所在する。遺跡は福島市と伊達市の市境付近にある高子沼から北東に約1.4㎞の場所に位置する。遺跡範囲の南側に隣接して、市道大地内田向線が東西方向に延びている。阿武隈川の旧河道により形成された自然堤防上に立地しているが、遺跡の南側30ｍには丘陵が迫っていて、丘陵と平地の境界付近に立地する。

周辺では多数の遺跡が確認されているが、西に約800ｍには高子館跡、北に約200ｍには中室内遺跡、南東に約１㎞には大鳥城跡などがあり、中世の城館跡が多い。　（鶴　見）

第２節　調 査 経 過

田向遺跡は、平成29・30年度に実施した遺跡推定地ＤＴ－Ｂ29の試掘調査の結果、計5,400㎡の範囲が遺跡として登録されたものである。このうち、平成29年度に要保存範囲とされた1,300㎡及び平成30年度に要保存範囲とされた4,100㎡のうちの1,600㎡の、計2,900㎡については盛土工法による工事範囲内にあるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適用されることとなった。この結果、本発掘調査が必要な範囲は工事掘削範囲の2,500㎡となり、福島県教育委員会より８月29日付で田向遺跡の本発掘調査の指示が出された。本発掘調査は、平成30年10月３日～12月12日まで、延べ46日間実施した。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

10月第２週　：調査区の縄張りや発掘器材類の整理等を行い、作業員による遺構検出作業を調査区東部1,000㎡から開始した。遺構検出作業を進めると、土坑・溝跡・小穴が確認された。10日（水）からは調査区東部の北西部から遺構の検出に着手し、１・２号溝跡の調査を開始した。２号溝跡の調査を進めていくと、中世～近世の遺物が多く出土し、江戸時代頃に溝跡が埋められたことが判明した。

10月第３週　：15日（月）から土坑の精査に着手し、縄文時代の落し穴を発見した。また、検出作業を続けていくと、調査区東部の東半部に多くの小穴が集中することがわかった。

10月第４週　：引き続き遺構の検出、掘り下げを行う。

10月第５週～　：調査区東部の調査を一旦中断し、29日（月）から調査区西部の調査に着手した。

11月第１週　調査区西部の調査は、西端部から着手し、順次東側に移行していった。西端部では溝跡や井戸跡、土坑を検出する。

11月第２週　：遺構検出を進めていくと、土坑や溝跡を主体とした遺構が分布していることが明らかとなった。溝跡や土坑の調査を順次進めていく。

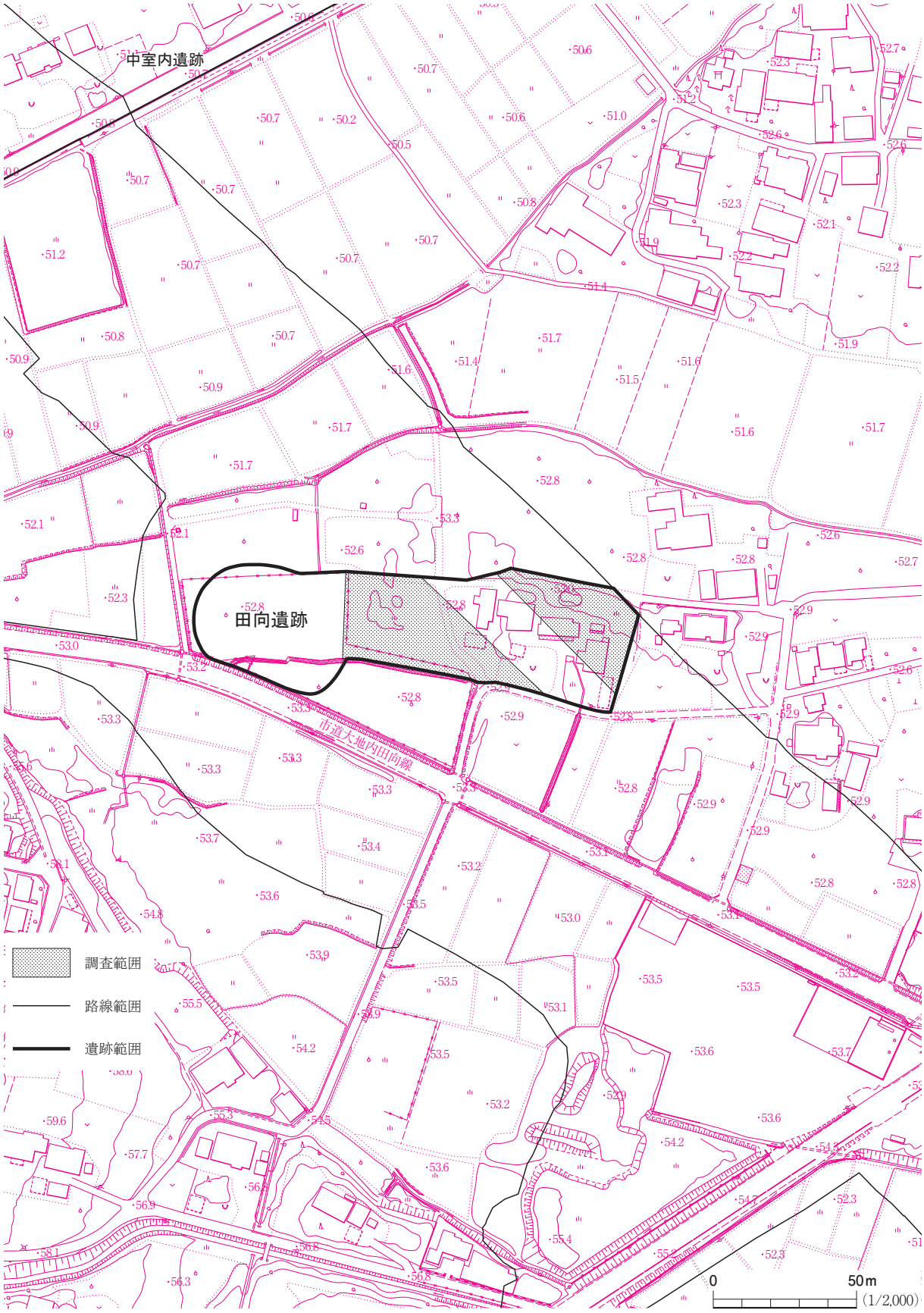


図１　調査区位置図

11月第３週　　：溝跡の調査を重点的に進めていく。15号溝跡は掘り込みが深く、安全に留意しながら作業を進める。

11月第４週　　：15号溝跡の掘り下げに目途が付いたため、残る溝跡や土坑の調査・記録作業に移行する。

11月第５週～12月第１週　：29日(木)には調査区西部の調査に目途が付いたため、清掃した後、全景写真の撮影を行った。

12月第２週　　：３日(月)からは調査区東部の調査に戻り､既に検出していた遺構の精査を行った。

12月第３週　　：10日(月)には遺構精査が終了し、11日(火)に全体写真の撮影を実施した。12日(水)には現場の発掘器材類の片付けを行い、調査は終了した。現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、14日(金)に行った。　（鶴　見）

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

今回の調査では、土坑27基、溝跡25条、井戸跡２基、特殊遺構２基、小穴167基を確認した。遺物は２・15号溝跡から出土したものが大半で、近世のものが中心である。その他、溝跡や土坑等から、縄文時代、古墳時代、平安時代、中世の遺物が少量出土している。

土坑は形態の特徴から縄文時代の落し穴と推定されるものが多い。落し穴は、調査区西部の南部に点在している。溝跡は出土遺物から中世～近世にかけてのもので、屋敷跡の区画溝、あるいは道路の側溝と推定される。小穴は建物跡の柱穴と考えられ、溝跡で区画された調査区東部に集中して分布している。

なお、近世の遺構については、出土した陶磁器の内訳を記載している。その点数については、複数の破片が接合したもの、あるいは接合できないが明らかに同一個体と判断できるものは、１点として計上した。これ以外のものについては全て破片の点数を計上した。　（鶴　見）

基本土層（図２）

基本土層は７層に区分した。ＬⅠは表土、ＬⅡは盛土である。ＬⅡには、近世以降の遺物が混入している。

ＬⅢは調査区全域で確認される褐色シルトで、遺構はこの層の上面で検出している。層厚は20～40㎝程度である。

ＬⅣは褐色砂質シルトで、今回確認した大半の遺構はこの層を掘り込んでいる。層厚は20～

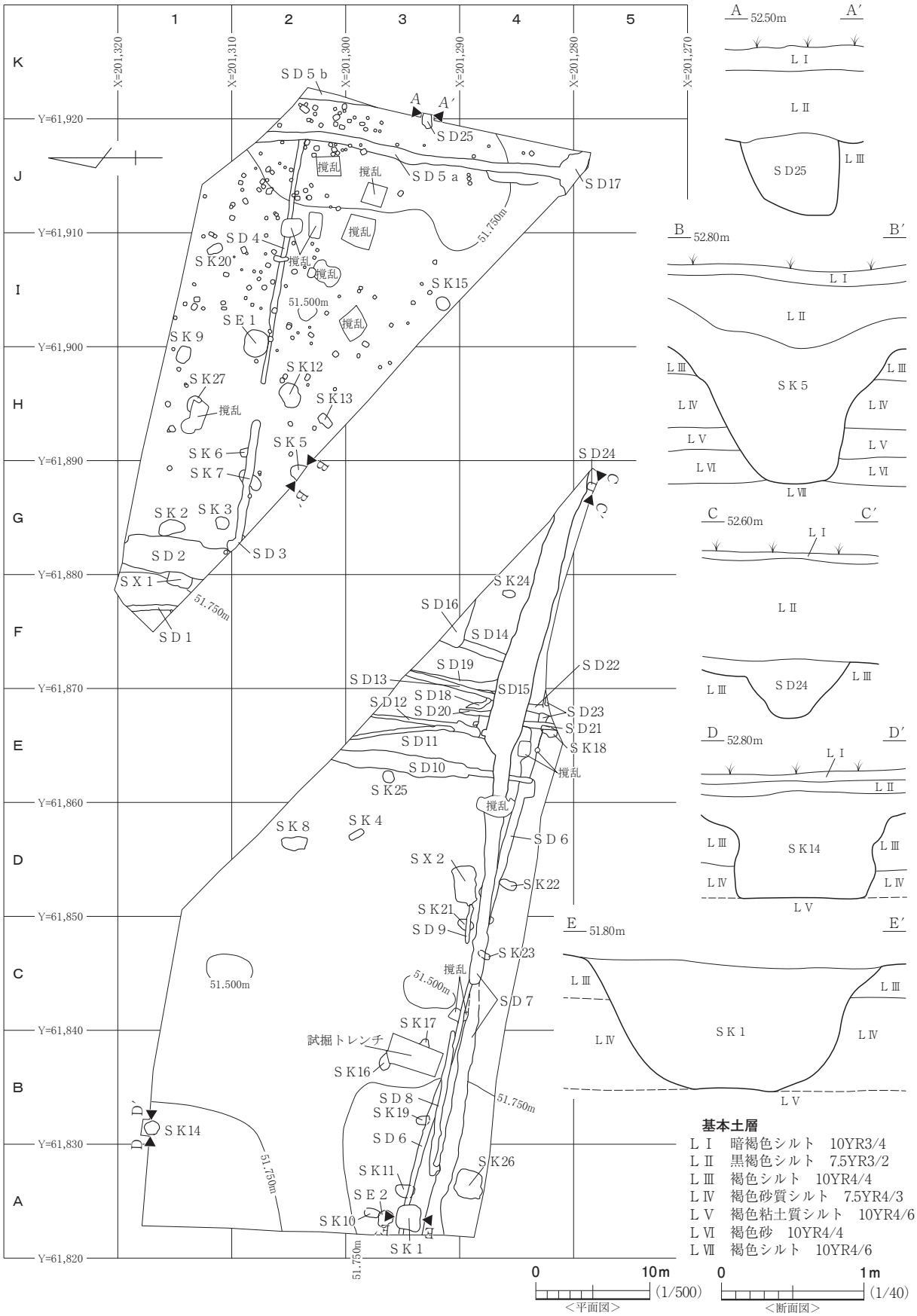


図２　遺構配置図・基本土層

65㎝程度である。

ＬＶ以下は掘り込みが深い遺構でのみ確認した。ＬＶは褐色粘土質シルト、ＬⅥは褐色砂、ＬⅦは褐色シルトである。（鶴　見）

第２節　土　　坑

今回の調査区では、土坑を27基検出した。出土遺物は、１号土坑から須恵器、14号土坑から縄文土器、15号土坑からは土師器と陶器が確認されたが、これ以外の土坑では皆無であった。このため、厳密な所属時期の特定が難しいものが多いが、形態的な特徴から、縄文時代の落し穴と推定されるものが12基確認された。

１号土坑　ＳＫ１（図３、写真５）

調査区西部の西端付近、Ａ４グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。６号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。この他、北に２号井戸跡、東に11号土坑、南に７号溝跡が隣接している。

平面形は隅丸方形で、南西隅がわずかに外側に膨らむ。規模は、南北の長さが2.08ｍ、東西の長さが2.17ｍ、検出面からの深さは80㎝である。東西・南北とも断面形はほぼ逆台形で、底面での幅は南北で1.02ｍと検出面のおよそ半分となっている。

堆積土は９層に分層した。下層のℓ７～９は周囲からの自然流入土、中～上層のℓ１～６は人為的に埋められた土と判断した。なお、中～上層のうち、ℓ１・３・６は明瞭な混土であった。

遺物は、古代のものとみられる須恵器が１点出土したが、細片のため図示できなかった。

本遺構の性格は不明だが、人為堆積土が大半を占めることから、本遺構の廃絶に伴い、埋められたと推定される。

本遺構が機能していた時期については、６号溝跡よりは新しいと判断できるが、周辺の遺構の状況から同溝跡と大きな時期差はないと推測される。このことから、中世～近世の所産と考えておきたい。（鶴　見）

２号土坑　ＳＫ２（図３、写真５）

調査区東部の西端に近い、Ｇ１グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、西に２号溝跡が隣接し、南に2.5ｍには３号土坑がある。

平面形は長楕円形で、長軸の長さが2.35ｍ、短軸の長さが1.28ｍ、検出面の深さは61㎝である。底面は細かな凹凸があるものの概ね平坦である。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は暗褐色シルト、ℓ２は褐色シルトを基調とする層で、いずれも自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、性格・時期ともに不明の土坑である。ただ、堆積土は暗褐色シルトを主体とし、縄文時代の落し穴と推定される10号土坑と類似しているため、当該期の所産の可能性もある。（鶴　見）

３号土坑　ＳＫ３（図３、写真５）

本遺構は、調査区東部のＧ１グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北に３ｍには２号土坑、南に１ｍには３号溝跡、西に1.5ｍには２号溝跡がある。

平面形はやや歪んだ円形である。規模は、南北の長さが1.11ｍ、東西の長さが1.08ｍで、検出面からの深さは最大８㎝と非常に浅い。遺構の底面から石が５点まとまって検出されている。

堆積土は黒褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、堆積土の特徴から、中・近世に位置付けられる可能性がある。底面から検出された石については、意図的に置いたものかどうかは判然としなかった。（鶴　見）

４号土坑　ＳＫ４（図３）

本遺構は、調査区西部のＤ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北に４ｍには８号土坑がある。

平面形は隅丸長方形である。規模は、長軸の長さが1.39ｍ、短軸の長さが0.57ｍ、検出面からの深さが58㎝である。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、小穴等は確認されていない。

堆積土は４層に分層した。ℓ１・３は周囲からの流入土で、ℓ２・４は壁の崩落土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。（鶴　見）

５号土坑　ＳＫ５（図３）

本遺構は、調査区東部のＧ２グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北に2.5ｍには７号土坑、東に3.5ｍには13号土坑がある。

平面形は半円形で、調査区外までを含めると楕円形の土坑と推測する。確認した範囲での規模は、南北の長さが1.02ｍ、東西の長さが1.5ｍ、検出面からの深さが97㎝である。周壁は急角度で立ち上がるが、上半は崩落のためか傾斜が緩やかになっている。底面は概ね平坦である。また、調査中、底面付近からは湧水が確認された。

堆積土は４層に分層した。ℓ１・２はレンズ状の堆積をしていることから自然流入土と判断した。ℓ３は暗褐色シルト中に褐色粘土質シルトを含んでいて、人為的に埋めた土と判断した。ℓ４は褐色砂と暗褐色粘土質シルトが互層になっている。湧水が確認されることから、水性堆積の状況を示していると判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

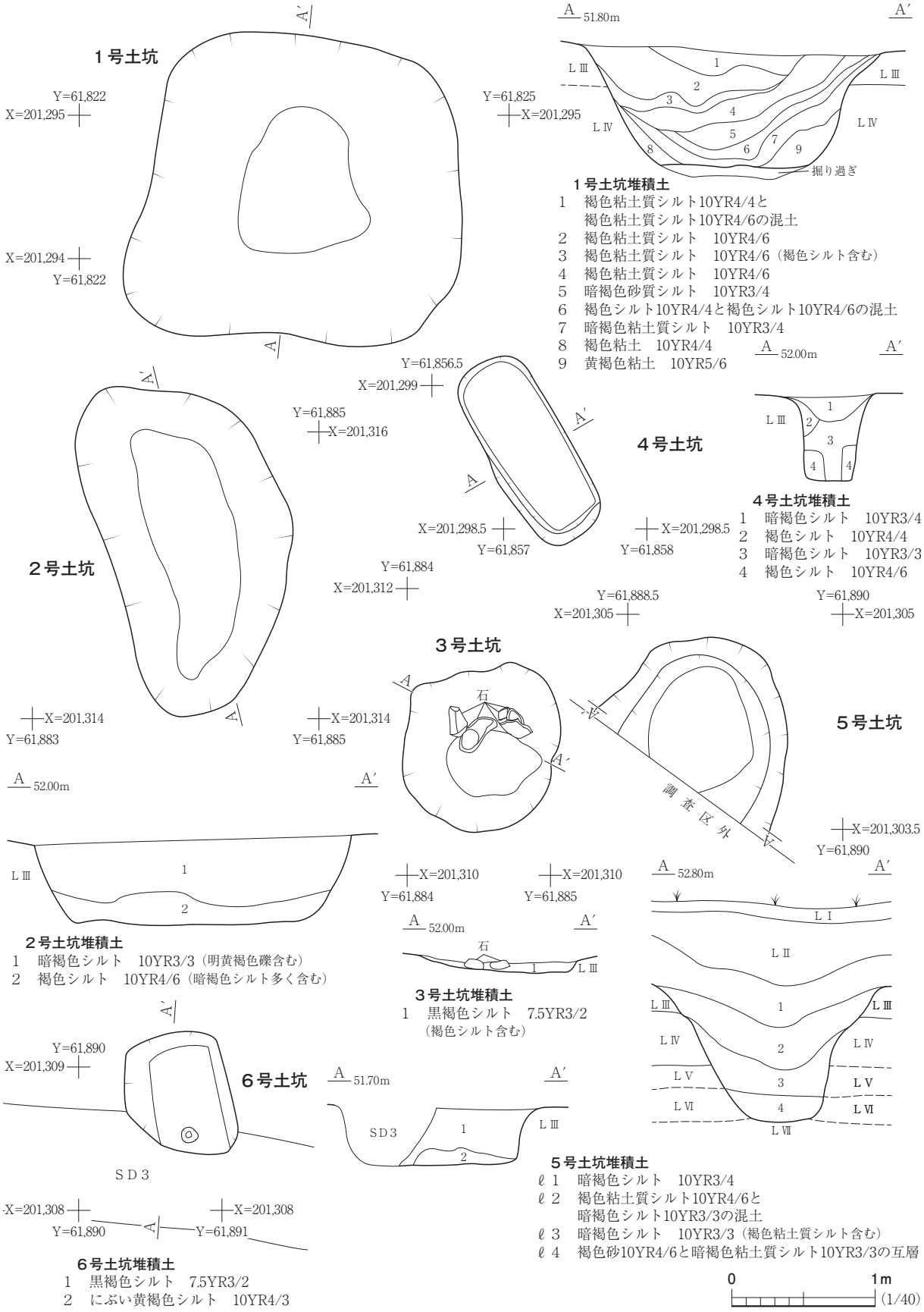

１号土坑
Y=61,822
X=201,295
Y=61,825
X=201,295
X=201,294
Y=61,822
A 51.80m
A′
LⅢ
LⅣ
掘り過ぎ
１号土坑堆積土
1　褐色粘土質シルト10YR4/4と
　褐色粘土質シルト10YR4/6の混土
2　褐色粘土質シルト　10YR4/6
3　褐色粘土質シルト　10YR4/6（褐色シルト含む）
4　褐色粘土質シルト　10YR4/6
5　暗褐色砂質シルト　10YR3/4
6　褐色シルト10YR4/4と褐色シルト10YR4/6の混土
7　暗褐色粘土質シルト　10YR3/4
8　褐色粘土　10YR4/4
9　黄褐色粘土　10YR5/6
２号土坑
Y=61,885
X=201,316
X=201,314
Y=61,883
X=201,314
Y=61,885
Y=61,856.5
X=201,299
X=201,298.5
Y=61,857
X=201,298.5
Y=61,858
Y=61,884
X=201,312
４号土坑
A 52.00m
LⅢ
４号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4
2　褐色シルト　10YR4/4
3　暗褐色シルト　10YR3/3
4　褐色シルト　10YR4/6
Y=61,888.5
X=201,305
Y=61,890
X=201,305
３号土坑
石
調査区外
５号土坑
X=201,303.5
Y=61,890
A 52.00m
LⅢ
２号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/3（明黄褐色礫含む）
2　褐色シルト　10YR4/6（暗褐色シルト多く含む）
X=201,310
Y=61,884
X=201,310
Y=61,885
A 52.00m
石
LⅢ
３号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　7.5YR3/2
（褐色シルト含む）
A 52.80m
LⅠ
LⅡ
LⅢ
LⅣ
LⅤ
LⅥ
LⅦ
Y=61,890
X=201,309
６号土坑
SD3
X=201,308
Y=61,890
X=201,308
Y=61,891
A 51.70m
SD3
LⅢ
５号土坑堆積土
ℓ1　暗褐色シルト　10YR3/4
ℓ2　褐色粘土質シルト10YR4/6と
　暗褐色シルト10YR3/3の混土
ℓ3　暗褐色シルト　10YR3/3（褐色粘土質シルト含む）
ℓ4　褐色砂10YR4/6と暗褐色粘土質シルト10YR3/3の互層
６号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　7.5YR3/2
2　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
0
1m
(1/40)

図３　１～６号土坑

本遺構は、人為的に埋められた痕跡が認められた土坑である。ただし、調査範囲が限られているため、遺構の全体を把握できておらず、溝跡の可能性もある。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、近世の遺物が出土している15号土坑と堆積土が近似するため、近世に位置付けられる可能性が高い。（鶴　見）

６号土坑　ＳＫ６（図３）

本遺構は、調査区東部のＨ２グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。遺構の南部は３号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。この他、西に１ｍには７号土坑がある。

遺構の南部が３号溝跡で壊されているため、本来の規模は不明である。残存していた範囲での規模は、南北の長さが0.89ｍ、東西の長さが0.74ｍ、検出面からの深さが42㎝である。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦で、小穴を１基確認した。

堆積土は２層に分層した。いずれも自然堆積土と判断していて、遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。底面にある小穴は、杭の痕跡と考えられる。この小穴を中心と考えると、長軸の長さは1.4～1.5ｍほどの規模であったと推定される。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。（鶴　見）

７号土坑　ＳＫ７（図４、写真５）

本遺構は、調査区東部のＧ２グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。３号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。この他、東に１ｍには６号土坑がある。

平面形は長楕円形で、規模は長軸の長さが2.23ｍ、短軸の長さが１ｍ、検出面からの深さが66㎝である。周壁は、垂直に近い立ち上がりの箇所もあるが、上部が崩落して傾斜が緩くなっている箇所も多い。底面は平坦で、小穴等は確認されていない。

堆積土は２層に分層した。ℓ１が暗褐色シルト、ℓ２が褐色シルトで、いずれも自然堆積土と判断した。層中から遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。堆積土は、落し穴と推定した10・11号土坑と類似しているため、縄文時代に属する土坑と推定している。（鶴　見）

８号土坑　ＳＫ８（図４、写真５）

本遺構は、調査区西部のＤ２グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南に４ｍには４号土坑がある。

遺構の平面形は歪んだ長方形である。規模は、長軸の長さが2.18ｍ、短軸の長さが1.19ｍ、検出面からの深さが42㎝である。周壁は底面から検出面に向かって緩やかに立ち上がる。底面は中央部に窪みがあり、一段深くなっている。

堆積土はにぶい黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

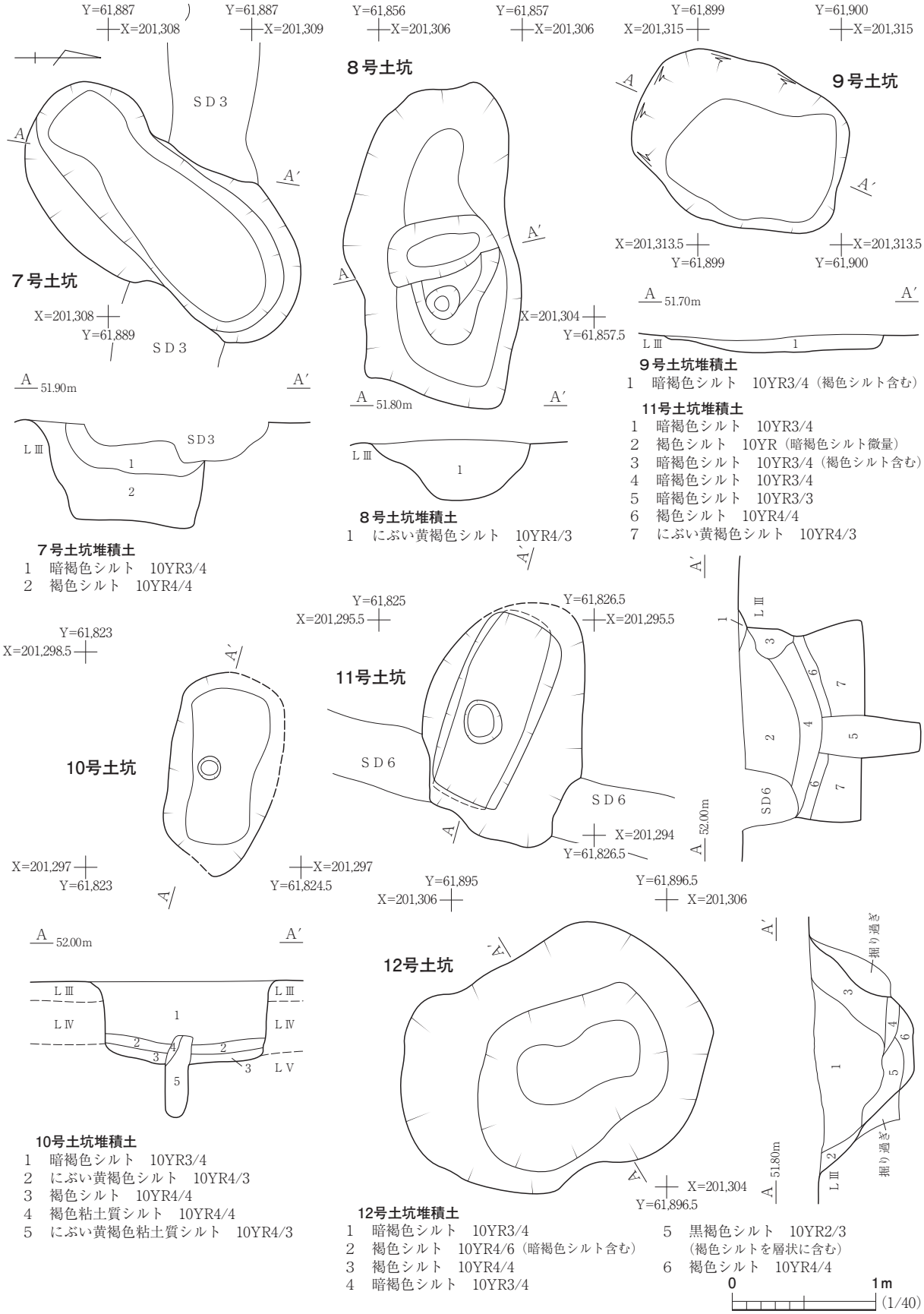

Y=61,887
X=201,308
Y=61,887
X=201,309
Y=61,856
X=201,306
Y=61,857
X=201,306
Y=61,899
X=201,315
Y=61,900
X=201,315
７号土坑
８号土坑
９号土坑
SD３
X=201,308
Y=61,889
X=201,304
Y=61,857.5
X=201,313.5
Y=61,899
X=201,313.5
Y=61,900
A 51.90m
A 51.80m
A 51.70m
LⅢ
７号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4
2　褐色シルト　10YR4/4
８号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
９号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（褐色シルト含む）
11号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4
2　褐色シルト　10YR（暗褐色シルト微量）
3　暗褐色シルト　10YR3/4（褐色シルト含む）
4　暗褐色シルト　10YR3/4
5　暗褐色シルト　10YR3/3
6　褐色シルト　10YR4/4
7　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
Y=61,825
X=201,295.5
Y=61,826.5
X=201,295.5
Y=61,823
X=201,298.5
10号土坑
11号土坑
SD６
X=201,294
Y=61,826.5
A 52.00m
X=201,297
Y=61,823
X=201,297
Y=61,824.5
Y=61,895
X=201,306
Y=61,896.5
X=201,306
12号土坑
掘り過ぎ
LⅣ
LⅤ
A 51.80m
X=201,304
Y=61,896.5
10号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4
2　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
3　褐色シルト　10YR4/4
4　褐色粘土質シルト　10YR4/4
5　にぶい黄褐色粘土質シルト　10YR4/3
12号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4
2　褐色シルト　10YR4/6（暗褐色シルト含む）
3　褐色シルト　10YR4/4
4　暗褐色シルト　10YR3/4
5　黒褐色シルト　10YR2/3
（褐色シルトを層状に含む）
6　褐色シルト　10YR4/4
0
1m
(1/40)

図４　７～12号土坑

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（鶴　見）

９号土坑　ＳＫ９（図４）

本遺構は、調査区東部のＨ１グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴が散在する。

平面形は長方形である。規模は、長軸の長さが1.5ｍ、短軸の長さが1.14ｍ、検出面からの深さが11㎝である。他の土坑に比べて非常に浅いため、上部が削平されている可能性もある。底面はやや凹凸がある。

堆積土は暗褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。層中から遺物は出土していない。

本遺構の性格については不明だが、堆積土が中・近世頃の溝跡と近似している。このため、遺構の所属時期は中・近世に位置付けられる可能性が高い。　（鶴　見）

10号土坑　ＳＫ10（図４、写真５）

本遺構は、調査区西部の東端にあたるＡ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南に２号井戸跡が隣接し、南東2.2ｍには11号土坑がある。

平面形は隅丸長方形である。規模は、長軸の長さが1.42ｍ、短軸の長さが0.76ｍ、検出面からの深さが58㎝である。調査当初、遺構の堆積土と地山の土との区別が難しかったため、東壁と西壁の一部を掘り過ぎている。そのため、遺構の平面形については一部推定である。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。また、底面の中央付近からやや西寄りに小穴を１基確認した。小穴は径15㎝の円形を呈し、土坑底面から小穴底面までの深さは36㎝である。

堆積土は５層に分層した。ℓ１～３は自然堆積土と判断した。ℓ４・５は底面の小穴及びその上部で確認した堆積土である。堆積状況から、杭の痕跡と判断した。ℓ５最上部から最下部までの長さは57㎝である。また、堆積中から遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。底面の小穴は杭の痕跡で、土の堆積状況から、杭が設置されたままの状態で埋没したと推定している。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。　（鶴　見）

11号土坑　ＳＫ11（図４、写真５）

本遺構は、調査区西部のＡ３グリッド検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北西に2.2ｍには10号土坑がある。

平面形は検出面では楕円形で、底面では長方形を呈する。北壁の一部に掘りすぎた箇所があるため推定になるが、検出面で長軸の長さが1.57ｍ、短軸の長さが1.14ｍ、検出面からの深さが86㎝である。周壁は、東壁の上部が大きく崩落し、北・南壁では、壁の下部が抉れている。底面には小穴を１基確認した。30×20㎝程の円形で、土坑底面から小穴底面までの深さは40㎝である。

堆積土は７層に分層した。ℓ１・２・４・６・７は周囲からの自然流入土、ℓ３は壁の崩落土と判断した。ℓ５は底面の小穴及びその上部で確認した堆積土である。堆積状況から、杭の痕跡と判断した。なお、堆積土中から遺物は出土していない。

本土坑は、形状の特徴から落し穴と判断した。底面の小穴は杭の痕跡で、土の堆積状況から、杭が設置されたままの状態で埋没したと推定される。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。（鶴　見）

12号土坑　ＳＫ12（図４）

本遺構は、調査区東部のＨ２グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南西に２ｍには13号土坑がある。

平面形は楕円形である。規模は、長軸の長さが2.22ｍ、短軸の長さが1.51ｍ、検出面からの深さが68㎝である。周壁は、擂鉢状を呈するが、上半は崩落のためか傾斜が緩やかになっている。底面は細かい凹凸はあるもののほぼ平坦である。

堆積土は６層に分層した。ℓ１～３・６は周囲からの自然流入土、ℓ４・５は壁の崩落土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、時期・性格ともに不明な土坑である。ただ、堆積土は縄文時代の落し穴と推定している10号土坑と近似した暗褐色シルトを主体とするため、当該期の所産の可能性もある。（鶴　見）

13号土坑　ＳＫ13（図５）

本遺構は、調査区東部のＨ２グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北東に２ｍには12号土坑がある。

遺構の平面形は長方形である。規模は、長軸の長さが1.35ｍ、短軸の長さが0.72ｍ、検出面からの深さが57㎝である。周壁の立ち上がりは垂直に近く、底面は平坦である。

堆積土は３層に分層した。ℓ１・３は周囲からの自然流入土、ℓ２は壁の崩落土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。（鶴　見）

14号土坑　ＳＫ14

遺　　構（図５、写真６）

本遺構は、調査区西部のＢ１グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はなく、周囲にも遺構は確認されなかった。

遺構の平面形はやや歪んだ円形である。規模は、南北の長さが1.27ｍ、東西の長さが1.18ｍ、検出面からの深さは60㎝である。底部から中段付近までは周壁が抉れており、上部は緩やかに検出

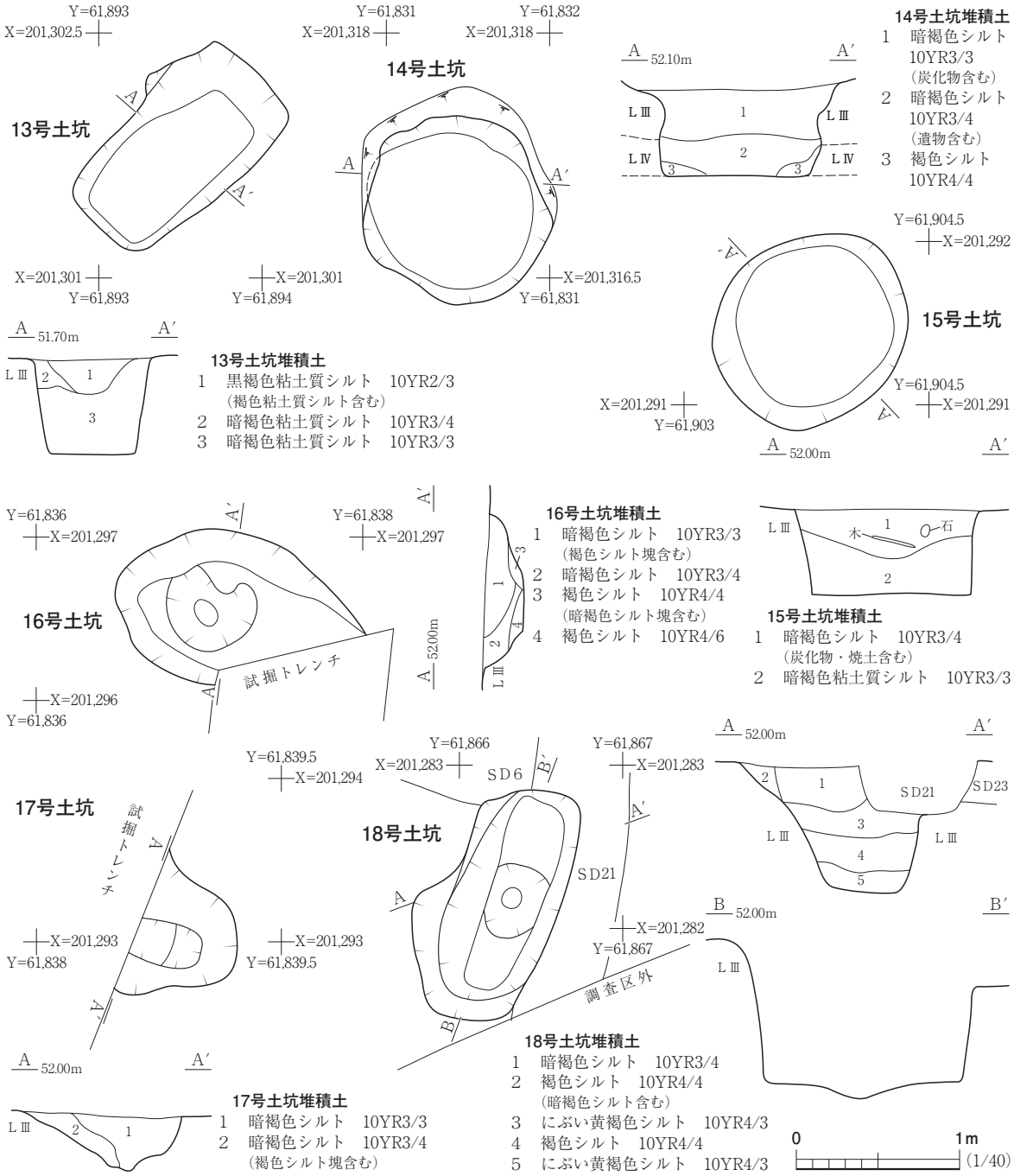


図５　13～18号土坑

面に向かって広がっていく。

堆積土は３層に分層した。ℓ１・２は周囲からの自然流入土、ℓ３は壁の崩落土と判断した。なお、ℓ１・２には遺物が含まれていた。

遺　　物（図６、写真19）

遺物は縄文土器が３点出土した。いずれも器面の風化が進んでいて、肉眼での文様の観察は難しいが、地文の縄文がわずかに遺存する。図６－１は繊維が認められるため、縄文時代早期～前期のものと判断した。図６－２・３は繊維は確認されなかったが、１と同時期のものと推定している。

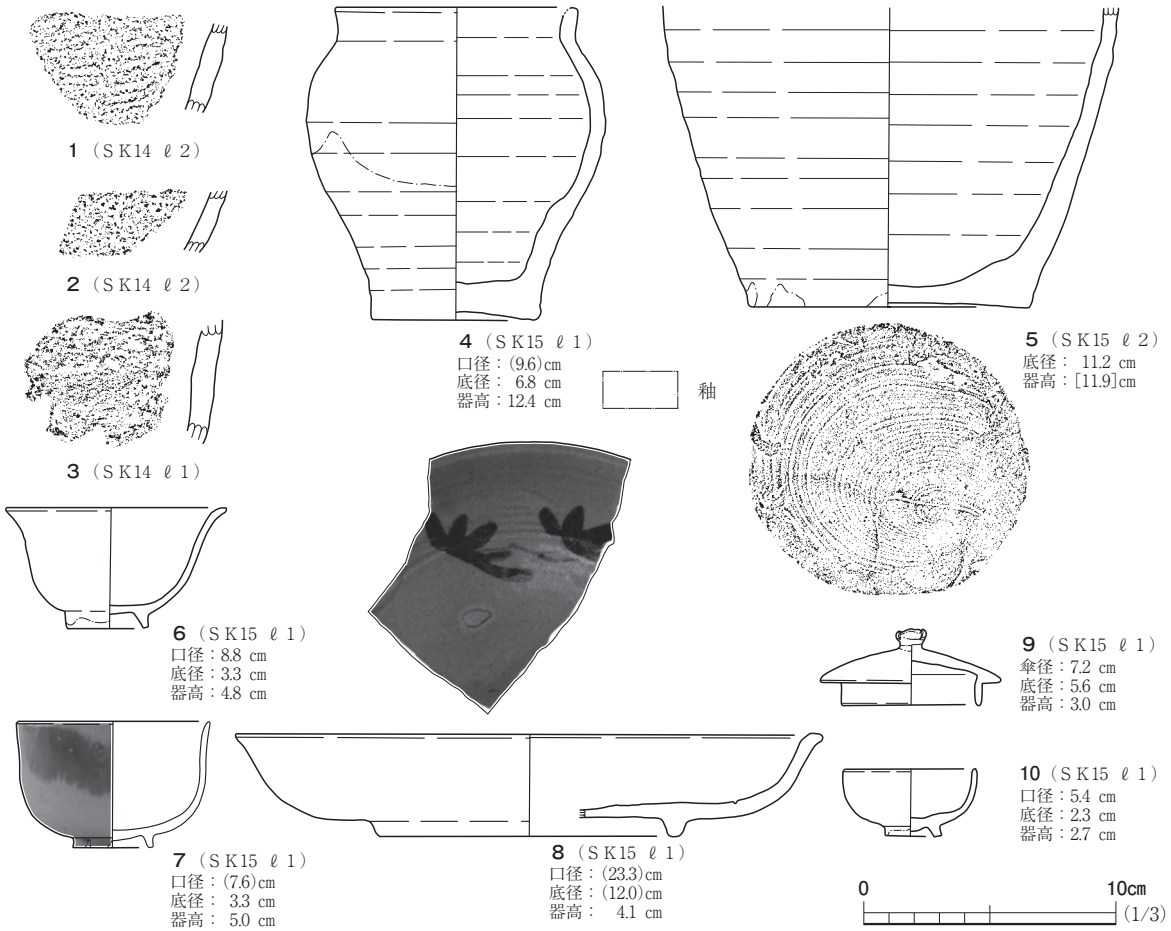


図６　14・15号土坑出土遺物

ま と め

本遺構の形状の特徴から貯蔵穴と推測される。所属時期は、堆積土中から出土した遺物から、縄文時代早期～前期頃と考えられる。　（鶴　見）

15号土坑　ＳＫ15

遺　　構（図５、写真６）

本遺構は、調査区東部のＩ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴が点在する。

遺構の平面形は楕円形である。長軸の長さが1.21ｍ、短軸の長さが1.1ｍ、検出面からの深さが51㎝である。周壁は急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。

堆積土は２層に分層した。ℓ１・２ともに自然堆積土と判断したが、ℓ１は炭化物・焼土に加えて、木片も含まれていた。ℓ１・２から遺物が出土したが、特にℓ１からの出土量が多い。このため、これらの含有物については人為的に捨てられた可能性もある。

遺　　物（図６、写真21）

遺物は15点出土しており、２点は古代の土師器、13点は近世の陶器である。近世陶器は２点が

岸窯製品、11点が大堀相馬焼である。このうち陶器７点を図示した。

図６－４・５は岸窯製品、同図６～10は大堀相馬焼である。図６－４は壺で、復元実測したものである。内面及び外面の下部に釉が掛かっている。また、内外面ともにロクロ目が明瞭に観察される。口縁部は短く、わずかに外反する。底部には回転糸切りの痕跡が残っている。また、内面には一部に白色の付着物が認められる。

図６－５は、口縁部から胴部上半がないため器種は明確ではないが、甕または水差し等の器種が想定される。内外面ともに、白色の釉が掛かっている箇所と、青みを帯びた鉄釉が掛かっている箇所とがある。また、内外面ともに、ロクロ目が明瞭に観察される。内面の見込み部には、重ね焼き痕跡が残り、５箇所の剝離痕が見られる。

図６－６は端反碗である。底部と高台部以外は全体的に釉が掛かっている。口縁部は大きく外反し、さらに口唇部をわずかに外側につまみ出している。図６－７は釉を流し掛けした腰張碗である。底部と高台部以外に釉が掛かっている。

図６－８は見込部に絵のある鉄絵皿である。腰部付近から底部、高台部にかけては釉薬が掛かっておらず、それ以外の箇所には緑釉が掛かる。口縁部は外反し、口唇部が外側に突出する。見込部には鉄釉で草が描かれている。また、見込み部には大きさ１㎝程の剝離痕があり、重ね焼きの痕跡と推定する。

図６－９は蓋で、完形品である。外面にのみ釉が掛かっている。摘み部分には、縦方向の浅い刻み目が観察される。図６－10は小杯で、ほぼ全面に釉が掛かっている。

図６－６・７は18世紀末～19世紀初頭、同図８は18世紀中葉～後葉、同図９は18世紀後葉のものと考えられる。この他、図示できなかったものについては、全て大堀相馬焼で、猪口１点、土瓶１点、端反碗１点、碗類の口縁部２点、小杯１点である。

ま と め

本遺構の性格については不明だが、所属時期は堆積土中から出土した遺物から、近世でも18世紀中葉以前と考えられる。（鶴　見）

16号土坑　ＳＫ16（図５）

本遺構は、調査区西部のＢ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南東に３ｍには17号土坑がある。

遺構の一部が、試掘調査時のトレンチで掘削されているが、平面形は楕円形と推定する。規模は、長軸の残存する長さが1.54ｍ、短軸の長さが0.94ｍ、検出面からの深さが24㎝である。底面の西寄りがわずかに窪む。周壁の立ち上がりは緩やかである。

堆積土は４層に分層した。ℓ１は暗褐色シルト中に褐色シルト塊を含み、人為的に埋め戻したものと判断した。ℓ２～４は自然堆積土で、このうちℓ３は壁の崩落土を含んでいる。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、形態的な特徴や出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。　（鶴　見）

17号土坑　ＳＫ17（図５）

本遺構は、調査区西部のＢ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北西に３ｍには16号土坑がある。

本遺構は、西半が試掘調査時のトレンチで掘削されている。遺構の平面形は不整形を呈するが、もともとは楕円形に近い形状と推定している。規模は、南北の長さが0.91ｍ、東西の長さが0.62ｍ、検出面からの深さが32㎝である。周壁の立ち上がりは緩やかな箇所もあるが、急な箇所もあり一定ではない。また、底面には凹凸が多く認められる。

堆積土は２層に分層した。いずれも自然堆積土と判断していて、遺物は出土していない。

本遺構は、形態的な特徴や出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。　（鶴　見）

18号土坑　ＳＫ18（図５、写真６）

本遺構は、調査区西部のＥ４グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。６・21号溝跡と重複しており、本遺構の方が両者よりも古い。

遺構の平面形は長方形を基調とする。規模は、長軸の長さが1.49ｍ、短軸の長さが0.74ｍ、検出面からの深さが77㎝である。南西壁及び南壁上部が崩れているが、土坑下部の立ち上がりは全体的に垂直に近い。底面は中心部がわずかに窪む。

堆積土は５層に分層した。東半は、上部の堆積土が重複する21号溝跡に掘り込まれている。ℓ２は壁の崩落土、それ以外は周囲からの自然流入土と判断した。これらの堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。　（鶴　見）

19号土坑　ＳＫ19（図７）

本遺構は、調査区西部のＢ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。６号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。

遺構は南端部が、６号溝跡に壊されているが、平面形は隅丸長方形と推定される。南北の残存する長さが1.16ｍ、東西の長さが0.87ｍ、検出面からの深さが51㎝である。６号溝跡の南壁よりも南側に掘り込みが確認できないことから、長軸の規模は1.5ｍ以内と推定される。周壁の断面形は逆台形を呈する。また、底面は北部から南部に向って緩やかに高くなる。

堆積土は暗褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。遺物は出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。　（鶴　見）

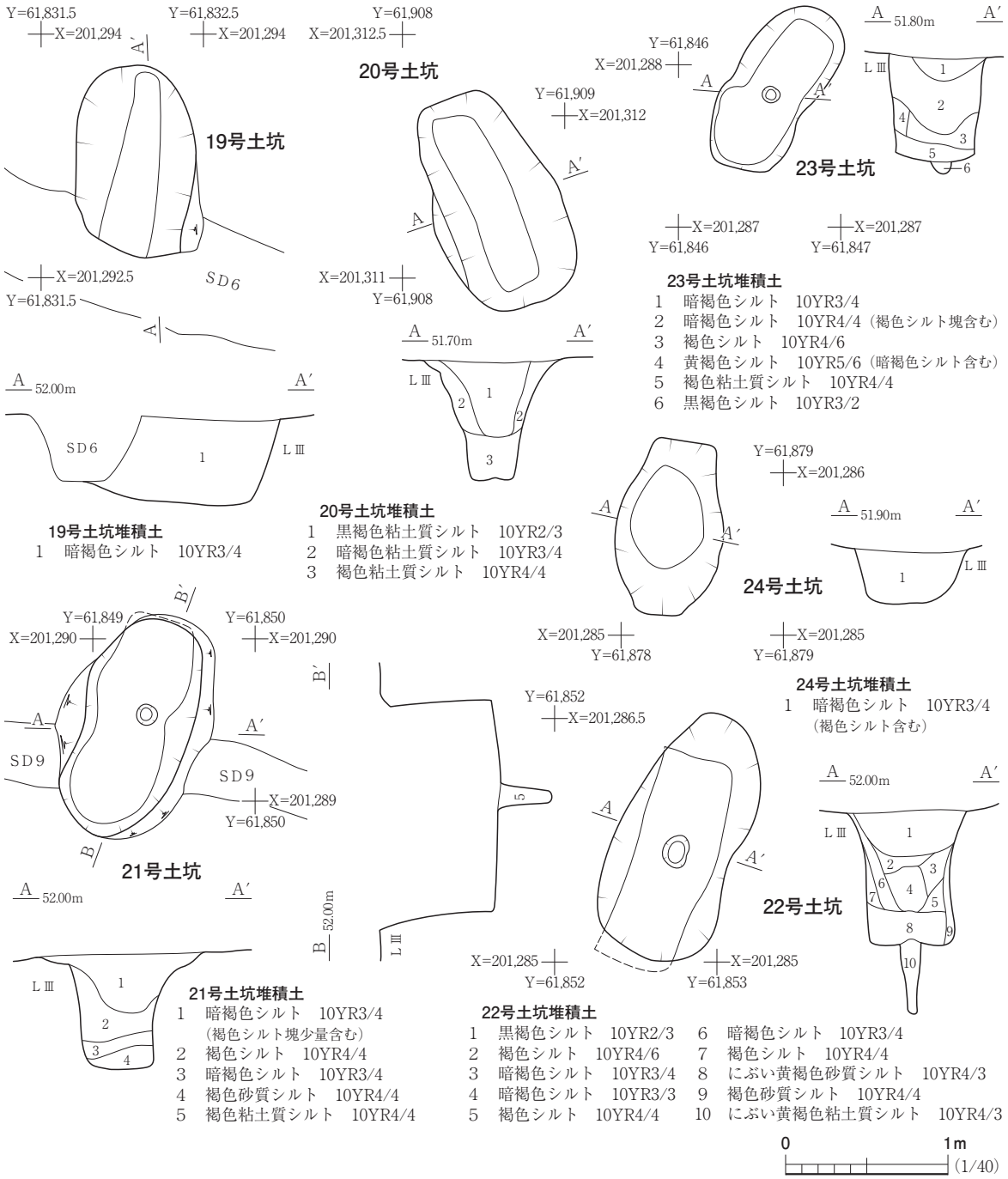


図７　19～24号土坑

20号土坑　ＳＫ20（図７）

本遺構は、調査区東部のＩ１グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴が点在する。

平面形は長方形である。規模は、長軸の長さが1.36ｍ、短軸の長さが0.79ｍ、検出面からの深さが71㎝である。断面形は逆台形で、底部から検出面にかけて一定の角度で立ち上がる。底面は平坦で、小穴等は確認されなかった。

堆積土は３層に分層し、ℓ１・３は周囲からの流入土、ℓ２は壁の崩落土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。（鶴　見）

21号土坑　ＳＫ21（図７、写真６）

本遺構は、調査区西部のＣ３・４グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。９号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。

遺構の平面形は楕円形である。長軸の長さが1.43ｍ、短軸の長さが0.92ｍ、検出面からの深さが71㎝である。土坑上部の壁が崩落しているが、周壁はほぼ直立し、北壁ではわずかに抉れている。底面は平坦で、中央部からわずかに北寄りの場所で小穴を確認した。小穴は径12㎝の円形で、深さは32㎝である。

堆積土は５層に分層した。いずれも暗褐色ないし褐色を基調とし、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。底面の小穴は杭の痕跡とみられる。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。（鶴　見）

22号土坑　ＳＫ22（図７）

本遺構は、調査区西部のＤ４グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北端部が６号溝跡と接している。

遺構の平面形は楕円形である。長軸の長さが1.56ｍ、短軸の長さが0.81ｍ、検出面からの深さが82㎝である。周壁はほぼ直立するが、南壁では下部が抉れている。底面は平坦で、中央部から小穴を一基確認した。小穴は楕円形を呈し、南北21㎝、東西14㎝、深さは45㎝である。

堆積土は10層に分層した。ℓ１・３・４・８・10は周囲からの流入土、ℓ２・５・６・７・９は壁の崩落土と判断した。いずれの層中からも遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。底面の小穴は杭の痕跡とみられる。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。（鶴　見）

23号土坑　ＳＫ23（図７、写真６）

本遺構は、調査区西部のＣ４グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。６・７号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。

遺構の平面形は楕円形である。長軸の長さが1.12ｍ、短軸の長さが0.51ｍ、検出面からの深さが62㎝である。周壁はほぼ直立し、底面も平坦である。底面中央部から小穴を一基確認した。小穴は円形で、径10㎝、土坑底面から小穴底面までの深さは７㎝である。

堆積土は６層に分層した。ℓ１・２・４～６は周囲からの流入土、ℓ３は壁の崩落土と判断した。いずれの層中からも遺物は出土していない。

本遺構は、形状の特徴から落し穴と判断した。底面で確認した小穴は、杭の痕跡の可能性もあるが、杭を刺した痕跡としては浅いため断定はできない。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、縄文時代のものと推定している。（鶴　見）

24号土坑　ＳＫ24（図７、写真６）

本遺構は、調査区西部のＦ４グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南に１ｍには15号溝跡がある。

遺構の平面形は楕円形である。規模は、長軸の長さが1.08ｍ、短軸の長さが0.77ｍ、検出面からの深さが22㎝である。遺構の断面形は逆台形で、底面はわずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。

堆積土は暗褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、出土遺物がなく、性格を特定する所見も得られなかったため、時期・性格ともに不明である。（鶴　見）

25号土坑　ＳＫ25（図８）

本遺構は、調査区西部のＥ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、東側には10号溝跡が隣接している。

遺構の平面形は楕円形である。長軸の長さが1.12ｍ、短軸の長さが0.98ｍ、検出面からの深さが最大31㎝である。周壁は底面から検出面に向けて緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、出土遺物がなく、性格を特定する所見も得られなかったため、時期・性格ともに不明である。（鶴　見）

26号土坑　ＳＫ26（図８、写真６）

本遺構は、調査区西部のＡ３・４グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北側に６～８号溝跡が隣接している。

遺構の平面形は隅丸方形である。規模は、南北の長さが2.2ｍ、東西の長さが2.48ｍ、検出面からの深さが最大66㎝である。遺構の周壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は細かな凹凸が認められる他、底面中央部付近で長軸1.29ｍ、短軸0.8ｍ程の範囲で大きく窪んでいる。

堆積土は８層に分層した。いずれも自然堆積土と判断している。ℓ１～６は、隣接する６～８号溝跡の堆積土と近似する。ℓ７・８は地山との色調の違いがあまりないが、土のしまり具合がわずかに異なる。いずれの堆積土中からも遺物は出土していない。

本遺構は、遺物が出土しておらず、性格を特定する所見も得られなかったため、時期・性格共に

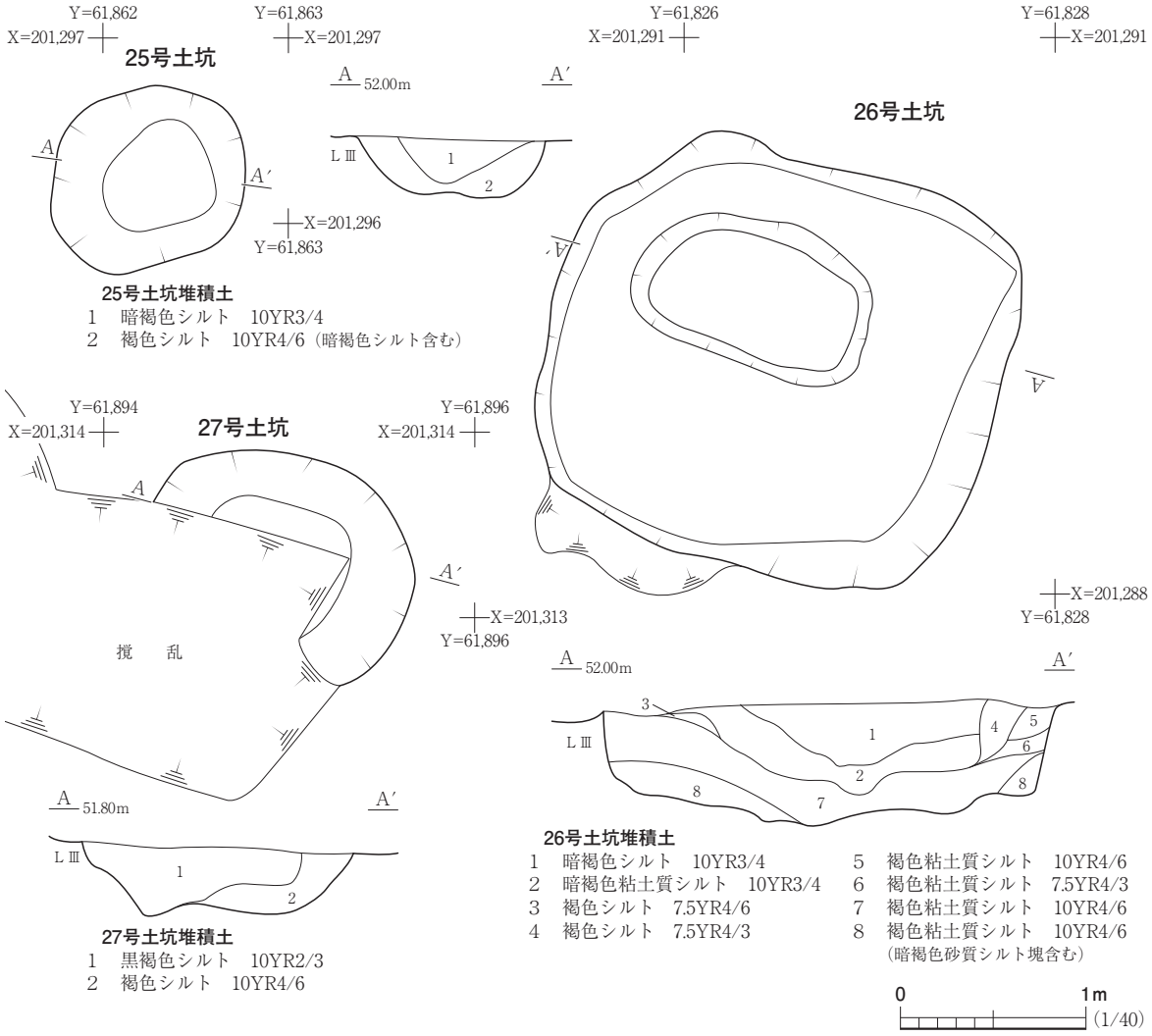


図８　25～27号土坑

不明である。ただし、本遺構の堆積土は、６～８号溝跡の堆積土と近似することから、中・近世に位置付けられる可能性がある。　（鶴　見）

27号土坑　ＳＫ27（図８）

本遺構は、調査区東部のＨ１グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが周囲には小穴が点在する。

遺構は、南半部が近現代の攪乱によって大きく失われている。確認できた規模は、東西の長さが1.46ｍ、南北の長さが1.07ｍ、検出面からの深さが最大36㎝である。

周壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は逆台形を呈する。底面は中央部が高く、周縁部が低い。

堆積土は２層に分層した。ℓ１が黒褐色シルト、ℓ２が褐色シルトで、いずれも自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本遺構は、出土遺物がなく、性格を特定する所見も得られなかったため、時期・性格ともに不明である。　（鶴　見）

第３節　溝　　跡

溝跡は、25条検出した。大きく見ると、東西方向に掘られた溝跡と、南北方向に掘られた溝跡に分けられる。いずれも中・近世の区画溝あるいは道跡に伴う側溝と推定される。

１号溝跡　ＳＤ１

遺　　構（図９・10、写真７）

本遺構は、調査区東部のＦ１グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。Ｆ１Ｐ１と重複しており、本遺構の方が古い。この他、東に２ｍには１号特殊遺構や２号溝跡がある。

南北に延びる溝跡で、検出した範囲での長さは南北長4.5ｍ、東西幅0.42ｍ前後である。底面は平坦だが、北から南に向かってわずかに傾斜している。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は南北方向に延びる溝跡である。遺構の北側及び南側が調査区外のため、全体の規模や形状等は不明だが、中・近世の遺物が出土した２号溝跡と関連する溝跡の可能性が高い。具体的には屋敷跡の区画溝あるいは道跡の側溝等の性格が想定される。　（鶴　見）

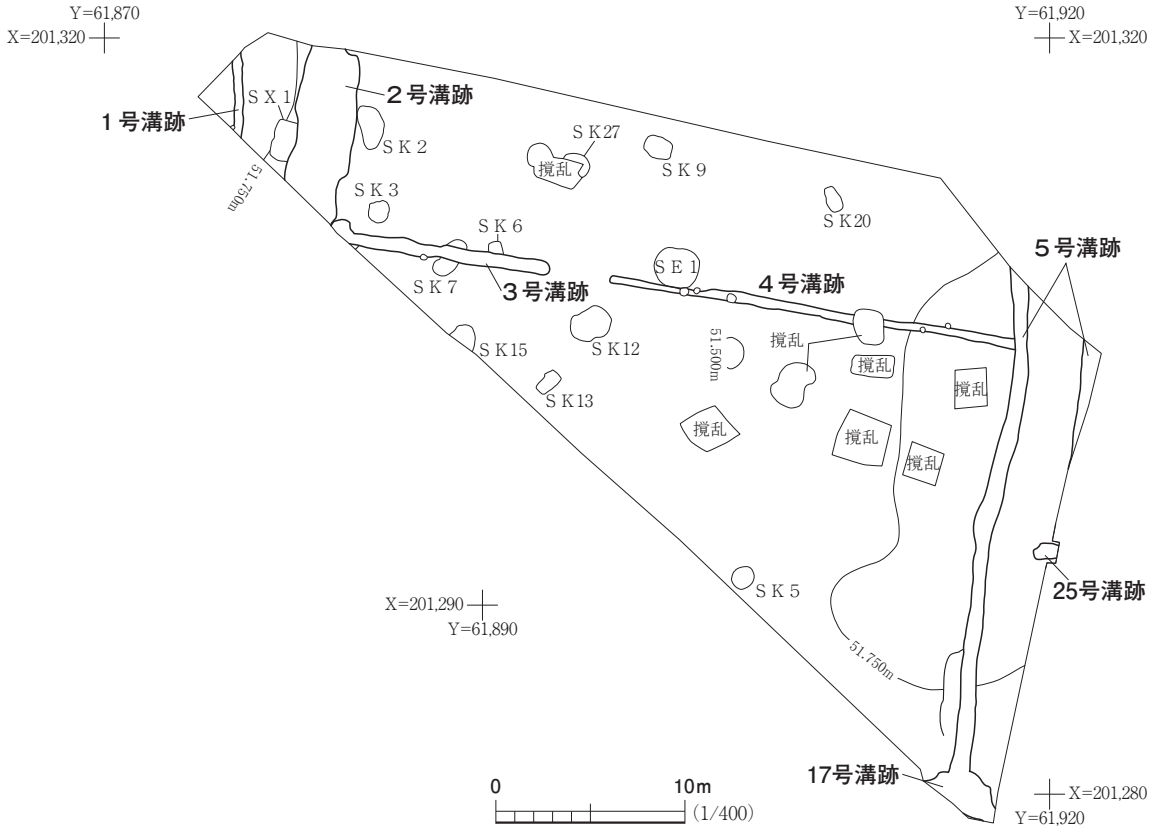


図９　１～５・17・25号溝跡

２号溝跡　ＳＤ２

遺　　構（図９・11、写真８）

本遺構は、調査区東部のＦ１、Ｇ１グリッドで検出した溝跡である。１号特殊遺構と重複しており、本遺構の方が新しい。この他、東に２号土坑や３号溝跡が隣接する。

南北方向に延びる溝跡で、検出した範囲での規模は、南北長9.31ｍ、最大東西幅3.28ｍ、検出面からの深さは最大40㎝である。幅は北端部で最小1.75ｍを測る。底面は平坦ではなく、凹凸が多い。南端部付近では、溝状の凹みが南北方向に延びている。また、底面は全体的に北から南に向かって緩やかに傾斜している。

堆積土は３層に分層した。ℓ１・３は自然堆積土と判断した。一方、ℓ２は人為的に埋められたとみられる層で、炭化物・焼土塊や褐色シルト塊が含まれ、遺物も多量出土している。この他、ℓ１・３からも遺物が少量出土した。

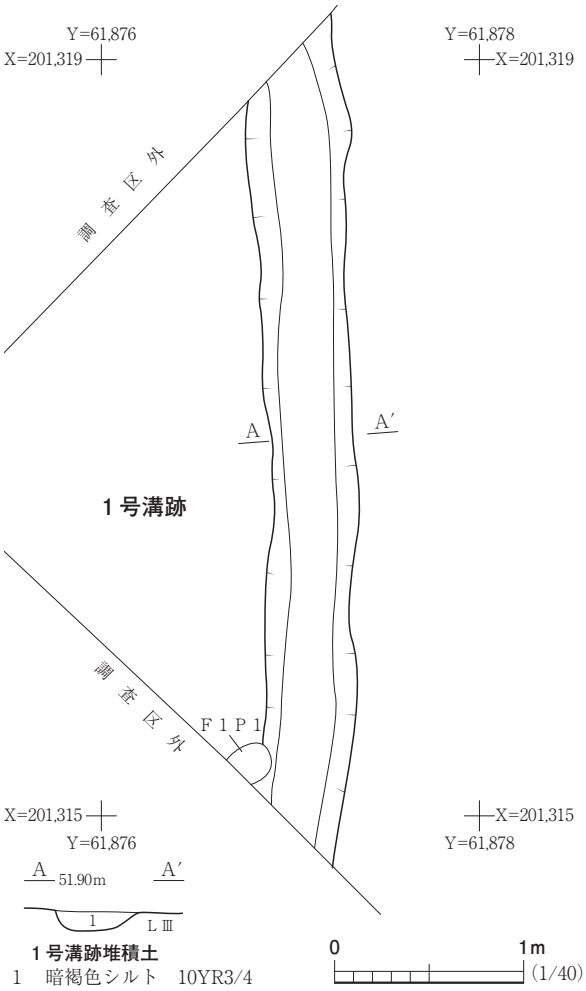


図10　１号溝跡

遺　　物（図12・13、写真22・23）

遺物は296点が出土した。その内訳は、縄文土器が３点、古墳時代～古代の土師器３点、近世の土師質土器３点、瓦質土器１点、近世の陶磁器が286点である。陶磁器の内訳は、岸窯製品が238点、大堀相馬焼が20点、肥前系が23点、瀬戸系・京焼系が３点、産地不明が２点である。このうち、未掲載のものは、岸窯製品が229点で、蓋８点、擂鉢31点、水注類169点、甕５点、壺４点、火鉢２点、鉢３点、丸皿１点、花生１点、香炉２点、徳利２点、不明１点である。大堀相馬焼の未掲載遺物は15点で、土瓶１点、碗類13点、不明１点である。肥前系の未掲載遺物は16点で、皿７点、碗１点、不明８点である。近世の土師質土器と瓦質土器はいずれも未掲載としたが、土師質土器は火鉢２点、器種不明１点、瓦質土器は器種不明１点である。

遺物は25点を掲載した。このうち、図12－１～９は岸窯製品の陶器である。

図12－１は手付水注である。ほぼ完形で、ロクロ成形された本体に別づくりの把手を貼り付けている。外面は底部以外、全面的に釉が掛かっている。

図12－２は擂鉢で、図上で径を復元した。未施釉のもので、内面の卸目は底部から胴部の中程まで確認できる。

図12－３・４は蓋である。未施釉のもので、２点ともほぼ完形である。いずれも摘みが付く

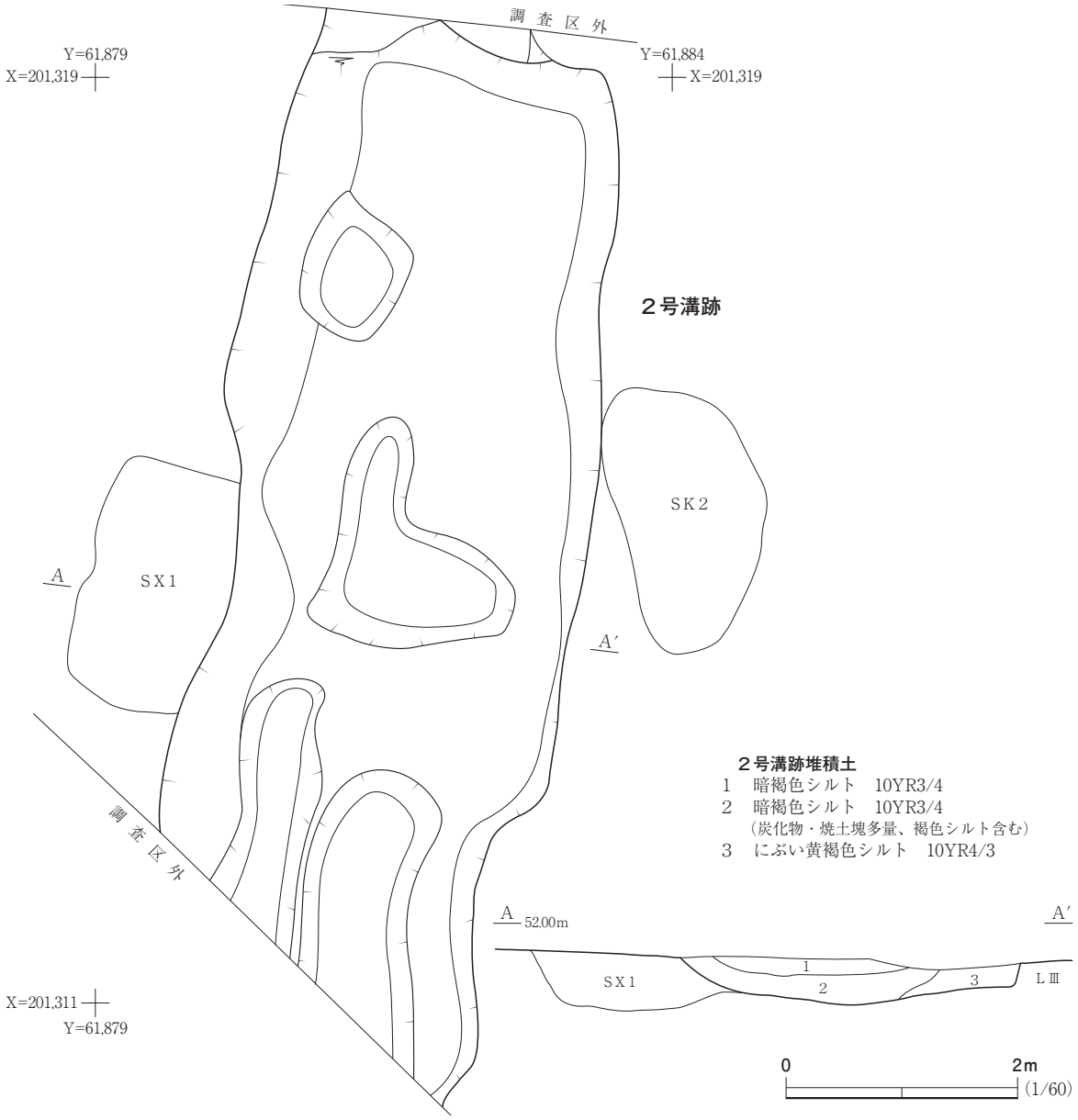


図11　２号溝跡

が、３は摘みの上部が欠損している。

図12－５は鉢である。下半部が残るが、口縁部が欠損している。胴部の内外面に薄く釉が掛かかる。底部には別づくりの脚部が４脚貼り付けられている。見込みには、重ね焼きの痕跡とみられる剝離痕が４箇所確認される。また、底部にも、周囲とは色調の異なる円形の箇所が４箇所認められ、重ね焼き時の窯道具が付着していた痕跡と推定される。

図12－６は香炉である。胴部外面と内面に釉が掛かっている。底部には乳頭状の脚部が２脚貼り付けられているが、遺存状況から、本来は４脚と推定される。また、見込み部には重ね焼きの痕跡とみられる剝離痕が２箇所確認される。

図12－７は丸皿で、破片から径を図上復元している。内面全体と、外面の口縁部付近に釉が掛かっている。

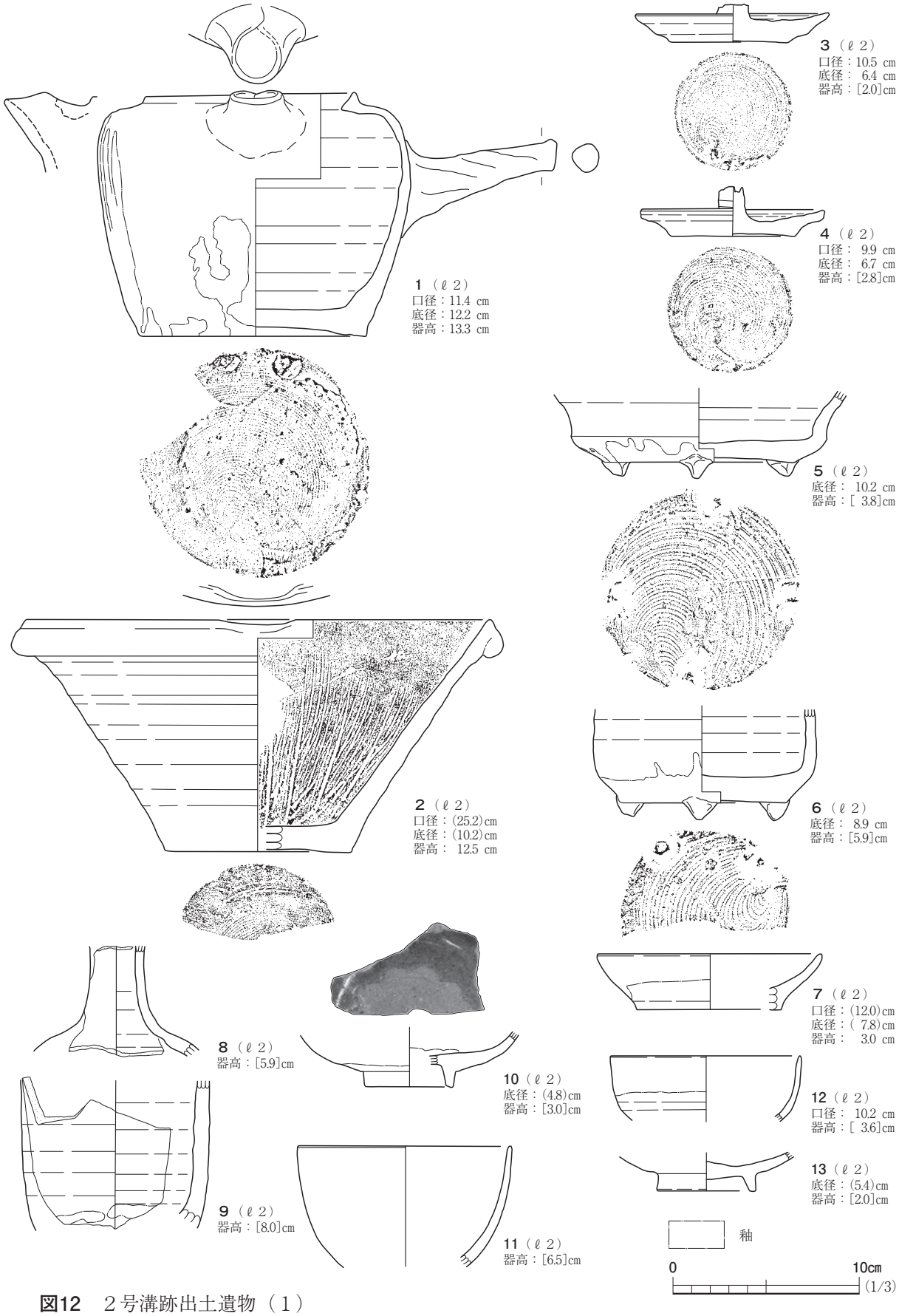


図12　２号溝跡出土遺物（１）

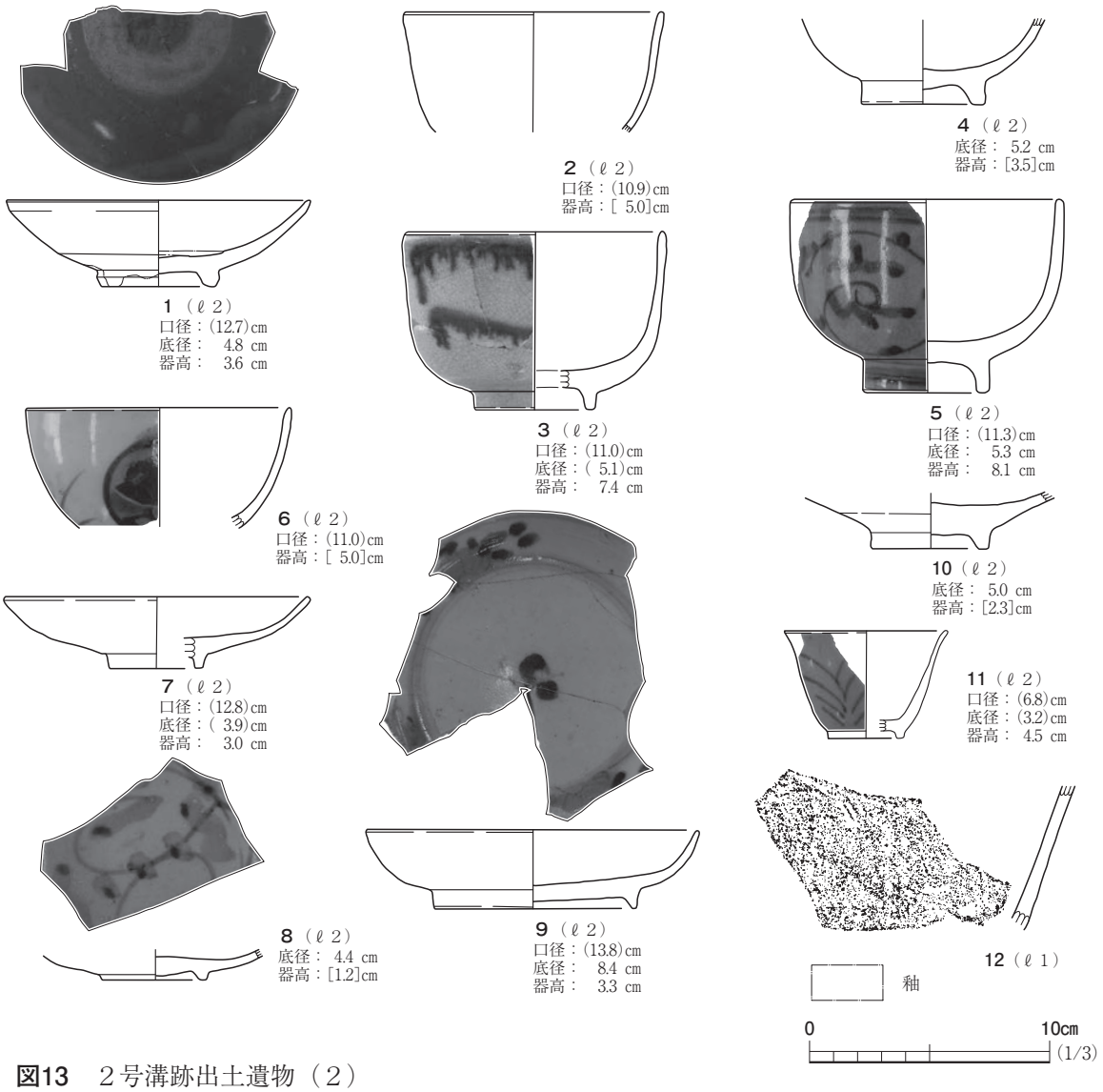


図13　２号溝跡出土遺物（２）

図12－８・９は徳利で、接合しないが色調等の特徴が近似するため、同一個体と考えている。外面には全体的に釉が掛かり、掛け流した釉も認められる。内面は外面に比べ釉が薄い。

図12－10～13、図13－１には大堀相馬焼の陶器をまとめた。図12－10～12は碗で、いずれも破片資料である。10は見込みの中心部と底部・高台には釉が掛からない。11は内外面とも全体に釉薬が施されている。12は灰釉・鉄釉掛け分け碗である。

図12－13は香炉で、外面には釉薬が掛かるが、内面には釉薬が施されていない。図13－１は皿で、高台と底部以外に釉が掛かる。見込みは蛇の目釉剝ぎになっている。

図13－２・３は京焼系の陶器である。２は碗の口縁部片で、破片から径を図上復元した。３は緑釉が流し掛けられている。

図13－４は瀬戸系の陶器碗である。

図13－５～10には肥前系の磁器をまとめた。図13－５・６は碗で、５は外面には蛸唐草文が描かれ、６は外面に花と草が描かれている。

図13－７～９は皿で、７・８は図上で径を復元した。６は青色の薄い釉薬が掛かる。８・９は絵皿で内面に草木が描かれている。７・８共に高台の径が小さく、高さも低い特徴がある。また、高台には砂粒が付着しており、初期伊万里とみられる。図13－10は肥前系の青磁碗で、見込み部が蛇の目釉剝ぎ状になっている。

図13－11は磁器の猪口で、伊万里系のものだが、東北地方産の可能性もある。

図13－12は縄文土器である。深鉢の胴部片で、後期以降のものと推定する。

出土した陶磁器は全て近世のもので、18世紀後半～19世紀初頭のものが中心だが、17世紀前半の初期伊万里もわずかに含まれている。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる幅の広い溝跡である。屋敷跡と推定される小穴が集中する箇所の西端部に当たり、本遺構より西側では小穴がほとんど確認されないため、屋敷跡の西を区画する溝跡と考えられる。人為的に埋められた層からは、18世紀後半～19世紀初頭頃の陶磁器が出土しており、その頃には埋められたと推定されるが、つくられた時期は特定できない。（鶴　見）

３号溝跡　ＳＤ３

遺　　構（図９・14、写真７）

本遺構は、調査区東部のＧ１・２、Ｈ２グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。６・７号土坑と重複しており、両者よりも本遺構の方が新しい。西側には２号溝跡が隣接し、東に３ｍには４号溝跡がある。また、周囲には多くの小穴が点在している。

東西方向に直線的に延びる溝跡だが、西端部で南方向に曲がり、調査区外に続いている。検出した範囲での規模は、東西長11.8ｍ、東西幅0.66～12.4ｍ、検出面からの深さは26～50㎝である。

幅は中央付近で広がって二段掘り状になる以外は、ほぼ一定である。底面は東に向かって低くなっている。また、西端部は、東西方向に延びている箇所よりも一段低くなっている。

堆積土は３層に分層した。ℓ１～３は周囲からの流入土で、このうちℓ２・３は壁の崩落土も含んでいると考えている。また、堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西方向に延びる溝跡で、軸線方向を同じくする４号溝跡と一連の溝跡と判断した。溝跡周辺には多くの小穴が認められることから、屋敷跡を区画する機能が想定される。４号溝跡との間の陸続きとなる箇所は、屋敷跡の出入口にあたる可能性が高い。遺物は出土していないが、中・近世に属する溝跡と推定している。（鶴　見）

４号溝跡　ＳＤ４

遺　　構（図９・15、写真９）

本遺構は、調査区東部のＨ２、Ｉ２、Ｊ２グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面で

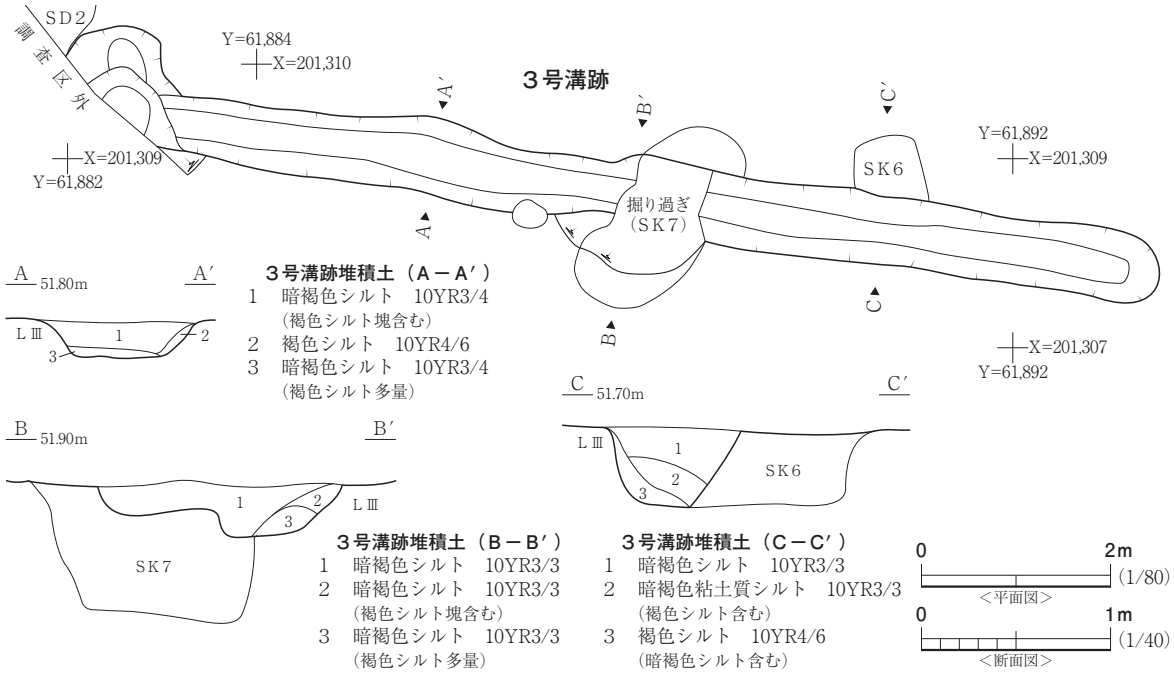


図14　３号溝跡

ある。５a号溝跡と重複しており、土層断面図Ｄ－Ｄ′によれば、本遺構は５a号溝跡の新段階の堆積土（ℓ１）よりは古いが、古段階の堆積土（ℓ２～４）よりは新しいと判断される。また、多数の小穴と重複しており、本遺構の方が古い。

溝跡は東西方向に延びており、東西長22.2ｍ、南北幅0.3～0.55ｍで、西端部付近が狭い。検出面からの深さは６～22㎝である。底面は西から東に向かって緩やかに傾斜している。

堆積土は２層に分層した。いずれも周囲からの流入土で、ℓ２には壁の崩落土も含まれていると考えている。堆積土中からは遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西方向に延びる溝跡で、軸線方向を同じくする３号溝跡と一連の溝跡と判断した。溝跡周辺には多くの小穴が認められることから、屋敷跡を区画する機能が想定される。３号溝跡との間の陸続きとなる箇所は屋敷跡の出入口にあたる可能性が高い。遺物は出土していないが、３号溝跡同様、中・近世に属すると推定している。（鶴　見）

５号溝跡　ＳＤ５

遺　　構（図９・16、写真10）

本遺構跡は、調査区東部のＪ２～５、Ｋ２・３グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。４・17号溝跡、小穴と重複しており、17号溝跡より新しく、小穴より古い。４号溝跡は土層断面図Ａ－Ａ′によれば、本溝跡の新段階の堆積土（ℓ１）よりも古いが、古段階の堆積土（ℓ２～４）よりは新しいと判断される。

５号溝跡は東西に平行する２条の溝跡を一括したもので、西側を５a号溝跡、東側を５b号溝跡

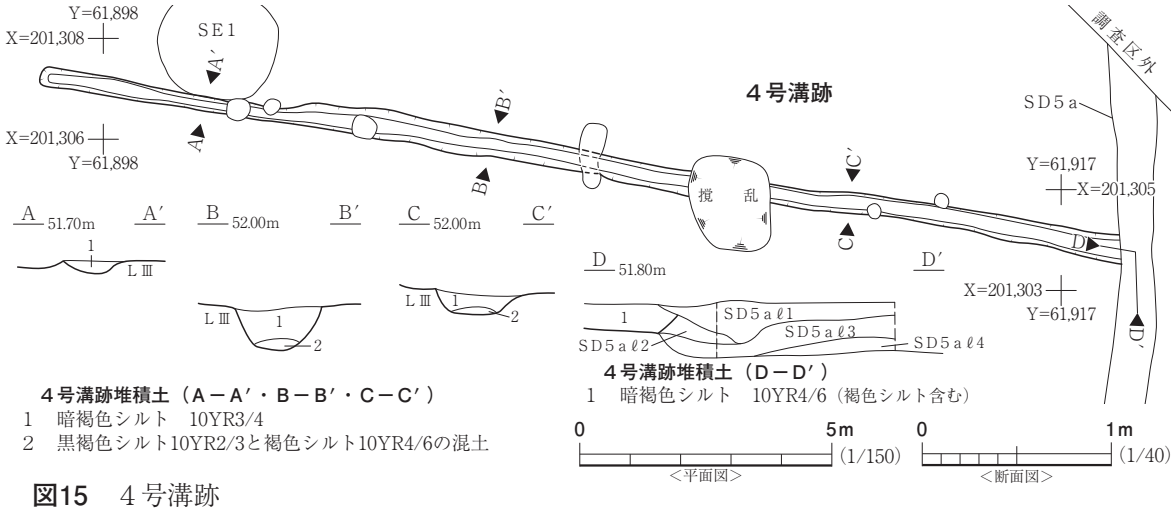


図15　４号溝跡

とした。両溝跡の間隔は2.7～2.8ｍ程である。

５a号溝跡は、検出した範囲での規模は28.6ｍ、幅は0.6～1.1ｍだが、南部では二段掘り状になり、幅が1.7ｍ程まで広がって南端部まで続く。検出面からの深さは、15～38㎝である。溝跡は一直線ではなく、緩やかに屈曲しながら南北方向に延びている。

堆積土は４層に分層した。ℓ１は重複する４号溝跡よりも新しい堆積土である。ℓ１は暗褐色シルトと褐色シルトの混土で、固くしまることから、人為堆積土と判断した。ℓ２～４は４号溝跡よりも古い堆積土である。ℓ２は褐色シルトを斑に含むため、人為堆積土と判断した。一方、ℓ３・４は自然堆積土である。いずれの層からも遺物は出土していない。

５b号溝跡は、東端が調査区外のため、幅の計測ができなかった。検出した範囲での長さは7.5ｍ、幅は推定１ｍ以上、検出面からの深さは38㎝である。

堆積土は、暗褐色シルトと褐色シルトの混土であり、人為堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は南北方向に平行して延びる溝跡であり、道跡に伴うものと判断した。溝と溝の間が路面部に当たり、溝は側溝と推定する。５a号溝跡は、少なくとも新旧２段階の変遷が確認され、新段階の溝は新たに掘り直したものと考えられる。

出土遺物がないため、詳細な時期は不明だが、中・近世に属すると推定している。　（鶴　見）

17号溝跡　ＳＤ17

遺　　構（図９・16）

本遺構は、調査区東部のＪ４・５グリッドで検出した遺構である。検出面はＬⅢ上面である。５号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。

部分的に検出した溝跡で、わずかに南側の壁が確認できたことから、東西方向に続くと推定している。検出した範囲では、東西4.15ｍ、幅1.9ｍ、検出面からの深さは87㎝である。底面は、西部

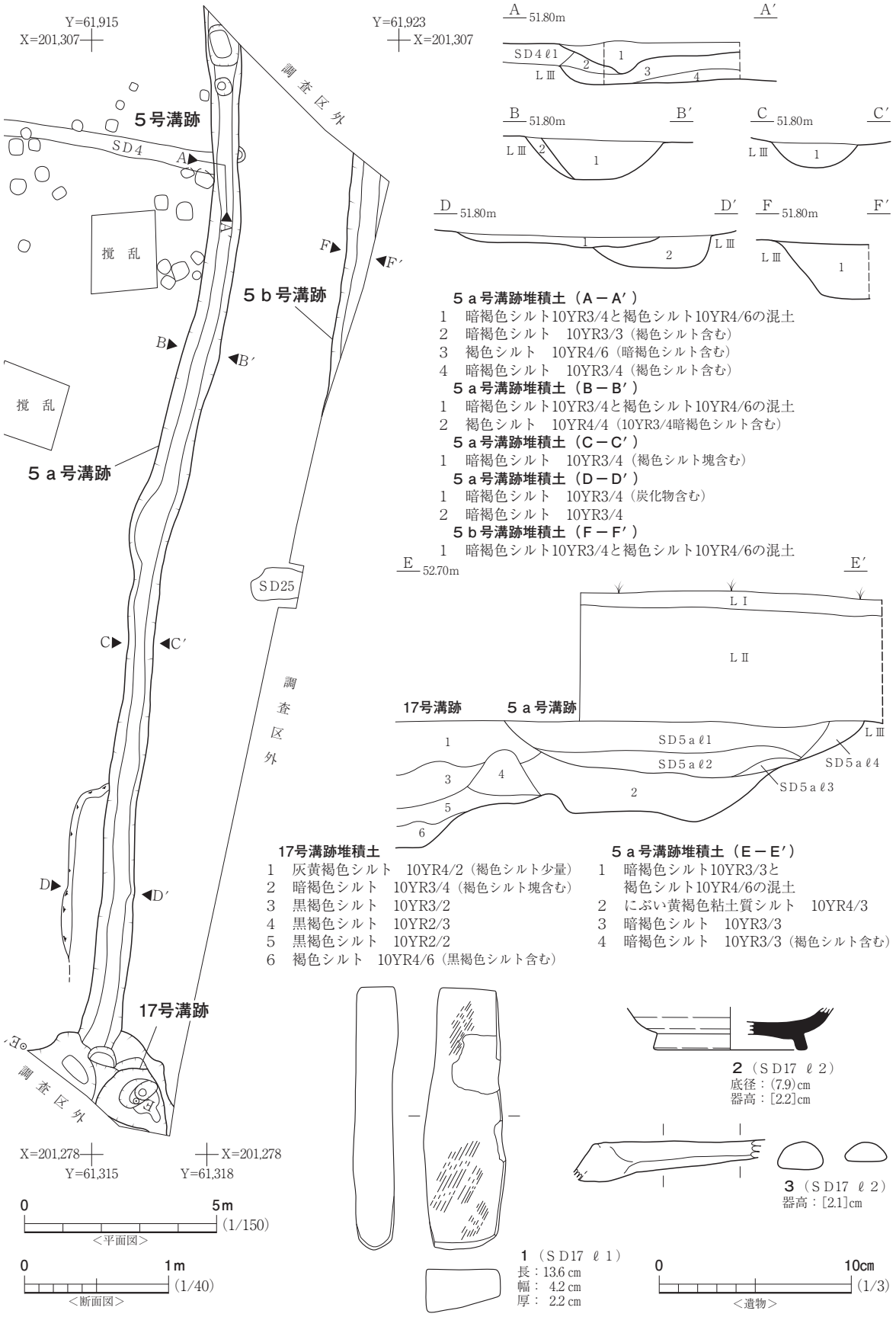


図16　５・17号溝跡、17号溝跡出土遺物

が東部に比べ浅い。

堆積土は６層に分層した。このうち、ℓ１～３・５・６は自然堆積土である。ℓ４は人為堆積土と判断した塊状の黒褐色シルト層である。

遺　　物（図16）

本遺構からは12点の遺物が出土した。内訳は古墳時代～古代の土師器７点、古代の須恵器１点、岸窯製品の近世陶器２点、近世の土師質土器１点、石製品１点である。このうち、図示可能な３点を掲載した。

図16－１は砥石である。表面は使用されたことにより、平滑になっている。図16－２は須恵器の高台付杯の底部で、底部は回転糸切りで切り離されている。図16－３は土師質の焙烙の把手部分である。２は古代、３は近世のものと判断している。

ま と め

本遺構は、出土遺物から近世の溝跡と考えられる。検出した範囲が限られているため、溝の方向等、不明な点が多い。　（鶴　見）

６号溝跡　ＳＤ６

遺　　構（図17・18、写真11）

本遺構は、調査区西部のＡ３、Ｂ３・４、Ｃ４、Ｄ４、Ｅ４グリッドで確認した溝跡で、検出面はＬⅢ上面である。重複する11・18・19・23号土坑及び23号溝跡よりは新しく、１号土坑及び

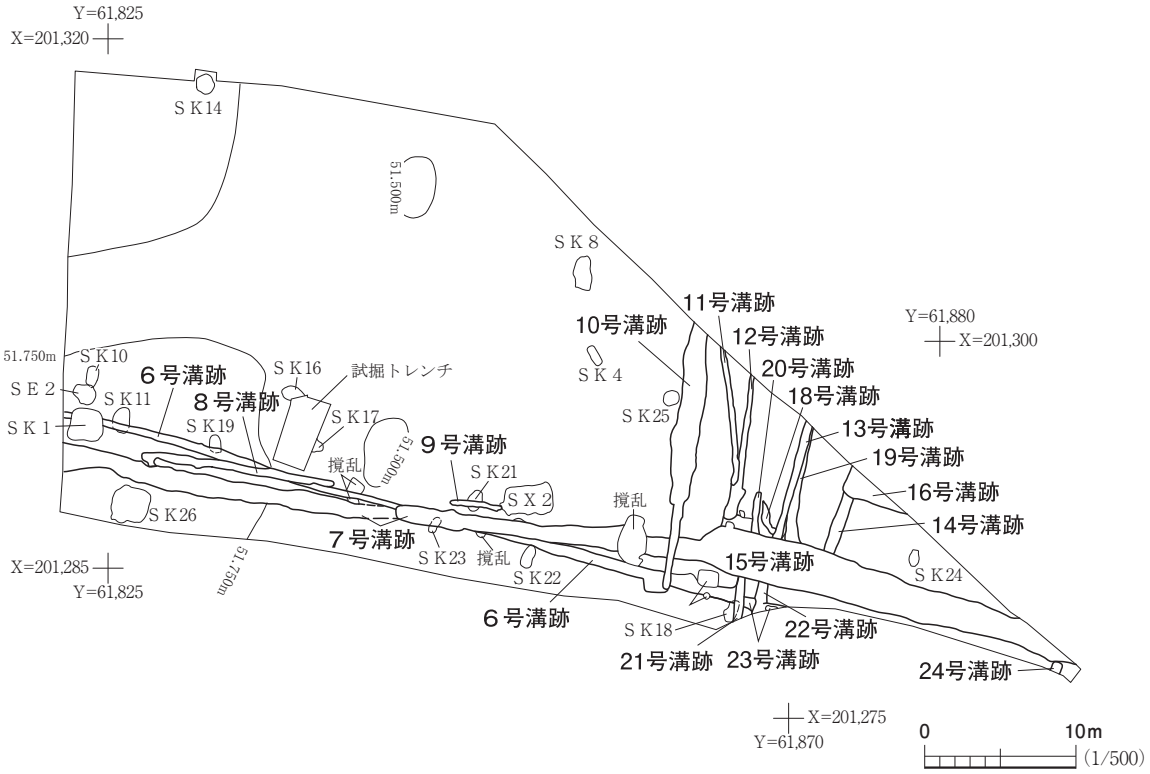


図17　６～16・18～24号溝跡

７・８・21号溝跡よりは古い。

東西方向に延びる溝跡で、西側の調査区外に続いている。検出した範囲での長さは45.8ｍ、幅は20～40㎝前後、検出面からの深さは30～40㎝前後である。底面の標高は西側から東側に向かって低くなっていく。西部から中央部にかけての断面形は、矩形または逆台形だが、東部では掘り込みの下部が垂直に近く、上部がハの字状に開く二段掘り状になっている。

堆積土は３層に分層した。ℓ１・２は周囲からの流入土だが、ℓ３は暗褐色シルトと褐色シルトの混土である。なお、ℓ３は土層断面図Ｆ－Ｆ′でのみ確認された層で、当該箇所に限って溝跡の幅が2.2ｍと広くなっている。ℓ３が堆積した箇所は別の遺構の可能性もある。

ま と め

本遺構は、東西方向に延びる溝跡である。中・近世の溝跡である７・15号溝跡よりも古い段階の区画溝と考えられる。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、本遺構も７・15号溝跡と同様に中・近世に属すると推定している。７・15号溝跡とは軸線方向が

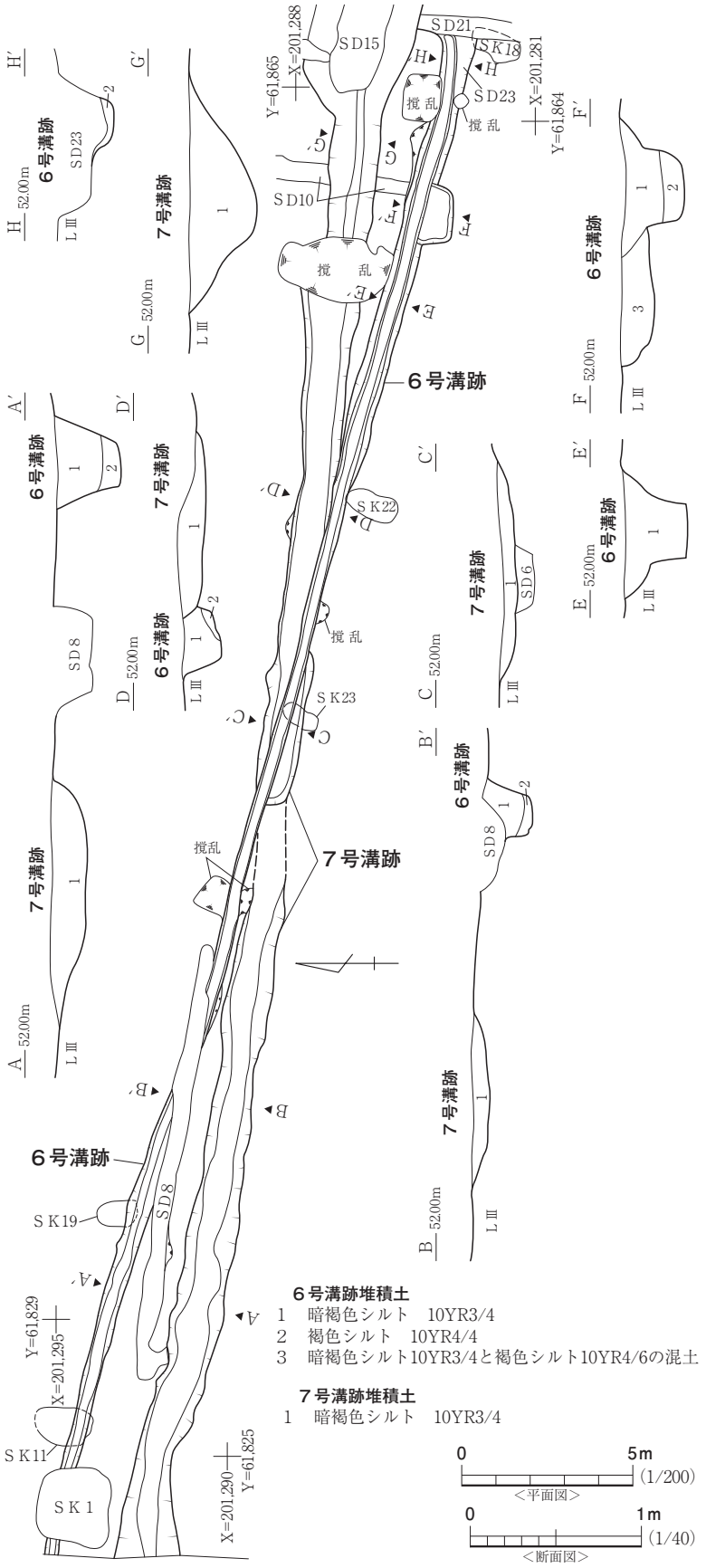


図18　６・７号溝跡

異なるため、土地区画が変化していった可能性がある。また、本遺構は23号溝跡と軸線方向が同じで、その延長線上にあるため、同溝跡の方向を意識してつくられた可能性もある。　（鶴　見）

７・15号溝跡　ＳＤ７・15

遺　　構（図17～19、写真12）

本遺構は、調査西部のＡ３、Ｂ３・４、Ｃ４、Ｄ４、Ｅ４、Ｆ４、Ｇ４・５グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。23号土坑、６・10・12～14・19～22号溝跡と重複しており、本遺構は10号溝跡よりも古く、それ以外の遺構よりも新しい。

東西方向に延びる溝跡で、西側及び東側の調査区外に続いている。検出した範囲での長さは68.5ｍである。溝跡の幅と深さはＥ４グリッドを境に異っている。幅が狭く検出面からの深さが浅い西部～中部を７号溝跡、幅が広く深い東部を15号溝跡として区別したが、堆積土の観察から一連の溝跡と判断している。

７号溝跡の規模は、検出した範囲での長さ42.4ｍ、幅１～1.9ｍで、西部は幅が均一ではないが、東部はほぼ一定である。また、検出面からの深さは10～40㎝前後で、西部が浅く、東部が深い。西部から中央部付近にかけては底面が広いが、15号溝跡との境界付近にあたるＥ４グリッドでは底面が狭く、薬研堀状になっている。堆積土は暗褐色シルトの単層で、15号溝跡のℓ１と同じ土層である。堆積土中から遺物は出土していない。

15号溝跡の規模は、検出した範囲での長さ26.1ｍ、幅1.5～３ｍ前後、検出面からの深さは90～100㎝前後である。西部の幅が相対的に広く、東部に行くに従って狭くなっている。検出面からの深さも西部が深く、東部が浅い。また、底面は西部から東部に向けて傾斜している。断面形は上部がハの字に開き、下部は矩形の二段掘り状になっている。

堆積土は８層に分層したが、遺構の箇所によって色調に若干の差異が認められる。ℓ１は自然堆積土で、７号溝跡から続く層である。ℓ２は褐色を基調とする粘土質シルト層で、多量の遺物を含む。また、東部では多量の石も検出されていて、人為的に埋められた層と判断した。ℓ３は黄褐色または褐色を基調とした層で、遺構上部の壁の崩落土を含んでいる。ℓ４は暗褐色または灰黄褐色を基調とする層で、粘質が強く、層の上部には遺物が少量含まれている。ℓ５～８は溝跡の下部に堆積した層で、陶磁器はほとんど出土しないが、木質遺物がわずかに含まれている。なお、ℓ４の堆積要因は判然としないが、ℓ５～８は自然堆積とみられる。

遺　　物（図20～24、写真20・24～29）

遺物は786点が出土した。このうち、未掲載遺物は、中世以前のものは縄文土器が１点、須恵器が４点、中世陶器が２点である。近世以降の遺物では、岸窯製品が355点、大堀相馬焼が264点、京焼系・瀬戸系が各１点、不明陶器が４点、肥前系磁器が45点、土師質土器が22点、瓦質土器が21点出土している。岸窯製品は、水注類が240点、擂鉢が72点、壺・甕類が15点、蓋７点、徳利７点、鉢７点、香炉２点、灯明皿１点、折縁皿１点、丸皿２点、火鉢１点という内訳である。同様

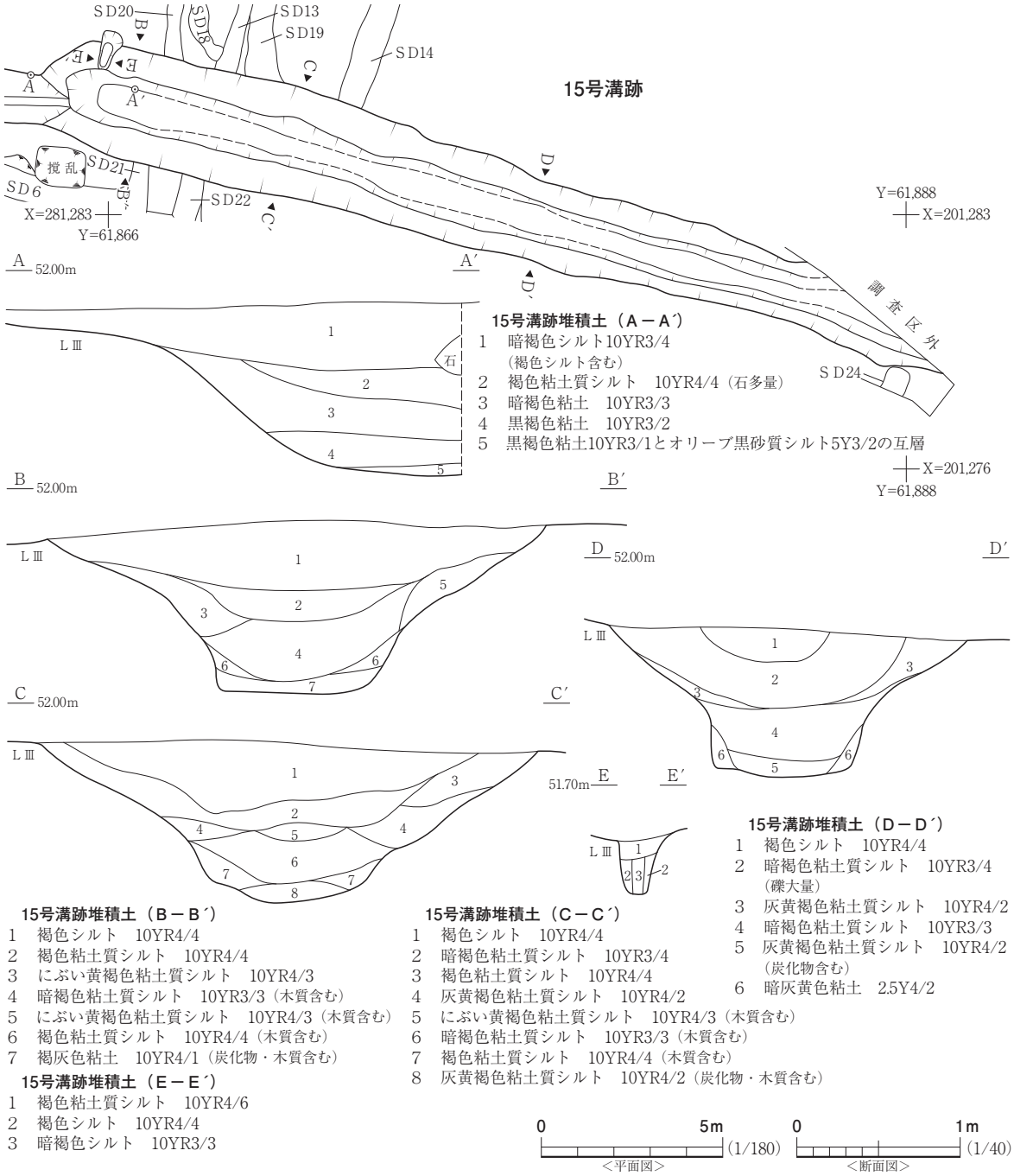


図19　15号溝跡

に、大堀相馬焼は、碗類212点、仏飯器８点、皿８点、土瓶10点、香炉６点、猪口２点、灰吹１点、不明17点で、肥前系は、碗19点、皿10点、猪口３点、徳利１点、不明12点である。その他については、全て器種は不明である。

掲載した遺物は66点である。

図20－１～３には須恵器をまとめた。いずれも甕の破片で、１・２は外面に平行タタキ目、３は格子状のタタキ目が認められる。

図20－４～８には中世陶器をまとめた。４～６はいずれも在地産の甕で、６は伊達市八郎窯跡

群のものに類似する。４・５は胴部、６は口縁部付近の破片である。７・８は、古瀬戸で、７は入子、８は小皿である。７は14世紀中頃、８は14世紀後半頃のものとみられる。

図20－９～23、図21－１～４には岸窯製品の近世陶器をまとめた。図20－９・14～16は蓋で、釉薬が掛かっていない素焼きのものである。摘みが欠損する９は上面に煤が付着しており、灯明皿として転用されている。14～16は口径や摘みの形状に差異がある。

図20－10は折縁皿である。釉薬が掛かった製品で、底部には回転糸切り痕が残っている。図20－11・12は灯明皿である。内外面全体に釉薬が施され、見込み部には斜めに貼り付けられた芯台が観察されるが、先端部は欠損している。

図20－13は香炉である。底部の切り離しは回転糸切りで、端部に短い脚部が貼り付けられる。

図20－17は口縁部が欠損するが、湯のみまたは灰吹と推定する。底部以外は全面に釉薬が掛かっている。

図20－18は花瓶である。内外面全体に鉄釉が施され、胎土も混ざりが少ない精製されたもので、焼き上がりは非常に良い。頸部が長く、頸部から口縁部はハの字状に開く。頸部と胴部は別づくりで、頸部には装飾性のある把手も貼り付けられている。

図20－19は注口部が欠損する手付水注である。底部付近を除き全体に釉薬が掛かっている。把手は本体とは別づくりのものを貼り付けている。口縁部は短く、受け口状になっている。また、底部は回転糸切りで切り離されている。

図20－20は徳利である。口縁部及び底部が欠損しているが、図上で径を復元した。内面にはロクロ成形による器面の凹凸が明瞭に残る。釉薬は外面は厚く掛かるが、内面は薄い。

図20－21は小型の壺である。頸部が細く、胴部が張る器形で、口縁部が欠損している。頸部付近には流れている釉薬が認められる。底部は回転糸切りで切り離されている。

図20－22は大皿で、器壁が厚く、口縁部が外反する。口縁部から胴部には釉薬が掛かっている。

図20－23は壺の底部と推定する。全体に釉が掛けられた製品で、器壁は薄い。底部を削って高台をつくり出している。

図21－１は壺または甕の胴部片である。器壁が厚く、大型の製品とみられる。全体的に釉薬が掛かり、内外面には別の製品が貼り付いている。重ね焼きしたものが付着したものとみられる。

図21－２は壺である。内外面ともに全体的に釉薬が掛かり、頸部から胴部中程までは青色に発色した釉薬が流れている。

図21－３は花生である。底部以外に鉄釉を掛け、その後、灰釉を流し掛けしている。口縁部は厚く、口唇部は平坦である。体部はロクロ成形の凹凸が残り、とりわけ、体部外面の下段と上段には外側に大きく突出する箇所がある。また、見込みには重ね焼きをした円形の痕跡が５箇所残る。

図21－４は擂鉢である。全体的に薄く釉薬が掛かる。口縁部は厚く、外面にはロクロ成形の凹凸が残る。内面には見込みから体部にかけて８本単位の卸目が均一に入れられている。

図21－５～13、図22－１～10は相馬焼系の陶器をまとめた。

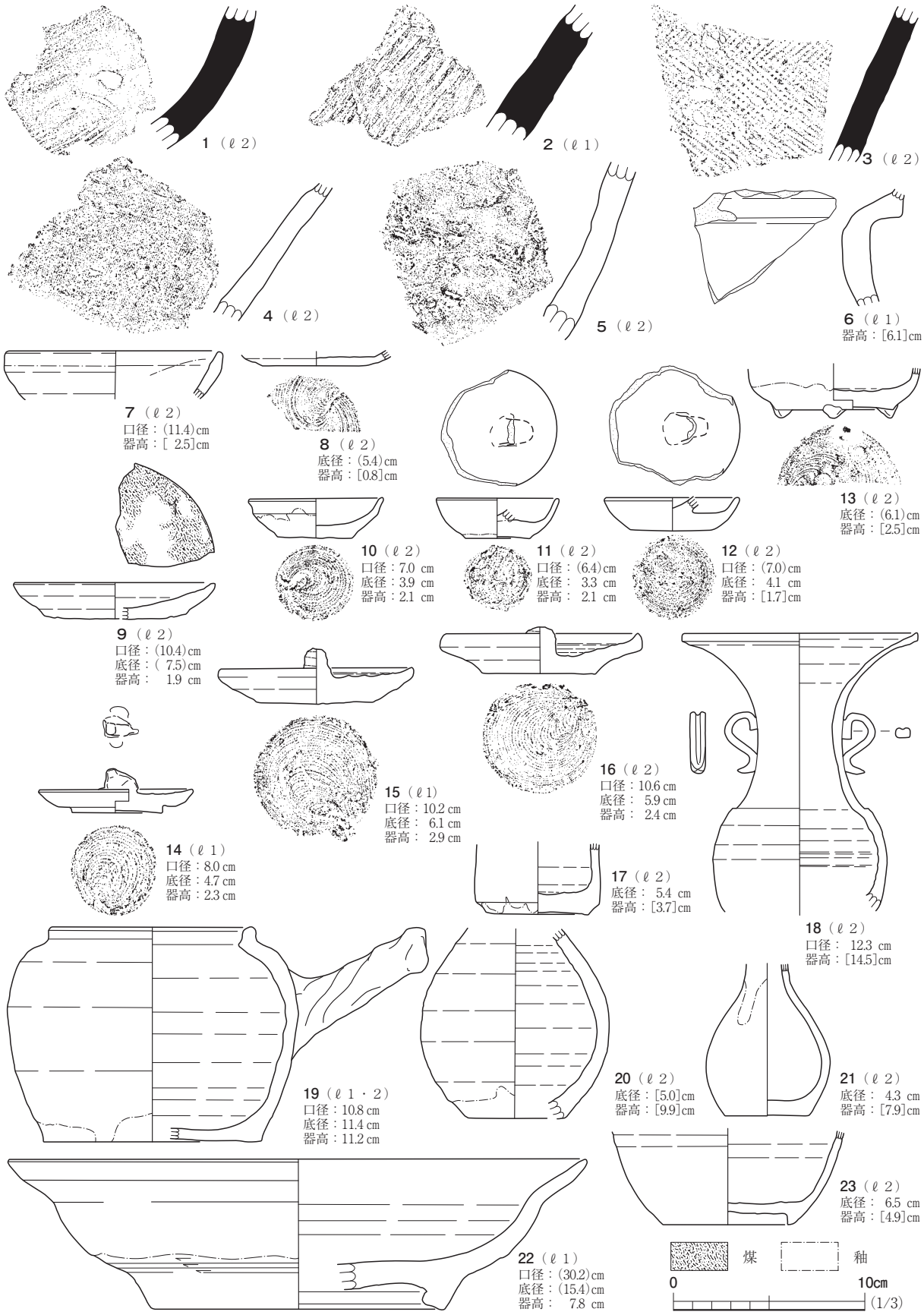


図20　15号溝跡出土遺物（1）

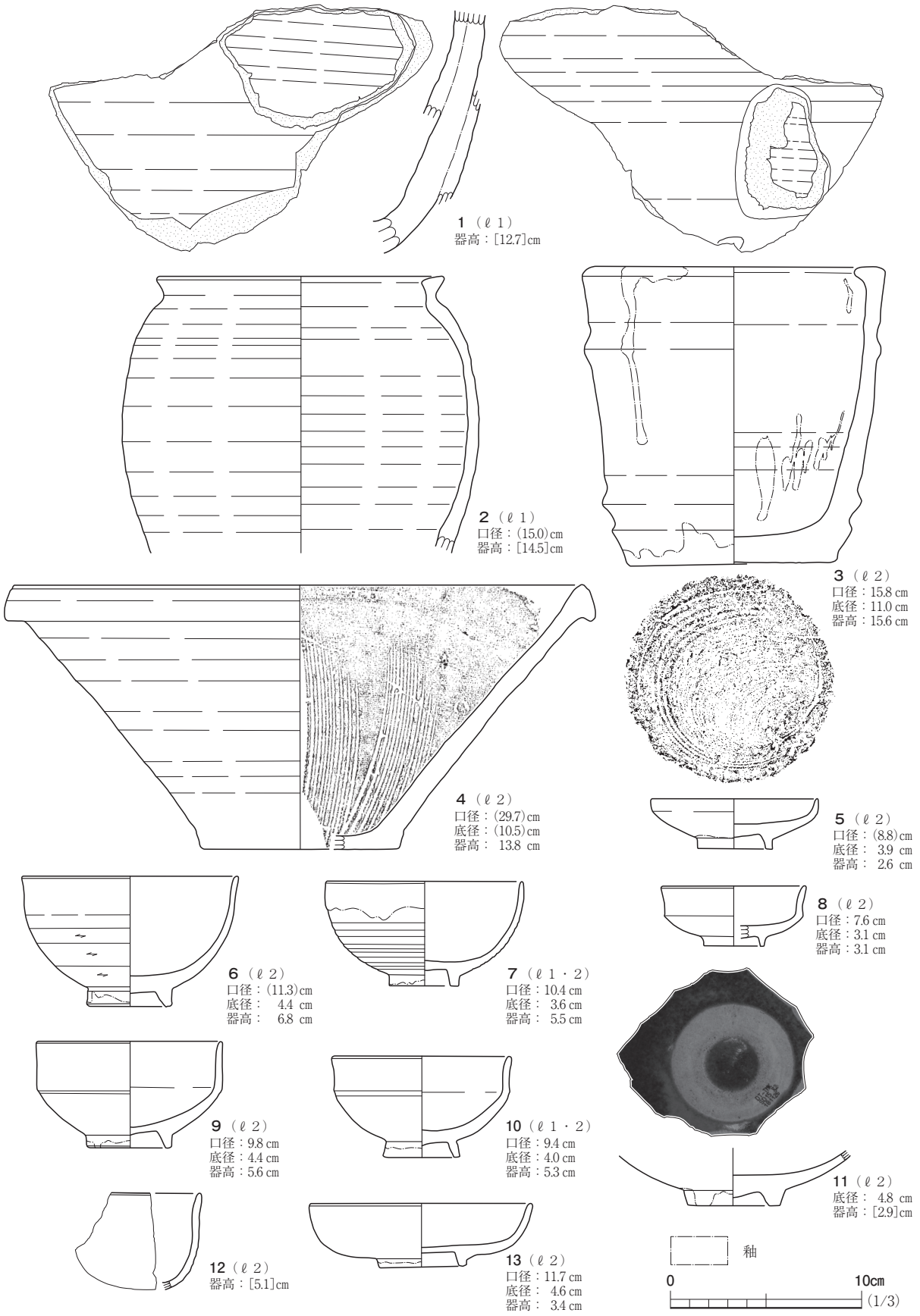


図21　15号溝跡出土遺物（２）

図21－５は小皿で、底部以外には釉薬が掛かる。図21－６・７・９・10・12は碗である。いずれも底部以外には釉薬が掛かる。６は丸碗で、口縁部直下が小さく屈曲している。７は灰釉・鉄釉掛け分け碗で、高台は径が小さく、低い。体部下半の鉄釉が掛かった部位には、ロクロ成形時の凹凸が明瞭に残る。9・10は腰折碗で、体部が中程で屈曲し、浅い窪みが巡る。12は鉄釉が掛け流されている。

図21－８は小杯とした。高台は径が小さく、低い。体部下半でくの字状に大きく屈曲する。

図21－11は陶器の皿である。底部以外には釉薬が掛かり、内面は蛇の目釉剝ぎになっている。

図21－13、図22－１～３・９は皿である。このうち、図22－１～３・９は大皿で、１は口縁部が受け口状になり、口唇部が上に突出する。見込みは蛇の目釉剝ぎになっている。２・３・９は絵が描かれる。２・３は折縁輪花皿で、底部以外に釉薬がかかる。２は草木と動物らしきものが描かれているが、何の動物かは特定できない。３は見込みには草木と鳥の絵が描かれている他、重ね焼きの痕跡も残る。９は見込みに葉が描かれている。

図22－４・６は土瓶である。４は器壁が薄く、底部以外に釉薬が掛かる。体部には花の絵が描かれている。６は体部と別づくりの注口部分で、体部には円形の穴が３箇所確認される。

図22－５は灰吹である。全体的に釉薬が掛かるが、底部・高台部と体部とでは色調が異なる。体部は内面にロクロ成形時の凹凸が明瞭に残る。また、口縁部がわずかに内側に突出する。

図22－７・８は仏飯器である。底部以外は全体に釉薬が掛かる。脚部は中実で、中程付近が外側に突出する。底部外面には回転糸切り痕が残る。図22－10は香炉である。口縁部が内側に突出し、内面には釉薬が掛からない。

図23－１は瀬戸焼系の陶器だが、器種は不明である。図23－２・３は京焼系の陶器である。２は土瓶、３は蓋と推定する。

図23－４～６は土師質土器である。４は小皿で、いわゆるかわらけである。内目には煤が付着し、灯明皿として利用されている。５・６は火鉢である。５は口縁部、６は胴部と脚部の破片である。５の口縁部は内側に大きく突出している。６はロクロ成形による凹凸が明瞭に残り、別づくりの脚部を貼り付けている。

図23－７は瓦質土器の香炉である。完形に近いが、見込みは器面が剝落し、脚部も一部欠けている。口縁部は厚く、外側に張り出す。脚は本来は３脚だが、２箇所が遺存する。

図23－８～17は肥前系の陶磁器をまとめた。図23－８～10は碗である。８・９は磁器で、10は釉薬の掛かった陶器である。８・９の外面には絵が描かれている。

図23－11～14は磁器の皿で、いずれも絵皿である。11・13の底部には大明年製と書かれている。12・14は高台が低く、砂粒が付着している。14は高台の径も小さいことから、初期伊万里と推定される。

図23－15は猪口である。器面には、花の模様が描かれる。

図23－16・17はぐい呑とした。16・17ともに外面に絵が描かれている。

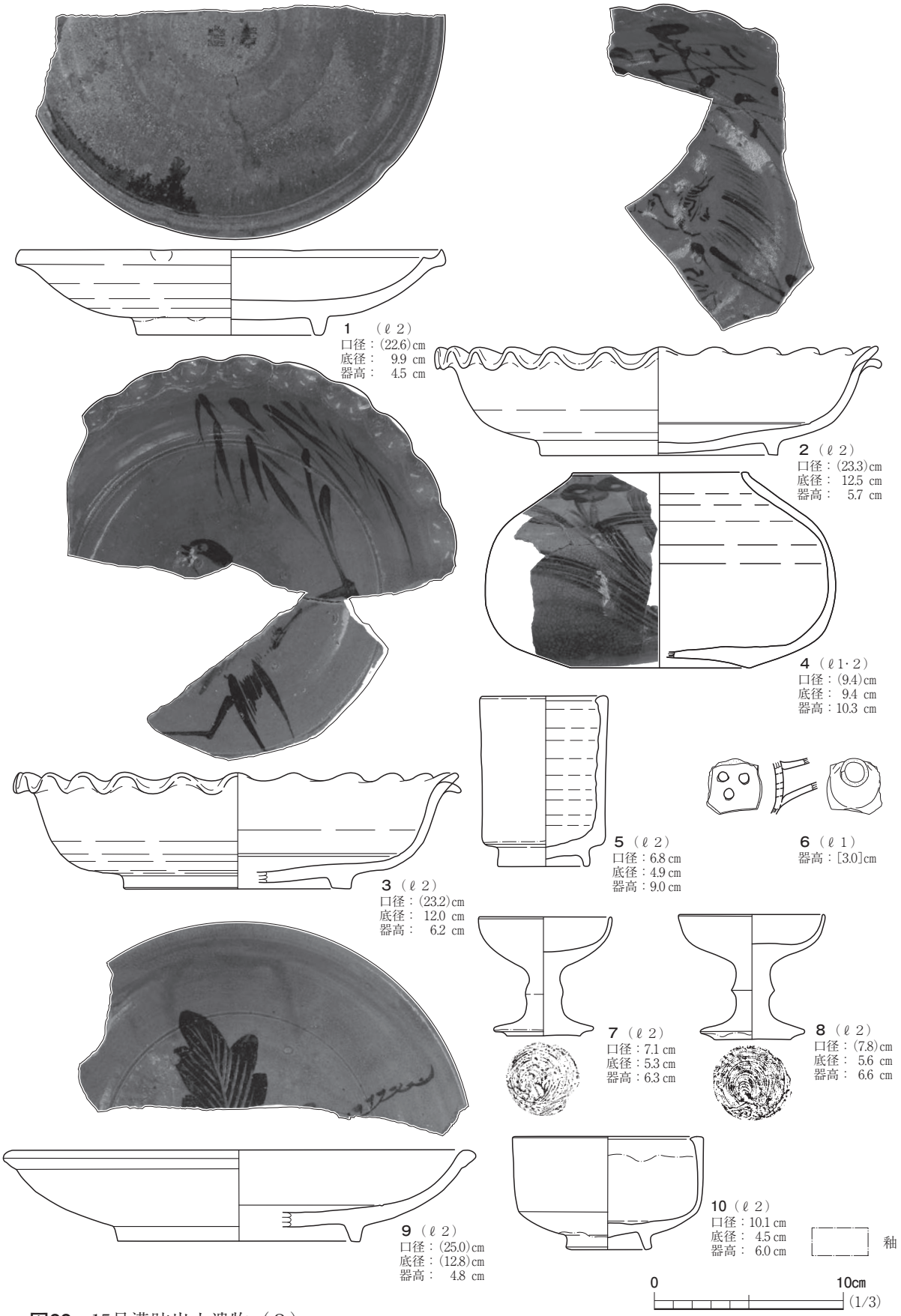


図22　15号溝跡出土遺物（３）

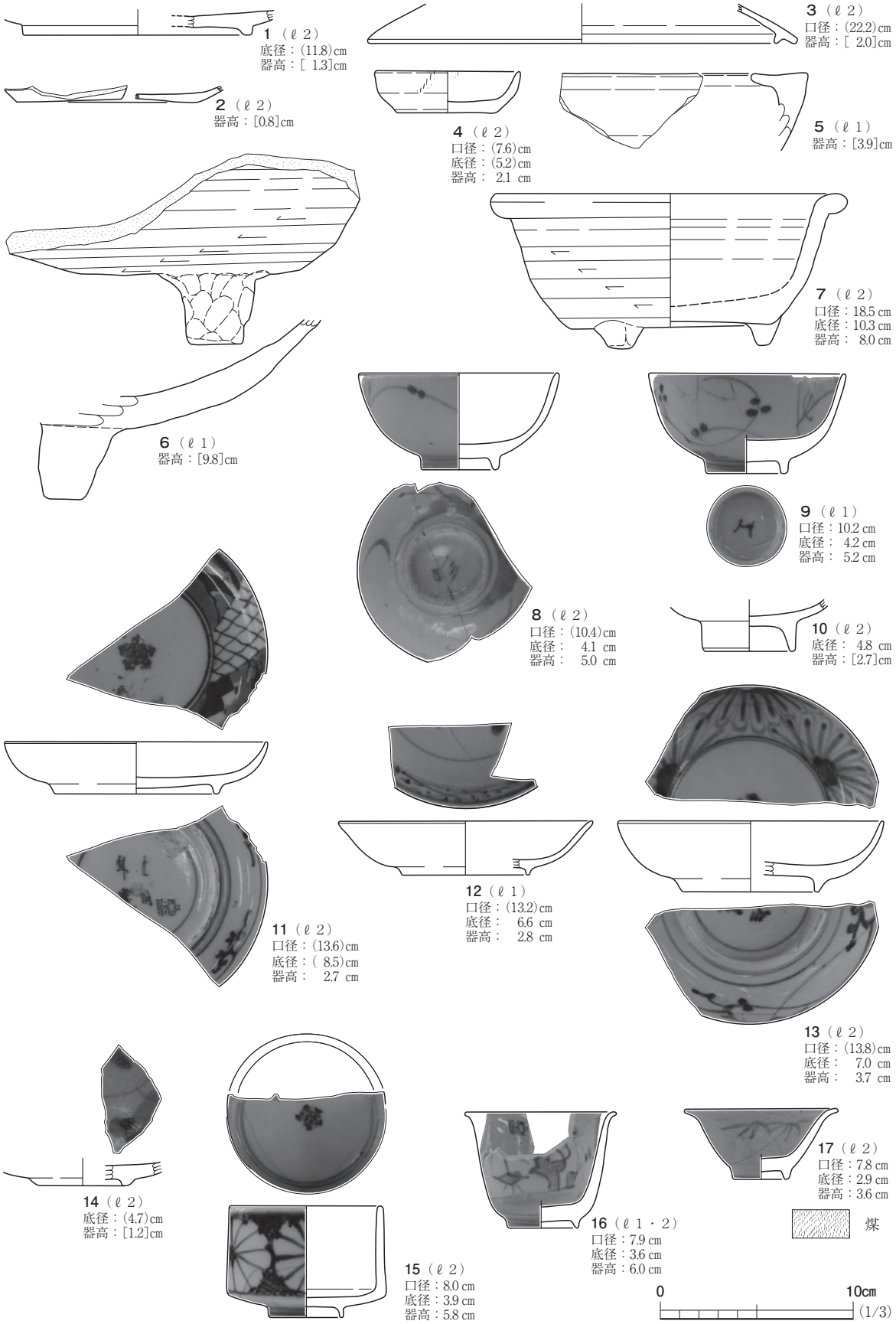


図23　15号溝跡出土遺物（４）

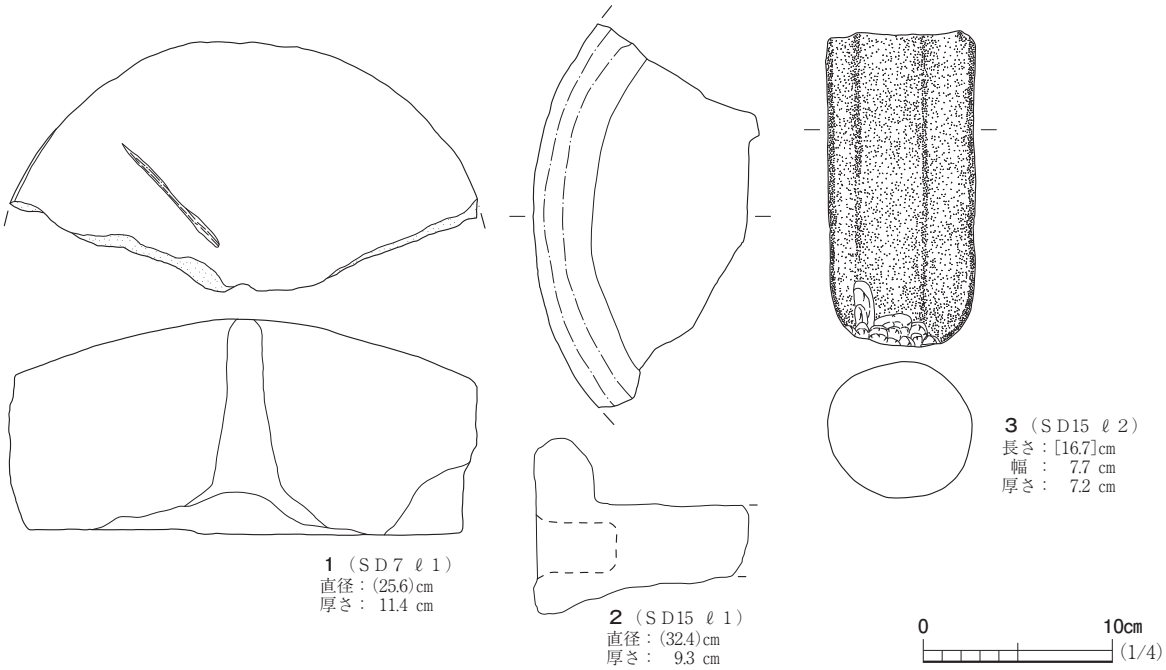


図24　７・15号溝跡出土遺物

図24には石製品をまとめた。図24－１は石臼の下臼である。軸棒を挿す孔がわずかに残存する。磨面は磨滅しており、溝はほとんど残っていない。

図24－２は石臼の上臼と推定する。上部は穀物を入れる部分が箱形に窪み、下部には下臼との間のふくみの部分にあたる箇所が窪んでいる。また、側面には挽き手を挿入するための孔がある。孔の規模は、径約2.8cm、深さ約4.4cmである。

図24－３は円柱状の石製品である。下端には打ち割った痕跡があり、表面は磨滅している。用途は不明である。

出土した陶器の年代は、大堀相馬焼から見ると、18世紀後半～19世紀初頭頃のものが中心である。岸窯製品や肥前系の磁器等も大堀相馬焼と同時期のものである可能性が高い。ただし、肥前系の磁器には17世紀代の初期伊万里が数点含まれている。

ま と め

７・15号溝跡は、東西方向に延びる一連の溝跡で、15号溝跡は掘り込みが深く、幅も広い。また、15号溝跡の上部には人為的に埋められた堆積土があり、その中からは中・近世の遺物が多く出土した。近世の遺物は、18世紀後半～19世紀初頭頃のものが中心であり、その時期までには溝跡が埋められたと判断した。そのため、溝跡の機能していた時期は18世紀後半～19世紀初頭頃と考えられる。ただ、中世の遺物も出土していることから、さらに古い時期から存在していた可能性もある。

本遺構の性格は区画溝と推定される。具体的には、調査区東部では屋敷跡を構成するとみられる数多くの小穴が検出されていることから、本遺構はその屋敷跡に伴う南辺の区画溝の可能性が高いと考えられる。

（鶴　見）

８号溝跡　ＳＤ８

遺　　構（図17・25、写真11）

本遺構は、調査区西部のＡ３、Ｂ３グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。６号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。また、７号溝跡と接しているが、前後関係は把握できなかった。

東西方向に延びる溝跡で、長さは12.8ｍ、幅は30～60㎝、検出面からの深さは15～25㎝である。西端部で南北方向に向きが変わるが、７号溝跡との接点付近で収束する。底面は平坦である。

堆積土は３層に分層し、ℓ１・３は周囲からの流入土、ℓ２は壁の崩落土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西方向に延びる溝跡である。東側延長線上には軸線がほぼ一致する９号溝跡があり、一連の溝跡であった可能性がある。また、本遺構は７号溝跡に平行することから、６号溝跡埋没後、７号溝跡の区画にあわせて新たに掘り直した溝と推定される。したがって、遺構の所属時期は、７号溝跡と同時期の所産と考えておきたい。（鶴　見）

９号溝跡　ＳＤ９

遺　　構（図17・26、写真11）

本遺構は、調査区西部のＣ４、Ｄ４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。21号土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。また、東端部が２号特殊遺構と接しているが、前後関係は把握できなかった。

東西方向に延びる溝跡で、長さ3.45ｍ、幅23～39㎝、検出面からの深さ12㎝前後である。

堆積土は暗褐色シルトの単層で、褐色シルトを斑に含んでおり、固くしまることから人為堆積土

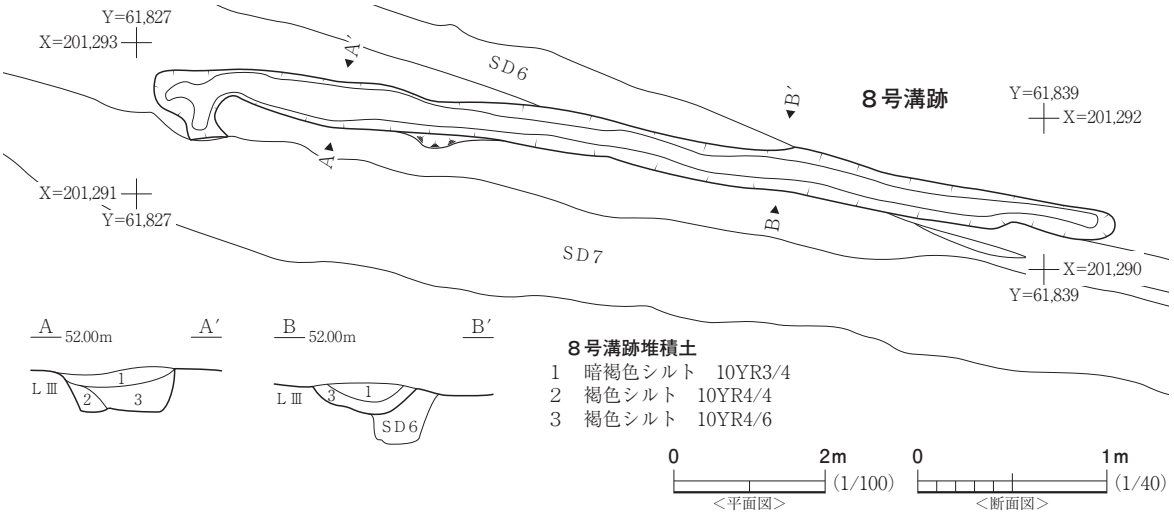


図25　８号溝跡

と判断した。

ま と め

本遺構は東西方向に延びる溝跡である。出土遺物がなく、詳細は不明だが、西側延長線上に位置する８号溝跡と軸線方向がほぼ一致するため、同溝跡と一連の溝跡の可能性がある。　（鶴　見）

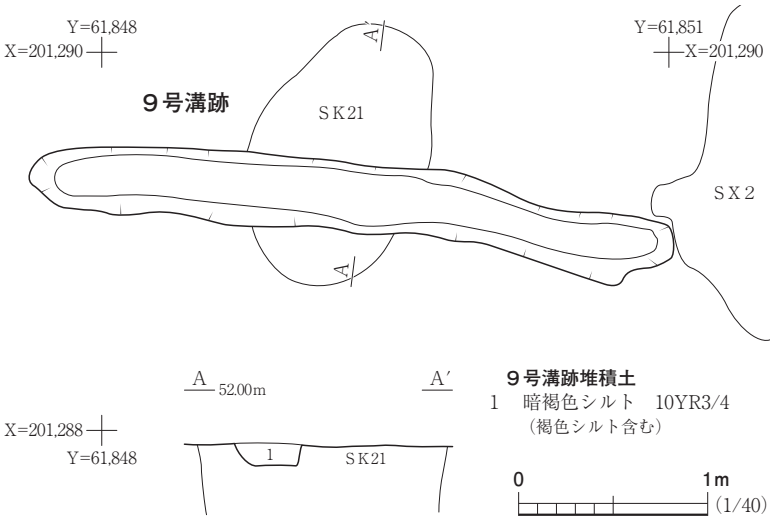


図26　９号溝跡

10号溝跡　ＳＤ10

遺　　構（図17・27、写真13）

本遺構は、調査区西部のＥ２～４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。６・７号溝跡と重複しており、本遺構が両者より新しい。東に１～２ｍには11号溝跡、３～４ｍには12号溝跡があり、このうち、12号溝跡は本遺構にほぼ平行に延びている。

南北方向に延びる溝跡で、南北長は17.8ｍである。遺構の南部以外では、断面形が、二段掘り状になっている。南部では、幅は50～60㎝前後、検出面からの深さは20㎝前後である。二段掘り状になっている箇所では、幅は１～1.8ｍ前後、検出面からの深さは30㎝前後である。底面は南から北に向って緩やかに傾斜している。

堆積土は３層に分層した。いずれも周囲からの流入土と判断したが、ℓ２・３は地山の色調と近似することから、壁の崩落土も含まれているとみられる。

遺　　物（図28）

遺物は８点出土し、このうち２点を図示した。細片のため割愛した資料は、岸窯製品が５点、大堀相馬焼が１点で、器種の内訳は、岸窯製品は蓋１点、壺１点、手付水注１点、器種不明２点、相馬焼系は器種不明１点である。

図28－１は岸窯製品の甕である。全体的に釉が掛かり、ロクロ成形の痕跡が明瞭に残る。口唇部は平坦で、内側に突出している。

図28－２は岸窯製品の手付水注の把手である。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。南部以外では、二段掘り状になっている。また、東側に位置する12号溝跡と軸線の方向が一致しているが、12号溝跡は本遺構よりも古い7・15号溝跡よりもさらに古い段階のものであることから、同時期に機能したものではないと判断される。15号溝跡は18世紀後半～19世紀初頭以前には埋められたと判断されるため、本遺構の年代はそれ以降と考えられる。　（鶴　見）

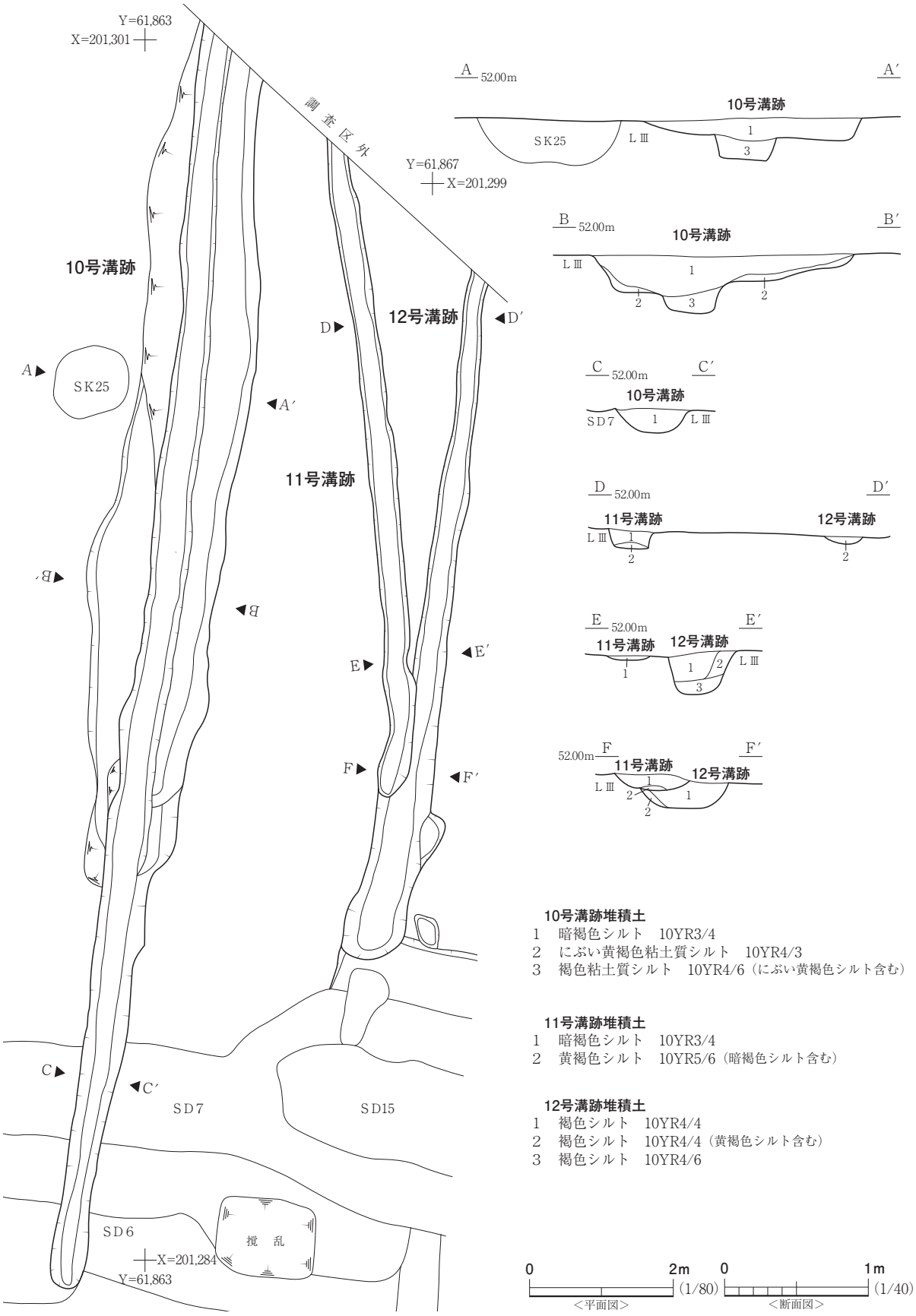

Y=61,863
X=201,301
調査区外
Y=61,867
X=201,299
10号溝跡
12号溝跡
11号溝跡
SK25
SD7
SD15
SD6
撹乱
X=201,284
Y=61,863
A 52.00m A′
10号溝跡
SK25
LⅢ
B 52.00m B′
10号溝跡
C 52.00m C′
10号溝跡
SD7
D 52.00m D′
11号溝跡
12号溝跡
E 52.00m E′
11号溝跡
12号溝跡
52.00m F F′
11号溝跡
12号溝跡
10号溝跡堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4
2　にぶい黄褐色粘土質シルト　10YR4/3
3　褐色粘土質シルト　10YR4/6（にぶい黄褐色シルト含む）
11号溝跡堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4
2　黄褐色シルト　10YR5/6（暗褐色シルト含む）
12号溝跡堆積土
1　褐色シルト　10YR4/4
2　褐色シルト　10YR4/4（黄褐色シルト含む）
3　褐色シルト　10YR4/6
0　2m　(1/80)
＜平面図＞
0　1m　(1/40)
＜断面図＞

図27　10～12号溝跡

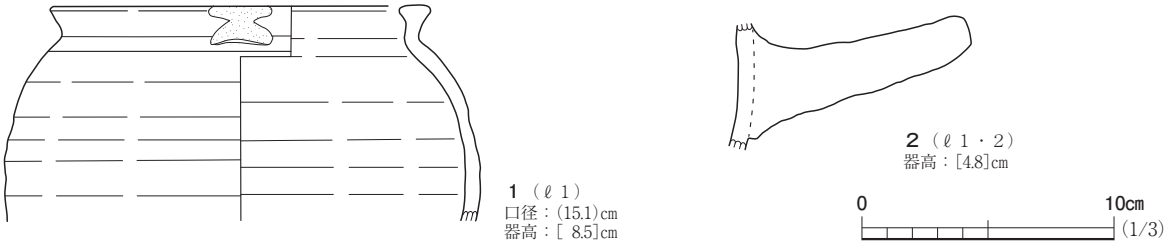


図28　10号溝跡出土遺物

11号溝跡　ＳＤ11

遺　　構（図17・27、写真13）

本遺構は、調査区西部のＥ３グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。12号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。西に１～２ｍには10号溝跡がある。

南北方向に延びる溝跡で、長さは6.05ｍ、幅は36㎝前後、検出面からの深さは10㎝前後である。溝跡の底面は南から北に向けて傾斜している。12号溝跡と重複する箇所付近で溝跡は収束しており、南側には続かない。

堆積土は２層に分層した。いずれも自然堆積土で、遺物は出土してない。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。周辺の他の溝跡の中には、本遺構と軸線の方向が一致するものがなく、単独の溝跡と判断した。出土遺物はないが、他の溝跡と堆積土が近似しているため、中・近世の溝跡と推定している。（鶴　見）

12号溝跡　ＳＤ12

遺　　構（図17・27、写真13）

本遺構は、調査区西部のＥ３・４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。11・15号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。

南北方向に延びる溝跡で、北側の調査区外に続いている。検出した範囲での規模は、長さは9.6ｍ、幅は北部で25㎝、南部で70㎝で、南に行くほど広くなる。検出面からの深さは５～30㎝前後で、北部が浅く、南部が深い。底面の標高はほぼ一定である。

堆積土は３層に分層した。いずれも自然堆積土で、遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。西側に位置する19号溝跡とは軸線の方向が同じであり、15号溝跡よりも古いことも共通している。これらのことから、12・19号溝跡は一連の遺構の可能性があり、その場合、道跡の側溝等の性格が想定される。18世紀後半～19世紀初頭頃には埋められた15号溝跡よりは古いことから、本遺構はそれ以前のものと判断できるが、中・近世を中心とした時期の所産と推定する。（鶴　見）

13号溝跡　ＳＤ13

遺　　構（図17・29、写真13・14）

本遺構は、調査区西部のＥ３、Ｆ３・４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。15・18・19号溝跡と重複しており、19号溝跡よりは新しく、15・18号溝跡よりは古い。

南北方向に延びる溝跡で、北側の調査区外に続いている。検出した範囲での長さは8.12ｍ、幅は40～60㎝、検出面からの深さは30～40㎝前後である。15号溝跡を挟んで南側に位置する22号溝跡は、本遺構の延長線上にあるため同一の溝跡の可能性もあるが、確証は得られなかった。

堆積土は３層に分層した。いずれも自然堆積土で、遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。近接する14号溝跡とは軸線の方向が同じであり、関連する遺構とみられ、道跡の側溝と推定される。遺構の詳細な年代は不明だが、中・近世に位置付けられる可能性が高い。（鶴　見）

14号溝跡　ＳＤ14

遺　　構（図17・29、写真14）

本遺構は、調査区西部のＦ４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。15・16号溝跡と重複しており、両遺構よりも古い。

検出した範囲での長さは4.2ｍ、幅は0.8ｍ前後、検出面からの深さは25㎝である。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。西側にある13号溝跡は軸線方向が同じであり、関連する遺構とみられ道跡の側溝と推定される。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明だが、中・近世に位置付けられる可能性が高い。（鶴　見）

16号溝跡　ＳＤ16

遺　　構（図17・29）

本遺構は、調査区西部のＦ３・４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。14号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。

調査区際で検出した遺構で、表土から底面まで１ｍ以上の深さとなり、これ以上掘り進めると壁の崩落の危険性が高くなることから、安全面を考慮し、底面までの掘削は一部に留めた。検出した範囲での長さは4.6ｍ、幅は２ｍ以上、検出面からの深さは90㎝である。

堆積土は５層に分層した。ℓ１は褐色シルトと褐灰色シルトの混土で、人為的に埋められた層と判断した。ℓ２～５は自然堆積土である。

本遺構からは、ℓ１から２点の遺物が出土したが、細片のため図示できなかった。遺物は近世の岸窯製品の手付水注で、15号溝跡出土の破片１点と接合した。

ま と め

本遺構は、近世の溝跡と判断した。検出範囲が限られているが、東西方向に延びる溝跡で、15号溝跡と平行する可能性が高い。近世の絵図を見ると、調査区の南側に道が通っている。15・16号溝跡は調査区内の他の溝跡に比べ深く、道に面した屋敷跡の正面を区画していた溝の可能性がある。また、15号溝跡出土の陶器片が本遺構出土のものと接合したことから、両溝跡が埋められたのはほぼ同時期で、18世紀後半～19世紀初頭頃と推定されるが、溝跡がつくられた時期については不明である。

（鶴　見）

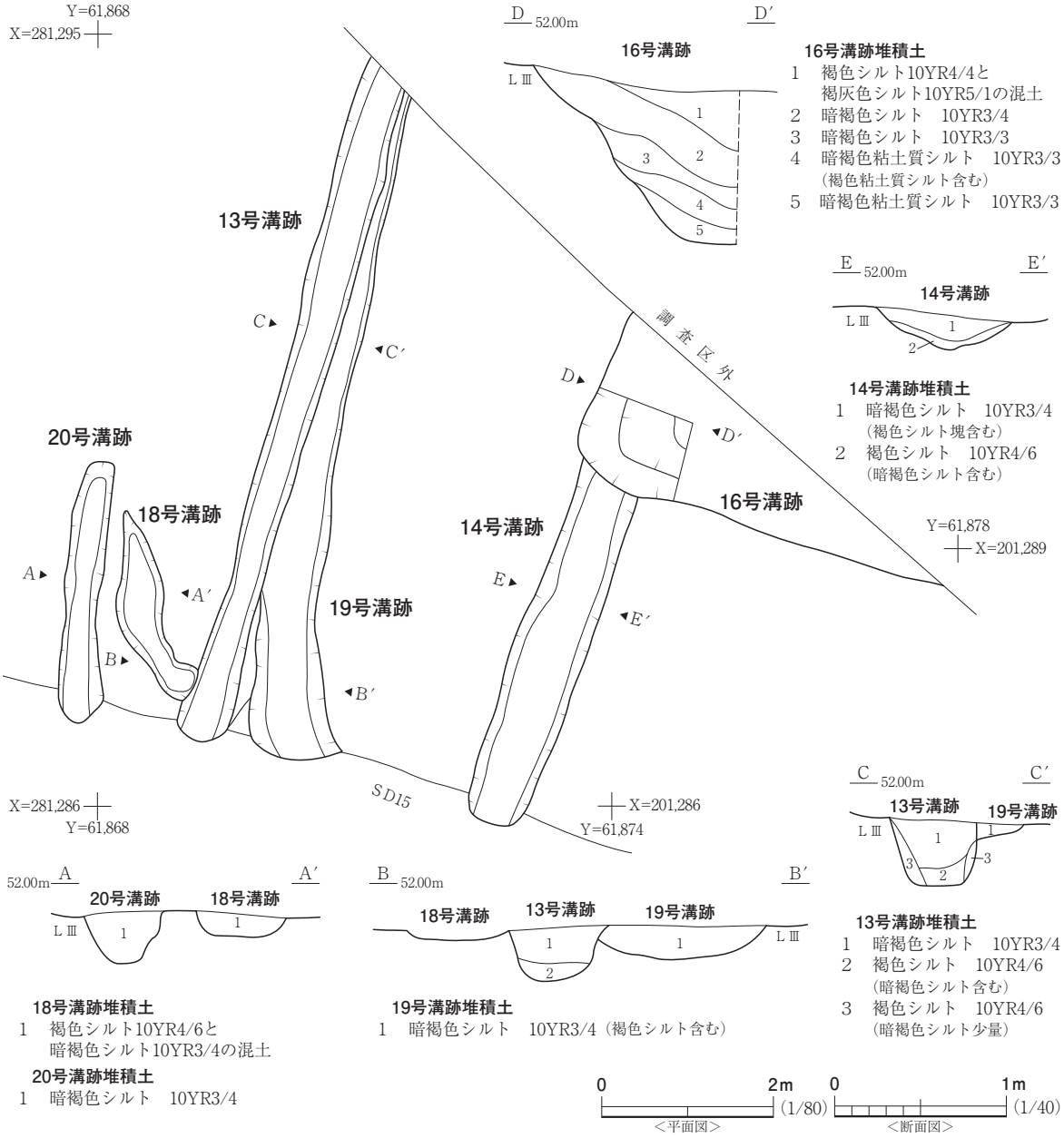


図29　13・14・16・18～20号溝跡

18号溝跡　ＳＤ18

遺　　構（図17・29、写真13）

本遺構は、調査区西部のＥ４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。13号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。

遺構の規模は、長さ2.2ｍ、幅0.3～0.6ｍ前後、検出面からの深さは最大で12㎝である。

堆積土は単層の人為堆積土で、遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、調査区内で確認した他の溝跡に比べ規模が小さく、軸線の方向が一致する溝跡もないため、単独の溝跡と判断した。遺物が出土していないため詳細な時期は不明だが、中・近世に位置付けられる遺構と推定している。（鶴　見）

19号溝跡　ＳＤ19

遺　　構（図17・29、写真13・14）

本遺構は、調査区西部のＥ４、Ｆ３・４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。13・15号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。

南北方向に延びる溝跡だが、13号溝跡と重複しているため、検出した範囲においては東半がほぼ残存していない。検出した範囲での長さは7.9ｍ、幅は0.6～１ｍ前後、検出面からの深さは20㎝前後である。

堆積土は暗褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。本遺構の東側に位置する12号溝跡とは軸線の方向が同じであり、一連の遺構の可能性がある。その場合、本溝跡は道跡の側溝と推定される。本遺構は、18世紀後半～19世紀初頭頃には埋められた15号溝跡よりも古いことから、中・近世に位置付けられると推定している。（鶴　見）

20号溝跡　ＳＤ20

遺　　構（図17・29、写真13）

本遺構は、調査区西部のＥ４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。15号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。

南北方向に延びる溝跡で、長さ3.02ｍ、幅0.4～0.5ｍ前後、検出面からの深さは30㎝前後である。15号溝跡を挟んで南側にある21号溝跡は、本遺構と同一の溝跡の可能性もあるが、確証は得られなかった。

堆積土は暗褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。遺構の性格は区画溝と推定している。18世紀後半～19世紀初頭頃には埋められた15号溝跡よりも古いことから、本遺構はそれ以前のものだが、中・近世の年代に収まるものと推定している。　（鶴　見）

21号溝跡　ＳＤ21

遺　　構（図17・30）

本遺構は、調査区西部のＥ４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。18号土坑、６・15・23号溝跡と重複し、18号土坑、６・23号溝跡よりも新しく、15号溝跡よりは古い。

南北方向に延びる溝跡で、検出した範囲での規模は、長さ2.74ｍ、幅0.4～0.6ｍ、検出面からの深さは30㎝前後である。15号溝跡を挟んで北側にある20号溝跡は本遺構と同一の溝跡の可能性もあるが、確証は得られなかった。

堆積土は単層で、暗褐色シルトに褐色シルトが斑に混ざることから、人為堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。遺構の性格は区画溝と推定している。遺物は出土していないが、他の遺構との重複関係から、中・近世に位置付けられると推定している。　（鶴　見）

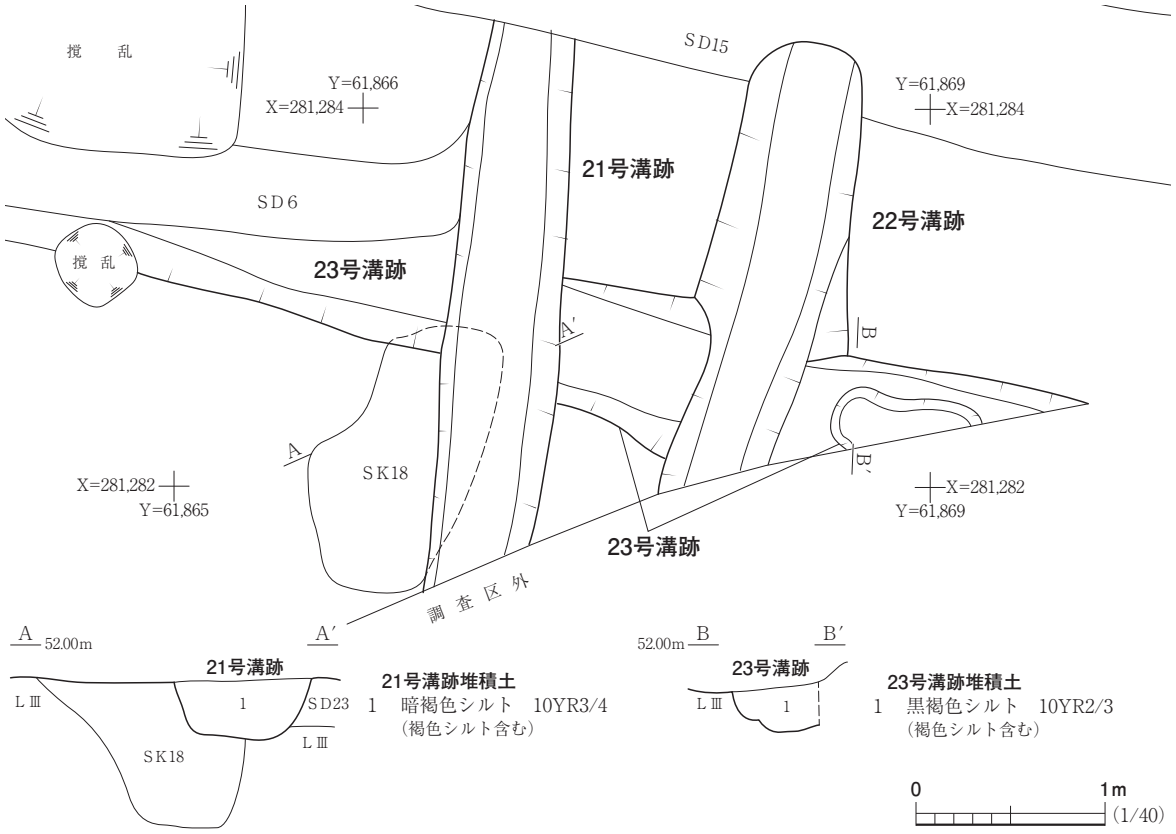


図30　21～23号溝跡

22号溝跡　ＳＤ22

遺　　構（図17・30）

本遺構は、調査区西部のＥ４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。15・23号溝跡と重複しており、15号溝跡よりも古く、23号溝跡よりも新しい。

南北方向に延びる溝跡で、検出した範囲での規模は、長さ2.62ｍ、幅0.6～0.8ｍ前後、検出面からの深さは30㎝前後である。

堆積土は暗褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に延びる溝跡である。遺構の重複状況や堆積土から、中・近世に位置付けられると判断した。また、遺構の性格は区画溝と推定する。（鶴　見）

23号溝跡　ＳＤ23

遺　　構（図17・30）

本遺構は、調査区西部のＥ４グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。18号土坑、６・21・22号溝跡と重複しており、18号土坑よりは新しく、６・21・22号溝跡よりは古い。

東西方向に延びる溝跡で、東側の調査区外に続いている。検出した範囲での規模は、長さ5.24ｍ、幅0.7～0.8ｍ前後、検出面からの深さは20㎝前後である。

堆積土は黒褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西方向に延びる溝跡である。本遺構より新しい６号溝跡は、本遺構と軸線方向が同じであり、その延長線上にあることから、本遺構の方向を意識してつくられた可能性がある。遺構の所属時期は、他の遺構との重複関係から、中・近世に位置付けられると推定している。（鶴　見）

24号溝跡　ＳＤ24

遺　　構（図17・31）

本遺構は、調査区西部のＧ５グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北側に15号溝跡が隣接する。

南北方向に延びる溝跡で、南側の調査区外に続いている。検出した範囲での規模は、南北長0.69ｍ、東西幅0.66ｍ、検出面からの深さは41㎝である。周壁は比較的緩やかに立ち上がる。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

調査区西部では南北方向の溝跡が多数確認されているため、本遺構もそれらと同じような溝跡と想定した。しかし、南側が調査区外に続き、もともとの規模が不明なため、土坑の可能性も想定さ

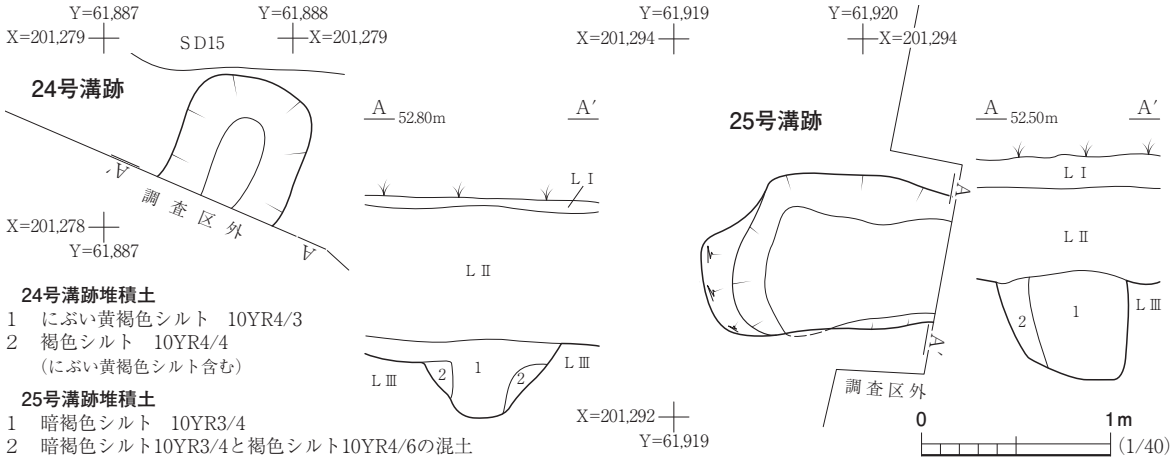


図31　24・25号溝跡

れる。時期を特定する遺物は出土していないが、他の溝跡と同様の時期が想定され、中・近世のものと判断している。　（鶴　見）

25号溝跡　ＳＤ25

遺　　構（図９・31）

本遺構は、調査区東部のＪ３、Ｋ３グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はない。

東西方向に延びる溝跡とした。検出した範囲での規模は、東西長1.29ｍ、南北幅0.85ｍ、検出面からの深さは54㎝である。底面は、北から南に向かって緩やかに傾斜している。南壁は直立するが、下部が抉れている箇所もある。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は固くしまった暗褐色シルトで、ℓ２は暗褐色シルトと褐色シルトの混土で、いずれも人為堆積土と判断した。堆積土中からは遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西方向に延びる溝跡としたが、調査範囲が限られているため、土坑の可能性も残る。遺物がないため詳細な時期は不明だが、他の溝跡同様に中・近世と推定される。　（鶴　見）

第４節　井　戸　跡

井戸跡は２基確認した。１・２号井戸跡ともに井戸側等は確認されず、素掘りの井戸跡である。所属時期はいずれも中・近世頃と考えている。

１号井戸跡　ＳＥ１

遺　　構（図32、写真15）

本遺構は、調査区東部のＨ２、Ｉ２グリッドで検出した井戸跡である。検出面はＬⅢ上面であ

る。重複する遺構はないが、周辺に多数の小穴があり、南側には４号溝跡が隣接している。

遺構は検出面では楕円形だが、底面では方形を呈する。検出面での規模は長軸2.36ｍ、短軸2.03ｍ、検出面からの深さは1.62ｍである。底面から遺構の中段付近までは壁の立ち上がりは垂直に近いが、中段から検出面までは緩やかに開いていく。底面は中央付近が方形に一段窪む。また、調査中は、底面から上に0.5ｍ程の位置まで常時水が溜まる状態であった。

堆積土は５層に分層した。ℓ１は黒褐色シルトに暗褐色シルト塊が斑に混ざる土で、人為堆積土と判断した。他の層は、ℓ２・４・５は周囲からの流入土、ℓ３は壁の崩落土である。いずれの層からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、涌水が確認され、井戸側等の材がないことから素掘りの井戸跡と判断した。周辺にあ

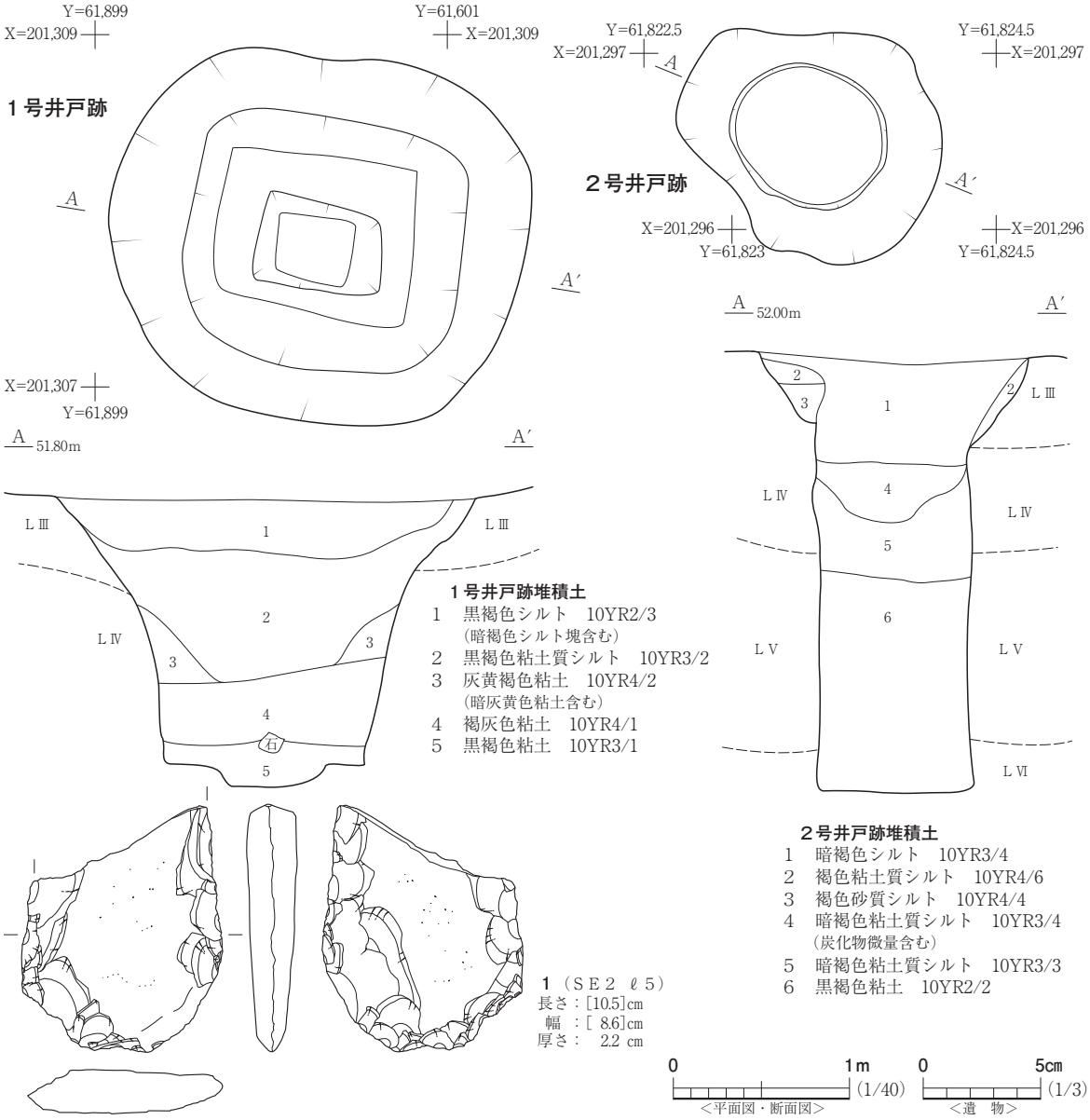


図32　１・２号井戸跡、２号井戸跡出土遺物

る多数の小穴は屋敷跡を構成する建物の柱穴と考えられ、溝跡は区画溝と推定されることから、本遺構は屋敷跡に伴う井戸跡と考えられる。

本遺構からは遺物は出土していないが、屋敷跡は中・近世のものと考えられることから、本遺構も中・近世の所産と推定される。（鶴　見）

２号井戸跡　ＳＥ２

遺　　構（図32、写真16）

本遺構は、調査区西部の西端、Ａ３グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北に10号土坑、南に１号土坑が隣接する。

遺構の平面形は、検出面では東西1.52ｍ、南北1.37ｍの不整形で、中段より下では、0.9×0.8ｍほどの楕円形を呈する。検出面からの深さは2.43ｍである。底面から中段付近までの壁の立ち上がりはほぼ垂直で、中段から検出面まではハの字状に開く。

堆積土は６層に分層し、ℓ１・４～６は周囲からの流入土、ℓ２・３は壁の崩落土と判断した。ℓ５・６より下部では壁面から湧水が確認された。また、ℓ５・６からは多量の石が検出されたが、人為的に積まれたような状況は確認されず、廃棄されたものと判断した。また、ℓ６は細分できる可能性があるが、湧水が著しく、厳密な土層観察ができなかった。

遺　　物（図32、写真19）

遺物は２点が出土した。このうち１点は、ℓ６から出土した木製品で、挽物の椀または皿とみられるが、遺存状態が悪く図示できなかった。図32－１は縄文時代のものと推測される石鍬で、半分ほどが欠損している。石材の端部を中心に剝離が行われ、刃部をつくり出している。ℓ５から検出された多量の石とともに出土した。

ま と め

本遺構は、掘り込みが深く、湧水が確認されたことから井戸跡と判断した。遺構の規模や、井戸枠や井戸側等の木材が出土していないことから、素掘りの井戸跡とみられる。出土した石鍬は縄文時代のものと推測されるが、石とともに廃棄されていたため、遺構の時期を示す遺物ではない。遺構の年代は、周辺の遺構の状況を踏まえると、中・近世に位置付けられると推定している。なお、１号井戸跡とは異なり、本遺構の周辺には建物等の柱穴が無いことから、日常的に使用される井戸とは別の目的のために掘削された可能性がある。（鶴　見）

第５節　特 殊 遺 構

特殊遺構は２基確認した。１号特殊遺構は２号溝跡に隣接する遺構で、同時期の遺物が出土していることから、２号溝跡に付属する施設と考えられる。２号特殊遺構は、堆積土・形態・出土遺物の所見から中世の地下室等の性格が想定される。

１号特殊遺構　ＳＸ１

遺　　構（図33、写真８）

本遺構は、調査区東部のＦ１・Ｇ１グリッドで検出した遺構である。検出面はＬⅢ上面である。２号溝跡と重複しており、同溝跡のℓ１は、本遺構の堆積土よりも上部で確認されたことから、本遺構は同溝跡が完全に埋没するよりも以前に埋没したと判断される。また、西に1.5ｍには１号溝跡、東に隣接して２号土坑及び３号溝跡、東に２ｍには３号土坑がある。

遺構の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.14ｍ、短軸1.56ｍ、検出面からの深さは49㎝である。底面には凹凸があり、中央付近と南東隅付近が窪んでいる。

堆積土は５層に分層した。ℓ１は黄褐色シルトを斑に含むことから人為堆積土と判断した。ℓ２・３は周囲からの流入土、ℓ４・５は壁の崩落土と判断した。いずれの層中からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、２号溝跡の西壁に接した遺構であり、２号溝跡に関連する遺構と判断した。本遺構のℓ１は人為堆積土であることから、２号溝跡と前後して埋められた可能性がある。遺物は出土していないが、２号溝跡と同時に機能していたと考えられるため、廃絶の時期については、18世紀後半～19世紀初頭頃と推定される。（鶴　見）

２号特殊遺構　ＳＸ２

遺　　構（図33、写真17・18）

本遺構は、調査区西部のＤ３・４グリッドで検出した遺構である。検出面はＬⅢ上面である。９号溝跡と接しているが、遺構の新旧関係は把握できなかった。

遺構の平面形は長方形で、検出面での規模は、長軸3.51ｍ、短軸1.93ｍ、底面での規模は、長軸2.32ｍ、短軸1.1ｍである。検出面からの深さは97㎝である。遺構は二段掘り状になっていて、底面から中段付近までは傾斜がきつく、中段よりも上は緩やかにハの字状に検出面まで開いていく。北東隅と西壁ではステップ状の段が２～３段確認された。

堆積土は８層に分層した。ℓ１は炭化物や焼土を含む層で、ℓ２は褐色シルト中に暗褐色シルトを斑に含んでいる。このため、ℓ１・２は人為堆積土と判断した。ℓ３は地山の土と同じ色調の褐色シルトを基調とする層である。ℓ４～６は粘土層で、腐食した木片および板材が出土している。ℓ７は褐色砂質シルト層、ℓ８は黒褐色シルト層である。ℓ３は天井部の崩落土、ℓ４～８は自然堆積土と判断した。

遺　　物（図33、写真20）

ℓ４から出土した木片等は図示できなかったため、３点の遺物を掲載した。図33－１は陶器で、常滑焼の甕である。肩部付近の破片で、外面は二次的に熱を受けた痕跡がある。

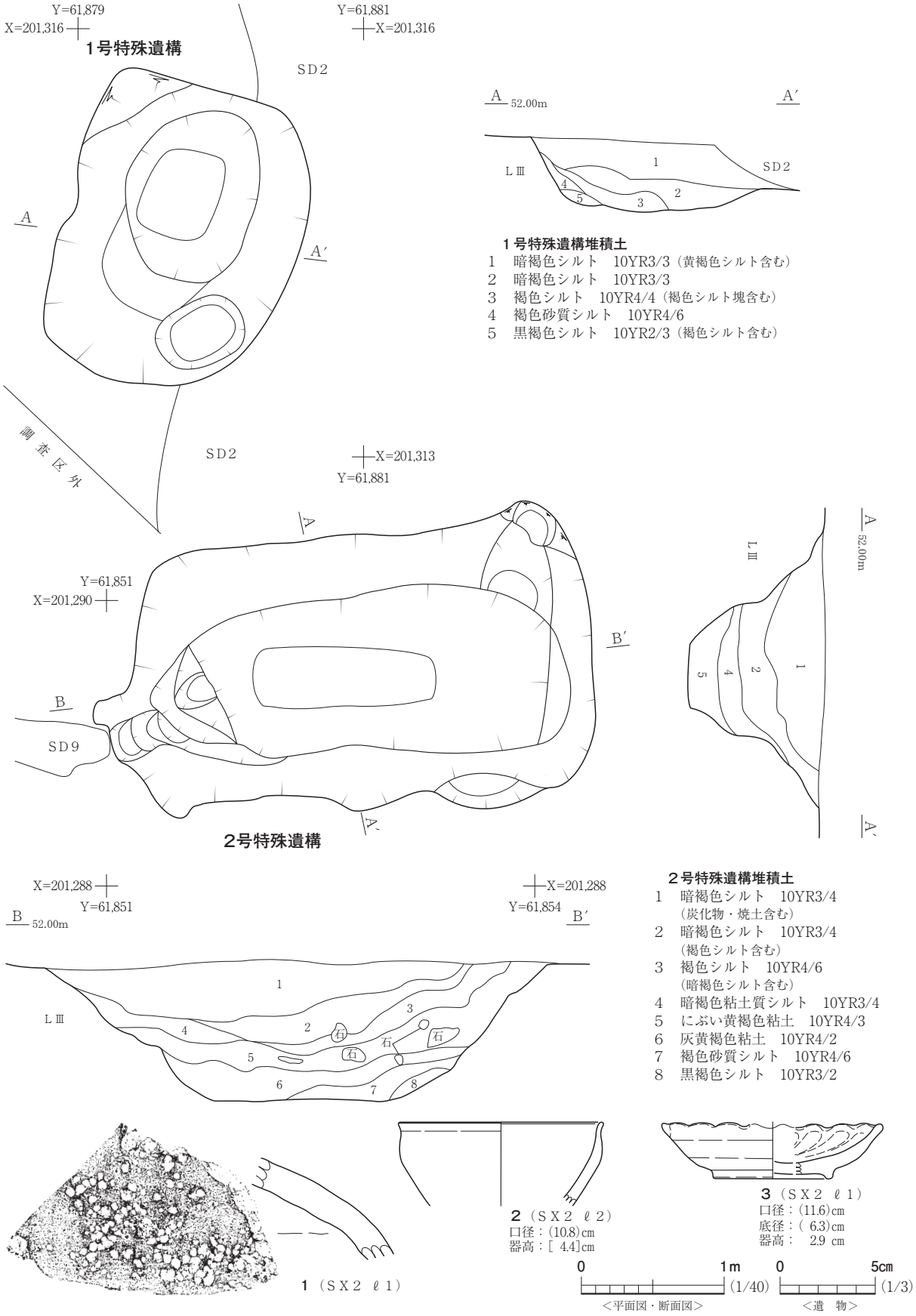


図33　１・２号特殊遺構、２号特殊遺構出土遺物

図33－２は陶器で、天目茶碗である。口縁部がわずかに外反し、胴部が張る。

図33－３は陶器で、志野焼の菊皿である。破片から復元実測をした。外面は二次的な被熱によって著しい発泡が見られる。２・３は17世紀初頭頃のものとみられ、１も近接する年代のものと推定する。

ま と め

本遺構は、天井部の崩落土が確認されたことから、天井部を持つ地下室と推定される。中世には、各地で地下式壙と呼ばれる遺構が確認されているが、それらの類例に比べ底面が狭く、規模も小さいため、それらには該当しないと考えている。何らかの目的で地下室を使っていたと推定されるが、具体的な用途は不明である。また本遺構の堆積土中からは、木片や板材が出土しているが、これらは天井部に開いた入り口に掛けられた木製の蓋が腐朽したものの可能性がある。遺構の所属時期については、人為堆積土であるℓ１から17世紀初頭頃の遺物が出土しているため、本遺構はそれ以前の年代に位置付けられるとみられるが、概ね中世の範囲に収まると推定する。　（鶴　見）

第６節　　小　穴　群

小穴は全部で167基検出した。全て調査区東部に分布し、西部では確認されなかった。小穴はグリッド毎に番号を付け、表１に長軸(cm)、短軸(cm)、深さ(cm)、堆積土の所見をまとめた。小穴の中には柱痕が確認されたものも多い。柱痕は図に網点で示したが、いずれも黒褐色シルトを呈するため、表１では割合した。一方、掘形に埋められた土は、地山の褐色シルトと色調が近似するため、柱痕と異なり肉眼での区別が難しい。ただ、掘形に埋められた土は、地山の堆積土に比べ非常に硬く締まっていたため、その硬さの違いを手掛りとして地山と区別して調査を行った。小穴の平面形は方形または隅丸方形を呈する。

堆積土中からは石器・土師器・瓦質土器等が出土した。図36－１は縄文時代の石鏃で、先端部が欠損する。これ以外については、いずれも細片のため図示できなかった。

これらの小穴は掘立柱建物跡あるいは柱列跡の柱穴と考えているが、軸線が揃うものがなく、組み合わせを認識できなかった。調査区東部でのみ確認できることから、当該箇所周辺が屋敷跡として利用されていた可能性が高い。多くの小穴が検出されたため、複数棟の建物が同時に存在していたり、建て替え等も行われていたと推測される。

時期については、周囲の遺構の状況から中・近世の所産と判断した。屋敷跡の区画溝の可能性が高い２号溝跡や７・15号溝跡から出土した遺物は18世紀後半～19世紀初頭頃のものが中心であるため、多くの小穴は当該時期に収まるものと推定される。また、調査区西部で検出した２号特殊遺構は、17世紀初頭以前の遺構と考えられ、地下室等の性格が想定される。このため、小穴の中には中世末～近世初頭まで遡るものも含まれている可能性があり、本遺跡はその時期から屋敷跡として利用されていたと推測される。　（鶴　見）

X=201,320
X=201,310
X=201,300
X=201,290
1
2
3
4
Y=61,920
Y=61,910
Y=61,900
Y=61,890
Y=61,880
J
I
H
G
F
SD5b
SD5a
SD25
51.750m
51.500m
51.750m
撹乱
SK20
SK15
SE1
SD4
SK9
SK27
SK12
SK13
SD3
SK6
SK5
SK7
SK3
SK2
SD2
SX1
SD1
調査区外
調査区外
0
5m
(1/250)

図34　小穴群全体図

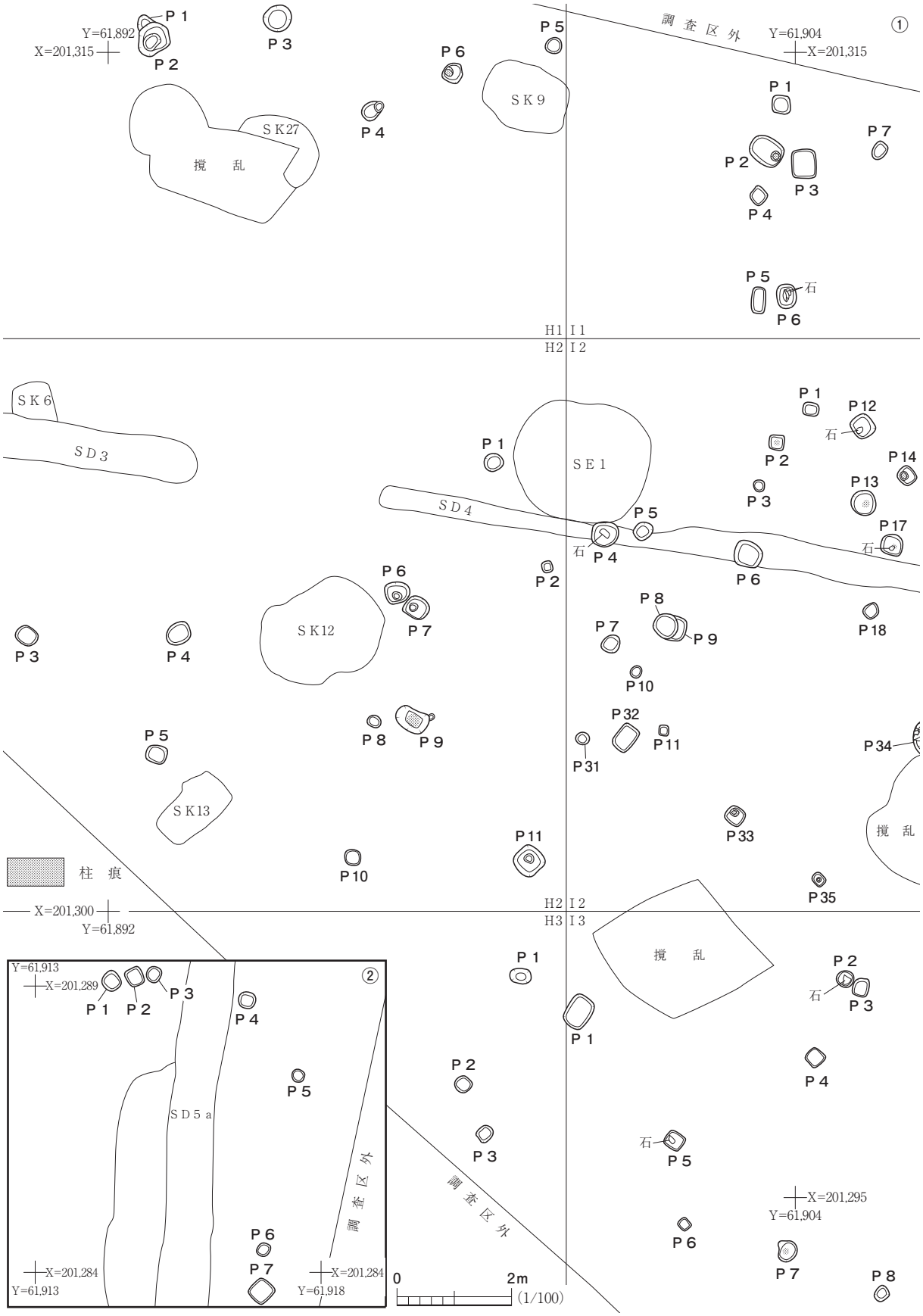

①
調査区外
Y=61,904
X=201,315
Y=61,892
X=201,315
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
SK9
SK27
撹乱
石
H1 I1
H2 I2
SK6
SD3
SD4
SE1
P12
P13
P14
P17
P18
SK12
SK13
P8
P9
P10
P11
P31
P32
P33
P34
P35
柱痕
X=201,300
Y=61,892
H2 I2
H3 I3
②
Y=61,913
X=201,289
SD5a
X=201,284
Y=61,913
X=201,284
Y=61,918
X=201,295
Y=61,904
0
2m
(1/100)

図35　小穴群①・②

図36　小穴群③、小穴群出土遺物

表１－１　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土
Ｆ１	1	19	18	10	暗褐色シルト　10YR3/4
Ｇ１	1	40	38	31	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	2	34	32	23	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
Ｇ２	1	28	27	16	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
Ｈ１	1	35	18	13	暗褐色シルト　10YR3/4
	2	61	54	44	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	49	45	14	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	4	42	30	15	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	5	29	28	20	暗褐色シルト　10YR3/4
	6	37	33	24	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
Ｈ２	1	33	31	14	暗褐色シルト　10YR3/4
	2	20	19	12	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	39	31	14	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	4	43	39	20	暗褐色シルト　10YR3/4
	5	36	32	23	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	6	44	35	23	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	7	46	44	33	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	8	25	25	20	暗褐色シルト　10YR3/4
	9	59	38	26	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	10	31	30	26	暗褐色シルト　10YR3/4
	11	50	48	24	暗褐色シルト　10YR3/4
Ｈ３	1	38	28	12	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	2	30	24	12	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	28	26	8	暗褐色シルト　10YR3/4
Ｉ１	1	33	31	9	暗褐色シルト　10YR3/4
	2	60	49	23	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	46	43	9	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	4	29	28	18	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	5	46	25	6	暗褐色シルト　10YR3/4
	6	44	35	38	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	7	33	27	22	暗褐色シルト　10YR3/4
	8	49	40	56	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	9	31	30	8	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	10	44	31	30	暗褐色シルト　10YR3/4
	11	30	30	14	暗褐色シルト　10YR3/4
Ｉ２	1	28	24	9	暗褐色シルト　10YR3/4
	2	29	26	11	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	20	20	10	暗褐色シルト　10YR3/4
	4	43	41	40	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	5	33	29	10	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	6	45	45	28	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	7	33	30	14	暗褐色シルト　10YR3/4
	8	57	44	24	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	9	43	24	15	暗褐色シルト　10YR3/4
	10	22	20	8	暗褐色シルト　10YR3/4
	11	19	17	10	暗褐色シルト　10YR3/4
	12	40	37	28	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	13	44	43	36	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	14	33	29	40	暗褐色シルト　10YR3/4
	15	25	23	24	暗褐色シルト　10YR3/4
	16	25	22	11	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	17	39	37	32	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	18	29	26	12	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	19	44	39	26	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	20	25	20	12	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	21	58	47	24	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	22	23	21	10	暗褐色シルト　10YR3/4
	23	42	37	10	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	24	57	49	40	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	25	37	30	39	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	26	50	43	19	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土

表１－２　小穴一覧

グリッド	P番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土
Ｉ２	27	30	29	30	暗褐色シルト　10YR3/4
	28	30	29	16	暗褐色シルト　10YR3/4
	29	19	17	8	暗褐色シルト　10YR3/4
	30	18	15	10	暗褐色シルト　10YR3/4
	31	24	21	13	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	32	47	35	22	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	33	35	32	23	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	34	91	68	30	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	35	23	22	17	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	36	21	20	7	暗褐色シルト　10YR3/4
	37	28	27	9	暗褐色シルト　10YR3/4
	38	28	25	20	暗褐色シルト　10YR3/4
	39	27	23	8	暗褐色シルト　10YR3/4
Ｉ３	1	60	44	30	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	2	31	30	6	暗褐色シルト　10YR3/4
	3	32	28	9	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	4	30	29	10	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	5	32	30	14	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	6	20	20	8	暗褐色シルト　10YR3/4
	7	38	38	16	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	8	29	27	17	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	9	38	34	24	暗褐色シルト　10YR3/4
	10	38	35	12	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
Ｊ１	1	28	28	10	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	2	45	42	62	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	35	28	15	暗褐色シルト　10YR3/4
	4	38	36	16	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
Ｊ２	1	52	40	19	暗褐色シルト　10YR3/4
	2	28	26	10	暗褐色シルト　10YR3/4
	3	40	34	41	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	4	35	34	32	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	5	32	30	20	暗褐色シルト　10YR3/4
	6	40	30	23	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	7	78	53	42	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	8	36	35	28	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	9	44	36	23	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	10	28	27	22	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	11	20	18	14	暗褐色シルト　10YR3/4
	12	53	38	39	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	13	35	32	43	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	14	25	24	14	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	15	32	28	10	暗褐色シルト　10YR3/4
	16	29	29	15	暗褐色シルト　10YR3/4
	17	24	15	10	暗褐色シルト　10YR3/4
	18	30	28	26	暗褐色シルト　10YR3/4
	19	44	36	20	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	20	32	32	26	暗褐色シルト　10YR3/4
	21	52	42	22	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	22	39	37	24	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	23	34	28	20	暗褐色シルト　10YR3/4
	24	30	28	25	暗褐色シルト　10YR3/4
	25	21	20	8	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	26	39	35	55	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	27	29	28	11	暗褐色シルト　10YR3/4
	28	32	32	29	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	29	22	21	8	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	30	20	19	8	暗褐色シルト　10YR3/4
	31	31	28	24	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	32	42	38	31	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	33	39	34	41	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	34	31	24	10	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土

表１－３　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土
Ｊ２	35	50	44	29	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	36	35	30	30	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	37	27	26	18	暗褐色シルト　10YR3/4
	38	37	34	33	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	39	48	46	43	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	40	37	36	41	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	41	32	32	45	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	42	42	33	42	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	43	40	34	36	暗褐色シルト　10YR3/4
	44	20	20	9	暗褐色シルト　10YR3/4
	45	37	36	39	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	46	26	23	11	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	47	45	36	34	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
Ｊ３	1	22	22	19	暗褐色シルト　10YR3/4
	2	30	25	22	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	52	45	25	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	4	25	18	21	暗褐色シルト　10YR3/4
	5	40	34	30	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	6	28	25	17	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	7	23	22	12	暗褐色シルト　10YR3/4
	8	26	25	17	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	9	29	25	10	暗褐色シルト　10YR3/4
	10	54	39	36	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	11	19	16	20	暗褐色シルト　10YR3/4
	12	31	31	30	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	13	46	28	35	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
Ｊ４	1	34	34	15	暗褐色シルト　10YR3/4
	2	32	30	22	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	28	25	12	暗褐色シルト　10YR3/4
	4	30	30	21	暗褐色シルト　10YR3/4
	5	2	22	15	暗褐色シルト　10YR3/4
	6	27	22	20	暗褐色シルト　10YR3/4
	7	40	38	16	暗褐色シルト　10YR3/4
Ｋ２	1	32	24	22	欠
	2	33	27	19	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	3	82	50	56	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	4	31	30	23	暗褐色シルト　10YR3/4
	5	42	42	28	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	6	60	50	30	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	7	26	26	23	暗褐色シルト　10YR3/4
	8	29	25	17	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
	9	23	22	11	暗褐色シルト　10YR3/4
	10	48	38	33	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土
Ｋ３	1	26	26	16	暗褐色シルト　10YR3/4
	2	28	24	20	暗褐色シルト　10YR3/4と褐色シルト　10YR4/6の混土

第７節　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は１点掲載した。図37－１は土師器甕の口縁部～頸部の破片である。非ロクロ成形のもので、口縁部はくの字状に屈曲している。また、頸部外面には縦方向のハケ目が施されている。これ以外の箇所については、摩滅のため調整が不明である。特徴から古墳時代前期に位置付けられる。　（鶴　見）

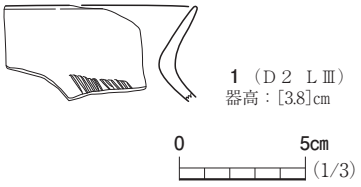


図37　遺構外出土遺物

第３章　　総　　括

田向遺跡の調査では、縄文時代と推定される落し穴、中・近世の溝跡及び建物跡の柱穴とみられる多数の小穴が検出された。遺物は、縄文時代の土器・石器、古墳時代～古代の土師器、中世陶器、近世の陶磁器・土師質土器・瓦質土器、近世頃の石製品が出土した。以下、縄文時代、中・近世を中心に調査の成果についてまとめたい。

縄文時代

縄文時代の遺構は13基検出した。円形の土坑である14号土坑からは縄文土器が出土しており、当該期の貯蔵穴と推定している。その他は、長方形ないし楕円形を基調とするもので、遺構の深さや底面で確認した小穴等から、落し穴と判断した。落し穴は12基あり、10・11・18・19・21～23号土坑は、東西方向に間隔をあけて並んでいる。

本遺跡で落し穴が集中している理由としては、本遺跡の立地する地形が挙げられる。本遺跡は、盆地の端部付近にあり、遺跡の南・西側には丘陵が迫っている。また、遺跡の南側に隣接して旧流路があり、遺跡自体も自然堤防上に立地している。調査区内の深い遺構では湧水が確認され、縄文時代の落し穴の底部でも湧水が確認されている。縄文時代に南側の旧流路が機能していたかどうかは不明だが、山から流れてくる地下水が湧き出る場所があったか、遺跡周辺が低湿地のような状態で、近くに水場となる場所があったと推定される。当時の人々は、山から下りて水を飲みに来る動物を狙って、落し穴を掘っていたと考えられる。

中　　世

中世の遺物は出土量が少ないが、15号溝跡から古瀬戸と在地産陶器が出土している。古瀬戸は14世紀中～後半頃のもの、在地産陶器は伊達市八郎窯跡群（梁川町教育委員会1987）の製品に類似しており、大まかに13世紀前半頃とみられる。

また、２号特殊遺構からは、同遺構を埋めた人為堆積土中から常滑焼の甕、天目茶碗、志野焼の菊皿が出土していて、天目茶碗と菊皿は17世紀初頭頃のものである。このため、２号特殊遺構がつくられたのは、それ以前で、概ね中世末頃と推測される。また、調査区東部で確認された小穴の中には、２号特殊遺構と同時期のものが含まれている可能性もある。

15号溝跡から出土した陶器は、周囲から流入したものと推定されるが、今回の調査区内では13～14世紀代の遺構は確認されていない。ただ、本遺跡の北に位置する中室内遺跡の３次調査（本書第３編）では、13世紀中～後半頃の陶器が少量ながら出土していることから、中室内遺跡や本遺跡の周辺の土地が当該期に利用されていたと推定され、遺構が存在する可能性がある。

近　　世

溝跡はそのほとんどが、区画溝と推定されるが、５・10・12・13・14・19号溝跡等は道跡に伴う側溝の可能性もある。調査区東部では、溝跡内部で多くの柱穴が確認されたことから、当該箇所が屋敷跡として利用されていたと考えられる。また、調査区東部を東西に延びる３・４号溝跡は軸線方向がほぼ一致しており、一連の遺構とみられる。両溝跡間の陸続きとなっている箇所が屋敷跡の出入り口になっていたと推定される。また、調査区西部では小穴が確認できないことから、２号溝跡は屋敷跡西側の区画溝と推定される。５号溝跡は道跡に伴うものと判断しているが、それよりも新しい小穴があるため、屋敷跡はもう少し東まで広がっていた可能性が高い。７・15号溝跡は、幅の広い15号溝跡が屋敷跡正面の区画溝である可能性がある。確認できる範囲での屋敷跡の規模は、15号溝跡から調査区東部の北壁までの距離で約36m、２号溝跡から調査区東部の東壁まで約42m、調査区の北と東にさらに屋敷跡が続いているとすればこれ以上の広さになる。

今回の調査で確認した溝跡の大半は、出土遺物から見ると中・近世に位置付けられる可能性が高い。中でも、２・15号溝跡からは、まとまった量の近世陶磁器が出土した。出土した近世の陶磁器は、大きく見て福島市岸窯跡の製品、大堀相馬焼、肥前系の陶磁器、その他の産地のものの４つに分けられる。中でも大半を占める岸窯製品と大堀相馬焼とでは、器種組成が異なっている。

岸窯製品は手付水注、擂鉢・蓋・甕・香炉・鉢、徳利・小皿・大皿・花瓶・灯明皿・花生といった器種が確認された。特に多いのは手付水注と擂鉢の２つである。蓋・香炉・鉢・灯明皿等は一定数確認できるが、甕・徳利・小皿・大皿・花生は出土量が少ない。手付水注や擂鉢といった大型の製品が組成の中心で、いわゆる食膳具は岸窯製品の中では補完的な器種となっている。

一方、大堀相馬焼は碗・小皿・大皿・仏飯器・灰吹・香炉・土瓶等の器種が出土したが、組成の大半を碗・皿類が占めている。このため、碗や皿といった小型の食膳具は大堀相馬焼、貯蔵具やその他雑器は岸窯製品を中心という使い分けがされていたことがわかる。

数の少ない肥前系の陶磁器は、碗や皿、猪口等、器種組成が限られている。製品は染付のもので、少量ではあるが初期伊万里が含まれていることは注目される。また、最も数の少ない京焼系や瀬戸系の陶器は、ほぼ碗に器種が限られる。より遠隔地である肥前系の陶磁器が、比較的距離の近い京焼系や瀬戸系の陶磁器よりも出土量が多い理由としては、生産量や流通体制等が関係していると推定される。

このように、本遺跡における陶磁器の器種組成は、在地の岸窯製品や大堀相馬焼を主体としながら、補完的に食膳具を中心として肥前系の陶磁器及びその他の産地の陶器が含まれることに特徴があるといえる。

これらの遺物は、初期伊万里が少し古く17世紀前半代に位置付けられるが、18世紀後半～19世紀初頭頃のものが大半である。出土遺物の年代から考えると、屋敷跡が機能していた年代は18世紀後半～19世紀初頭にかけての時期が中心となると推定されるが、遺物は溝跡が人為的に埋めら

れた層から出土していることから、さらに古い時期から存在していた可能性もある。

次に、今回の調査で確認された屋敷跡を、史料上から確認してみたい。

遺跡周辺は、以前は上保原村と呼ばれていて、これが現在の大字名になっている。この周辺一帯を描いた絵図として、江戸時代に作られた『上保原村絵図』が存在する（保原町1983、※図38は安田1993を転載・一部修正）。この絵図には、名主弥左衛門、組頭徳兵衛・半十郎・七十郎等の記名があり、弥左衛門は正徳三年（1713年）の『上保原村書上』では同村の名主となっているとされる。また、徳兵衛等は寛保二年（1742年）の『上保原村鑑指上帳』に記載された組頭名と同じことから、正徳の頃（1711年～1716年）に作成された絵図と推定されている（安田1993）。

７・15号溝跡等から出土した遺物は、18世紀後半～19世紀初頭頃のものが中心であり、推定される絵図の年代は遺物よりもやや古い。ただ、この絵図と今回の調査区周辺の道路や確認した遺構等の位置を比べると、周辺の道路の形状や屋敷跡の位置等がほぼ一致する。絵図は当時の道路や屋敷、田畑等の位置をおおよそ正確に反映したものである可能性が高く、絵図に描かれた屋敷跡と、調査で確認された屋敷跡は同一のものであると考えられる。この土地がいつから屋敷跡として利用され始めたかは不明だが、今回の調査の直前まで居住地として利用されていたことから、少なくとも２世紀以上に渡って同じ土地が連綿と使われてきたと考えられる。

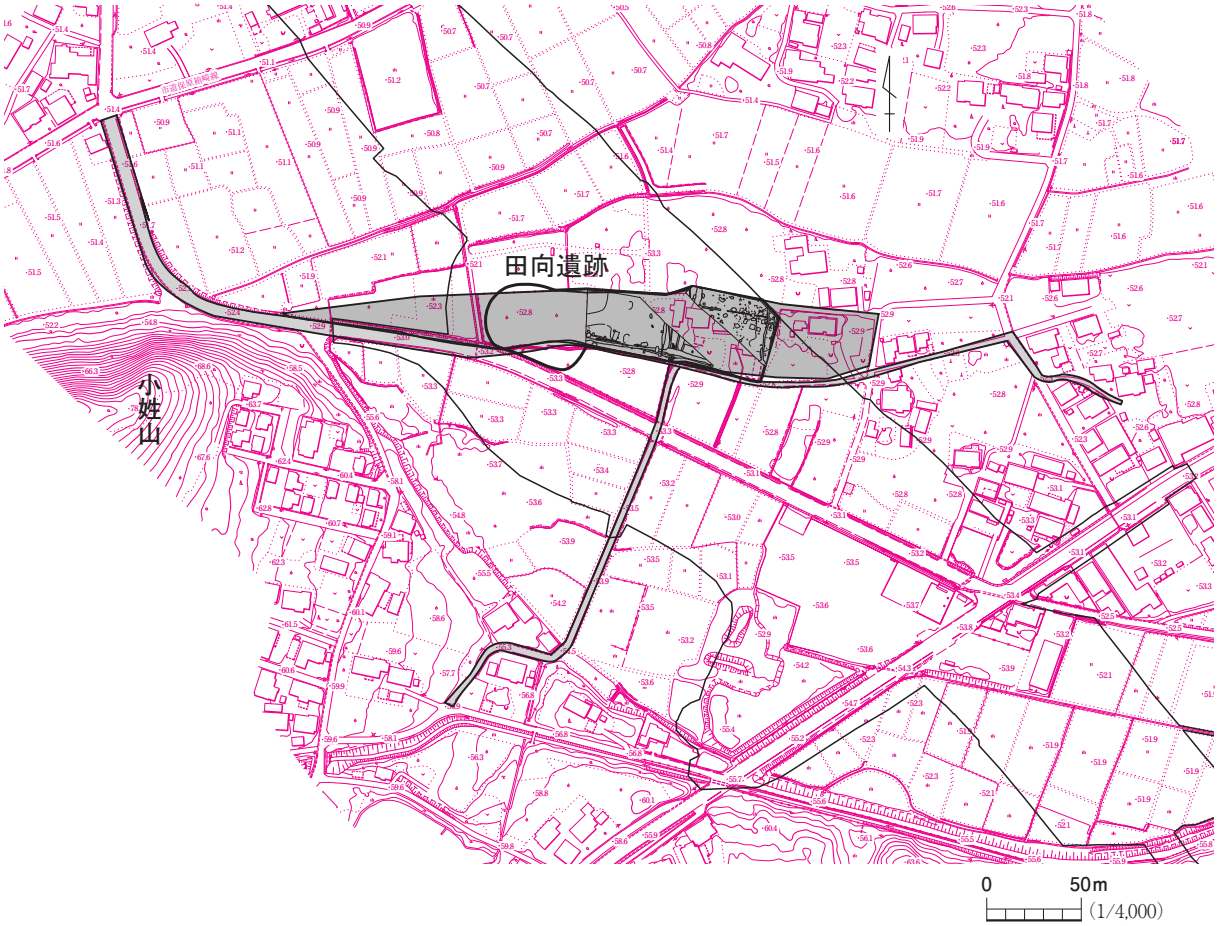
調査区西部の柱穴が確認されなかった位置には、絵図上でも建物が描かれておらず、この点でも調査での所見と一致する。また、絵図に描かれた建物の北側と南側の線は、今回の調査区で確認した溝跡を示している可能性がある。すなわち、南側の線は７・15号溝跡等、北側の線は３・４号溝跡が該当する可能性がある。

周辺をみてみると、屋敷跡の北側や南側は田畑となっている。この田畑は絵図に描かれた建物の住人が耕作していた土地の可能性が高く、絵図に描かれた家は農民のものと考えられる。調査で確認した屋敷跡と絵図が同一のものだとすれば、今回の調査で確認した屋敷跡は農民層のものであると推測される。

以上のように、本遺跡の調査内容は、『上保原村絵図』と比較できるものと考えられ、近世当時の上保原村における生活の様相が垣間見える資料が得られたといっても過言ではなく、その点で大変貴重な成果といえる。また、出土した遺物からは農民層における陶磁器の所有の実態が伺える。初期伊万里や瀬戸系、京焼系等、遠隔地産の陶磁器を少量ではあるが保有していることからは、この屋敷跡には農民層の中でも裕福な者が住んでいたと想定される。（鶴　見）

引用・参考文献

福島県教育委員会　2018　『福島県内遺跡分布調査報告25』福島県文化財調査報告書第521集
福島県教育委員会　2019　『福島県内遺跡分布調査報告26』福島県文化財調査報告書第535集
福島市教育委員会　1998　『岸窯跡－近世窯跡の調査－』福島市・福島市教育委員会・財団法人福島市振興公社
保原町史編纂委員会　1983　『保原町史　第２巻　資料　原始・古代・中世・近世』
安田初雄　1993　「熊坂覇陵の二十境と所謂「高子二十境」」『福島大学教育学部論集　社会科学部門』54　福島大学教育学部
梁川町教育委員会　1987　『八郎窯跡群』梁川町文化財調査報告書第12集



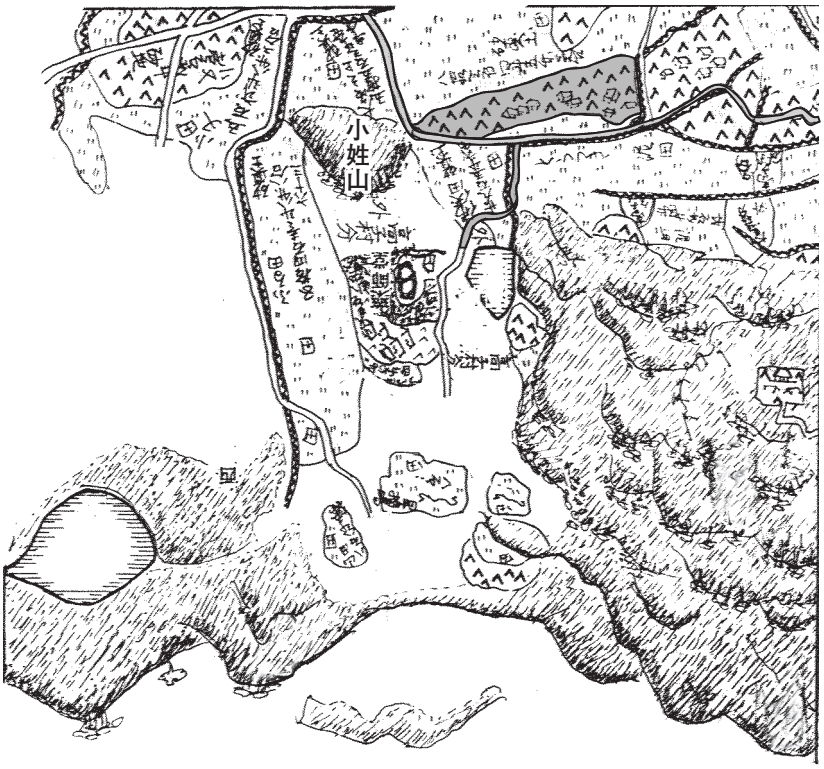


図38　田向遺跡と上保原村絵図

第３編　中室内（なかむろうち）遺跡（３次調査）

遺跡記号	ＤＴ－ＮＭＵ３
所在地	伊達市保原町上保原字中室内・大地内
時代・種類	古代・中世の居住域
調査期間	平成30年７月17日～９月５日
調査員	丹治篤嘉・初山孝行・ 枝松雄一郎・鶴見諒平

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

中室内遺跡は、福島県伊達市保原町上保原字中室内・大地内に所在する。旧保原町内でも旧伊達町境近くに位置し、福島市瀬上方面から伊達市保原町へと抜ける阿武隈急行線の上保原駅から北西方向に約１㎞に位置する。遺跡範囲の南端に沿って市道保原箱崎線が東西方向に延び、これと交差する市道大地内田向線が遺跡範囲を縦断するように南北方向に延びている。

遺跡は、阿武隈川の旧河道に沿って形成された標高50ｍ程の自然堤防上に立地する。調査区の現況は宅地や耕作地で、周囲では水稲耕作や果樹栽培等の営農が行われている。

遺跡から南西に約700ｍの位置には、伊達氏初代朝宗が築いたとされる高子館跡がある。また、遺跡から南に約300ｍ離れた丘陵頂部には奈良時代頃の祭祀遺跡とされる岩谷遺跡があり、付近には榎内遺跡や京口遺跡といった古墳時代～平安時代頃の遺物散布地が認められる。　（丹　治）

第２節　調 査 経 過

中室内遺跡の３次調査は、７月13日付で福島県教育委員会より1,000㎡の本発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ27日である。工事計画に沿って優先度の高い調査区南西部200㎡の調査から着手し、先行して現地引き渡しを行った。その後に、残りの800㎡の範囲の調査を行った。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

７月第３週：17日（火）から調査区の縄張り・環境整備を開始する。並行して、荒屋敷遺跡から発掘器材類の搬入を始め、調査準備に取りかかる。

７月第４週：23日（月）に仮設トイレ・安全掲示板を設置する。25日（水）から作業員を雇用し、本格的な調査を開始する。遺構検出が進むと、調査区南西部に土坑や小穴等が集中することが確認された。検出写真の撮影後、遺構の精査に着手する。

７月第５週：調査区南西部200㎡の遺構検出を継続する。検出した遺構の精査・記録作成を鋭意進めていくと、５号土坑から縄文土器片、７号土坑から中世陶器片が出土する等、遺物も確認され始める。また、調査区南西部200㎡の調査について、次週で終了できる見通しが立ったため、並行して残る800㎡の範囲の調査も開始した。

８月第２週：遺構の精査・記録作成の継続。７日（火）に調査区南西部200㎡の全体写真撮影を行い、当該箇所の調査を終了した。10日（金）に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、調査区南西部200㎡について現地引き渡しを行った。

８月第４週：残る800㎡の範囲の遺構検出・精査・記録作成を進める。連日の猛暑で厳しい調査環

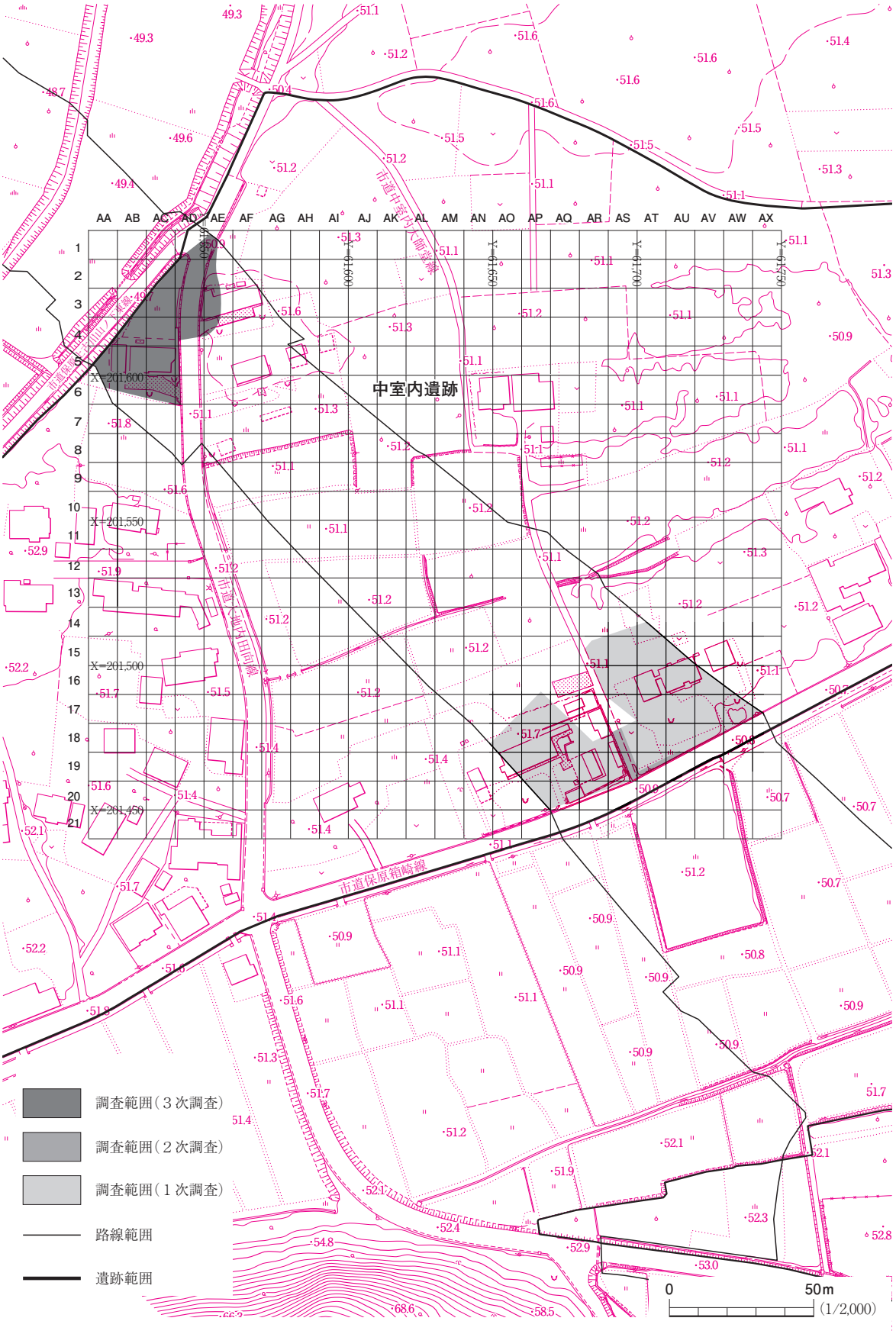

中室内遺跡
市道保原箱崎線
調査範囲（３次調査）
調査範囲（２次調査）
調査範囲（１次調査）
路線範囲
遺跡範囲
0
50m
(1/2,000)

図１　調査区位置図

境が続いたが、22日(水)には、上ノ台館跡の調査を終えた調査員・作業員が合流し、調査は順調に推移した。

８月第５週：遺構精査・記録作成を継続し、並行して基本土層図の作成・地形測量を行う。

９月第２週：５日(水)には調査区全体の写真撮影と荒屋敷遺跡への発掘器材類の搬出を行い、全ての調査が終了した。

９月第３週：11日(火)に、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、800㎡について現地引き渡しを行った。　（丹　治）

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要（図１）

今回の３次調査区は、１・２次調査区から北西に約170ｍ離れた中室内遺跡の包蔵地範囲の北端部にあたり、１・２次調査で設定したグリッドの範囲外である。そのため、今回の調査ではグリッドを新たに設定した。北西隅を原点とし、北から南へは従来のグリッド呼称と同様に１・２…と算用数字、東へはＡＡ・ＡＢ・ＡＣ…と２つのアルファベットを用い、これを組み合わせてＡＡ１・ＡＢ２…とした。１・２次調査区のＡ１グリッドは、３次調査区のＡＮ15グリッドにあたる。

検出された遺構は、土坑16基、溝跡10条、井戸跡１基、小穴55基である。これらの遺構の多くは、調査区南西部に分布している。具体的な性格を特定できる遺構が少なかったが、縄文時代・平安時代・中世の土坑、古墳時代前期・古代の溝跡、中世の井戸跡と考えられる遺構が確認された。

基本土層（図２、写真３）

基本土層は、調査区内の４地点(Ａ－Ａ′、①～③)で土層を確認し、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅳの４層に分層した。

ＬⅠは、表土・耕作土及び盛土層である。層厚は、宅地造成や畑の耕作の影響が少ない②地点では20㎝だが、それ以外は60～98㎝と厚く堆積している。

ＬⅡは、暗褐色砂質シルト層で、層厚は20～30㎝程度である。宅地造成等により、失われている箇所も多いが、調査区北端部の②・③では比較的残っていた。

ＬⅢは、調査区全域で確認されるにぶい黄褐色砂層である。層厚は70～80㎝だが、層中には厚さ３～５㎝の暗褐色砂質シルト層が縞状に堆積しており、本遺跡の立地する地形が河川の氾濫によって形成された状況が観察される。今回の調査で確認した遺構の検出面である。

ＬⅣは、にぶい黄褐色を呈する基盤の砂礫層である。　（丹　治）

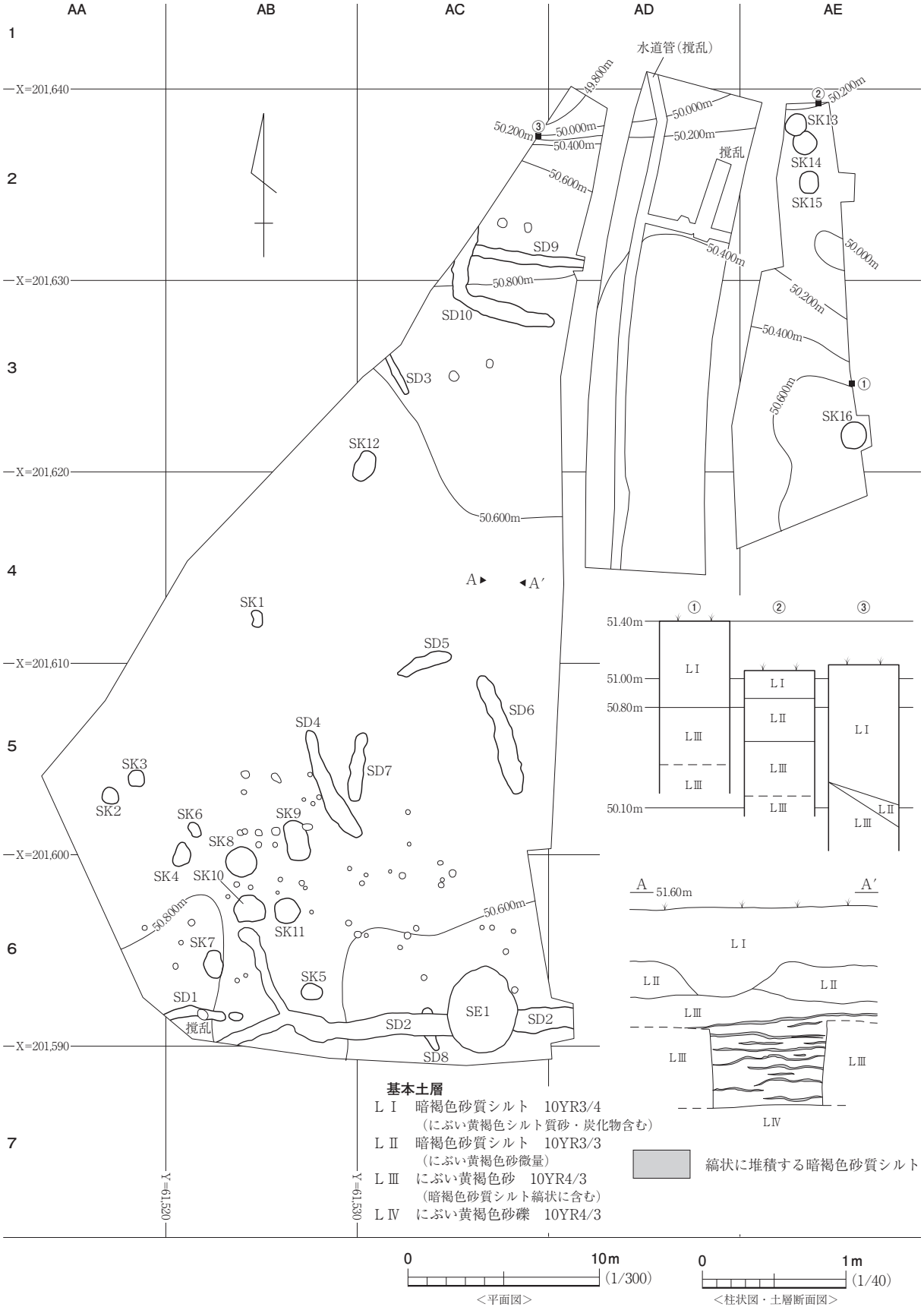


図２　遺構配置図・基本土層

第２節　　土　　坑

３次調査で発見された土坑は16基である。このうち10基（２～11号土坑）は調査区南西部に集中して検出されている。遺構の具体的な性格は判然としないが、調査区北東部の３基（13～15号土坑）は、円形を基調とする近似した形状であることから、同様の機能を有していたと想定される。また、全体として出土遺物に乏しく時期が不明のものが多いが、５号土坑からは縄文土器、７号土坑からは中世陶器、10号土坑からは平安時代の土師器が出土しており、それぞれ当該期に位置付けられると考えられる。

１号土坑　ＳＫ１（図３、写真４）

本遺構は、調査区西部の中央付近、ＡＢ４グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南東に６ｍには４号溝跡がある。

平面形は長軸88㎝、短軸54㎝の不整形状を呈する。検出面からの深さは31㎝で、底面はほぼ平坦である。周壁は、南・西壁は緩やかに立ち上がるが、北・東壁は若干抉れている。

堆積土はＬⅡに起因する暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（丹　治）

２号土坑　ＳＫ２（図３、写真４）

本遺構は、調査区南西部のＡＡ５グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北東に0.8ｍには３号土坑がある。

平面形は直径85㎝前後の歪んだ円形を呈する。検出面からの深さは34㎝で、底面はほぼ平坦である。周壁は、西壁ではほぼ垂直に立ち上がるが、それ以外の箇所では抉れている。

堆積土は土色や含有物の多寡により３層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（丹　治）

３号土坑　ＳＫ３（図３、写真４）

本遺構は、調査区南西部のＡＡ５グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南西に0.8ｍには２号土坑がある。

平面形は直径184㎝前後のやや歪んだ円形を呈する。検出面からの深さは33㎝で、底面はほぼ平坦である。周壁は、北・東壁ではほぼ垂直に立ち上がるが、南・西壁では抉れている。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。このうち、ℓ２はにぶい黄褐色砂と暗褐色砂質シルトが縞状に堆積している状況が観察された。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（丹　治）

４号土坑　ＳＫ４（図３）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ５・６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北東に0.6ｍには６号土坑が隣接し、東に1.8ｍには８号土坑がある。

平面形は長軸126㎝、短軸86㎝の不整形状を呈する。検出面からの深さは44㎝で、底面は多少の凹凸はあるものの概ね平坦である。周壁は、東・西壁では垂直に立ち上がるが、北・南壁では抉れている。

堆積土は土色や含有物の多寡により４層に分層した。このうち、暗褐色砂質シルトとしたℓ２・３は、にぶい黄褐色砂を斑に含み、しまりが強いため、人為堆積土と判断した。にぶい黄褐色シルト質砂としたℓ１・４に関しては、堆積要因は判然としなかったが、ℓ２・３と同様に人為堆積の可能性もある。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（丹　治）

５号土坑　ＳＫ５（図３、写真４）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、西から南に隣接して２号溝跡がある。

平面形は長軸110㎝、短軸86㎝の楕円形である。検出面からの深さは６～12㎝で、底面はほぼ平坦である。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルトを基調とした周囲からの流入土、ℓ２はＬⅢに起因するにぶい黄褐色シルト質砂を基調とした壁の崩落土である。

遺物は、縄文土器が６点出土した。このうち５点が接合し、図３に示した。１は粗製の深鉢で、摩滅が著しいが僅かに縄文が観察される。詳細な時期は不明だが、胎土等の特徴から中期以降の所産と推測される。

本遺構の性格については不明だが、堆積土中から縄文時代中期以降とみられる土器が出土していることから、当該期の所産と考えておきたい。　（丹　治）

６号土坑　ＳＫ６（図３）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ５グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南西に0.6ｍには４号土坑が隣接し、南東に1.7ｍには８号土坑がある。

平面形は長軸85㎝、短軸54㎝の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは41㎝を測る。底面は概ね平坦だが、部分的に凹凸がある。周壁は、西・北壁は垂直気味に立ち上がるが、東・南壁は抉れている。

堆積土は暗褐色砂質シルトで、含有物等の違いにより３層に分層した。このうち、ℓ３は抉れている箇所に堆積し、しまりが強いため、人為堆積土の可能性がある。ℓ１・２については、堆積要

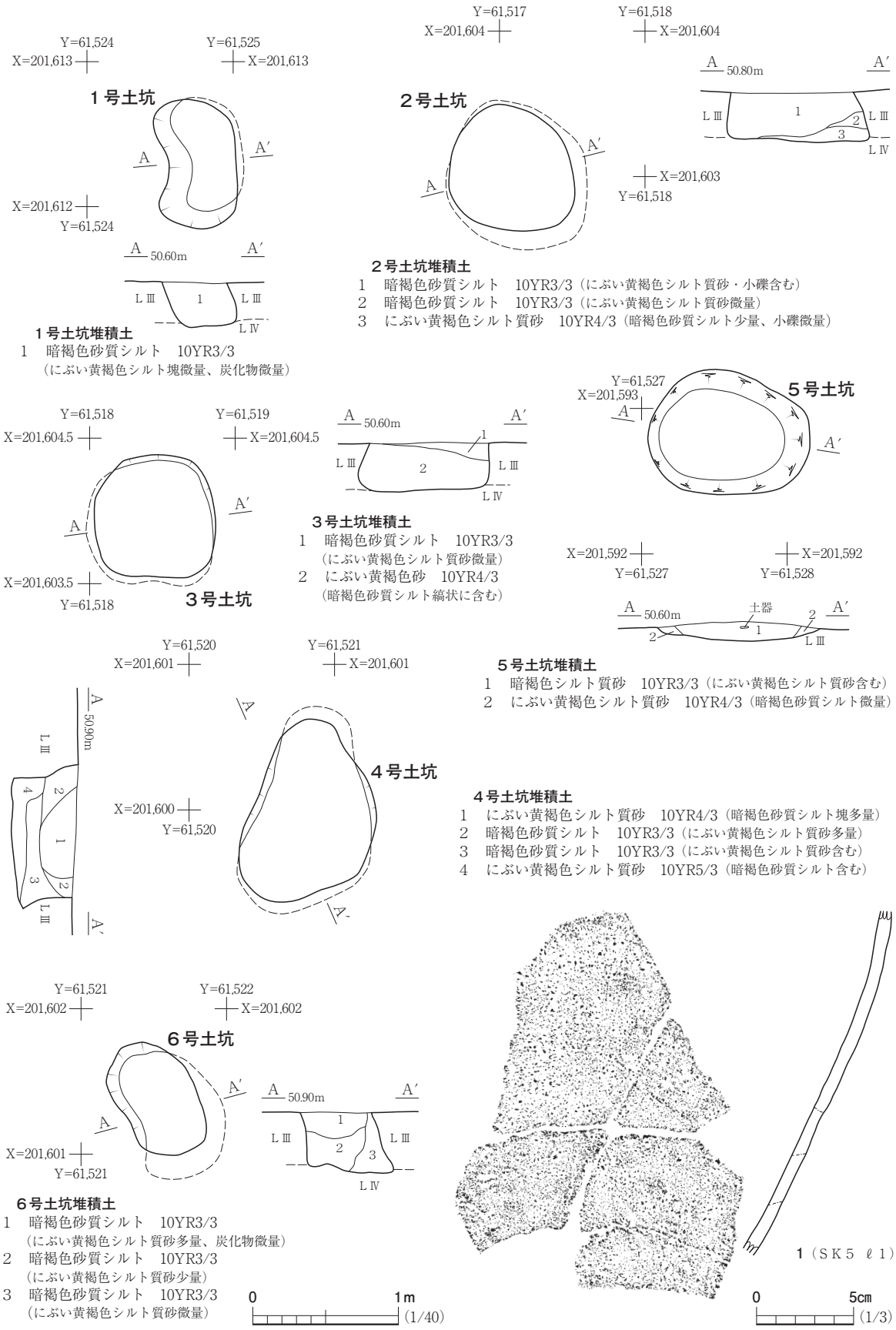


図３　１～６号土坑、５号土坑出土遺物

因は判然としなかった。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（丹　治）

７号土坑　ＳＫ７（図４、写真10）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、東に1.7ｍには２号溝跡、南に1.6ｍには１号溝跡がある。

平面形は長軸145㎝、短軸102㎝の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは43㎝で、底面は北端部と東部中央で一段窪んでいる。周壁は、西・北壁は緩やかに立ち上がるが、東・南壁は急角度で立ち上がる。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルトを基調とした周囲からの流入土、ℓ２はＬⅢに起因するにぶい黄褐色シルト質砂を基調とした壁の崩落土である。

遺物は、陶器が１点出土した。図４－１は陶器の捏ね鉢である。口縁部から体部中央付近までの破片で、口縁端部が僅かに外傾気味になっている。体部内面は使用されたことにより滑らかになっている。また、黒色の付着物が認められる。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

８号土坑　ＳＫ８（図４、写真４）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ５・６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、周囲に小穴群が点在し、東に1.6ｍには９号土坑、南に１ｍには10号土坑、西に1.8ｍには４号土坑がある。

平面形は直径160㎝前後の円形を呈する。検出面からの深さは45㎝で、底面は平坦である。周壁は擂鉢状に緩やかに傾斜して立ち上がる。

堆積土は暗褐色砂質シルトで、含有物等の違いにより３層に分層した。レンズ状堆積を示すことから、いずれも自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土の色調や堆積状況等の特徴が、隣接する９～11号土坑と近似することから、これらの土坑に近い時期の所産の可能性がある。　（丹　治）

９号土坑　ＳＫ９（図４、写真４）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ５・６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。ＡＢ５Ｐ５と重複し、本遺構の方が古い。この他にも周囲には小穴群が点在し、北東に1.4ｍには４号溝跡、南に1.8ｍには11号土坑、西に1.6ｍには８号土坑がある。

平面形は、長軸213㎝、短軸117㎝の長方形を呈し、長軸方向はＮ10°Ｗである。検出面からの

深さは41㎝で、底面はほぼ平坦である。周壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。

堆積土は暗褐色砂質シルトで、含有物の多寡により２層に分層した。いずれも自然堆積土である。ℓ１・２とも周囲からの流入土を主体とするが、ℓ２はℓ１に比してにぶい黄褐色砂が多く認められることから、壁の崩落土も含まれていると考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土の土色や堆積状況等の特徴が、隣接する８・10・11号土坑と近似することから、これらの土坑に近い時期の所産の可能性がある。（丹　治）

10号土坑　ＳＫ10（図４、写真５）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、周囲に小穴群が点在し、東には11号土坑、南には２号溝跡が隣接する。

平面形は長軸164㎝、短軸137㎝の不整形状を呈する。検出面からの深さは45㎝で、底面は多少の凹凸はあるものの概ね平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトで、含有物の多寡により３層に分層した。いずれも自然堆積土である。ℓ１～３とも周囲からの流入土を主体とするが、ℓ３はにぶい黄褐色砂が多量認められることから、壁の崩落土も含まれていると考えられる。

遺物は、ℓ２から土師器が１点出土した。細片のため図化できなかったが、ロクロ成形の土師器杯の底部片で、内面に黒色処理が施されている。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した土師器から平安時代頃と考えられる。（丹　治）

11号土坑　ＳＫ11（図４、写真５）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、周囲に小穴群が点在し、西には10号土坑、南西に1.2ｍには２号溝跡が隣接する。

平面形は直径130㎝前後のやや歪んだ円形を呈する。検出面からの深さは32㎝で、底面は平坦である。周壁は緩やかに傾斜して立ち上がるが、北壁と南東壁で若干抉れている。

堆積土は暗褐色砂質シルトで、含有物等の違いにより３層に分層した。ℓ１は炭化物を含みしまりがある層である。平面では確認されなかったが、柱穴等の別遺構の可能性がある。ℓ２・３は自然堆積土で、周囲からの流入土を主体とするが、ℓ３はℓ１・２に比してにぶい黄褐色砂が多く認められることから、壁の崩落土も含まれていると考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土の土色や堆積状況等の特徴が、隣接する８～10号土坑と近似することから、これらの土坑に近い時期の所産の可能性がある。（丹　治）

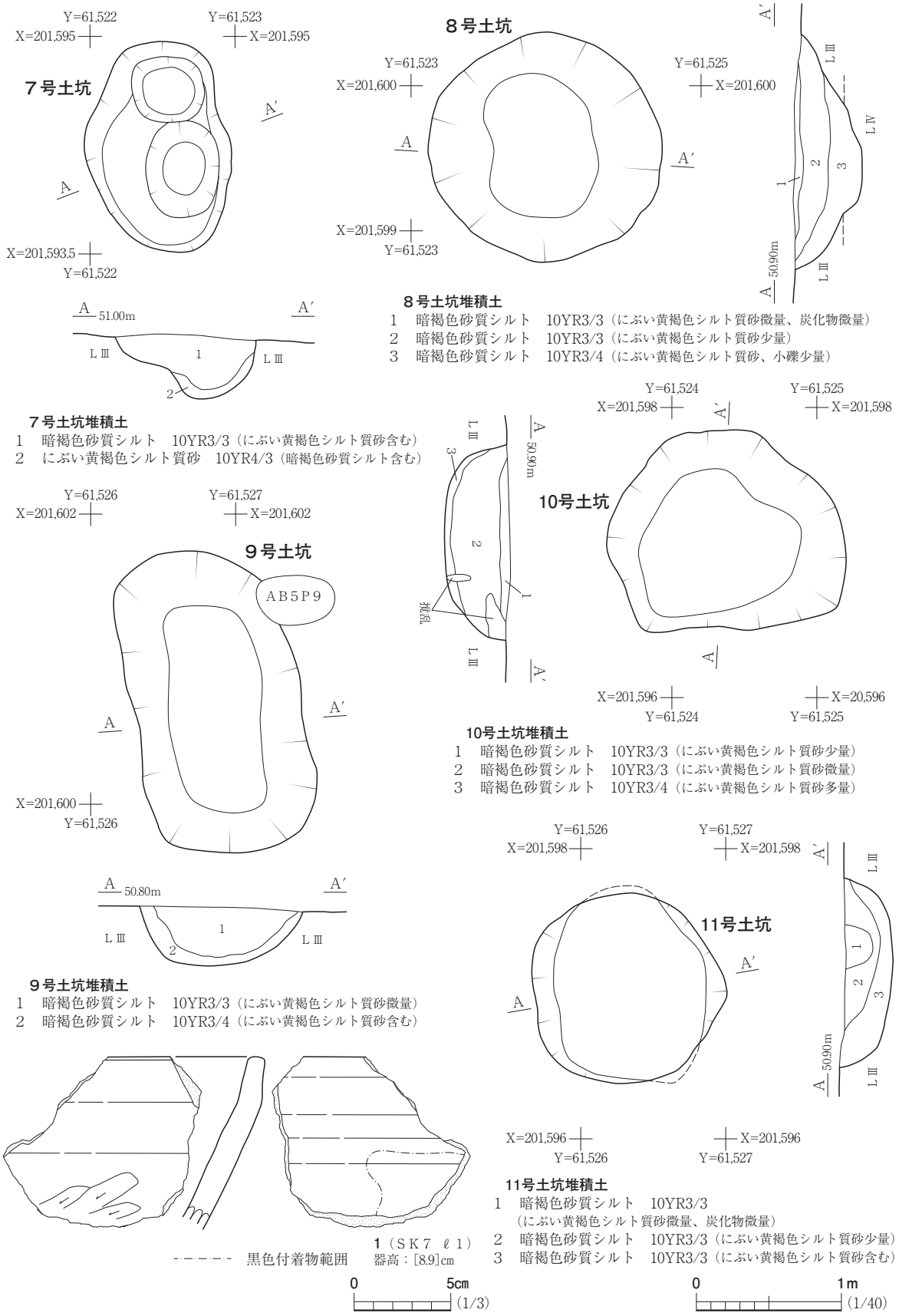


図４　７～11号土坑、７号土坑出土遺物

12号土坑　ＳＫ12（図５）

本遺構は、調査区西部のＡＢ３・４及びＡＣ３・４グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北東に3.5ｍには３号溝跡がある。

平面形は長軸163㎝、短軸105㎝の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは６～14㎝である。底面は北端部で一段窪んでいる他はほぼ平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（丹　治）

13号土坑　ＳＫ13（図５、写真５）

本遺構は、調査区北東部のＡＥ２グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。14号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。この他、南に２ｍには15号土坑がある。

平面形は直径110㎝前後のやや歪んだ円形を呈する。検出面からの深さは62㎝で、底面は平坦である。周壁は、東壁で若干抉れる以外は、ほぼ垂直に立ち上がる。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色シルト質砂を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、形状や堆積土の土色及び堆積状況等の特徴が、隣接する15号土坑と近似することから、同土坑に近い時期の所産の可能性がある。（丹　治）

14号土坑　ＳＫ14（図５、写真５）

本遺構は、調査区北東部のＡＥ２グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。13号土坑と重複し、本遺構の方が古い。この他、南には15号土坑が隣接する。

平面形は直径125㎝前後の円形を呈する。検出面からの深さは53㎝で、底面は平坦である。周壁は、急角度で立ち上がるが、西壁では若干抉れている。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂が縞状に堆積しており、自然堆積土と判断した。ℓ２はにぶい黄褐色砂を主体とする人為堆積土である。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、重複する13号土坑よりは古い時期の所産と考えられる。（丹　治）

15号土坑　ＳＫ15（図５、写真５）

本遺構は、調査区北東部のＡＥ２グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北には14号土坑が隣接する。

平面形は円形を基調とするが、南北長114㎝、東西長96㎝と南北方向に若干長い。検出面からの

深さは36㎝で、底面はほぼ平坦である。周壁は、南壁は垂直気味に立ち上がるが、それ以外の箇所は若干抉れている。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色シルト質砂を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、形状や堆積土の土色及び堆積状況等の特徴が、隣接する13号土坑と近似することから、同土坑に近い時期の所産の可能性がある。

（丹　治）

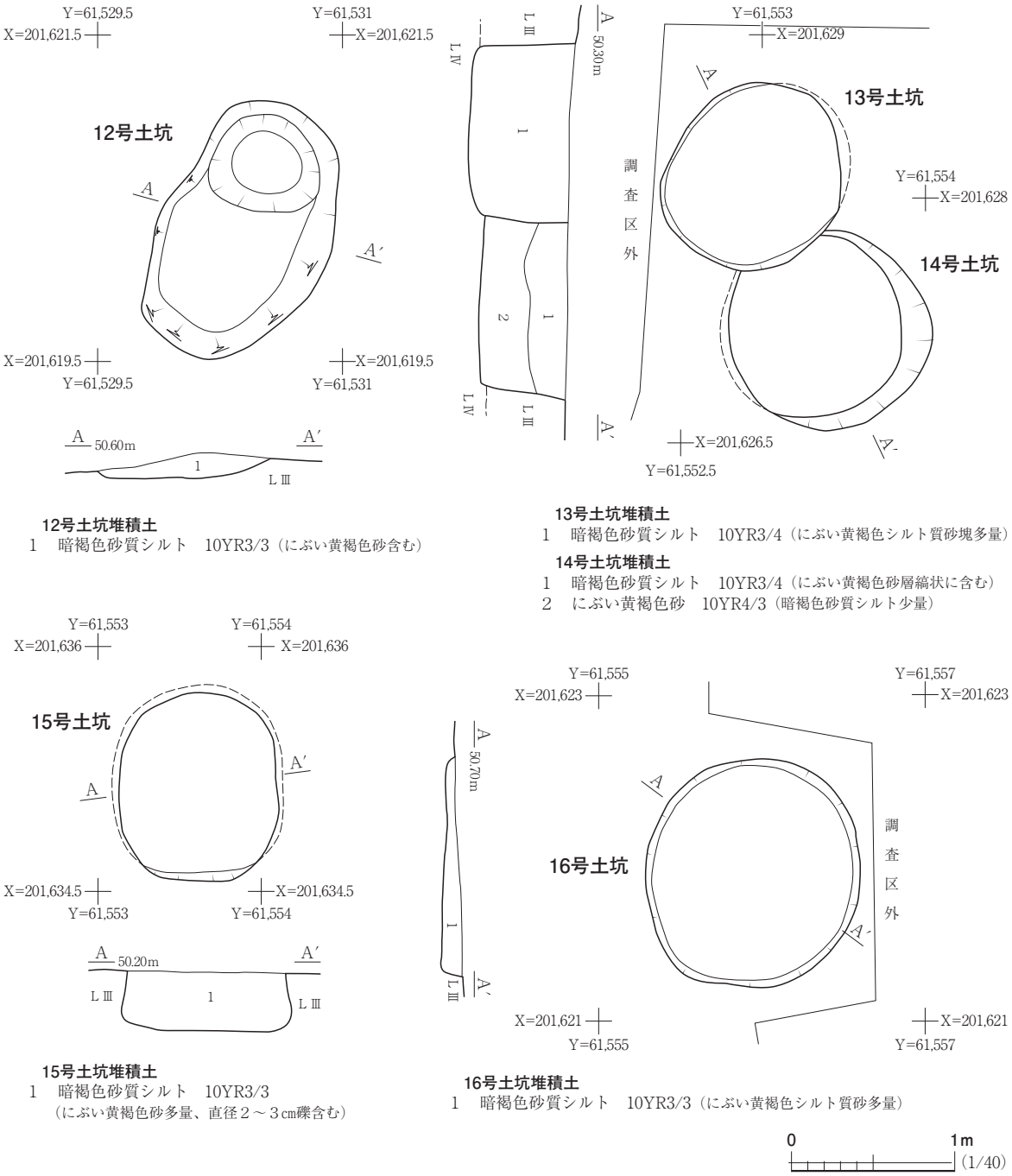


図５　12～16号土坑

16号土坑　ＳＫ16（図５、写真５）

本遺構は、調査区東部のＡＥ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構及び近接する遺構はなく、一番近い遺構は、北に12.2ｍ離れた15号土坑である。

平面形は直径140㎝前後の円形を呈する。検出面からの深さは６～13㎝で、底面は平坦である。周壁は、急角度で立ち上がる。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色シルト質砂を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（丹　治）

第３節　溝　跡

３次調査で発見された溝跡は10条である。直線的な形状の他、Ｙ字形を呈する２号溝跡やＬ字形を呈する10号溝跡が確認されたが、いずれも具体的な性格は不明である。所属時期も不明なものが多いが、出土遺物から２号溝跡は古代頃、６号溝跡は古墳時代前期頃と考えられる。

１号溝跡　ＳＤ１

遺　構（図６）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ６グリッドに位置する溝跡である。東端部で約20㎝途切れるが、一直線につながる位置関係から同一の溝跡と判断した。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南に隣接して２号溝跡、北に1.6ｍには７号土坑がある。

本遺構の規模は、確認できた範囲での長さは4.0ｍである。検出面での幅は43～55㎝を測る。断面形は浅く緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは７㎝程度と浅い。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。なお、出土遺物はなかった。

ま と め

本遺構は東西方向に延びる溝跡だが、出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（丹　治）

２号溝跡　ＳＤ２

遺　構（図６、写真６）

本遺構は、調査区南西部～南部のＡＢ６、ＡＣ６、ＡＤ６グリッドを横断する溝跡である。溝跡の西端部はＹ字形に二方向に分かれている。遺構検出段階では、複数の溝跡の存在を予想していたが、土層断面図Ｂ－Ｂ′で示すように、重複関係は認められなかったため、一つの遺構として報告する。検出面はＬⅢ上面である。８号溝跡と１号井戸跡と重複し、古い方から８号溝跡→２号溝跡

→１号井戸跡の順につくられている。

本遺構の規模は、確認できた範囲での長さは18.5ｍである。検出面での幅は、東西方向に延びる箇所では82～135㎝を測るが、Ｙ字形に二方向に分かれた箇所については、北部は42～84㎝、南部は63～72㎝とやや狭くなっている。断面形は、東西方向に延びる箇所では浅く緩やかな逆台形を呈し、Ｙ字形に二方向に分かれた箇所は、底面中央が緩やかに窪む形状となっている。また、底面の形状は凹凸が多く認められる。検出面から底面までの深さは14～24㎝である。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルトを基調とした周囲からの流入土、ℓ２はＬⅢに起因するにぶい黄褐色シルト質砂を基調とした壁の崩落土である。

遺　　物（図６、写真10）

遺物は、土師器８点、須恵器１点が出土し、このうち須恵器１点を図示した。土師器はいずれも細片だが、甕の底部片とみられるものや、内面に黒色処理を施した杯が認められた。

図６－１は甕で、胴部下半の破片である。外面には平行タタキ目が観察される。内面の当て具痕は長方形格子状文ともみられるが、不明瞭のため断定はできない。

ま と め

本遺構は、重複関係から中世前期頃と考えられる１号井戸跡よりも古いと判断され、出土遺物は古代頃の特徴を備えている。このことから、本遺構の所属時期は古代頃と考えられる。なお、遺構の具体的な性格については不明である。（丹　治）

３号溝跡　ＳＤ３

遺　　構（図６、写真６）

本遺構は、調査区北西部のＡＣ３グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南西に3.5ｍには12号土坑、東に2.2ｍにはＡＣ３Ｐ１がある。

本遺構の規模は、確認できた範囲での長さは2.24ｍである。検出面での幅は26～41㎝を測る。断面形は浅く緩やかな逆台形を呈し、北西部では一段深くなっている。検出面からの深さは、北西部で20㎝、南東部で13㎝である。主軸方向はＮ28°Ｗである。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。なお、出土遺物はなかった。

ま と め

本遺構は南東方向に延びる溝跡だが、出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（丹　治）

４号溝跡　ＳＤ４

遺　　構（図７、写真６）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ５及びＡＣ５グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、東に隣接して７号溝跡、西に隣接して９号土坑や小穴群がある。

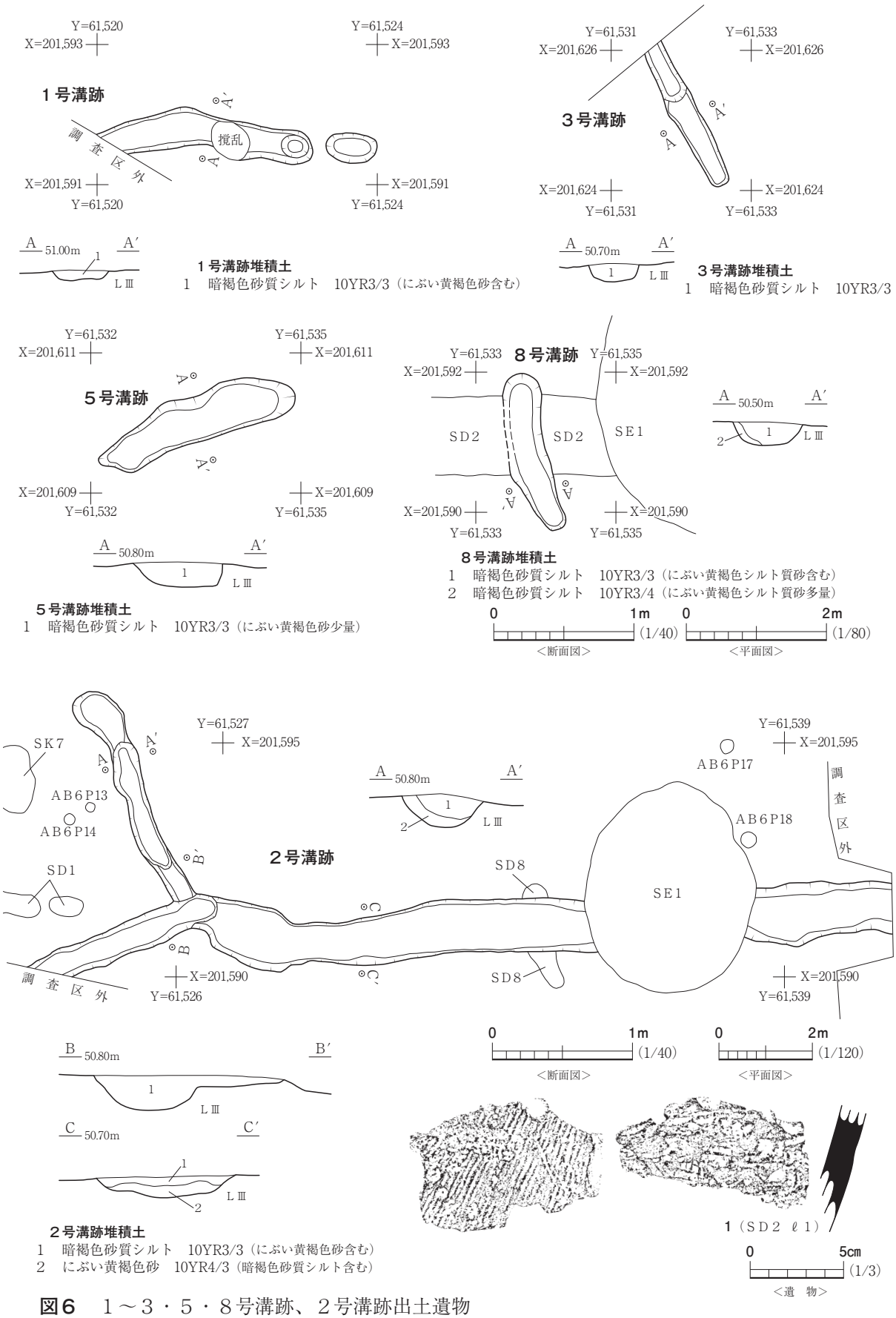


図６　１～３・５・８号溝跡、２号溝跡出土遺物

検出された溝跡の長さは6.14ｍ、検出面での幅は53～106㎝である。断面形は浅く緩やかな逆台形を呈し、底面は凹凸が認められる箇所も多い。検出面から底面までの深さは概ね10～14㎝だが、遺構の中央部では最深26㎝を測る。主軸方向はＮ25°Ｗである。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルトを基調とした周囲からの流入土、ℓ２はＬⅢに起因するにぶい黄褐色シルト質砂を基調とした壁の崩落土である。

ま と め

本遺構は南東方向に延びる溝跡だが、出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（丹　治）

５号溝跡　ＳＤ５

遺　　構（図６、写真６）

本遺構は、調査区中央部のＡＣ４・５グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、南東に1.7ｍには６号溝跡、南西に3.5ｍには７号溝跡がある。

検出された溝跡の長さは2.96ｍ、検出面での幅は53～70㎝である。断面形は浅く緩やかな逆台形を呈し、底面は多少の凹凸があるが概ね平坦である。検出面から底面までの深さは18㎝前後である。主軸方向はＮ68°Ｅである。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。なお、出土遺物はなかった。

ま と め

本遺構は東西方向に延びる溝跡だが、出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（丹　治）

６号溝跡　ＳＤ６

遺　　構（図７、写真６）

本遺構は、調査区中央部よりやや南寄りのＡＣ５グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、北西に1.7ｍには５号溝跡、西に6.5ｍには７号溝跡がある。

検出された溝跡の長さは6.46ｍ、検出面での幅は72～108㎝である。断面形は浅く緩やかな逆台形を呈し、底面は凹凸が認められる箇所も多い。検出面から底面までの深さは20～34㎝である。主軸方向はＮ18°Ｗである。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルトを基調とした周囲からの流入土、ℓ２はＬⅢに起因するにぶい黄褐色シルト質砂を基調とした壁の崩落土である。

遺　　物（図７、写真10）

遺物は、図７－１に示した土師器が、割れて多くの破片となっていたが、一箇所からまとまって出土した。同図１は甕で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部が外反する。外面の調整は、口縁部は横方向のナデ、頸部から底部にかけては、斜め方向主体のハケメである。底部は摩滅のため不

明である。内面の調整は、口縁部は横方向のヘラナデの後横方向のナデ、胴部は横や斜め方向のヘラナデ、底部はヘラケズリで調整されている。

ま と め

本遺構の具体的な性格は不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した土師器から古墳時代前期頃と考えられる。（丹　治）

７号溝跡　ＳＤ７

遺　　構（図７、写真６）

本遺構は、調査区南西部のＡＢ５及びＡＣ５グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが、西に隣接して４号溝跡、北東に3.5ｍには５号溝跡がある。

検出された溝跡の長さは3.58ｍ、検出面での幅は46～73㎝である。検出面から底面までの深さは５㎝前後と浅く、底面は多少の凹凸があるが概ね平坦である。主軸方向はＮ９°Ｅである。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。なお、出土遺物はなかった。

ま と め

本遺構は南北方向に延びる溝跡だが、出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（丹　治）

８号溝跡　ＳＤ８

遺　　構（図６、写真７）

本遺構は、調査区南部のＡＣ６グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。２号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。この他、西に隣接して１号井戸跡がある。

検出された溝跡の長さは2.28ｍ、検出面での幅は34～58㎝である。断面形は底面中央が緩やかに窪む形状となっている。北西壁は、２号溝跡により失われている。検出面から底面までの深さは16㎝前後である。底面は多少の凹凸があるが概ね平坦である。主軸方向はＮ11°Ｅである。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルトを基調とした周囲からの流入土、ℓ２はＬⅢに起因するにぶい黄褐色シルト質砂を基調とした壁の崩落土である。

ま と め

本遺構は２号溝跡と重複しており、同溝跡より古い時期の溝跡である。２号溝跡は古代頃と考えられることから、本遺構は古代以前と判断される。なお、遺構の性格は不明である。（丹　治）

９号溝跡　ＳＤ９

遺　　構（図７、写真７）

本遺構は、調査区北西部のＡＣ２及びＡＤ２グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。10号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。この他、北に隣接して２基の小穴がある。

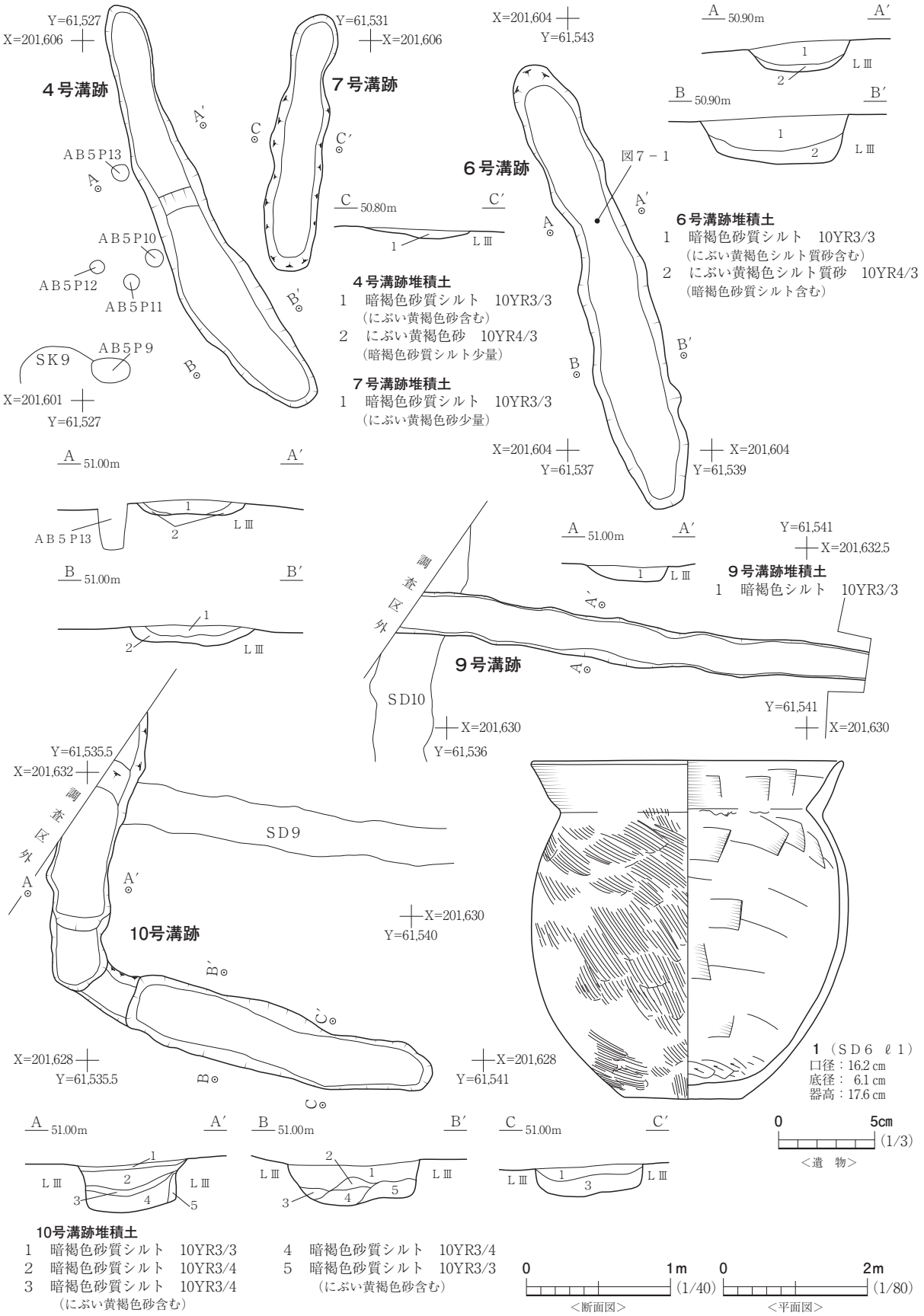


図７　４・６・７・９・10号溝跡、６号溝跡出土遺物

本遺構の規模は、確認できた範囲での長さは6.54ｍである。検出面での幅は40～64㎝を測る。断面形は浅く緩やかな逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは、10㎝前後である。主軸方向はＮ83°Ｗである。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。なお、出土遺物はなかった。

ま と め

本遺構は東西方向に延びる溝跡だが、性格は不明である。所属時期は、出土遺物がなく、判然としないが、重複する10号溝跡より古い時期と判断される。（丹　治）

10号溝跡　ＳＤ10

遺　　構（図７、写真７）

本遺構は、調査区北西部のＡＣ２・３グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅢ上面である。９号溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。

平面形はＬ字形に屈曲する形状で、断面形は浅く緩やかな逆台形を呈する。長さは、南北軸で3.98ｍ、東西軸で5.50ｍである。幅は、南北軸で70～78㎝、東西軸で60～95㎝である。検出面からの深さは、南北軸・東西軸とも20～32㎝だが、南西コーナー部では４㎝前後と浅くなっている。

堆積土は５層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。周囲からの流入土を主体とするが、にぶい黄褐色砂を含むℓ３・５は、ＬⅢに起因する壁の崩落土も含まれていると推測される。

遺　　物

遺物は、ℓ１から弥生土器１点、土師器２点の計３点が出土したが、細片のため図化できなかった。詳細な時期も不明である。

ま と め

本遺構はＬ字形に屈曲する溝跡である。何らかの区画溝の可能性もあるが、区画内部には関連するとみられる遺構が検出されなかったため、具体的な性格は不明である。所属時期は、出土した土師器が細片で時期の特定ができないため、古墳時代以降としておきたい。（丹　治）

第４節　井　戸　跡

井戸跡は調査区南部で１基検出した。井桁や井戸枠を伴わず、当初は遺構の性格がつかめず特殊遺構として調査を進めたが、遺構底面が湧水層まで達することから素掘りの井戸跡と判断した。所属時期は、出土遺物から中世前期と考えている。

１号井戸跡　ＳＥ１

遺　　構（図８、写真８）

本遺構は調査区南部のＡＣ６・７グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面である。２号溝跡と重

複し、本遺構の方が新しい。この他、周囲には小穴群が点在し、西に約１ｍには８号溝跡がある。

検出面での平面形は、南北方向に長い楕円形を呈する。規模は長軸4.52ｍ、短軸3.60ｍである。検出面からの深さは最大で2.32ｍで、基盤の砂礫層であるＬⅣは62～76㎝掘り込まれている。検出面から緩やかにすぼまって底面に至るが、底面は中央やや北東寄りで一段深くなっている。湧水は、この一段深くなった箇所で確認された。

堆積土は４層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１～３は暗褐色砂質シルトを基調とし、にぶい黄褐色砂や礫を含む層で、含有物の違いから３層に分層した。ℓ４は遺構の底面上に堆

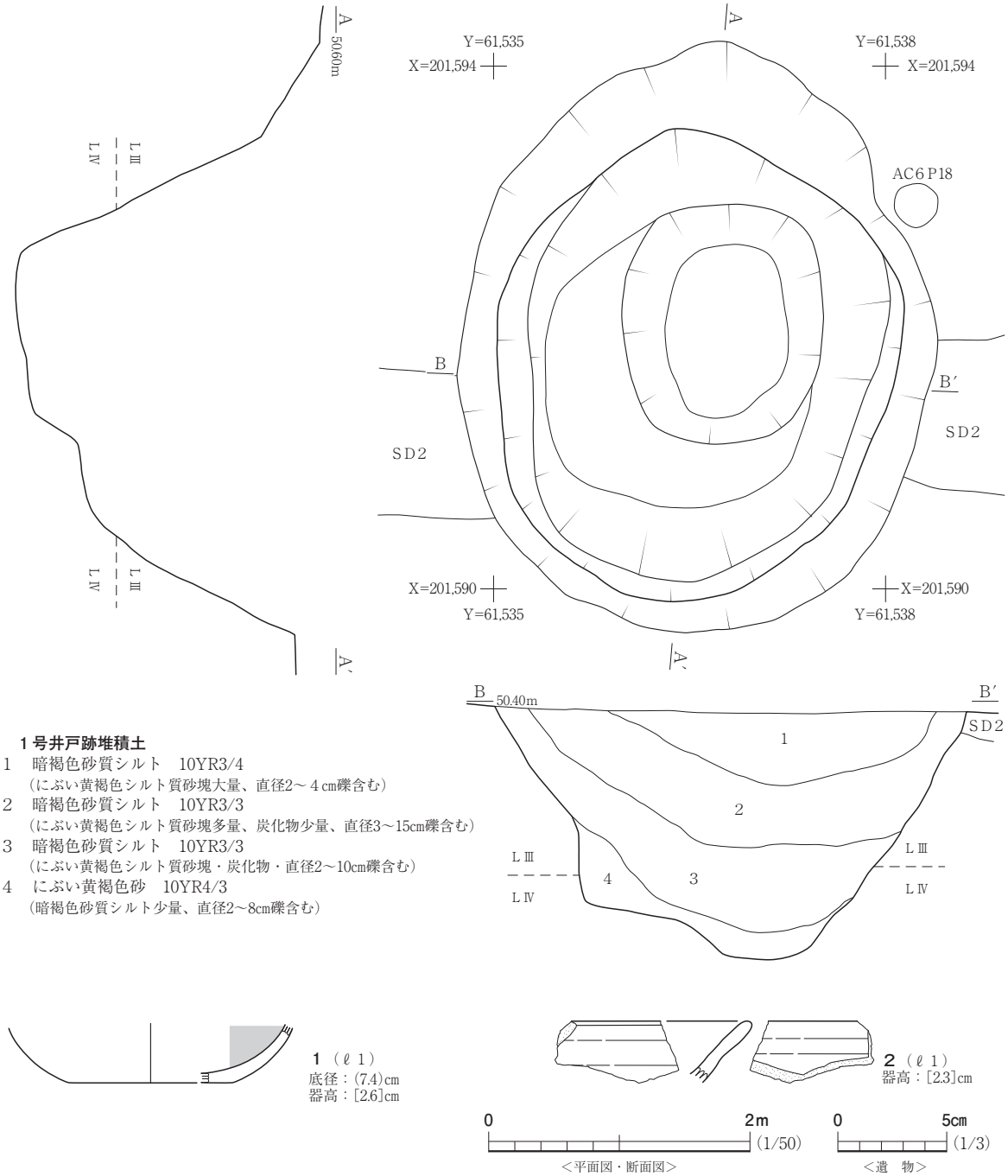


図８　１号井戸跡・出土遺物

積する、にぶい黄褐色砂を主体とする層である。なお、ℓ４を除去した際に、遺構底面には有機質の遺物や炭化物層は確認されなかった。

遺　　物(図８、写真10)

遺物は、ℓ１から土師器11点と陶器１点、ℓ２から土師器４点の計16点が出土した。このうち、図化可能な２点を図示した。

図８－１は土師器杯である。ロクロ成形で、内面には黒色処理が施される。全体的に摩滅が著しく、調整等は不明である。

図８－２は中世陶器の口縁部片である。小片のため断定はできないが、片口鉢とみられる。内面全体には自然釉が掛かっている。

ま と め

本遺構は、井桁や井戸枠及びそれらの存在を示す堆積状況は確認されなかったが、基盤の砂礫層を深く掘り込み、遺構底面が湧水層まで達することから素掘りの井戸跡と判断した。遺構の所属時期は、出土遺物の特徴から中世前期と考えられる。　（丹　治）

第５節　小　穴　群

遺　　構(図９・10、写真９)

検出した小穴は55基である。小穴はグリッド毎に番号を付け、一覧表に長軸(㎝)、短軸(㎝)、深さ(㎝)、堆積土等の所見をまとめた。また、他の遺構と重複するものは、備考欄に「古い遺構→新しい遺構」の順で示した。

小穴は、ＡＣ２・３グリッドで各２基ずつ確認されている以外は、大半が調査区南西部に分布している。遺構検出面は、いずれもＬⅢ上面である。これらの小穴の平面形は円形ないし歪んだ円形を呈するものが多い。小穴の径は20㎝前後のものから55㎝前後とばらつきが見られるが、概ね25～35㎝のものが多い。検出面からの深さは、浅いものでは10㎝以下、深いものでは最大54㎝のものもある。

堆積土は、ほとんどが暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂の混土の単層で構成され、暗褐色砂質シルト主体のものをＡ、にぶい黄褐色砂主体のものをＢ、ＡとＢの中間的なものをＣと記号化した。含有物に関しても、炭化物粒を１、焼土粒を２、礫を３とし、表１には、これらの組み合わせで堆積土の特徴を示した。

小穴の大半は、柱が抜かれた後に人為的に埋められたものと推測される。柱痕が確認されたのはＡＢ５Ｐ５・６の２基である。柱痕としたのはＡＢ５Ｐ５・６のℓ１で、ＡＢ５Ｐ５のℓ２・３とＡＢ５Ｐ６のℓ２は柱の周囲に埋めた掘形埋土と判断した。

なお、ＡＣ６Ｐ５・10・12では、底面から根石が確認された。この３基の小穴は、いずれも堆積土がＣで、平面規模もほぼ同じである。また、底面標高も50.18～50.22ｍと揃う等、共通する特

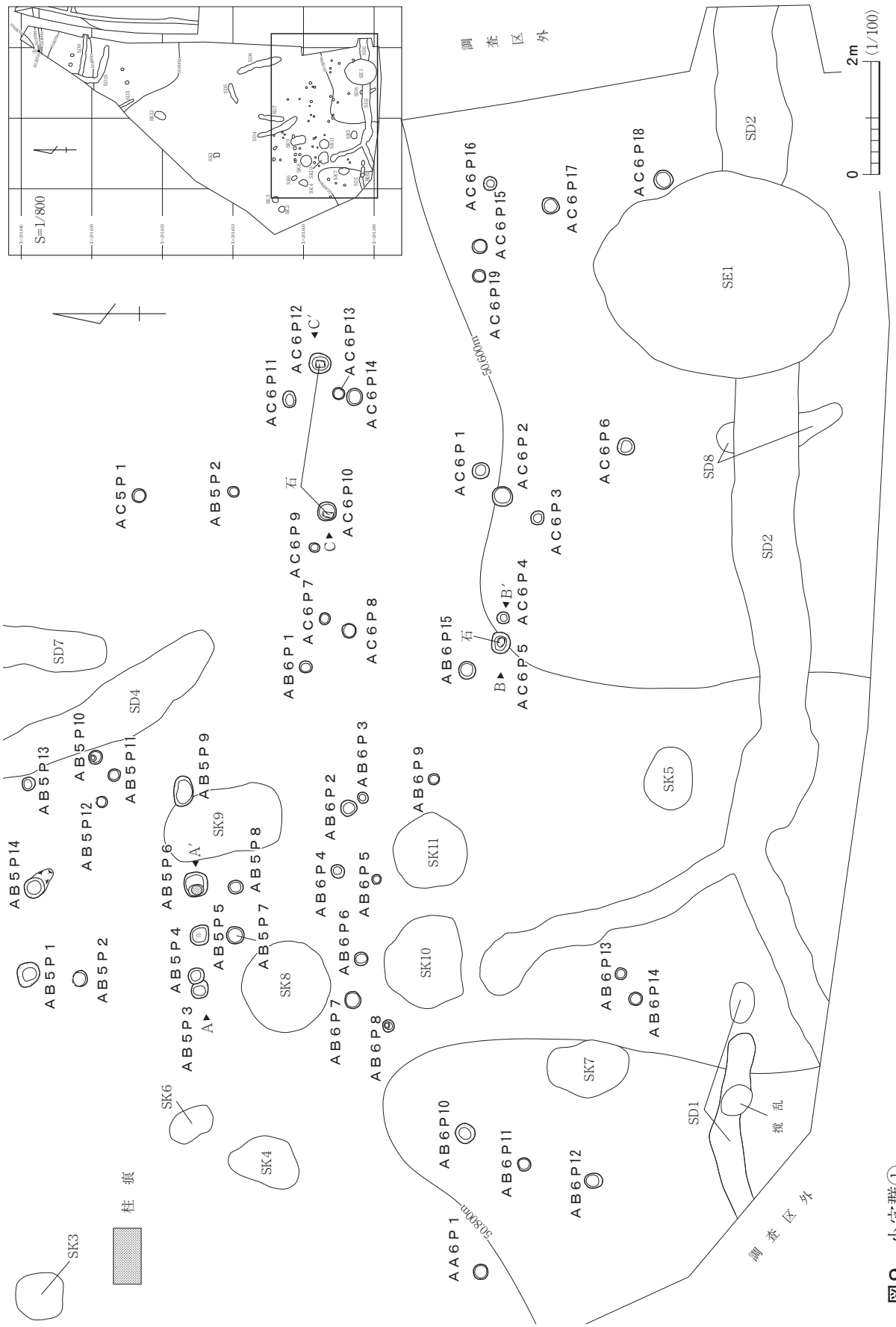

S=1/800
調査区外
0
2m
(1/100)
SD2
SE1
SD8
SD7
SD4
SK9
SK8
SK6
SK4
SK3
SK5
SK11
SK10
SK7
SD1
柱痕
撹乱
50.600m
50.800m
AC5P1
AB5P2
AC6P1
AC6P2
AC6P3
AC6P4
AC6P5
AC6P6
AC6P7
AC6P8
AC6P9
AC6P10
AC6P11
AC6P12
AC6P13
AC6P14
AC6P15
AC6P16
AC6P17
AC6P18
AC6P19
AB6P1
AB6P2
AB6P3
AB6P4
AB6P5
AB6P6
AB6P7
AB6P8
AB6P9
AB6P10
AB6P11
AB6P12
AB6P13
AB6P14
AB6P15
AB5P1
AB5P2
AB5P3
AB5P4
AB5P5
AB5P6
AB5P7
AB5P8
AB5P9
AB5P10
AB5P11
AB5P12
AB5P13
AB5P14
AA6P1
石
A
A′
B
B′
C
C′

図９　小穴群①

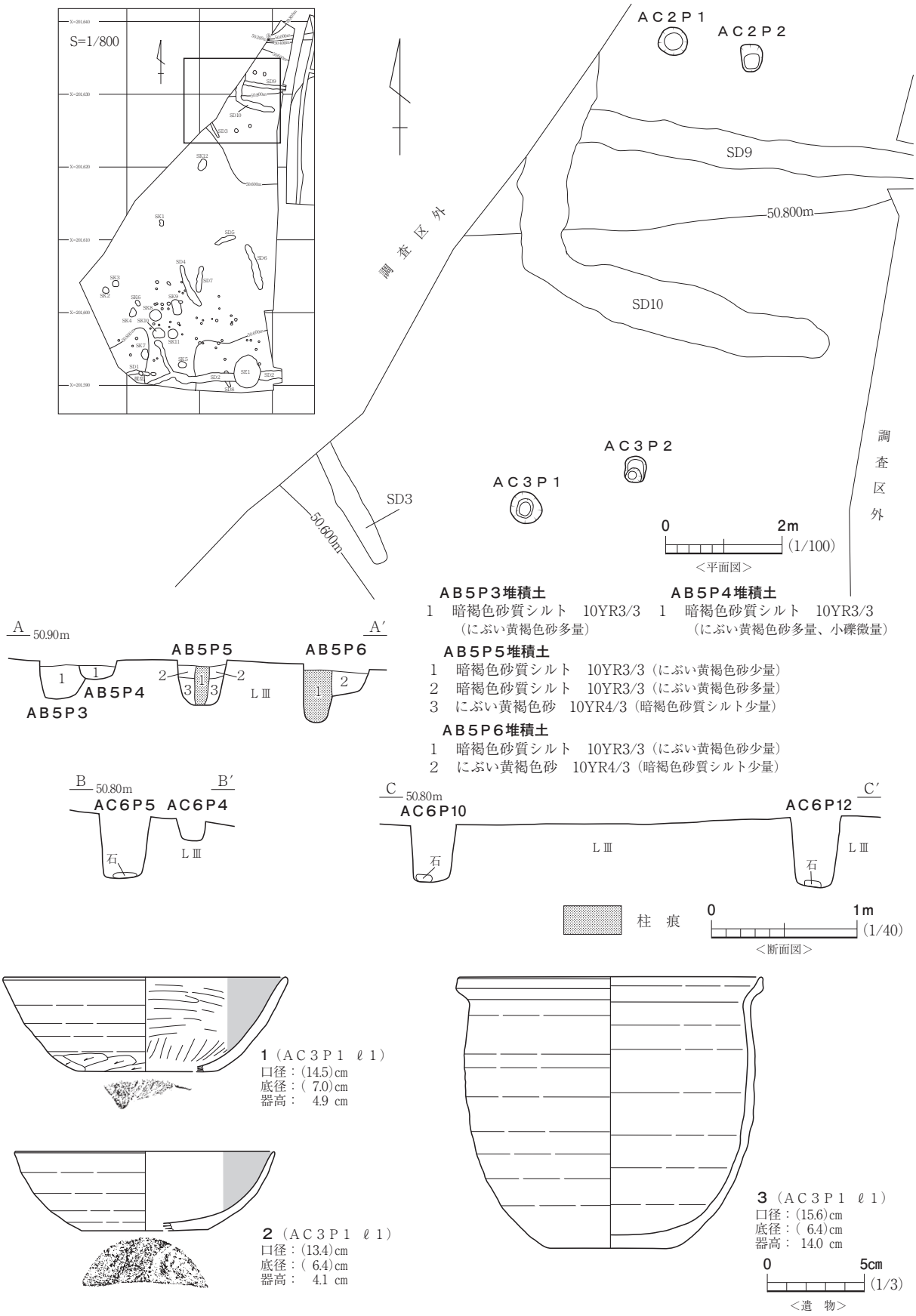


図10　小穴群②、小穴群出土遺物

徴を有する。このことから、関連する柱穴と想定されるが、平面的な位置関係から建物跡や柱列跡として認識することはできなかった。

遺　　物（図10、写真10）

55基の小穴のうち、３基の小穴から、土師器が出土した。ＡＣ３Ｐ２とＡＣ６Ｐ12からは図化できない小片が１点ずつだった。一方、ＡＣ３Ｐ１からは37点の土師器がまとまって出土し、杯２個体、甕１個体に復元されたものを図示した。

図10－１・２はロクロ成形の杯である。いずれも内面に黒色処理が施される。また、１では内面にヘラミガキが観察されるが、２では摩滅のためか不明瞭である。底部の切り離しは、１・２とも回転糸切りである。なお、１には外面の体部下端に手持ちヘラケズリが認められる。

図10－３はロクロ成形の小型の甕である。器壁が薄いつくりで、口縁端部を上方につまみ上げている。写真10のように、ＡＣ３Ｐ１からは図化した口縁部～底部までの資料の他、底部が欠損する資料が出土した。両者は接合しなかったが、器形・胎土等の特徴が一致するため同一個体と考えられる。

ま と め

今回の調査では、同一の建物跡や柱列跡を構成する柱穴は確認することができなかったが、小穴群は、建物跡あるいは柱列跡等の柱穴と推定される。各小穴の厳密な所属時期は不明だが、ＡＣ３Ｐ１から出土した土師器の特徴から、平安時代以降のものと考えられる。（丹　治）

表１　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
ＡＡ６	1	26.5	26	38	C	
ＡＢ５	1	44.5	40	40	A	
	2	28	25	30	A	
	3	35	28	32	図９	Ｐ３→Ｐ４
	4	28	27	13	図９	Ｐ３→Ｐ４
	5	36.5	34	38	図９	ℓ１柱痕
	6	44	42	54	図９	ℓ１柱痕
	7	33	31.5	22	C	
	8	27	25	19	C１	
	9	55	38	32	C１	ＳＫ９→ＡＢ５Ｐ９
	10	25	25	30	C	
	11	25	24	38	A	
	12	20	17	29	C	
	13	25	24	30	A	
	14	54	36	30	A	
ＡＢ６	1	22	21	16	C１	
	2	30	28	45	A	
	3	20	18	40	C	
	4	24.5	24	30	C	
	5	17.5	16.5	8	C	
	6	24	24	24	C	
	7	30	28.5	14	C１	
	8	21.5	21	19	A	
	9	20	20	25	C	
	10	37	35	45	A	
	11	24	23	12	C	
	12	33	27	18	C	
	13	21	20	18	C	
	14	25	23	22	C	
	15	32	30.5	13	C	
ＡＣ２	1	50	47	25	C	
	2	46.5	37	32	C	
ＡＣ３	1	56	53	35	C	土師器
	2	45	37	44	C３	土師器
ＡＣ５	1	25	14	15	C	
	2	20	18	20	C	
ＡＣ６	1	30	28.5	22	C	
	2	36.5	35	14	C	
	3	25	22	18	C	
	4	22	21	15	C１	
	5	37.5	34	42	C	根石
	6	30.5	30	32	C	
	7	22	20	13	C	
	8	26	25.5	10	C	
	9	20	16	13	C	
	10	34	33	40	C	根石
	11	30	23	18	C	
	12	38	36	46	C	根石、土師器
	13	22	21	12	C	
	14	31	28.5	16	C	
	15	32	31	28	A	
	16	28	26	28	C１	
	17	30	28.5	37	C	
	18	35	35	23	A	
	19	25	24	34	C	

【堆積土凡例】
・土色・土質
　A…暗褐色砂質シルト主体
　B…にぶい黄褐色砂主体
　C…暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂の混土
・含有物
　１…炭化物粒
　２…焼土粒
　３…礫

第６節　遺構外出土遺物

遺構外からは、弥生土器、土師器、須恵器、陶器の計30点の遺物が出土した。主体を占めるのは土師器で、他の資料は１～２点程度である。このうち、ＡＣ２グリッドのＬⅡから出土した弥生土器１点、土師器１点を図示した。

遺　　物（図11、写真10）

図11－１は弥生時代後期の広口壺の口縁部～頸部片である。口縁部外面には縄文、口縁端部には刻みが施されている。

図11－２は古墳時代前期の土師器鉢である。体部上半が欠損するが、復元して図化した。底部には焼成後の穿孔、内外面全体に赤彩が観察される。調整は、底部付近では、外面にハケメの後にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施されている。　（丹　治）

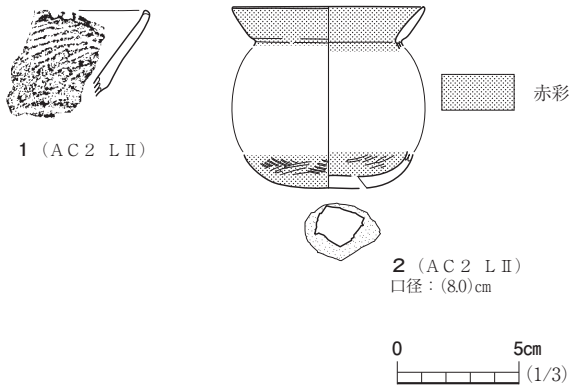


図11　遺構外出土遺物

調査風景

第３章　総　　括

中室内遺跡は、阿武隈川の旧河道に沿って形成された標高50ｍ程の自然堤防上に立地する。この自然堤防は、東西方向に形成されているため、包蔵地は南北約280ｍ×東西約630ｍで、東西方向に長い範囲で登録されている。１・２次調査区は包蔵地範囲の南端部に位置するが、今回の３次調査区は、１・２次調査区から北西に約170ｍ離れた包蔵地範囲の北端部に位置する。

１・２次調査区では、古墳時代前期の集落跡や中世後期の屋敷跡（15・16世紀頃）を中心とした遺構が分布し、それらの遺構は東西の調査区外にも広がると推測されている（福島県教育委員会2019）。一方、１・２次調査区と３次調査区との間の水田部は、試掘・確認調査の結果、遺物が出土するトレンチはあったものの遺構は確認されなかった（福島県教育委員会2017）。当該箇所は後背湿地だったため、遺構をつくるのには不向きだったのであろう。

このように、後背湿地によって１・２次調査区と３次調査区は分断されていることもあり、同じ遺跡内での調査とはいえ、直接的に関連する遺構は確認されなかった。３次調査区では、土坑16基、溝跡10条、井戸跡１基、小穴55基が確認された。出土遺物が少なく、詳細な時期や具体的な性格の特定が難しいものが多かったが、縄文・平安時代及び中世の土坑、古墳時代前期や古代の溝跡、中世の井戸跡と考えられる遺構が確認された。また、弥生時代の土器も僅かながら出土し、様々な時代の人たちの営みが垣間見える調査結果となった。

なお、今回の出土遺物の中には２点の陶器があり（図４－１、図８－２）、いずれも中世前期の東北地方産とみられる。図８－２は小片のため器種は断定できないが、図４－１は捏ね鉢（片口鉢）の口縁部～体部上半の破片で、口縁端部が僅かに外傾気味になっている。在地の窯跡である伊達市八郎窯跡群では、陶器片口鉢は口縁端部の形状が「内傾→外傾」へと変遷するとされている（梁川町教育委員会1987）。そして、口縁端部が内傾する八郎窯跡群Ｂ・Ｃ地点表採資料は12世紀末～13世紀前葉頃と位置付けられている（飯村1992）。このため、図４－１は13世紀前葉以降のものと判断される。破片資料であることも考慮し、大まかに13世紀中～後半頃と考えておきたい。

中室内遺跡の１～３次にわたる調査では、１・２次調査区の堀で囲まれた中世後期の屋敷跡が注目されることはいうまでもない。ただ、本書第４編で報告する荒屋敷遺跡の調査成果によって阿武隈川流域の中世前期の様相が明らかとなってきたことを考え併せると、中室内遺跡の３次調査区で中世前期の資料が確認されたことの意義は小さくないと思われる。（丹　治）

引用・参考文献

飯村均　1992「福島県の中世窯業」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会
福島県教育委員会　2017『福島県内遺跡分布調査報告24』福島県文化財調査報告書第521集
福島県教育委員会　2019『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告７』福島県文化財調査報告書第530集
梁川町教育委員会　1987『八郎窯跡群』梁川町文化財調査報告書第12集

第４編　荒屋敷（あらやしき）遺跡

遺跡記号	ＤＴ－ＡＹＳ
所在地	伊達市伏黒字六角
時代・種類	中世の居住域
調査期間	平成30年５月28日～12月３日
調査員	丹治篤嘉・初山孝行・ 枝松雄一郎・鶴見諒平

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

荒屋敷遺跡は、福島県伊達市伏黒字六角に所在する。福島市瀬上方面から伊達市保原町へと抜ける阿武隈急行線の高子駅から北西方向に約1.8kmのところに位置する。伏黒地区は、伊達市の北西部、阿武隈川の右岸沿いに広がる地区で、北方では伊達郡桑折町と接している。遺跡範囲の中央を、市道上大川布川線が南北方向に延びている。

遺跡は、阿武隈川の旧河道に沿って形成された標高50ｍ程の自然堤防上に立地する。南北約350ｍ、東西約300ｍと広い遺跡範囲のうち、今回の調査区は南西部にあたる。調査区の現況は畑地や果樹園で、周囲では果樹栽培を中心とした営農が行われている。

遺跡範囲の東端から東に約20ｍの位置には、古代の竪穴住居跡が確認された舘ノ内遺跡、東に約200ｍの位置には伏黒館跡、北東に約600ｍの位置には正応二年（1289年）の銘文が刻まれた光台寺供養塔がある。（丹　治）

第２節　調 査 経 過

荒屋敷遺跡の調査は、４月３日、９月26日付で福島県教育委員会より計1,950㎡の本発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ93日である。調査区内を横断する工事用車両の通行帯を確保しておく必要があるため、調査区南端部600㎡の調査から着手し、先行して現地引き渡しを行った。その後、調査区北端部の表土除去、次いで市道上大川布川線の表土除去を行い、残る1,350㎡の調査を実施した。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

５月第５週：28日（月）に仮設トイレ・安全掲示板を設置し、重機による表土除去を開始する。表土除去は調査区西部から行い、週の後半には土坑の輪郭が確認され始める。

６月第２週：７日（木）には調査区西部の表土除去が終了し、引き続き調査区東部の表土除去を行う。８日（金）に発掘器材類の搬入を行う。

６月第３週：11日（月）に作業員の雇用を開始し、遺構検出作業に取りかかる。並行して、検出した土坑の精査に着手する。

６月第４週：18日（月）には、工事用車両の通行帯とする調査区北端部を除いた表土除去が終了。21日（木）に測量基準点を打設する。遺構検出作業が進み、調査区南東部には多数の土坑・小穴等の遺構が密集することが明らかとなった。

６月第５週：先行引き渡し予定の調査区南端部600㎡の遺構精査・記録作成を進める。20号土坑から遺存状態の良好な古墳時代後期の土器が出土する。

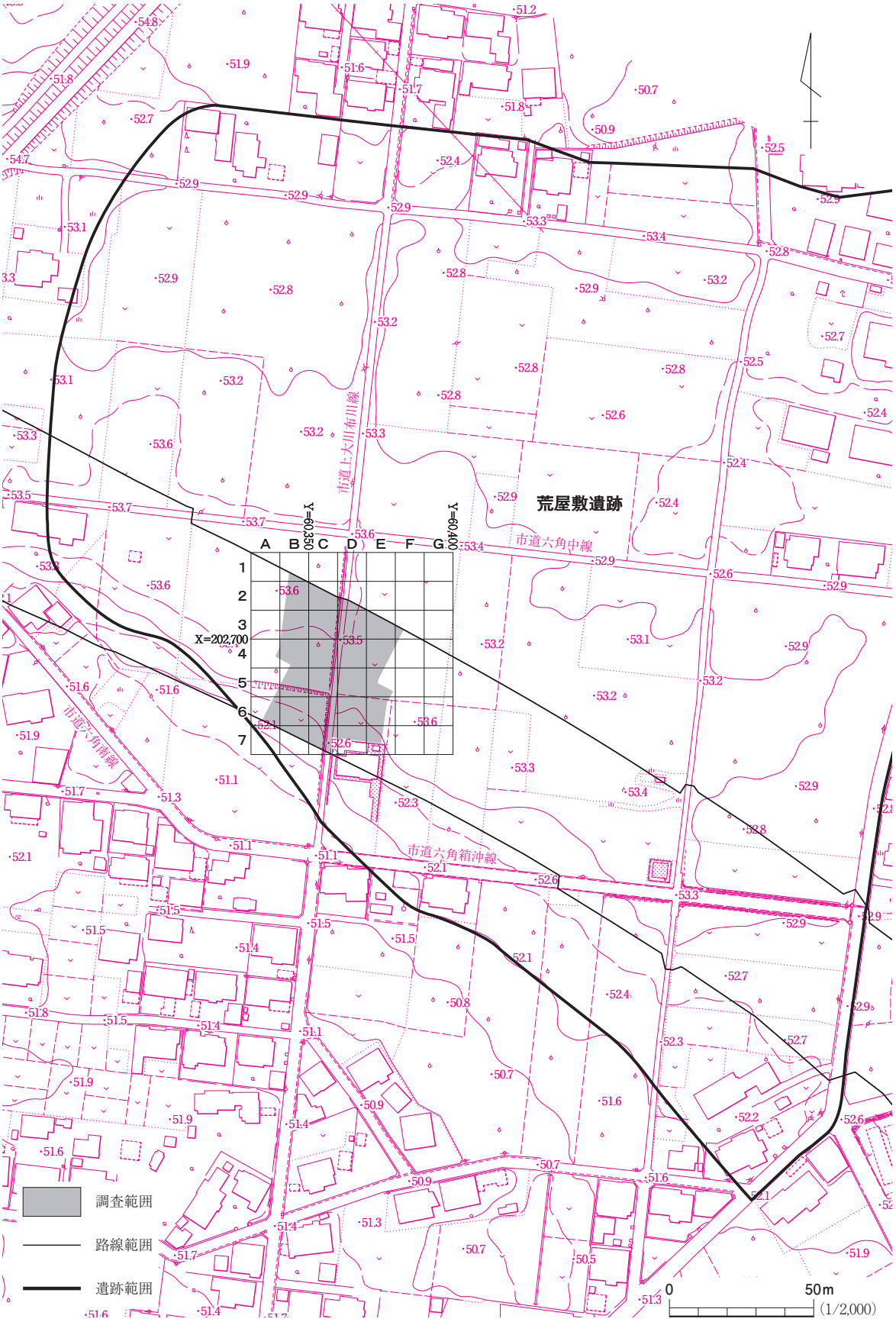

荒屋敷遺跡
市道上大川布川線
市道六角中線
市道六角南線
市道六角箱沖線
A B C D E F G
1 2 3 4 5 6 7
Y=60,350
Y=60,400
X=202,700
調査範囲
路線範囲
遺跡範囲
0
50m
(1/2,000)

図１　調査区位置図

７月第１週：遺構精査・記録作成を継続。好天に恵まれ、調査は順調に進み、調査区南端部600㎡の範囲の遺構精査は大半が終了した。

７月第２週：調査区南端部600㎡の全体写真撮影、地形測量、基本土層図の作成を行い、11日(水)には当該箇所の調査を終了。調査区南端部600㎡の現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、12日(木)に行った。

７月第３週：遺構精査・記録作成を継続するとともに、調査区北端部の表土除去を行う。

７月第４週：24日(火)に調査区北端部の表土除去が終了。調査区全体をブルーシートで養生し、工事計画上、優先度の高い中室内遺跡の調査へ移行した。

９月第２週：中室内遺跡の調査が終了したため、６日(木)から荒屋敷遺跡の調査を再開した。調査区西部の３号溝跡の精査に取りかかる。

９月第３週：３号溝跡の他、土坑の精査を開始する。３号溝跡や隣接する34号土坑からは、中世陶器片や古銭、33号土坑からは白磁片が出土した。

９月第４週：土坑・溝跡の精査・記録作成が進んできたため、並行して小穴群の精査に着手する。

９月第５週：降雨で調査が滞ったが、28日(金)には調査区西部の全体写真撮影を行った。

10月第１週：２日(火)には調査区西部の調査が終了し、調査区東部へ移行した。

10月第２週：遺構検出作業が進み、調査区東部でも中央部は、今回の調査区の中で最も遺構が密集する箇所であることが明らかとなった。

10月第３週：遺構が密集する箇所の精査を進めるのと並行して、調査区北東部の遺構検出作業を行った。調査区北東部には、一辺３～４ｍの大型の土坑が３基確認された。

10月第４週：遺構の精査・記録作成を鋭意進める。追加で指示のあった市道上大川布川線の箇所150㎡について、23日(火)に表土除去を開始し、25日(木)に終了した。

10月第５週：先週表土除去を実施した箇所の遺構検出・精査・記録作成を優先的に進めた。

11月第２週：６日(火)に80号土坑から鉄製の磬、７日(水)に76号土坑から鉄製の香炉が出土し、注視すべき遺物が相次いで確認された。

11月第３週：週の前半には88号土坑と小穴群以外の遺構の調査は終了した。88号土坑の精査を進めると、柱穴の底面に根石を敷いていることが判明した。

11月第４週：88号土坑と小穴群の精査・記録作成の継続。21日(水)には88号土坑と、大半の小穴の精査が終了したため、調査区東部の全体写真撮影を行った。22日(木)には88号土坑の記録作成も終了した。

11月第５週：残る小穴群の精査・記録作成と遺構の断ち割り調査を行う。27日(火)には調査区北東部で基本土層図を作成し、29日(木)に作業員の雇用を終了した。

12月第２週：３日(月)に一切の現地作業を終了する。

12月第３週：14日(金)に、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、残る1,350㎡の範囲について現地引き渡しを行った。　(丹　治)

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要（図２）

荒屋敷遺跡は、阿武隈川の旧河道に沿って形成された自然堤防上に立地する。検出された遺構は、掘立柱建物跡１棟、土坑90基、溝跡６条、特殊遺構６基、小穴882基である。これらの遺構は、南側の旧河道へと緩やかに傾斜する調査区南西部を除いた箇所に分布し、特に東部に集中している。

大半の遺構は、各遺構の廃絶の際に一度に埋め戻されているという共通した特徴が指摘できる。所属時期は、出土遺物や重複関係等から、概ね中世前期頃と考えられる。中世前期以外の所産と判断されるのは、底面から古墳時代終末期頃の土師器が出土した20号土坑である。

１号建物跡は、柱間が２間×３間の南北棟の建物跡である。なお、多数確認された小穴については、直径20～35㎝程度の円形を呈するものが大半で、１号建物跡と同様の建物跡等を構成する柱穴と考えている。

土坑は、平面形が隅丸長方形や隅丸方形で、長軸が２ｍ以内のものが大半である。この他、調査区北東部から東部中央付近では、一辺が３～５ｍの大型の土坑である60・70・71・88号土坑を確認した。このうち、88号土坑では、柱間が２間×２間の等間隔に並んだ８基の柱穴が確認され、いずれも底面に根石が敷かれていた。同土坑は物資を収納する倉庫としての機能が想定される。

確認した６条の溝跡は、南北方向や東西方向に延びるものがあるが、いずれも１号建物跡や大型の土坑である60・70・71・88号土坑と概ね軸線方向が揃うことから、これらの遺構と関連した区画溝と推測される。

特殊遺構は、いずれも平面形が不整形を呈する。断面及び底面の形状は、１・２号特殊遺構を除き、凹凸が著しい特徴がある。具体的な性格は不明である。

遺物は古墳時代前期の土師器が多く出土したが、当該期の明確な遺構は確認されず、集落跡は調査区外にあるものと推測される。中世の遺物は、在地産とみられる陶器が多く出土した。胎土の特徴から、複数個所の窯跡の製品が含まれていると考えられる。この他、中世の特筆すべき遺物として、青磁碗や白磁碗、鉄製の磬や香炉等が出土した。

基本土層（図３、写真７）

基本土層は、調査区内の７地点(①～⑦)で土層を確認し、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅵの６層に分層し、ＬⅠ及びＬⅣはさらに細分した。

A
B
C
D
E
F
1
2
3
4
5
6
7
Y=60,340
Y=60,350
Y=60,360
Y=60,370
Y=60,380
X=202,720
X=202,710
X=202,700
X=202,690
X=202,680
X=202,670
X=202,660
52.25m
51.75m
51.50m
51.25m
52.00m
SK37
SK32
SK33
SK35
SK82
SK79
SK71
SK81
SK38
SB1
撹乱
SK72
SD3
SX2
SK62
SK70
SK73
SK60
SK68
SD5
SK40
SK39
SK74
SK36
SK64
SK75
SK34
SK31
SD6
SK76
SK63
SK65
SK87
SK83
SK77
SK80
SX6
SX4
SK86
SK84
SK89
SK90
SK30
SK66
SK58
SK78
SK88
SK67
SK44
SK43
SK61
SK85
SX5
SK59
SK51
SK42
SD4
SK29
SX3
SK53
SK54
SK69
SK49
SK28
SK57
SK52
SK56
SK55
SK50
SK46
SK45
SK48
SD2
SK47
SK24
SD1
SK25
SK41
SK21
SK2
SK1
SK23
SK22
SK17
SK18
SK13
SK14
SK11
SK12
SK9
SK20
SK7
SK8
SX1
SK4
SK26
SK19
SK27
SK15
SK5
SK10
SK3
SK6
SK16
0
10m
(1/300)

図２　遺構配置図

ＬＩは、表土・耕作土及び盛土層である。色調等の違いから、ＬＩａとＬＩｂに細分した。層厚は、ＬＩａが34～80cm、ＬＩｂが14～25cmである。

ＬⅡは、暗褐色シルト層で、層厚は10～24cm程度である。果樹園造成等により、失われている箇所も多いが、調査区中央を南北に縦断する市道上大川布川線の下や調査区北端部の②・③地点や調査区南東部の⑤地点では比較的遺存していた。なお、断面観察により、本層の上面で検出される遺構があることを確認した。

ＬⅢは、にぶい黄褐色シルト層である。ＬⅡからＬⅣへの漸移的な層で、層厚は４～12cm程度である。一部の遺構では、本層上面が検出面となっている。

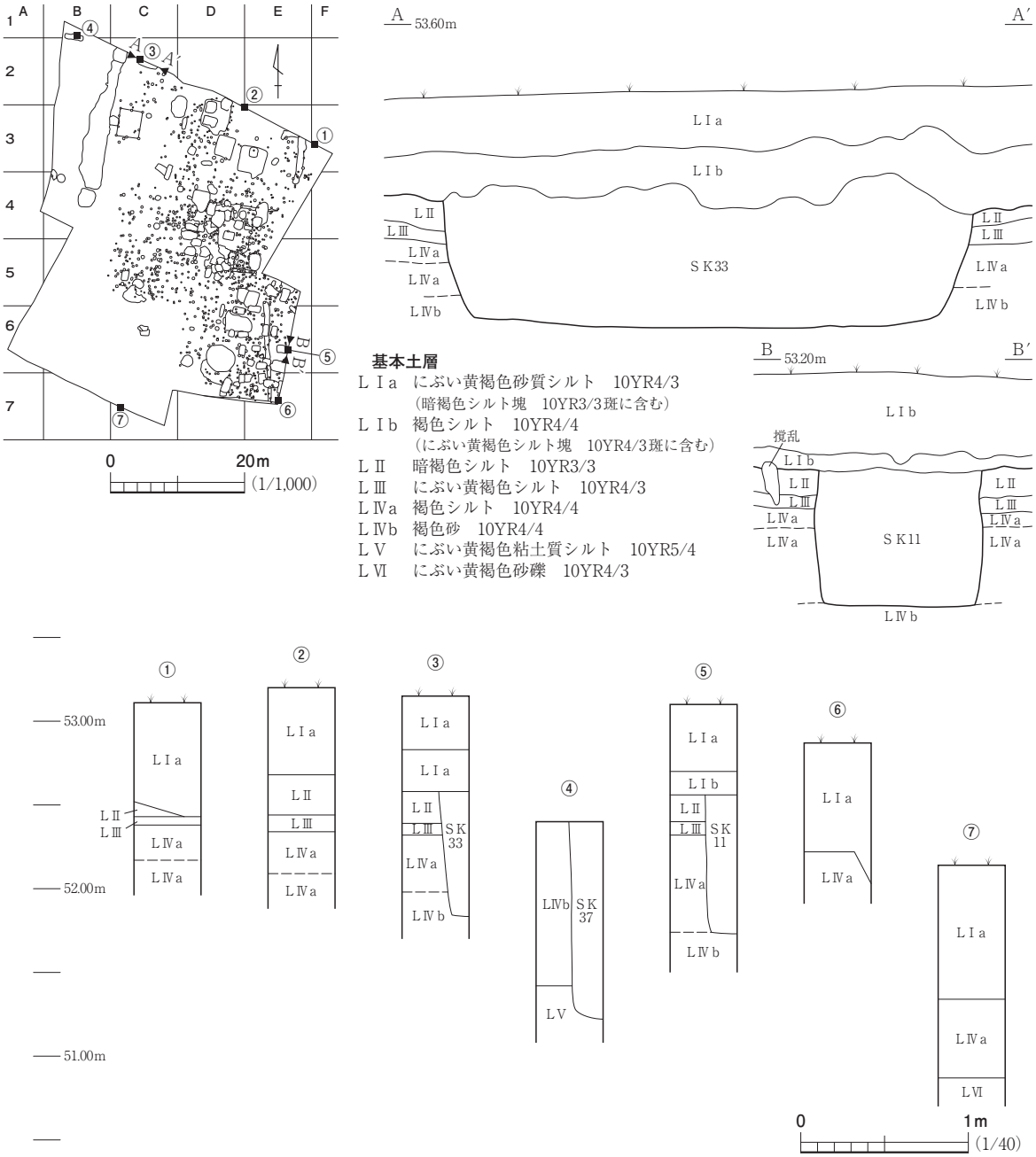


図３　基本土層

ＬⅣは、調査区全域で確認される褐色を呈する層である。上層のシルト層をＬⅣａ、下層の砂層をＬⅣｂと細分した。調査区内でも南に行くに従って砂質の度合いが多くなる。ＬⅣａは、今回の調査で確認した大半の遺構の検出面である。層厚は47～58cmである。ＬⅣｂの層厚は、調査区北西部の④地点で98cmである。

ＬⅤは、調査区北西部の④地点や25号土坑の底面等で確認したにぶい黄褐色粘土質シルト層である。

ＬⅥは、にぶい黄褐色を呈する基盤の砂礫層である。（丹　治）

第２節　出土陶器の胎土の分類

調査で出土した中世陶器のうち、在地産とみられるものについては、胎土の特徴から以下のＡ～Ｆに分類した。

Ａ類…褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。径２～３㎜の長石多量含む。黒色粒子微量含む。伊達市梁川町五十沢地区に所在する八郎窯跡群(梁川町教育委員会1987)の製品の胎土と近似した特徴を示す(写真42)。

Ｂ類…褐灰色(7.5YR6/1)を呈する。径２～３㎜の長石多量含む。

Ｃ類…褐灰色(7.5YR5/1)を呈する。長石少量含む。黒色粒子微量含む。

Ｄ類…灰褐色～にぶい赤褐色(5YR5/2～5YR5/3)を呈する。径２～３㎜の長石を多量含む(写真39)。なお、細部ではＡ類に近似した褐灰色(7.5YR4/1)を呈する箇所もある。

Ｅ類…灰褐色(7.5YR6/2)を呈する。含有物少ない(写真42)。

Ｆ類…Ａ～Ｅ類以外のその他。灰黄褐色(10YR6/2)や褐灰色(10YR5/1)を呈するもの等。

以下、報告では在地産とみられる陶器の胎土の特徴はＡ～Ｆ類で表記する。

なお、在地産以外のものは、古瀬戸と考えられる陶器は灰白色(10YR7/1)、詳細な産地は特定できないが東海系とみられる陶器は黄灰色(2.5Y6/1)を呈している。

第３節　掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は、調査区北西部の１号建物跡だけであるが、他にも柱穴とみられる小穴が多数検出されることから、同様の建物跡の他、柱列跡等も存在していたと推測される。ただ、小穴の位置・規模・堆積土の特徴等を勘案して検討したが、他に建物跡や柱列跡として認識できたものはなかった。

１号建物跡は、西側に隣接する３号溝跡と主軸方向が概ね一致することから、同溝跡との関連性がうかがえる。１号建物跡の所属時期は、小穴群や隣接する３号溝跡と同様、中世前期頃の所産と考えられる。

１号建物跡　ＳＢ１

遺　　構（図４、写真８・９）

本遺構は調査区北西部のＣ３グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴群が点在し、東に0.6ｍには38号土坑、西に1.2ｍには３号溝跡がある。

本遺構は東西２間×南北３間の南北棟の建物跡で、柱穴９基を検出した。柱穴は北西隅から時計回りにＰ１～Ｐ９と呼称した。芯々間での柱間の間隔は、梁行の北側柱列で西から1.70ｍ＋1.68ｍ、南側柱列で西から1.60ｍ＋1.74ｍと整っている。桁行の西側柱列は、北から1.14ｍ＋1.62ｍ＋1.30ｍで、中央部がやや長く、梁行きの柱間に近い。東側柱列は２間となっているが、対

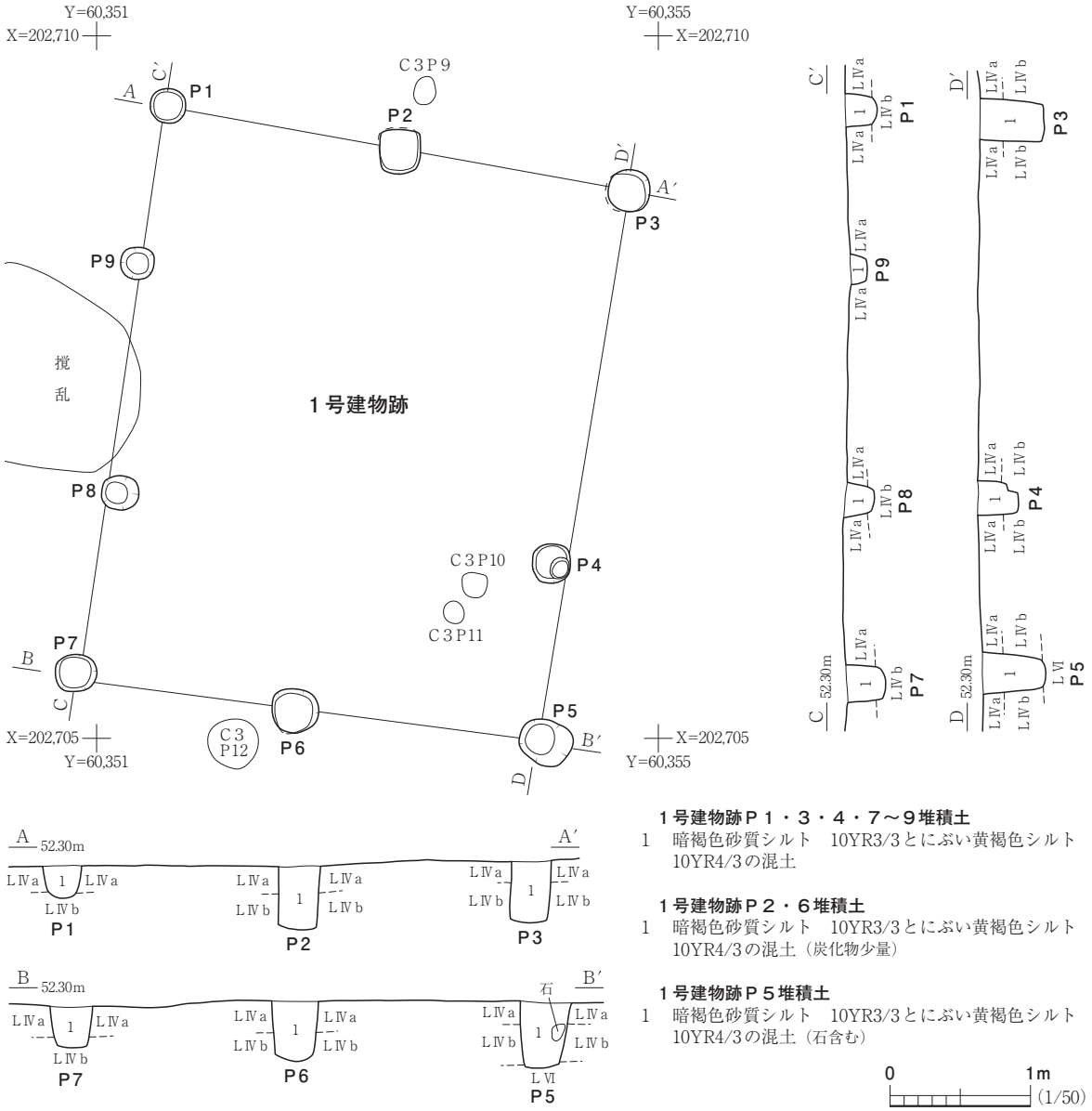


図４　１号建物跡

応する西側柱列のＰ９が浅い柱穴であることを考慮すると、削平されて確認できなかった可能性が高い。東側柱列の柱間の間隔は、北から2.70ｍ＋1.24ｍで、南側のＰ４－Ｐ５間の柱間は西側柱列のＰ７－Ｐ８間の柱間とほぼ同じである。南西隅を起点とした西側柱列でＮ８°Ｅで、３号溝跡の南北軸と概ね一致する。

各柱穴の掘形は、直径30㎝前後の円形を基調とし、最小が西側柱列のＰ９で短軸22㎝、最大が南東隅のＰ５で長軸37㎝を測る。検出面からの深さは、Ｐ２・３・５・６が45㎝前後、Ｐ４・７が28㎝、Ｐ１・８が22㎝、Ｐ９が12㎝で、西側柱列が比較的浅い。周壁はほぼ直立し、掘形の底面は、Ｐ４が二段に掘り込まれている以外は、平坦ないし皿状に窪んでいる。

柱穴の掘形内堆積土は、いずれも暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土で、柱痕を確認できたものはなかった。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西２間×南北３間の南北棟の建物跡である。本建物跡は、主軸方向が西側に隣接する３号溝跡の南北軸と概ね一致することから、同溝跡と関連して機能したと考えられる。出土遺物がなく、遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、調査区内で確認されている小穴群や３号溝跡から中世前期の遺物が出土することから、当該期の所産と考えられる。（丹　治）

第４節　土　坑

土坑は90基確認した。大半の土坑は、各遺構の廃絶の際に一度に埋め戻されているという共通した特徴が指摘できる。所属時期は、出土遺物や重複関係等から、概ね中世前期頃と考えられる。出土遺物から中世前期以外の所産と判断されるのは、底面から古墳時代終末期頃の土師器が出土した20号土坑である。

遺構の検出面は大半がＬⅣａ上面だが、11・32・35・36号土坑は、調査区際等でＬⅡ上面から掘り込まれていることが確認された。これらの土坑は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられるため、他の当該期の所産とみられる土坑についても、本来ＬⅡ上面から掘り込まれたものと推測される。

一方、調査区際でＬⅢ上面から掘り込まれていることが確認されたのは、24・49号土坑である。出土遺物がないため、詳細な時期は不明だが、検出面からすれば、中世前期より遡る時期の所産と判断される。また、他の土坑と異なり、堆積土がＬⅣａに近似している38号土坑については、古墳時代終末期以前に遡るとみられ、古墳時代前期の可能性もある。

中世前期頃とした遺構の平面形は、隅丸長方形や隅丸方形を基調としたものが多い。規模は長軸が２ｍ以内のものが多いが、調査区北東部から東部中央付近では、一辺が３～５ｍの大型の土坑である60・70・71・88号土坑を確認した。このうち、88号土坑では、柱間が２間×２間の等間隔に並んだ８基の柱穴が確認され、いずれも底面に根石が敷かれており、物資を収納する倉庫としての

機能が想定される。70号土坑では柱穴は確認されなかったが、60・71号土坑では88号土坑と近似した配置の８基前後の柱穴が確認された。柱穴の底面に根石は敷かれていないが、何らかの機能を有した建物跡の可能性がある。また、これらの大型の土坑は、主軸方向が１号建物跡や２～６号溝跡と概ね一致することから、これらの遺構と関連して機能したと考えられる。

この他、中世前期頃の特筆すべき土坑としては、28・47号土坑と42～44号土坑が挙げられる。前者は、底面に礫を意識的に配置したとみられ、特に28号土坑では礫の大きさと長軸方向も揃えられていた。後者は、遺構を埋めている途中で火を焚くという行為が確認された土坑である。42号土坑では埋めては火を焚くという行為が計５回も繰り返されていた。具体的な性格は不明だが、42～44号土坑は互いに近接しており、関連性が伺われる。

特筆すべき出土遺物としては、白磁碗(33号土坑)、青磁碗(86号土坑)、鉄製香炉(76号土坑)、鉄製磬(80号土坑)等が挙げられる。

各土坑の位置・平面形・規模等について表１にまとめた。平面形は、円形を「円」、楕円形を「楕円」、方形を「方」、隅丸方形を「隅方」、長方形を「長」、隅丸長方形を「隅長」とし、やや不整形なものは、それぞれ最初に「不」と付けて示した。他の遺構と重複するものは、「古い遺構→新しい遺構」の順で示した。堆積状況は、自然堆積を「自」、人為堆積を「人」とし、堆積順序は「古い層→新しい層」の順で示した。出土遺物は、陶磁器とそれ以外の遺物とで分けて表記した。陶磁器については、在地産陶器は本章第２節の分類に従い、「Ａ」～「Ｆ」、東海系は「東」、古瀬戸は「瀬」、白磁は「白」、青磁は「青」、それ以外の遺物については、土師器は「土」、須恵器は「須」、石器は「石」、鉄製品は「鉄」、古銭は「古」とし、数字は破片点数を示している。

基本的な遺構の内容については、表１を参照していただきたいが、以下、遺構の内容が特徴的な土坑や、掲載遺物がある土坑について言及することとする。

７号土坑　ＳＫ７（図６、写真11）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。平面形は隅丸長方形を呈するが、東端部が調査区外に延びるため、長軸方向の規模は不明である。西端部の中央部分が西にやや張り出し、当該箇所で１号溝跡と重複している。同溝跡の壁面を掘り込んでいることから、本遺構の方が新しいと判断される。底面は概ね平坦だが、西部中央と北東部で緩やかに窪んでいる。周壁は急角度で立ち上がる。

堆積土は４層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１・２は暗褐色シルト、ℓ３・４はにぶい黄褐色シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色シルト塊、後者は暗褐色シルト塊を斑に含んでいる。なお、ℓ４は底面が緩やかに窪む箇所に堆積するため、遺構廃絶時ではなく、構築段階に埋めた可能性もある。

遺物は、ℓ１から土師器13点、陶器１点、鉄製品１点の計15点が出土した。このうち鉄製品１点を図示した。細片のため割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられる。陶器は甕

表１－１　土坑一覧表

＊：遺存値　（　）：推定値　－：調査区外のため不明

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）	平面形	長軸方向	規模(cm) 平面	規模(cm) 深さ	重複関係 古→新	堆積状況 人為・自然の別と堆積順序 古→新	出土遺物 陶磁器	出土遺物 陶磁器以外	遺物挿図番号	遺構の時期	備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物
1	5	Ｃ６	隅　長	Ｎ87°Ｗ	138×104	36	ＳＫ２→ＳＫ１	人１				中世前期			
2	5	Ｃ６	不隅長	Ｎ84°Ｗ	132×(70)	36	ＳＫ２→ＳＫ１	人？１		土２		中世前期			
3	5	Ｅ７	長楕円	Ｎ79°Ｗ	228×114	20	ＳＫ４・19、ＳＤ１→ＳＫ３→Ｐ群	人１		土８		中世前期			
4	5	Ｅ７	不隅長	Ｎ４°Ｗ	148×102	21	ＳＫ４→ＳＫ３	人１		土１・須１		中世前期		11	
5	6	Ｅ７	不隅方	Ｎ１°Ｅ	113×92	60	ＳＫ15→ＳＫ５	人２・１		土５		中世前期		11	
6	6	Ｄ７	不隅長	Ｎ89°Ｗ	93×68	53	ＳＫ15、Ｄ７Ｐ３→ＳＫ６	人１		土５		中世前期		11	
7	6	Ｅ６	隅　長	Ｎ81°Ｗ	－×165	65	ＳＤ１→ＳＫ７	人４～１	Ｃ１	土13・鉄１	6	中世前期	西部が張り出す。	11	
8	6	Ｅ６	隅　長	Ｎ90°Ｗ	154×100	52	ＳＫ９、Ｅ６Ｐ14→ＳＫ８	人１		土20・須２		中世前期			
9	6	Ｅ６	隅　方	Ｎ80°Ｗ	122×(108)	64	ＳＤ１→ＳＫ９→ＳＫ８	人１		土14・須２		中世前期		11	
10	7	Ｅ６	隅　方	Ｎ67°Ｗ	100×94	12		人１		土15		中世前期			
11	7	Ｅ６	隅　長	Ｎ82°Ｗ	－×108	82		人１	瀬１	土16・鉄１	7	中世前期	検出面がＬⅡ上面。	11	
12	7	Ｅ６	不楕円	Ｎ66°Ｅ	66×52	31	Ｅ６Ｐ29・30→ＳＫ12	人２・１				中世前期			
13	7	Ｅ６	隅　長	Ｎ85°Ｗ	127×86	37	Ｅ６Ｐ12→ＳＫ13	人２・１	Ａ１	土13・須１		中世前期		12	
14	7	Ｄ６、Ｅ６	隅　長	Ｎ７°Ｅ	150×94	44	Ｅ６Ｐ36、Ｄ６Ｐ７・８・10→ＳＫ14	人２・１		土110・鉄３	7	中世前期		12	
15	6	Ｄ７	不隅長	Ｎ１°Ｅ	120×(98)	110	ＳＫ15→ＳＫ５・６	人２・１		土10		中世前期	底面北部が円形に窪む。	11	
16	7	Ｅ７	不　円	－	70×68	22		人１				中世前期			
17	8	Ｅ６	隅　長	Ｎ７°Ｅ	158×86	44	Ｅ６Ｐ21・24→ＳＫ17	人１		土８・須１		中世前期		12	
18	8	Ｄ６、Ｅ６	隅　長	Ｎ89°Ｗ	158×86	40	ＳＫ18→Ｅ６Ｐ40	人１	Ｂ２・Ｄ２	土18・須１・鉄１		中世前期		12	
19	5	Ｅ７	長	Ｎ13°Ｅ	182×－	54	ＳＫ19→ＳＫ3	人１				中世前期		12	
20	9	Ｄ６	不　円	Ｎ90°Ｗ	180×172	22		自２・１		土54・須４	9	古墳終末期		13	39
21	8	Ｅ６	不隅長	Ｎ４°Ｅ	170×82	72	ＳＤ１、Ｅ６Ｐ62→ＳＫ21	人４～１		土31・須１	8	中世前期		13	39
22	8	Ｄ６	不楕円	Ｎ12°Ｅ	106×88	82		人３～１	Ｄ１	土３・鉄１	8	中世前期	断面フラスコ状。	13	
23	8	Ｄ６	円	－	56×56	16		人１				中世前期			
24	9	Ｅ６	楕　円	Ｎ51°Ｗ	－×64	53		自２？・自１				不　明	検出面がＬⅢ上面。	13	
25	8	Ｄ６	不　円	－	＊123×35	80		人１				中世前期			
26	9	Ｄ７	不　長	Ｎ13°Ｅ	222×102	102	ＳＫ27→ＳＫ26→ＳＸ１→Ｄ７Ｐ18	人２・１	東１・Ｃ１	土17・鉄５	9	中世前期	南東部が抉れる。	13	39
27	9	Ｄ７	方	Ｎ85°Ｗ	＊98×78	23	ＳＫ27→ＳＫ26	人１				中世前期		13	
28	10	Ｃ５	不隅長	Ｎ69°Ｗ	165×122	50		人１	Ｄ４	土15・須１	10	中世前期	底面に礫が配置。	14	
29	10	Ｃ５	隅　長	Ｎ12°Ｅ	154×104	66	ＳＫ29→Ｃ５Ｐ44・45	人２・１	Ｄ４	土15	10	中世前期		14	
30	10	Ｃ４	円	－	92×91	34		人１		土10		不　明	中央が擂鉢状に窪む。	14	
31	10	Ｃ４	不　円	－	89×75	51		人２・１		土９		不　明	南西部に小穴。		
32	10	Ｃ２	隅　長	Ｎ20°Ｅ	－×170	103	ＳＤ３→ＳＫ32	人３～１	Ｄ１		10	中世前期	検出面がＬⅡ上面。	14	39
33	11	Ｃ２	隅　長	Ｎ70°Ｗ	312×－	78		人４～１	白１		11	中世前期	白磁碗出土。	14	39
34	11	Ｂ４	不隅方	Ｎ18°Ｅ	261×244	105		自６～３→人２・１	Ｄ36・Ｆ１・東１	土26・石２・古８	11・12	中世前期		15	39・40
35	13	Ｃ２・３、Ｄ２・３	不隅長	Ｎ４°Ｅ	324×222	174		自５・４→人３→人？２・１	Ｂ３・Ｄ１	土13		中世前期	検出面がＬⅡ上面。	15	
36	14	Ｃ３・４	隅　長	Ｎ20°Ｅ	223×70	102		人１	瀬１		14	中世前期	検出面がＬⅡ上面。	15	

表１－２　土坑一覧表

＊：遺存値　（　）：推定値　－：調査区外のため不明

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）	平面形	長軸方向	規模(cm) 平面	規模(cm) 深さ	重複関係 古→新	堆積状況 人為・自然の別と堆積順序 古→新	出土遺物 陶磁器	出土遺物 陶磁器以外	遺物挿図番号	遺構の時期	備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物
37	14	Ｂ１・２	隅長	N79°W	275×75	118		人１	Ｄ１	土４		中世前期		16	
38	14	Ｃ３	円	－	77×70	47		自１		土９		古墳前期？	堆積土LⅣａ近似。	16	
39	14	Ｂ４	楕円	N21°W	126×115	35		人１		土３		不明		16	
40	14	Ｂ３・４	不隅長	N27°W	130×72	37		人１		土３		不明		16	
41	15	Ｄ６、Ｅ６	隅長	N77°W	180×97	27	ＳＫ47→Ｐ群	人１		土１		中世前期			
42	15	Ｄ５	不隅方	N18°E	120×100	75		人13～１	Ａ１	土20・鉄２・古２	16	中世前期	火を焚いた痕跡あり。	16	
43	15	Ｄ５	隅長	N81°W	172×(100)	120		人11～１		土26・鉄６・古１	16	中世前期	火を焚いた痕跡あり。鉄製小刀出土。	16	40
44	15	Ｄ５	隅長	N80°W	150×106	70		人９～１	Ａ１	土18・鉄１・古４	16	中世前期	火を焚いた痕跡あり。	17	40
45	17	Ｅ５	隅長	N16°E	252×178	70	ＳＫ46・47→ＳＫ45	人２・１		土33		中世前期	南西部が張り出す。	17	
46	17	Ｄ５、Ｅ５	不隅方	N９°E	212×＊162	25	ＳＫ46→ＳＫ45、Ｄ５Ｐ２	人１				中世前期		17	
47	17	Ｅ６	隅長	N79°W	185×92	55	ＳＫ47→ＳＫ45	人１	Ｄ１	土７・鉄１	17	中世前期	火を焚いた痕跡あり。	17・18	
48	18	Ｅ５	隅長	N18°E	198×110	85	ＳＫ49→ＳＫ48	人１	Ｄ３	土７		中世前期		18	
49	18	Ｅ５	不楕円	N９°E	－×208	33	ＳＫ49→ＳＫ48	人１				中世以前	検出面がＬⅢ上面。火を焚いた痕跡あり。	18	
50	18	Ｅ５	隅長	N55°W	216×112	53	ＳＫ50→Ｅ５Ｐ14～16・20・23	人１	Ｄ１	土27・鉄２		中世前期	南壁中央に段。	18	
51	18	Ｄ５	隅方	N17°E	119×98	12	ＳＫ51→Ｄ５Ｐ87～90	人１		土３		中世前期			
52	19	Ｄ５	不隅方	N27°W	111×98	34		人４～１				中世前期	火を焚いた痕跡あり。	18	
53	18	Ｅ５	不隅長	N30°E	82×46	44		人１				中世前期	ℓ２は有機質か。		
54	19	Ｄ５	不楕円	N36°W	152×122	64	ＳＫ55・61、Ｄ５Ｐ98→ＳＫ54→Ｄ５Ｐ80	人２・１	Ａ１	土19・石２	19	中世前期	底面に小穴。	18	
55	19	Ｄ５	不楕円	N16°W	113×＊104	38	ＳＫ56→ＳＫ61→ＳＫ55→ＳＫ54、Ｄ５Ｐ99	人４～１				中世前期	底面に小穴・礫。	18	
56	19	Ｄ５	不楕円	N５°W	128×＊74	11	ＳＫ57→ＳＫ56→ＳＫ55	人２・１				中世前期		18	
57	19	Ｄ５	不隅長	N13°E	151×46	40	ＳＫ57→ＳＫ56	人２・１				中世前期	底面に小穴。	18	
58	19	Ｅ４	隅長	N80°W	120×59	32	ＳＫ88→ＳＫ58→Ｅ４Ｐ61	人３～１				中世前期	西壁に段、底面に小穴。		
59	20	Ｅ５	不隅長	N６°E	258×165	137	ＳＫ59→Ｅ５Ｐ48～54	人２・１	Ａ１・Ｃ１・Ｆ１	土26・鉄６	20	中世前期	北壁が抉れる。	19	40
60	21	Ｄ３、Ｅ３・４	隅方	N11°E	396×386	48	ＳＫ60→ＳＫ62→Ｅ３Ｐ21	人４～１	Ｄ１	土47	21	中世前期	２間×２間の柱穴。南東部が張り出す。	19	40
61	19	Ｄ５	不隅方	N66°E	115×80	40	ＳＫ61→ＳＫ54・55	人１		土69		中世前期			
62	22	Ｅ３	隅方	N11°E	148×124	(76)	ＳＫ60→ＳＫ62→Ｅ３Ｐ21	人１	瀬１	土４・鉄１	22	中世前期		19	40
63	22	Ｄ４	不隅長	N19°E	214×112	66	ＳＤ６、ＳＫ86→ＳＫ63→Ｄ４Ｐ35～37	人３～１	瀬１・Ｄ１	土８・鉄３	22	中世前期	北部にステップ状の段。鉄製小刀出土。	20	40・41
64	23	Ｄ４	不楕円	N34°W	166×100	103		人２・１	青１・Ａ１	土10	23	中世前期	底面に炭化物層。青磁片出土。	20	
65	23	Ｄ４	楕円	N７°E	89×(70)	24	ＳＤ６→ＳＫ65→Ｄ４Ｐ28・31	人２・１				中世前期	底面に小穴。		
66	23	Ｄ４	隅方	N20°E	135×125	118	ＳＫ88→Ｄ４Ｐ69→ＳＫ66	人３～１		土２・鉄６	23	中世前期	南壁～西壁に段。	20	

表１－３　土坑一覧表

＊：遺存値　（　）：推定値　－：調査区外のため不明

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）	平面形	長軸方向	規模(cm) 平面	規模(cm) 深さ	重複関係 古→新	堆積状況 人為・自然の別と堆積順序 古→新	出土遺物 陶磁器	出土遺物 陶磁器以外	遺物挿図番号	遺構の時期	備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物
67	23	Ｄ４・５	長	Ｎ78°Ｗ	157×120	60	ＳＫ88→ＳＫ67→Ｄ４Ｐ80	人１	Ｄ３	土５・鉄３	23	中世前期	底面に小穴。	20	
68	24	Ｅ３	楕　円	Ｎ42°Ｅ	118×75	56		人１		土４		不　明		21	
69	24	Ｄ５	不楕円	Ｎ22°Ｅ	90×54	52		人１				中世前期	南端部が小穴状に窪む。		
70	24	Ｄ３	隅　長	Ｎ14°Ｅ	308×262	28	ＳＫ70→Ｄ３Ｐ57	人１		土18		中世前期	北西部底面に小穴。	21	
71	25・26	Ｄ２・３	隅　方	Ｎ11°Ｅ	495×406	40	ＳＫ71→ＳＫ79・81・82、Ｄ２Ｐ４	人１				中世前期	２間×２間の柱穴。南東部が張り出す。	15・22・23	
72	27	Ｄ３	長楕円	Ｎ10°Ｅ	184×66	17		人１	東１	土２		中世前期			
73	27	Ｄ３	隅　方	Ｎ27°Ｅ	125×113	32		人１	東１	土７		中世前期			
74	27	Ｄ３	長楕円	Ｎ87°Ｗ	160×65	24		人１				中世前期			
75	27	Ｄ４	円	－	86×86	36		人１		土５		中世前期		24	
76	28	Ｄ４	不隅長	Ｎ10°Ｅ	318×254	118	ＳＤ６→ＳＫ76→ＳＫ77	人１	Ａ１・Ｂ２・Ｄ１	土35・鉄７・古４	28	中世前期	鉄製香炉を含め鉄製品多数出土。	24	40・41
77	28	Ｄ４	隅　長	Ｎ18°Ｅ	125×113	12	ＳＫ76→ＳＫ77、Ｄ４Ｐ38・39・42・47～50	人１				中世前期		24	
78	29	Ｄ４	隅　長	Ｎ82°Ｗ	252×135	121		人４～１	瀬１・Ｃ１・Ｄ１	土87・鉄８・古４	30	中世前期	東部にステップ状の段。鉄製品多数出土。	24	40・42
79	31	Ｄ２・３	隅　方	Ｎ26°Ｅ	164×148	90	ＳＫ71→ＳＫ79	人２・１		土36		中世前期		23	
80	29	Ｄ４	隅　長	Ｎ76°Ｗ	190×92	(60)	ＳＫ80→ＳＸ６	人３～１		土７・鉄２	30	中世前期	鉄製磬出土。	24	41
81	31	Ｄ３	隅　長	Ｎ75°Ｗ	208×130	(96)	ＳＫ71→ＳＫ81	人１				中世前期		23	
82	31	Ｄ２・３	不隅方	Ｎ０°Ｅ	174×152	(84)	ＳＫ71→ＳＫ82	人１				中世前期		23	
83	32	Ｅ４	不隅長	Ｎ５°Ｅ	364×190	135	ＳＫ90、ＳＤ６→ＳＫ83→ＳＫ89、Ｅ４Ｐ52	人１	白１	土41・須１・鉄６・古１	32	中世前期	白磁片出土。	24	41
84	33	Ｄ４、Ｅ４	不隅長	Ｎ13°Ｅ	122×98	31		人２・１				中世前期			
85	33	Ｄ５	長	Ｎ11°Ｅ	192×94	36	ＳＫ85→Ｄ５Ｐ76～81	人１				中世前期		25	
86	33	Ｄ４	不隅方	Ｎ18°Ｅ	232×196	113	ＳＫ88→ＳＫ87→ＳＫ86→ＳＫ63→Ｄ４Ｐ64	人３～１	青１、Ａ２・Ｅ２	土22・石２・鉄７	33・34	中世前期	青磁碗出土。	25	41・42
87	33	Ｄ４	隅　長	Ｎ４°Ｅ	164×104	94	ＳＫ88→ＳＫ87→ＳＫ86、Ｄ４Ｐ66	人１				中世前期		25	
88	35・36	Ｄ４・５、Ｅ４・５	隅　方	Ｎ８°Ｅ	472×494	38	ＳＫ88→ＳＫ58→Ｅ４Ｐ61 ＳＫ88→Ｄ４Ｐ69→ＳＫ66 ＳＫ88→ＳＫ67→Ｄ４Ｐ80 ＳＫ88→ＳＫ87→ＳＫ86、Ｄ４Ｐ66→Ｄ４Ｐ64 ＳＫ88→ＳＸ５ ＳＫ88→Ｐ群	人３～１		土41・鉄１		中世前期	２間×２間の柱穴。柱穴は全て根石あり。底面中央に炭化物散布。貼床土あり。	26～29	
89	32	Ｅ４	隅　長	Ｎ27°Ｅ	158×128	122	ＳＫ90→ＳＫ83→ＳＫ89	人１				中世前期		24	
90	32	Ｅ４	隅　長	Ｎ０°Ｅ	＊70×60	40	ＳＫ90→ＳＫ83→ＳＫ89	人１				中世前期		24	

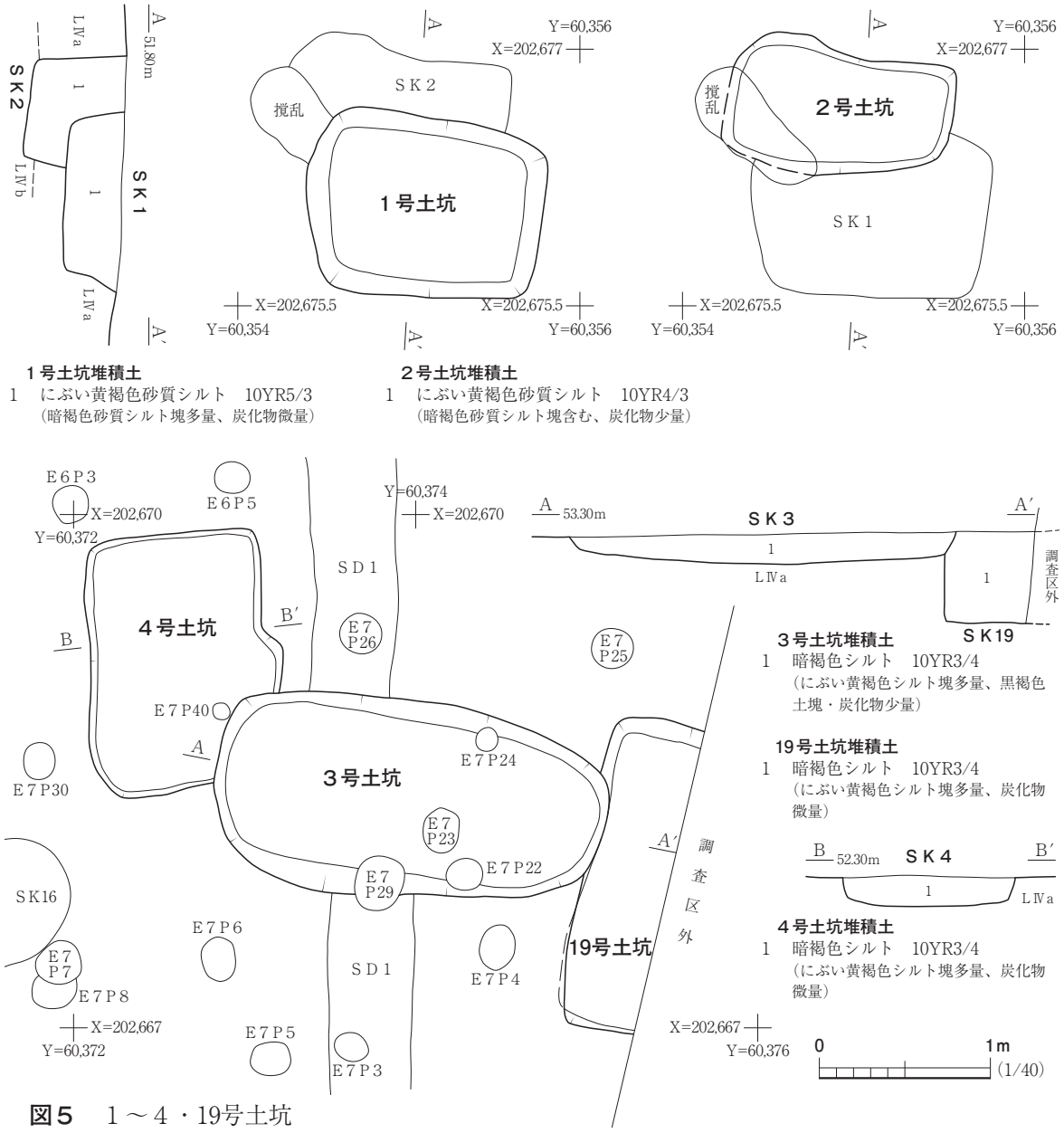


図５　１～４・19号土坑

の胴部片で、胎土はＣ類である。

図６－１は断面形が正方形をした鉄製の角釘である。釘頭から先端部まで遺存している。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

11号土坑　ＳＫ11（図７、写真11）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面だが、調査区東壁でＬⅡ上面から掘り込まれていることを確認した。重複する遺構はない。

平面形は隅丸長方形を呈するが、東端部が調査区外に延びるため、長軸方向の規模は不明である。底面は平坦で、周壁は垂直気味に立ち上がる。

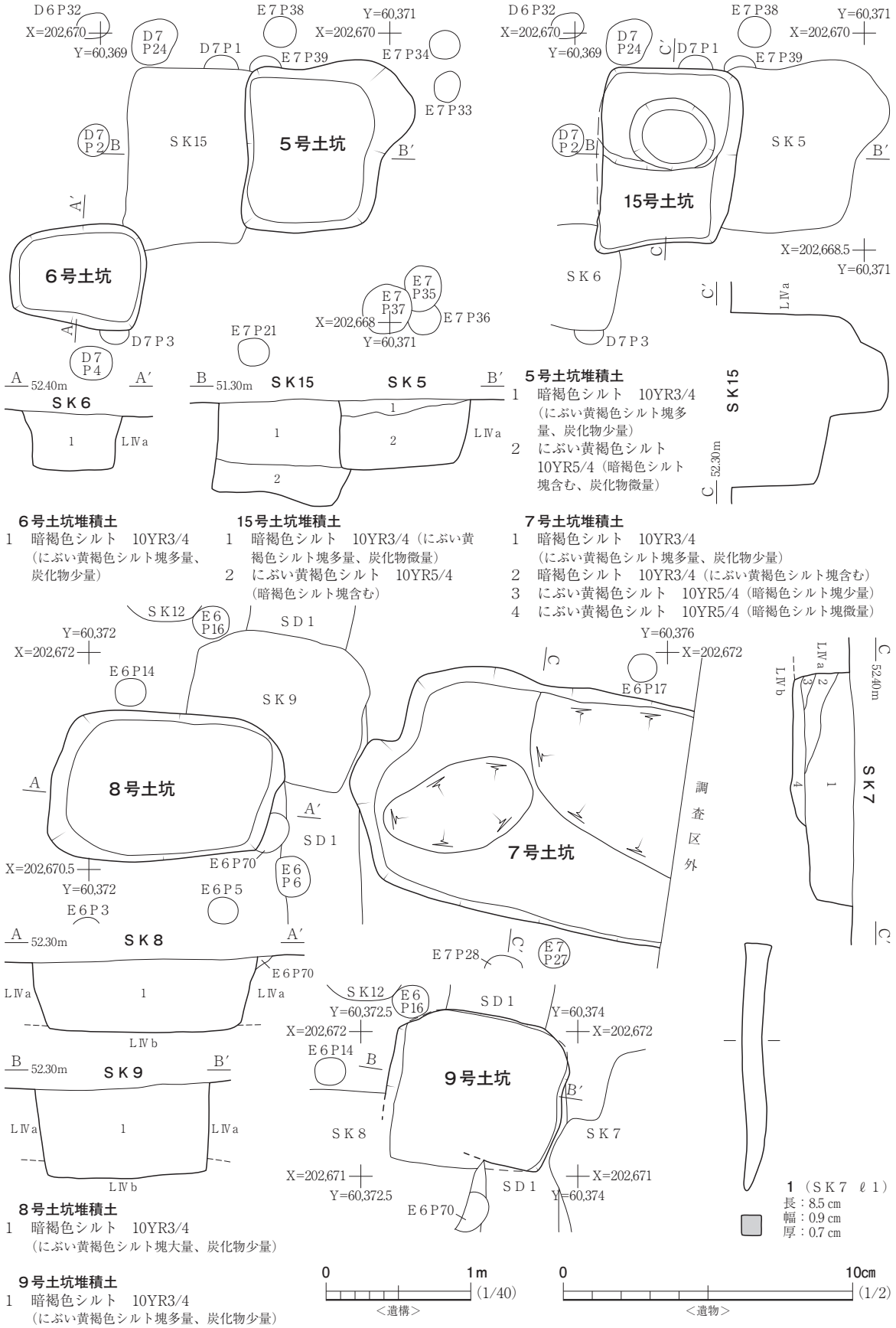


図６　５～９・15号土坑、７号土坑出土遺物

堆積土はにぶい黄褐色シルトの単層で、暗褐色シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

遺物は、土師器16点、陶器１点、鉄製品１点の計18点が出土した。このうち陶器１点を図示した。細片のため割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、外面にハケメを施す甕の頸部片等が認められた。鉄製品は用途不明の板状を呈する小片である。

図７－１は古瀬戸の卸皿とみられる口縁部片である。口縁端部は角型を呈するが、中央部がやや窪んでいる。灰白色（10YR7/1）の緻密な胎土で、内外面に薄い灰釉が付着している。

本遺構の性格については不明だが、廃絶の際に一度に埋められているという特徴がある。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

14号土坑　ＳＫ14（図７、写真12）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。小穴４基と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が新しい。

平面形は隅丸長方形を呈する。底面は概ね平坦だが、若干中央部に向って傾斜する。北壁を除く周壁は垂直気味だが、それに比して北壁はやや緩やかに立ち上がる。

堆積土は暗褐色シルトを基調とする人為堆積土で、含有物の多寡により２層に分層した。ℓ２は、ℓ１に比して大きめのにぶい黄褐色シルト塊が含まれている。

遺物は、土師器110点、鉄製品３点の計113点が出土した。このうち２点を図示した。割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、口縁部を折り返した甕や、器台と推測される破片等があった。割愛した鉄製品は、詳細不明の小片である。

図７－２・３は用途不明の鉄製品である。板状を呈し、若干湾曲する。端部が遺存しないので判然としないが、容器等の残片の可能性もある。同様の板状を呈する鉄製品は、中世前期頃の陶器が出土した76・78号土坑等でも確認されている。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した鉄製品から中世前期頃と推測される。（丹　治）

20号土坑　ＳＫ20（図９、写真13・39）

本遺構は、調査区南部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面で、重複する遺構はない。

平面形は不整円形を呈する。断面形は浅い皿状で、中央に向って緩やかに窪んでいる。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色シルト、ℓ２は褐色シルトを基調とした周囲から自然流入土である。

遺物は、土師器54点、須恵器４点の計58点が出土した。このうち、接合して復元された土師器３点を図示した。細片のため割愛した土師器には、古墳時代前期の甕の底部片も認められた。須恵器は詳細不明の小片である。

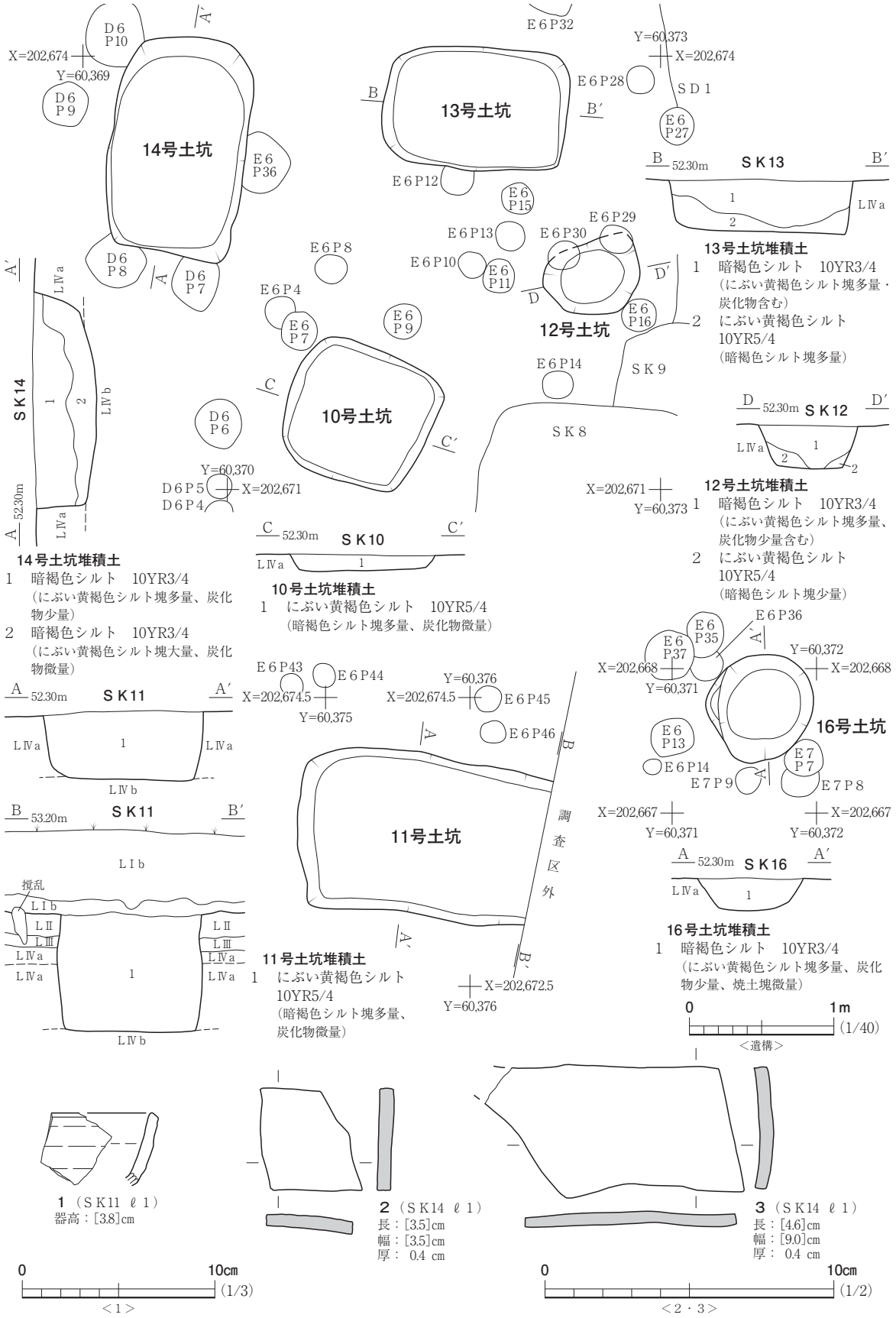


図７　10～14・16号土坑、11・14号土坑出土遺物

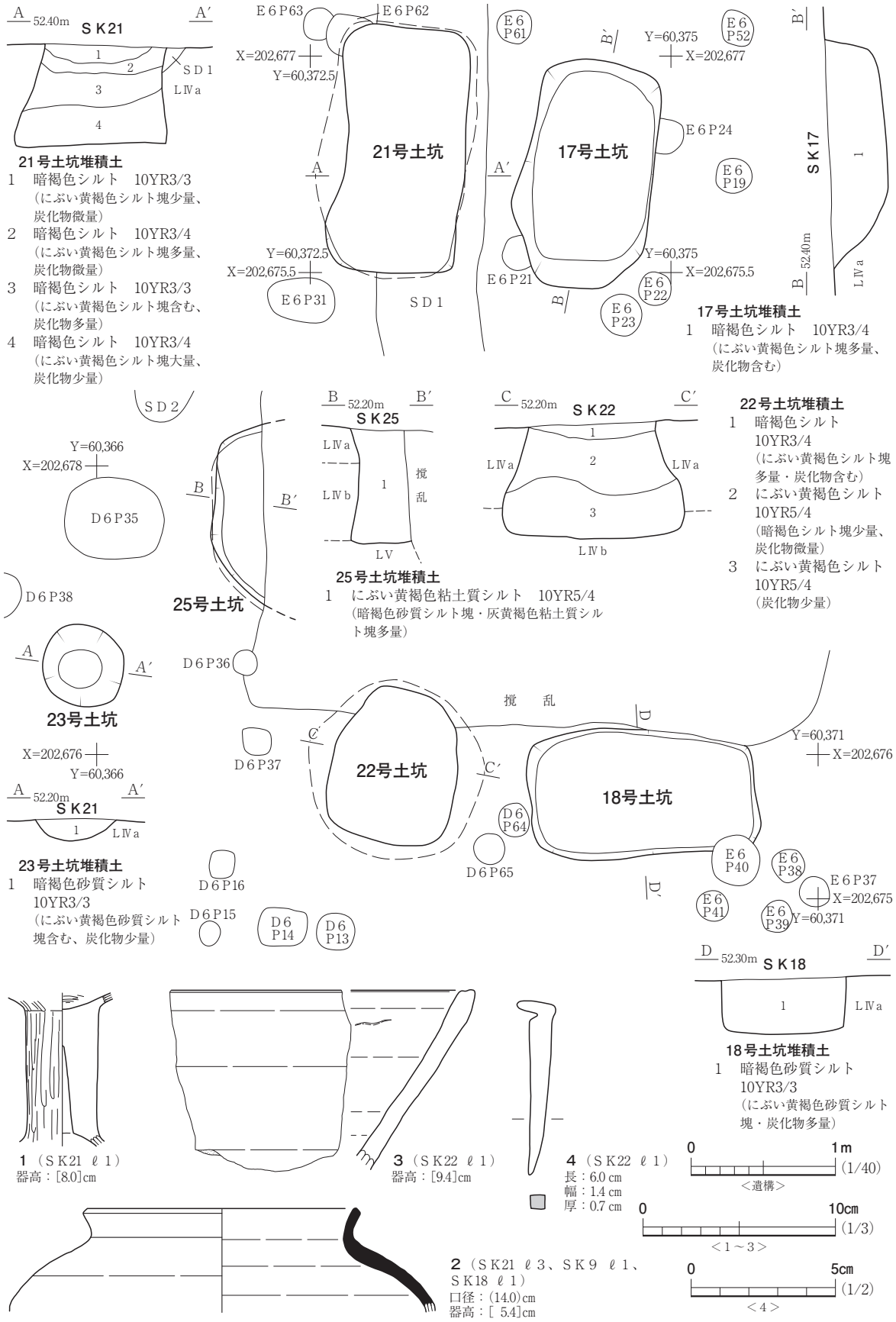


図８　17・18・21～23・25号土坑、21・22号土坑出土遺物

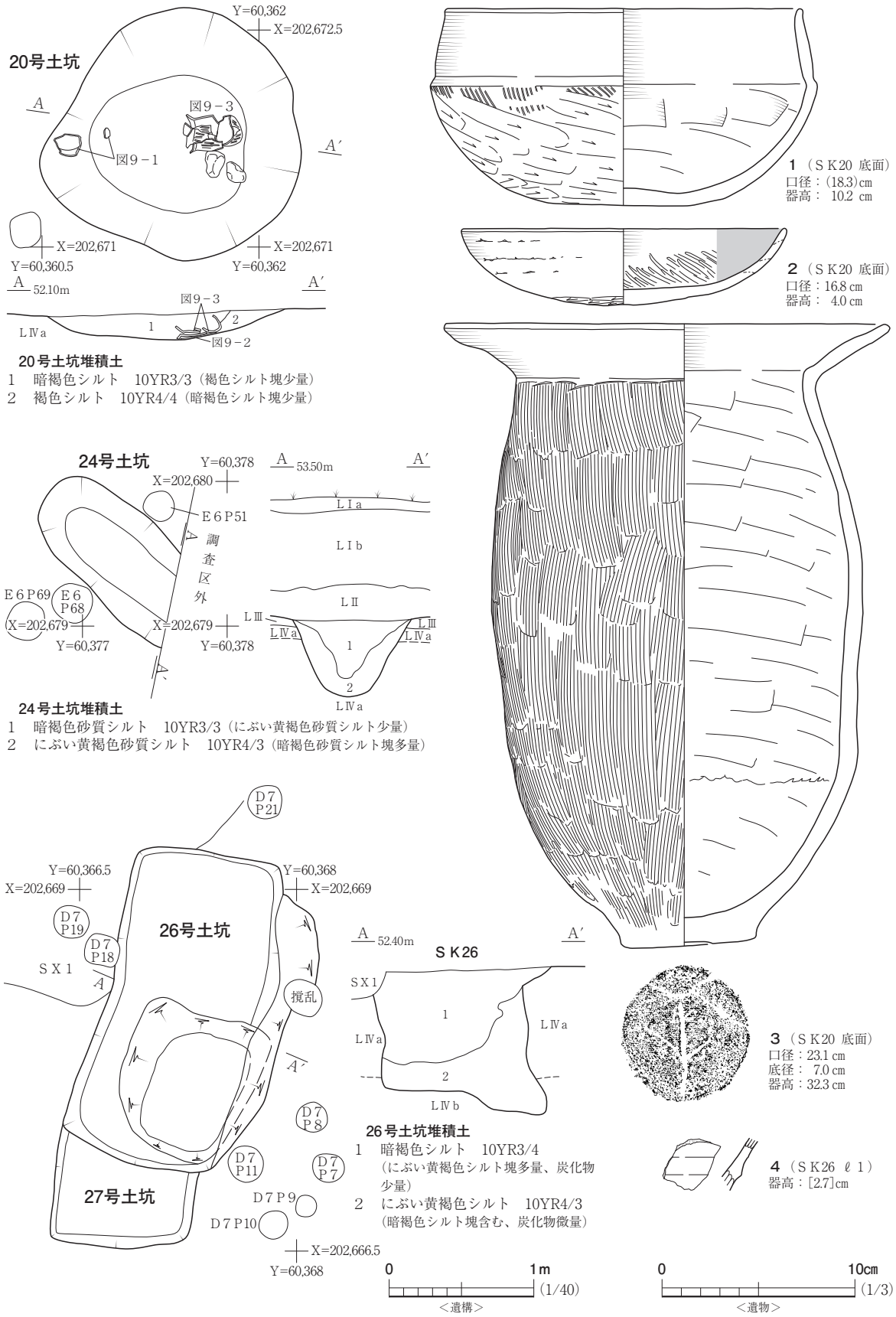


図９　20・24・26・27号土坑、20・26号土坑出土遺物

図９－１は遺構の西端近くの底面から出土した大型の杯で、口縁部と体部の境に段が形成され、口縁部は内傾した後に端部が若干外反する。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部～底部は外面が斜め方向のハケメの後に横～斜め方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデである。

図９－２は遺構の中央やや東寄りの底面から出土した杯である。後述する図９－３の口縁部片を取り上げた下から確認された。浅く緩やかに内湾する器形を呈する。口縁部は、内外面ともヨコナデが施されているが、外面には、粘土紐の積み上げ痕が残る。底部外面にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキと黒色処理が認められる。

図９－３は同図２の東側に隣接した底面から出土した長胴形を呈する甕である。胴部中央付近で割れて口縁部～胴部上半の資料が西側に倒れた状況で出土した。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメで、胴部内面が横方向のヘラナデである。また、底部外面には木葉痕が残り、内面の胴部下半には、粘土紐の積み上げ痕が観察される。

なお、図９－３の南側に隣接した箇所から、長軸20cm前後の礫が２個検出されたが、意図して置かれたものかは判然としない。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、底面から出土した土師器から古墳時代終末期頃と考えられる。（丹　治）

21号土坑　ＳＫ21（図８、写真13・39）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。１号溝跡とＥ６Ｐ62と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が新しい。

平面形はやや不整な隅丸長方形を呈している。周壁は大部分が抉れており、西壁では最大22cmを測る。底面はほぼ平坦である。

堆積土は暗褐色シルトで、含有物の多寡により４層に分層した。いずれも、にぶい黄褐色シルト塊を斑に含むことから人為堆積土と判断した。

遺物は、土師器31点、須恵器１点の計32点が出土した。このうち２点を図示した。割愛した土師器は細片のため判然としないが、胎土の特徴から古墳時代前期の資料とみられる。

図８－１は土師器高杯である。棒状を呈する脚部で、外面調整は縦方向のヘラミガキである。

図８－２は須恵器短頸壺である。９号土坑と18号土坑から出土した資料と接合した。口縁部は角型を呈し、端正なつくりである。肩部には自然釉が付着している。

本遺構の性格は不明だが、形状や堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有する。このため、遺構の所属時期は中世前期頃と考えられる。（丹　治）

22号土坑　ＳＫ22（図８、写真13）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、北部の上端が現代の撹乱により壊されている。

平面形はやや不整な楕円形を呈している。周壁は全体が抉れており、断面形はフラスコ形である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は３層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色シルト、ℓ２・３はにぶい黄褐色シルトを基調とし、ℓ１はにぶい黄褐色シルト塊、ℓ２は暗褐色シルト塊を斑に含んでいる。ℓ３は炭化物を少量含むが、ℓ１・２に比して均質な土層である。

遺物は、土師器３点、陶器１点、鉄製品１点の計５点が出土した。このうち２点を図示した。割愛した土師器は細片のため判然としないが、胎土の特徴から古墳時代前期の資料とみられる。

図８－３は陶器の捏ね鉢である。口縁端部は浅く窪み、全体的に内傾気味の器形となっている。内面の体部下半は、あまり明瞭ではないが、使用されたことにより滑らかになっているのが確認できる。胎土はＤ類である。

図８－４は鉄製の釘である。断面形が四角形を呈し、折れ曲がった釘頭が遺存する。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

26号土坑　ＳＫ26（図９、写真13・39）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。27号土坑と１号特殊遺構とＤ７Ｐ18と重複し、古い方から27号土坑→26号土坑→１号特殊遺構→Ｄ７Ｐ18の順につくられている。

なお、本遺構の南部で重複する27号土坑については、本遺構と同一の遺構として調査を進めていたが、底面まで掘り下げた段階で別遺構であると認識することができた。このため、27号土坑の土層の記録を作成できなかったが、堆積土は後述する本遺構のℓ１と近似した土色で、含有物は少なかった。

平面形はやや不整な長方形を呈している。周壁は東壁を除いた箇所では急角度で立ち上がる。東壁は南東部で抉れており、その付近の底面は一段窪んでいる。

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色シルト、ℓ２はにぶい黄褐色シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色シルト塊、後者は暗褐色シルト塊を斑に含んでいる。

遺物は、土師器17点、陶器２点、鉄製品５点の計24点が出土した。このうち陶器１点を図示した。土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられる細片である。割愛した陶器は、甕の胴部片で、胎土はＣ類である。鉄製品は用途不明の板状を呈するものが１点あったが、それ以外は詳細不明の小片である。

図９－４は東海系とみられる陶器の体部片である。小片のため断定はできないが、捏ね鉢の可能性がある。胎土は黄灰色(2.5Y6/1)を呈し、粗い粒子が認められる。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

28号土坑　ＳＫ28（図10、写真14）

本遺構は、調査区南西部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、南西部の上端が現代の撹乱により壊されている。また、西に約１ｍには29号土坑がある。

平面形はやや不整な隅丸長方形を呈している。周壁は急角度で立ち上がるが、北壁で二段となっている。底面はほぼ平坦で、長軸35㎝前後、短軸15㎝前後の似た大きさの礫が４個検出された。礫は北部に１個、南部に３個置かれており、このうち南部の西端を除いた３個は長軸方向が遺構の長軸方向と揃っている。このことから意識的に配置されたと考えられる。また、礫の上端部の比高も５㎝前後とほぼ揃っている。なお、遺構の底面や礫に被熱の痕跡はなかった。

堆積土は暗褐色シルトの単層で、にぶい黄褐色シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

遺物は、土師器15点、須恵器１点、陶器４点の計20点が出土した。このうち土師器１点を図示した。細片のため割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、外面にハケメを施す甕の胴部片や底部片が認められた。須恵器は甕で、外面に平行タタキ目が観察される。陶器は４点とも胎土がＤ類の捏ね鉢の体部片である。

図10－１は土師器台付甕である。台部のみの資料で、胴部との接合面で剝離している。調整は、外面が縦方向のハケメである。内面は不明瞭だが、箆の当たった痕跡が観察されるため、横方向のヘラナデとみられる。

本遺構は、底面から大きさや長軸方向を揃えた礫が検出された点が特筆される土坑である。これらの礫は、棺等を置くための台座としての利用も想定されるが、南部の３個の礫に対し北部の礫が１個のみで判然としないため、具体的な性格は不明である。なお、廃絶の際に一度に埋められているという特徴も指摘される。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。

（丹　治）

29号土坑　ＳＫ29（図10、写真14）

本遺構は、調査区南西部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。Ｃ５Ｐ44・45と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。また、東に約１ｍには28号土坑がある。

平面形は隅丸長方形を呈している。周壁は垂直気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色シルト、ℓ２はにぶい黄褐色シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色シルト塊、後者は暗褐色シルト塊を斑に含んでいる。

遺物は、土師器15点、陶器４点の計19点が出土した。このうち陶器１点を図示した。土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられる細片である。割愛した陶器は、甕の口縁部片１点、捏ね鉢の口縁部片１点、体部片１点で、胎土はいずれもＤ類である。

図10－２は陶器の捏ね鉢である。口縁端部は若干外側につまみ出されている。内面の体部下半

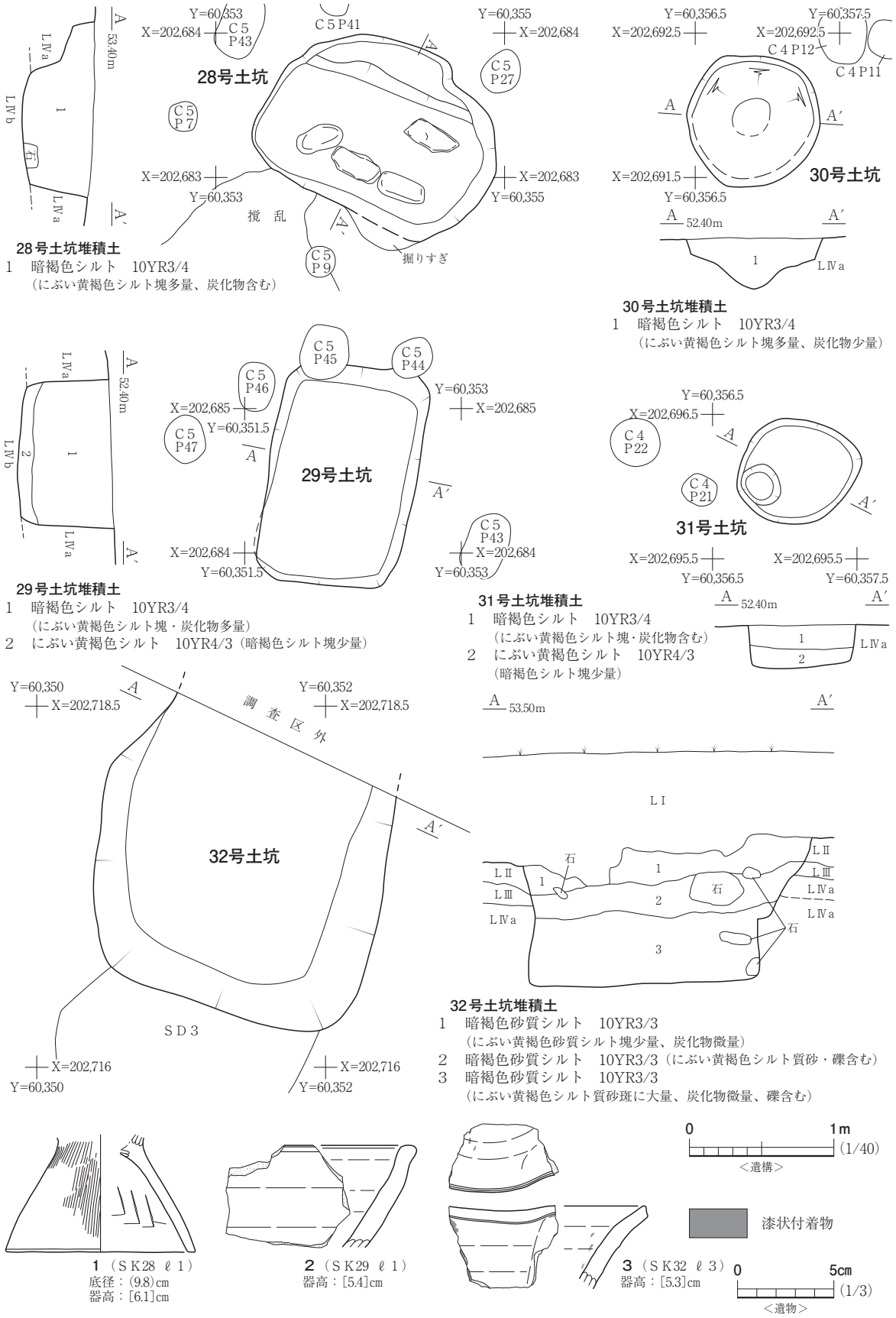


図10　28～32号土坑、28・29・32号土坑出土遺物

は、あまり明瞭ではないが滑らかになっているのが確認できる。胎土はＤ類で、長石を少量含んでいる。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

32号土坑　ＳＫ32（図10、写真14・39）

本遺構は、調査区北西部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面だが、調査区北壁でＬⅡ上面から掘り込まれていることを確認した。３号溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。また、東に約1.8ｍには33号土坑がある。

平面形は隅丸長方形を呈するが、北端部が調査区外に延びるため、長軸方向の規模は不明である。周壁は急角度で立ち上がるが、調査区北壁の断面では周壁の上部は緩やかに傾斜し、中程からやや抉れていることが観察される。底面はほぼ平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトを基調とする人為堆積土で、含有物の多寡により３層に分層した。いずれも、にぶい黄褐色を呈する砂質シルト塊やシルト質砂が斑に含まれている。なお、ℓ２では層中に長軸約40㎝の大きい礫が認められた。

遺物は、陶器１点のみ出土した。図10－３は陶器の鉢である。口縁端部は若干上方につまみ出されている。小片のため、全体の形状は不明だが、内側に曲がっているため、稜花鉢のような器形を呈する可能性がある。胎土はＤ類で、長石を少量含んでいる。また、割れ口を中心に漆のような付着物が確認できる。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

33号土坑　ＳＫ33（図11、写真14・39）

本遺構は、調査区北西部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面だが、調査区北壁でＬⅡ上面から掘り込まれていることを確認した。重複する遺構はないが、西に約1.8ｍには32号土坑がある。平面形は隅丸長方形と推測されるが、遺構の北部が調査区外に延びるため、正確な形状や規模は不明である。周壁は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土は４層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。このうち、ℓ１・２・４は暗褐色砂質シルトを基調とし、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に含んでいる。ℓ３は、東壁より西に約50㎝の箇所にのみ堆積する焼土塊を含む層である。また、炭化物を多量含むことから、他層よりも色調が暗く、黒褐色を呈する。ℓ３を取り去った底面には、不明瞭で断定できないが被熱の痕跡ともみられる範囲がぼんやりと確認できたことから、ℓ４を埋めた後に窪地となった箇所で火を焚いた可能性がある。図中にはその痕跡を点線で示した。また、ℓ２は焼土塊や炭化物を含み、ℓ３との関連が伺えるため、ℓ３とほぼ同時に埋められたと推測される。

遺物は、磁器１点のみ出土した。図11－１は白磁の碗の口縁部片である。口縁端部を外側につまみ出す器形で、内面の体部上半には一条の浅い沈線が観察される。

本遺構は、ℓ４を埋めた後の窪地となった箇所で火を焚いている可能性があるが、具体的な性格については判然としない。遺構の所属時期については、堆積土中から出土した磁器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

34号土坑　ＳＫ34（図11・12、写真15・39・40）

本遺構は、調査区西部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、北に近接して３号溝跡がある。

平面形は不整な隅丸方形である。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。また、遺構の北西部と南西部には、ステップ状の狭い平坦面がある。

堆積土は６層に分層し、ℓ１・２が人為堆積土、ℓ３～６が自然堆積土と判断した。堆積土の大半を占めるℓ１・２は暗褐色シルトを基調とし、にぶい黄褐色砂質シルトを斑に含んでいる。また、ℓ１は北部を中心に径10～20㎝の礫を多く含み、後述する陶器片や古銭を中心とした遺物も多く出土した。このため、不要となったものをまとめて埋めたと推測される。なお、礫は部分的に熱を受けたものも認められた。ℓ３・５は周囲からの自然流入土、ℓ４・６は壁の崩落土を主体とする層である。

遺物は、ℓ１から土師器26点、陶器38点、石器２点、古銭８枚の計74点が出土した。このうち８点を図示した。割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、内外面にハケメを施す甕の口縁部片等が認められた。陶器は、図化した資料と別個体とみられるものは３点で、内訳は胎土がＤ類の捏ね鉢１点、Ｆ類の甕１点、東海系の捏ね鉢１点である。

図11－２～５はℓ１から出土した古銭である。２～４は北宋銭で、２は「咸平元寶」（998年初鋳）である。３は欠損部があるが、「太平通寶」（976年初鋳）とみられる。４は「祥符元寶」（1008年初鋳）である。５は２枚の古銭が貼り付いている資料で、片方（ａ）が唐銭の「開元通寶」（621年初鋳）、もう一方（ｂ）が北宋銭の「天禧通寶」（1017年初鋳）である。なお、これ以外の出土した古銭については、小片のため詳細は不明である。

図12－１は陶器の甕である。１は口縁部が受け口状を呈し、端部は外上方につまみ上げられている。胎土はＤ類で、径２～７㎜の長石を多量含んでいる。また、内面頸部より下位には煤が付着している。

図12－２は陶器の捏ね鉢である。口縁端部はわずかに窪み、内側に向ってつまみ出され、内傾気味の器形となっている。内面の体部下半は、滑らかになっており、特に底部付近は器壁が薄くなっているため、良く使い込まれた資料と判断される。体部下半にはヘラケズリは施されていないが、切り離した際に付いたとみられる紐縄状の痕跡が確認される。胎土はＤ類で、径２～５㎜の長石を多量含んでいる。

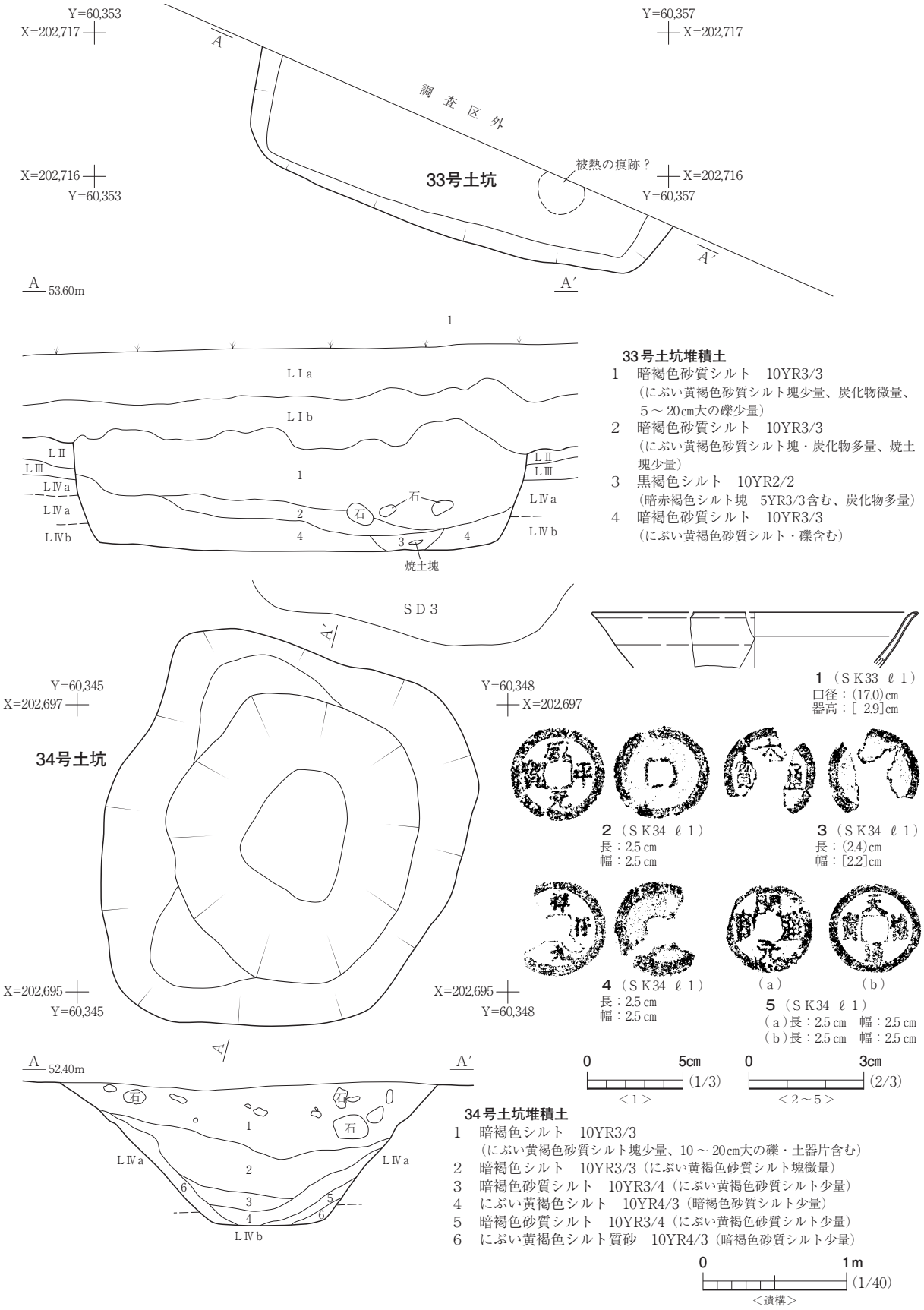


図11　33・34号土坑・出土遺物

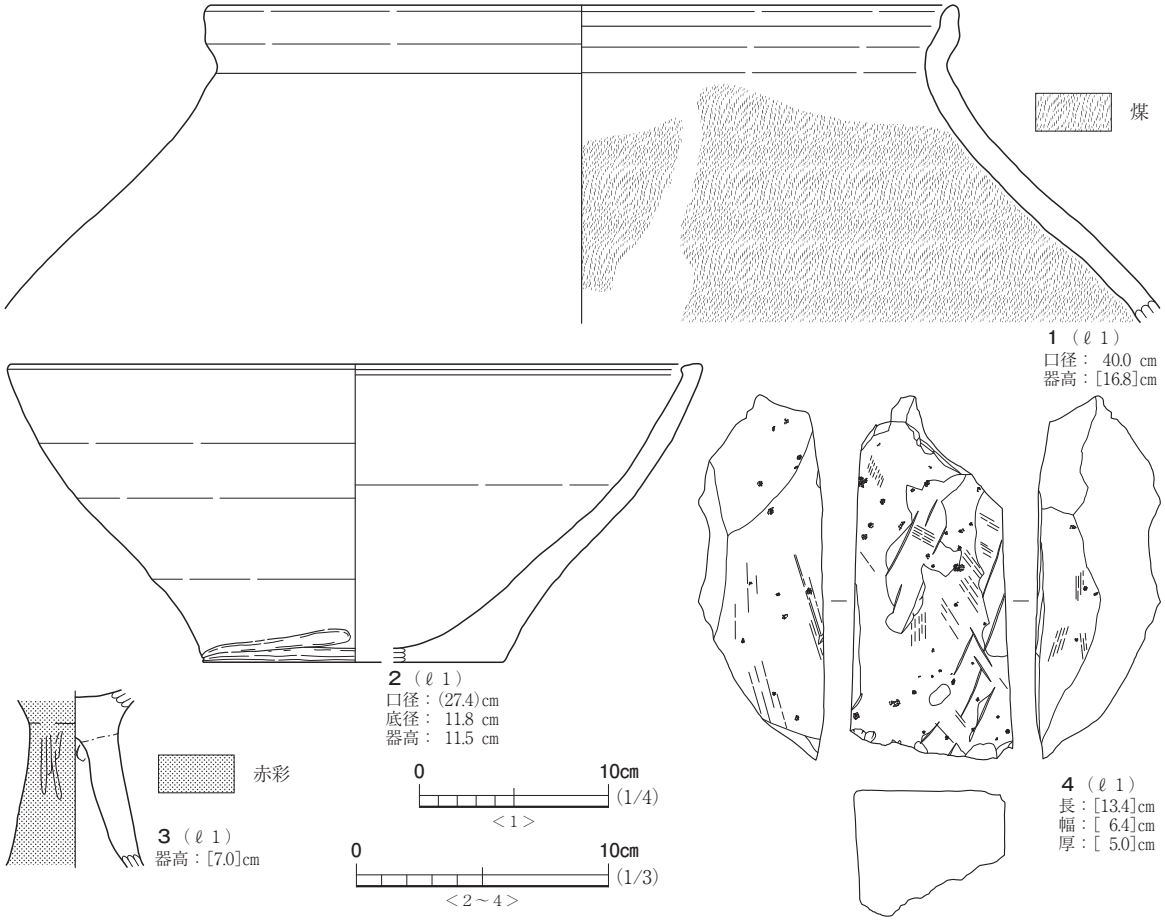


図12　34号土坑出土遺物

図12－３は外面全体に赤彩が観察される土師器高杯である。調整は、外面に縦方向のヘラミガキが施されている。

図12－４は両端部と裏面が欠損した溶結凝灰岩製の砥石である。製品として使用される前に熱を受けており、表面が煤けたように黒色を呈する。遺存する表面と両側面は、研磨されて滑らかになっている。中砥であろうか。また、表面には、斜め方向に平行する筋が数条確認される。これは、研磨したことによって不明瞭になっている箇所があることから、成形段階に付いた工具の痕跡とみられる。

本遺構の性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

35号土坑　ＳＫ35（図13、写真15）

本遺構は、調査区北部中央に位置する土坑である。検出面はＬⅡ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴が点在し、東に2.6ｍには71号土坑、南に近接して72号土坑がある。

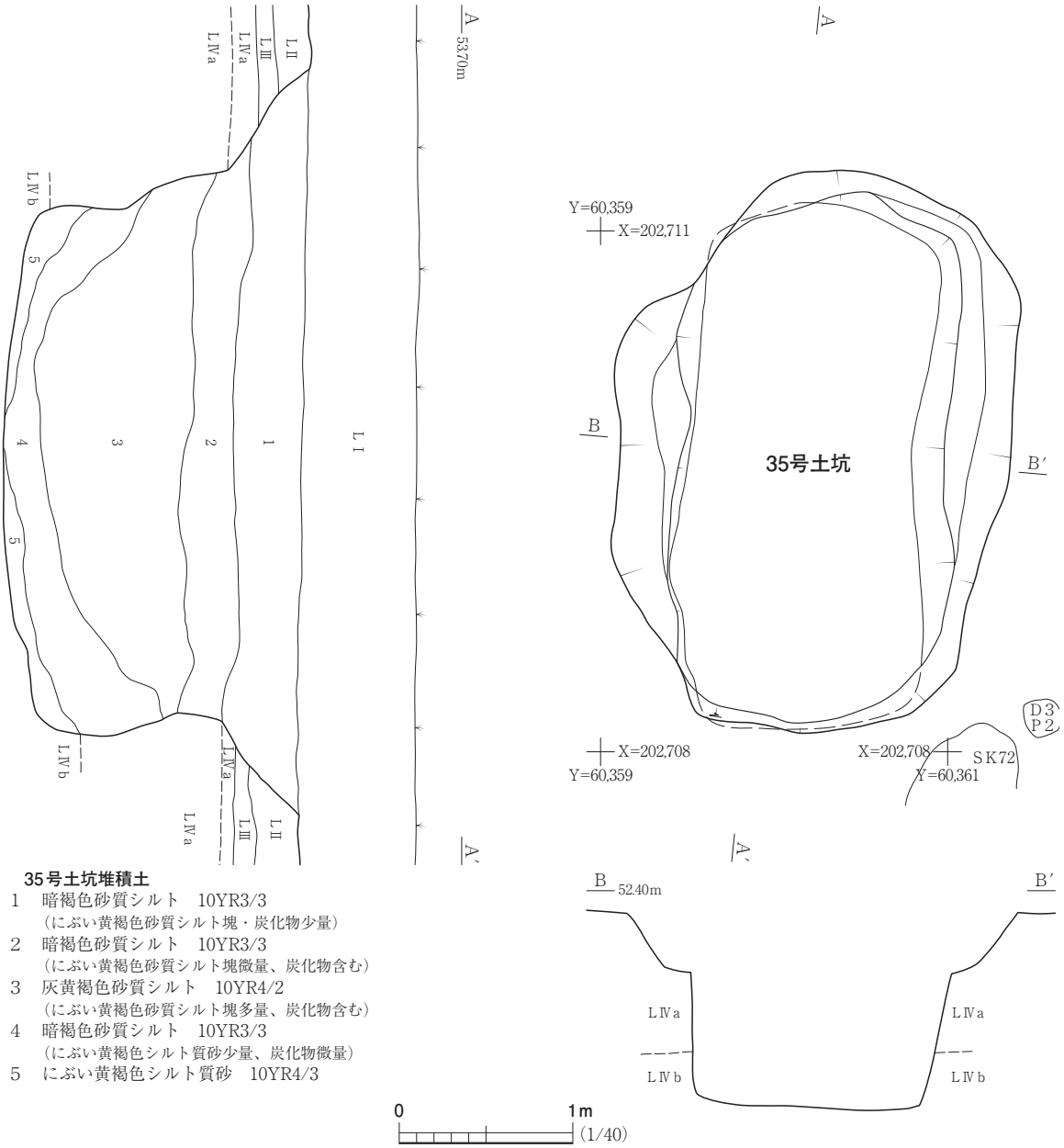
平面形は不整な隅丸長方形である。周壁は、北西部と南部で若干抉れる以外は、急角度で立ち上がるが、上部は崩落のためか緩やかになっている。底面は概ね平坦だが、中央部に向ってやや窪ん

でいる。

堆積土は５層に分層した。ℓ１・２は暗褐色砂質シルトを基調とする層で、人為堆積とみられるが、明確な混土ではないため断定はできない。ℓ３は灰黄褐色砂質シルトを基調としたにぶい黄褐色砂質シルトとの混土で、堆積土の大半を占めている層である。ℓ４は周囲からの自然流入土、ℓ５は壁の崩落土を主体とする層である。なお、天井部崩落土と判断される層は確認されなかった。

遺物は、計17点出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。内訳は、ℓ２から土師器７点、陶器２点、ℓ３から土師器６点、陶器２点である。土師器は、胎土の特徴から古墳時代前期の資料とみられる。陶器は４点とも甕の胴部片で、胎土はＢ類が３点、Ｄ類が１点である。

本遺構は平面的な規模が大きく、かつ、深いため、地下式壙の可能性も考慮した。しかし、入口



35号土坑堆積土

1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物少量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（にぶい黄褐色砂質シルト塊微量、炭化物含む）
3　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2
（にぶい黄褐色砂質シルト塊多量、炭化物含む）
4　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（にぶい黄褐色シルト質砂少量、炭化物微量）
5　にぶい黄褐色シルト質砂　10YR4/3

図13　35号土坑

部となる竪坑や天井部の崩落土も確認されず、地下式壙と判断する積極的な根拠は確認されなかった。具体的な性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

36号土坑　ＳＫ36（図14、写真15）

本遺構は、調査区中央やや北寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅡ上面である。重複する遺構はないが、西壁の上端が現代の撹乱により壊されている。また、周囲には小穴が点在する。

平面形は隅丸長方形を呈している。周壁は垂直気味に立ち上がるが、南壁では若干抉れている。底面はほぼ平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に大量含むことから人為堆積土と判断した。

遺物は、陶器１点のみ出土した。図14－１は古瀬戸の瓶子の肩部片である。灰白色（10YR7/1）の緻密な胎土で、外面に薄い灰釉が掛かっている。

本遺構の性格については不明だが、廃絶の際に一度に埋められているという特徴がある。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

42号土坑　ＳＫ42（図15・16、写真16）

本遺構は、調査区中央やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴が点在し、西には43・44号土坑、南東には３号特殊遺構が近接している。

平面形は隅丸方形を基調とするが、東壁が張り出している。周壁は、東壁以外は垂直気味に立ち上がり、東壁は中程で傾斜が緩やかになり、ステップ状になっている。底面はほぼ平坦である。

堆積土は13層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ３・４・７・10・13上面では、ほのかに被熱した痕跡が確認されたため、各層を埋めた後で火を焚いていると判断される。すなわち、埋めては火を焚くという行為が、計５回繰り返されたといえる。最初に埋めたℓ13はほぼ水平だが、これより上層は中央部が窪むような形状で埋められている。ℓ６・８・12は、火を焚いた際に堆積した土も含まれていると推測される。なお、平面図には、ℓ13上面で確認された被熱痕跡の範囲を示した。

遺物は、計25点出土した。内訳は、ℓ２から土師器２点、ℓ３から土師器１点、鉄製品２点、古銭２枚、ℓ５から土師器１点、ℓ７から土師器１点、陶器１点、ℓ９から土師器３点、ℓ10から土師器２点、ℓ12から土師器８点、ℓ13から土師器２点である。このうち古銭１枚を図示した。割愛した土師器は、細片のため詳細は不明である。陶器は胎土がＡ類の甕の胴部片である。鉄製品は用途不明の小片だが、板状を呈するものが１点見受けられた。

図16－３はℓ３から出土した古銭である。欠損部があるが、北宋銭の「元豊通寶」（1078年初

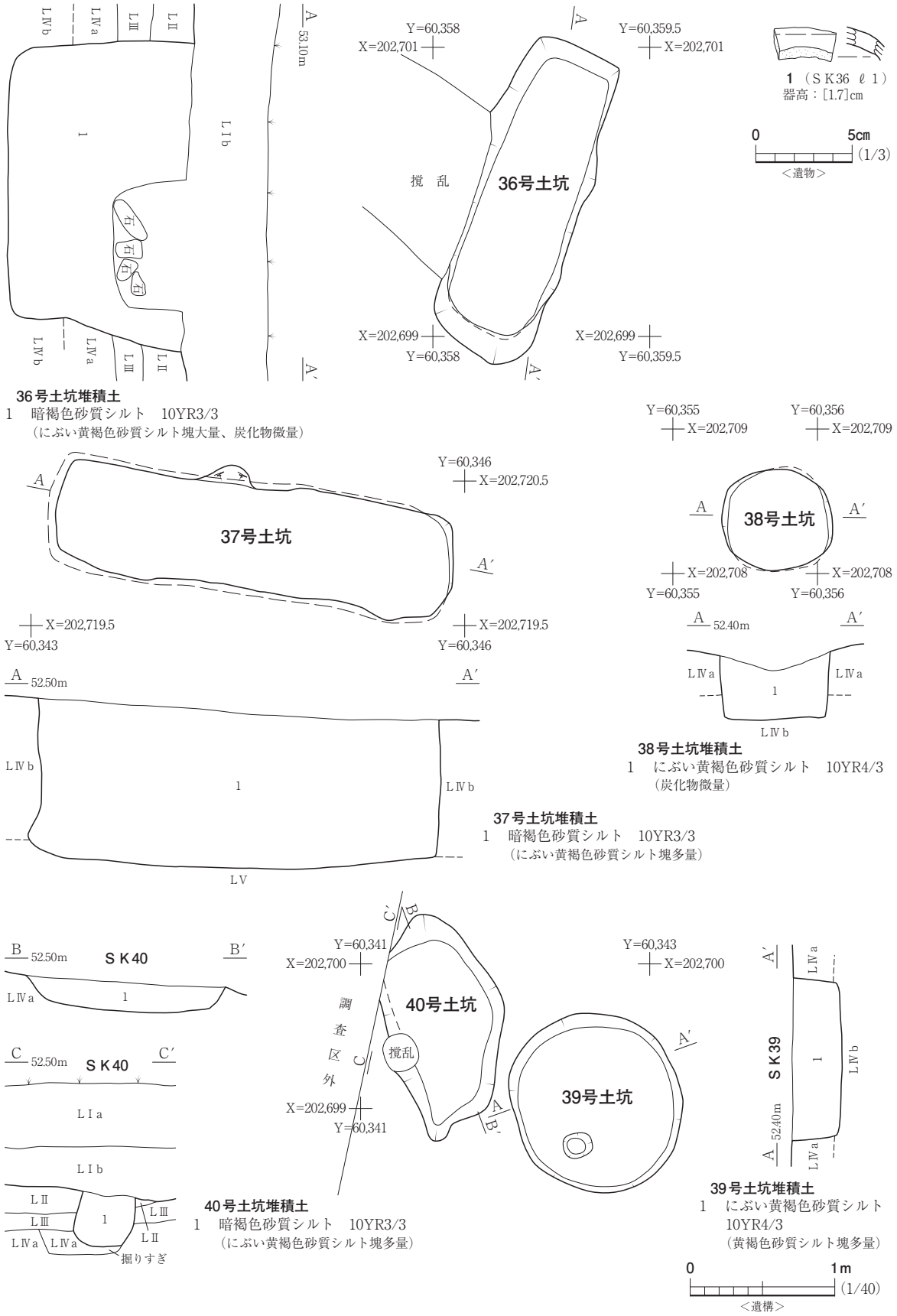


図14　36～40号土坑、36号土坑出土遺物

鋳）と推測される。この他、ℓ３からは古銭がもう一枚したが、小片のため詳細は不明である。

本遺構は埋めては火を焚くという行為が５回繰り返されて、最終的には全部埋められた土坑である。火葬土坑の可能性も考慮したが、被熱が弱く、焼成は難しいとみられる。また、遺構底面の中央部には一般的な火葬土坑に認められる火通し溝もなかった。このため、具体的な性格は不明だが、何らかの火を焚く儀礼的な行為が繰り返し行われたと推測される。同様な火を焚いた痕跡は隣接する43・44号土坑でも確認されており、関連性が伺われる。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

43号土坑　ＳＫ43（図15・16、写真16・40）

本遺構は、調査区のほぼ中央部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴が点在し、北には44号土坑、東には42号土坑が近接している。

平面形は隅丸長方形を呈している。周壁は急角度で立ち上がるが、北壁はやや傾斜が緩い。また、南東部と北西部では抉れている。底面はほぼ平坦である。

堆積土は11層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。堆積土の上半は中央部がやや窪むような形状で各層が埋められている。また、ℓ８上面では、ほのかに被熱した痕跡が確認された。ℓ１は、本遺構や隣接する44号土坑が埋められた後、これらの遺構の上部を覆うように埋められた暗褐色砂質シルト層で、炭化物に加えて灰が混じる特徴がある。このことから、本遺構と44号土坑は最終的な廃絶時期が同時である可能性がある。なお、本遺構周辺にはＬⅡが遺存しないため、遺構をつくる前にＬⅡを除去していたと判断される。

遺物は、計33点出土した。内訳は、ℓ３から古銭１枚、ℓ４から土師器８点、鉄製品１点、ℓ８から土師器５点、ℓ９から土師器13点、鉄製品５点である。このうち鉄製品２点と古銭１枚の計３点を図示した。土師器は細片で詳細が不明なものが大半だが、古墳時代前期の口縁部を折り返した甕の破片が認められた。割愛した鉄製品は、板状を呈するものが２点、棒状を呈するものが２点見受けられた。

図16－１は鉄製の小刀で、接合しないが同一個体と判断して掲載した。Ｘ線透過写真撮影の結果、刃・棟両側に関が観察された。

図16－２は用途不明の鉄製品である。両端を内側に折り曲げられ袋状を呈している。形状から推測すると、何かを装着するために用いられたか、あるいは鉄鐸の可能性も指摘されるが、上部が欠損することもあって判然としない。

図16－４はℓ３から出土した古銭である。文字がつぶれて判読し難くなっているが、北宋銭の「熙寧元寶」（1068年初鋳）とみられる。

本遺構は、隣接する42号土坑と同様、一定程度埋めた後に火を焚くという行為が確認された土坑である。具体的な性格は不明だが、何らかの儀礼の痕跡と推測される。遺構の所属時期は、隣接する44号土坑と同時期の廃絶とみられることから、中世前期頃と考えられる。（丹　治）

44号土坑　ＳＫ44（図15・16、写真17・40）

本遺構は、調査区のほぼ中央部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。78号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。この他、周囲には小穴が点在し、東には42号土坑、南には43号土坑が近接している。

平面形は隅丸長方形を呈している。周壁は、垂直気味に立ち上がるが、南西壁は傾斜が比較的緩やかとなっている。底面はほぼ平坦である。

堆積土は９層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ３・８・９上面では、被熱した痕跡が確認されたため、各層を埋めた後で火を焚いていると判断される。すなわち、埋めては火を焚くという行為が、計３回繰り返されたといえる。被熱の痕跡はℓ８・９上面は微弱だが、それに比べてℓ３上面は明瞭である。また、最初の段階で埋めたℓ８・９はほぼ水平だが、これより上層は西部中央が窪むような形状で埋められている。なお、ℓ６は上面に被熱の痕跡は確認されなかったが、他層に比べて硬くしまる層で、なんらかの使用面の可能性もある。

遺物は、計24点の遺物が出土した。内訳は、ℓ１から土師器７点、古銭１枚、ℓ４から土師器８点、古銭３枚、ℓ６から土師器３点、陶器１点、鉄製品１点である。このうち古銭４枚を図示した。土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられる細片である。陶器は、胎土がＡ類の甕の胴部片である。鉄製品は、用途不明の板状を呈する小片である。

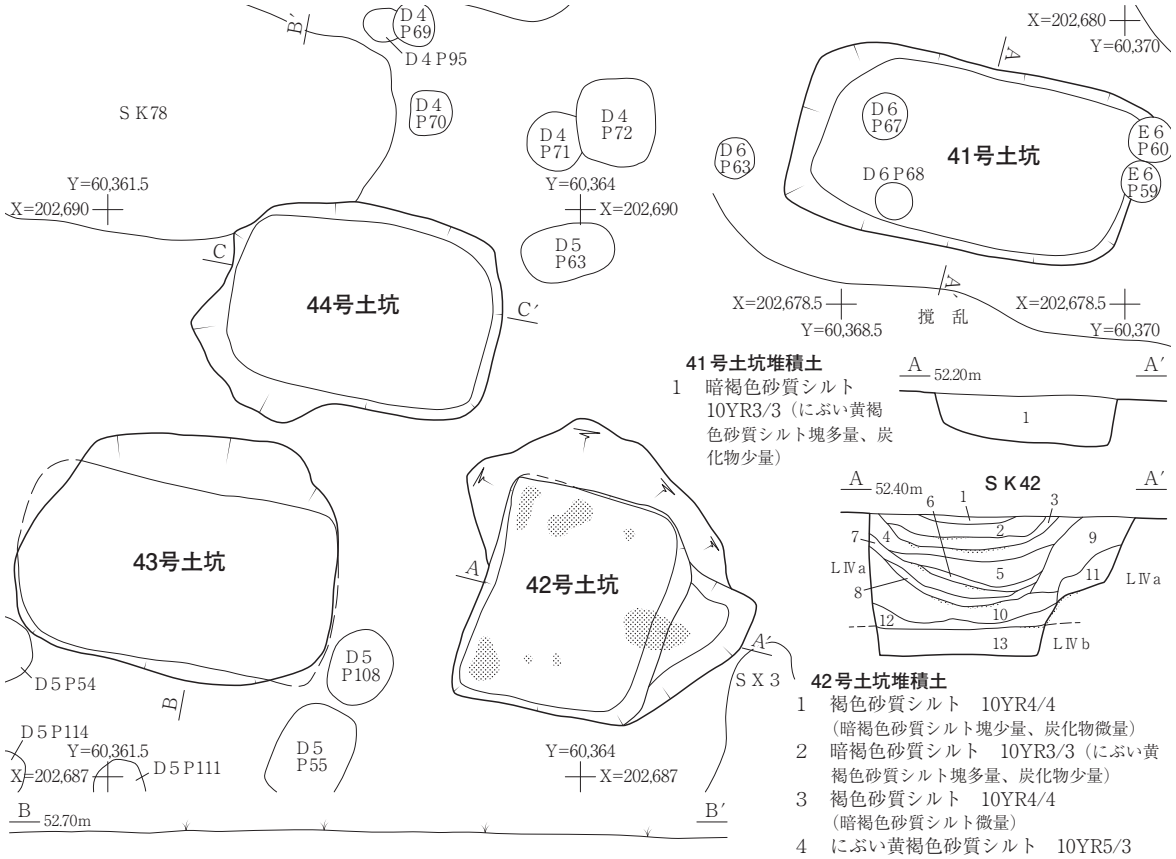
図16－５～８は北宋銭である。５はℓ１、６～８はℓ４から出土した。５は「熙寧元寶」（1068年初鋳）、６は「太平通寶」（976年初鋳）、７は「祥符元寶」（1008年初鋳）、８は「紹聖元寶」（1094年初鋳）である。

本遺構は埋めては火を焚くという行為が３回繰り返されて、最終的には全部埋められた土坑である。火葬土坑の可能性も考慮したが、全体的に被熱が弱く、焼成は難しいとみられる。また、遺構底面の中央部には一般的な火葬土坑に認められる火通し溝もなかった。このため、具体的な性格は不明だが、何らかの火を焚く儀礼的な行為が繰り返し行われたと推測される。同様な火を焚いた痕跡は隣接する42・43号土坑でも確認されており、関連性がうかがわれる。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

45号土坑　ＳＫ45（図17、写真17）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。46号土坑と47号土坑と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が新しい。この他、周囲には小穴が点在し、北東には50号土坑、南東には１号溝跡、南西には41号土坑が隣接している。

平面形は隅丸方形を基調とするが、南壁の西半部が外側に張り出している。周壁は、急角度で立ち上がるが、外側に張り出す箇所では傾斜は緩やかになっている。底面は、概ね平坦だが、南西部で二段となっている。また、北東部は緩やかに窪み、窪んだ箇所はＬⅣｂ層が露出している。

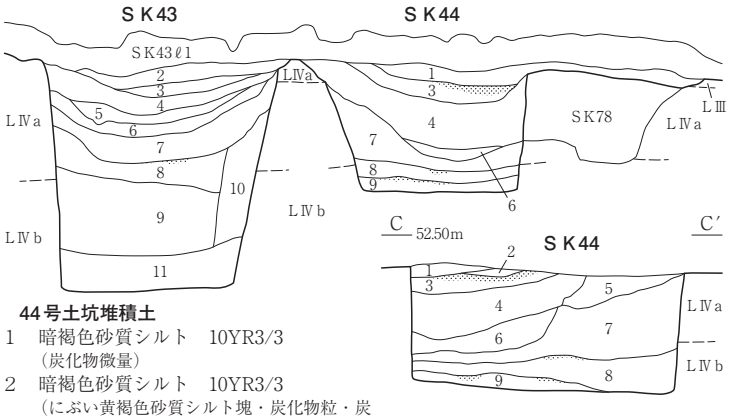


41号土坑堆積土

1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊多量、炭化物少量）

42号土坑堆積土

1　褐色砂質シルト　10YR4/4
（暗褐色砂質シルト塊少量、炭化物微量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊多量、炭化物少量）
3　褐色砂質シルト　10YR4/4
（暗褐色砂質シルト微量）
4　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/3
（灰黄褐色シルト塊　10YR5/2・暗褐色砂質シルト多量、炭化物微量）
5　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/3
（灰黄褐色シルト塊　10YR5/2多量、暗褐色砂質シルト・炭化物微量）
6　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/3
（焼土粒・炭化物含む、灰少量）
7　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/3
（暗褐色砂質シルト少量、炭化物微量）
8　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/3
（焼土粒・炭化物・灰少量）
9　灰黄褐色シルト　10YR5/2
（暗褐色砂質シルト塊・にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物少量）
10　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/3
（暗褐色砂質シルト塊・炭化物微量）
11　灰黄褐色シルト　10YR5/2
（にぶい黄褐色砂質シルト塊含む）
12　にぶい黄褐色シルト質砂　10YR5/3
（暗褐色砂質シルト塊少量、灰黄褐色粘土質シルト塊含む）
13　にぶい黄褐色シルト質砂　10YR5/3
（暗褐色砂質シルト少量）



44号土坑堆積土

1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（炭化物微量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物粒・炭化物少量）
3　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物少量）
4　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト塊含む、炭化物少量）
5　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊少量、炭化物多量）
6　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊含む、炭化物微量）
7　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト塊少量、炭化物微量）
8　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト塊多量、炭化物微量）
9　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト塊少量）

43号土坑堆積土

1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊多量、炭化物・灰含む）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊多量、炭化物微量、灰多量）
3　褐色砂質シルト　10YR4/4（暗褐色砂質シルト塊含む、炭化物・灰微量）
4　褐色砂質シルト　10YR4/4（暗褐色砂質シルト塊多量、焼土塊微量、炭化物少量、灰含む）
5　褐色砂質シルト　10YR4/4（暗褐色砂質シルト塊多量、炭化物微量、灰多量）
6　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊少量、炭化物・灰微量）
7　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊含む、炭化物微量）
8　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊少量、炭化物微量）
9　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト塊少量、炭化物微量）
10　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト塊・炭化物少量）
11　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト塊少量）

0　1m（1/40）

図15　41～44号土坑

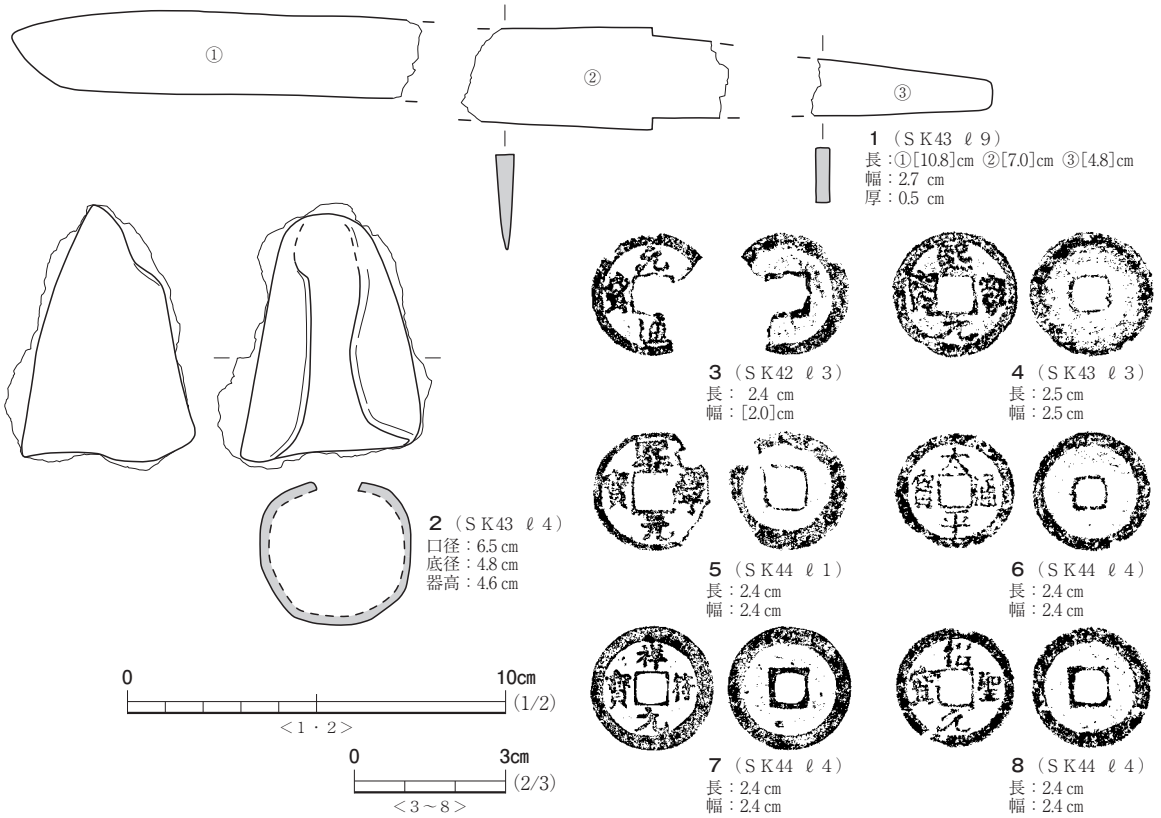


図16　42～44号土坑出土遺物

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルト、ℓ２はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルト塊を斑に含んでいる。なお、ℓ２は東半部を中心として比較的平らに堆積している。このため、砂層であるＬⅣｂが露出した箇所を埋めることを主目的とした貼床土の可能性もある。

遺物は、土師器33点が出土したが、細片のため図化できなかった。古墳時代前期の資料とみられる外面にハケメを施す甕の胴部片等が確認された。

本遺構は、南壁の西半部が外側に張り出す土坑で、中世の方形竪穴建物跡と呼称されるものに相当すると考えられる。所属時期は、重複する47号土坑より新しいと判断されるが、堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有するため、大きな時期差はないと推測される。このことから、中世前期頃の所産と考えておきたい。　（丹　治）

46号土坑　ＳＫ46（図17、写真17）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。45号土坑とＤ５Ｐ２と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。なお、本遺構については、45号土坑と同一の遺構として調査を進めていたが、底面まで掘り下げた段階で同土坑とは別遺構であると認識することができた。このため、土層の記録を作成できなかったが、堆積土は45号土坑のℓ１と近似した暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土であった。

平面形はやや不整な隅丸方形を呈している。周壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸があるが概ね平坦である。

本遺構の西壁際を中心に５基の小穴（Ｐ１～５）を確認した。本遺構周辺には小穴が多数点在しているため、Ｐ１～５の全てが本遺構に伴うとは断定できない。しかし、壁沿いに検出されたことを考慮し、本遺構に含めて報告する。小穴は直径20cm前後の円形を基調とするが、Ｐ５は長軸35cm、短軸24cmの楕円形を呈する。遺構底面からの深さは、Ｐ１が32cm、Ｐ２が48cm、Ｐ３が15cm、Ｐ４が41cm、Ｐ５が44cmとややばらつきがある。小穴の堆積土は、いずれも暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土の単層で、Ｐ３以外は炭化物を含んでいた。なお、小穴を含め、本遺構からの出土遺物はなかった。

本遺構は、東壁が重複する45号土坑により失われているが、その45号土坑と同様、中世の方形竪穴建物跡と呼称されるものに相当すると考えられる。

所属時期は、重複する45号土坑や周囲の小穴より古いと判断されるが、堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有するため、大きな時期差はないと推測される。このことから、中世前期頃の所産と考えておきたい。（丹　治）

47号土坑　ＳＫ47（図17、写真17・18）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。45号土坑と重複し、本遺構の方が古い。この他、周囲には小穴が点在し、東には１号溝跡、西には41号土坑が近接している。

平面形は隅丸長方形を呈し、周壁は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、西半部には長軸が15～25cm程度の礫が５個敷かれていた。礫の上端部の比高は５cm前後とほぼ揃っている。礫のうち、北東部のものは全体に、中央部のものは北半部が熱を受けて変色していた。また、これらの礫の内側を中心とした遺構底面には、厚さ１～２cmの被熱痕跡が確認された。中央部に敷かれた礫の下面にも被熱痕跡が及んでいるため、礫を敷く前に火を焚いたと判断される。従って、礫自体が熱を受けたのは、本遺構の底面に敷かれる以前と考えられる。

堆積土はにぶい黄褐色砂質シルトの単層で、暗褐色砂質シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

遺物は、土師器７点、陶器１点、鉄製品１点の計９点が出土した。このうち鉄製品１点を図示した。割愛した土師器は細片で、古墳時代前期の資料の可能性が高いと思われるが、詳細は不明である。陶器は、胎土がＤ類の捏ね鉢の体部片である。

図17－１は鉄製の釘である。断面形が四角形を呈し、折れ曲がった釘頭が遺存する。

本遺構は、西半部の底面に５個の礫が敷かれた土坑である。また、この礫を敷く前に火を焚いた痕跡が確認された。底面に敷かれた礫は、棺等を置くための台座かとも思われたが、西半部に偏ること、底面の被熱痕跡も礫を敷く以前のものであること等から判然としない。このため、具体的な

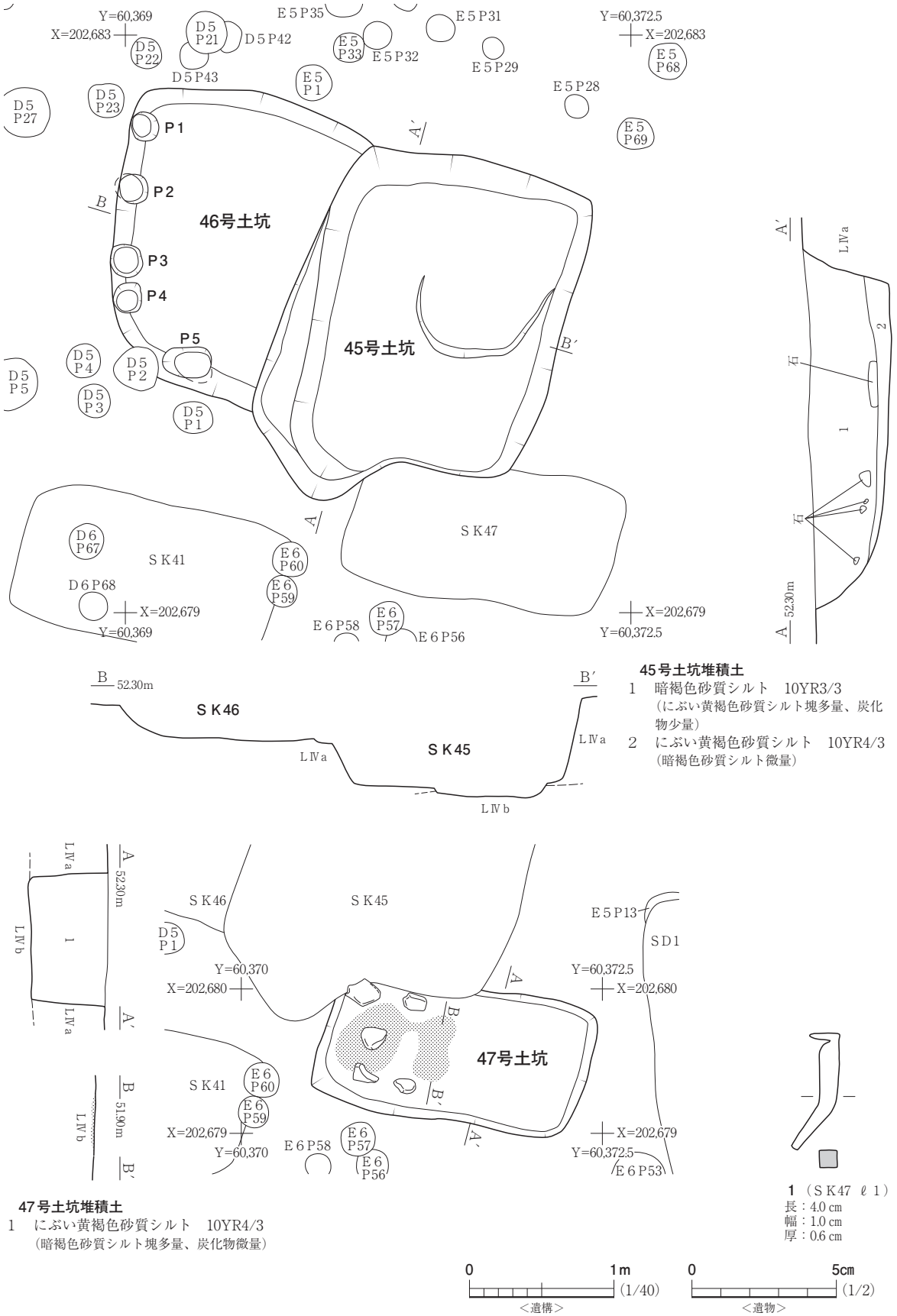


図17　45～47号土坑、47号土坑出土遺物

性格は不明と言わざるを得ない。なお、廃絶の際に一度に埋められているという特徴も指摘される。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

49号土坑　ＳＫ49（図18、写真18）

本遺構は、調査区南東部に位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。48号土坑と重複し、本遺構の方が古い。この他、周囲には小穴が点在し、西には50・53号土坑が近接している。

平面形は不整な楕円形を呈するが、北部が調査区外に延びるため、長軸方向の規模は不明である。底面は東壁付近でやや窪んで凹凸が認められる以外はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。また、南部の48号土坑と重複する箇所では厚さ１cm前後の被熱痕跡が確認され、その周囲に

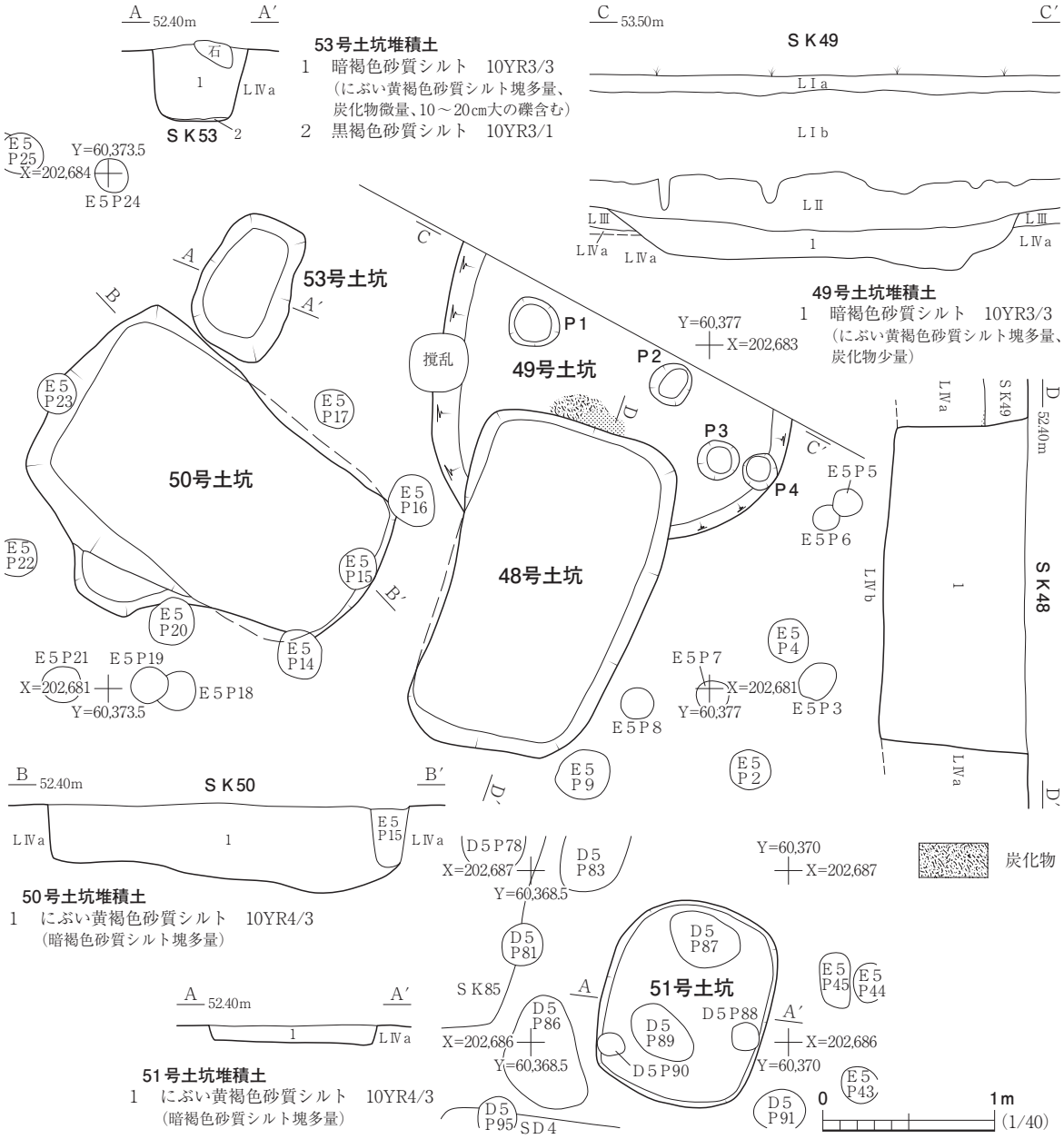


図18　48～51・53号土坑

は炭化物も散っていた。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

本遺構の底面では４基の小穴（Ｐ１～４）を検出した。これらの小穴は、検出面では確認されなかったことから、本遺構に含めて報告する。小穴は直径20～24cm前後の円形を基調とするが、Ｐ１は長軸30cm、短軸28cmとやや大きい。遺構底面からの深さは、Ｐ１が32cm、Ｐ２が48cm、Ｐ３が28cm、Ｐ４が40cmとややばらつきがある。小穴の堆積土は、Ｐ１・３が暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土で、Ｐ２・４が暗褐色砂質シルトを主体とする人為的な埋土である。なお、遺物は出土しなかった。

本遺構は、底面に火を焚いた痕跡が確認された土坑である。竪穴住居跡と考えるには規模が小さく、具体的な性格については不明だが、壁の立ち上がりが緩やかで遺構の掘り込みが浅いという特徴を有する。また、ＬⅡが遺存する箇所では、中世前期頃と判断される土坑はＬⅡ上面から検出されるのに対し、本遺構はそれよりも下層のＬⅢ上面から掘り込まれているのが確認された。出土遺物がないため、詳細な時期は不明だが、検出面からすれば、中世前期より遡る時期の所産と判断される。（丹　治）

52号土坑　ＳＫ52（図19、写真18）

本遺構は、調査区の中央部やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴が点在し、北には54～57号土坑が近接している。

平面形は不整な隅丸方形を呈している。周壁は、比較的急角度で立ち上がる。底面はやや凹凸があるが概ね平坦で、北部と東部では小穴状の窪みを確認した。

堆積土は４層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。底面とℓ２・３上面では、ほのかに被熱した痕跡が確認された。底面で火を焚いた後、ℓ２～４を埋めて再度火を焚いている。なお、ℓ４には灰も微量含まれており、使用時の堆積も含まれていると考えられる。遺物は出土しなかった。

本遺構は火を焚くという行為が２回繰り返された土坑である。具体的な性格は不明だが、何らかの儀礼的な行為と推測される。同様な火を焚いた痕跡は北西３ｍの場所に位置する42号土坑でも確認されており、関連性が伺われる。遺構の所属時期は、出土遺物はないが、42号土坑と同様、中世前期頃と推測される。（丹　治）

54号土坑　ＳＫ54（図19、写真18）

本遺構は、調査区の中央部やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。55・61・85号土坑とＤ５Ｐ80・98と重複し、本遺構は55・61号土坑及びＤ５Ｐ98より新しく、Ｄ５Ｐ80より古い。85号土坑については、重複部分がＤ５Ｐ80に壊されているため、本遺構との新旧関係は不明である。

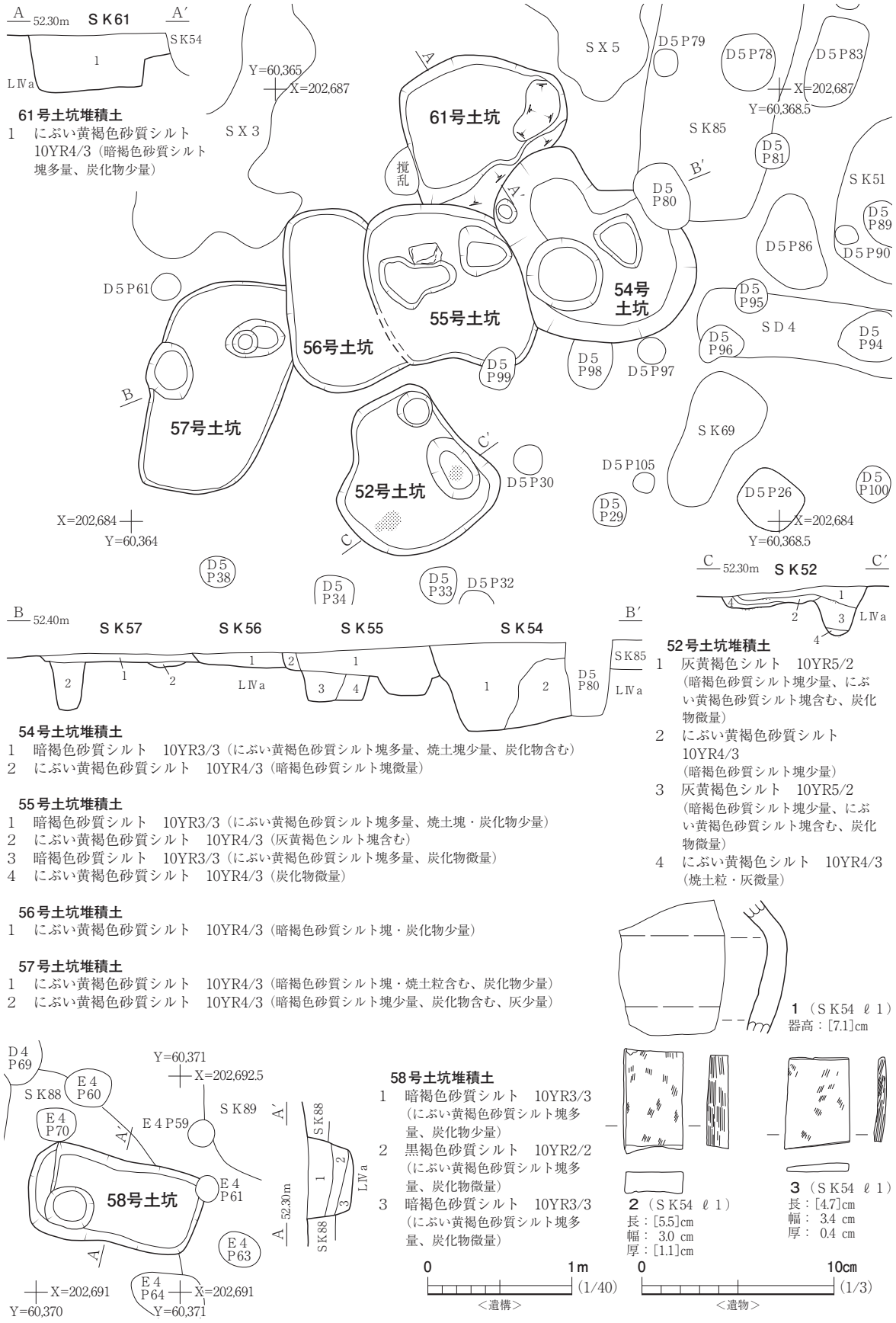


図19　52・54～58・61号土坑、54号土坑出土遺物

平面形は不整な楕円形を呈している。周壁は、比較的急角度で立ち上がる。底面は小穴状の窪みがあるため、全体的に凹凸がある。

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルト、ℓ２はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルト塊を斑に含んでいる。

遺物は、土師器19点、陶器１点、石器２点の計22点が出土した。このうち３点を図示した。割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期とみられる細片である。

図19－１は陶器の甕の肩部片である。内外面には自然釉が掛かっている。胎土はＡ類で、長石を多量、黒色粒子を微量含んでいる。

図19－２・３は砥石である。２は黒色を呈する粘板岩製、３は珪長岩製である。いずれも下半部及び裏面を欠損するが、３では裏面の一部が遺存している。２は表面、３は表面と裏面の両方が砥石として使用された面である。使用面はいずれも平滑になっているが、３では窪み方が一様ではない。２は仕上げ砥、３は中砥あるいは仕上げ砥であろう。また、２・３とも上端部及び両側面には成形段階の擦痕とみられる線状の痕跡が観察される。

本遺構と重複する55・61号土坑のさらに西には56・57号土坑がある。これらの遺構は、古い方から、57号土坑→56号土坑→61号土坑→55号土坑→54号土坑の順につくられており、西から東に場所を少しずつ変えながらつくられているといえる。本遺構の具体的な性格は不明だが、遺構の所属時期については、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

59号土坑　ＳＫ59（図20、写真19・40）

本遺構は、調査区東部の中央に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。Ｅ５Ｐ48～54と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。

平面形は不整な隅丸長方形を呈している。周壁は、上半部は比較的緩やかに立ち上がるが、ＬⅣａとＬⅣｂとの層理面付近で傾斜が変わっている。すなわち、南壁は垂直気味だが僅かに抉れ、北壁は最大36㎝と深く抉れている。検出面からの深さは最大137㎝と深い。底面は凹凸があり、一定しない。

堆積土は暗褐色砂質シルトを基調とする人為堆積土で、含有物の種類や多寡により２層に分層した。ℓ１は礫を含むのに対し、ℓ２には礫は含まれず、にぶい黄褐色砂質シルト塊が斑に多量含まれている。

遺物は、土師器26点、陶器３点、鉄製品６点の計35点が出土した。このうち陶器１点と鉄製品３点の計４点を図示した。土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、外面にハケメを施す甕の胴部片等が認められた。割愛した陶器は、Ａ類とＦ類の甕の胴部片が１点ずつである。割愛した鉄製品は、用途不明の小片だが、板状を呈するものが１点見受けられた。

図20－１は陶器の捏ね鉢である。口縁端部は沈線状にわずかに窪んでいる。内面の体部下半

は、あまり明瞭ではないが滑らかになっているのが確認できる。胎土はＣ類で、遺構外から出土した図54－15の甕の胎土と近似している。

図20－２～４は鉄製品である。２は端部に輪が付く棒状の製品が組み合わさっている。銜や引手等の馬具とみられる。なお、本資料の背面にはもう一本別な棒状の鉄製品が付着している可能性もあるが、本格的なクリーニングは今後実施予定のため、現段階では判然としない。

３・４はいずれも用途不明である。３は板状を呈し、若干湾曲する。端部が遺存しないので判然としないが、容器等の残片の可能性もある。なお、Ｘ線透過写真撮影の結果、鋳造製品であること

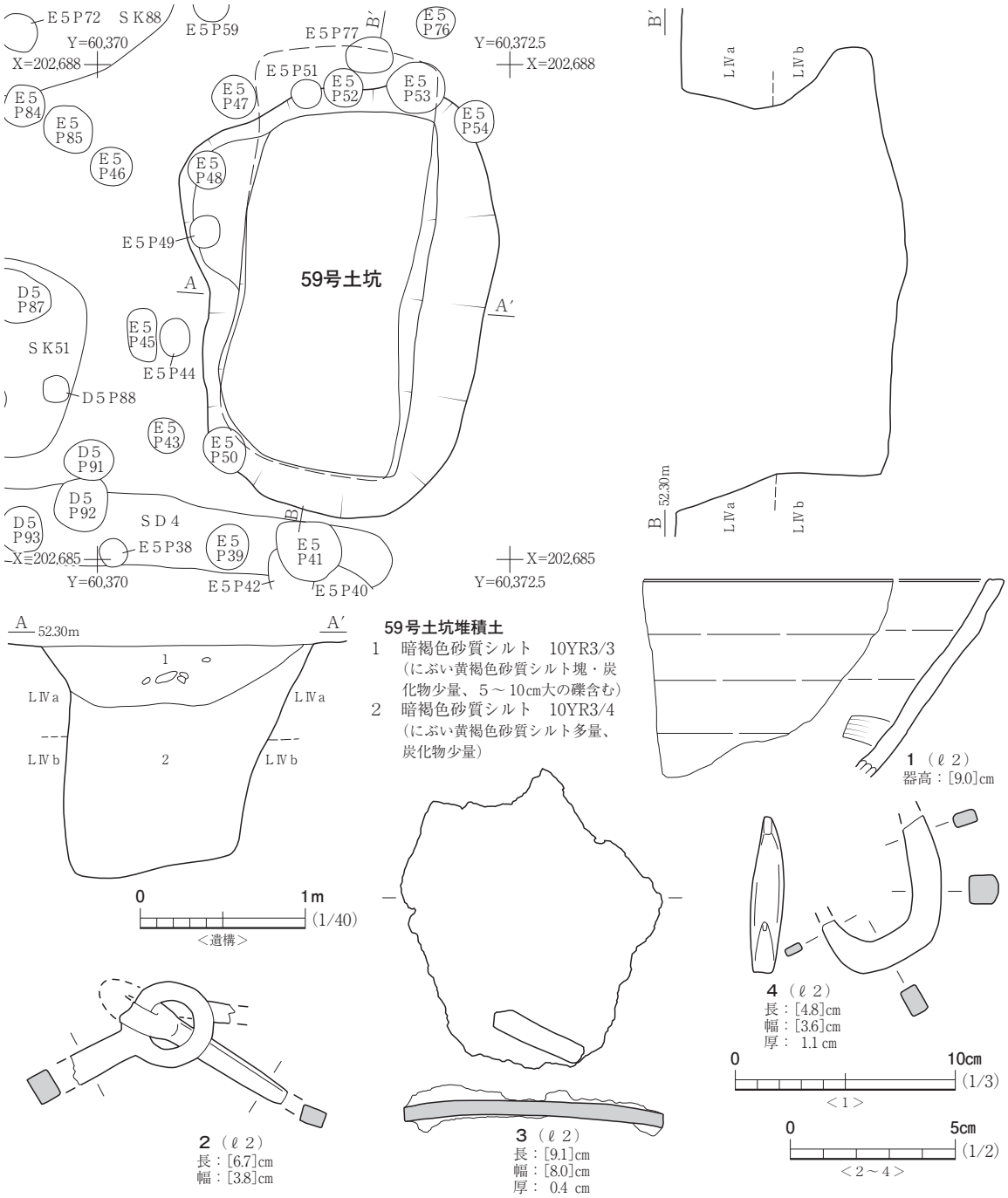


図20　59号土坑・出土遺物

が判明した。また、３には別個体とみられる棒状を呈する破片が付着するが判然としない。４はＣ字形に折れ曲がった形状で、両端は欠損している。折れ曲がった両端は中央部に比して扁平なつくりとなっている。

本遺構は北壁が深く抉れる形状を呈する土坑である。具体的な性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

60号土坑　ＳＫ60（図21、写真19・40）

本遺構は、調査区北東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。62号土坑とＥ３Ｐ21と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。

平面形は一辺3.9ｍ前後の隅丸方形を呈するが、南東部が外側に張り出している。周壁は、南東部の張り出す箇所は緩やかだが、それ以外の箇所は急角度で立ち上がる。底面はやや凹凸があるものの概ね平坦である。

堆積土は４層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１・３は暗褐色砂質シルト、ℓ２・４はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルト塊を斑に含んでいる。なお、堆積土の大半はℓ１・２で、ℓ３は周壁が外側に張り出す箇所、ℓ４は南東部にのみ堆積する。

本遺構の底面では８基の小穴（Ｐ１～８）を検出した。小穴は、Ｐ１が長軸76㎝、短軸56㎝のやや歪んだ楕円形を呈するが、それ以外のＰ２～８は直径16～24㎝前後の円形を基調としている。Ｐ２～８は、柱痕は確認されなかったが、２間×２間の等間隔に並ぶことから、柱穴と考えられる。Ｐ２とＰ３の間には、本遺構に伴う柱穴があったとみられるが、62号土坑により失われたと推測される。Ｐ２～８の遺構底面からの深さは７～37㎝とばらつきがあり、Ｐ６・８が浅く、Ｐ４が一番深い。小穴の堆積土は、Ｐ１がにぶい黄褐色砂質シルト、Ｐ２～８が暗褐色砂質シルトを基調とした人為堆積土である。

遺物は、土師器47点、陶器１点の計48点が出土した。このうち陶器１点を図示した。割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、特徴がわかるものには、外面にハケメを施す甕の口縁部片等が認められた。

図21－１は小型の壺とみられる陶器である。体部下半の破片だが、外面には下から上に向って引いた線刻が三条認められる。このうち、図上で左端の一条は引き直したとみられる痕跡がある。内面には薄く付着物が遺存する。鉄漿であろうか。胎土はＤ類で、長石を少量含んでいる。

本遺構は、一辺3.9ｍ前後の隅丸方形を呈する大型の土坑で、南東部が外側に張り出す形状を呈している。底面には、２間×２間の等間隔に並ぶ柱穴とみられる小穴が検出された。このことから、中世の方形竪穴建物跡と考えられ、外側に張り出す箇所は出入り口部と想定される。この張り出す箇所の東に近接するＥ４Ｐ13は、出入り口部に関連した屋根等の柱穴の可能性もあるが、対となる西の位置から小穴が確認されなかったため、断定はできない。

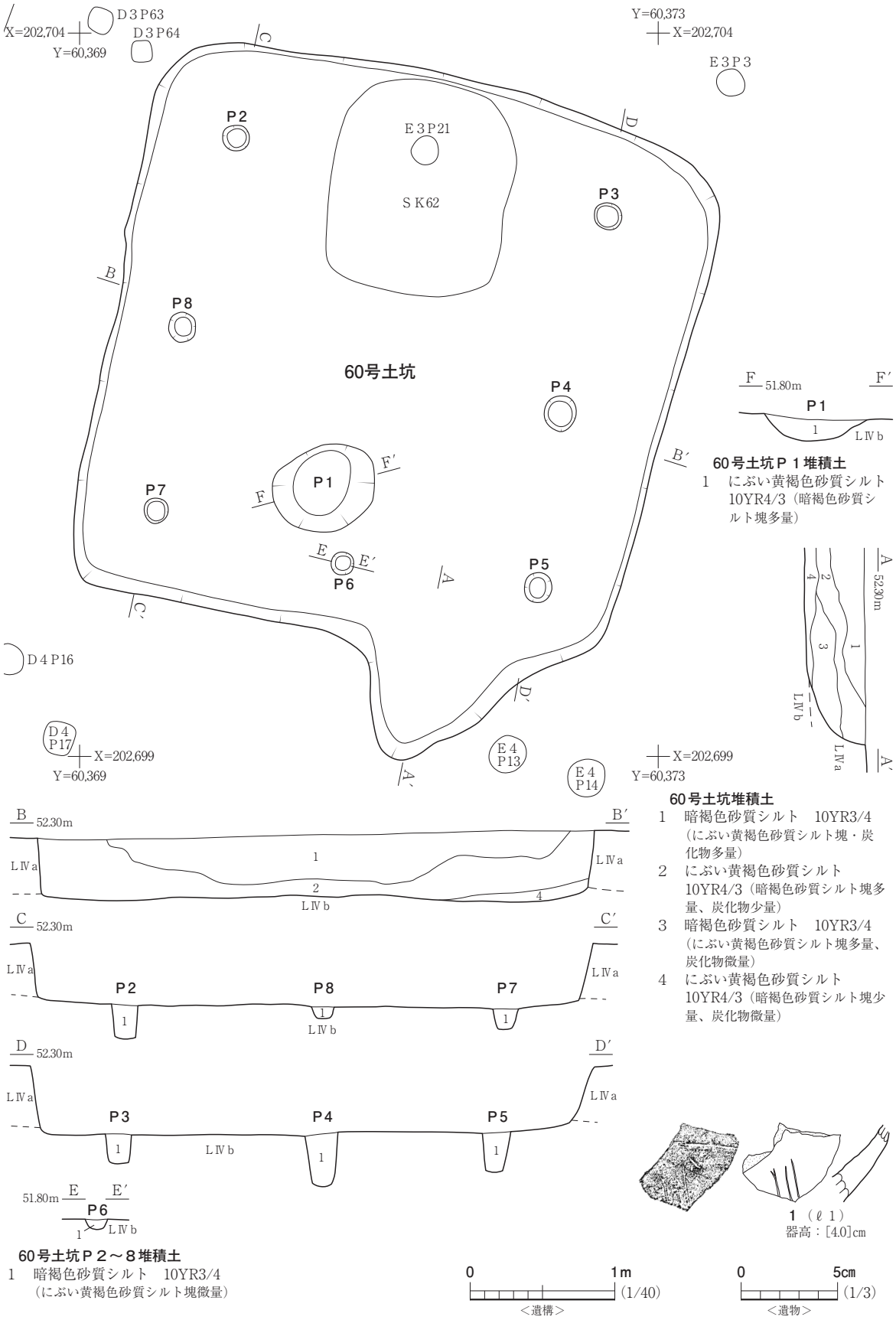


図21　60号土坑・出土遺物

遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。また、他の大型の土坑である70・71・88号土坑や２～６号溝跡と主軸方向が概ね一致することから、これらの遺構と関連して機能したと考えられる。（丹　治）

62号土坑　ＳＫ62（図22、写真19・40）

本遺構は、調査区北東部に位置する60号土坑とＥ３Ｐ21と重複する土坑で、古い方から60号土坑→62号土坑→Ｅ３Ｐ21の順でつくられている。当初、その存在に気付かなかったため、遺構上半部の記録が作成できなかった。

平面形は隅丸方形を呈する。周壁は、緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸があるが概ね平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

遺物は、土師器４点、陶器１点、鉄製品１点の計６点が出土した。このうち２点を図示した。割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期とみられる細片である。

図22－１は古瀬戸の卸皿の底部片である。内面には格子状の卸目、外面には回転糸切り痕が認められる。卸目は、中央部が使用により摩耗している。灰白色（10YR7/1）の緻密な胎土で、内外面には部分的に薄い灰釉が掛かっている。

図22－４は茎のみ遺存する鉄製の武器で、目釘孔が観察される。断定はできないが、本遺跡から出土した他の資料と同様、小刀と推測される。

本遺構の性格については不明だが、廃絶の際に一度に埋められているという特徴がある。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

63号土坑　ＳＫ63（図22、写真20・40・41）

本遺構は、調査区中央やや北寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。86号土坑、６号溝跡、Ｄ４Ｐ35～37と重複し、古い方から86号土坑、６号溝跡→63号土坑→Ｄ４Ｐ35～37の順につくられている。この他、西には76号土坑が近接し、北に約１ｍには64号土坑、南に約１ｍには４号特殊遺構がある。

平面形はやや不整な隅丸長方形を呈する。周壁は、急角度で立ち上がるが、西壁の一部ではわずかに抉れている。底面はやや凹凸があるが概ね平坦で、北部ではステップ状の段が確認された。

堆積土は３層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１・２は暗褐色砂質シルト、ℓ３はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルト塊を斑に多量含んでいる。

本遺構の底面では１基の小穴を検出した。小穴は、直径23cm前後のやや歪んだ円形を呈し、底面からの深さは30cm前後である。堆積土は暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土で

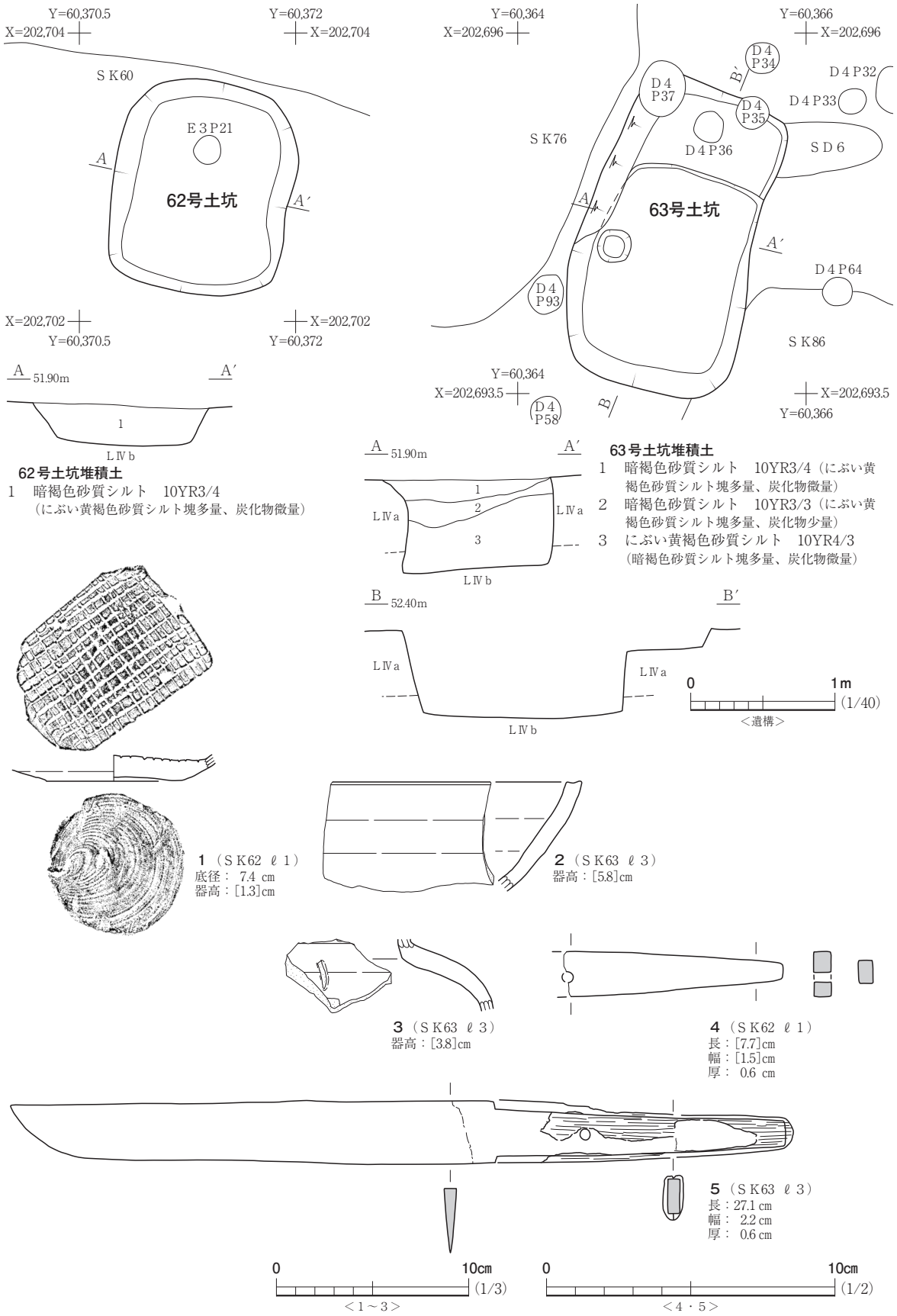


図22　62・63号土坑・出土遺物

ある。

遺物は、ℓ３から土師器８点、陶器２点、鉄製品３点の計13点が出土した。このうち３点を図示した。土師器は細片のため図化できなかったが、いずれも古墳時代前期の資料とみられる。割愛した鉄製品は、用途不明の小片だが、棒状を呈するものが１点見受けられた。

図22－２は陶器の捏ね鉢である。口縁端部は沈線状にわずかに窪んでいる。内面の体部下半は、あまり明瞭ではないが滑らかになっているのが確認できる。胎土はＤ類で、径0.5㎜の微細な長石を少量含んでいる。

図22－３は古瀬戸の四耳壷の肩部片である。耳は遺存しないが、剝離した痕跡が観察される。外面には、耳が剝離した箇所を除き薄い灰釉が掛かっている。胎土は緻密で灰白色（10YR7/1）を呈する。

図22－５は切先から茎尻まで遺存する鉄製の小刀である。Ｘ線透過写真撮影の結果、目釘孔の他、刃・棟両側に関が観察された。また、柄の木質が遺存している状況が肉眼でも観察される。

本遺構は北部にステップ状の段が確認された土坑である。具体的な性格については不明だが、遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

64号土坑　ＳＫ64（図23、写真20）

本遺構は、調査区中央やや北寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、南西には76号土坑が近接し、南に約１ｍには63号土坑がある。

平面形は不整な楕円形を呈する。周壁は、垂直気味に立ち上がり、北西部にはステップ状の段が確認される。ただ、北西部と南東部の底面の比高は90㎝前後もあり、昇降用としての機能を有していたとは考えられない。

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルト、ℓ２はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルトを斑に多量含んでいる。なお、底面には直径70㎝前後の円形の範囲に、厚さ1.5㎝前後の炭化物層が確認された。有機質のものが敷かれていたのであろうか。

遺物は、土師器10点、陶器１点、磁器１点の計12点が出土した。このうち陶器１点を図示した。土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられる細片である。磁器は、青磁の体部片である。細片のため図化できなかったが、連弁文は確認されなかった。なお、この他、鋳造製品を鋳込んだ際にできたバリ等の不要な部分とみられる不整形の鉄片が１点出土した。

図23－１は陶器の甕の口縁部片である。胎土はＡ類で、長石を多く含んでいる。また、内外面には釉の付着が認められる。

本遺構は不整な楕円形を呈する土坑である。南東部の底面に厚さ1.5㎝前後の炭化物層が確認されたことが特筆される。有機質のものが敷かれていた可能性もあるが、具体的な性格については不明である。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

66号土坑　ＳＫ66（図23、写真20）

本遺構は、調査区中央やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。88号土坑とＤ４Ｐ69と重複し、古い方から88号土坑→Ｄ４Ｐ69→66号土坑の順につくられている。この他、周囲には多くの遺構が点在する。

平面形は隅丸方形を呈する。周壁は、垂直気味に立ち上がるが、南壁から西壁には幅10cm程度の段がある。底面は概ね平坦である。

堆積土は３層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルト、ℓ２・３はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルト塊を斑に多量含んでいる。

遺物は、ℓ３から土師器２点、鉄製品６点の計８点が出土した。このうち鉄製品１点を図示した。土師器は、内面に黒色処理が施された口縁部片が認められたが、小片のためロクロ成形か否かは判別できない。割愛した鉄製品は、用途不明の小片である。

図23－２は鉄製の刀子である。接合しないが同一個体と判断して掲載した。Ｘ線透過写真撮影の結果、刃・棟両側に関が観察された。

本遺構の具体的な性格については不明だが、形状や堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有する。このため、遺構の所属時期は中世前期頃と考えられる。（丹　治）

67号土坑　ＳＫ67（図23、写真20）

本遺構は、調査区中央やや東寄りに位置する土坑である。88号土坑の検出作業中に、同土坑の輪郭の内部に別な長方形の輪郭が確認されたことから、その存在を認識することができた。88号土坑とＤ４Ｐ80と重複し、古い方から88号土坑→66号土坑→Ｄ４Ｐ80の順につくられている。この他、周囲には多くの遺構が点在する。

平面形は長方形を呈する。周壁は急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルトを斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

本遺構の底面では２基の小穴を検出した。小穴は２基とも歪んだ円形を呈し、Ｐ１が直径30cm前後、Ｐ２が直径42cm前後を測る。底面からの深さは、Ｐ１が31cm、Ｐ２が16cmである。堆積土は、いずれもにぶい黄褐色砂質シルトと暗褐色砂質シルトの混土である。

遺物は、土師器５点、陶器３点、鉄製品３点の計11点が出土した。このうち鉄製品１点を図示した。土師器は、古墳時代前期とみられる細片である。陶器は、いずれも胎土がＤ類の甕の胴部片である。割愛した鉄製品は、用途不明の小片で、板状を呈するものと棒状を呈するものが１点ずつである。

図23－３は用途不明の鉄製品である。板状を呈し、若干湾曲する。端部が遺存しないので判然

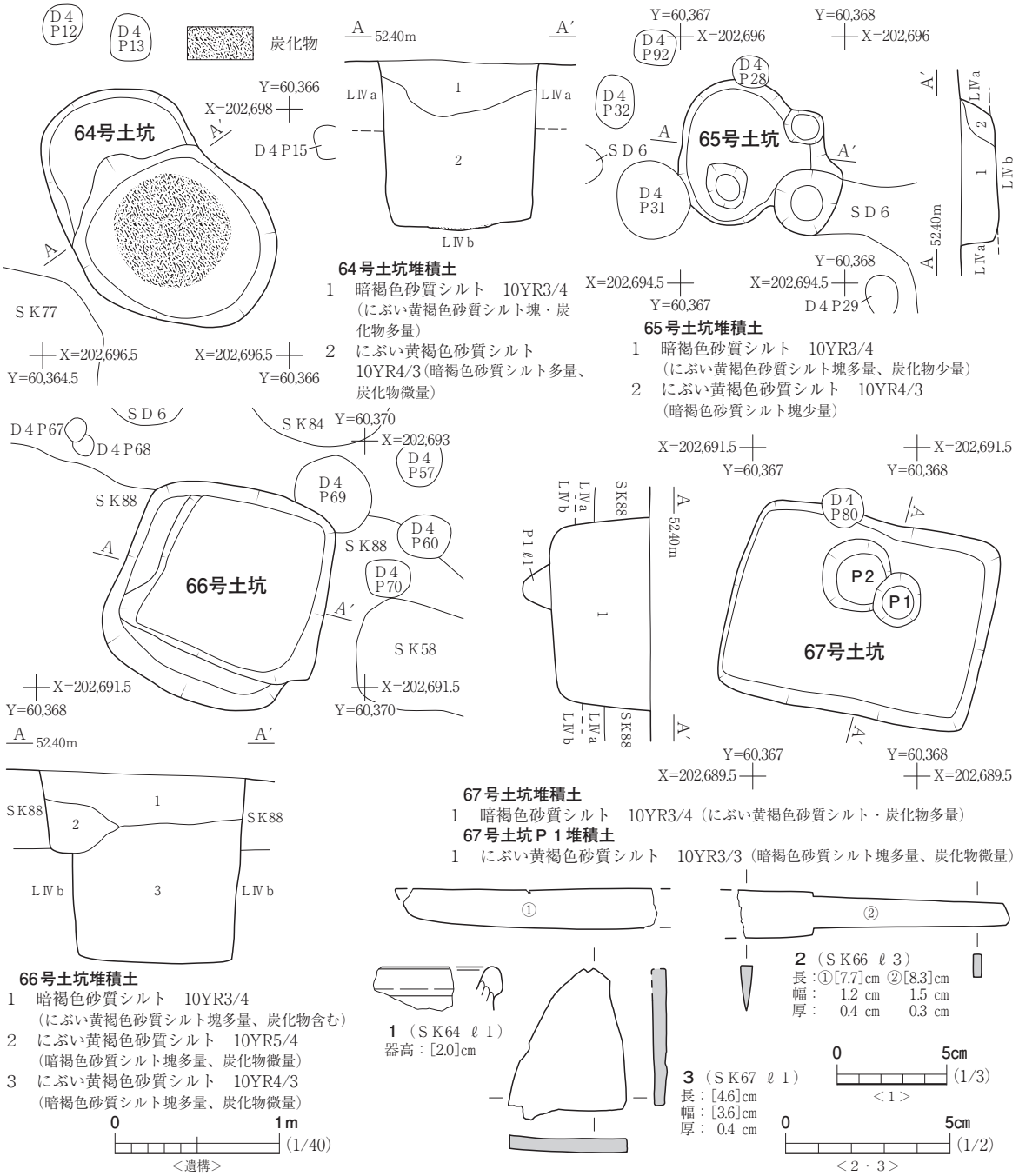


図23　64～67号土坑、64・66・67号土坑出土遺物

としないが、容器等の残片の可能性もある。

本遺構は長方形を呈する土坑だが、具体的な性格については不明である。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

70号土坑　ＳＫ70（図24、写真21）

本遺構は、調査区北東部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。Ｄ３Ｐ57と重複し、本遺構の方が古い。

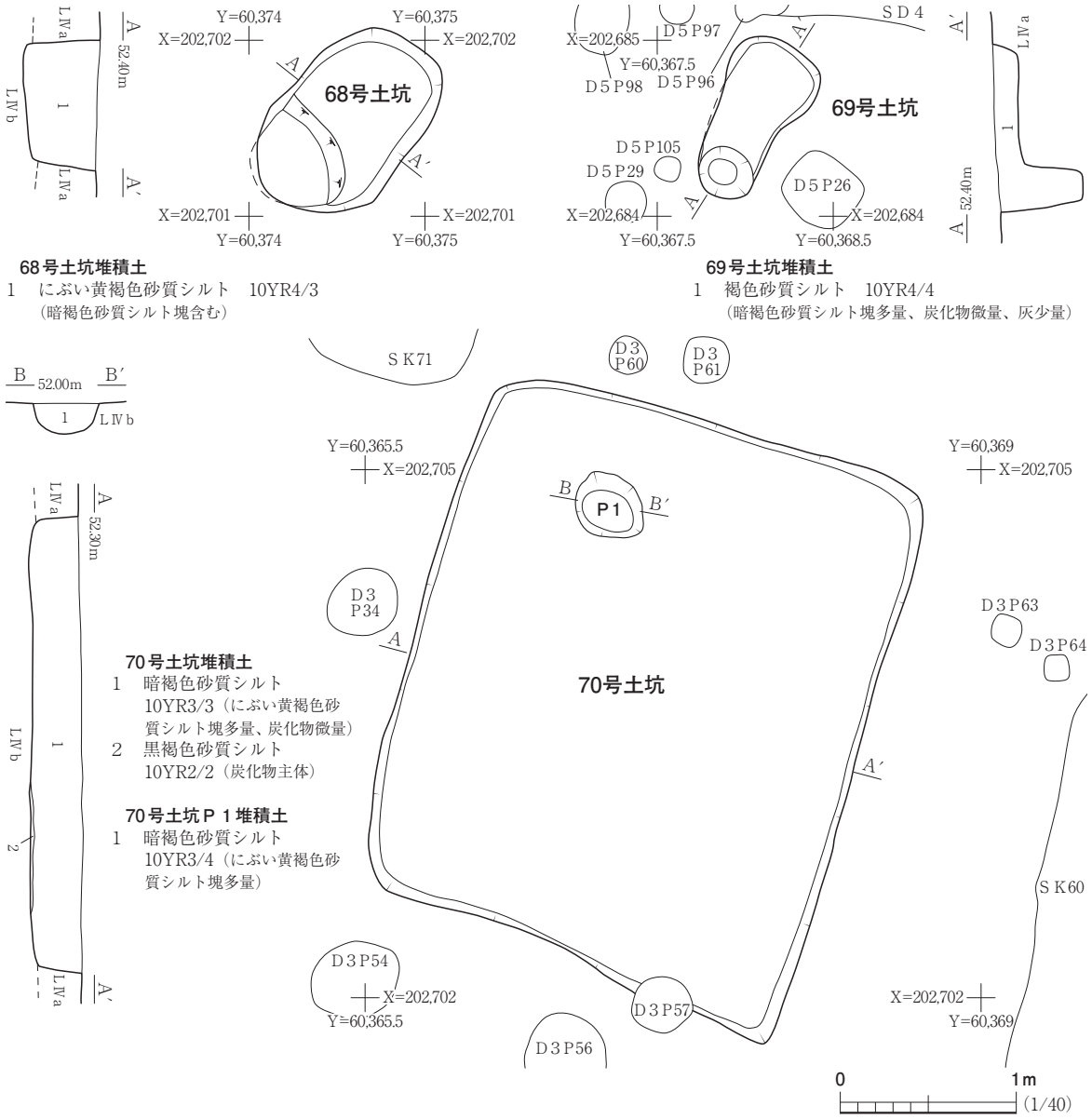


図24　68～70号土坑

平面形は、長軸3.08ｍ、短軸2.62ｍの隅丸長方形を呈する。周壁は垂直気味に立ち上がり、底面はやや凹凸があるものの概ね平坦である。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は堆積土の大半を占める暗褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質シルト塊を多量含むことから人為堆積土と判断した。ℓ２は東部にのみ確認された黒褐色砂質シルトで、炭化物を主体とした層である。

本遺構の北西部の底面では１基の小穴を検出した。Ｐ１は直径37㎝前後のやや歪んだ円形を呈し、底面からの深さは20㎝前後である。堆積土は暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土である。

遺物は、土師器18点が出土したが、細片のため図化できなかった。胎土の特徴から古墳時代前期の資料とみられる。

本遺構は、隅丸長方形を呈する大型の土坑である。隣接する60・71号土坑のような出入口部と想定される張り出す箇所は認められなかったが、中世の方形竪穴建物跡と考えられる。

遺構の所属時期を示す明確な遺物はないが、他の大型の土坑である60・71・88号土坑や２～６号溝跡と主軸方向が概ね一致することから、これらの遺構と関連して中世前期頃に機能していたと考えられる。（丹　治）

71号土坑　ＳＫ71（図25・26、写真15・22・23）

本遺構は、調査区北部の中央やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。79・81・82号土坑とＤ２Ｐ４と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。この他、東壁付近ではＤ３Ｐ16・19と近接しているが、明確な新旧関係は把握することができなかった。

平面形は一辺4.1ｍ前後の隅丸方形を呈するが、南東部が外側に張り出している。周壁は、南東部の張り出す箇所は緩やかだが、それ以外の箇所は急角度で立ち上がる。底面はやや凹凸があるものの概ね平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。なお、後述する布掘り状の溝にも同じ土が堆積している。

本遺構の底面では９基の小穴（Ｐ１～９）を検出した。Ｐ１・４・７・８は、重複する79・81・82号土坑の堆積土を除去した段階で各土坑の底面から検出された。このうち、Ｐ１・７・８は、重複する土坑の堆積土とは異なるにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする混土であることと位置関係から、本土坑に伴うものと判断した。Ｐ４は重複する79号土坑の堆積土と近似するが、位置関係からすれば本土坑に伴うものと考えるのが妥当であろう。Ｐ１・４・７・８は、重複する土坑に壊されているため、本来の平面規模は不明だが、本遺構の底面と想定されるラインからの深さは78～86㎝と深い。

Ｐ２・３・５・６・９は、布掘り状の溝の内部あるいは溝と連結してつくられている。底面からの深さは、Ｐ３が80㎝である以外は60㎝前後である。堆積土は、暗褐色砂質シルトを基調とする混土だが、Ｐ６ではその周囲からℓ２としたにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする土層が確認された。Ｐ６ℓ２については、掘形埋土の可能性がある。

これらの小穴は、柱痕は確認されなかったが、Ｐ３以外は２間×２間の等間隔に並ぶことから、柱穴と考えられる。

本遺構は、一辺4.1ｍ前後の隅丸方形を呈する大型の土坑で、南部が外側に張り出す形状を呈している。底面には、２間×２間の等間隔に並ぶ柱穴とみられる小穴が検出された。このことから、中世の方形竪穴建物跡と考えられ、外側に張り出す箇所は出入り口部と想定される。これらの特徴は、３ｍ南東に位置する60号土坑と同じである。なお、本遺構の東壁沿いには小穴が近接し、何らかの関連も想定されるが、判然としない。

本遺構の所属時期は、出土遺物はないものの、中世前期頃の60号土坑と同じ構造上の特徴を有

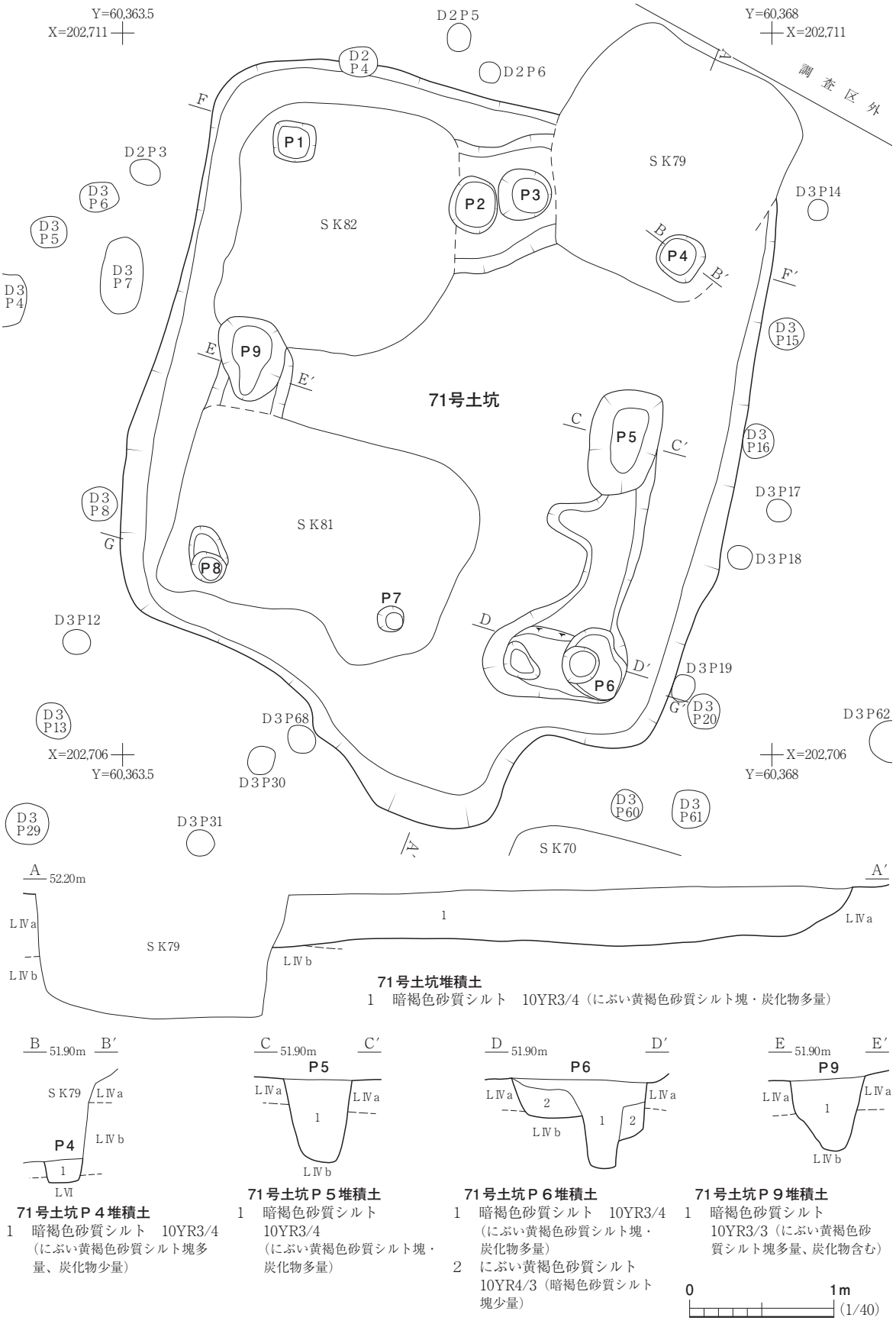

Y=60,363.5
X=202,711
D2P5
Y=60,368
X=202,711
D2P4
D2P6
調査区外
F
D2P3
P1
SK79
D3P6
P2
P3
D3P14
D3P5
SK82
B
P4
B′
F′
D3P7
D3P4
D3P15
E
P9
E′
71号土坑
C
P5
C′
D3P16
D3P8
D3P17
SK81
G
P8
D3P18
P7
D3P12
D
D′
D3P19
P6
G′
D3P20
D3P13
D3P68
D3P62
X=202,706
Y=60,363.5
D3P30
X=202,706
Y=60,368
D3P60
D3P61
D3P29
D3P31
A′
SK70
A
52.20m
A′
LⅣa
1
LⅣa
SK79
LⅣb
LⅣb
71号土坑堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物多量）
B
51.90m
B′
SK79
LⅣa
LⅣb
P4
1
LⅥ
71号土坑Ｐ４堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊多量、炭化物少量）
C
51.90m
C′
P5
LⅣa
LⅣa
1
LⅣb
71号土坑Ｐ５堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物多量）
D
51.90m
D′
P6
LⅣa
2
LⅣa
1
2
LⅣb
71号土坑Ｐ６堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物多量）
2　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト塊少量）
E
51.90m
E′
P9
LⅣa
1
LⅣa
LⅣb
71号土坑Ｐ９堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊多量、炭化物含む）
0
1m
(1/40)

図25　71号土坑（１）

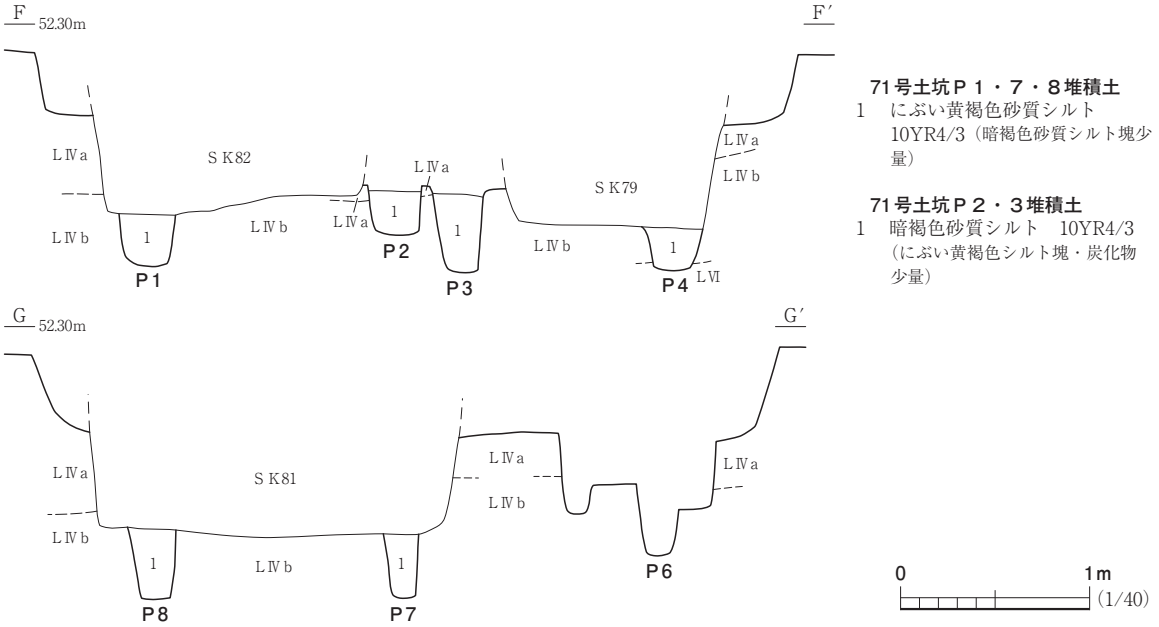


図26　71号土坑（２）

することから、当該期頃の所産と判断される。また、60号土坑の他、他の大型の土坑である70・88号土坑や２～６号溝跡と主軸方向が概ね一致することから、これらの遺構と関連して機能したと考えられる。　（丹　治）

76号土坑　ＳＫ76（図28、写真24・40・41）

本遺構は、調査区中央やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。77号土坑と６号溝跡と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が新しい。

平面形は隅丸長方形を基調とし、南部が張り出したような形状を呈している。このため、遺構検出時には、張り出す箇所は別遺構の可能性を想定したが、断面観察の結果、土層に違いは認められなかった。周壁は、南壁の上半部はやや緩やかだが、それ以外の箇所は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、砂層であるＬⅥ層が露出している。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

遺物は、土師器35点、陶器４点、鉄製品７点、古銭４枚の計50点が出土した。このうち陶器１点及び鉄製品５点の計６点を図示した。土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、外面にハケメを施した甕の胴部片等があった。割愛した陶器は、いずれも甕の胴部片で、胎土がＡ類のもの１点、Ｂ類のものが２点である。割愛した鉄製品は、用途不明の棒状を呈する小片である。古銭は４枚とも互いに貼り付いており（写真40）、判読不能である。この他、鋳造製品を鋳込んだ際にできたバリ等の不要な部分とみられる不整形の鉄片が１点出土した。

図28－１は陶器の甕である。頸部～肩部上半の破片で、外面には自然釉が掛かっている。胎土はＤ類で、径２～５㎜の長石を少量含んでいる。

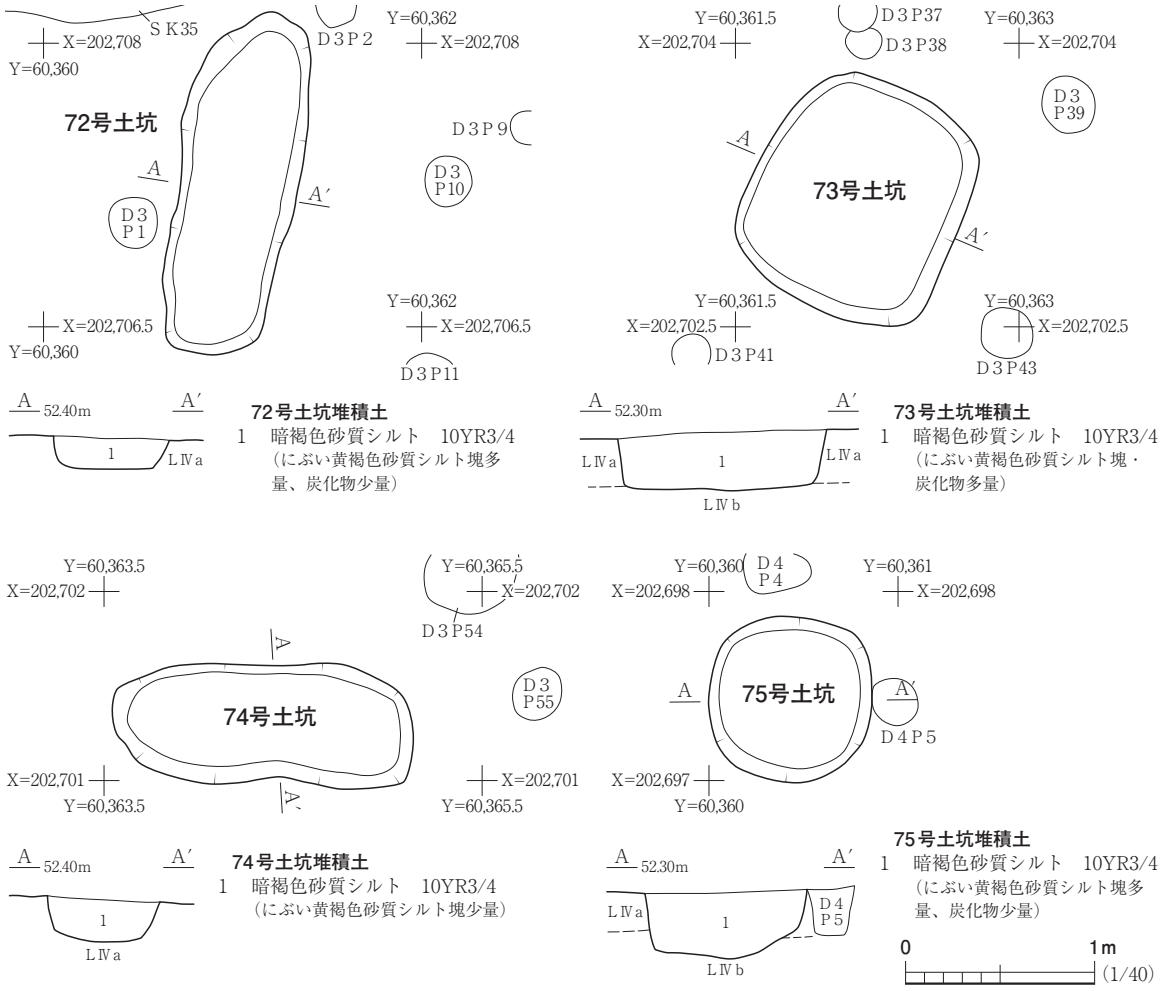


図27　72～75号土坑

図28－２～６は鉄製品である。２は鋳造製の香炉である。脚が一本遺存し、口縁部直下には断面形が台形を呈する隆帯を一条巡らせている。底部外面の中央付近には、鋳込みの際に溶かした鉄を流し込んだ湯口の痕跡が観察される。

３は板状を呈する製品だが、具体的な用途は不明である。

４・５は断面形が方形を呈する製品で、釘とみられるが、端部が欠損するため断定はできない。

６は遺存する資料の中央部付近で段が付き、そこを境に断面形が方形と円形に分かれている。用途は不明である。

本遺構の性格については不明だが、堆積土中から鉄製の香炉が出土したことが特筆される。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

78号土坑　ＳＫ78（図29・30、写真24・40・42）

本遺構は、調査区のほぼ中央部に位置する土坑である。検出面は大半がＬⅣａ上面だが、ＬⅢが遺存する北東部ではＬⅢ上面となっている。44号土坑と６号特殊遺構と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。この他、周囲には小穴が点在し、北には80号土坑が近接し、南に約１ｍに

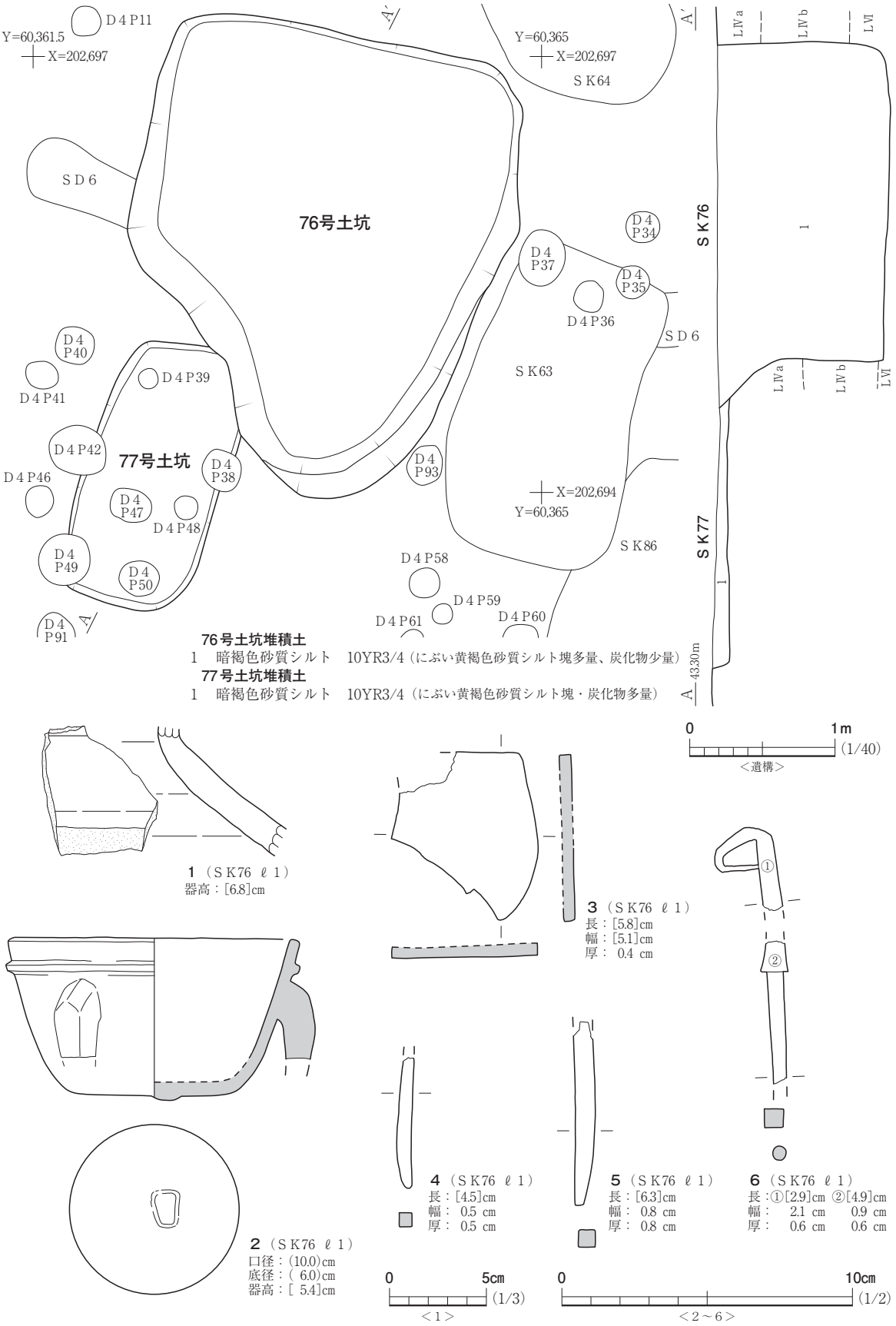


図28　76・77号土坑、76号土坑出土遺物

は43号土坑がある。平面形は隅丸長方形を呈している。周壁は、垂直気味に立ち上がるが、上部では傾斜が緩やかとなっている。また、南西壁ではわずかに抉れている。底面はほぼ平坦で、東部ではステップ状の段が確認された。

堆積土は４層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１～３は暗褐色砂質シルト、ℓ４はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルト塊を斑に含んでいる。なお、ℓ１には被熱した径30㎝前後の礫が含まれていた。何らかの目的で使用された礫が不要となり、本土坑の廃絶に併せて埋めたものと推測される。

遺物は、計102点出土した。内訳は、ℓ１から土師器73点、陶器２点、鉄製品８点、古銭１枚、ℓ２から土師器14点、陶器１点、古銭３枚である。堆積土の大半を占めるℓ３からは出土遺物はなかった。このうち10点を図示した。割愛した土師器は、古墳時代前期の資料が大半だが、内面に黒色処理が施された杯もわずかに認められた。この他、胎土がＣ類の陶器捏ね鉢とみられる小片と詳細不明の鉄製品の小片を割愛した。

図30－１は古瀬戸の瓶子である。胴部下半のみの小片で、外面に薄い灰釉が掛かっている。胎土は緻密で灰白色（10YR7/1）を呈する。

図30－２は陶器の捏ね鉢である。内面の体部下半は、明瞭ではないが滑らかになっているのが確認できる。使用頻度が低い資料と思われる。胎土はＤ類で、径0.5～１㎜の長石を含んでいる。

図30－３は北宋銭の「政和通寶」（1111年初鋳）である。なお、これ以外の出土した古銭については、遺存状態が悪く判読不能である。

図30－４～10は鉄製品である。４は鑿で、全体的に厚手のつくりとなっているが、刃先に近付くにつれ薄くなる。刃先近くでの断面形は長方形を呈する。

５は茎のみ遺存する鉄製の刀であろうか。

６は用途不明の製品である。鋏のような形状を呈しているが、刃先は観察されないため判然としない。

７～９は断面形が方形を呈する棒状の製品である。７・９は釘とみられるが、８はリング状に膨らむ箇所が認められるため判然としない。

10は用途不明の製品である。板状を呈し、若干湾曲する。端部が遺存しないので判然としないが、容器等の残片の可能性もある。

本遺構は東部にステップ状の段が確認された土坑である。ただ、ステップ状の段から遺構底面までの比高は75㎝前後あり、内部に入るためのステップとしては段差が大きい。このため、実際にステップとしての機能を有していたかは判然としない。遺構の具体的な性格は不明だが、所属時期は、堆積土中から出土した陶器から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

79号土坑　ＳＫ79（図31、写真23）

本遺構は、調査区北部の中央やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。71

号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

平面形は隅丸方形を呈する。周壁は急角度で立ち上がり、底面はやや凹凸が目立つ。

堆積土は暗褐色砂質シルトを基調とする人為堆積土で、含有物の種類・多寡により２層に分層した。ℓ１の上半部には径７～20㎝前後の礫が含まれている。

遺物は、土師器36点が出土したが、細片のため図化できなかった。古墳時代前期の資料とみられる口縁部を折り返した甕等が確認された。

本遺構の性格は不明だが、形状や堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有する。このため、遺構の所属時期は中世前期頃と考えられる。（丹　治）

80号土坑　ＳＫ80（図29・30、写真24・41）

本遺構は、調査区のほぼ中央部に位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。６号特殊遺構と重複し、本遺構の方が古い。この他、周囲には小穴が点在し、南には78号土坑が近接し、北に約１ｍには77号土坑がある。平面形は隅丸長方形を呈している。周壁は、垂直気味に立ち上がるが、北壁と南壁の一部では若干抉れている。底面はほぼ平坦である。

堆積土は３層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１・３はにぶい黄褐色砂質シルト、ℓ２は暗褐色砂質シルトを基調とし、前者は暗褐色砂質シルト塊、後者はにぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に含んでいる。

遺物は、ℓ１から土師器７点、鉄製品２点の計９点が出土した。このうち鉄製品１点を図示した。土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、口縁部を折り返した甕が認められた。割愛した鉄製品は、用途不明の棒状を呈する小片である。

図30－11は鉄製の磬で、重複する６号特殊遺構から出土した破片と接合した。Ｘ線透過写真撮影の結果、鋳造製品であると判明した。裏面には文様がない片面式の磬である。山形の形状で、表面の側縁部には断面が三角となる縁を二重に巡らせており、上縁には鈕孔が二個認められる。裏面は上縁にのみ断面台形の縁が巡る。表面の中央の撞座には蓮華文が観察される。なお、撞座の左右には文様は認められない。

本遺構の性格については不明だが、堆積土中から鉄製の磬が出土したことが特筆される。遺構の所属時期は、重複する６号特殊遺構より古いと判断されるが、形状や堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有するため、大きな時期差はないと推測される。このことから、中世前期頃の所産と考えておきたい。（丹　治）

81号土坑　ＳＫ81（図31、写真23）

本遺構は、調査区北部の中央やや東寄りに位置する土坑である。71号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。当初、その存在に気付かなかったため、遺構上半部の記録が作成できなかった。

平面形は隅丸長方形を呈する。周壁は垂直気味に立ち上がり、底面は細かい凹凸はあるが概ね平

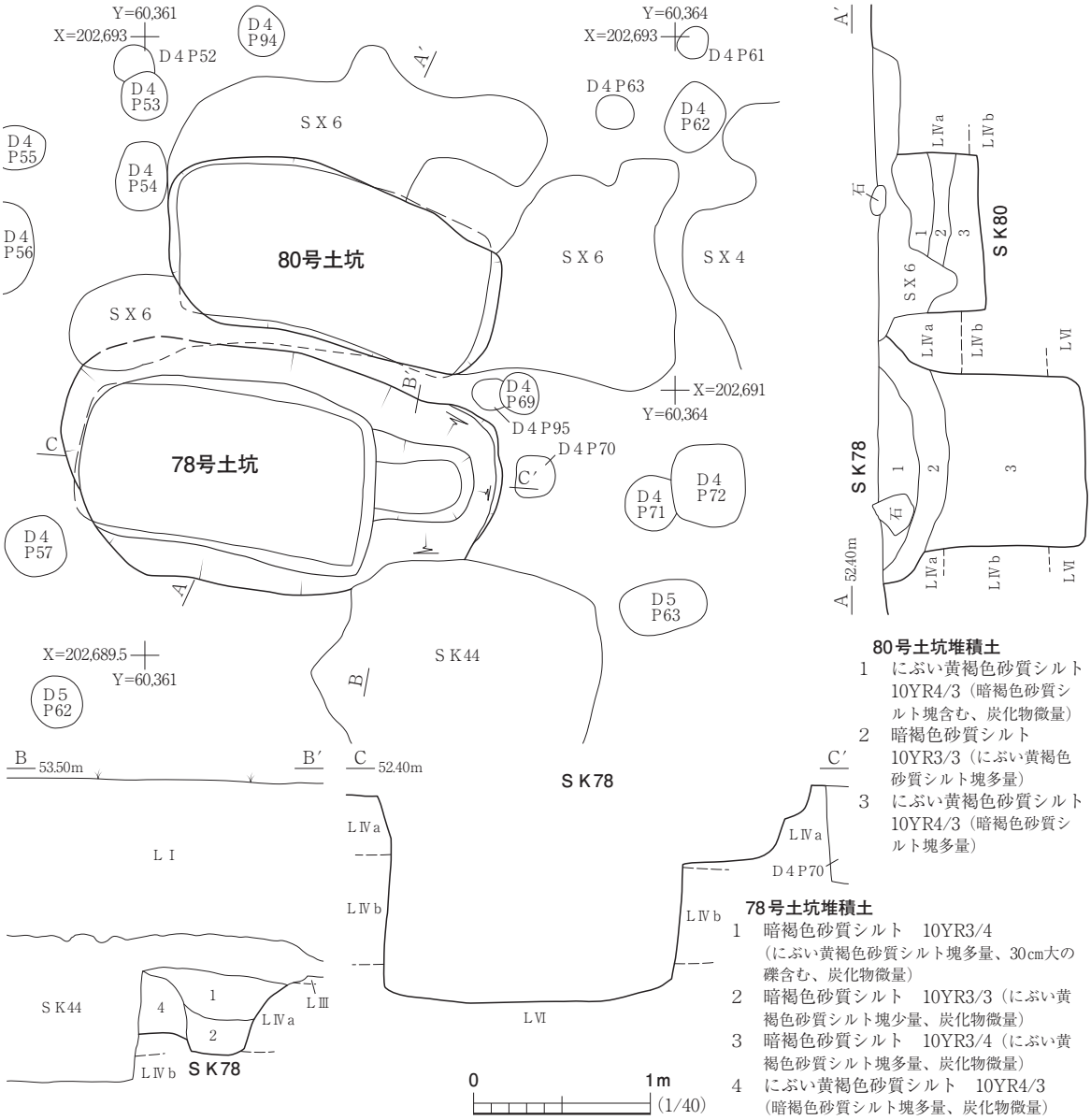


図29　78・80号土坑

坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。なお、遺物は出土しなかった。

本遺構の性格は不明だが、形状や堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有する。このため、出土遺物はないが、遺構の所属時期は中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

82号土坑　ＳＫ82（図31、写真23）

本遺構は、調査区北部の中央やや東寄りに位置する土坑である。71号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。当初、その存在に気付かなかったため、遺構上半部の記録が作成できなかった。

平面形はやや不整な隅丸方形を呈する。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸が目立つ。

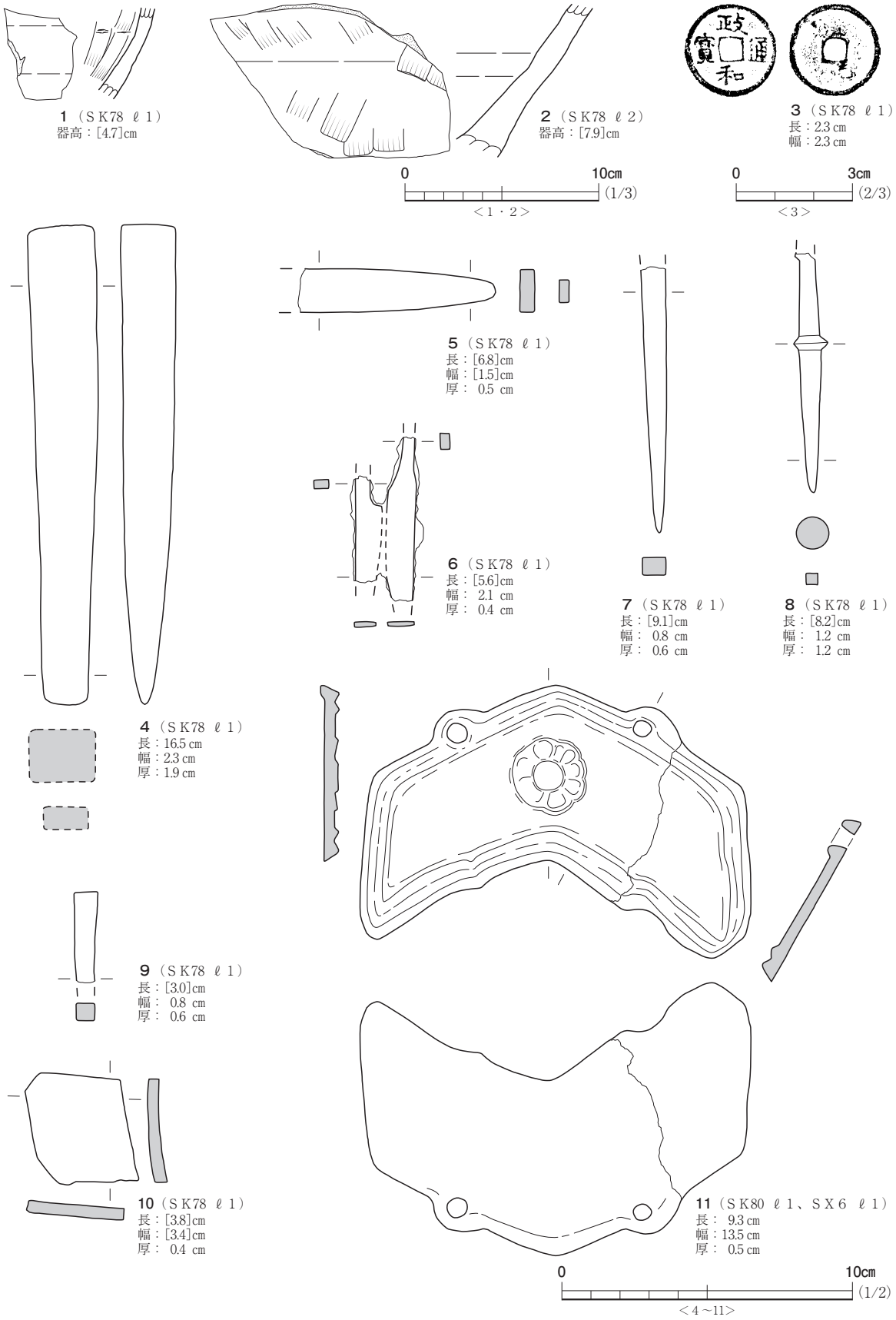
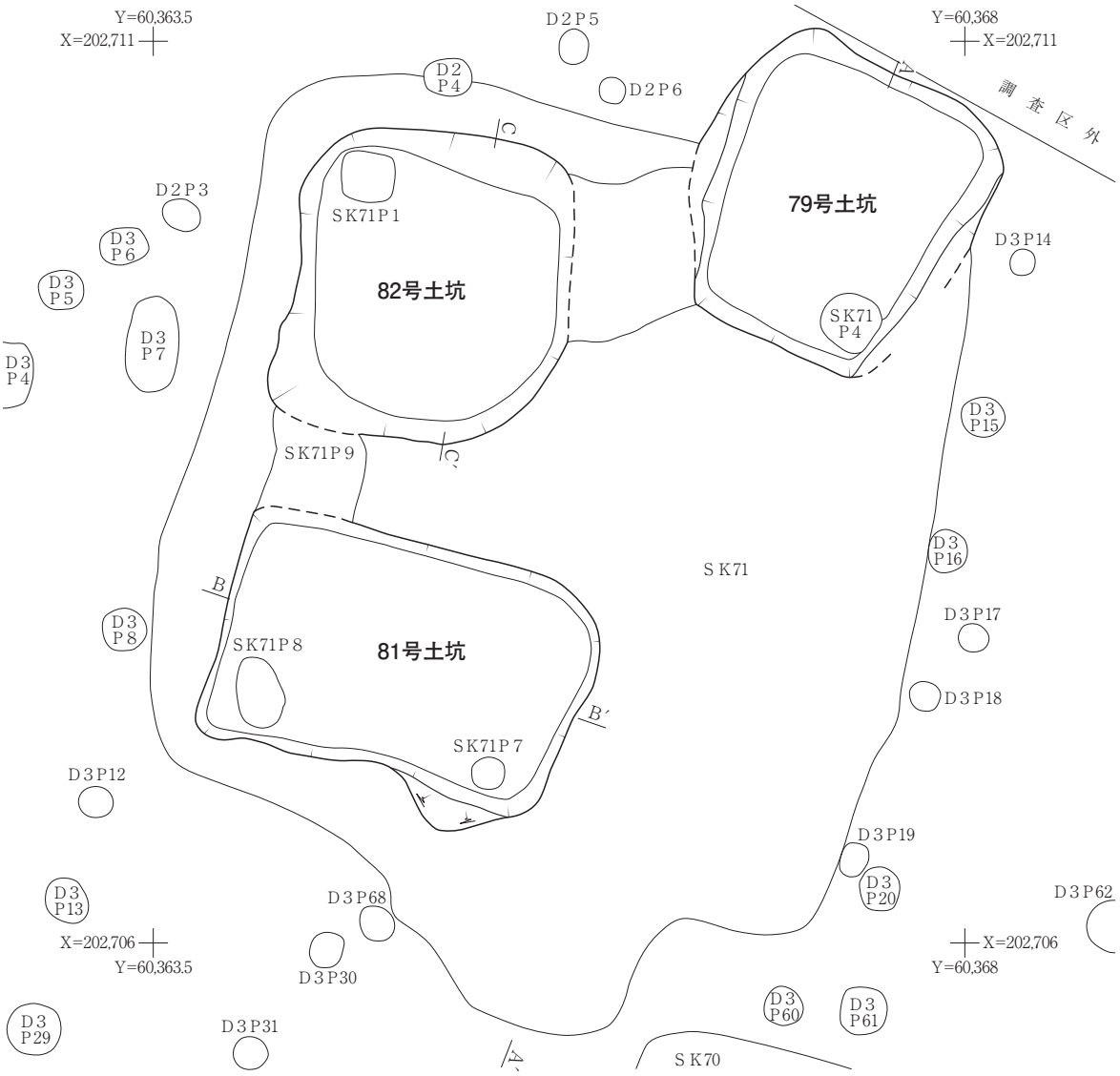


図30　78・80号土坑出土遺物



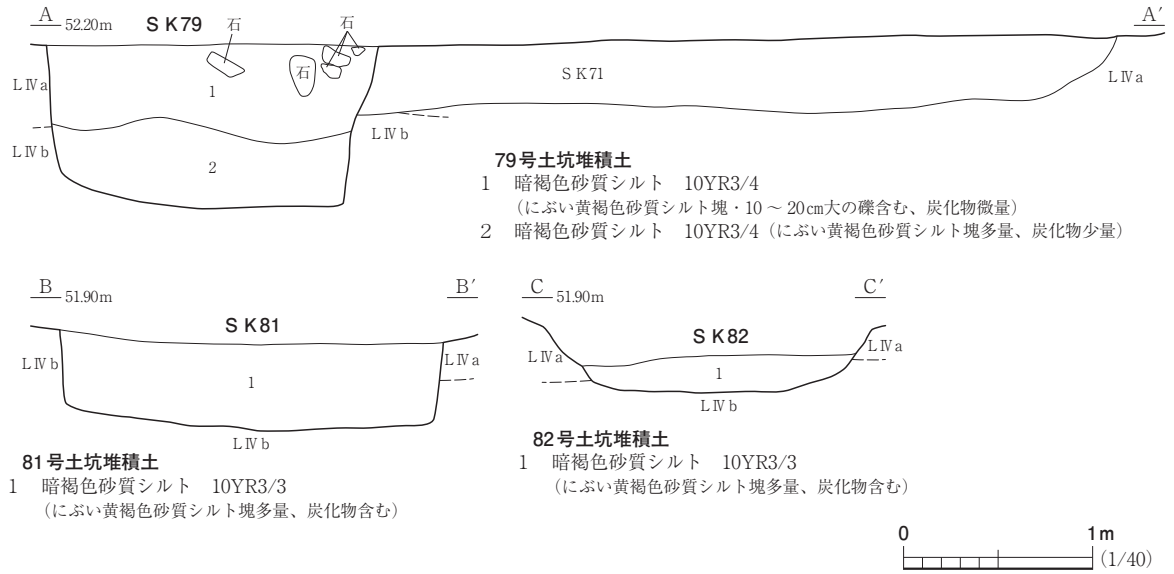


図31　79・81・82号土坑

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。なお、遺物は出土しなかった。

本遺構の性格は不明だが、形状や堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有する。このため、出土遺物はないが、遺構の所属時期は中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

83号土坑　ＳＫ83（図32、写真24・41）

本遺構は、調査区東部の中央やや北寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。89・90号土坑と６号溝跡とＥ４Ｐ52と重複し、古い方から90号土坑、６号溝跡→83号土坑→89号土坑、Ｅ４Ｐ52の順につくられている。89号土坑は、当初その存在に気付かなかったが、掘り進めていく途中で、83号土坑の西壁が南西部で途切れ、その箇所で底面が長方形状に窪むことから認識することができた。90号土坑は、本土坑のステップ状の段と想定して調査を進めたが、底面の比高が80㎝前後で、昇降用とするには段差がきつい。このため、別遺構として報告することとした。

平面形は不整な隅丸長方形を呈している。周壁は、東壁は垂直気味に立ち上がるが、西壁はそれよりも傾斜が緩い。検出面からの深さは最大で135㎝と深い。底面は平坦で、砂層であるＬⅥ層が露出している。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑に多量含むことから人為堆積土と判断した。

遺物は、ℓ１から土師器41点、須恵器１点、磁器１点、鉄製品６点、古銭１枚の計50点が出土した。このうち古銭１枚と鉄製品３点の計４点を図示した。土師器は、古墳時代前期の資料とみられる細片である。須恵器は外面に平行タタキ目が観察される甕で、磁器は白磁の底部片だが、いずれも細片のため図化できなかった。割愛した鉄製品は、用途不明の小片で、板状を呈するものと棒状を呈するものがあった。

図32－１は北宋銭の「聖宋元寶」（1101年初鋳）である。

図32－２～４は鉄製品である。２・３は釘で、断面形が四角形を呈し、折れ曲がった釘頭が遺存する。４は鎌とした。先端部が欠損するが、全体的に刃部の湾曲は緩い。また、基部が若干折り返されている。

本遺構の性格については不明だが、廃絶の際に一度に埋められているという特徴がある。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した磁器から中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

86号土坑　ＳＫ86（図33・34、写真25・41・42）

本遺構は、調査区中央やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。63・87・88号土坑とＤ４Ｐ64と重複し、古い方から88号土坑→87号土坑→86号土坑→63号土坑、Ｄ４Ｐ64の順につくられている。この他、南東部でＤ４Ｐ86と近接しているが、明確な新旧関係は把握

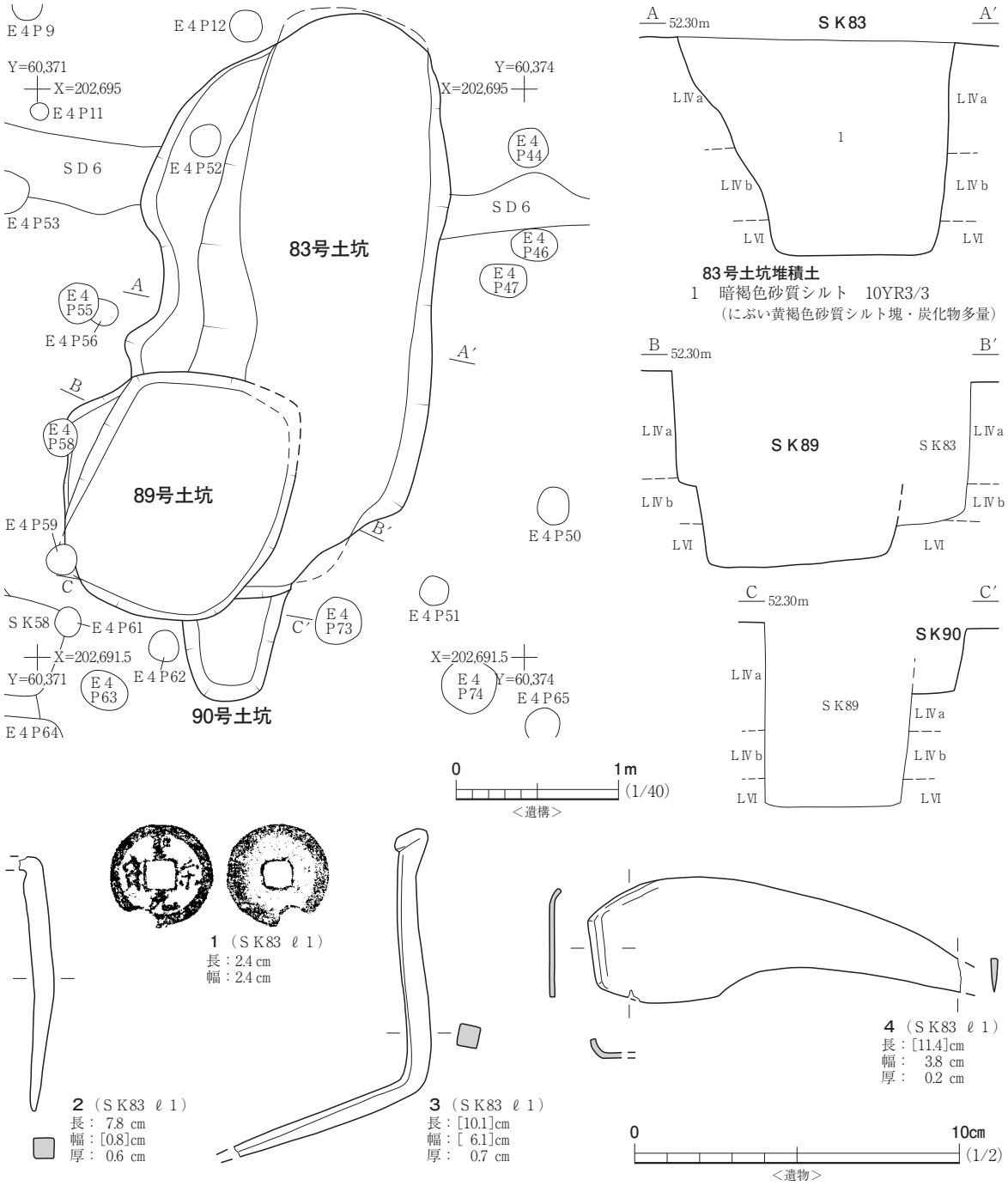
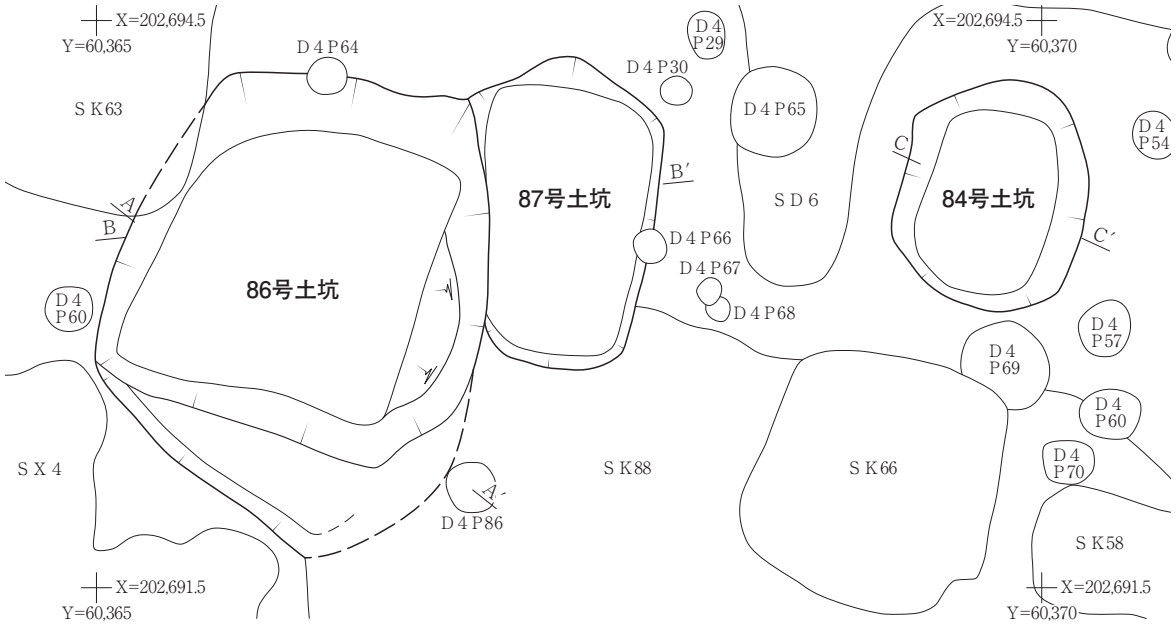


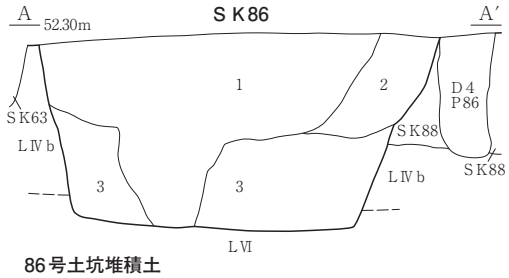
図32　83・89・90号土坑、83号土坑出土遺物

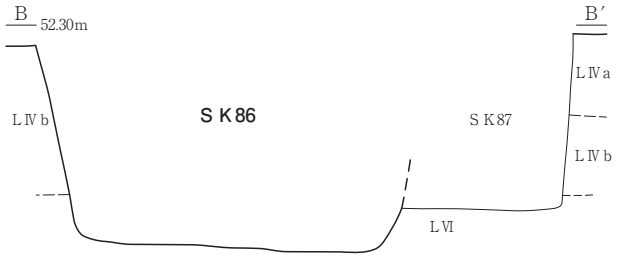
することができなかった。

なお、北東部で重複する87号土坑については、86号土坑と同一の遺構として調査を進めていたが、底面まで掘り下げた段階で別遺構であると認識することができた。このため、87号土坑の土層の記録を作成できなかったが、堆積土は後述する86号土坑のℓ１と近似した土色で、含有物はやや少なかった。

平面形は不整な隅丸方形を呈する。周壁は、急角度で立ち上がるが、南壁には幅20～40cm程度の段がある。底面は概ね平坦である。





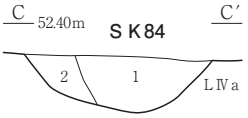


86号土坑堆積土

1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4
（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物多量）

2　暗褐色砂質シルト　10YR3/4
（にぶい黄褐色砂質シルト塊大量、炭化物含む）

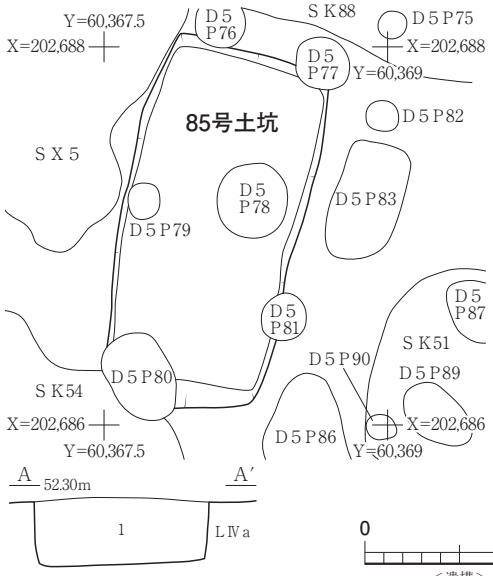
3　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト塊多量、炭化物微量）



84号土坑堆積土

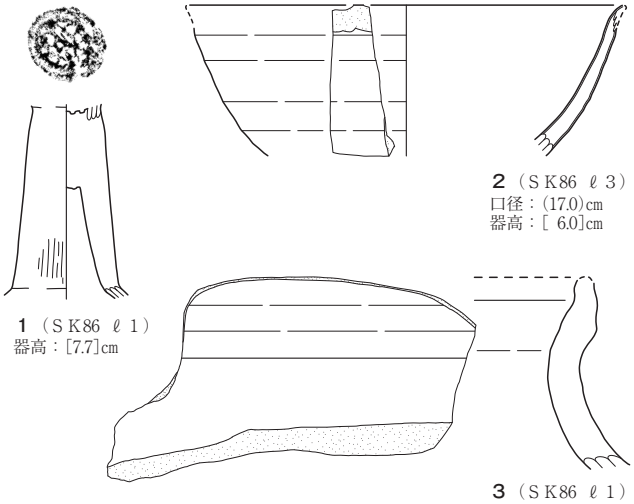
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物多量、焼土塊少量）

2　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト塊少量）



85号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト塊多量、炭化物少量）



1（SK86 ℓ1）
器高：[7.7]cm

2（SK86 ℓ3）
口径：(17.0)cm
器高：[6.0]cm

3（SK86 ℓ1）
口径：(34.8)cm
器高：[7.6]cm

0　1m　(1/40)
＜遺構＞

0　10cm　(1/3)
＜遺物＞

図33　84～87号土坑、86号土坑出土遺物

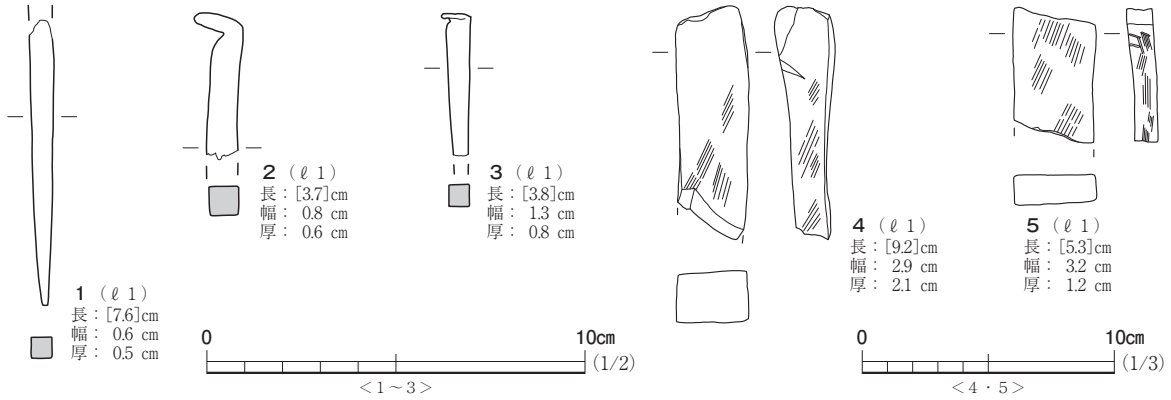


図34　86号土坑出土遺物

堆積土は３層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１・２は暗褐色砂質シルト、ℓ３はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルト塊を斑に多量含んでいる。

遺物は、土師器22点、陶器４点、磁器１点、石器２点、鉄製品７点の計36点が出土した。このうち８点を図示した。割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、口縁部を折り返した甕等があった。この他、胎土がＡ類の陶器甕２点とＥ類の陶器甕１点及び詳細不明の鉄製品の小片を割愛した。

図33－１は土師器高杯の脚部である。摩滅が著しいが、外面には縦方向のヘラミガキがわずかに残る。また、杯部との接合面で剝離しており、接合面には棒状工具による刺突が認められる。接合の強度を高める工夫とみられる。

図33－２は青磁の碗である。内外面には青緑色の釉薬が均質に掛かっている。口縁端部と底部を欠損するが、深い器形を呈する。外面には文様は認められないが、ロクロ目の稜線が明瞭に観察される。中国浙江省西部の龍泉窯の製品とみられる。

図33－３は陶器の甕の口縁部片である。口縁部は受け口状を呈し、端部は外上方につまみ上げられている。胎土はＥ類で、含有物は少なく、釉薬の付着は認められない。また、口縁端部は磨り減っており、破片となった本資料を砥石として利用していると考えられる。接合しないが、６号特殊遺構から出土した図43－１の資料と同一個体と思われる。

図34－１～３は鉄製の釘である。２・３では、折れ曲がった釘頭が遺存する。

図34－４・５は緑色凝灰岩製の砥石である。４は下半部が欠損した資料である。５は両端部とも欠損し、中央部分のみ遺存する資料である。４・５のいずれも端部を除いた四面が使用により平滑になっている。４では、端部が厚く、中央部が薄くなっており、よく使い込まれた形状を呈している。なお、４の上端部には打ち欠いた痕跡が認められるが、これは成形段階のものとみられる。４・５とも中砥であろう。

本遺構の性格については不明だが、堆積土中から青磁の碗が出土したことが特筆される。遺構の所属時期は、堆積土中から出土した青磁や陶器から中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

88号土坑　ＳＫ88（図35・36、写真26～29）

本遺構は、調査区中央やや東寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。58・66・67・86・87号土坑と５号特殊遺構及び多数の小穴と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。平面形は一辺4.8ｍ前後の隅丸方形を呈する。周壁は、急角度で立ち上がる。底面はやや凹凸があるものの概ね平坦である。

堆積土は３層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルト、ℓ２・３はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とし、前者はにぶい黄褐色砂質シルト塊、後者は暗褐色砂質シルト塊を斑に含んでいる。ℓ３は貼床土で、中央部分及び周壁付近を残して掘り下げられた掘形に堆積する。調査当初は貼床土と気付かずに掘り下げてしまい、記録の作成ができなかった箇所も多いが、土層断面図では堆積する範囲の想定復元も併せて示した。

本遺構の底面では８基の小穴（Ｐ１～８）を検出した。これらの小穴では柱痕は確認されなかったが、いずれも底面に根石が敷かれており、２間×２間の等間隔に並ぶことから、柱穴と考えられる。根石の位置から想定される柱間の間隔は、概ね1.20ｍ前後である。なお、柱穴から周壁までの距離も1.20ｍ前後の箇所が多い。

Ｐ１～６は二段に掘り込まれており、上端部での平面形や規模は一定しないが、実際に柱を据えた箇所は40～50㎝の円形を基調とした形状を呈している。遺構底面からの深さは、100～110㎝と揃っており、詳細に見ると東部のＰ３・４の方がやや深い。根石は、長軸30～40㎝、短軸20㎝前後、厚さ３～６㎝程度の偏平な石である。Ｐ２の根石は、東部に割れ面が観察されることから、東半部を割って大きさを他の根石と揃えた後で敷かれたものと推測される。Ｐ３の根石は、裏面に割れ面が観察されたため、本来はもっと厚みがあった石を割って偏平にしたと推測される。

一方、Ｐ７は長軸40㎝、短軸30㎝の隅丸長方形、Ｐ８は長軸52㎝、短軸28～36㎝の不整形を呈している。遺構底面からの深さは、Ｐ７が約68㎝、Ｐ８が約58㎝である。根石は、Ｐ８が長軸20㎝、短軸15㎝、厚さ２～３㎝の偏平な石であるのに対し、Ｐ７は長軸30㎝、短軸12～18㎝、厚さ９～11㎝の不整形な石で、上面は稜を持った部分と平坦な部分がある。

以上から、相対的に見ると、Ｐ１～６は平面規模が大きく深く掘り込まれているのに対し、Ｐ７・８は比較的平面規模が小さく浅く掘り込まれているといえる。また、根石についても、Ｐ１～６は平面規模が大きく形状も揃えられているのに対し、Ｐ７・８は平面規模がやや小さく、形状はＰ８のものは不整形であるという特徴がある。よって、北側柱列のＰ１～３と南側柱列のＰ４～６が主柱穴で、中央柱列のＰ７・８は補完的な柱穴と推測される。

柱穴の掘形内堆積土は、大半が遺構内堆積土のℓ１と同じ暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土である。柱が抜かれた後に埋められたと考えられる。なお、Ｐ１ℓ１とＰ４ℓ２はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とした層で、柱の周囲の掘形埋土である。

底面の中央部には、南北幅約70㎝、東西幅30～40㎝の範囲に、厚さ0.5㎝前後の炭化物が散布し

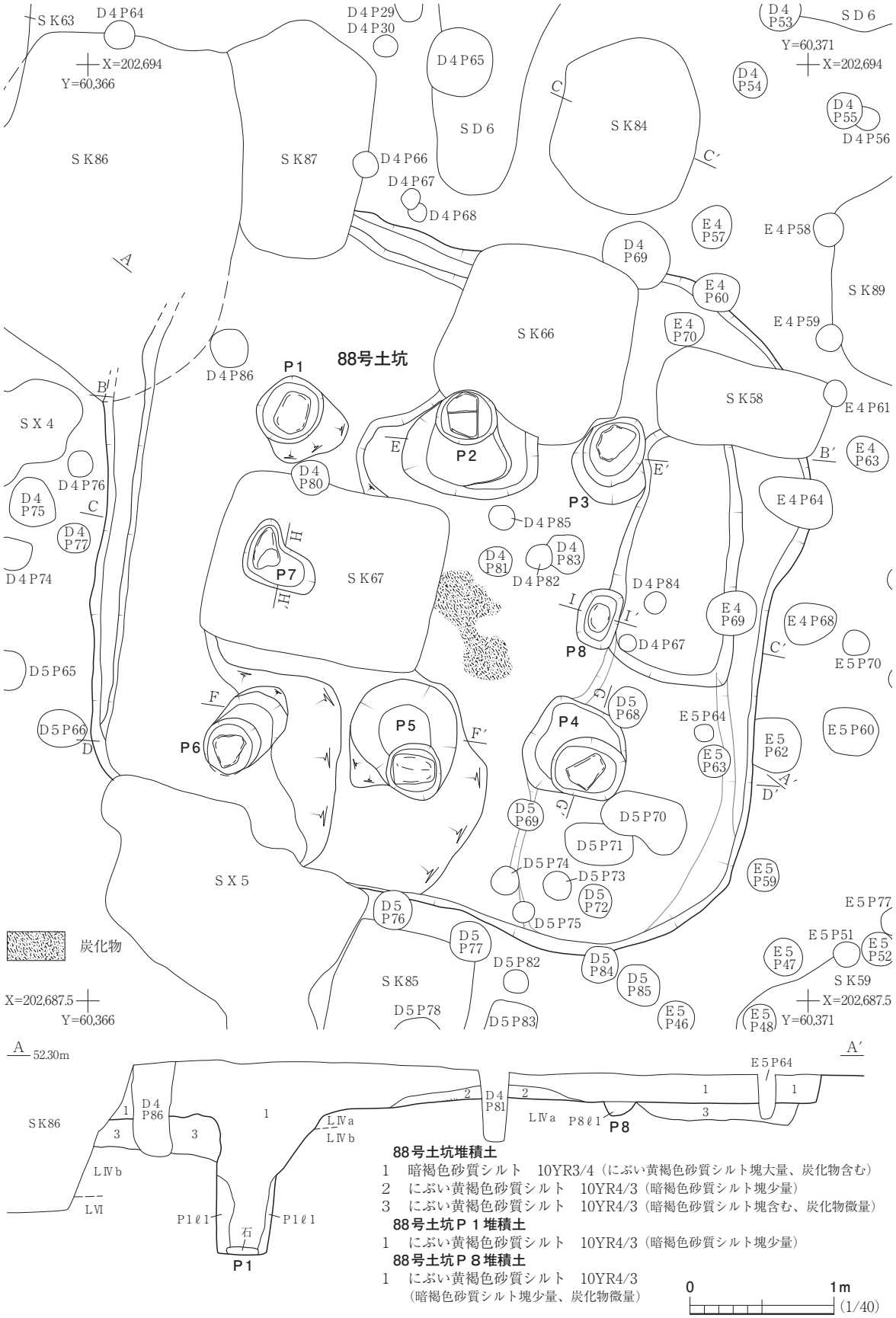

88号土坑
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
SK63
D4P64
X=202,694
Y=60,366
D4P29
D4P30
D4P65
SD6
SK84
D4P53
SD6
Y=60,371
X=202,694
D4P54
D4P55
D4P56
SK86
SK87
D4P66
D4P67
D4P68
E4P57
E4P58
D4P69
E4P60
SK89
E4P59
E4P70
SK66
D4P86
SK58
E4P61
SX4
E4P63
D4P76
D4P75
D4P77
D4P74
D4P80
D4P85
E4P64
D4P81
D4P83
D4P82
SK67
D4P84
E4P69
E4P68
D4P67
E5P70
D5P65
D5P68
E5P64
E5P60
D5P66
E5P62
E5P63
D5P69
D5P70
D5P71
D5P74
D5P73
D5P72
D5P75
E5P59
SX5
D5P76
E5P77
炭化物
D5P77
D5P82
E5P51
E5P52
E5P47
D5P84
D5P85
SK85
SK59
X=202,687.5
Y=60,366
D5P78
D5P83
E5P46
E5P48
X=202,687.5
Y=60,371
A
52.30m
A′
E5P64
SK86
D4P86
D4P81
LⅣa
LⅣb
P8ℓ1
P8
LⅥ
P1ℓ1
石
P1
88号土坑堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊大量、炭化物含む）
2　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト塊少量）
3　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト塊含む、炭化物微量）
88号土坑Ｐ１堆積土
1　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト塊少量）
88号土坑Ｐ８堆積土
1　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト塊少量、炭化物微量）
0
1m
(1/40)

図35　88号土坑（１）

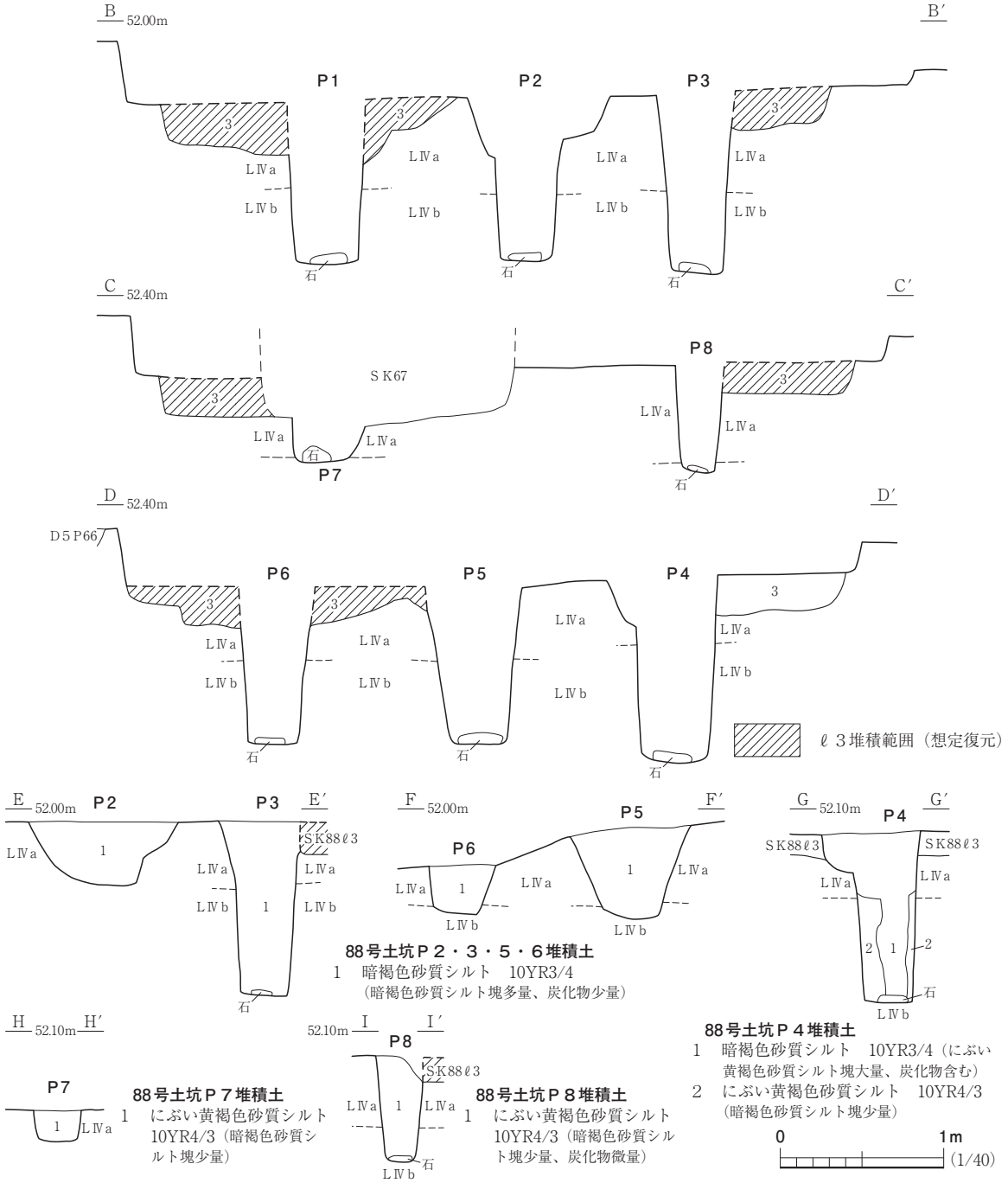


図36　88号土坑（２）

ていたが、炭化物を除去した底面に明瞭な被熱痕跡は確認できなかった。

遺物は、土師器41点、鉄製品１点の計42点が出土したが、細片のため割愛した。土師器は胎土の特徴からいずれも古墳時代前期の資料とみられ、鉄製品は用途不明の棒状を呈する小片である。

本遺構は、一辺4.8ｍ前後の隅丸方形を呈する大型の土坑である。底面には、根石が敷かれた２間×２間の等間隔に並ぶ柱穴が８基検出された。このことから、中世の方形竪穴建物跡と考えられる。また、柱穴の底面に根石を敷くのは、重量物を支えても柱が沈み込まない工夫とみられることから、本遺構は物資を収納する倉庫としての機能が想定される。

本遺構の所属時期を示す明確な遺物はないが、他の大型の土坑である60・70・71号土坑や２～６号溝跡と主軸方向が概ね一致することから、これらの遺構と関連して中世前期頃に機能していたと考えられる。（丹　治）

89号土坑　ＳＫ89（図32、写真24）

本遺構は、調査区東部の中央やや北寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。83・90号土坑とＥ４Ｐ58・59と重複し、古い方から90号土坑→83号土坑→89号土坑→Ｅ４Ｐ58・59の順につくられている。なお、本土坑は当初83号土坑と同一の遺構として調査を進めていた。このため、土層の記録を作成できなかったが、堆積土は83号土坑のℓ１と近似した暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土であった。

平面形は隅丸長方形を呈している。周壁は、東壁は垂直気味に立ち上がるが、西壁で二段となっている。底面は平坦で、砂層であるＬⅥ層が露出している。なお、遺物は出土しなかった。

本遺構は隅丸長方形を呈する土坑だが、具体的な性格については不明である。遺構の所属時期は、重複する83号土坑より新しいと判断されるが、堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有するため、大きな時期差はないと推測される。このことから、中世前期頃の所産と考えておきたい。（丹　治）

90号土坑　ＳＫ90（図32、写真24）

本遺構は、調査区東部の中央やや北寄りに位置する土坑である。検出面はＬⅣａ上面である。83・89号土坑と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。なお、本土坑は当初83号土坑と同一の遺構として調査を進めていた。このため、土層の記録を作成できなかったが、堆積土は83号土坑のℓ１と近似した暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土であった。

平面形は隅丸長方形を呈している。周壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。なお、遺物は出土しなかった。

本遺構は隅丸長方形を呈する土坑とした。当初、83号土坑のステップ状の段と想定したが、同土坑の底面との比高が80cm前後で、昇降用とするには段差がきつい。このため、別遺構として報告したが、具体的な性格については不明である。遺構の所属時期は、重複する83・89号土坑より古いと判断されるが、堆積状況が他の多くの中世前期頃の土坑と同様の特徴を有するため、大きな時期差はないと推測される。このことから、中世前期頃の所産と考えておきたい。（丹　治）

第５節　溝　跡

溝跡は６条確認した。このうち、２～６号溝跡は、主軸方向が概ね一致するという特徴が指摘される。そして、この主軸方向は１号建物跡及び大型の土坑である60・70・71・88号土坑とも概ね

一致する。このことから、これらの遺構と関連した区画溝としての性格が想定される。遺構の所属時期は、３・５号溝跡の出土遺物から中世前期頃と考えられる。また、１号溝跡についても、何らかの区画溝としての性格が想定される。

１号溝跡　ＳＤ１

遺　　構（図37、写真30）

本遺構は、調査区南東部のＥ５～７グリッドを縦断する溝跡である。検出面はＬⅣａ上面である。３・７～９・21号土坑と多数の小穴と重複するが、そのいずれよりも本遺構の方が古い。また、南端部は宅地造成に伴う工事により失われている。

本遺構の規模は、確認できた範囲での長さは14.8ｍである。検出面での幅は35～87㎝で、検出面からの深さは8～30㎝である。南に行くに従って幅が狭く、浅くなっている特徴が指摘されるが、底面の標高に差はないため、上部が開削を受けた結果とみられる。本来は同じ幅・深さでつくられていた可能性がある。断面形は、浅く緩やかな逆台形ないし底面中央が緩やかに窪む形状となっている。底面は多少の凹凸があるが概ね平坦である。主軸方向はＮ２°Ｗである。

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色シルト、ℓ２はにぶい黄褐色シルトを基調とする混土である。

遺　　物

遺物は、土師器29点が出土したが、細片のため図化できなかった。いずれも古墳時代前期のものとみられる。

ま と め

本遺構は南北方向に延びる溝跡である。２～６号溝跡とは主軸方向が合わないが、何らかの区画溝としての性格が想定される。遺構の所属時期は、出土遺物や中世前期に位置付けられる７号土坑より古いことから、大まかに古墳時代前期～中世前期頃としておきたい。（丹　治）

２号溝跡　ＳＤ２

遺　　構（図37、写真30）

本遺構は、調査区南東部のＤ５・６グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴群が点在し、南西には25号土坑が近接する。

本遺構の規模は、長さは1.98ｍ、検出面での幅は、45～59㎝である。断面形は、浅く緩やかな逆台形を呈する。また、底面は中央部に向かってやや窪むが、概ね平坦である。検出面から底面までの深さは13～21㎝である。主軸方向はＮ９°Ｅで、本遺構より北に約13ｍの位置には主軸方向が一致する６号溝跡がある。

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルト、ℓ２はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする混土である。

遺　　物

遺物は、土師器１点が出土したが、細片のため図化できなかった。判然としないが、胎土の特徴から古墳時代前期のものとみられる。

ま と め

本遺構は南北方向に延び、出土遺物から古墳時代前期以降と判断される溝跡である。また、主軸方向が３・５・６号溝跡や１号建物跡及び大型の土坑である60・70・71・88号土坑と概ね一致することから、これらの遺構と関連した区画溝としての性格が想定される。このため、中世前期頃の所産と推測される。　（丹　治）

図37　１・２号溝跡

３号溝跡　ＳＤ３

遺　　構（図38、写真31・32）

本遺構は、調査区北西部のＢ２～４及びＣ２・３グリッドを縦断する溝跡である。検出面はＬⅣａ上面である。32号土坑と重複し、本遺構の方が古い。また、東には１号建物跡、南には34号土坑が近接する。

調査当初は、幅の広い１条の溝跡と考えていたが、調査を進めるうちに３時期にわたって営まれていることがわかった。そのため、古いものから順に、３号溝跡(古)→３号溝跡(中)→３号溝跡(新)と呼称して報告する。

３号溝跡(古)は、最初につくられた幅が広い溝跡である。確認できた範囲での長さは19.3ｍである。北端部は重複する32号土坑により失われているが、調査区外まで続いていると推測される。検出面での幅は1.32～3.52ｍで、南部に比して北部の方が狭くなっている。検出面からの深さは８～35㎝で、底面は全体的に東に向かって緩やかに傾斜している。主軸方向はＮ11°Ｅである。

３号溝跡(古)の堆積土は、ℓ５・６の２層である。ℓ５の堆積要因は判然としないが、ℓ６は自然堆積とみられ、南部ではにぶい黄褐色シルト質砂と暗褐色砂質シルトが縞状に堆積している状況が観察された。

３号溝跡(中)は、３号溝跡(古)の東壁に沿った形で確認された溝跡で、途中で途切れるが一連の遺構と判断される。長さは、北部のものが6.86ｍ、南部のものが5.28ｍで、北端部から南端部までを測ると15.18ｍである。幅は概ね60～70㎝程度である。検出面からの深さは22～40㎝で、底面は全体的に南に向かって緩やかに傾斜している。主軸方向はＮ11°Ｅである。

３号溝跡(中)の堆積土はℓ３・４で、ℓ４の堆積要因は判然としないが、ℓ３は人為堆積土と判断した。ℓ３は暗褐色シルトを基調とするが、にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑状に含んでいる。なお、ℓ３は色調や含有物によりℓ３ａとℓ３ｂに細分した。ℓ３ａは北部、ℓ３ｂは南部に堆積している。また、３号溝跡(中)の中央部付近でＰ14～16が確認された。これらの小穴の堆積土は、いずれもℓ３ｂと近似した暗褐色砂質シルトの単層で、人為堆積土の可能性がある。

３号溝跡(新)は、３号溝跡(古)の中央部で確認された溝跡である。南部ではクランク状を呈している。溝跡内には、土坑状に窪む箇所が散見され、別々に掘り込んだ穴を連結してつくられたと推測される。このような作業工程を経たためか、底面には凹凸が目立ち、粗雑な印象を受ける。３号溝跡(古)の底面で検出した長さは8.1ｍだが、断面Ａ－Ａ′及びＢ－Ｂ′で北部にも延びていたことがわかり、そこまで含めると13.4ｍ以上を測る。幅は30～121㎝とばらつきがあるが、北部の方が狭い。検出面からの深さは８～41㎝で、底面は全体的に南に向かって緩やかに傾斜している。主軸方向はＮ11°Ｅである。

３号溝跡(新)の堆積土はℓ１・２で、ℓ１は色調や含有物によりℓ１ａ・ℓ１ｂ・ℓ１ｃに細分した。いずれも人為堆積土と判断される。また、３号溝跡(新)では、小穴が７基(Ｐ７～13)検出

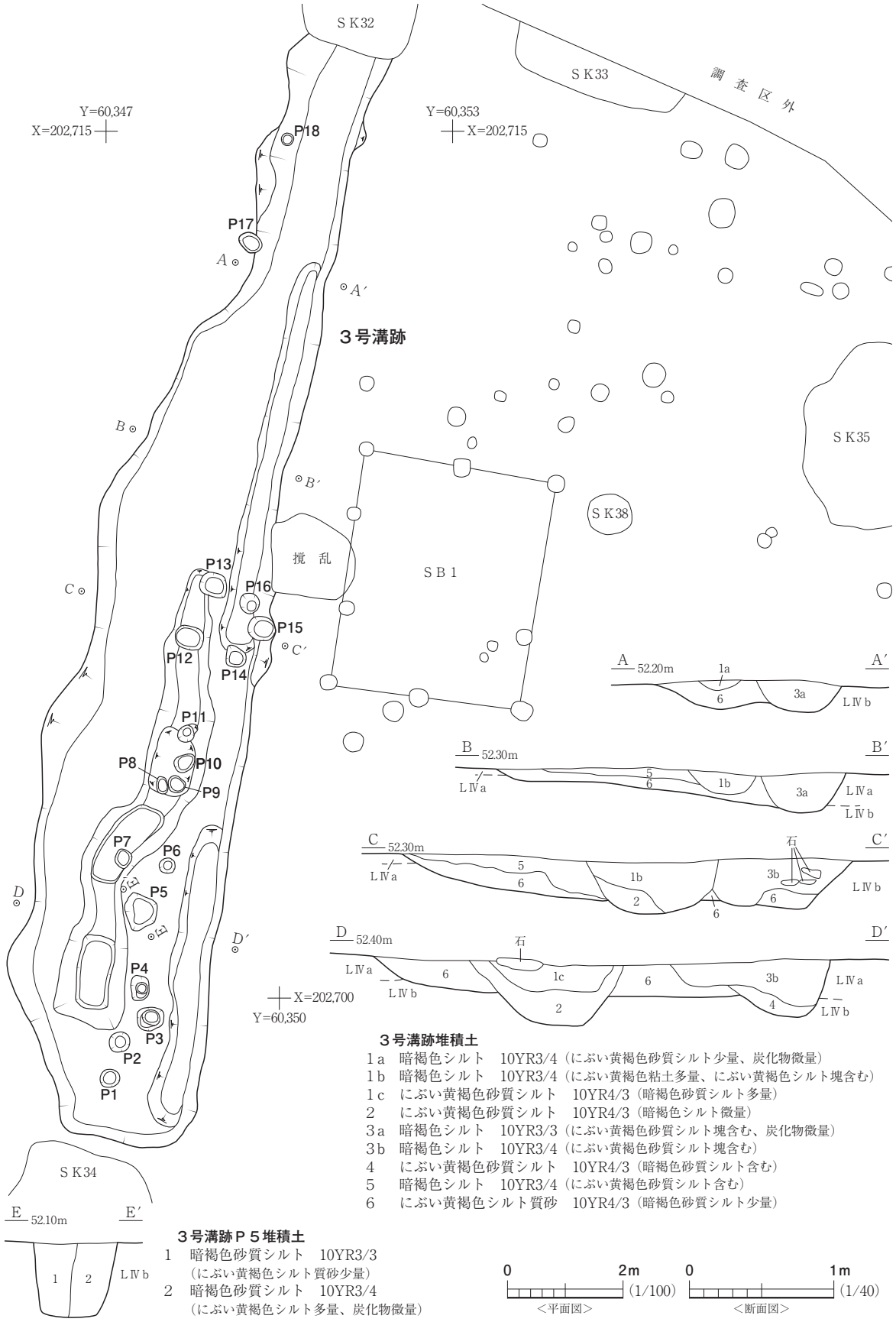

ＳＫ32
ＳＫ33
調査区外
Y=60,347
X=202,715
Y=60,353
X=202,715
P18
P17
A
A′
３号溝跡
B
B′
ＳＫ35
ＳＫ38
撹乱
ＳＢ１
C
C′
P13
P16
P15
P12
P14
P11
P8
P10
P9
P7
P6
P5
D
D′
P4
P3
P2
P1
X=202,700
Y=60,350
ＳＫ34
E
E′
52.10m
1
2
ＬⅣb
A
52.20m
A′
1a
6
3a
ＬⅣb
B
52.30m
B′
ＬⅣa
5
6
1b
3a
ＬⅣa
ＬⅣb
C
52.30m
C′
石
ＬⅣa
5
6
1b
3b
ＬⅣb
2
6
6
D
52.40m
D′
石
ＬⅣa
6
1c
6
3b
ＬⅣa
ＬⅣb
2
4
ＬⅣb
３号溝跡堆積土
1ａ　暗褐色シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト少量、炭化物微量）
1ｂ　暗褐色シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色粘土多量、にぶい黄褐色シルト塊含む）
1ｃ　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト多量）
2　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色シルト微量）
3ａ　暗褐色シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊含む、炭化物微量）
3ｂ　暗褐色シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト塊含む）
4　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト含む）
5　暗褐色シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト含む）
6　にぶい黄褐色シルト質砂　10YR4/3（暗褐色砂質シルト少量）
３号溝跡Ｐ５堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（にぶい黄褐色シルト質砂少量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/4
（にぶい黄褐色シルト多量、炭化物微量）
0
2m
(1/100)
＜平面図＞
0
1m
(1/40)
＜断面図＞

図38　３号溝跡

された。小穴の堆積土は、３号溝跡(新)堆積土のℓ２と近似している。このことから、小穴は廃絶の際に溝と同時に埋められたと考えられる。なお、小穴から柱痕は確認されなかったため、断定はできないが、機能時には布掘り状の溝を伴う柱が建てられていた可能性もある。

この他、小穴が計７基(Ｐ１～６・17・18)確認された。堆積土は、いずれもℓ３ｂやℓ５と近似した暗褐色砂質シルトで、含有物は少なく、堆積要因は判然としない。Ｐ５は２層に分層したが、これ以外は単層である。Ｐ５ℓ２は柱の周囲の掘形埋土で、ℓ１は柱のあった箇所に堆積した土とみられる。

遺　　物（図39、写真42）

遺物は、土師器122点、陶器７点、古銭３枚の計132点が出土した。層位毎の内訳は、ℓ１ｂが土師器14点、陶器３点、ℓ１ｃが土師器51点、古銭２枚、ℓ２が土師器４点、ℓ３ａが土師器21点、陶器１点、ℓ３ｂが土師器32点、陶器３点、Ｐ４ℓ１が古銭１枚である。このうち８点を図示した。図39－１・２が３号溝跡(中)、同図３～６が３号溝跡(新)、同図７がＰ４ℓ１から出土した資料である。なお、割愛した土師器は、いずれも古墳時代前期の資料とみられ、ハケメが施された甕の胴部や底部の破片も認められた。割愛した陶器は、いずれも甕の胴部片で、胎土がＡ類１点、Ｂ類２点、Ｆ類１点である。

１は底部が欠損する土師器鉢である。内外面とも摩滅が著しいが、口縁部にはわずかにユビオサエが観察される。

２は陶器の鉢である。口縁端部は若干外上方につまみ上げられ、端部の内側は沈線状に窪んでいる。口縁端部を中心に自然釉が掛かっている。胎土はＢ類で、長石を多量含んでいる。

３・４は陶器の捏ね鉢である。３は台が付いている資料で、内面は剝落している箇所もあるが、全体的に滑らかである。体部の外面には横方向のヘラケズリが施されている。胎土は黄灰色(2.5Y6/1)を呈し、粗い粒子が認められる。在地産の胎土とは明瞭に異なり、東海系の資料とみられる。４は体部下半の資料で、内面は滑らかになっている。胎土はＡ類で、長石を多量に、黒色粒子をわずかに含んでいる。

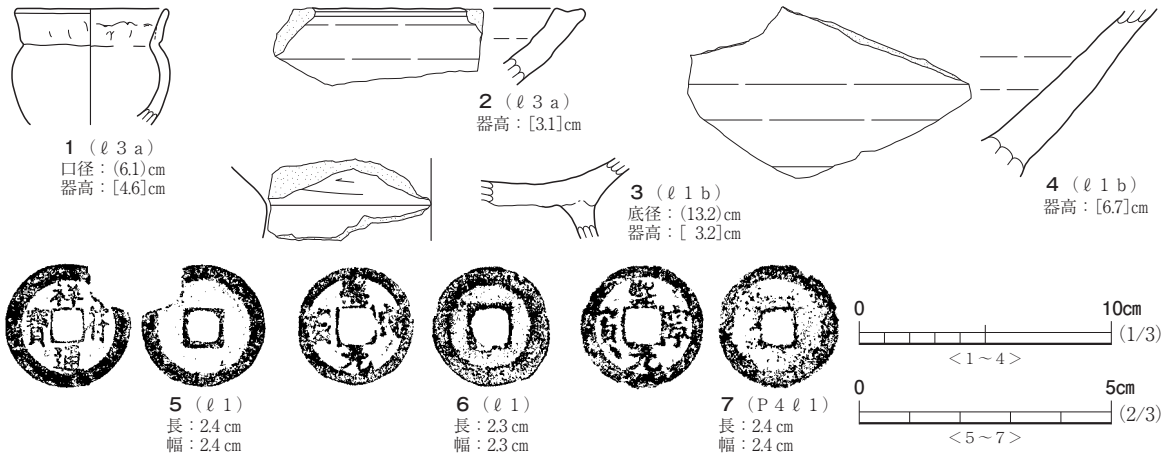


図39　３号溝跡出土遺物

５～７は北宋銭である。５・６はℓ１、７はＰ４ℓ１から出土した。５は「祥符通寶」（1008年初鋳）、６・７は「熙寧元寶」（1068年初鋳）である。

ま と め

本遺構は３時期にわたって営まれた南北方向に延びる溝跡である。主軸方向が２・５・６号溝跡や１号建物跡及び大型の土坑である60・70・71・88号土坑と概ね一致することから、これらの遺構と関連した区画溝としての性格が想定される。遺構の所属時期は、出土遺物から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

４号溝跡　ＳＤ４

遺　　構（図40、写真32）

本遺構は、調査区東部中央のＤ５・Ｅ５グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅣａ上面である。多数の小穴と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。また、北には51・59号土坑、南西には69号土坑、西には54号土坑が近接する。

本遺構の規模は、長さは3.87ｍで、検出面での幅は35～50㎝を測る。断面形は、浅く緩やかな逆台形を呈する。底面はやや凹凸が目立つ。検出面から底面までの深さは5～20㎝である。主軸方向はＮ83°Ｗである。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層である。にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑状に含むことから、人為堆積土と判断した。

遺　　物

遺物は、土師器23点が出土したが、細片のため図化できなかった。いずれも古墳時代前期のもので、外面にハケメが施された甕の胴部や底部の破片が認められた。

ま と め

本遺構は東西方向に延びる溝跡である。出土遺物から古墳時代前期以降の所産で、重複関係から小穴群よりは古いと判断される。また、主軸方向が６号溝跡と概ね一致することから、同溝跡と関連した区画溝としての性格が想定される。このため、中世前期頃の所産と推測される。（丹　治）

５号溝跡　ＳＤ５

遺　　構（図40、写真33）

本遺構は、調査区北東部のＥ３・４グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅣａ上面である。多数の小穴と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。また、西に2.8ｍには68号土坑があり、北西には２号特殊遺構が近接する。

本遺構の規模は、確認できた範囲での長さは6.98ｍで、さらに調査区外に続いている。検出面での幅は77～130㎝を測る。遺構北部では中央部分が中洲状に高くなっている等、底面は凹凸が目立ち、検出面から底面までの深さは4～32㎝とばらつきがある。主軸方向はＮ８°Ｅである。

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルト、ℓ２はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする混土である。

遺　　物

遺物は、土師器35点、陶器２点、鉄製品１点の計38点が出土したが、細片のため図化できなかった。土師器は古墳時代前期の資料の他、内面黒色処理が施された非ロクロ成形の杯の口縁部片が認められた。陶器は、２点とも甕の胴部で胎土はＡ類である。鉄製品は板状を呈するが、細片のため用途不明である。

ま と め

本遺構は南北方向に延びる溝跡である。主軸方向が２・３・６号溝跡や１号建物跡及び大型の土坑である60・70・71・88号土坑と概ね一致することから、これらの遺構と関連した区画溝としての性格が想定される。遺構の所属時期は、出土遺物から中世前期頃と考えられる。　（丹　治）

６号溝跡　ＳＤ６

遺　　構（図40、写真33）

本遺構は、調査区東部の中央やや北よりのＤ４・Ｅ４グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する他の遺構等により途切れる箇所があるが、延びる方向が同じで、規模も近似することから、同一の溝跡と判断した。63・65・76・83号土坑と４基の小穴と重複するが、そのいずれよりも本遺構の方が古い。

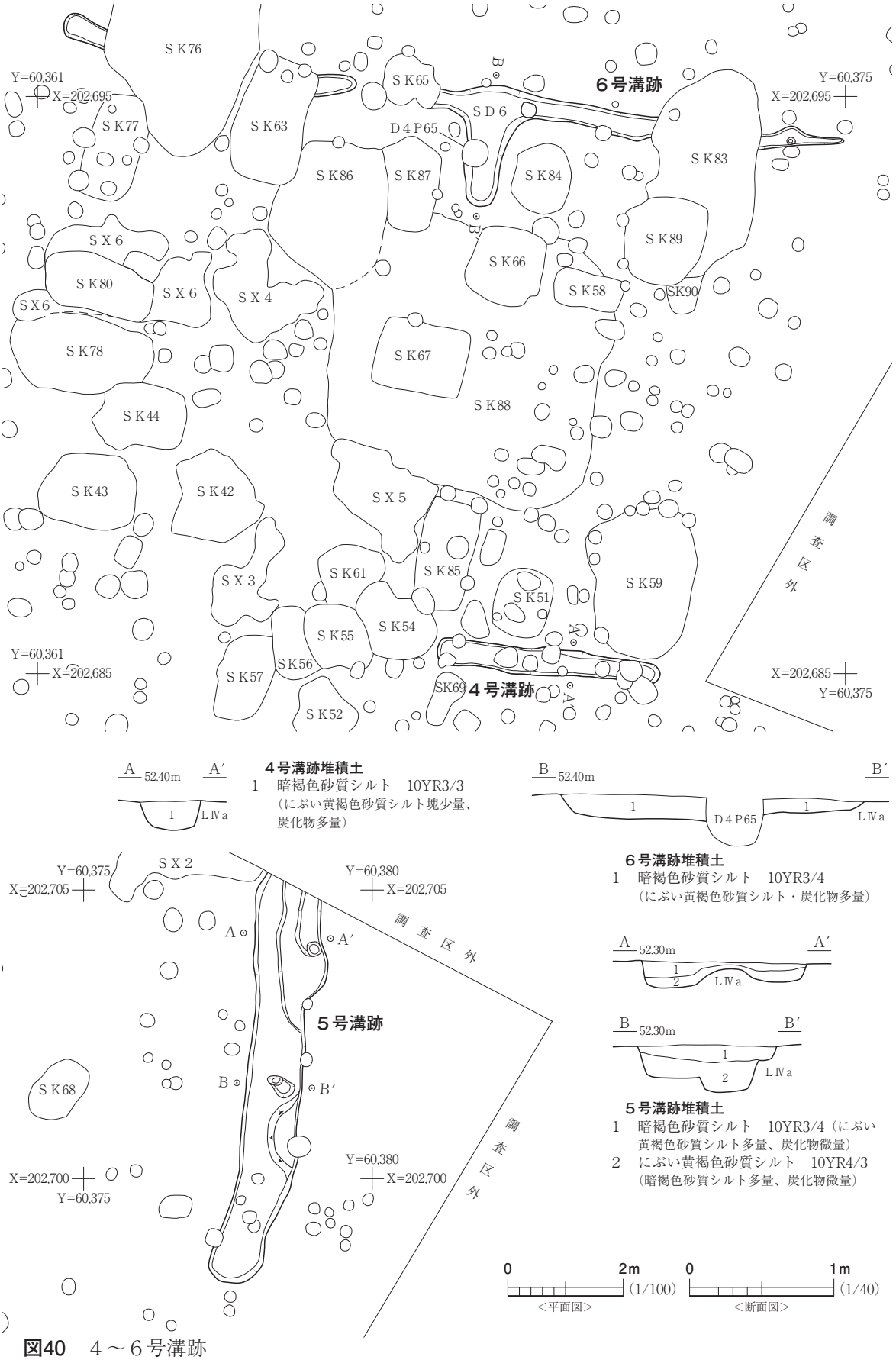
本遺構は「Ｔ」の字状を呈し、東西方向に延びる溝が13.7ｍと長く、中央部から南に延びる溝が2.1ｍと短い。検出面での幅は、東西方向の溝が概ね35㎝前後だが、東端部では13㎝と狭くなっている。一方、南に延びる溝は56～80㎝で、東西方向に比して幅が広い。検出面からの深さは６～17㎝と全体的に浅い。

断面形は、浅く緩やかな逆台形ないし底面中央が緩やかに窪む形状となっている。底面は多少の凹凸があるが概ね平坦である。主軸方向は、東西方向の溝を基準とするとＮ82°Ｗで、南北方向の溝を基準とするとＮ９°Ｅである。なお、本遺構より南に約13ｍの位置には南北の主軸方向が一致する２号溝跡がある。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層である。にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑状に多量含むことから、人為堆積土と判断した。なお、遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は「Ｔ」の字状を呈する溝跡である。出土遺物がなく、遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、重複する63・65・76・83号土坑や４基の小穴よりは古いと判断される。また、主軸方向が２～５号溝跡や１号建物跡及び大型の土坑である60・70・71・88号土坑と概ね一致することから、これらの遺構と関連した区画溝としての性格が想定される。このため、中世前期頃の所産と推測される。　（丹　治）



SK76
SK77
SK63
SK65
SD6
D4P65
SK86
SK87
SK84
SK83
SK89
SK66
SK58
SK90
SX6
SK80
SX4
SK78
SK67
SK88
SK44
SK43
SK42
SX5
SX3
SK61
SK85
SK51
SK59
SK55
SK54
SK56
SK57
SK52
SK69
4号溝跡
6号溝跡
Y=60,361
X=202,695
Y=60,375
X=202,695
Y=60,361
X=202,685
X=202,685
Y=60,375
調査区外
A 52.40m A′
1 LⅣa
4号溝跡堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（にぶい黄褐色砂質シルト塊少量、炭化物多量）
B 52.40m B′
1 D4P65 1 LⅣa
6号溝跡堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4
（にぶい黄褐色砂質シルト・炭化物多量）
SX2
Y=60,375
X=202,705
Y=60,380
X=202,705
調査区外
5号溝跡
SK68
Y=60,380
X=202,700
X=202,700
Y=60,375
調査区外
A 52.30m A′
1 2 LⅣa
B 52.30m B′
1 2 LⅣa
5号溝跡堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（にぶい黄褐色砂質シルト多量、炭化物微量）
2　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗褐色砂質シルト多量、炭化物微量）
0 2m (1/100)
＜平面図＞
0 1m (1/40)
＜断面図＞

図40　４～６号溝跡

第６節　特 殊 遺 構

特殊遺構は６基確認した。いずれも平面形が不整形で、具体的な性格は不明である。このうち、３・４・６号特殊遺構は、底面の凹凸が著しいという近似した特徴を持つ。所属時期は、出土遺物から１・４～６号特殊遺構が中世前期頃、２号特殊遺構が古代以降、３号特殊遺構が古墳時代前期以降と考えられるが、３号特殊遺構については、遺構の特徴が近似する４・６号特殊遺構と同様、中世前期頃の所産と推測される。

１号特殊遺構　ＳＸ１

遺　　構（図41）

本遺構は調査区南東部のＤ６・７グリッドに位置する。検出面はＬⅣａ上面である。26号土坑と小穴群と重複し、古い方から26号土坑→１号特殊遺構→小穴群の順につくられている。この他、東に1.5ｍには６号土坑や15号土坑、西に1.3ｍには20号土坑がある。また、周囲には多くの小穴が点在する。

遺構の北部は撹乱により失われているため、本来の規模は不明だが、確認できた範囲では、長軸4.40ｍ、短軸2.5ｍ以上の不整形を呈する。検出面からの深さは、東・南部では概ね15cm前後だが、西部では浅い箇所では約10cm、深い箇所では最大24cmである。

周壁及び底面は、東・南部と西部では異なっている。すなわち、東・南部では周壁は垂直気味に立ち上がり、底面は多少の凹凸はあるものの概ね平坦である。一方、西部では周壁は緩やかに傾斜し、底面は窪んでいる。

堆積土は暗褐色シルトの単層である。にぶい黄褐色シルト塊を斑状に多量含むことから、人為堆積土と判断した。

遺　　物（図41）

遺物は、ℓ１から土師器26点、陶器３点、石器１点の計30点が出土した。このうち、陶器１点を図41に示した。割愛した陶器は、いずれも甕の小片で、胎土がＡ類とＣ類のものが各１点ずつである。また、土師器は古墳時代前期の破片が大半だが、後期～終末期の甕の口縁部片も１点確認された。

１は陶器の捏ね鉢である。体部下半～底部にかけての資料で、内面は良く使用され全体が滑らかになっている。胎土はＢ類である。

ま と め

本遺構は、竪穴住居跡の可能性も考慮したが、平面形が歪んでおり、西部では明確な壁の立ち上がりが確認されず、底面は窪む箇所もあること等から、性格は不明と言わざるを得ない。遺構の所属時期は、出土遺物の特徴から中世前期頃と考えられる。（丹　治）

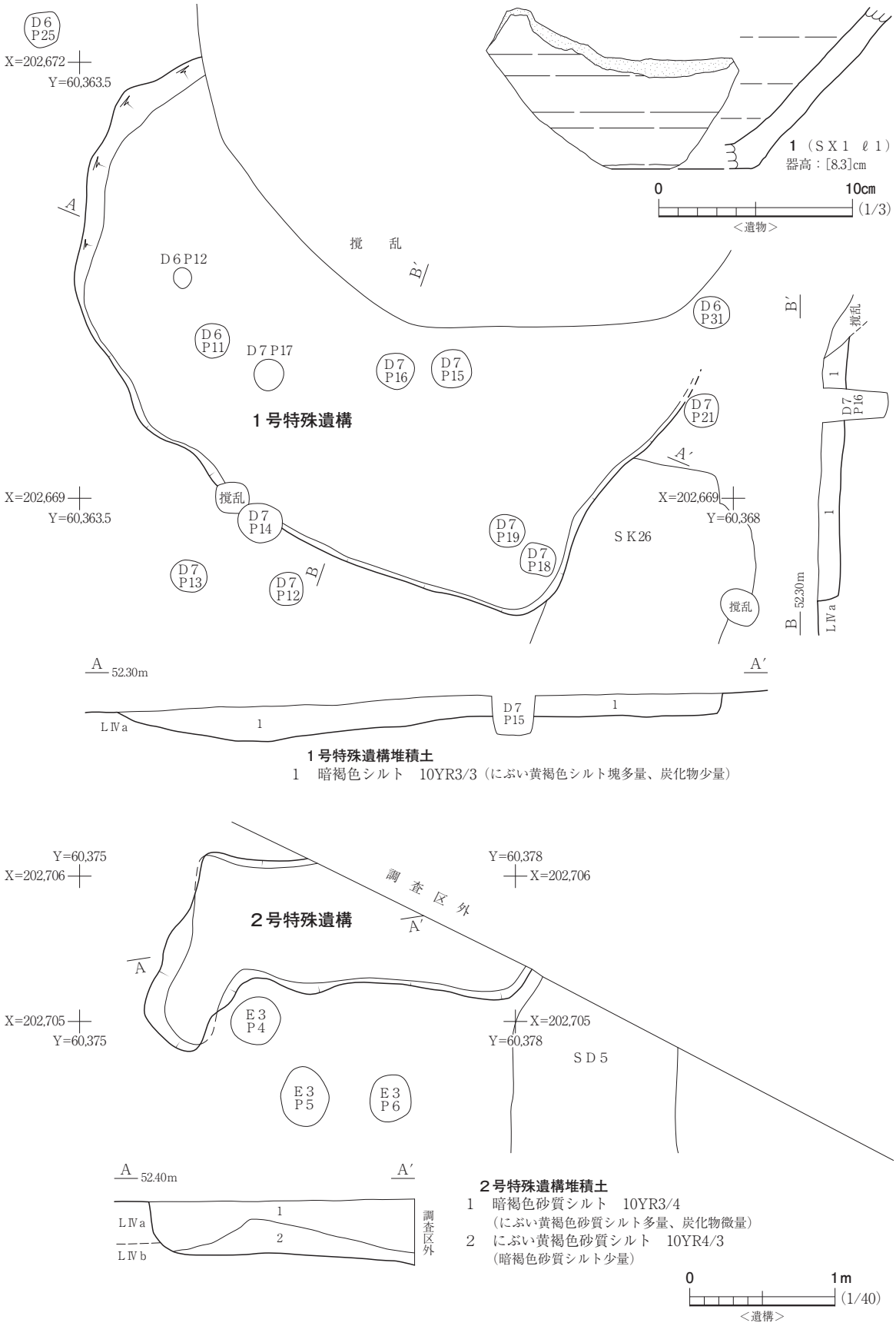


図41　１・２号特殊遺構、１号特殊遺構出土遺物

２号特殊遺構　ＳＸ２

遺　　構（図41）

本遺構は調査区北東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴群が点在し、東に近接して５号溝跡、南に３ｍには68号土坑、南西に３ｍには60号土坑がある。

遺構の北部は調査区外のため、全体の規模は不明だが、確認できた範囲では東西長2.5ｍ、南北長1.36ｍである。北西部で屈曲する不整な形状で、幅は南北で90㎝前後、東西で50～60㎝程度である。周壁は概ね垂直気味に立ち上がるが、北西部と南部で若干抉れている。底面はやや凹凸があり、東端部が低くなっている。

堆積土は２層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は暗褐色砂質シルト、ℓ２はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする混土である。

遺　　物

遺物は、ℓ１から土師器10点と鉄製品１点の計11点が出土したが、細片のため図化できなかった。土師器は古墳時代前期のものが多いが、内面黒色処理を施した杯も確認された。鉄製品は板状を呈するが、細片のため用途不明である。

ま と め

本遺構は、北西部で屈曲する不整な形状を呈する。遺構の性格については不明だが、所属時期は出土遺物から古代以降と考えられる。（丹　治）

３号特殊遺構　ＳＸ３

遺　　構（図42）

本遺構は調査区中央やや東寄りのＤ５グリッドに位置する。検出面はＬⅣａ上面である。検出面では、重複する遺構は確認されなかったが、南東部で56号土坑と近接している。この他、周囲には多数の土坑や小穴群が分布している。また、北に３ｍには４号特殊遺構がある。

平面形は不整形を呈し、長軸2.04ｍ、短軸1.22ｍである。断面及び底面の形状は凹凸が著しく、検出面からの深さは18～77㎝である。また、遺構北部の深い箇所ではＬⅣｂを40㎝前後掘り込んでいる。

堆積土は暗褐色砂質シルトを基調とする単層で、にぶい黄褐色砂質シルトを斑状に多量含むことから、人為堆積土と判断した。

遺　　物（図42）

遺物は、ℓ１から土師器110点が出土した。いずれも古墳時代前期の破片である。このうち、２点を図示した。

図42－１・２は土師器甕である。１は口縁部～頸部にかけての資料で、頸部は「く」の字状に屈

曲し、口縁部が外反する。外面調整は斜め方向のハケメの後にヨコナデ、内面調整は横方向主体のハケメである。２は底部片で、外面の胴部下端にはハケメ、内面にはヘラミガキが施されている。

ま と め

本遺構の性格は不明だが、平面形が不整形で、断面及び底面の形状が凹凸著しく、４号特殊遺構と近似した特徴を持つ。このため、同遺構と同様の性格を有するとみられる。遺構の所属時期については、出土遺物から古墳時代前期以降と考えられるが、４号特殊遺構と同様、中世前期頃の所産と推測される。（丹　治）

４号特殊遺構　ＳＸ４

遺　　構（図42、写真34）

本遺構は調査区中央やや東寄りのＤ４グリッドに位置する。検出面はＬⅣａ上面である。検出面では、重複する遺構は確認されなかったが、周囲には86・88号土坑や６号特殊遺構や小穴群が近接している。また、南に３ｍには４号特殊遺構がある。

平面形は不整形を呈し、南北長・東西長とも1.96ｍ前後である。断面及び底面の形状は凹凸が著しく、検出面からの深さは12～83㎝である。また、遺構南部の深い箇所ではＬⅣｂを48㎝前後掘り込んでいる。

堆積土は３層に分層し、いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は黒褐色砂質シルトを基調とし、にぶい黄褐色砂質シルトを斑状に多量含んでいる。柱穴状に堆積するため、本遺構よりも新しい小穴が重複している可能性もあるが、確証は得られなかった。ℓ２・３は暗褐色砂質シルトを基調とする混土で、含有物の特徴によって細分した。

遺　　物

遺物は、ℓ１から土師器31点、陶器１点、鉄製品１点の計33点が出土したが、細片のため図化できなかった。土師器は古墳時代前期とみられる資料で、陶器は甕の肩部で胎土はＡ類である。鉄製品は板状を呈するが、細片のため用途不明である。

ま と め

本遺構の性格は不明だが、平面形が不整形で、断面及び底面の形状が凹凸著しく、３号特殊遺構と近似した特徴を持つ。このため、同遺構と同様の性格を有するとみられる。遺構の所属時期は、出土遺物から中世前期頃の所産と推測される。（丹　治）

５号特殊遺構　ＳＸ５

遺　　構（図42、写真34）

本遺構は調査区中央やや東寄りのＤ５グリッドに位置する。検出面はＬⅣａ上面である。88号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。この他、東には85号土坑、南には54号土坑、南西には61号土坑が近接する。

平面形は不整形を呈し、長軸2.35ｍ、短軸1.46ｍである。検出面からの深さは13～94㎝で、底面は東側に向って緩やかに傾斜している。周壁は、垂直気味に立ち上がるが、南東壁では若干抉れている。また、遺構東部の深い箇所ではＬⅣｂを40㎝前後掘り込んでいる。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層である。にぶい黄褐色砂質シルト塊を斑状に多量含むことから、人為堆積土と判断した。

遺　　物

遺物は、ℓ１から土師器18点、須恵器２点、陶器１点の計21点が出土したが、細片のため図化できなかった。土師器は古墳時代前期とみられる資料の他、内面黒色処理が施された非ロクロ成形

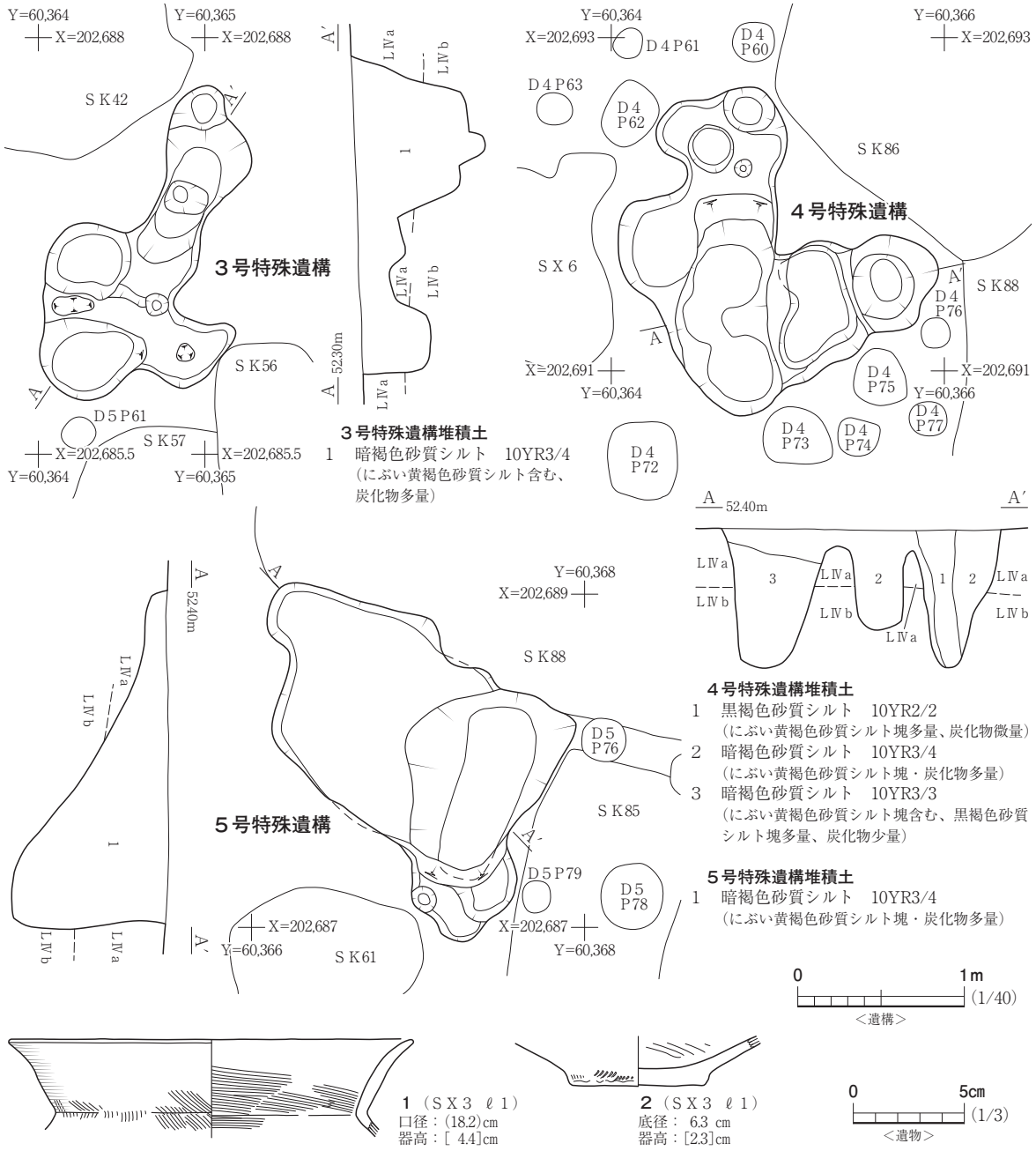


図42　３～５号特殊遺構、３号特殊遺構出土遺物

の杯があった。須恵器は甕で、外面には平行タタキ目が観察される。陶器は、甕の頸部片で胎土はＣ類である。

ま と め

本遺構は、平面形が不整形で、底面も東側に向って緩やかに傾斜する特徴を有するが、性格は不明である。遺構の所属時期は、出土遺物から中世前期頃の所産と推測される。　（丹　治）

６号特殊遺構　ＳＸ６

遺　　構（図43）

本遺構は調査区中央やや東寄りのＤ５グリッドに位置する。検出面はＬⅣａ上面である。78号土坑と80号土坑と重複するが、この２基の土坑よりも本遺構の方が新しい。この他、周囲には小穴群、北には77号土坑、東には４号特殊遺構が近接する。

平面形は不整形を呈し、長軸3.08ｍ、短軸1.56ｍである。断面及び底面の形状は凹凸が著しく、特に遺構東部で顕著である。ただ、柱穴のような形状をする箇所もあることから、重複する別な小穴があった可能性は否定できない。検出面からの深さは15～90㎝である。

堆積土は暗褐色砂質シルトを基調とする単層で、にぶい黄褐色砂質シルトを斑状に多量含むことから、人為堆積土と判断した。

遺　　物（図43）

遺物は、ℓ１から土師器50点、陶器２点、鉄製品３点の計55点が出土した。このうち、陶器

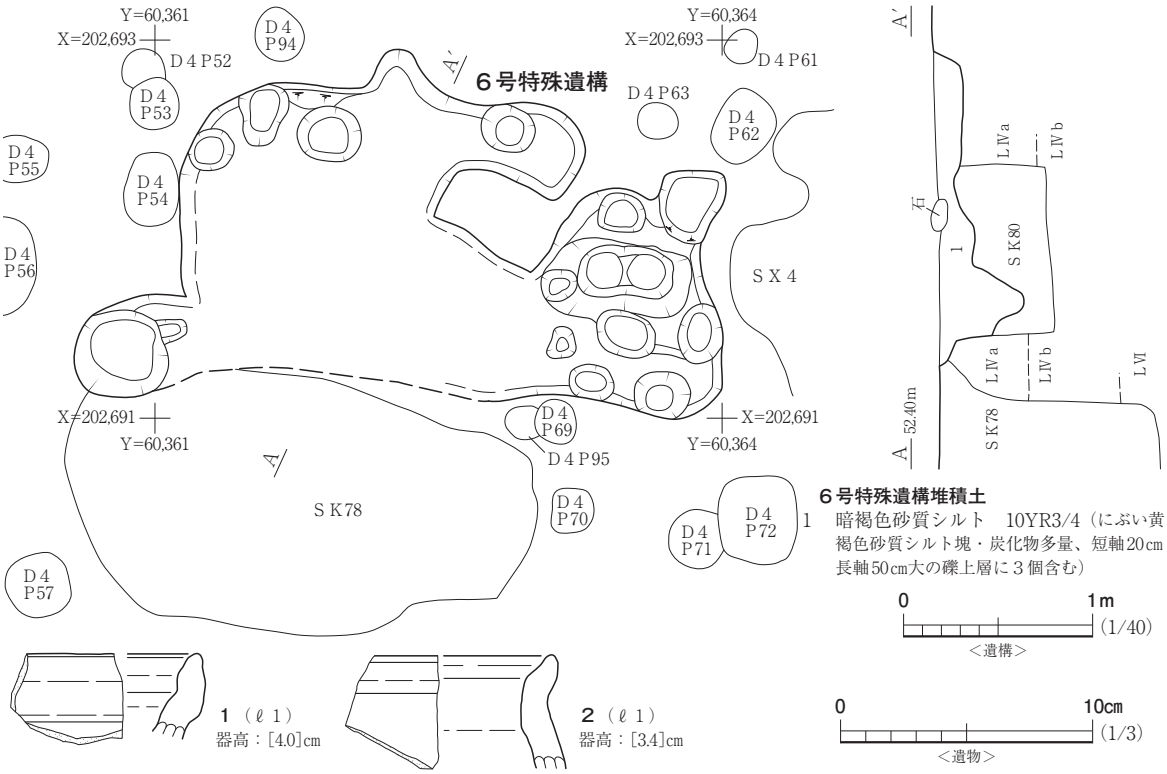


図43　６号特殊遺構・出土遺物

２点を図43に示した。割愛した土師器は古墳時代前期の資料とみられる。鉄製品のうち１点は磬で、80号土坑から出土した資料と接合した(図30－11)。本来、80号土坑の埋土に含まれていたと判断されるため、同土坑の項目で報告した。他の２点の鉄製品は用途不明で、１点は棒状、もう１点は不整形を呈する。

図43－１・２は陶器の甕の口縁部片である。いずれも口縁部は受け口状を呈し、口縁端部は１が外上方、２が真上につまみ上げられている。胎土は、１が含有物の少ないＥ類、２が長石を多く含むＡ類である。また、１は釉薬の付着は皆無だが、２は内外面に自然釉が掛かっている。

ま と め

本遺構の性格は不明だが、平面形が不整形で、断面や底面の形状が凹凸著しく、３・４号特殊遺構と近似した特徴を持つ。このため、これらの遺構と同様の性格を有するとみられる。遺構の所属時期は、出土遺物から中世前期頃の所産と推測される。（丹　治）

第７節　小　穴　群

遺　　構（図44～52、写真35～38）

検出した小穴は882基である。小穴はグリッド毎に番号を付け、表２に長軸(cm)、短軸(cm)、深さ(cm)、堆積土等の所見をまとめた。また、他の遺構と重複するものは、備考欄に「古い遺構→新しい遺構」の順で示した。

図44　小穴群全体図

小穴は、３号溝跡の西側及び旧河道へと緩やかに傾斜する調査区南西部を除いた箇所に分布し、特にＣ４・５、Ｄ４・５、Ｅ４・５グリッドに集中している。小穴が３号溝跡より西側では検出されていないことは、同溝跡が区画溝としての性格を有していたことを反映していると推測される。

遺構検出面は、いずれもＬⅣａ上面である。これらの小穴の平面形は円形ないし歪んだ円形が多いが、楕円形や不整形を呈するものも認められた。小穴の径は10cm前後のものから65cm前後とばらつきが見られるが、概ね20～35cm程度のものが多い。検出面からの深さは、浅いものでは10cm以下、深いものでは最大80cmのものもある。

調査区外
SD3
SB1
SK35
SK38
SK72
SK36
SK75
撹乱
撹　乱
B2 C2
B3 C3
C2 D2
C3 D3
B3 C3
B4 C4
C3 D3
C4 D4
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P41
P42
P46
P47
P48
P49
P62
P63
P64
P65
P70
0
2m
(1/80)

図45　小穴群①

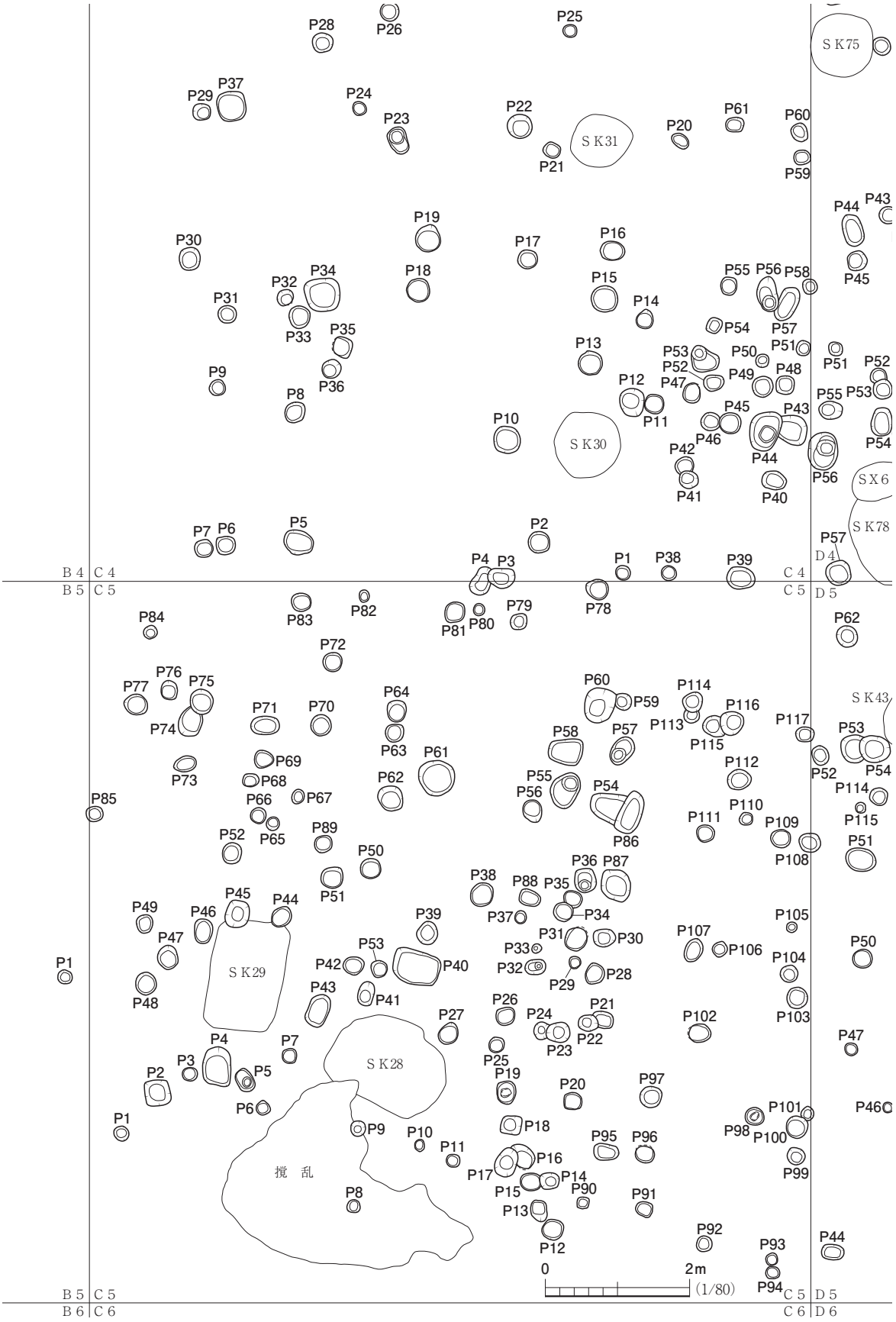

SK75
SK31
SK30
SX6
SK78
SK43
SK29
SK28
撹　乱
B4 C4
B5 C5
B6 C6
C4 D4
C5 D5
C6 D6
0
2m
(1/80)

図46　小穴群②

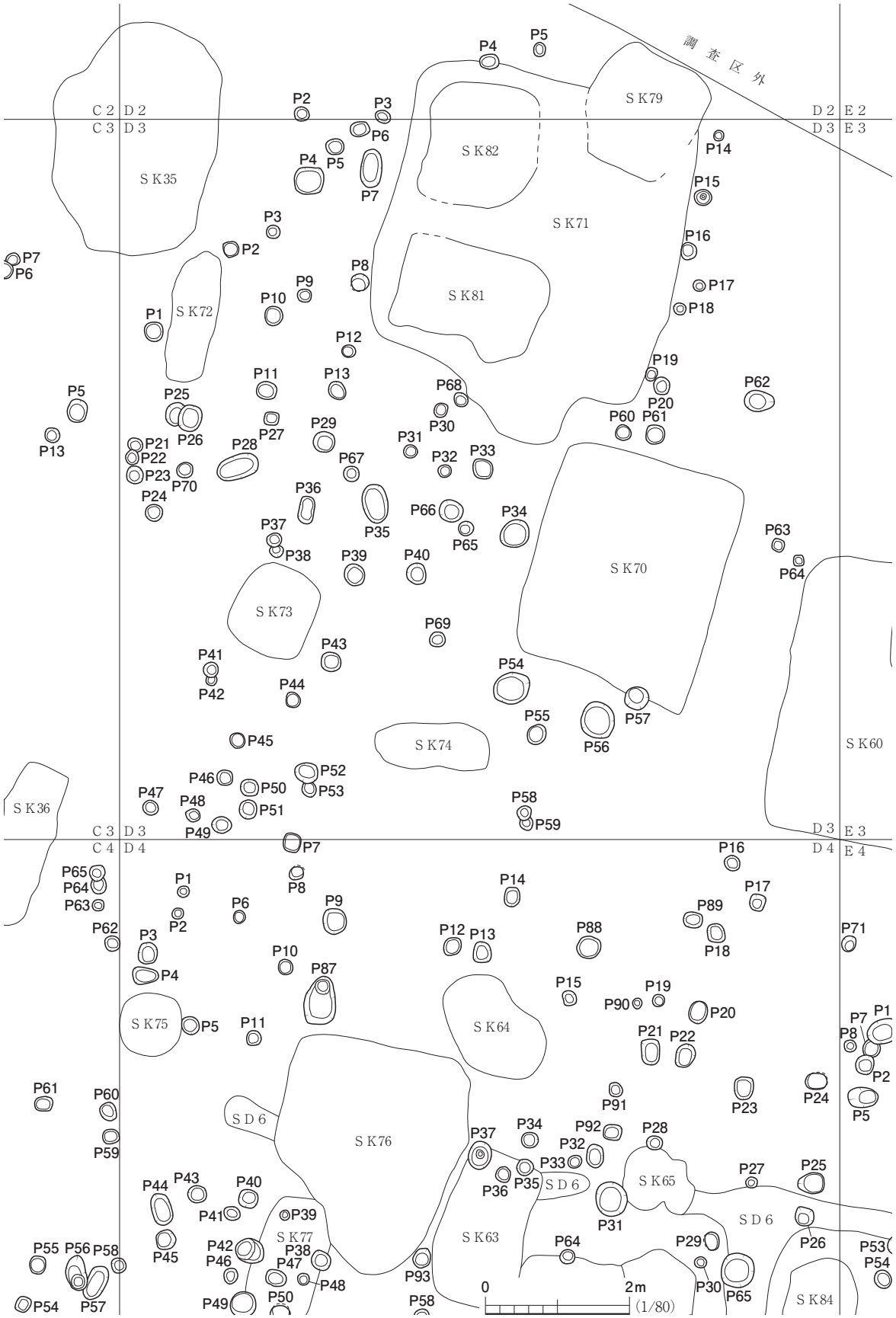

調査区外
C2 D2
C3 D3
D2 E2
D3 E3
C3 D3
C4 D4
D3 E3
D4 E4
SK35
SK72
SK82
SK79
SK71
SK81
SK70
SK73
SK74
SK60
SK36
SK75
SK64
SK76
SD6
SK65
SK77
SK63
SK84
0
2m
(1/80)

図47　小穴群③

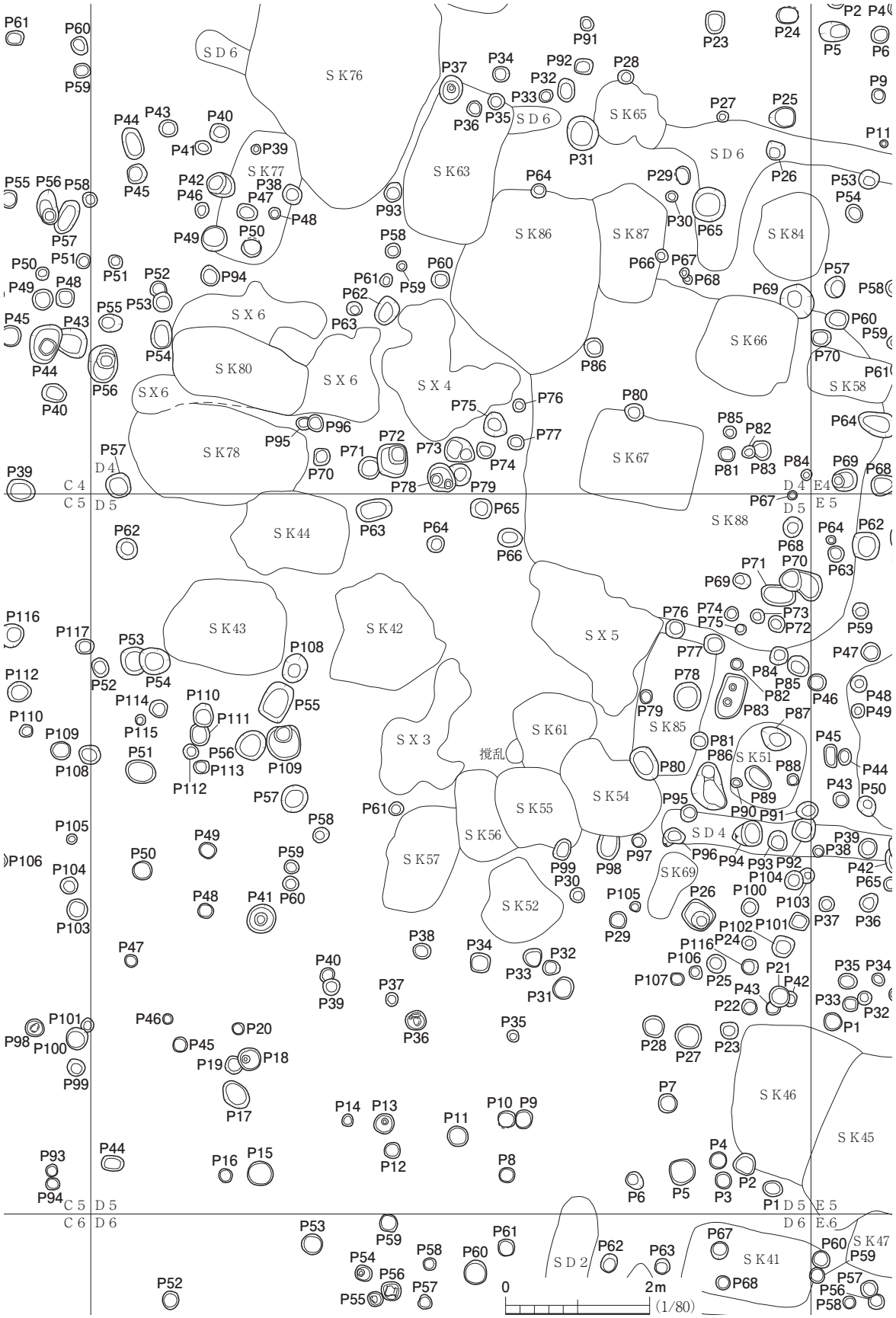

SD6
SK76
SK77
SK63
SK65
SK86
SK87
SK84
SK66
SK58
SX6
SK80
SX4
SK78
SK67
SK44
SK88
SK43
SK42
SX5
SX3
SK61
SK85
SK51
SK55
SK54
SK56
SK57
SK52
SD4
SK69
SK46
SK45
SK41
SD2
SK47
撹乱
C4
C5
C6
D4
D5
D6
E4
E5
0
2m
(1/80)

図48　小穴群④

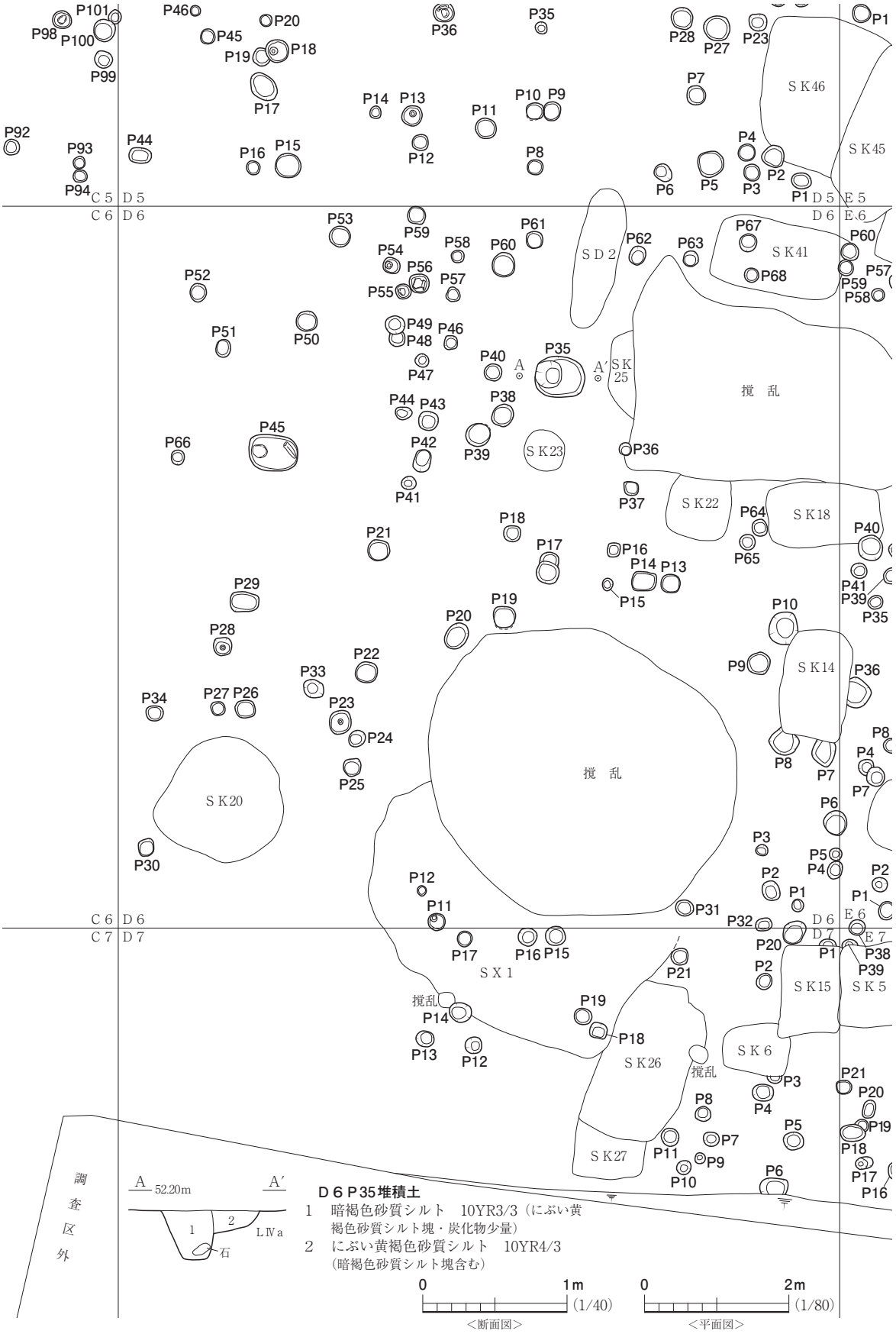

SK46
SK45
SK41
SD2
SK25
SK23
SK22
SK18
SK14
SK20
SK15
SK5
SK6
SK26
SK27
SX1
撹乱
調査区外
C5 D5
C6 D6
C7 D7
D5 E5
D6 E6
D7 E7
A 52.20m A′
1
2
LⅣa
石
D６P35堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（にぶい黄褐色砂質シルト塊・炭化物少量）
2　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（暗褐色砂質シルト塊含む）
0 1m (1/40)
＜断面図＞
0 2m (1/80)
＜平面図＞

図49　小穴群⑤

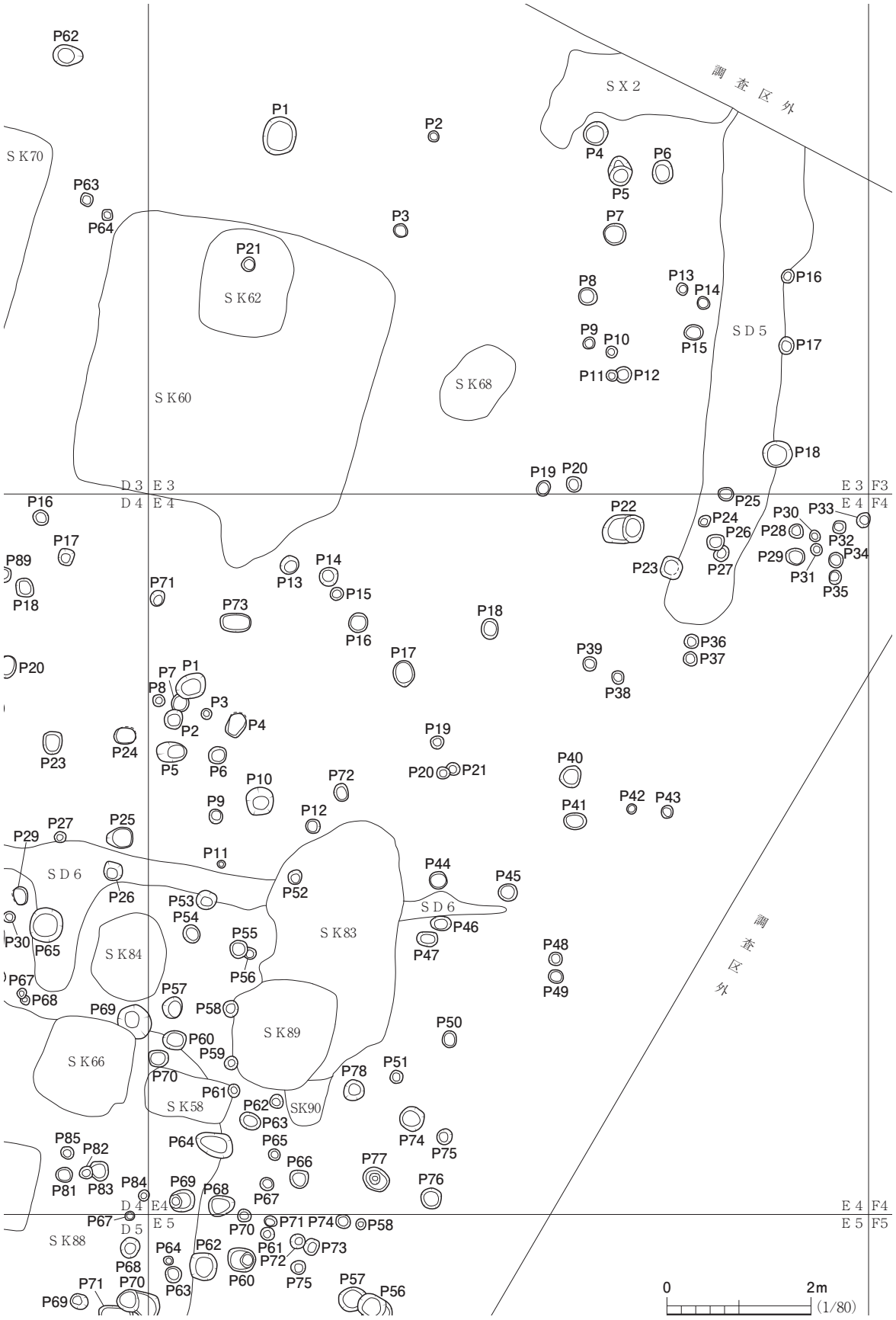

SX2
調査区外
SK70
SK62
SK60
SK68
SD5
SD6
SK83
SK84
SK89
SK66
SK58
SK90
SK88
D3 E3
D4 E4
D5 E5
E3 F3
E4 F4
E5 F5
0
2m
(1/80)

図50　小穴群⑥

SK66
SK58
SK90
SK67
SK88
SX5
SK85
SK51
SK59
SK54
SD4
SK69
SK53
SK49
SK50
SK48
SK46
SK45
SD2
SK41
SK47
SK24
SK25
SK22
SK18
SK21
SK17
SD1
SK14
SK13
SK11
D4
E4
D5
E5
D6
E6
撹乱
調査区外
0
2m
(1/80)

図51　小穴群⑦

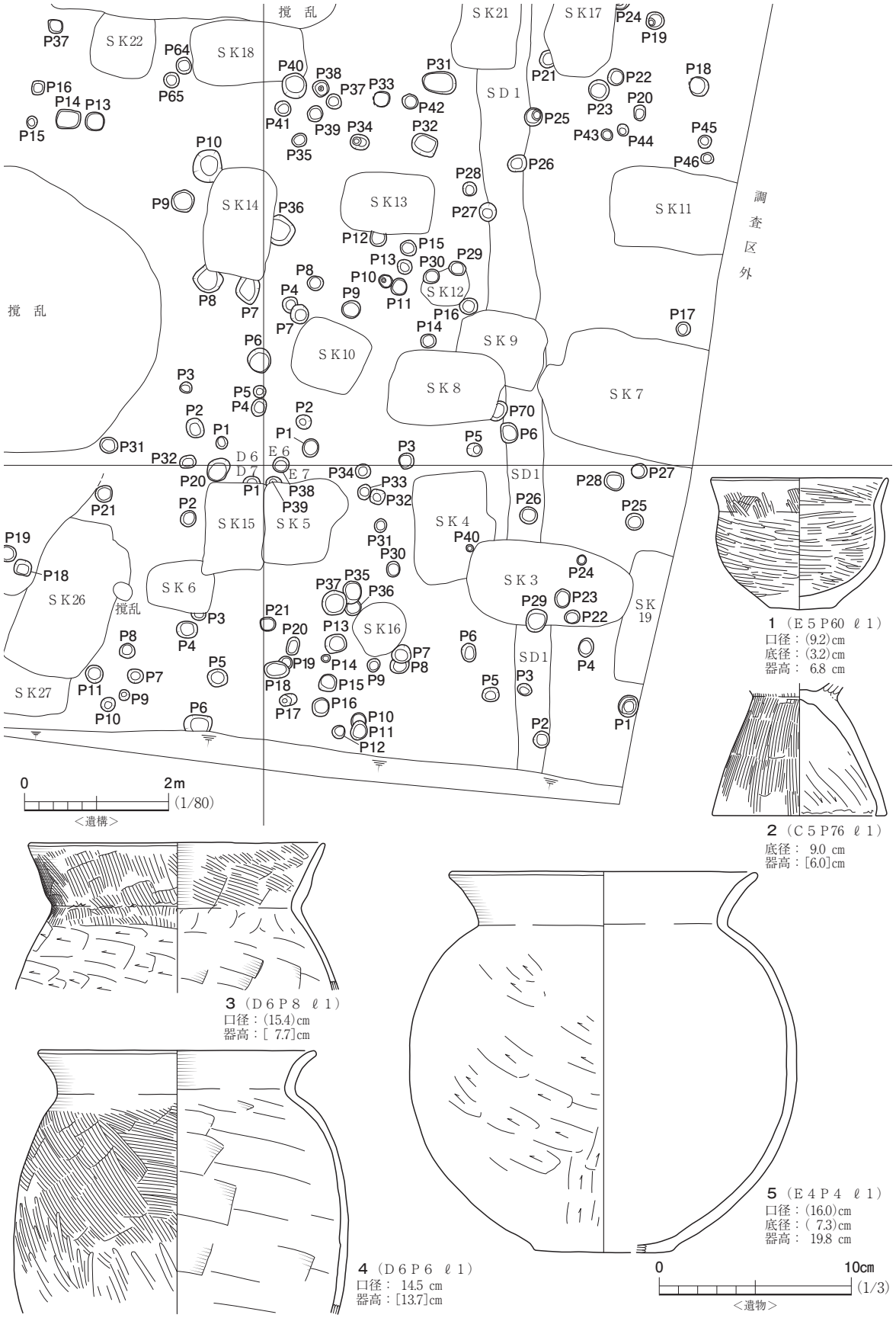


図52　小穴群⑧、小穴群出土遺物

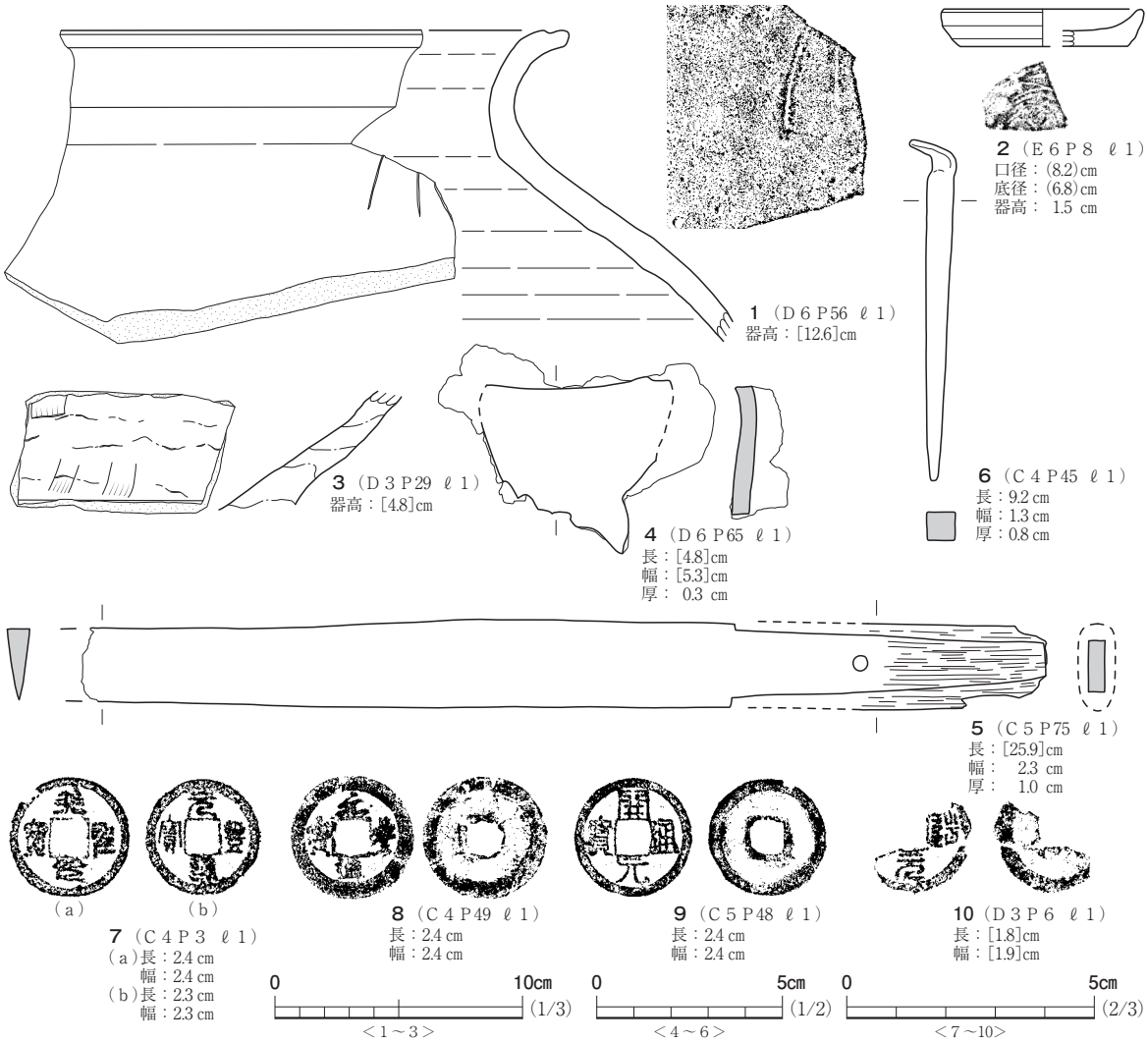


図53　小穴群出土遺物

堆積土は、ほとんどが暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土の単層で構成され、暗褐色砂質シルト主体のものをＡ、にぶい黄褐色砂質シルト主体のものをＢ、ＡとＢの中間的なものをＣと記号化した。この他、黒褐色砂質シルトと暗褐色砂質シルトの混土がわずかに確認されたため、これをＤとした。含有物に関しては、炭化物粒を１、焼土粒を２、礫を３とし、含有物が多量の場合は〇数字とすることとした。表２には、これらの組み合わせで堆積土の特徴を示した。

小穴の大半は、柱が抜かれた後に人為的に埋められたものと推測され、柱痕が確認されたものはなかった。なお、Ｄ６Ｐ35は２層に分層され、ℓ１は柱が抜かれた後の埋土で、ℓ２は柱の周囲の掘形埋土とした。他にＤ６Ｐ35と同様の堆積状況を示すものは、Ｅ６Ｐ31とＥ７Ｐ１の２基確認された。また、Ｃ２Ｐ７、Ｃ５Ｐ19・98、Ｄ５Ｐ36、Ｄ６Ｐ55、Ｅ５Ｐ17では、底面から根石が確認された。

なお、Ｃ４Ｐ３・49、Ｃ５Ｐ48・75、Ｄ３Ｐ６の５基からは古銭が出土し、埋納かとも思われた。ただし、いずれも柱が抜かれた後の人為的な埋土に混ざって出土しており、建物の造営に伴う地鎮として埋められたと積極的に判断できる出土状況のものはなかった。とはいえ、Ｃ５Ｐ75の

表２－１　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　　考
Ｂ５	1	21.5	19	18	C	
Ｃ２	1	22	20	18	C	
	2	42	40	42	C	
	3	30	29	68	C	
	4	19	17	12	C	
	5	25	23	20	C	
	6	20	18	15	C	
	7	32	30	37	C	根石、土師器
	8	26	25	26	C	
	9	28	27	47	C	
	10	30	30	66	C	
	11	40	18	22	C	
	12	26	24	54	C	
	13	16	16	14	C	
	14	37	46	50	C	
	15	27	22	17	C	
	16	21	20	12	C	
	17	25	25	57	C	
	18	16	15	13	C	
	19	50	45	17	B	
	20	46	40	17	B	
	21	37	29	54	C	
	22	24	23	18	B	
Ｃ３	1	25	24	35	C	
	2	20	19	26	C	
	3	22	20	14	C	
	4	34	34	25	C	
	5	32	27	45	C１	土師器
	6	25	23	28	C	Ｐ７→Ｐ６
	7	18	16	22	C	Ｐ７→Ｐ６
	8	30	25	41	B	
	9	20	15	18	B	
	10	18	17	22	C	
	11	17	9	12	C	
	12	36	36	26	C	
	13	21	21	27	C	土師器
Ｃ４	1	22	18.5	18	C	
	2	30	29	46	C１	
	3	36.5	27	54	C	Ｐ４→Ｐ３、土師器・須恵器・古銭
	4	41.5	26	56	C	Ｐ４→Ｐ３
	5	41	34	32	C１	
	6	27	25	56	C１	
	7	25	24	34	B１	
	8	31	28	15	C１	
	9	22	21	25	C	
	10	37	36	40	C1･2･3	
	11	27	26	21	C	
	12	39	34	60	C１	
	13	34	33	32	C	
	14	27	23	48	C	
	15	36	36	42	C	
	16	34	26	33	C１	土師器
	17	27	26	15	C	土師器
	18	32	31	46	C１	
	19	38	34	34	C	
	20	26	18	11	C	
	21	24	22	18	C	土師器
	22	34	34	44	A	土師器
	23	21	20.5	23	C	
	24	19	19	18	C	
	25	19	17	20	C	
	26	27	25	25	A	
	27	20	20	25	A	
	28	28	27	32	C	
	29	24	23	28	C	
	30	31	29	19	C	
	31	25	24	24	C１	
	32	24	21	38	C	
	33	31	29	28	C	土師器
	34	54	50	30	C１	土師器
	35	32	28	28	C１	
	36	27	25	42	C１	
	37	41	39	28	C	
	38	21	19	33	C	
	39	39	30.5	30	C１	
	40	34	25.5	33	C	
Ｃ４	41	27.5	26.5	28	C１	Ｐ42→Ｐ40、土師器
	42	25	23	20	C	Ｐ42→Ｐ40
	43	46	39	58	C１	Ｐ43→Ｐ44
	44	57.5	42	78	C１	Ｐ43→Ｐ44、土師器
	45	30	29	28	C１	土師器・鉄製品
	46	26.5	24	40	C１	
	47	27	23	28	B	
	48	27.5	27	32	C１	
	49	28	28	63	C１	土師器・古銭
	50	18.5	18.5	28	B	
	51	20.5	19.5	22	A	
	52	28	20.5	27	C	
	53	39.5	36	33	C	
	54	22	19	35	C１	
	55	25	23.5	42	C１	
	56	48.5	27.5	60	C１	Ｐ57→Ｐ56
	57	50	26.5	50	C１	Ｐ57→Ｐ56
	58	21	18.5	8	C１	
	59	23	20	30	C	
	60	26	21.5	31	C１	
	61	25	21.5	38	C１	
	62	21.5	21.5	23	C	
	63	16	15	12	C	
	64	21	18	28	C１	Ｐ64→Ｐ65
	65	22	21	30	C１	Ｐ64→Ｐ65
Ｃ５	1	22	20	36	C	
	2	43	42	48	C	土師器・須恵器
	3	21	13	18	C	
	4	52	40	47	C	
	5	31.5	23	23	C	
	6	20	20	13	C	
	7	20	20	14	C	
	8	19	19	22	C	
	9	22	20	40	C	
	10	18	12	25	C	
	11	19	18	27	C	
	12	30	30	14	C	
	13	30	22	40	C	
	14	26	22.5	32	C	Ｐ14→Ｐ15
	15	29.5	24.5	28	C	Ｐ14→Ｐ15
	16	38	27.5	35	C	Ｐ16→Ｐ17
	17	38.5	28.5	55	C１	Ｐ16→Ｐ17
	18	28	26	45	C１	
	19	32	26	14	C	根石
	20	24	23	8	C	
	21	30.5	23	25	C１	Ｐ21→Ｐ22
	22	27.5	22.5	60	C１	Ｐ21→Ｐ22
	23	32.5	26.5	36	C１	Ｐ24→Ｐ23
	24	24.5	21.5	38	C	Ｐ24→Ｐ23
	25	22	21	19	C１	
	26	27	24	19	C１	
	27	32	27	18	C１	
	28	28	26	27	C	
	29	17	16	13	C	
	30	31	24.5	26	C	
	31	31.5	29.5	42	C	
	32	29.5	21.5	60	C	
	33	13.5	13	18	C	
	34	27	25	36	C	Ｐ35→Ｐ34
	35	26	20	24	C	Ｐ35→Ｐ34
	36	32.5	28.5	52	C	
	37	19	16	20	C	
	38	32	32	30	C１	
	39	33	29	48	C	
	40	65	45	38	C	土師器
	41	33	21	50	C１	土師器

【堆積土凡例】
・土色・土質
　Ａ…暗褐色砂質シルト主体
　Ｂ…にぶい黄褐色砂質シルト主体
　Ｃ…暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土
　Ｄ…黒色砂質シルトと暗褐色砂質シルトの混土
・含有物（※多量含むものは○数字）
　１…炭化物粒
　２…焼土粒
　３…礫

表２－２　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　　考
Ｃ５	42	29	25	24	C	
	43	46	28	20	C	土師器
	44	31	26	42	Ｃ１	
	45	38	32	52	C	土師器
	46	35	25	30	C	
	47	33	29	38	C	
	48	32	28	42	C	古銭
	49	26	22	17	C	
	50	28	28	24	C	
	51	30	30	35	C	土師器
	52	30	26	22	C	
	53	23.5	22	26	C	
	54	57	41.5	34	C	Ｐ54→Ｐ86
	55	49.5	38	52	C	土師器
	56	31.5	26	27	C	
	57	47	27	53	C①	
	58	46.5	33.5	37	C①	
	59	23.5	22	34	C	
	60	48.5	40	72	C	
	61	51.5	48.5	62	Ｃ１	
	62	37.5	34	25	C	
	63	24.5	24.5	55	Ｃ１	
	64	28.5	24.5	28	B	
	65	19	17	42	C	
	66	21.5	21	16	C	
	67	20.5	17	42	Ｃ１	
	68	22	18	50	Ｃ１	
	69	26.5	24.5	21	Ｃ１	
	70	29	27.5	22	Ｃ１	
	71	39.5	25	55	Ｃ１	陶器
	72	26	25.5	23	C	
	73	33	20.5	17	Ｃ３	土師器
	74	43.5	31	40	C	Ｐ74→Ｐ75
	75	33	31.5	40	Ｃ１	Ｐ74→Ｐ75、鉄製品･古銭
	76	26.5	22	34	C	土師器
	77	32.5	27.5	30	C	
	78	30.5	27	27	C	
	79	24	22	30	C	
	80	16.5	15	19	C	
	81	31.5	28.5	20	C	
	82	16.5	13.5	22	C	
	83	28.5	22.5	32	C	
	84	19	18.5	22	C	
	85	22.5	22	24	C	
	86	59	30.5	72	C	Ｐ54→Ｐ86
	87	48	40.5	38	Ｃ１	土師器・陶器
	88	31	22	40	C	
	89	25.5	22.5	36	C	
	90	16.5	15.5	32	Ｃ１	
	91	23.5	19	50	Ｃ３	
	92	22	21	8	Ｃ１	
	93	17	16	22	Ｃ１	
	94	18.5	16	23	C	
	95	34.5	21	30	C	
	96	26	21.5	27	Ｃ１	土師器
	97	28.5	28.5	48	Ｃ１	
	98	26.5	25.5	14	C	根石
	99	25	23.5	35	Ｃ１	土師器
	100	30.5	29.5	26	Ｃ１	Ｐ100→Ｐ101、土師器
	101	19.5	16.5	13	Ｃ１	Ｐ100→Ｐ101
	102	29	25	30	Ｃ１	
	103	28.5	27.5	20	Ｃ１	
	104	24	23.5	20	Ｂ１	
	105	14	14	18	C	
	106	20.5	20.5	23	C	
	107	33	24	40	Ｃ１	
	108	30	26.5	20	Ｃ３	
	109	27	25.5	18	C	
	110	18.5	17.5	12	Ｃ１	
	111	25	24	24	C	
	112	32.5	28	58	Ｃ１	
	113	21	20.5	22	Ｃ１	Ｐ113→Ｐ114
	114	28.5	26.5	25	Ｃ１	Ｐ113→Ｐ114
	115	32.5	26.5	53	Ｃ１	Ｐ115→Ｐ116
	116	33	33	53	Ｃ１	Ｐ115→Ｐ116
	117	25	20.5	35	C	

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　　考
Ｄ２	1	25.5	23	26	Ｃ１	
	2	21.5	18.5	20	C	
	3	21.5	16.5	20	C	
	4	26	20.5	58	C	
	5	20	17.5	16	C	
Ｄ３	1	27	25	53	Ｃ１	
	2	23	22	24	C	
	3	19	18	50	C	
	4	40	37	37	C	
	5	25	22	25	Ｃ１	
	6	26	21	30	Ｃ１	古銭
	7	53	29	42	C	
	8	25	24	43	Ｃ１	
	9	19	18	16	Ｃ１	
	10	27	25	62	Ｃ１	
	11	27	24	13	C	
	12	19	17	18	C	
	13	27	22	29	C	土師器
	14	14	14	15	C	
	15	25	23	36	Ｃ１	
	16	24	21	23	C	
	17	17	16	16	D	
	18	18	16	18	C	
	19	19	16	27	C	
	20	25	24	27	Ｃ１	
	21	22.5	17.5	18	C	Ｐ21→Ｐ22
	22	19.5	16.5	30	Ｃ１	Ｐ21→Ｐ22
	23	25	22	40	Ｃ３	陶器
	24	23	23	15	Ｃ１	
	25	33.5	26.5	28	C	Ｐ25→Ｐ26
	26	36.5	31.5	20	Ｃ１	Ｐ25→Ｐ26
	27	20	17	32	Ｃ１	
	28	60	33	32	C	
	29	29	28	44	Ｃ１	陶器
	30	21	18	18	C	
	31	19	18	34	C	
	32	18	18	25	Ｃ１	
	33	28	27	34	Ｃ１	
	34	40	39	28	C	
	35	55	35	20	C	
	36	33	20	33	C	
	37	20.5	18.5	36	C	Ｐ38→Ｐ37、土師器
	38	18.5	17.5	27	C	Ｐ38→Ｐ37
	39	30	28	36	C	
	40	30	27	28	C	
	41	21.5	20.5	31	C	Ｐ42→Ｐ41
	42	15.5	14.5	10	C	Ｐ42→Ｐ41
	43	29	27	36	C	土師器
	44	22	20	18	C	
	45	23	21	23	C	
	46	22	21	32	C	
	47	22	20	16	C	
	48	18	17	23	C	
	49	28	23	20	C	
	50	25	24	26	C	
	51	28	23	48	C	
	52	31	29	43	C	Ｐ53→Ｐ52
	53	20.5	18.5	26	C	Ｐ53→Ｐ52
	54	47	44	33	B	
	55	28	25	40	C	
	56	53	48	28	C	
	57	33.5	31.5	50	C	
	58	19.5	18.5	24	Ｃ１	Ｐ59→Ｐ58
	59	17.5	16.5	44	Ｃ１	Ｐ59→Ｐ58
	60	21	21	20	C	
	61	26	25	38	C	
	62	40.5	28.5	40	C	
	63	20.5	18.5	16	Ｃ１	
	64	16.5	16.5	37	Ｃ１	
	65	20.5	19.5	32	C	
	66	32.5	32.5	45	C	
	67	21	21	18	C	
	68	20.5	18.5	44	C	
	69	23	20	50	C	
	70	23.5	21.5	33	C	
Ｄ４	1	16	15	18	C	

表２－３　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　　考
Ｄ４	2	15.5	15	12	C	
	3	28	26	40	C	
	4	35	22.5	37	C	
	5	26	22	26	C	
	6	18	16.5	10	C	
	7	27	26	32	C 1	
	8	20	19	40	C	
	9	34.5	32.5	47	C	
	10	21	19.5	25	C	
	11	21	20	18	C 1	
	12	28	23.5	35	C	
	13	28	24	28	C	
	14	27	21	63	C	
	15	21	18.5	27	C	
	16	21.5	20	28	C	
	17	24	23.5	40	C	
	18	29	24	54	C	
	19	17	16	20	C	
	20	32	24	33	C	
	21	35	24.5	60	C	
	22	31.5	26	45	C 1	
	23	31	25	29	C 1	
	24	30	21.5	45	C 1	
	25	37	29.5	40	C 1	
	26	28	25.5	70	C	
	27	15.5	15	20	C 1	
	28	21	18.5	29	C	
	29	25	16.5	32	C 1	
	30	16	15.5	36	C	
	31	48	43.5	45	C 1	
	32	32.5	22	40	C 1	
	33	19.5	17.5	11	C	
	34	23	22	50	C	
	35	23.5	22	50	C	
	36	21.5	21	50	C 1	
	37	39	31	60	C	
	38	27.5	23.5	60	C	
	39	14.5	13	15	C	
	40	27.5	27	60	C 1	
	41	22.5	19.5	29	C 1	
	42	40.5	32.5	54	C	
	43	25.5	24.5	32	C	
	44	33.5	26.5	49	C	
	45	26.5	26.5	45	C	
	46	23.5	20	28	C	
	47	29.5	22.5	60	C	
	48	16	16	54	C	
	49	36	35	28	C 1	
	50	27.5	26	67	C 1	
	51	22	19	34	C	
	52	23.5	22	40	C	Ｐ52→Ｐ53
	53	26.5	26.5	68	C	Ｐ52→Ｐ53
	54	39.5	30	64	C 1	土師器･須恵器
	55	30	25.5	25	C	
	56	51.5	40	36	C 1	土師器
	57	36.5	35	31	C 1	土師器
	58	21.5	20.5	28	C 1	
	59	15	14	15	C	
	60	26	25	30	C 1	
	61	18.5	17	64	C	
	62	41	32	27	C	
	63	21	19.5	51	C 1	
	64	20.5	19	20	C	
	65	46.5	46	38	C	
	66	19	15.5	18	C	
	67	14	12.5	28	C	
	68	13.5	12	26	C	
	69	49	42	52	C	Ｐ69→ＳＫ66
	70	23	22.5	55	C 1	
	71	31.5	31.5	58	C 1	Ｐ71→Ｐ72、土師器
	72	45.5	41	56	C 1	Ｐ71→Ｐ72
	73	45	34	55	C	
	74	25	22.5	32	C 1	
	75	34	31.5	64	C 1	
	76	18	18	18	C	
	77	23.5	21.5	54	C 1	
Ｄ４	78	42.5	36.5	53	C	Ｐ79→Ｐ78
	79	32	29	53	C	Ｐ79→Ｐ78
	80	26.5	23.5	67	C 1	
	81	22	21.5	48	C 1	
	82	17	17	43	C 1	Ｐ83→Ｐ82
	83	27.5	25	36	C 1	Ｐ83→Ｐ82
	84	16	14	52	C 1	
	85	18	16.5	27	C 1	
	86	28	27.5	66	C	
	87	66.5	42	62	C 1	
	88	33.5	30.5	22	C	
	89	26.5	24	25	C	
	90	14.5	13.5	15	C 1	
	91	20.5	18	16	C	
	92	26	24	45	C	
	93	27.5	24	42	C	
	94	28.5	25.5	60	C	
	95	20	17	40	C	
	96	22.5	21	56	C	
Ｄ５	1	27	21.5	15	C	
	2	30	29	28	C	
	3	24	22.5	26	C	
	4	24	23	24	C	
	5	37	37	33	C 1	
	6	26.5	21.5	48	C	
	7	27.5	25.5	25	C 1	
	8	21.5	21.5	25	C	
	9	25.5	23.5	22	C 1	
	10	25	23.5	30	C	
	11	29.5	27	29	C 3	
	12	22.5	22.5	13	B 3	
	13	29	27	21	C 1	
	14	16.5	15.5	9	C	
	15	36	33.5	22	C	土師器
	16	19	18.5	14	C	
	17	43.5	31.5	30	C	土師器
	18	32.5	31.5	37	C	Ｐ19→Ｐ18
	19	24.5	22.5	23	C	Ｐ19→Ｐ18
	20	17	17	15	C	
	21	29	28	48	C 1	Ｐ42、Ｐ43→Ｐ21
	22	22.5	21.5	48	C	
	23	25.5	24.5	37	C	
	24	20	19.5	7	B	土師器
	25	26.5	25	42	C	
	26	42	38	60	C 1	
	27	36	34	33	C 1	
	28	31.5	28.5	22	B	
	29	27.5	24.5	25	B	
	30	20.5	20	14	C	
	31	31	27	18	C	
	32	24	20.5	24	C	
	33	26	25.5	29	C	
	34	31.5	30	42	C 1	
	35	17	16	12	C	
	36	28.5	27.5	19	C 1・3	根石
	37	19.5	17.5	13	C	
	38	24.5	21.5	35	B	
	39	23.5	23.5	18	B	Ｐ40→Ｐ39
	40	21.5	18.5	8	B	Ｐ40→Ｐ39
	41	41.5	38.5	18	C	土師器
	42	20.5	17	40	C 1	Ｐ42→Ｐ21、土師器
	43	20	19	30	C	Ｐ43→Ｐ21
	44	30.5	21	22	B	
	45	21	20.5	19	C	
	46	15	14	17	C	
	47	18.5	18	12	C	
	48	21	20.5	20	B	
	49	23	21.5	22	B	
	50	26.5	26.5	22	B	
	51	42	32.5	23	C 1	
	52	26	22.5	14	C	
	53	38.5	38.5	55	C 1	Ｐ53→Ｐ54
	54	43.5	36.5	42	C 1	Ｐ53→Ｐ54
	55	54	38	56	C 1	
	56	41.5	38	45	C 1	
	57	38.5	35.5	40	C 1	

表２－４　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　　考
Ｄ５	58	22	21	28	C	
	59	20.5	19.5	16	C	
	60	12.5	11	7	C	
	61	19.5	17.5	39	C	
	62	30.5	28	31	C	
	63	48.5	28.5	38	C１	
	64	24	23.5	20	C	
	65	30	29.5	55	C	土師器
	66	33.5	25	23	C１	
	67	13.5	13.5	50	C	
	68	28	25	58	C	
	69	25	21	47	C１	
	70	31	31	80	C１	Ｐ71→Ｐ70
	71	48	28	48	C	Ｐ71→Ｐ70
	72	24	22	36	C１	
	73	20.5	19.5	42	C１	
	74	19.5	19.5	38	C１	
	75	15	15	43	C１	
	76	26.5	25.5	53	C	
	77	30.5	27.5	25	C	
	78	38	37	48	C１	
	79	19.5	17	48	C	
	80	47.5	31.5	52	C１	
	81	24	23.5	32	C	
	82	18	17	24	C	
	83	62.5	34	55	C３	
	84	25.5	23.5	41	C	
	85	31.5	26	34	C	
	86	66	43.5	46	C	土師器
	87	44	30.5	60	C１	
	88	17	15	34	C１	
	89	41.5	25	70	C１	土師器
	90	15.5	13	23	C	
	91	29	24.5	70	C	Ｐ92→Ｐ91
	92	34.5	30	42	C１	Ｐ92→Ｐ91
	93	27.5	25.5	60	C１	
	94	42	35.5	50	C１	
	95	23.5	22.5	41	C	
	96	29	20.5	48	C	
	97	19.5	18.5	23	C	
	98	43	30	40	C	Ｐ98→ＳＫ54
	99	30	22	17	C	
	100	26	24	44	C	土師器
	101	26.5	23	40	C	土師器
	102	32.5	30.5	64	C	
	103	21	20.5	40	C	Ｐ103→Ｐ104
	104	26	24	47	C	Ｐ103→Ｐ104
	105	14.5	14.5	28	C	
	106	19	18.5	53	C	
	107	19	19	42	C１	
	108	40	32.5	60	C	
	109	51.5	48	44	C１	
	110	34.5	27.5	38	C１	Ｐ111→Ｐ110
	111	30	26.5	28	C１	Ｐ111→Ｐ110
	112	20	19	17	C１	
	113	21.5	18.5	19	C１	
	114	24	23.5	19	C１	
	115	15.5	15	18	C	
	116	22.5	20.5	44	C	
Ｄ６	1	16.5	16	36	C	
	2	28.5	23.5	31	C３	
	3	16	13.5	16	C	
	4	25	20	22	C	
	5	16.5	16.5	20	C	土師器
	6	34	30.5	36	B	土師器
	7	40.5	31	34	B	Ｐ７→ＳＫ14、土師器
	8	41.5	37.5	20	B１	Ｐ８→ＳＫ14、土師器
	9	32.5	30.5	43	C１	
	10	45.5	39	40	B１	P10→ＳＫ14、土師器・鉄製品
	11	29	23.5	20	C	
	12	12.5	12	12	C	
	13	27	24.5	18	C１	
	14	34	26	16	C	
	15	27	15	12	C３	
	16	19	16.5	30	C	
	17	33.5	30.5	28	C	
Ｄ６	18	24	23.5	34	C	
	19	32	31	43	C	
	20	38.5	29	42	C１	
	21	28	28	21	C	
	22	30.5	29.5	33	C	
	23	34.5	30	34	C	
	24	24	20.5	36	C	
	25	25.5	24.5	44	C	
	26	29	25.5	22	C１	
	27	20	18.5	18	B	
	28	27.5	26	44	C	
	29	40	26.5	38	C	
	30	25.5	23	32	C	
	31	26	21.5	14	C	
	32	22	16.5	22	C	
	33	31.5	24	26	C	
	34	23.5	21.5	22	C	
	35	68.5	55.5	34	図49	
	36	18	17	16	C	
	37	23.5	19.5	31	C１	
	38	31.5	28	42	B	
	39	34	31	40	C	
	40	24	23.5	35	C	
	41	20.5	18.5	5	C１	
	42	31	22.5	32	C１	
	43	27	26.5	33	C１	
	44	24	16.5	12	C	
	45	67.5	49	20	C３	土師器、礫
	46	19.5	18	15	C１	
	47	18.5	18	16	C	
	48	22	20.5	33	C１	Ｐ48→Ｐ49
	49	27	24.5	35	C１	Ｐ48→Ｐ49
	50	29.5	27.5	20	B	
	51	24.5	20	20	C	
	52	25	23	24	C	
	53	29	29	14	B	
	54	24	22	45	C	
	55	21	20.5	19	C	根石
	56	28	26.5	22	C１	陶器
	57	19.5	19	23	C	
	58	18	17	20	C	
	59	26.5	25	27	A	
	60	32.5	31	40	C	
	61	23.5	22	18	C	
	62	26	21	22	C	
	63	21	20.5	23	C３	
	64	23.5	20	30	C１	
	65	22	21.5	30	C１	鉄製品
	66	20	17.5	20	C	
	67	25.5	23.5	30	C	
	68	19.5	18.5	20	C	
Ｄ７	1	25	23	43	D	Ｐ１→ＳＫ15
	2	23	21.5	39	C１	
	3	19	19	30	C１	Ｐ３→ＳＫ６
	4	28	22.5	18	C	
	5	28	25	15	C	
	6	40	32	50	C	
	7	22	19	42	C	
	8	21	20	16	C	
	9	14	14	14	C１	
	10	20	19	27	C１	
	11	24.5	23.5	13	C	
	12	24	23.5	34	C１	
	13	25	20.5	27	C１	
	14	30.5	26.5	31	C１	
	15	28.5	28.5	12	C	
	16	25	24	32	C	
	17	22	19.5	26	C１	
	18	25.5	24.5	31	C１	
	19	24	22.5	27	C１	
	20	34.5	28	55	C１	
	21	23.5	23.5	35	C	
Ｅ３	1	54	46	40	C	
	2	20.5	16	17	C	
	3	21	18.5	23	C	
	4	33.5	31	34	C３	

表２－５　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　　考
Ｅ３	5	41	33	48	C	
	6	31	27.5	53	C	
	7	30	30	53	C	
	8	26	24.5	26	B	
	9	16	16	20	B	
	10	16	15.5	14	C	
	11	16	15	24	C	Ｐ12→Ｐ11
	12	22.5	22	40	C	Ｐ12→Ｐ11
	13	16.5	16	30	C	
	14	17.5	17	24	C	
	15	25	20.5	24	C	
	16	18	16.5	20	C	
	17	24	21	43	C	
	18	40	36.5	40	C	
	19	20	18	20	C	
	20	22.5	21	29	C	
	21	20	18	70	C	
Ｅ４	1	43	34.5	55	C	Ｐ７→Ｐ１
	2	26.5	24.5	44	C	Ｐ７→Ｐ２
	3	14.5	14.5	12	C	
	4	34	24.5	45	C	土師器
	5	43	27	26	C１	土師器
	6	25	23.5	39	C３	
	7	25	24	30	C	Ｐ７→Ｐ１、Ｐ２
	8	16.5	16.5	25	C	
	9	19.5	19	32	C	
	10	41	39	62	C１	
	11	12	11.5	38	C	
	12	19	19	55	C	
	13	26	23.5	43	C	
	14	26	24.5	60	C１	
	15	17.5	17	30	C	
	16	26	25.5	29	C	
	17	36	28	26	C	
	18	27	22.5	15	C	
	19	18	17	20	C	
	20	16.5	14.5	28	C	Ｐ21→Ｐ22
	21	18.5	19	26	C	Ｐ21→Ｐ22
	22	56	38.5	60	C１	
	23	30	30	27	C	
	24	18.5	15	28	C	
	25	20	18	34	C	
	26	24.5	24.5	23	C１	Ｐ27→Ｐ26
	27	21.5	18	24	C	Ｐ27→Ｐ26
	28	20.5	20	22	C１	
	29	26	22.5	21	C	
	30	20.5	14	31	C	
	31	16	15.5	15	C	
	32	17.5	17	18	C１	
	33	20.5	18	40	C	
	34	22	20	30	C	
	35	19.5	16	30	C	
	36	20	20	23	C	
	37	20	19	20	C	
	38	19	17.5	22	C	
	39	20	19.5	16	C	
	40	30	28	33	C１	土師器
	41	41	21.5	22	C	
	42	14	13	16	C	
	43	17	17	22	C	
	44	26	24.5	25	C	
	45	26	25	30	C	
	46	27	20	28	C	
	47	28	20	26	C	
	48	19	18	18	C	
	49	21	20	24	C１	
	50	22.5	20	75	C	
	51	19	18	24	C	
	52	22	20	50	C	
	53	29	26.5	45	C	
	54	25.5	21.5	74	C１	
	55	25	25	58	C	Ｐ56→Ｐ55
	56	17	15	56	C	Ｐ56→Ｐ55
	57	30	27	58	C１	
	58	22	21	27	C	
	59	18.5	18	40	C	

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　　考
Ｅ４	60	32	26.5	28	C	
	61	17	16	15	C	
	62	20	18.5	20	C	
	63	28	23.5	26	C	
	64	55	33	40	C	
	65	17.5	15.5	14	C	
	66	26.5	26.5	30	C	
	67	19	18	27	C	
	68	36	30	27	C	
	69	35	30	47	C	
	70	27	23	57	C	
	71	23	18	58	C	
	72	25	20	37	C１	
	73	43	25	62	C	
	74	33	32	32	C１	
	75	21.5	20	32	C	
	76	28	28	32	C	
	77	36	30.5	62	C１	
	78	30	28	24	C	
Ｅ５	1	26.5	25.5	51	C	土師器
	2	23.5	22	38	C	
	3	24	18	50	C１	
	4	25	23.5	30	C	
	5	16.5	16	36	C	Ｐ６→Ｐ５
	6	15	15	12	C	Ｐ６→Ｐ５
	7	19	17	28	C	
	8	19	17	23	C	
	9	31.5	28	38	C３	
	10	26.5	26.5	24	C	
	11	28	25.5	22	B	
	12	26.5	25	29	C	
	13	33.5	32.5	55	C	
	14	30	25.5	40	C	
	15	24	21	36	C	
	16	30.5	26	24	C２	
	17	25.5	21.5	18	C３	根石
	18	23	21.5	16	C	Ｐ18→Ｐ19
	19	21.5	21	22	C	Ｐ18→Ｐ19
	20	28	26.5	30	C	
	21	23	21	46	C１	
	22	24	23.5	28	C	
	23	23.5	22	40	C	
	24	21	18.5	42	C	
	25	25	24	43	C１	Ｐ26→Ｐ25
	26	18	16	42	C	Ｐ26→Ｐ25
	27	17.5	17	37	C	
	28	17	15.5	20	C	
	29	16	14	32	C	
	30	23	22	64	C	土師器
	31	19.5	18.5	28	C	
	32	19.5	19	31	C	
	33	21.5	20.5	60	C	土師器
	34	18.5	16	44	C	
	35	26	22	52	C	
	36	26.6	23	48	C	
	37	23	21	38	C	
	38	16	16	45	C	
	39	28	26	50	C	
	40	53	42	60	B	Ｐ40→Ｐ42→Ｐ41
	41	42	37	58	C１	Ｐ40→Ｐ42→Ｐ41
	42	35	25	50	C	Ｐ40→Ｐ42→Ｐ41
	43	22	21	16	C	
	44	23	18	55	C	
	45	32	17	44	C１	
	46	24	23.5	32	C１	
	47	26	21	27	C	
	48	23.5	23	55	C１	
	49	20.5	18	40	C	
	50	27.5	24	40	C	
	51	18	17.5	30	C	
	52	24	22	32	C	
	53	35	30.5	30	C	
	54	25	25	50	C１	
	55	21	21	43	C	Ｐ55→Ｐ56
	56	50	33.5	48	C	Ｐ55、Ｐ57→Ｐ56
	57	37	37	24	C	Ｐ57→Ｐ56

表２－６　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　　考
Ｅ５	58	15	14	24	C	
	59	24	21.5	42	C１	
	60	39	33.5	52	C１	土師器
	61	19	18	30	C	土師器
	62	41	38	60	C	
	63	23.5	22.5	28	C１	
	64	13	12.5	16	C	
	65	20	18	64	C	
	66	19	17.5	18	C	
	67	19	18.5	24	C	Ｐ78→Ｐ67
	68	25	23	52	C	
	69	25	22	31	C	
	70	19	17	13	C	
	71	18	14	20	C	
	72	20.5	20.5	27	C	
	73	22	19	28	C	
	74	21	19.5	16	C	
	75	19	19	34	C	
	76	23.5	19	68	C	
	77	28.5	22	44	C	
	78	14	2.5	40	C	Ｐ78→Ｐ67
	79	21	20	83	C	
Ｅ６	1	25.5	22	18	B	
	2	21	18	31	C１	
	3	22	21	23	C１	
	4	21	19	22	B１	Ｐ４→Ｐ７、土師器
	5	21	16.5	30	C１	土師器
	6	29	23.5	38	D①・2	
	7	26	24	20	B	Ｐ４→Ｐ７、土師器
	8	23	20.5	20	C１	かわらけ
	9	25	24.5	18	C１	土師器
	10	19.5	17.5	22	C	Ｐ10→Ｐ11
	11	23	22	32	C１	Ｐ10→Ｐ11、土師器
	12	23	23	11	C	Ｐ12→ＳＫ13
	13	21.5	19.5	20	C	
	14	21	19	42	C１	土師器
	15	22	21	15	D１	須恵器
	16	24	22.5	34	C１	
	17	19	19	18	D１	
	18	28.5	25.5	30	C	
	19	25	23.5	30	C１	
	20	20	16	27	C	
	21	25	24	27	C１	Ｐ21→ＳＫ17
	22	23.5	21.5	20	C１	
	23	28	27.5	42	C１	
	24	25	24	53	C	Ｐ24→ＳＫ17
	25	26	24	28	C１	
	26	26.5	24	38	C	
	27	24.5	24	21	C	
	28	19	18.5	12	C１	
	29	22	18	28	C	ＳＫ12→Ｐ29、土師器
	30	23.5	19.5	27	C	ＳＫ12→Ｐ30
	31	46	30	40	ℓ1…C1・3 ℓ2…B	
	32	35	28	40	C	土師器
	33	23	21.5	28	C１	土師器
	34	25	20	25	C１	土師器
	35	19.5	17.5	41	B	
	36	40	38	41	B	Ｐ36→ＳＫ14、土師器
	37	22	20	14	C１	
	38	21.5	20.5	54	C	
	39	22	21	24	C１	
	40	35.5	34	55	C	
	41	21.5	20.5	38	C	
	42	22	20.5	22	C	土師器
	43	16.5	14	26	C	土師器
	44	16.5	15	27	C	
	45	18	18	21	A	
	46	17	16	8	B	
	47	30	23	44	C	土師器
	48	33.5	31.5	44	C１	
	49	36.5	32	39	C	Ｐ49→Ｐ50、土師器
	50	21	20	27	C	Ｐ49→Ｐ50
	51	21	21	28	C	
	52	24.5	21	50	C	
	53	43.5	37	66	C	須恵器
	54	24	22	13	C	
	55	30	25	32	C１	
	56	23	21	47	C	Ｐ56→Ｐ57
	57	23.5	22	48	C	Ｐ56→Ｐ57
	58	18	16.5	24	C	
	59	21	20	43	C１	
	60	24	23.5	44	C１	
	61	24	24	48	C	
	62	30	28	58	C１	Ｐ63→Ｐ62
	63	23	21.5	14	C	Ｐ63→Ｐ62
	64	25	24.5	33	C１	
	65	22	22	35	C１	
	66	29	28	70	C	
	67	30.5	29	40	C１	
	68	28	26	39	C１	
	69	26.5	26	36	C	
	70	29.5	23	40	C１	Ｐ70→ＳＫ８
Ｅ７	1	30	27.5	35	ℓ1…C1 ℓ2…B	土師器
	2	22.5	21.5	25	C１	
	3	20	16	20	C	
	4	26	20	26	C１	
	5	23	20	24	C１	
	6	24	20	29	C１	
	7	25.5	25.5	26	C１	ＳＫ８→Ｐ７
	8	25	23	26	C１	ＳＫ８→Ｐ７、土師器
	9	19	12	9	C	
	10	21	20.5	26	C１	Ｐ10→Ｐ11
	11	25	22.5	30	C１	Ｐ10→Ｐ11
	12	18	18	17	C	
	13	30	25	43	C１・2	
	14	12	11	16	C１	
	15	25	23	34	C１	
	16	26	23	14	C１	
	17	24.5	11.5	42	C１・3	根石
	18	34	24	16	C１	Ｐ19→Ｐ18
	19	18.5	17	12	C	Ｐ19→Ｐ18
	20	24.5	12	21	C１	
	21	21	18.5	40	C１	
	22	20.5	18	11	C１	
	23	27	20.5	14	C１	
	24	8.5	7	5	C１	
	25	24	22	12	C	
	26	24.5	23	32	C	土師器
	27	20.5	19.5	29	C２	須恵器
	28	26.5	26	18	C１	土師器
	29	31.5	28	43	C	
	30	21	18.5	26	C	
	31	19	17	19	C	
	32	24	22	31	C１	
	33	21.5	18.5	26	C１	
	34	20	19.5	39	C１	
	35	31.5	25	46	C１・2	Ｐ36→Ｐ35→Ｐ37
	36	21.5	21	35	C	Ｐ36→Ｐ35→Ｐ37
	37	34	33	25	C①	Ｐ36→Ｐ35→Ｐ37
	38	23	20.5	42	C１・2	
	39	22	18	42	D	Ｐ39→ＳＫ５
	40	11	9	10	C１	土師器

ℓ１からは後述する２つに折られた鉄製の小刀(図53－５)と、計15枚の古銭がまとまって出土していることから、単なる混入ともいい切れない。このため、建物解体等に伴う何らかの儀礼の際に埋められた可能性を指摘しておきたい。

また、Ｃ５Ｐ75の他、小穴から古銭が出土する毎に、それらの小穴が鬼門の北東や裏鬼門の南西の位置の柱穴に相当すると想定して建物跡の抽出を再度試みたが、新たに建物跡を認識することはできなかった。

遺　　物（図52・53、写真42・43）

今回検出した882基のうち、遺物が出土したのは90基である。内訳は、Ｃ２グリッドが１基、Ｃ３グリッドが２基、Ｃ４グリッドが11基、Ｃ５グリッドが16基、Ｄ３グリッドが６基、Ｄ４グリッドが４基、Ｄ５グリッドが10基、Ｄ６グリッドが８基、Ｅ４グリッドが３基、Ｅ５グリッドが５基、Ｅ６グリッドが18基、Ｅ７グリッドが６基である。このことは、各グリッドから検出された小穴の数を反映しているとみられるが、自然堤防の縁辺部の小穴から比較的多く出土する傾向があるともいえる。

各小穴から出土した遺物は、土師器470点、須恵器６点、かわらけ１点、陶器６点、鉄製品６点、古銭21枚の計510点である。このうち、15点を図示した。割愛した資料は、土師器は古墳時代前期のものが大半だが、内面黒色処理が施された杯の細片もわずかに認められた。須恵器は外面に平行タタキ目が観察されるものがあり、古代のものとみられる。陶器はいずれも甕の破片で、胎土がＡ類とＦ類のものが各２点である。鉄製品は、棒状や板状のものが認められた。なお、上述した通り、Ｃ５Ｐ75のℓ１からは鉄製の小刀と、計15枚の古銭が出土した。鉄製の小刀(図53－５)は２つに折られて埋められていた。古銭は12枚貼り付いたもの(写真43)と、２枚貼りついたものと、１枚単独のものである。12枚貼り付いた古銭は、紐を通して束ねた状態だった可能性がある。文字は、外側の２枚が裏面のため判読不能である。２枚と１枚のものについても、遺存状態が悪いため判読不能である。

図52－１～５は土師器である。１は小型の鉢である。調整は、内外面とも横方向のヘラミガキだが、頸部外面には縦・斜め方向のハケメの後に縦・斜め方向のヘラミガキが施されている。なお、ヘラミガキは底部外面にも観察され、全体として丁寧なつくりとなっている。

２は台部のみ遺存する台付甕である。調整は、外面が縦方向のハケメ、内面が斜め方向のヘラケズリである。

３～５は甕である。いずれも頸部は「く」の字状に屈曲するが、口縁部は３が直線的に立ち上がるのに対し、４・５は外反する。３の口縁部の最終調整はヨコナデだが、ヨコナデに消されずに残ったハケメが明瞭に観察される。ハケメ調整は、外面は縦方向、内面は横方向主体である。また、胴部の外面には横方向のヘラケズリ、内面には横方向主体のヘラナデが施されている。

４の調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面は横・斜め方向のハケメの後縦方向のヘラミガキ、胴部内面は横方向主体のヘラナデである。５は全体的に摩滅が著しいが、外面の口縁部は

ヨコナデ、胴部は斜め方向主体のヘラケズリが観察される。

図53－１は舌状口縁を呈する陶器の甕である。口縁部が外側に張り出し、端部は若干外上方につまみ上げられ、端部の内側は沈線状に窪んでいる。外面の頸部～肩部と内面の口縁部には自然釉が掛かっている。外面にはヘラ状工具による二本の線刻が認められるが、釉薬が掛かっているため、あまり明瞭には採拓できなかった。胎土はＡ類である。

図53－２はロクロ成形のかわらけである。口縁端部が内湾気味に立ち上がる器形で、底部外面には回転糸切り痕が認められる。

図53－３は陶器の捏ね鉢で、内面は滑らかになっている。胎土はＦ類で、灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。同様の資料は、Ｄ３Ｐ23のℓ１及び３号溝跡のℓ３ｂから１点ずつ出土しているが、これらについては小片のため図化できなかった。

図53－４～６は鉄製品である。４は用途不明で、板状を呈し、若干湾曲する。端部が遺存しないので判然としないが、容器等の残片の可能性もある。

５は小刀である。切先が欠損する。Ｘ線透過写真撮影の結果、目釘孔の他、刃・棟両側に関が観察された。また、柄の木質が一部遺存している状況が肉眼でも観察される。

６は釘である。断面形が四角形を呈し、折れ曲がった釘頭が遺存する。

図53－７～10は古銭である。７は３枚貼り付いた資料で、外側の２枚が判読できた。いずれも北宋銭で、片方(ａ)が「天聖元寶」(1023年初鋳)、もう一方(ｂ)が「元豊通寶」(1078年初鋳)である。８も同じく「元豊通寶」(1078年初鋳)で、９は唐銭の「開元通寶」(621年初鋳)である。10は欠損しているが、北宋銭の「明道元寶」(1032年初鋳)と推測される。

ま と め

今回の調査で検出した小穴群は、１号建物跡と同様の建物跡あるいは柱列跡等の柱穴と推定される。小穴の大半は、柱が抜かれた後に人為的に埋められたものと推測され、柱痕が確認されたものはなかった。

また、５基の小穴では古銭が一緒に埋められていたが、建物の造営に伴う地鎮と積極的に判断できるものはなかった。しかしながら、Ｃ５Ｐ75では、古銭が15枚まとまって出土し、さらに二つに折られた鉄製の小刀も一緒に埋められていたことから、建物解体等に伴う何らかの儀礼が行われた可能性が指摘される。

各小穴の所属時期は、出土したかわらけや陶器の特徴から、大半が中世前期頃と考えられるが、やや規模の大きなものは、別の時期の可能性もあると思われる。　(丹　治)

第８節　遺構外出土遺物

遺構外からは、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、石器、古銭の計1,286点の遺物が出土した。このうち、主体を占めるのは1,254点出土した土師器で、約97.5％を占める。土師器は、大半が古

墳時代前期のものである。他の資料は、須恵器10点、陶磁器16点、鉄製品４点、石器１点、古銭１枚である。このうち、土師器12点、須恵器２点、陶器２点、石器１点の計17点を図示した。なお、割愛した資料には、外面に平行タタキ目が施された須恵器甕の胴部片、北宋銭の「元豊通寶」(1078年初鋳)等がある。このうち、Ｄ５グリッドのＬＩから出土した「元豊通寶」については、写真のみ掲載した(写真43)。

また、土師器の出土層位毎の内訳は、ＬＩ・撹乱が243点、ＬⅡが159点、ＬⅢが852点で、各グリッドの出土点数は表３の通りである。ＬⅡからの出土は、ＬⅡが平面的に遺存していた調査区北東部に限られる。ＬⅡからＬⅣにかけての漸移層であるＬⅢから出土した遺物は、全体的に分布しており、特別な傾向性は指摘されない。Ｄグリッドがやや少ないのは、遺構数が多く、ＬⅢの遺存する箇所が少ないことを反映していると考えられる。また、点数が多いグリッドでは、狭い範囲から何個体も出土することはなかったものの、形がある程度復元できる資料が比較的多く出土した。このため、古墳時代前期の遺構が埋没している可能性を考慮し、入念に検出を繰り返し、断ち割り調査も行った。しかし、当該期の遺構は確認されなかったことから、集中する中世の遺構により失われたか、調査区外に存在すると推測される。なお、土師器以外の遺物は大半がＬＩで、特筆すべき出土状況はない。

遺　　物（図54、写真43・44）

図54－１～12は土師器である。１～４は高杯で、１・２が杯部、３・４が脚部の資料である。１・２の調整は、内外面とも横方向を主体とするヘラミガキである。２は脚部との接合面で剝離している。３の外面調整は、縦方向を主体とするヘラミガキだが、杯部や脚裾部に向けて屈曲する箇所では横方向に施されている。４は摩滅が著しいが、外面下端にわずかにヘラミガキが観察される。なお、４は上部の内面が中空状に窪んでいる状況が観察された。杯部を接合する際に杯部側から押し出された粘土を受けるための空間とみられる。

５・６は器台である。５は厚手のつくりで、調整は内外面ともハケメを主体とするが、脚部内面はナデである。６は外面全体に赤彩が観察される。円形の透かし穴が２箇所に穿たれているが、遺存状況から、本資料は４方向透かしとみられる。

表３　各グリッド土師器出土点数

ＬＩ・撹乱

	A	B	C	D	E	F
1						
2			4	2		
3			16	9	15	
4		6	32	17		
5			18	20	26	
6		2	22	10	36	
7				8		

ＬⅡ

	A	B	C	D	E	F
1						
2						
3				26	2	
4				33	56	
5					42	
6						
7						

ＬⅢ

	A	B	C	D	E	F
1						
2						
3		48	45	14		
4		50	94	30	59	
5		73	36	61	232	
6			107	3		
7						

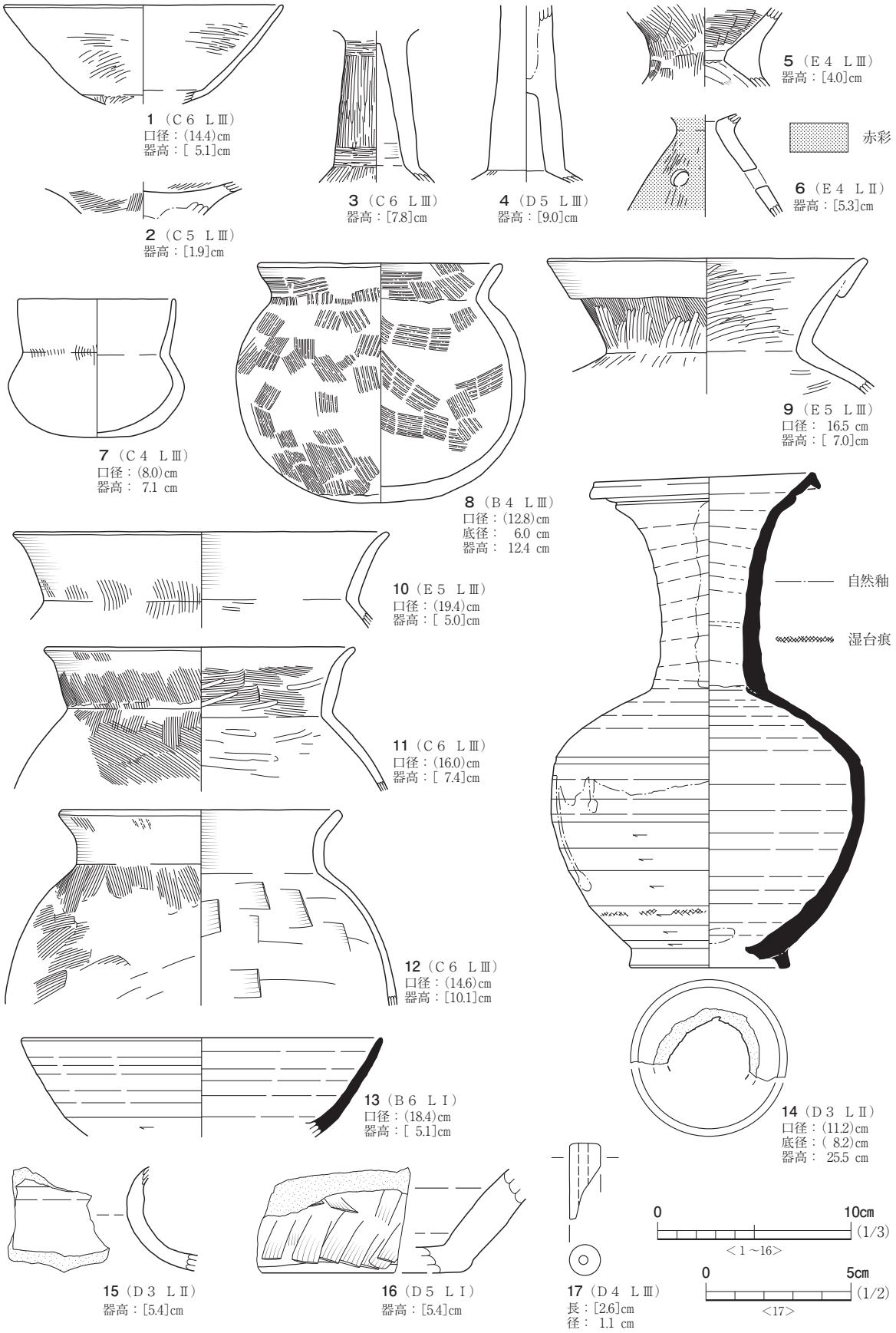

1（C６ LⅢ）
口径：(14.4)cm
器高：[5.1]cm
2（C５ LⅢ）
器高：[1.9]cm
3（C６ LⅢ）
器高：[7.8]cm
4（D５ LⅢ）
器高：[9.0]cm
5（E４ LⅢ）
器高：[4.0]cm
赤彩
6（E４ LⅡ）
器高：[5.3]cm
7（C４ LⅢ）
口径：(8.0)cm
器高： 7.1 cm
8（B４ LⅢ）
口径：(12.8)cm
底径： 6.0 cm
器高： 12.4 cm
9（E５ LⅢ）
口径： 16.5 cm
器高：[7.0]cm
10（E５ LⅢ）
口径：(19.4)cm
器高：[5.0]cm
自然釉
湿台痕
11（C６ LⅢ）
口径：(16.0)cm
器高：[7.4]cm
12（C６ LⅢ）
口径：(14.6)cm
器高：[10.1]cm
13（B６ LⅠ）
口径：(18.4)cm
器高：[5.1]cm
14（D３ LⅡ）
口径：(11.2)cm
底径：(8.2)cm
器高： 25.5 cm
15（D３ LⅡ）
器高：[5.4]cm
16（D５ LⅠ）
器高：[5.4]cm
17（D４ LⅢ）
長：[2.6]cm
径： 1.1 cm
0
10cm
(1/3)
＜1～16＞
0
5cm
(1/2)
＜17＞

図54　遺構外出土遺物

７・８は鉢である。７は小型で、体部が算盤形に膨らみ、口縁部はやや内湾気味に直立する。全体的に摩滅が著しいが、頸部外面にはハケメが観察される。８は、口縁部が短く外反し、体部はやや潰れた球形を呈する。全体的に摩滅しているが、調整は内外面ともハケメである。ハケメは、横や斜め方向のものが多いが、頸部外面では縦方向に施されている。

９は壺で、口縁部が折り返されている。調整は、外面の口縁部がヨコナデ、頸部が縦方向のハケメの後に縦方向のヘラミガキを施している。内面は、ヨコナデの後に横方向主体のヘラミガキを施している。

10～12は甕である。10・11は頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部付近が外反する。外面調整は、10・11とも縦・斜め方向のハケメの後に口縁部にヨコナデが施されている。内面調整は、10では口縁部にヨコナデ、頸部に横方向のヘラミガキが施されている。一方、11では最終調整は横方向のヘラミガキだが、口縁部にはそれ以前に施された横方向のハケメが観察される。

12の口縁部は頸部付近では直立するが、上半部は屈曲して外反する。外面調整は、縦・斜め方向のハケメの後に口縁部にヨコナデが施されている。内面調整は、口縁部にヨコナデ、胴部に横方向のヘラナデが施されている。

図54－13・14は須恵器である。13は杯で、外面の体部下端を回転ヘラケズリで調整している。

14は台付長頸瓶である。灰白色の精良な胎土で、外面の口縁部～体部上半、内面の口縁部～頸部中央及び底部中央に灰色の自然釉が掛かっている。頸部～口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部は「へ」の字形に屈曲し外下方につまみ出されている。口縁部直下には、一条の沈線が巡り、沈線の直下は若干肥厚して弱い段が形成されている。体部はやや丸味を帯びるが肩が張る器形で、肩付近には幅広の沈線が一条巡っている。底部には断面逆台形を呈する台が付けられている。外面の体部下半には回転ヘラケズリ、底部には焼成後の穿孔が観察される。口縁部～頸部と、体部～底部とは別づくりで、回転軸は同じくしながらもロクロ目の方向がやや異なっており、頸部内面には接合した痕跡がわずかに観察される。また、外面の体部下半には、輪状に回転ヘラケズリの調整が不明瞭となり、器表面の粘土がやや剝離したようになっている箇所がある。これは、いわゆる湿台痕跡と呼ばれるもので、体部～底部の資料に台を付けた後、ロクロの回転台から取り外し、湿台に載せた際に付いたものとみられる。なお、14は器形や胎土の特徴等から、静岡県西部の湖西窯跡群の製品と推測される。

図54－15・16は陶器である。15は甕もしくは壺の頸部片で、薄手のつくりとなっている。外面の下半部と内面の上半部には自然釉が付着している状況が観察される。なお、15の胎土はＣ類で、59号土坑から出土した図20－１の捏ね鉢の胎土と近似している。16は捏ね鉢で、内面は滑らかになっている。外面の体部下端には縦・斜め方向のヘラナデが施されている。胎土はＦ類で、長石を多量含んでいる。

図54－17は石製の管玉である。紐を通す孔は、両側から穿孔された痕跡は観察されないが、遺存が悪いため、片側穿孔とは断定できない。（丹　治）

第３章　　総　　括

荒屋敷遺跡の調査では、掘立柱建物跡１棟、土坑90基、溝跡６条、特殊遺構６基、小穴882基を検出した。遺構の大半は、出土遺物や重複関係等から概ね中世前期頃（鎌倉時代）と考えられる。そのため、当該期の遺物・遺構に関する内容を中心として言及し、遺跡の性格について考えてみたい。

第１節　中世の土器類について

１．出土遺物の組成（表４）

出土点数　荒屋敷遺跡では、破片数で139点の中世の土器類が出土した。大まかな内訳は、輸入陶磁器４点、国産陶器134点、かわらけ１点である。かわらけを除いた詳細な内訳は、輸入陶磁器が、青磁２点、白磁２点、国産陶器が、在地産陶器124点、古瀬戸５点、東海系５点である。

全体の組成　出土した中世の土器類の全体の組成からは、かわらけが１点のみと極端に少ないこと、在地産陶器の割合が大半を占める（全体の割合：89.2％、陶器のみの割合：92.5％）ことが指摘される。これは、今回の調査区がかわらけを必要とする場ではなかったこと、すなわち、宗教行事や宴会儀礼等を行う場ではなかったことを示している。そして、常滑の製品がなく、在地産陶器の割合が大半を占める状況は、一般的な消費地の在り方とは異なっている。これらの遺物組成は、後述する荒屋敷遺跡の性格を反映したものと考えられる。

在地産陶器の分類・特徴　在地産陶器は、本編第２章第２節で述べた通り、胎土の特徴からＡ～Ｆ類に分類した。Ａ類の胎土は、褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、径２～３㎜の長石を多量、黒色粒子を微量含んでおり、伊達市梁川町五十沢地区に所在する八郎窯跡群（梁川町教育委員会1987）の製品と近似した特徴を示す。なお、Ａ類を含め、荒屋敷遺跡から出土した陶器には、八郎窯跡群の資料に認められる格子形の押印が観察されたものはなかった。

Ｄ類の胎土は、灰褐色～にぶい赤褐色（5YR5/2～5YR5/3）を呈するが、細部ではＡ類に近似した褐灰色（7.5YR4/1）を呈する箇所もある。含有物は、径２～３㎜の長石を多量含んでいる。

Ｂ類とＣ類は、胎土の色調や含有物の種類・量がやや異なるものの、比較的Ａ類に近い特徴を有する。同様に、Ｅ類は比較的Ｄ類に近い。Ａ～Ｅ類に分類されないその他の資料は、Ｆ類とした。

在地産陶器の組成　在地産陶器だけで見ると、組成の約半分を占めるのがＤ類の55.6％（69点）、次いで多いのがＡ類の18.5％（23点）である。この他、10％を超えるのはＢ類の10.5％（13点）である。なお、今回、土器類の重さは計測しなかったが、大甕の比較的大きな破片がまとまって出土しているＤ類の割合が増加する以外は、概ね出土点数に比例すると推測される。

器種毎の組成は、甕・壺類と鉢類とに分けて提示した。このうち、一定程度の出土点数がある

表４　出土陶磁器類の点数と組成

分類			出土遺構毎の点数						計	割合(%)		
			土坑	溝跡	特殊遺構	小穴	遺構外	表採		全体	陶器のみ	在地産陶器のみ
陶器	在地産	A類	9	4	3	3	4		23	16.5	17.2	18.5
		B類	7	3	1		2		13	9.4	9.7	10.5
		C類	4		2		1		7	5.0	5.2	5.6
		D類	62				5	2	69	49.6	51.5	55.6
		E類	2		1				3	2.2	2.2	2.4
		F類	2	1		3	3		9	6.5	6.7	7.3
	非在地産	古瀬戸	5						5	3.6	3.7	
		東海系	4	1					5	3.6	3.7	
輸入陶磁器		青磁	2						2	1.4		
		白磁	2						2	1.4		
かわらけ						1			1	0.7		
計			99	9	7	7	15	2	139	100.0	100.0	100.0

分類	器種毎の組成			
	甕・壺類		鉢類	
	点数	割合(%)	点数	割合(%)
A類	21	91.3	2	8.7
B類	11	84.6	2	15.4
C類	5	71.4	2	28.6
D類	43	62.3	26	37.7
E類	3	100.0	0	0.0
F類	5	55.6	4	44.4
計	88	71.0	36	29.0

Ａ・Ｂ・Ｄ類で見ると、Ａ・Ｂ類は甕・壺類が大半を占めるのに対し、Ｄ類は甕・壺類と鉢類の比率がおおよそ６：４で、異なる特徴が指摘される。

なお、今回の胎土の分類は、あくまで肉眼観察によるものである。そのため、本来は同一の窯跡で焼成したものが、粘土等の材料や焼成時の条件等によって異なる窯跡の製品であると誤認してしまう可能性もあり、分類した数の分だけ産地の異なる窯跡があると即断できるものではない。ただし、少なくとも複数の産地の製品が混在していると推測している。

２．中世の土器類の年代（図55）

在地産陶器の編年の概要　荒屋敷遺跡が所在する伊達市内には、福島盆地周辺の中世陶器の編年を考える上で重要な遺跡である八郎窯跡群がある。同窯跡群は、12世紀末～13世紀初頭頃には常滑からの直接的な技術移入により生産が開始され、Ｂ・Ｃ地点表採資料から１・２号窯跡へと変遷し、13世紀中葉には終焉を迎えたとされる（飯村1992・1995）。これより後続する資料としては、宮城県白石市に所在する白石窯跡一本杉支群（宮城県教育委員会1996）があり、第１群遺物が13世紀中葉～後半、第２群遺物が13世紀後半～14世紀初頭とされる（菊地2003）。

在地産陶器の甕・壺類　荒屋敷遺跡の調査で出土した在地産陶器の甕・壺類うち、古い特徴を有するのは、図53－１（Ａ類）である。図53－１は、舌状口縁を呈する甕で、口縁部が外側に張り出し、端部は若干外上方につまみ上げられ、端部の内側は沈線状に窪んでいる。これは、八郎窯跡群のＢ・Ｃ地点表採資料に認められる特徴である。また、図53－１は胎土がＡ類で、器形だけでなく胎土も八郎窯跡群の資料と近似している。断定はできないが、八郎窯跡群の製品の可能性が指摘される。なお、図53－１にはヘラ状工具による線刻があるが、これまで八郎窯跡群の資料にはこのような痕跡は確認されていないため、注目される。

一方、在地産陶器の甕・壺類うち、新しい特徴を有するのは、図12－１（Ｄ類）、図33－３（Ｅ類）、図43－１（Ｅ類）である。これらの資料は、口縁部が受け口状を呈し、端部が外上方につまみ上げられている。「受け口」口縁を発達させる形で変化した東北特有の器形（飯村1992・1995）で、白石窯跡一本杉支群の第２群遺物に相当すると判断される。

上記の資料の他、図化できたのは、図23－１（Ａ類）と図43－２（Ａ類）である。いずれも小片だが、端部が上方につまみ上げられた受け口状を呈するため、13世紀代の資料と考えられる。

在地産陶器の捏ね鉢（片口鉢）　捏ね鉢（片口鉢）については、八郎窯跡群の報告書では、口縁端部の形状が「内傾→外傾」、高台が「有台→無台」へと変遷するとされている。荒屋敷遺跡から出土した在地産陶器の捏ね鉢は、口縁端部の形状を細かく見ると、内傾気味の図12－２（Ｄ類）、内傾気味で端部中央が浅く窪む図８－３（Ｄ類）、ほぼ水平で中央が沈線状に僅かに窪む図20－１（Ｃ類）及び図22－２（Ｄ類）、ほぼ水平な図10－２（Ｄ類）の４つに分類される。このように、口縁端部の形状からは、明瞭に「外傾」するという新しい要素は認められない。一方、高台については、底部資料が少ないながら、有台のものは確認されなかった。ただ、古い段階に無台のものがないという確証はなく、全体の形状がわかる図12－２の口縁端部の形状からはやや古めの印象を受ける。このため、荒屋敷遺跡から出土した捏ね鉢については、概ね13世紀前半と考えておきたい。

なお、胎土がＤ類とした資料が同一の窯跡による製品とすれば、図12－２が13世紀前半、図12－１が13世紀後半～14世紀初頭と考えられることから、これらの資料を焼成した窯跡は、一定程度の期間、操業が継続された窯跡と評価することができる。

在地産陶器以外の土器類等　かわらけ（図53－２）は、小型で浅い器形を呈する。福島県考古学会中近世部会編年の３期後半（福島県考古学会中近世部会1997）、すなわち13世紀後半に位置付けられる資料と考えられる。

古瀬戸は、５点とも灰釉のみが使用された前期様式（藤澤1995）で、卸皿の形状等からⅡ期ないしⅢ期頃（13世紀前葉～中葉頃）の資料と推測される。

東海系陶器には、高台が付く捏ね鉢（図39－３）があった。13世紀後半には高台がなくなるとみ

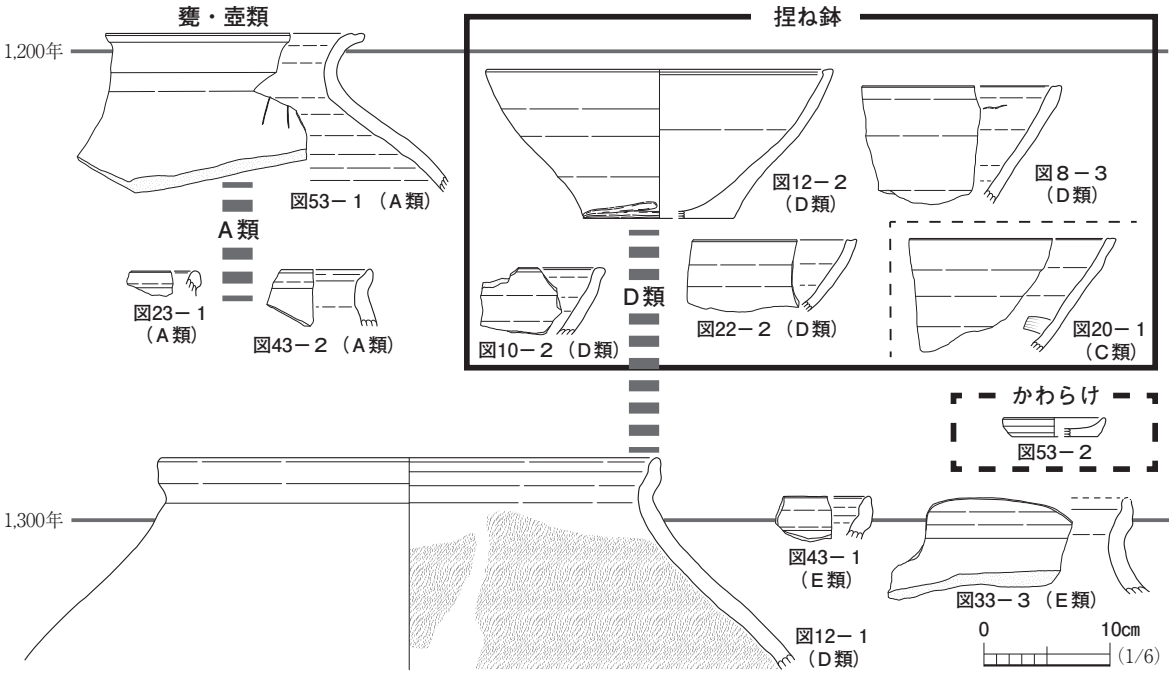


図55　在地産陶器を中心とした中世土器類の編年

られるので13世紀前半と考えておきたい。

青磁碗（図33－２）は、貿易陶磁器編年（山本1995）のＦ期後半～Ｇ期初頭（13世紀後半～14世紀前半）頃、白磁碗（図11－１）は同編年のＤ期（12世紀中頃～後半）頃と推測される。

以上から、白磁がやや古い可能性があるが、在地産陶器以外の土器類についても、概ね中世前期頃のものと考えられる。なお、本遺跡から出土した古銭は、唐銭の「開元通寶」が２枚ある以外は、すべて北宋銭とみられる。このことも、本遺跡の消長が中世前期頃に収まる証左であろう。

第２節　中世の遺構について

１．土坑について（図56）

方形竪穴建物跡　いわゆる中世の方形竪穴建物跡と考えられるのは、一辺が３～５ｍの大型の土坑である60・70・71・88号土坑である。このうち、88号土坑は、柱間が２間×２間の等間隔に並んだ８基の柱穴が確認され、いずれも底面に根石が敷かれていた。このため、物資を収納する倉庫としての機能が想定される。なお、同土坑は丁寧で入念なつくりのため、シンボル的な建物跡としての性格も兼ね備えていた可能性もある。一方、70号土坑では柱穴は確認されなかったが、60・71号土坑でも88号土坑と近似した配置の８基前後の柱穴が確認された。柱穴の底面に根石は敷かれておらず、倉庫かどうかは判然としないが、何らかの機能を有した建物跡の可能性がある。また、60・71号土坑では、南辺に外側に張り出す箇所があり、出入口部と想定される。この他、上記の土坑よりは小規模だが、45･46号土坑についても、方形竪穴建物跡に相当すると考えて報告した（本編第２章第４節参照）。

埋めている途中で火を焚いた土坑　42～44号土坑は、遺構を埋めている途中で火を焚くという行為が確認された土坑である。43号土坑は半分ほど埋めた段階で一度火を焚き、その後すべて埋められている。一方、44号土坑は堆積土中に３面の被熱痕跡が、42号土坑に至っては５面も被熱痕跡が確認され、埋めては火を焚く行為が繰り返し行われたと判断される。これらの土坑は、火葬土坑の可能性も考慮したが、全体的に被熱が弱く、焼成は難しいとみられる。また、遺構底面の中央部には一般的な火葬土坑に認められる火通し溝もなかった。このため、具体的な性格は不明だが、何らかの火を焚く儀礼的な行為が行われたと推測される。42～44号土坑は互いに近接することから、当該箇所が荒屋敷遺跡内において、このような儀礼が行われる場所であったといえる。

なお、42～44号土坑の南東３ｍに位置する52号土坑は、この３基とは形状や規模が異なるが、底面で火を焚き、その後埋めている途中でもう一度火を焚いており、同様の遺構と推測される。

底面に礫を敷いた土坑　底面に礫を規則的に配置した土坑を２基（28・47号土坑）確認した。これについては、栃木県下野市に所在する下古館遺跡の報告（（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995）で指摘されているように、棺を置くための台座の可能性を考えた。しかし、28号土坑は南部の３個の礫に対し北部の礫が１個のみであること、47号土坑は礫が西半部に偏ることから、

図56　荒屋敷遺跡遺構配置図

台座としての機能を有していたとは断定できない。また、47号土坑では底面に被熱痕跡が確認されたが､礫を敷く以前のものであり､火を焚く行為と礫を敷く行為との関連性が判然としなかった。以上から、２基の土坑とも墓と考えられる積極的根拠はなく、具体的な性格は不明である。

大型で深い土坑　35号土坑は平面的な規模が大きく、かつ、深いため、地下式壙(江崎1985)の可能性も考慮した。しかし、入口部となる竪坑や天井部の崩落土も確認されず、地下式壙と判断する積極的な根拠は得られなかった。同様な遺構は、59・76・83号土坑が挙げられるが、これらも、他の多くの土坑と同様、廃絶の際にほぼ一度に埋められており、異なる特徴は確認されなかった。

２．遺構の変遷と遺跡の性格（図56）

遺構の変遷　荒屋敷遺跡の中世前期の遺構は、重複関係から以下の変遷を辿ることが指摘される。

①方形竪穴建物跡(60・71・88号土坑)→小型の土坑(58・62・66・67・79・81・82・86・87号土坑)→小穴群。(※小型の土坑の位置は図２参照)

②３・６号溝跡→32・63・65・76・83号土坑→小穴群。

③４・５溝跡、方形竪穴建物跡(70号土坑)→小穴群。

以上から、方形竪穴建物跡(60・70・71・88号土坑)や３～６号溝跡が古く、次いで小型の土坑がつくられ、最も新しいのが小穴群といえる。なお、小穴群に関しては、小型の土坑(５・６・８・13～15・17・54・66号土坑)よりも古いものもあるため、一概には言えないが、相対的に他の遺構よりも新しいものが多いということができる。

遺跡の性格　中世前期の遺構のうち、古い段階の方形竪穴建物跡(60・70・71・88号土坑)と３～６号溝跡は、主軸方向が概ね一致するという特徴が指摘される。そして、他の遺構との重複関係はないものの、１号建物跡と２号溝跡も上記の遺構と同様の主軸方向である。よって、これらの遺構群は関連して機能したと考えられる。溝跡は区画溝としての性格が想定され、中でも３号溝跡より西には小穴が皆無であることから、同溝跡は他の溝跡よりも重要な役割があったと考えられる。

そして、88号土坑が物資を収納する倉庫としての機能が想定されること、遺跡が阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地することを考え併せると、会津坂下町古館遺跡(会津坂下町教育委員会1992、飯村2009)や宮城県丸森町大古町遺跡(齋藤2011)のような、舟運を利用した物流の拠点である「津(＝川湊)」に伴う遺構群と評価することができよう。本遺跡から、かわらけが１点しか出土しないこと、常滑の製品がなく在地産陶器が大半を占めること、一般集落では確認されない古瀬戸の四耳壺(図22－３)が出土していること等は、川湊という遺跡の性格を反映していると考えられる。近隣の窯跡で焼成した陶器を集積し、他所へ運搬していた可能性もある。ただ、出土した捏ね鉢は、よく使い込まれて内面が滑らかとなっている資料が散見されるため、本遺跡内で使用されたものも含まれているとみられる。

また、大半の遺構は、各遺構の廃絶の際に一度に埋め戻されているという共通した特徴が指摘できる。そして、埋めては次の遺構をつくることを繰り返し、その結果、多数の遺構が重複する状況を生み出した。舟運に便利なこの場所での土地利用に固執した結果なのであろう。ただし、方形竪穴建物跡の廃絶後は、小型の土坑がつくられるようになることから、遺跡の性格も少しずつ変化していった可能性もある。また、積極的に墓壙であると考えられる土坑はなかったが、川湊的な性格を有した遺跡の中で、底面に礫を敷いた土坑や、埋めている途中で火を焚くことを繰り返している土坑は、どのような役割を果たしていたのか。解明されず残された課題も多い。

また、今回の調査では、鉄製の磬(図30－11)や香炉(図28－２)といった仏具が出土している点も看過できない。ただし、これらの遺物が出土した遺構も含め、調査区内には仏教施設と判断で

きる遺構はなかった。そこで、遺跡の周辺に目を移すと、調査区から北東に約600ｍの箇所に位置する光台寺には６基の板碑がある（本書序章第３節参照）。５基が光台寺より東に約200ｍの伊達市伏黒字観音前の畑から、１基が荒屋敷遺跡の調査区から北東に約150ｍの三田八幡神社（伊達市伏黒字荒屋敷）の大欅の下から見つかり、それらが光台寺に移されたものとされる（梅宮1981）。そして、注目すべきは、このうち３基の板碑に正応二年（1289年）の年号が刻まれていることである。この13世紀後半という年代は、荒屋敷遺跡の中世前期頃の遺構群が営まれている年代とも一致する。したがって、光台寺の板碑と荒屋敷遺跡から出土した仏具は、何らかの関連も想定され、近隣に仏教施設が存在する可能性もある。

なお、鉄製の磬や香炉は、各遺構を埋めた人為堆積土中から古墳時代前期の土師器片等と混在して出土した。つまり、特別な意図を持った埋納ではなく、遺構の廃絶にあたって土や他の遺物とともに無造作に埋められたような状況であった。これは、鉄製の磬や香炉に限ったことではなく、Ｃ５Ｐ75から出土した鉄製小刀（図53－５）を除く、他の多くの鉄製品（※出土地点は図56参照）でも同様であった。このため、荒屋敷遺跡で活動していた人たちは、鉄製品を再利用しようとする意識が薄かったのではないかと思われる。川湊であるため、比較的鉄を豊富に入手することができたのであろうか。また、鋳造製品を鋳込んだ際にできたバリ等の不要な部分とみられる不整形の鉄片が数点出土していることも考え併せると、近隣に鋳造関連遺構が存在する可能性もあろう。

第３節　ま　と　め

前節までに、荒屋敷遺跡の中世前期頃の遺構群は「津（＝川湊）」と評価されること、出土遺物の組成も遺跡の性格を反映していること、鉄製の磬や香炉が出土したこと等から近隣に仏教施設の存在が示唆されること等を指摘した。最後に、中世を前後する時期の様相も踏まえて述べてみたい。

荒屋敷遺跡の西方約150ｍ、現在の阿武隈川沿いには伊達市指定文化財の伏黒河岸寄蔵（伊達市伏黒字川岸）がある。伏黒河岸寄蔵は、寛文年間（1661～1673年）以降、福島盆地の阿武隈川沿岸に14箇所設置された寄蔵の一つ（福島県立博物館1988）で、現存する唯一のものとされる。近世には、伏黒河岸寄蔵に年貢米が貯蔵され、廻米として運び出されていた（竹川1993）。したがって、近世には当地が阿武隈川の舟運を利用した物流拠点としての性格を持った場所であることが、兼ねてより指摘されていたわけだが、今回の調査により、それが中世前期にまで遡ることが明らかとなったといえる。

さらに、古墳時代終末期の須恵器台付長頸瓶（図54－14）が出土したことが特筆される。台付長頸瓶は、器形や胎土の特徴等から静岡県西部の湖西窯跡群の製品とみられる。東北地方においては、湖西窯跡群を含む東海産須恵器は、城柵・官衙遺跡や拠点的集落を除けば、墳墓から出土するものがほとんどである（佐藤2010）。荒屋敷遺跡の周囲に墳墓は確認されていないこと、北東約２㎞離れた阿武隈川の対岸には拠点的集落である桑折町沖船場遺跡（桑折町教育委員会2010、菅原

2013)があること等から、調査区外に拠点的集落が存在する可能性もあろう。

また、今回の調査では、古墳時代前期の遺構は確認されなかったが、該期の土師器も多数出土した。近年、須賀川市高木遺跡の発掘調査が行われ、中通りにも古墳時代前期の大規模集落が存在することが明らかにされた(福島県教育委員会2019)。同遺跡は、阿武隈川に沿って形成された自然堤防上に立地しており、その点で荒屋敷遺跡と共通する。このため、荒屋敷遺跡でも大規模集落とまではいかなくとも、調査区外に該期の集落跡が存在する可能性は高い。

なお、福島盆地の阿武隈川の舟運については、古墳時代以前からの利用が考えられるとの指摘もある(荒木2016)。荒屋敷遺跡で行われた確認調査では、今回の調査区より北西に約60ｍの箇所で弥生時代後期末頃の遺構・遺物が検出されている(福島県教育委員会2017)。以上のことを考慮に入れると、荒屋敷遺跡の中世前期の遺構群は、このような前代から続く土地利用があって成立したものと捉えることもできよう。

荒屋敷遺跡の調査は、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適応された(本書序章第１節参照)ため、遺跡範囲の一部に留まったが、多大な成果が得られた。この成果は、当該地区の歴史を考える上で必要不可欠なものであることを指摘し、調査のまとめとしたい。　　(丹　治)

引用参考文献

会津坂下町教育委員会　1992 『阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書　古館遺跡・高畑遺跡』会津坂下町文化財調査報告書第27集
荒木隆　2016 「交通路から見た陸奥南部におけるヤマト政権の地域支配－古墳群･祭祀遺跡･推定交通路から読み解く－」『福島県立博物館紀要』第30号　福島県立博物館
飯村均　1992 「福島県の中世窯業」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会
飯村均　1995 「９．中世陶器［５］東北諸窯」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
飯村均　2009 『中世奥羽のムラとマチ　考古学が描く列島史』東京大学出版会
梅宮茂　1981 「伊達町郷土史研究ノート(二)　光台寺板碑と中世文化」『第七号　郷土の研究』伊達町郷土史研究会伏黒部会
江崎武　1985 「中世地下式壙の研究」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部
菊地逸夫　2003 「２　陸奥の陶器生産　(６)一本杉窯跡群」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会
桑折町教育委員会　2010 『沖船場遺跡発掘調査報告書(第１、２、３次調査)』
齋藤良治　2011 「丸森町大古町遺跡－古代末から中世初頭の出土陶磁器」『アジア流域文化研究　Ⅶ』東北学院大学アジア流域文化研究所
(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995 『下古館遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第166集
佐藤敏幸　2010 「東北地方における７～８世紀の東海産須恵器の流通」『北杜・辻秀人先生還暦記念論集』辻秀人先生還暦記念論集刊行会
菅原祥夫　2013 「陸奥南部の国造域における大化前後の在地社会変化と歴史的意義」『日本考古学』第35号　日本考古学協会
竹川重男　1993 「近世後期阿武隈川河岸の存在形態－信達地方を中心に－」『阿武隈川水運史研究』株式会社ヨークベニマル
福島県教育委員会　2017 『福島県内遺跡分布調査報告24』福島県文化財調査報告書第521集
福島県教育委員会　2019 『阿武隈川上流河川改修事業　高木地区遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第531集
福島県考古学会中近世部会　1997 「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－(その２)」『福島考古』第38号　福島県考古学会
福島県立博物館　1988 『江戸時代の流通路－米のゆく道、塩のくる道』福島県立博物館
藤澤良祐　1995 「９．中世陶器［１］古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
梁川町教育委員会　1987 『八郎窯跡群』梁川町文化財調査報告書第12集
山本信夫　1995 「11．貿易陶磁器［２］中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
宮城県教育委員会　1996 『一本杉窯跡群』

第５編　総　　括

第１章　事業の総括

第１節　相馬福島道路遺跡発掘調査事業の経過

相馬福島道路に関する遺跡の調査報告書は、『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告』（※以下、『阿武隈東』と略す。）と『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告』（※以下、『相馬福島』と略す。）の２つに分かれている。阿武隈東道路遺跡発掘調査事業は３冊、一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査事業は８冊、計11冊の報告書が刊行された。さらに、本発掘調査を実施した遺跡の試掘・確認調査の成果については、『福島県内遺跡分布調査報告』（※以下、『県内分布』と略す。）に掲載されている。これらの事業の経過及び掲載報告書について、表１・２にまとめた。

一般国道115号相馬福島道路は、浜通り側から、相馬西道路、阿武隈東道路、阿武隈東～阿武隈、霊山道路、霊山～福島と５つの区間に分かれている。このうち、埋蔵文化財の調査が最初に着手されたのは阿武隈東道路で、分布調査が2003年に実施された。本発掘調査は2006年度から開始され、相馬市の荻平遺跡・小豆畑遺跡・小田原遺跡の調査成果が報告書として刊行（『阿武隈東１～３』）され、一度事業が終了している。

2009年には霊山道路区間の分布調査が実施されたが、試掘・確認調査の実施は未定であった。その後、2011年に発生した東日本大震災からの早期復興を図るために、福島市から相馬市までの全区間が緊急整備されることになる。それを受けて、2012年に相馬西道路及び阿武隈東～阿武隈区間の分布調査、霊山道路区間の試掘・確認調査が実施された。霊山道路区間では、保存が必要と判断された遺跡があり、翌年から本発掘調査が行われることとなった。

2013年度からの本発掘調査では、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適用されることとなり、盛土区間に関しては、圧密沈下の計算により盛土下の遺構に影響を及ぼさないと判断された箇所については、本発掘調査は実施されなかった。また、震災からの復興に向けて整備される相馬福島道路の早期着工に対応するため、迅速に調査が実施できるよう、2013年度から他県の財団から職員を派遣してもらい、2018年度まで同様の体制で調査を実施した。

2013年度には、相馬西道路及び阿武隈東～阿武隈区間でも保存が必要な遺跡が確認された。相馬西道路では相馬市東羽黒平遺跡（１次）、阿武隈東～阿武隈区間では相馬市の向山遺跡（１次）・姥ヶ岩遺跡、霊山道路区間では伊達市の宝直館跡・行合道Ｂ遺跡・熊屋敷Ｂ遺跡・川向遺跡の本発掘調査を実施した。また、霊山道路及び霊山～福島区間のうち、伊達市霊山町石田地区から桑折町松原地区までの間で分布調査が実施された。

2014年度の試掘・確認調査では、阿武隈東～阿武隈及び霊山道路区間で保存を要する遺跡が確認された。本発掘調査が実施されたのは、相馬市の東羽黒平遺跡（２次）・向山遺跡（２次）、伊達市の庚申向Ａ遺跡である。また、伊達市の福田遺跡・沼ヶ入遺跡は保存範囲が示されたが、次年度

表１　本発掘調査

市町村	調査年	遺跡名	調査面積(㎡)	時期	報告書
相馬市山上	2007 年	荻平遺跡（１次）	3,300	縄文・平安	阿武隈東１
相馬市山上	2008 年～ 2009 年	荻平遺跡（２次）	23,600	縄文・弥生・平安	阿武隈東２
相馬市山上	2008 年	小豆畑遺跡	800	中世～近世	阿武隈東２
相馬市山上	2009 年	荻平遺跡（３次）	8,000	縄文	阿武隈東３
相馬市山上	2009 年	小田原遺跡	5,400	縄文・平安	阿武隈東３
相馬市今田	2013 年	東羽黒平遺跡（１次）	4,350	縄文・平安	相馬福島１
伊達市月舘町	2013 年	宝直館跡	1,600	縄文・中近世	相馬福島２
伊達市月舘町	2013 年	行合道Ｂ遺跡	1,900	縄文・平安・中近世	相馬福島２
伊達市霊山町	2013 年	熊屋敷Ｂ遺跡	1,100	縄文・中近世	相馬福島２
相馬市東玉野	2013 年	姥ヶ岩遺跡	1,000	中近世	相馬福島２
伊達市霊山町	2013 年	川向遺跡	2,400	縄文	相馬福島２
相馬市東玉野	2013 年～ 2014 年	向山遺跡（１・２次）	7,250	縄文・奈良～平安、近世	相馬福島３
伊達市霊山町	2014 年	庚申向Ａ遺跡	1,700	縄文・中近世	相馬福島３
相馬市山上	2015 年	横川Ｂ遺跡	1,600	近世	相馬福島４
相馬市今田	2014 年～ 2015 年	東羽黒平遺跡（２・３次）	1,300	縄文・平安	相馬福島４
伊達市霊山町	2015 年	福田遺跡	1,100	中世	相馬福島５
伊達市霊山町	2015 年	沼ヶ入遺跡（１次）	1,300	縄文・中世・近世	相馬福島５
伊達市霊山町	2015 年	上ノ台遺跡	900	縄文・中世以降	相馬福島５
伊達市霊山町	2016 年	沼ヶ入遺跡（２次）	4,000	中世	相馬福島６
伊達市霊山町	2016 年	上ノ台館跡（１次）	8,700	縄文・中世	相馬福島６
桑折町松原	2016 年	川原田遺跡	3,700	縄文・古代	相馬福島６
桑折町成田	2016 年	馬場遺跡	600	中・近世	相馬福島６
桑折町成田	2016 年	新宿遺跡	1,850	縄文・奈良・平安・中世・近世	相馬福島６
伊達市霊山町	2017 年	上ノ台館跡（２次）	1,500	古代・中世・近世	相馬福島７
伊達市保原町	2017 年～ 2018 年	中室内遺跡（１・２次）	2,800	古墳・古代・中世	相馬福島７
桑折町松原	2017 年	日照田遺跡	2,800	縄文・古代・中世	相馬福島７
桑折町松原	2017 年	舘ノ前遺跡	1,600	縄文・平安	相馬福島７
伊達市霊山町	2018 年	上ノ台館跡（３次）	5,400	中世	相馬福島８
伊達市保原町	2018 年	田向遺跡	2,500	縄文・中近世	相馬福島８
伊達市保原町	2018 年	中室内遺跡（３次）	1,000	古墳・古代	相馬福島８
伊達市伏黒	2018 年	荒屋敷遺跡	1,950	古墳・古代・中世	相馬福島８

に本発掘調査が行われることとなった。阿武隈東～阿武隈区間は同年度中に試掘・確認調査が終了し、同区間の調査は全て終了した。

2015年度には、相馬西道路区間で残っていた試掘・確認調査が実施されるとともに、相馬市の東羽黒平遺跡（３次）・横川Ｂ遺跡の本発掘調査を行い、同区間の調査は全て終了した。一方、霊山道路の区間では、前年度の試掘・確認調査で発見されていた伊達市の福田遺跡・沼ヶ入遺跡（１次）の本発掘調査も実施された。さらに、霊山～福島区間でも試掘・確認調査が本格化し、伊達市上ノ台館跡と隣接する同市上ノ台遺跡で保存が必要と判断された。上ノ台遺跡については同年度中に本発掘調査が実施された。東北自動車道と接続する箇所に近い桑折町松原地区では、川原田遺跡で保存が必要な箇所が見つかり、伊達市上ノ台館跡とともに翌年度に本発掘調査が行われることとなった。また、霊山～福島区間で工事箇所が追加されたため、当該箇所の分布調査を実施した。

2016年度当初に、未試掘部が残っていた伊達市沼ヶ入遺跡の試掘・確認調査が行われ、保存が必要と判断された。このため、伊達市では沼ヶ入遺跡（２次調査）と上ノ台館跡（１次調査）の本発掘調査が実施された。桑折町では、同年度中に行われた試掘・確認調査により、新宿遺跡で保存が必要と判断された他、新規に馬場遺跡が発見され、川原田遺跡・馬場遺跡・新宿遺跡の３遺跡の本発

表２　分布調査、試掘・確認調査一覧

調査種別	市町村	調査年	遺跡名	要保存面積（㎡）	区間	備考	報告書
分布調査	相馬市山上～玉野	2003年			阿武隈東道路		県内分布９
試掘調査	相馬市山上	2006年	SM－B⑤(荻平遺跡)	5,000	阿武隈東道路		県内分布13
確認調査	相馬市山上	2007年	荻平遺跡	21,900	阿武隈東道路		県内分布14
試掘調査	相馬市山上	2007年	SM－B①(小豆畑遺跡)	800	阿武隈東道路		県内分布14
分布調査	伊達市霊山町石田～下小国	2007年			霊山道路		県内分布14
試掘調査	相馬市東玉野	2008年	SM－B③	20	阿武隈東道路	本発掘調査は実施せず	県内分布15
確認調査	相馬市山上	2008年	荻平遺跡	8,000	阿武隈東道路		県内分布15
試掘調査	相馬市山上	2008年	SM－B⑦（小田原遺跡）	5,400	阿武隈東道路		県内分布15
分布調査	伊達市霊山町石田	2009年			霊山道路		県内分布17
分布調査	相馬市今田～山上	2012年			相馬西道路		県内分布19
確認調査	伊達市月舘町布川	2012年	宝直館跡	2,800	霊山道路		県内分布20
確認調査	伊達市月舘町布川	2012年	宝直遺跡	2,000	霊山道路		県内分布20
確認調査	伊達霊山町石田	2012年	熊屋敷Ｂ遺跡	1,100	霊山道路		県内分布20
試掘調査	伊達市霊山町石田	2012年	DT－Ｂ９（行合道Ｂ遺跡）	1,200	霊山道路		県内分布20
試掘調査	伊達市霊山町石田	2012年	DT－B14（川向遺跡）	500	霊山道路		県内分布20
分布調査	相馬市東玉野～伊達市霊山町石田	2012年			阿武隈東～阿武隈		県内分布20
試掘調査	相馬市今田	2013年	SM－B⑤(東羽黒平遺跡)	4,800	相馬西道路		県内分布21
試掘調査	相馬市東玉野	2013年	SM－B⑯（姥ヶ岩遺跡）	1,000	阿武隈東～阿武隈		県内分布21
試掘調査	相馬市東玉野	2013年	SM－B⑲（向山遺跡）	5,300	阿武隈東～阿武隈		県内分布21
確認調査	伊達市霊山町石田	2013年	DT－B14（川向遺跡）	1,900	霊山道路		県内分布21
分布調査	伊達市霊山町下小国～桑折町松原	2013年			霊山道路、霊山～福島		県内分布21
試掘調査	相馬市山上	2014年	SM－B⑨(横川Ｂ遺跡)	1,600	相馬西道路		県内分布22
確認調査	相馬市東玉野	2014年	SM－B⑲（向山遺跡）	1,700	阿武隈東～阿武隈		県内分布22
試掘調査	伊達市霊山町石田	2014年	DT－B18（庚申向Ａ遺跡）	4,300	霊山道路		県内分布22
試掘調査	伊達市霊山町石田	2014年	DT－B17（庚申向Ｂ遺跡）	500	霊山道路		県内分布22
試掘調査	伊達市霊山町下小国	2014年	DT－B21（沼ヶ入遺跡）	4,400	霊山道路		県内分布22
試掘調査	伊達市霊山町下小国	2014年	DT－Ｂ３（福田遺跡）	1,100	霊山道路		県内分布22
試掘調査	伊達市霊山町下小国	2015年	DT－B22（下小国荒屋敷遺跡）	3,600	霊山道路	本発掘調査は実施せず	県内分布23
測量調査	伊達市霊山町下小国	2015年	上ノ台館跡	11,900	霊山～福島		県内分布23
確認調査	伊達市霊山町下小国	2015年	上ノ台館跡	3,700	霊山～福島		県内分布23
試掘調査	伊達市霊山町下小国	2015年	DT－B34（上ノ台遺跡）	600	霊山～福島		県内分布23
試掘調査	桑折町松原	2015年	QR－Ｂ２（川原田遺跡）	3,700	霊山～福島		県内分布23
分布調査	伊達市保原町大柳	2015年			霊山～福島		県内分布23
試掘・確認調査	伊達市霊山町下小国	2016年	DT－B21（沼ヶ入遺跡）	4,000	霊山道路		県内分布24
確認調査	伊達市霊山町下小国	2016年	上ノ台館跡	300	霊山～福島		県内分布24
試掘調査	伊達市伏黒	2016年	DT－B33（荒屋敷遺跡）	2,400	霊山～福島		県内分布24
試掘調査	桑折町成田	2016年	QR－Ｂ１（新宿遺跡）	1,600	霊山～福島		県内分布24
試掘調査	桑折町松原	2016年	QR－Ｂ３（日照田遺跡）	3,900	霊山～福島		県内分布24
試掘調査	桑折町松原	2016年	QR－Ｂ４（舘ノ前遺跡）	3,600	霊山～福島		県内分布24
試掘調査	伊達市保原町上保原	2017年	DT－B29（田向遺跡）	1,300	霊山～福島		県内分布25
確認調査	伊達市保原町上保原	2017年	中室内遺跡	4,500	霊山～福島		県内分布25
確認調査	伊達市伏黒	2017年	荒屋敷遺跡	3,000	霊山～福島		県内分布25
試掘調査	伊達市伏黒	2017年	DT－B33（荒屋敷遺跡）	2,800	霊山～福島		県内分布25
試掘調査	伊達市保原町上保原	2018年	DT－B29（田向遺跡）	4,100	霊山福島		県内分布26
確認調査	伊達市保原町上保原	2018年	中室内遺跡	1,000	霊山福島		県内分布26

掘調査が実施された。また、伊達市の荒屋敷遺跡、桑折町の日照田遺跡・舘ノ前遺跡でも保存が必要な箇所が見つかり、次年度以降に本発掘調査が実施されることになった。

2017年度は、伊達市の田向遺跡・中室内遺跡・荒屋敷遺跡で保存が必要な箇所が見つかった。このうち、中室内遺跡については同年度中に本発掘調査が実施された。また、前年度までの試掘・確認調査で保存が必要とされた桑折町の日照田遺跡・舘ノ前遺跡、伊達市の上ノ台館跡（２次調査）についても、本発掘調査が実施された。

2018年度は、前年度までに要保存範囲が確定していた上ノ台館跡（３次）・荒屋敷遺跡と併せて、2018年度に行われた試掘・確認調査で要保存となった中室内遺跡（３次）と田向遺跡の本発掘調査が実施され、同年中で相馬福島道路に関わる全ての調査が終了した。

本発掘調査は延べ12年に渡って行われた。本発掘調査を実施した遺跡は、相馬市・伊達市・桑折町の３市町24遺跡、調査面積は106,200㎡に及ぶ。これらの遺跡の調査では、様々な時代の遺構・遺物が確認された。以下、時代を追ってこれまでの調査成果を再確認したい。

第２節　各時代の遺構・遺物

縄文時代

縄文時代の遺構・遺物は、相馬市～桑折町で見つかっているが、特に、相馬市～伊達市霊山町にかけての遺跡で多く検出された。遺跡名としては、相馬市の東羽黒平遺跡・荻平遺跡・小田原遺跡、伊達市の宝直館跡・行合道Ｂ遺跡・熊屋敷遺跡・川向遺跡・庚申向Ａ遺跡・上ノ台館跡・上ノ台遺跡等が挙げられる。

この中でも、相馬市荻平遺跡では多数の遺構・遺物が確認された。縄文時代早期～晩期までの時期の竪穴住居跡が確認されたが、早期末葉～前期初頭の時期のものが最も多く、斜面地に立地する小規模な住居跡と貯蔵穴を持つ集落跡の存在が明らかとなった（『阿武隈東１～３』）。

相馬市東羽黒平遺跡では、竪穴住居跡の検出は１軒に留まったが、遺物包含層中から後期前葉を中心とする時期の遺物が多数出土しており、土製腕輪、スプーン状の土製品、石刀、石棒、ハート形土偶の頭部等が注目される遺物である（『相馬福島１・４』）。

相馬市小田原遺跡では、晩期の遺構・遺物が見つかり、早期～前期及び後期の土器が出土した。小田原遺跡の調査では、竪穴住居跡は確認されなかったが、県営かんがい排水事業に伴って行われた本発掘調査（福島県教育委員会1998）でも、縄文時代早期・中期・後期の遺物が出土していることから、未調査箇所に複数の時期の集落跡が存在すると推定されている（『阿武隈東３』）。

この他、伊達市内の遺跡では、宝直館跡では早期・前期、熊屋敷Ｂ遺跡では前期・後期・晩期、川向遺跡では後期・晩期、上ノ台遺跡及び上ノ台館跡では中期～晩期の遺構・遺物が確認された（『相馬福島２・５・６』）。

伊達市保原町から桑折町にかけては、伊達市の田向遺跡・中室内遺跡、桑折町の新宿遺跡・川原

田遺跡・日照田遺跡・舘ノ前遺跡で遺構・遺物が確認されたが、遺物の出土量は各遺跡とも１～10数点と少ない(『相馬福島６～８』)。遺構が確認されたのは、伊達市の田向遺跡、桑折町の川原田遺跡・日照田遺跡・舘ノ前遺跡で、いずれも落し穴が大半である。これらの４つの遺跡に共通する点として、山地と段丘の境界付近の盆地端部に立地している点が指摘できる。今後、同様の立地の場所で調査が行われた際にも落し穴が検出される可能性が高いと考えられる。これまで、福島盆地北部では確認されている遺跡数が少なく、集落跡については不明な点が多かったが、残念ながら相馬福島道路関連の調査でも新たな知見は得られなかった。今後の調査に期待したい。

弥生時代

弥生時代の遺構・遺物が確認された遺跡は少なかった。遺構は、相馬市荻平遺跡(『阿武隈東２』)と伊達市荒屋敷遺跡(『県内分布24』)で確認された。相馬市荻平遺跡では、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期初頭の竪穴住居跡が１軒、弥生時代前期後葉～中期前葉の竪穴住居跡が１軒見つかっている。伊達市荒屋敷遺跡の試掘・確認調査では、弥生時代後期の遺構・遺物が確認されたが、当該箇所は工事の工法が盛土であることから、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適用されたため、本発掘調査は実施されなかった。

この他、桑折町川原田遺跡では、弥生時代中期中葉頃の壺が１点(『相馬福島６』)、伊達市中室内遺跡では、後期の土器片が出土した(『相馬福島８』)。

古墳時代

相馬市荻平遺跡からは、古墳時代の土師器が２点出土したが、遺構に伴うものではなく、これ以外に同時期の遺構・遺物は確認されなかった(『阿武隈東２』)。伊達市行合道Ｂ遺跡でも、試掘・確認調査時に古墳時代中期～後期の土器が１点見つかったが(『県内分布20』)、他に遺構・遺物は確認されなかった。両遺跡とも山間部に立地するという点で共通するが、古墳時代の竪穴住居跡がどのような箇所につくられたかといった情報は得られなかった。

一方、伊達市中室内遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居跡が８軒見つかった(『相馬福島７』)。住居跡からは前期中葉頃の土師器が出土した。集落跡と認識できる古墳時代前期の遺跡としては、福島盆地内では数少ない事例である。住居跡は上部が削平されていたため、遺存状況は悪かったが、炉や貯蔵穴を持つ、４・５・７号住居跡等が確認された。

伊達市荒屋敷遺跡では、古墳時代前期・終末期の土器が出土したが、古墳時代の遺構に伴うものは少なかった(『相馬福島８』)。特に前期の土器が多数出土したが、竪穴住居跡は確認されなかった。調査区内は中世の遺構が多いため、前期の遺構はそれによって壊されたか、あるいは、調査区外に集落跡が存在する可能性がある。特徴的な出土遺物としては、前期頃とみられる管玉や終末期の須恵器台付長頸瓶がある。管玉は遺構外からの出土であった。管玉を含む玉類は、玉類製作遺跡以外では墳墓から出土することが多い。荒屋敷遺跡では、少なくとも調査区内には玉類を製作した

痕跡はなく、墳墓と考えられる古墳時代前期の遺構も確認されていないため、評価が難しい。須恵器台付長頸瓶についても、遺構外からの出土であったが、静岡県西部の湖西産とみられ注目される。湖西産を含む東海産須恵器は、墳墓や城柵・官衙遺跡の他には拠点的集落から出土する。このため、調査区外に終末期の拠点的集落が存在する可能性も示唆される。

この他、伊達市田向遺跡でも細片１点だが、古墳時代前期の土師器が出土した(『相馬福島８』)。

以上のように、相馬福島道路関連の調査では、古墳時代の遺構が確認された遺跡は少なかった。しかし、阿武隈川の旧河道に沿って形成され自然堤防上から古墳時代前期の集落跡や遺物が確認され、これまで明確でなかった前期の集落立地が明らかになってきたことは成果の一つといえる。

古　代

平安時代の遺構・遺物が確認されたのは、相馬市の東羽黒平遺跡・荻平遺跡・向山遺跡、伊達市の行合道Ｂ遺跡・上ノ台館跡・田向遺跡・中室内遺跡、桑折町の新宿遺跡・川原田遺跡・日照田遺跡・舘ノ前遺跡と調査事例が多く、遺跡の立地も山間部から低地部までと多岐に及んでいる(『阿武隈東１・２』、『相馬福島１～３・６～８』)。このうち、奈良時代の遺構・遺物が確認されたのは、相馬市向山遺跡と桑折町新宿遺跡で、他は平安時代である。

相馬市荻平遺跡では、平安時代の竪穴住居跡が18軒見つかっている、山間部に立地する遺跡としては規模の大きな集落跡である(『阿武隈東１・２』)。また、13号焼土遺構は鍛冶関連の遺構とされる。竪穴住居跡や土坑からは、椀形滓や粒状滓等の鍛冶滓及び羽口が出土している。鉄製品が多く出土していることからも、集落内で鍛冶が行われていた可能性が高いが、13号焼土遺構以外に鍛冶関連の遺構が認められないことから、集落内の製品を生産する程度の小規模なものと推定される。荻平遺跡は、山間部の開発に伴って形成された集落と考えられており、さらに仏具模倣土器・灰釉陶器・石製銙帯具が出土したことから、地域の有力者や富裕層が開発に関与して、集落の開発が行われたと評価されている。

桑折町日照田遺跡では、自然流路の中から多量の遺物が出土したが、出土遺物中には灰釉陶器が含まれており、施釉陶器模倣の土師器高台付皿も確認されている(『相馬福島７』)。また、日照田遺跡に隣接する同町川原田遺跡では、緑釉陶器が出土し、この他、廂が伴う可能性が高い掘立柱建物跡や土師器耳皿も見つかっている(『相馬福島６』)。一般集落ではなく、寺院あるいは官衙関連の遺跡に伴う遺構・遺物が、隣接した遺跡で検出したされたことは注目される。

中世・近世

中・近世の遺跡は、相馬市の小豆畑遺跡・横川Ｂ遺跡・向山遺跡、伊達市の宝直館跡・行合道Ｂ遺跡・熊屋敷Ｂ遺跡・姥ヶ岩遺跡・庚申向Ａ遺跡・福田遺跡・沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡・中室内遺跡・田向遺跡・荒屋敷遺跡、桑折町の馬場遺跡・日照田遺跡等数多く調査が行われた(『阿武隈東２』、『相馬福島２・４～８』)。

中世を中心とした時期の遺跡として特筆できるのは、伊達市霊山町と同市保原町・同市伏黒地区及び桑折町成田地区で確認された遺跡である。伊達市霊山町の行合道Ｂ遺跡では、中世後半～近世初頭の木炭窯跡が８基検出された(『相馬福島２』)。これらの木炭窯跡は、①地山をくり抜いた地下式構造、②焼成部の形態が円形もしくは横に主軸をもつ楕円形を呈する、③煙道部が40°～60°の傾斜で立ち上がる、④排煙口に石組構造を持つ、⑤前庭部や作業場を持つ、といった特徴を有する。これまで知られていた、古代の地下式構造のものや、近世・近代に構築された大竹式木炭窯とは異なる構造のもので、木炭窯に関する新たな知見が得られた。

伊達市霊山町の下小国地区の上ノ台館跡・沼ヶ入遺跡・福田遺跡は近接した位置にある遺跡である。上ノ台館跡は、尾根上にある城館跡の中心となる箇所について、ほぼ全面的に発掘調査を実施した(『相馬福島６～８』)。その結果、全体的に簡易的なつくりの城館跡であることがわかり、館跡に伴う掘立柱建物跡、柱列跡、堀跡、平場等の遺構を検出することができた。館跡が機能していた時期は、出土した瓦質土器から15～16世紀頃と推定される。上ノ台館跡の平場や建物跡・柱列跡等の構築に当たっては、東や南側の眼下にある中村街道を意識していたと考えられる。そして、中村街道を挟んで反対側には沼ヶ入遺跡と福田遺跡がある。沼ヶ入遺跡では、梁行が狭く細長い建物跡、廂を伴う建物跡、中世の方形竪穴建物跡等が見つかり、出土した青磁や古銭等から、15世紀頃の屋敷跡と推定される(『相馬福島５・６』)。福田遺跡では、張出し部のつく中世の方形竪穴建物跡や15世紀頃のかわらけが検出された(『相馬福島５』)。

これらの３遺跡は、中村街道を挟んで近接した位置に立地し、出土遺物の年代観も近いため、密接な関係が想定される。具体的には、沼ヶ入遺跡・福田遺跡は、平時には屋敷等の居住地として利用された場所で、上ノ台館跡は、周囲の見張りや戦時の臨時使用場所として利用されていたと推測される。

伊達市保原町の中室内遺跡では、中世の屋敷跡及びそれらを区画する堀跡の一部を調査した(『相馬福島７』)。堀跡は、調査区内ではＬ字形に屈曲し、長さが、南北44ｍ以上、東西33ｍ以上、幅３～４ｍ、深さ１～1.6ｍという大規模なものであった。中世の出土遺物は少なかったが、１次調査では15～16世紀頃の瓦質土器の風炉が出土しており、屋敷跡は当該期に機能していたと考えられる。中室内遺跡の城主等に関する記載は文献には認められないが、伊達氏と関連する遺跡からの出土が多い瓦質土器の風炉が出土していることや、中室内遺跡が立地する箇所が、伊達家初代朝宗の居城とされる高子館跡に近接していることは注目される。

伊達市伏黒地区の荒屋敷遺跡は阿武隈川の旧河道に沿って形成された自然堤防上に立地する遺跡で、中世の遺構が多く見つかった(『相馬福島８』)。出土した陶磁器は、伊達市八郎窯跡等と近似した胎土の在地産陶器や、東海産の古瀬戸、中国産の白磁・青磁等が出土した。これらの年代は概ね13世紀代のものを中心としており、鎌倉時代頃の遺跡であることが判明した。遺構では、全ての柱穴の底面に根石が敷かれた８本柱の方形竪穴建物跡が確認された。この建物跡は、その構造的な特徴から物資を収納する倉庫と推定される。この建物跡や阿武隈川のすぐそばに立地していること

等から、荒屋敷遺跡は「津（＝川湊）」としての機能を有した遺跡とも考えられる。また、磬や香炉といった仏教関係の鉄製品が出土したことも注目される。調査区から北東に約600ｍの箇所に位置する光台寺には、荒屋敷遺跡出土遺物の年代と符合する正応二年（1289年）の記年銘が認められる板碑があり、これらは荒屋敷遺跡の近隣で見つかったとされる。これらのことから、近隣に仏教施設が存在していた可能性もある。

伊達市霊山町から同市伏黒地区にかけて位置する、上ノ台館跡・福田遺跡・沼ヶ入遺跡・中室内遺跡・荒屋敷遺跡は、まさに伊達氏が福島盆地を治めた時代の遺跡である。相馬福島道路の調査では、中世の伊達郡や伊達氏を考える上で、貴重な資料が得られたと評価できる。

一方、伊達市伏黒地区の荒屋敷遺跡と阿武隈川を挟んだ対岸に位置する桑折町成田地区の新宿遺跡では、１号道跡と呼称した中世の道跡が見つかった。１号道跡は、近世の奥州街道に比定される県道353号線に平行して南北に延びている。そのため、１号溝跡は、その前段階の主要な幹線道路、すなわち、中世の主要街道である「奥の大道」と想定され、こちらも注目すべき調査成果が得られた。

中世は、伊達氏が伊達郡を本拠とした時期であるが、これまでは、その時期の資料は限られていた。一連の調査で、中世伊達郡の一端を示す成果が得られたことが、相馬福島道路関連の発掘調査においては、大きな成果と言える。

近世以降の調査として特筆できるのは、相馬市向山遺跡と伊達市田向遺跡である。相馬市向山遺跡では、17世紀中頃～後半と推定される製鉄炉跡２基及びそれに伴う廃滓場が検出された（『相馬福島３』）。また、17世紀後半～18世紀後半の墓壙が２基見つかり、六文銭や数珠・和鋏・和鏡・煙管・火箸等といった副葬品が出土した。和鏡は墓壙の年代よりも古いもので、15～16世紀頃のものと推定される伝世品である。

伊達市田向遺跡では、屋敷跡を構成する柱穴とみられる小穴群とともに、それらを区画する溝跡や道路跡と推定される溝跡が検出された（『相馬福島８』）。区画溝からは、18世紀後半～19世紀初頭頃の陶磁器が多数出土した。屋敷跡や区画溝の位置は、明治期の地籍図や、18世紀頃の『上保原村絵図』に描かれたものとほぼ一致しており、文献史料を裏付ける貴重な成果が得られた。

結　語

相馬福島道路の発掘調査で確認された遺跡は、縄文時代から近世までの様々な時代のものである。また、浜通りの相馬市から中通りの桑折町までを調査したため、遺跡が立地する地形も多岐に及んでいる。今後、これらの調査で得られた資料・知見が多くの人に知っていただけるように努めるとともに、様々な分野・場面で活用されていくことを期待したい。（鶴　見）

引用参考文献

福島県教育委員会　1998 「小田原遺跡」『相馬第二地区遺跡発掘調査報告Ⅰ』福島県文化財調査報告書第340集

付　章　上ノ台館跡出土炭化物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台に所在する上ノ台館跡は、丘陵上に立地する中世の館跡である。本分析調査では、中世および時期不明の遺構から出土した炭化材について樹種同定を行い、当時の木材利用について資料を得るとともに、放射性炭素年代測定を実施し、各遺構の年代観について資料を得る。

1　試　　料

樹種同定・年代測定を行う試料は、遺構から検出された炭化材11点である。小さなものは数ミリの破片多数入っており、大きなものは１～数センチの炭化材が１～３個入っている。試料の詳細は表１に示す。

2　分析方法

（１）樹種同定

試料観察の結果、細片試料はいずれも同じ種類の可能性が高い。このため、最も大きな一片を抜き出して樹種同定を行い、その他の試料で年代測定を行う。大きめの炭化材が１～３個体入っている試料は、一番大きな試料を対象にする（これも観察の結果同一樹種であると考えられる）。同定には年代測定用にトリミングを行った残滓を用いる。剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成し、電子顕微鏡で観察する。

木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

（２）放射性炭素年代測定

細片試料は実体顕微鏡下で泥などの付着物を除去する。１個体の試料は、周囲を削り落として50㎎程度に調整する。削り落とした部分は樹種同定に用いる。試料は、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA : Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に１mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１㎜の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C－AMS専用装置（NEC社製）を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX－Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA－C６等）、バックグラウンド試料（IAEA－C１）の測定も行う。δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma ; 68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年

較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.3(Bronk, 2009)、較正曲線はIntcal13 (Reimer et al., 2013)である。

3　結　　果

(1)樹種同定

結果を表1に示す。検出された種類は針葉樹1種類(マツ属複維管束亜属)、広葉樹3種類(コナラ亜属コナラ節、クリ、カエデ属)である。比較的重硬で、炭として残りやすいクリが多い。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus subgen. Diploxylon*)　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*)　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*)　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・カエデ属(*Acer*)　カエデ科

散孔材で、管壁の横断面は角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。

(2)放射性炭素年代測定

結果を表2、図1に示す。すべての試料で定法での処理を行い、加速器質量分析装置を用いた年代測定に必要な炭素量が回収できている。測定の結果、FB-KNT2-01が325±20BP、FB-KNT2-02が310±20BP、FB-KNT2-03が555±20BP、FB-KNT2-04が625±20BP、FB-KNT2-05が355±20BP、FB-KNT2-06が295±20BP、FB-KNT2-07が180±20BP、FB-KNT2-08が300±20BP、FB-KNT2-09が330±20BP、FB-KNT2-10が290±20BP、FB-KNT2-11が290±20BPである。

暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の

表1　上ノ台館跡の樹種同定結果

試料番号	出土位置			樹種	備考
	遺構名	層位	年代		
FB-KNT2-01	SK7	ℓ1	不明	クリ	割材　2～3年
FB-KNT2-02	SK8	ℓ1	不明	クリ	割材　2～3年
FB-KNT2-03	SK9	ℓ1	不明	カエデ属	割材　2～3年
FB-KNT2-04	SX2	ℓ1	不明	コナラ亜属コナラ節	みかん割材　30年+
FB-KNT2-05	SB1-P1	ℓ1	中世	クリ	割材　2～3年
FB-KNT2-06	SB1-P7	ℓ1	中世	クリ	割材　2～3年
FB-KNT2-07	SA6-P1	ℓ1	中世	マツ属複維管束亜属	破片多数
FB-KNT2-08	SA7-P2	ℓ1	中世	クリ	割材　4年+
FB-KNT2-09	L18-P2	ℓ1	中世	クリ	割材　4年+
FB-KNT2-10	L18-P4	ℓ1	中世	クリ	破片多数
FB-KNT2-11	K20-P1	ℓ1	中世	クリ	割材　7年+

表２　上ノ台館跡の放射性炭素年代測定結果

試料	遺構	方法	補正年代（暦年較正用）BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
						年代値		確率%		
KNT2 01	ＳＫ７	AAA（１M）	325±20（326±21）	−24.9±0.2	σ	cal AD 1515 − cal AD 1530	435 − 421 calBP	10.4	TKA−20309	pal−11632
						cal AD 1540 − cal AD 1598	411 − 352 calBP	44.3		
						cal AD 1618 − cal AD 1635	333 − 315 calBP	13.5		
					2σ	cal AD 1489 − cal AD 1603	461 − 347 calBP	75.8		
						cal AD 1611 − cal AD 1642	340 − 309 calBP	19.6		
KNT2 02	ＳＫ８	AAA（１M）	310±20（311±21）	−25.1±0.2	σ	cal AD 1522 − cal AD 1575	429 − 375 calBP	50.6	TKA−20310	pal−11633
						cal AD 1586 − cal AD 1590	365 − 360 calBP	3.0		
						cal AD 1625 − cal AD 1642	325 − 308 calBP	14.6		
					2σ	cal AD 1495 − cal AD 1602	455 − 349 calBP	73.8		
						cal AD 1616 − cal AD 1646	335 − 305 calBP	21.6		
KNT2 03	ＳＫ９	AAA（１M）	555±20（557±21）	−24.8±0.2	σ	cal AD 1326 − cal AD 1343	624 − 607 calBP	27.5	TKA−20311	pal−11634
						cal AD 1394 − cal AD 1415	556 − 536 calBP	40.7		
					2σ	cal AD 1316 − cal AD 1354	634 − 596 calBP	43.1		
						cal AD 1389 − cal AD 1424	562 − 527 calBP	52.3		
KNT2 04	ＳＸ２	AAA（１M）	625±20（625±21）	−26.9±0.2	σ	cal AD 1299 − cal AD 1319	651 − 632 calBP	28.1	TKA−20312	pal−11635
						cal AD 1352 − cal AD 1370	599 − 580 calBP	25.9		
						cal AD 1380 − cal AD 1390	571 − 560 calBP	14.2		
					2σ	cal AD 1291 − cal AD 1329	659 − 621 calBP	37.7		
						cal AD 1340 − cal AD 1397	611 − 553 calBP	57.7		
KNT2 05	SB１−Ｐ１	AAA（１M）	355±20（355±22）	−26.9±0.3	σ	cal AD 1473 − cal AD 1522	478 − 429 calBP	36.7	TKA−20313	pal−11636
						cal AD 1575 − cal AD 1585	375 − 365 calBP	5.7		
						cal AD 1590 − cal AD 1625	360 − 325 calBP	25.8		
					2σ	cal AD 1456 − cal AD 1528	495 − 422 calBP	46.8		
						cal AD 1553 − cal AD 1634	397 − 316 calBP	48.6		
KNT2 06	SB１−Ｐ７	AAA（１M）	295±20（294±21）	−25.3±0.2	σ	cal AD 1524 − cal AD 1559	427 − 392 calBP	45.9	TKA−20314	pal−11637
						cal AD 1631 − cal AD 1648	319 − 303 calBP	22.3		
					2σ	cal AD 1516 − cal AD 1596	435 − 354 calBP	65.7		
						cal AD 1617 − cal AD 1654	333 − 297 calBP	29.7		
KNT2 07	SA６−Ｐ１	AAA（１M）	180±20（180±21）	−26.9±0.3	σ	cal AD 1668 − cal AD 1681	282 − 269 calBP	14.2	TKA−20315	pal−11638
						cal AD 1738 − cal AD 1755	212 − 195 calBP	15.2		
						cal AD 1762 − cal AD 1782	188 − 168 calBP	21.4		
						cal AD 1798 − cal AD 1803	152 − 148 calBP	4.3		
						cal AD 1937 − cal AD 1950	13 − 0 calBP	13.1		
					2σ	cal AD 1663 − cal AD 1687	288 − 263 calBP	18.0		
						cal AD 1730 − cal AD 1809	220 − 141 calBP	56.3		
						cal AD 1926 − cal AD 1950	24 − 0 calBP	21.1		
KNT2 08	SA７−Ｐ２	AAA（１M）	300±20（299±21）	−25.4±0.2	σ	cal AD 1523 − cal AD 1571	427 − 380 calBP	50.5	TKA−20316	pal−11639
						cal AD 1631 − cal AD 1645	320 − 305 calBP	17.7		
					2σ	cal AD 1514 − cal AD 1600	437 − 351 calBP	68.9		
						cal AD 1616 − cal AD 1650	334 − 300 calBP	26.5		
KNT2 09	L18−Ｐ２	AAA（１M）	330±20（330±21）	−26.3±0.2	σ	cal AD 1500 − cal AD 1503	451 − 448 calBP	1.7	TKA−20317	pal−11640
						cal AD 1512 − cal AD 1529	438 − 422 calBP	11.6		
						cal AD 1544 − cal AD 1601	406 − 350 calBP	41.6		
						cal AD 1617 − cal AD 1634	334 − 317 calBP	13.2		
					2σ	cal AD 1487 − cal AD 1641	464 − 309 calBP	95.4		
KNT2 10	L18−Ｐ４	AAA（１M）	290±20（288±20）	−26.1±0.2	σ	cal AD 1526 − cal AD 1556	424 − 395 calBP	41.3	TKA−20318	pal−11641
						cal AD 1632 − cal AD 1649	318 − 302 calBP	26.9		
					2σ	cal AD 1520 − cal AD 1593	430 − 358 calBP	60.5		
						cal AD 1619 − cal AD 1655	331 − 296 calBP	34.9		
KNT2 11	K20−Ｐ１	AAA（１M）	290±20（289±21）	−25.9±0.2	σ	cal AD 1525 − cal AD 1557	425 − 393 calBP	42.6	TKA−20319	pal−11642
						cal AD 1632 − cal AD 1649	319 − 302 calBP	25.6		
					2σ	cal AD 1519 − cal AD 1594	432 − 357 calBP	61.7		
						cal AD 1618 − cal AD 1655	332 − 295 calBP	33.7		

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
４）AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
５）暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
６）暦年の計算には１桁目まで示した年代値を使用。
７）較正データーセットは、Intcal１３を使用。
８）較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
９）統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、２σが95.4%である

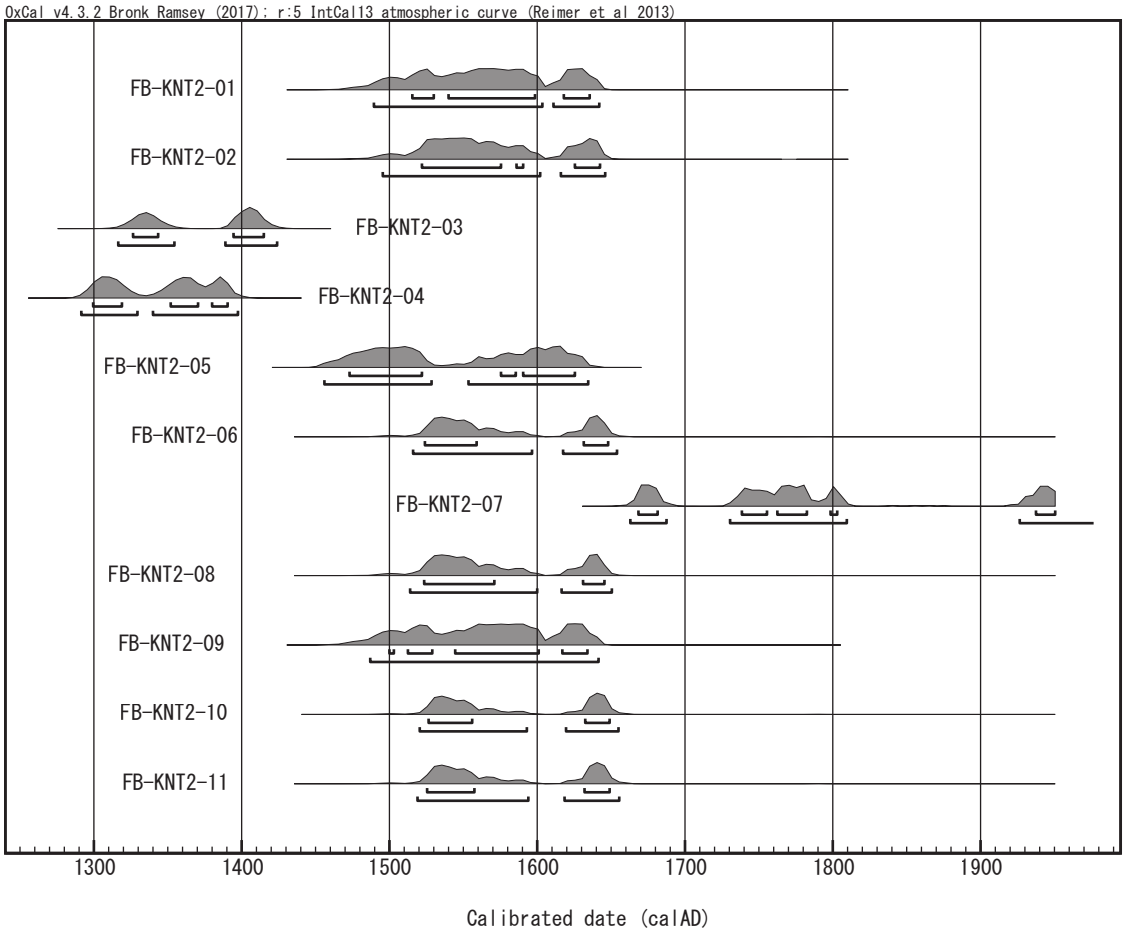


図１　上ノ台館跡の暦年較正結果

^{14}C濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13 (Reimer et al.,2013)を用いる。2σの値は、FB-KNT2-01がcalAD1,489-1,642、FB-KNT2-02がcalAD1,495-1,646、FB-KNT2-03がcalAD1,316-1,424、FB-KNT2-04がcalAD1,291-1,397、FB-KNT2-05がcalAD1,456-1,634、FB-KNT2-06がcalAD1,516-1,654、FB-KNT2-07がcalAD1,663-1,950、FB-KNT2-08がcalAD1,514-1,650、FB-KNT2-09がcalAD1,487-1,641、FB-KNT2-10がcalAD1,520-1,655、FB-KNT2-11がcalAD1,519-1,655である。

4　考　　察

検出された炭化材は、クリが多い。これはクリの利用が多かったわけではなく、クリの材は重硬なため、炭化材として残りやすいという性質が関係している。このため、炭化材でクリが多産する遺跡は日本各地に多い。クリは水湿に耐え、耐朽性が高いこと、縦方向に割れやすく容易に加工できることから、古くから建築材などとして用いられ、特に耐水性を求められる柱や板葺屋根などに用いられる。クリを含めマツ属複維管束亜属、コナラ亜属コナラ節、カエデ属は、人里近くの里山林や林縁に生育する種類であり、周辺で得やすい樹木を利用していたことがわかる。伊東・山田(2012)の木材利用データーベースには、福島県内の分析例が13188点収録されている。このうちコナラ亜属(コナラ節、クヌギ節)が約40％と最も多いものの、次いでクリが約

15％を占める。

年代測定の結果をみると、時期不明とされる01・02・03・04について、01と02は室町～江戸初期の年代を示し、03・04は鎌倉～室町時代の年代を示す。中世とされる05～11の７点のうち、07は江戸～現代まで及ぶ値を示す。これは、較正データの変動が大きく、較正曲線がジグザクになっていることに起因するものである。その他の６点については、すべて室町～江戸初期の年代を示し、現地調査所見と矛盾しない。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

林　昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫 , 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.

伊東隆夫 , 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.

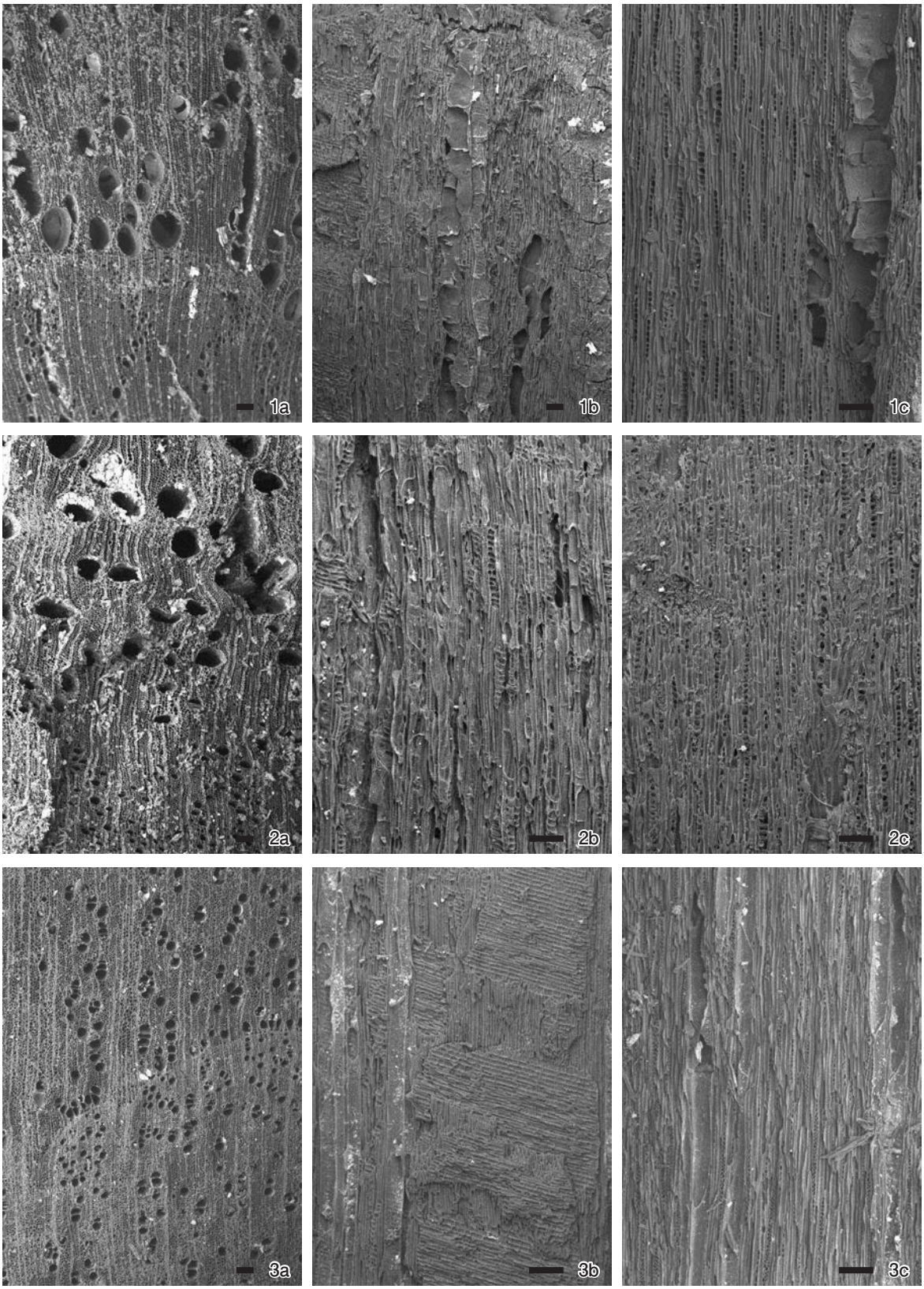
Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.(編), 2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p.［Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫 , 1982, 圖説木材組織 . 地球社, 176p.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

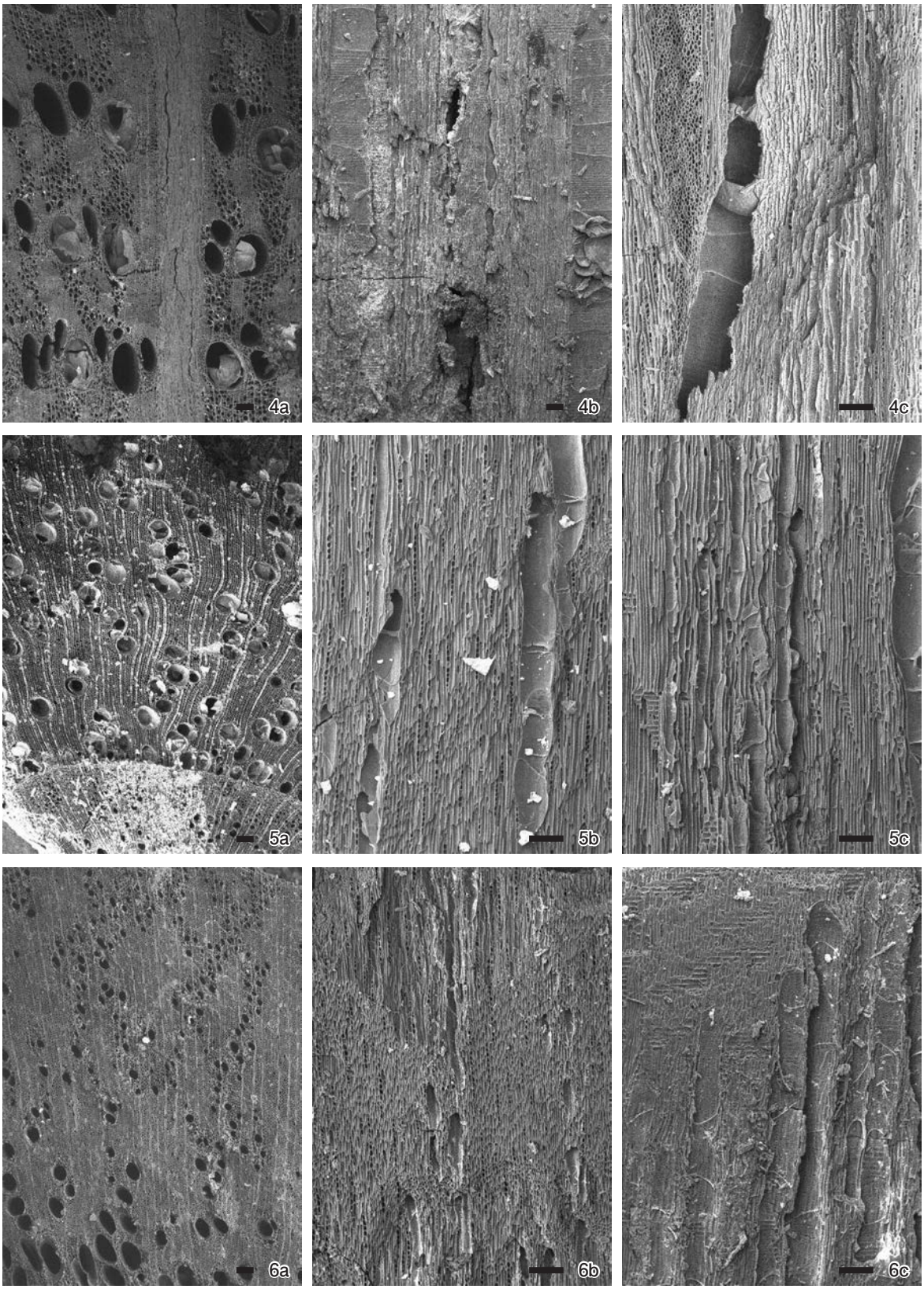
Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.(編), 1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修), 海青社, 122p.［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identificatio



1　クリ（FB－KNT2－01）
2　クリ（FB－KNT2－02）
3　カエデ属（FB－KNT2－03）

a：木口，b：柾目，c：板目
スケールは100 μ m

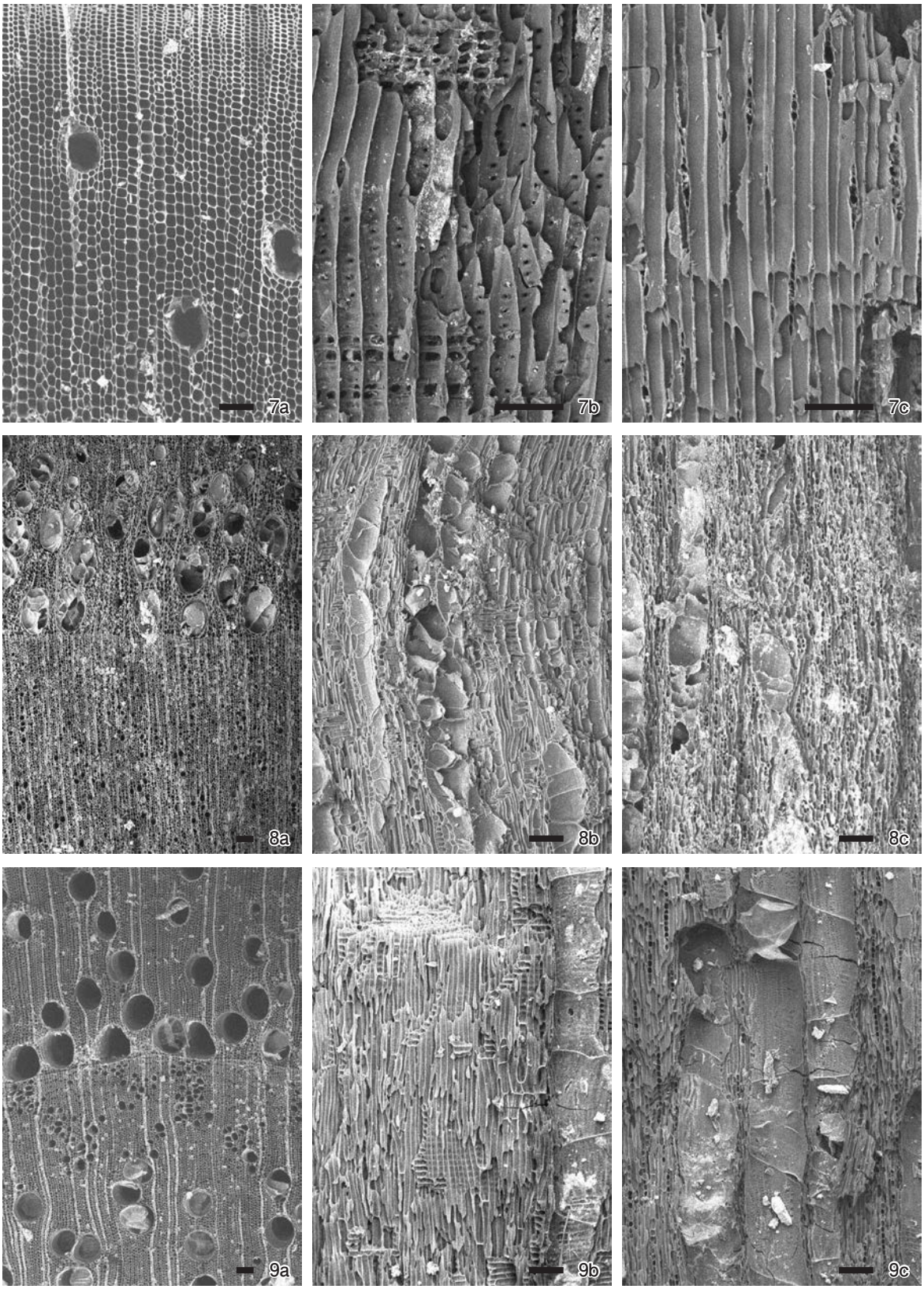
図２　上ノ台館跡の炭化材（１）



4　コナラ亜属コナラ節（FB－KNT2－04）
5　クリ（FB－KNT2－05）
6　クリ（FB－KNT2－06）

a：木口，b：柾目，c：板目
スケールは100 μ m

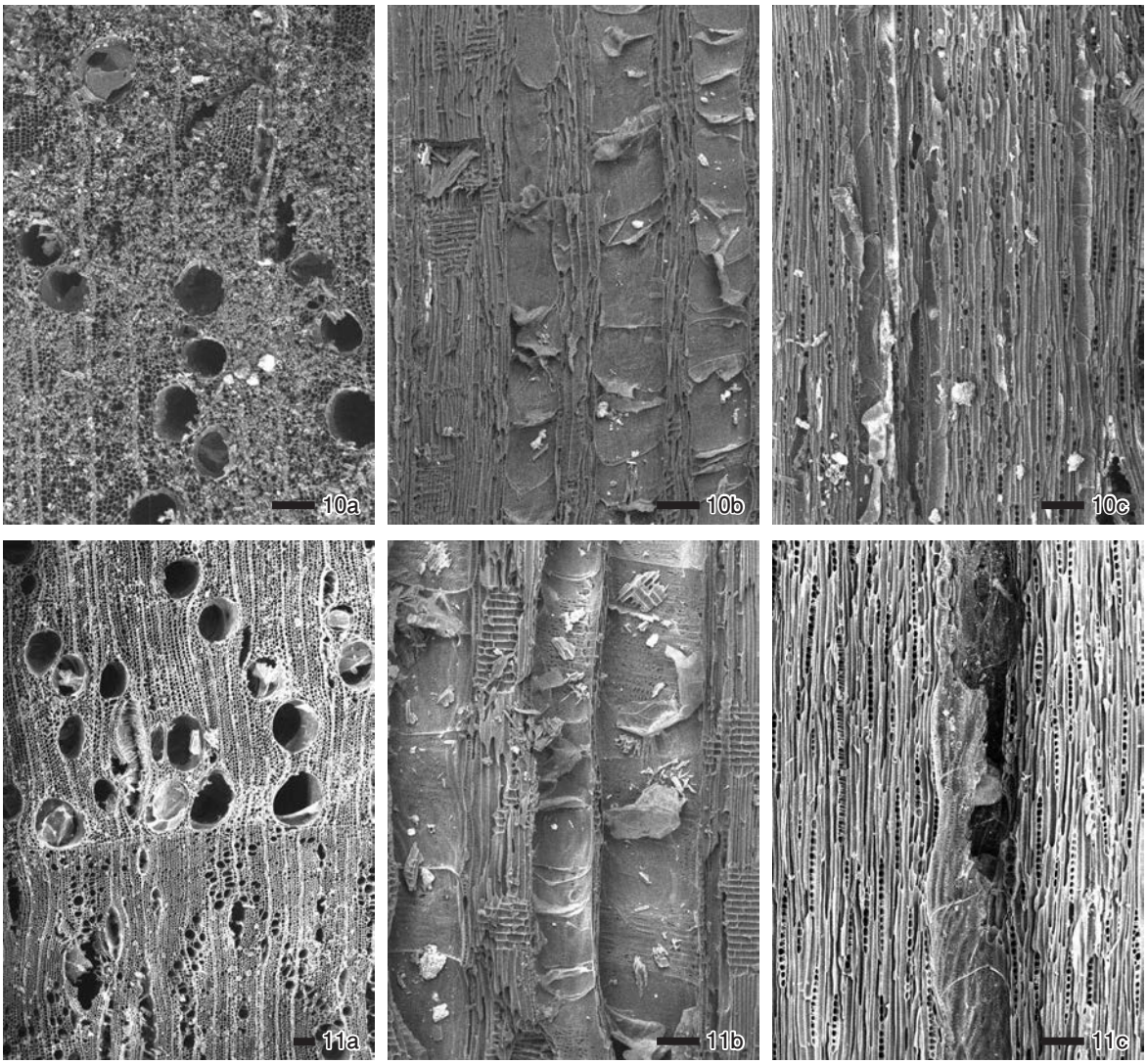
図３　上ノ台館跡の炭化材（２）



7　マツ属複維管束亜属（FB－KNT2－07）
8　クリ（FB－KNT2－08）
9　クリ（FB－KNT2－09）

a：木口，b：柾目，c：板目
スケールは100 μ m

図４　上ノ台館跡の炭化材（３）



10　クリ（FB－KNT2－10）
11　クリ（FB－KNT2－11）

a：木口，b：柾目，c：板目
スケールは100 μ m

図５　上ノ台館跡の炭化材（４）